

斉田竹之内遺跡

国道 354 号道路改良事業に係わる
埋蔵文化財発掘調査報告書 第 7 集

斉田竹之内遺跡

国道 354 号道路改良事業に係わる
埋蔵文化財発掘調査報告書 第 7 集

二〇一

群馬県伊勢崎土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

2011

群馬県伊勢崎土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



齊田竹之内遺跡

国道 354 号道路改良事業に係わる
埋蔵文化財発掘調査報告書 第 7 集

2011

群馬県伊勢崎土木事務所
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



齊田竹之内遺跡全景（左側が北）

序

本書は、佐波郡玉村町に所在し、国道 354 号道路改築事業および地域自立活性化交付金事業に伴い発掘調査と整理作業が行われた齊田竹之内遺跡の調査報告書です。

国道 354 号道路は北関東を東西に結ぶ基幹道路の一つであり、かねてからバイパスの整備が計画されていました。佐波郡玉村町に一部の供用が始まっている高崎玉村バイパスもその一部です。このバイパスは群馬県中央部の高崎市と東部の板倉町を結ぶ県の基幹道である東毛幹線の一部を担っております。

齊田竹之内遺跡の調査は群馬県伊勢崎土木事務所の委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成 12 年度から 14 年度にかけて実施したものです。この遺跡からは、古墳時代初頭から江戸時代にかけての多数の遺構・遺物が調査されました。特に中世の大用水路とそれを囲む 3 個所の方形館は、規模の大きな施設でありながら未知の遺構でした。これまで整理事業を行ってきた隣接する福島飯玉遺跡や齊田中耕地遺跡などの成果と併せ、数多くの城館や屋敷跡が築かれた玉村地域の歴史に、新たな資料を提供するものであります。この報告書が群馬県の歴史研究をはじめ、地域の歴史資料として学校教育・社会教育に役立てていただくことを望んでやみません。

本書刊行に至るまで、群馬県県土整備部および伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、玉村町教育委員会をはじめとする関係機関、および地元の皆さまから多大なご協力を賜りました。ここに心より感謝の意を表し、序といたします。

平成 23 年 3 月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 須田 栄一

例 言

- 1 本書は、国道 354 号（玉村バイパス）道路改築工事に伴い発掘調査され、地域自立活性化交付金事業として整理作業を行った齊田竹之内遺跡の調査報告書である。
- 2 齊田竹之内遺跡は群馬県佐波郡玉村町齊田 120、121、122 番地、福島 104、105、106 番地他に所在する。
- 3 事業主体 群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成 12 年（2000 年）8 月 21 日～平成 12 年（2000 年）12 月 26 日
平成 13 年（2001 年）4 月 1 日～平成 14 年（2002 年）3 月 31 日
平成 14 年（2002 年）4 月 1 日～平成 14 年（2002 年）12 月 27 日
- 6 整理期間 平成 21 年（2009 年）8 月 1 日～平成 23 年（2011 年）3 月 31 日
- 7 発掘調査体制は次のとおりである。
平成 12 年度 発掘調査担当 原雅信（主幹兼専門員） 高柳浩道（調査研究員） 小成田涼子（調査研究員）
村上章義（嘱託員）
地上測量委託 株式会社測設 空中写真撮影委託 技研測量設計株式会社
平成 13 年度 発掘調査担当 飯田陽一（主幹兼専門員） 伊平敬（専門員） 齊田智彦（調査研究員）
地上測量・空中写真撮影委託 技研測量設計株式会社
平成 14 年度 発掘調査担当 坂井隆（主幹兼専門員） 谷藤保彦（主幹兼専門員） 齊藤和之（専門員）
伊平敬（専門員） 増田眞次（主任調査研究員） 齊田智彦（調査研究員）
地上測量委託 株式会社横田調査設計、空中写真撮影委託 朝日航洋株式会社
- 8 整理事業体制は次の通りである。
平成 21 年度 整理担当 石守晃（主席専門員）
平成 22 年度 整理担当 飯田陽一（上席専門員）
保存処理：関邦一（係長（総括）） 遺物写真撮影：佐藤元彦（係長（総括））
- 9 本書作成の担当者は次のとおりである。
編集 石守晃 飯田陽一
執筆 本文 飯森康弘（第 IV 章 1 節） 左記以外 飯田陽一
遺物観察表 土師器等は石守の観察をもとに飯田が加筆し、陶磁器類を大西雅広を担当した。
- 10 出土人骨・獣骨の分析は、榑崎修一郎氏（生物考古学研究所）にお願いした。
- 11 調査段階および出土石製品の石材同定は、飯島静男氏（群馬地質研究会）にお願いした。
- 12 発掘調査および報告書作成には、群馬県教育委員会、玉村町教育委員会、および峰岸純夫氏（当事業団理事）、伊勢屋ふじこ氏（当事業団評議員）、中島直樹氏（玉村町教育委員会）からご指導を頂いた。
- 13 整理作業にあたって次の事業団職員から助言を得ている。
調査経過：原雅信・齊田智彦 縄文時代石器：岩崎泰一 弥生土器・古式土師器：大木紳一郎 錢貨：大西雅広
- 14 発掘調査資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 本報告書における座標値は日本測地系による。
- 2 挿図中に示す方位記号は国家座標上の北を示している。なお、真北方向角は $0^{\circ} 25' 21''$ である。
- 3 遺構番号については、発掘調査時の名称を原則として踏襲し、調査区ごとに番号を付けた。このため、調査段階での欠番に加え、整理作業段階での削除などが重なって多数の欠番を生じている。特に2a区では遺構種類に係わらず通し番号を付けたため欠番が多くなっている。また、次の遺構では以下のように例外的な番号付けを行った。
 - ・復旧溝・畠および水田面と畦畔については遺跡全体での通し番号とした。
 - ・1区では、溝・墓坑・A墓坑・掘立柱建物について1区全体での通し番号とした。
 - ・2区ではa b両区に跨る9・15・18・40号溝について、a b区の呼称を省いた。
- 4 遺構および遺物図の縮率はそれぞれの図中のスケールに示した。同一ページ内の遺物実測図で異なる縮率の図が混在する場合は、図中スケールに該当しない遺物番号に縮率を分数で加えて表示した。
- 5 遺構図の縮率は下記の基準を原則とした。
 - 掘立柱建物・竪穴住居・竪穴状遺構 1：60 建物以外の個別ピット・井戸・墓坑・土坑 1：40
 - 畠・水田などの部分図(平面) 1：100 (断面) 1：50
 - 溝は平面 1：100 と 1：200 を基準としたが、1：40 から 1：500 まで含まれ、差が大きい。
- 6 遺物図の縮率は下記の基準を原則とした。遺物写真も図の縮率に沿うようにした。
 - 主な土器・陶磁器類 1：3 鍋など大型土製品 1：4 錢貨 1：1
 - 石臼等大型石製品 1：4 板碑・五輪塔など中・近世石造物 1：5
- 7 本文および一覧表の方位表記について、例としてN - 45° E とあるのは座標北より45度東側に振れていることを示している。
- 8 グリッドの表記方法については10頁に記した。
- 9 本文中にある火山噴出物の標記は以下のとおりである。
 - As-A：浅間山A軽石 1783年(天明3年)
 - As-B：浅間山B軽石 1108年(天仁元年)
 - Hr-FP：榛名山二ツ岳軽石 6世紀中頃
 - Hr-FA：榛名山二ツ岳火山灰 6世紀初頭
 - As-C：浅間山C軽石 4世紀初頭
- 10 遺物観察表は巻末に一括して掲載した。観察表中の略語は以下のとおりである。
 - 口→口径 底→底径 頸→頸部外径 胴→胴部最大径 台→高台もしくは脚の下端径 台上→高台もしくは脚部上端の径 高→器高 長→長さ 厚→厚さ 重→重さまた、復元値には()を、残存値には[]をつけて区別した。

目次

口絵		
序		
例言		
凡例		
目次		
第Ⅰ章 発掘調査と遺跡の概要		
1 発掘調査に至る経過	1	
2 整理業務の経過	3	
3 遺跡の立地と周辺の遺跡		
(1) 遺跡の立地	3	
(2) 周辺の遺跡	5	
4 調査の方法と経過		
(1) 遺跡の呼称と調査区の設定	9	
(2) グリッドの設定	10	
(3) 調査の方法	10	
(4) 調査の経過	10	
(5) 調査日誌抄	11	
第Ⅱ章 発掘調査の記録		
1 遺跡の概要		
(1) 基本土層と確認遺構	13	
(2) 遺構の概要	14	
2 第1面・2面の調査		
(1) 概要	15	
(2) 復旧溝(サク状)	15	
(3) 畦畔下復旧坑	21	
(4) 畠	21	
(5) 水田	24	
2～4・7・10号溝(1面)	27	
5・6・9・11～13号溝(2面)	28	
14号溝	30	
(6) 水路	30	
0・1号溝(1区)	30	
15～18号溝(2区)	30	
(7) 集石	38	
3 第3面・4面の調査		
(1) 概要	44	
(2) 粘土坑	44	
(3) 溝	45	
2a区 30号溝	45	
32号溝	46	
33号溝	46	
34号溝	46	
31号溝	47	
35・36号溝	47	
2b区 2号溝	47	
12号溝	47	
13号溝	49	
28号溝	50	
29号溝	50	
31～35号溝	50	
(4) 墓坑	52	
(5) 獣骨出土土坑(A墓坑)	57	
(6) 大溝(氾濫部分)と杭	58	
4 第5面の調査		
(1) 概要	60	
(2) 5面土層観察の共通記号	60	
(3) 大溝(用水路)	60	
(4) 方形館と区画溝	63	
北館 21号溝	63	
22・24号溝	64	
51号溝	65	
37号溝	70	
31・32・53号溝	70	
38・42号溝	70	
39・41号溝	72	
52号溝	72	
南館 35号溝	74	
33号溝	76	
34号溝	76	
36・9・17号溝	77	
18・19・14・25号溝	78	

26～30号溝	79	2 齊田竹之内遺跡の岩石	237
西館 40号溝	84	3 齊田竹之内遺跡出土人骨・出土獣骨	238
43号溝	86		
41号溝	86	第IV章 調査成果と整理のまとめ	
44号溝	86	1 中世屋敷と掘立柱建物群	244
19号溝	87	2 調査成果のまとめと問題点	254
42号溝	87		
(5) 館区画外の溝	92	遺物観察表	257
(6) 掘立柱建物	94	・参考文献一覧	278
北館内の建物	94	・抄録	280
南館内の建物	114	・写真図版	
西館内の建物	142	・奥付	
(7) ピット	164	・付図1 1区館(北館・南館)内遺構配置図	
(8) 竪穴状遺構	181	・付図2 2区館(西館)内遺構配置図	
(9) 土坑	184		
(10) 井戸	197		
5 第6面の調査			
(1) 概要	208		
(2) 1a区の水田	208		
(3) 1b区の水田	208		
(4) 2b区の水田	208		
6 第7面の調査			
(1) 概要	212		
(2) 竪穴住居	213		
1号住居	213		
2号住居	216		
3号住居	217		
(3) 井戸	219		
(4) 土坑	221		
(5) ピット	224		
7 遺構外の遺物			
(1) 縄文時代の石器	226		
(2) 弥生土器と古式土師器	226		
(3) 古墳時代の土器	227		
(4) 奈良・平安時代の遺物	227		
(5) 中・近世の遺物	235		
(6) 中・近世の銭貨	235		
第III章 鑑定・分析			
1 鑑定・分析の目的	236		

挿図目次

第1図	齊田竹之内遺跡の位置	1	第54図	37号溝底面および断面	72
第2図	齊田竹之内遺跡とバイパス計画路線	2	第55図	北館区画内の溝群および出土遺物	73
第3図	齊田竹之内遺跡周辺の地形	4	第56図	南館西堀(35号西溝・9号溝)	74
第4図	周辺の遺跡分布図	6	第57図	南館北堀(33・34・36号溝)	75
第5図	齊田竹之内遺跡調査区図	9	第58図	33・34号溝断面	76
第6図	グリッド呼称概念図	10	第59図	1区9号溝詳細と断面	77
第7図	基本土層図	13	第60図	南館内の溝(1区17～19号溝)	80
第8図	1a区第1面の遺構	16	第61図	南館内の溝(1区14・25～30号溝)	81
第9図	2区第1面の遺構	17	第62図	南館内の溝(1区15・16・20号溝)	82
第10図	1区2号復旧溝	18	第63図	南館溝出土遺物	83
第11図	1区3号復旧溝	19	第64図	西館東堀(2区40～44号溝)	84
第12図	(上)2区4号・(下)5号復旧溝	20	第65図	2区40・41・43号溝断面	85
第13図	1区畦畔下復旧坑	22	第66図	西館西堀(2b区40号西溝・19号溝)	87
第14図	1区2号畠	23	第67図	西館内部の溝(2区42・97～99号溝)	88
第15図	第1・2面水田略図	25	第68図	2b区22号溝と出土遺物	89
第16図	2a区第1・2面の溝	26	第69図	西館出土遺物(40・42・43号溝)	90
第17図	1区1号溝	28	第70図	西館出土遺物(40号西溝)	91
第18図	第1・2面復旧溝・畠・水田出土の遺物	29	第71図	1区館区画外の溝(1区54～58号溝)	93
第19図	大溝・2区15号溝他断面	31	第72図	1区55・57・58号溝断面と54号溝出土遺物	94
第20図	大溝・1区1号溝出土遺物	32	第73図	1号・2号掘立柱建物	98
第21図	2b区1号溝(15号溝上面)出土遺物	33	第74図	3号・4号掘立柱建物	99
第22図	2区15～18号溝全景	34	第75図	5号・7号掘立柱建物	100
第23図	2区15～18号溝東側	35	第76図	6号・8号掘立柱建物	101
第24図	2区15～18号溝西側	36	第77図	9号・10号掘立柱建物	102
第25図	2区1・15・18号溝断面	37	第78図	11号・12号掘立柱建物	103
第26図	2区15・18号溝出土遺物	38	第79図	13号・14号掘立柱建物	104
第27図	集石	39	第80図	15号・16号掘立柱建物	105
第28図	集石出土遺物(1)	40	第81図	17号・18号掘立柱建物	106
第29図	集石出土遺物(2)	41	第82図	19号掘立柱建物	107
第30図	1区第2面の遺構	42	第83図	20号掘立柱建物	108
第31図	2区第2面の遺構	43	第84図	21号掘立柱建物	109
第32図	粘土坑	44	第85図	22号掘立柱建物	110
第33図	2a区30～36号溝	45	第86図	23号掘立柱建物	111
第34図	2a区30・32～34号溝断面	46	第87図	24号・25号掘立柱建物	112
第35図	2b区2・12・13号溝	48	第88図	26号・27号掘立柱建物	113
第36図	2a区30・35・36号、2b区13号溝出土遺物	49	第89図	28号掘立柱建物	121
第37図	2b区28・29・31～35号溝	51	第90図	29号掘立柱建物	122
第38図	墓坑および出土遺物	54	第91図	30号・34号掘立柱建物	123
第39図	墓坑出土銭貨(1)	55	第92図	31号掘立柱建物	124
第40図	墓坑出土銭貨(2)	56	第93図	32号掘立柱建物	125
第41図	獣骨出土土坑	57	第94図	33号・35号掘立柱建物	126
第42図	大溝氾濫部分の杭	58	第95図	36号・37号掘立柱建物	127
第43図	出土杭	59	第96図	38号掘立柱建物	128
第44図	大溝全体図	61	第97図	39号掘立柱建物	129
第45図	大溝断面	62	第98図	40号掘立柱建物	130
第46図	方形館区画概念図	63	第99図	41号・42号掘立柱建物	131
第47図	北館西側の溝	64	第100図	43号・44号掘立柱建物	132
第48図	北館南側の溝	65	第101図	45号掘立柱建物	133
第49図	21号溝出土遺物(1)	66	第102図	46号・47号掘立柱建物	134
第50図	21号溝出土遺物(2)	67	第103図	48号掘立柱建物	135
第51図	21・22・51号溝出土遺物	68	第104図	49号・54号掘立柱建物	136
第52図	1a区51号溝	69	第105図	51号掘立柱建物	137
第53図	1a区32・53・37号溝と出土遺物	71	第106図	52号・53号掘立柱建物	138
			第107図	50号・56号掘立柱建物	139
			第108図	55号掘立柱建物および1区建物出土遺物	140
			第109図	1～4号柱列	141

第110図	101号・102号掘立柱建物	143
第111図	103号掘立柱建物	144
第112図	104号掘立柱建物	145
第113図	105号掘立柱建物	146
第114図	106号掘立柱建物	147
第115図	107号掘立柱建物	148
第116図	108号掘立柱建物	149
第117図	109号掘立柱建物	150
第118図	110号掘立柱建物	151
第119図	111号掘立柱建物	152
第120図	112号・113号掘立柱建物	156
第121図	114号掘立柱建物	157
第122図	115号・116号掘立柱建物	158
第123図	117号・120号掘立柱建物	159
第124図	118号・119号掘立柱建物	160
第125図	121号掘立柱建物	161
第126図	122号・123号掘立柱建物	162
第127図	124号・125号掘立柱建物	163
第128図	1a区のピット	165
第129図	1b区のピット	166
第130図	2b区のピット	167
第131図	ピット出土遺物	168
第132図	竪穴状遺構(1)	181
第133図	竪穴状遺構(2)	182
第134図	1a区土坑(1)	185
第135図	1a区土坑(2)	186
第136図	1a・1b区土坑	187
第137図	2a区土坑(1)	188
第138図	2a区土坑(2)	189
第139図	2a区土坑(3)	190
第140図	2a区土坑(4)	191
第141図	2a・2b区土坑	192
第142図	土坑出土遺物	193
第143図	1a区井戸(1)	201
第144図	1a区井戸(2)	202
第145図	1a・2a区井戸	203
第146図	1b・2b区井戸	204
第147図	井戸出土遺物(1)	205
第148図	井戸出土遺物(2)	206
第149図	井戸出土遺物(3)	207
第150図	1a区のB軽石下水田	209
第151図	1b区・2b区のB軽石下水田	210
第152図	1a区f畦	211
第153図	7面遺構の配置	212
第154図	1号住居	213
第155図	1号住居出土遺物(1)	214
第156図	1号住居出土遺物(2)	215
第157図	2号住居	216
第158図	2号住居出土遺物	217
第159図	3号住居および出土遺物	218
第160図	第7面の井戸	219
第161図	第7面井戸出土遺物	220
第162図	第7面の土坑	222
第163図	第7面土坑出土遺物	223
第164図	第7面ピットと出土遺物	225
第165図	縄文時代の石器	226

第166図	弥生土器と古式土師器	227
第167図	1区古墳時代の土器	228
第168図	1・2区古墳時代の土器	229
第169図	2区古墳時代の土器	230
第170図	1区奈良・平安時代の土器	231
第171図	1・2区奈良・平安時代の土器	232
第172図	中・近世遺物(1)	233
第173図	中・近世遺物(2)	234
第174図	遺構外銭貨	235
第175図	遺跡周辺の明治時代絵地図	254
第176図	復旧溝模式図	255

本文中写真目次

写真1	3号墓坑出土人歯咬合面観	238
写真2	4号墓坑1出土人歯咬合面観	239
写真3	4号墓坑2出土人歯咬合面観	239
写真4	5号墓坑出土人歯咬合面観	239
写真5	7号墓坑出土人歯咬合面観	240
写真6	9号墓坑出土人歯咬合面観	240
写真7	12号墓坑出土人歯咬合面観	241
写真8	1a区11号A墓坑出土馬歯	243

表目次

第1表	周辺遺跡一覧(1)	7
第2表	周辺遺跡一覧(2)中・近世城館跡	8
第3-1表	第2面水田面計測表	25
第3-2表	第2面水田南北畦畔計測表	25
第3-3表	第2面水田東西畦畔計測表	25
第4表	ピット一覧表	164
第5表	北館内のピット一覧	168
第6表	南館内1a区のピット一覧	172
第7表	南館内1b区のピット一覧	176
第8表	西館内2a区のピット一覧	180
第9表	西館周辺2b区のピット一覧	180
第10表	土坑一覧(1a区)	193
第11表	土坑一覧(1b区)	194
第12表	土坑一覧(2a区)	194
第13表	土坑一覧(2b区)	196
第14-1表	第6面畦畔計測表(南北畦畔)	210
第14-2表	第6面畦畔計測表(東西畦畔)	210
第14-3表	第6面水田面計測表	210
第15-1表	大溝底面北端の礫	237
第15-2表	14号井戸の礫	237
第16-1表	斉田竹之内遺跡出土人骨のまとめ	241
第16-2表	出土遊離歯冠計測値及び比較表	242
第16-3表	11号A墓坑出土馬歯(上顎右)計測値	243
第16-4表	斉田竹之内遺跡出土獣骨のまとめ	243
第17表	斉田竹之内遺跡掘立柱建物集計表	245
第18表	斉田竹之内遺跡建物総括表	246
第19表	斉田竹之内遺跡遺物年代表	251
遺物観察表		257

写真図版目次

PL - 1

- ① 1 a区1面全景（西から）
- ② 1号復旧溝と畦下復旧坑（上方が西）
- ③ 2号復旧溝（北から）
- ④ 3号復旧溝全景（上方が南）
- ⑤ 3号復旧溝（西から）
- ⑥ 2号島全景（上方が西）
- ⑦ 2号島（北から）

PL - 2

- ① 2号島断面（西から）
- ② 2号復旧溝全景（上方が東）
- ③ 5号島全景（東から）
- ④ 5号島断面（西から）
- ⑤ 6号島（東から）
- ⑥ 4号島（東から）
- ⑦ 4号島全景（南から）

PL - 3

- ① 2 a区第1面の調査風景（南西から）
- ② 4号復旧溝全景（東から）
- ③ 4号復旧溝 耕具痕（東から）
- ④ 4号復旧溝（東から）
- ⑤ 5号復旧溝（北から）
- ⑥ 7号島（北から）
- ⑦ 8号島（東から）
- ⑧ 9号島（東から）

PL - 4

- ① 畦下復旧坑 確認状態（南から）
- ② 畦下復旧坑全景（北から）
- ③ 畦下復旧坑（北から）
- ④ 2 a区3号溝E断面（南から）
- ⑤ 2 a区3号溝全景（南から）
- ⑥ 2 a区7号溝全景（南から）
- ⑦ 2 a区10・11・12号溝全景（南から）

PL - 5

- ① 0号溝と緑辺の畦畔（北から）
- ② 1区北側1面水田（北から）
- ③ 1区南側1面水田（西から）
- ④ 1区1面水田1畦断面（西から）
- ⑤ 2 b区第1面全景（東から）

PL - 6

- ① 1区粘土坑（北から）
- ② 1区粘土坑断面（南から）
- ③ 2 a区15・18号溝（西から）
- ④ 2 a区38号溝北側（南西から）
- ⑤ 2 b区1号溝（15号溝上面）（西から）
- ⑥ 2 b区1号集石（東から）
- ⑦ 2 b区1号集石内遺物④（北から）
- ⑧ 2 b区18号（手前）・15号溝（奥）（北西から）

PL - 7

- ① 2 a区34号溝 脇畦状遺構水口（東から）
- ② 2 a区34号溝 脇畦状遺構断面（南から）
- ③ 2 b区12号溝（南東から）

- ④ 2 b区12号溝水口（南から）
- ⑤ 2 a区30・32～34号溝（北から）
- ⑥ 2 b区31～35号溝（南東から）
- ⑦ 2 b区28・29号溝（南から）

PL - 8

- ① 1号墓坑（北から）
- ② 3号墓坑（南から）
- ③ 4号墓坑（西から）
- ④ 5号墓坑（東から）
- ⑤ 6号墓坑（西から）
- ⑥ 7号墓坑（北から）
- ⑦ 9号墓坑（東から）
- ⑧ 12号墓坑（西から）

PL - 9

- ① 8号A墓坑（北から）
- ② 10号A墓坑（西から）
- ③ 11号A墓坑（北から）
- ④ 大溝氾濫部分の杭（北から）
- ⑤ 大溝氾濫部分の杭（西から）
- ⑥ 大溝北側の杭1・2（南西から）
- ⑦ 大溝氾濫部分の杭4・5・6（北から）
- ⑧ 大溝氾濫部分の杭9（北から）

PL - 10

- ① 1区1号溝（北から）
- ② 1区11号溝（北から）
- ③ 1区10号溝（北から）
- ④ 1区17・18・19号溝（南から）
- ⑤ 1区15・16号溝（東から）

PL - 11

- ① 1 a区全景（上方が南）
- ② 1 a区全景（東から）
- ③ 南館内の遺構（上方が北）
- ④ 1 a区西側全景（上方が東）
- ⑤ 1 a区西側全景（南から）

PL - 12

- ① 2 a区全景（上方が東）
- ② 2 b区全景（上方が西）

PL - 13

- ① 北館西側の21号西・22号溝（北から）
- ② 北館南西隅付近（西から）
- ③ 北館南側の21号南溝（東から）
- ④ 北館東側の51号溝（北から）
- ⑤ 21号南溝遺物出土状態（西から）
- ⑥ 37号溝上面礫（西から）
- ⑦ 37号溝底面（北から）

PL - 14

- ① 南館西側の35号溝（南から）
- ② 南館北側の33・34・36号溝（東から）
- ③ 南館9号溝 土橋状高まり（南から）
- ④ 西館東側の溝群（南から）
- ⑤ 西館北側40号北溝（西から）
- ⑥ 西館42号溝断面（北西から）
- ⑦ 西館40号東溝断面（北東から）
- ⑧ 西館西側の19・40号西溝（南から）

PL - 15

- ① 1号掘立柱建物（南から）

- ② 22号掘立柱建物（南から）
- ③ 26号掘立柱建物（北から）
- ④ 27号掘立柱建物（北から）
- ⑤ 30号掘立柱建物（東から）
- ⑥ 34号掘立柱建物（西から）
- ⑦ 南館内の柱六群（東から）

PL - 16

- ① 1号掘立柱建物-8断面（南から）
- ② 2号掘立柱建物-7断面（南から）
- ③ 3号掘立柱建物-8断面（南から）
- ④ 4号掘立柱建物-6断面（南から）
- ⑤ 5号掘立柱建物-2断面（南から）
- ⑥ 6号掘立柱建物-3断面（南から）
- ⑦ 7号掘立柱建物-7断面（南から）
- ⑧ 8号掘立柱建物-1断面（南から）
- ⑨ 8号掘立柱建物-2断面（南から）
- ⑩ 9号掘立柱建物-3断面（南から）
- ⑪ 11号掘立柱建物-7断面（南から）
- ⑫ 12号掘立柱建物-9断面（南から）
- ⑬ 13号掘立柱建物-7断面（南から）
- ⑭ 14号掘立柱建物-6断面（南から）
- ⑮ 16号掘立柱建物-8断面（南から）

PL - 17

- ① 17号掘立柱建物-4断面（南から）
- ② 17号掘立柱建物-7断面（南から）
- ③ 18号掘立柱建物-4断面（南から）
- ④ 19号掘立柱建物-2断面（南から）
- ⑤ 20号掘立柱建物-13断面（南から）
- ⑥ 21号掘立柱建物-3断面（南から）
- ⑦ 22号掘立柱建物-6断面（南から）
- ⑧ 23号掘立柱建物-5断面（南から）
- ⑨ 24号掘立柱建物-7断面（南から）
- ⑩ 25号掘立柱建物-6断面（南から）
- ⑪ 26号掘立柱建物-1断面（南から）
- ⑫ 27号掘立柱建物-1断面（南から）
- ⑬ 27号掘立柱建物-4断面（南から）
- ⑭ 28号掘立柱建物-2断面（南から）
- ⑮ 28号掘立柱建物-5断面（南から）

PL - 18

- ① 28号掘立柱建物-8断面（南から）
- ② 28号掘立柱建物-11（東から）
- ③ 28号掘立柱建物-15断面（南から）
- ④ 29号掘立柱建物-6（東から）
- ⑤ 29号掘立柱建物-9断面（南から）
- ⑥ 29号掘立柱建物-11（南から）
- ⑦ 30号掘立柱建物-4断面（南から）
- ⑧ 31号掘立柱建物-1断面（南から）
- ⑨ 32号掘立柱建物-5断面（南から）
- ⑩ 32号掘立柱建物-7（南から）
- ⑪ 32号掘立柱建物-8断面（南から）
- ⑫ 32号掘立柱建物-13断面（南から）
- ⑬ 33号掘立柱建物-8（南から）
- ⑭ 35号掘立柱建物-4断面（南から）
- ⑮ 36号掘立柱建物-2（東から）

PL - 19

- ① 37号掘立柱建物-2（南東から）

- ② 37号掘立柱建物-3断面（南から）
- ③ 37号掘立柱建物-13（東から）
- ④ 38号掘立柱建物-4断面（南から）
- ⑤ 39号掘立柱建物-8断面（東から）
- ⑥ 40号掘立柱建物-6（東から）
- ⑦ 41号掘立柱建物-2断面（南西から）
- ⑧ 42号掘立柱建物-4断面（南から）
- ⑨ 42号掘立柱建物-5（西から）
- ⑩ 43号掘立柱建物-6断面（南から）
- ⑪ 44号掘立柱建物-2断面（南から）
- ⑫ 45号掘立柱建物-6断面（南から）
- ⑬ 46号掘立柱建物-6断面（南東から）
- ⑭ 47号掘立柱建物-8断面（南東から）
- ⑮ 48号掘立柱建物-3断面（南から）

PL - 20

- ① 49号掘立柱建物-9断面（南から）
- ② 50号掘立柱建物-6断面（西から）
- ③ 51号掘立柱建物-3（北から）
- ④ 51号掘立柱建物-6断面（西から）
- ⑤ 52号掘立柱建物-1断面（南から）
- ⑥ 52号掘立柱建物-2（左奥）（北から）
- ⑦ 52号掘立柱建物-3（左）断面（南から）
- ⑧ 53号掘立柱建物-1断面（南から）
- ⑨ 53号掘立柱建物-9断面（南から）
- ⑩ 53号掘立柱建物-10断面（南から）
- ⑪ 54号掘立柱建物-3（手前）（北から）
- ⑫ 55号掘立柱建物-6断面（西から）
- ⑬ 56号掘立柱建物-6断面（西から）
- ⑭ 1号柱列-2断面（南から）
- ⑮ 4号柱列-2断面（南から）

PL - 21

- ① 1a区59号ピット（北から）
- ② 1a区62号ピット断面（北から）
- ③ 1a区89号ピット（北から）
- ④ 1a区119号ピット（北から）
- ⑤ 1a区146号ピット断面（南から）
- ⑥ 1a区153号ピット（南から）
- ⑦ 1a区178号ピット（西から）
- ⑧ 1a区197号ピット断面（南から）
- ⑨ 1a区247号ピット断面（南から）
- ⑩ 1a区282号ピット断面（南から）
- ⑪ 1a区319号ピット断面（南から）
- ⑫ 1a区327号ピット断面（南から）
- ⑬ 1a区483号ピット断面（南から）
- ⑭ 1a区563号ピット断面（南から）
- ⑮ 1a区625号ピット断面（南から）

PL - 22

- ① 1a区649号ピット断面（南から）
- ② 1a区700号ピット断面（南から）
- ③ 1a区760号ピット断面（南から）
- ④ 1a区815号ピット断面（南から）
- ⑤ 1b区36・37号ピット（南から）
- ⑥ 1b区70号ピット（南から）
- ⑦ 1b区77号ピット断面（西から）
- ⑧ 1b区79号ピット（北から）
- ⑨ 1b区94号ピット断面（南から）

- ⑩ 1 b 区 148・149 号ピット断面 (南から)
- ⑪ 1 b 区 194・195 号ピット断面 (南から)
- ⑫ 1 b 区 228・230 号ピット断面 (南から)
- ⑬ 1 b 区 361・362 号ピット断面 (南から)
- ⑭ 1 b 区 369・370 号ピット断面 (南から)
- ⑮ 1 b 区 413・414 号ピット断面 (南から)

PL - 23

- ① 1 号土坑 (北から)
- ② 3 号土坑断面 (西から)
- ③ 7 号土坑 (北から)
- ④ 11 号土坑 (西から)
- ⑤ 20 号土坑 (南から)
- ⑥ 23 号土坑 (北から)
- ⑦ 24 号土坑 (北から)
- ⑧ 30 号土坑 (北から)
- ⑨ 2 号土坑 (北から)
- ⑩ 5 号土坑 (北から)
- ⑪ 8 号土坑 (北から)
- ⑫ 10 号土坑断面 (南から)
- ⑬ 16 号土坑 (北から)
- ⑭ 17 号土坑 (北から)
- ⑮ 21 号土坑 (南から)

PL - 24

- ① 22 号土坑 (南から)
- ② 27 号土坑断面 (南から)
- ③ 28 号土坑 (北から)
- ④ 29 号土坑 (北から)
- ⑤ 31 号土坑 (東から)
- ⑥ 32 号土坑 (北から)
- ⑦ 35 号土坑断面 (東から)
- ⑧ 40 号土坑 (北から)
- ⑨ 41 号土坑 (西から)
- ⑩ 18 号土坑 (南から)
- ⑪ 6 号土坑 (北から)
- ⑫ 19 号土坑 (南から)
- ⑬ 34 号土坑 (北から)
- ⑭ 38 号土坑 (北西から)

PL - 25

- ① 1 b 区 1 号土坑 (南から)
- ② 1 b 区 2 号土坑 (南から)
- ③ 1 b 区 3 号土坑断面 (西から)
- ④ 1 b 区 4 号土坑 (南から)
- ⑤ 2 a 区 55 号土坑断面 (南から)
- ⑥ 2 a 区 67 (手前)・68 号土坑 (東から)
- ⑦ 2 a 区 69 (左)・70 号土坑 (東から)
- ⑧ 2 a 区 76 号土坑 (西から)
- ⑨ 2 a 区 67 号土坑断面 (南から)
- ⑩ 2 a 区 69 号土坑断面 (東から)
- ⑪ 2 a 区 77 号土坑断面 (東から)
- ⑫ 2 a 区 72 号土坑 (西から)
- ⑬ 2 a 区 64 号土坑 (東から)
- ⑭ 2 a 区 63 号土坑断面 (東から)
- ⑮ 2 a 区 73 号土坑 (東から)

PL - 26

- ① 2 a 区 74 号土坑 (東から)
- ② 2 a 区 75 号土坑 (東から)

- ③ 2 a 区 65 号土坑断面 (南から)
- ④ 2 a 区 172 号土坑 (東から)
- ⑤ 2 a 区 56 号土坑断面 (南から)
- ⑥ 2 a 区 62 号土坑断面 (西から)
- ⑦ 2 a 区 85 号土坑 (南東から)
- ⑧ 2 a 区 61 号土坑断面 (東から)
- ⑨ 2 a 区 48 号土坑 (南から)
- ⑩ 2 a 区 88 号土坑断面 (南から)
- ⑪ 2 a 区 79 号土坑断面 (南から)
- ⑫ 2 a 区 48 号土坑断面 (東から)
- ⑬ 2 a 区 87 号土坑断面 (南から)
- ⑭ 2 b 区 8 号土坑 (北から)
- ⑮ 2 b 区 12 号土坑 (北から)

PL - 27

- ① 1 号井戸 (南西から)
- ② 2 号井戸断面 (南西から)
- ③ 2 号井戸 (北から)
- ④ 3 号井戸断面 (北から)
- ⑤ 4 号井戸 (北から)
- ⑥ 5 号井戸 (北から)
- ⑦ 6 号井戸出土礫 (西から)
- ⑧ 6 号井戸 (北から)
- ⑨ 7 号井戸出土礫 (南から)
- ⑩ 8 号井戸出土礫 (南から)
- ⑪ 9 号井戸 (東から)
- ⑫ 10 号井戸 (北から)
- ⑬ 11 号井戸 (東から)
- ⑭ 12 号井戸 (北から)
- ⑮ 13 号井戸 (南から)

PL - 28

- ① 14 号井戸石組 (北から)
- ② 15 号井戸上面 (南から)
- ③ 16 号井戸出土礫 (東から)
- ④ 14 号井戸掘り方 (北から)
- ⑤ 15 号井戸 (東から)
- ⑥ 16 号井戸 (北から)
- ⑦ 2 a 区 37 号井戸断面 (南から)
- ⑧ 2 a 区 84 号井戸 (南から)
- ⑨ 2 a 区 86 号井戸 (南西から)
- ⑩ 2 a 区 37 号井戸 (西から)
- ⑪ 2 b 区 2 号井戸断面 (南から)
- ⑫ 2 b 区 3 号井戸出土礫 (東から)
- ⑬ 2 b 区 1 号井戸 (北から)
- ⑭ 2 b 区 2 号井戸 (南西から)
- ⑮ 2 b 区 3 号井戸 (東から)

PL - 29

- ① 1 号 (左)・2 号 (右) 竪穴状遺構 (東から)
- ② 1 号・2 号竪穴状遺構断面 (南西から)
- ③ 3 号竪穴状遺構 (北から)
- ④ 4 号竪穴状遺構断面 (西から)
- ⑤ 5 号竪穴状遺構 (東から)
- ⑥ 6 号竪穴状遺構 (東から)
- ⑦ 7 号竪穴状遺構 (東から)
- ⑧ 7 号竪穴状遺構焼土 (西から)

PL - 30

- ① 1 区 6 面水田全景 (西から)

- ② 1区6面水田全景（東から）
- ③ 1区6面水田北側（南東から）
- ④ 1区6面水田南側（東から）
- ⑤ 1区6面水田f畦（北から）
- ⑥ 2b区6面水田（北から）
- ⑦ 2b区6面水田全景（西から）

PL-31

- ① 1号住居（西から）
- ② 1号住居東側遺物出土状態（南西から）
- ③ 1号住居No.10出土状態（北から）
- ④ 2号住居（西から）
- ⑤ 2号住居遺物出土状態（北から）
- ⑥ 2号住居竈断面（南西から）
- ⑦ 3号住居（北から）
- ⑧ 3号住居竈断面（南から）

PL-32

- ① 1a区44号土坑（南から）
- ② 1a区1号住居P1・P1'（45号土坑）（南から）
- ③ 2b区11号土坑（南から）
- ④ 2b区11号土坑断面（南から）
- ⑤ 2a区166号井戸（東から）
- ⑥ 2a区169号井戸（北から）
- ⑦ 2b区13号ピット（北から）
- ⑧ 2b区18号ピット（東から）

PL-33

第1・2面 復旧溝・溝出土遺物

PL-34

第1・2面 溝・集石出土遺物
第3・4面 溝・墓坑出土遺物

PL-35

第3・4面 墓坑出土遺物・大溝氾濫部分の杭

PL-36

第3・4面 大溝氾濫部分の杭
第5面 溝出土遺物

PL-37

第5面 溝出土遺物

PL-38

第5面 溝・ピット・土坑・井戸出土遺物

PL-39

第5面 井戸出土遺物
第7面 住居出土遺物

PL-40

第7面 住居出土遺物

PL-41

第7面 井戸・土坑・ピット出土遺物

PL-42

遺構外の遺物（縄文・弥生・古墳時代）

PL-43

遺構外の遺物（古墳時代）

PL-44

遺構外の遺物（古墳時代・平安時代・中世）

PL-45

遺構外の遺物（中・近世 銭貨）

第 I 章 発掘調査と遺跡の概要

1 発掘調査に至る経過

東毛広域幹線道路は、J R 高崎駅東口を基点として高崎市内を東方へ延び、伊勢崎市、太田市、館林市などの東毛地域の主要都市を結び、東北自動車道館林インターチェンジを経て板倉町に至る延長 58.6km の道路である。群馬県中部と東毛地域の連携を深め、沿線の産業立地、物流の効率化、生活圏の拡大など地域発展に貢献する交通網整備の一環として事業計画が策定された。

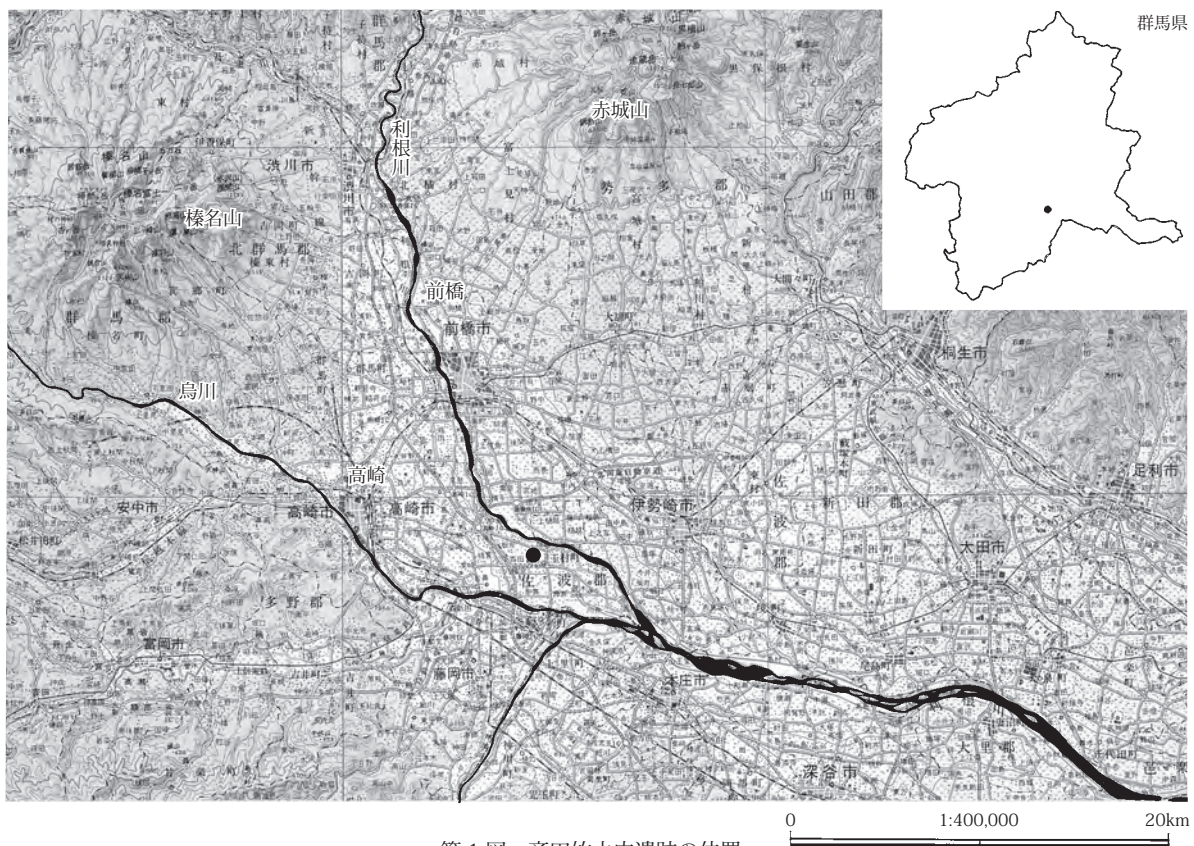
1962(昭和 37)年度に東北自動車道館林インターチェンジ周辺から事業化されて以降、順次工事が着手されている。この間、それに伴う埋蔵文化財の保存措置としての発掘調査も実施されている。

今回の玉村町地内の事業は、高崎市綿貫町と玉村町福島を結ぶ国道 354 号高崎玉村バイパスとして、1993(平成 5)年度から道路改築事業として延長 5.3km が事業化された。計画路線内の埋蔵文化財調査については群馬県教育委員会および群馬県土木部(現 群馬県県土整備部)、

伊勢崎土木事務所による協議を経て、1996(平成 8)年度から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を着手することとなった。

工事工程との関連から、発掘調査は玉村町を南北に縦断する主要地方道藤岡大胡線と、その東側約 800 m の位置に建設予定の藤岡大胡バイパス(平成 13 年 12 月開通)間を、東側から順次着手することとなった。1997(平成 9)年 1 月に福島大島遺跡の調査に着手し、平成 10 年 4 月には福島飯塚遺跡へと調査を展開した。その間、中断を挟みながら、2001(平成 13)年 3 月に福島飯塚遺跡までの調査が終了し、同年 12 月には藤岡大胡バイパスと共にこの間が部分開通している。

主要地方道藤岡大胡線以西では、斉田竹之内遺跡 2 a 区において、計画路線の土質・土圧調査を行うため、福島飯塚遺跡の調査班が平成 12 年度に先行調査を実施した。平成 13 年度に福島飯玉遺跡・斉田竹之内遺跡、平成 14 年度に福島飯玉遺跡・斉田竹之内遺跡・斉田中耕地遺跡、平成 16 年度に斉田中耕地遺跡・上新田中道東



第 1 図 斉田竹之内遺跡の位置

I 発掘調査と遺跡の概要



第2図 斉田竹之内遺跡とバイパス計画路線

玉村町都市計画図より

遺跡と順次西側へ調査が展開されていった。なお、平成16年度の上新田中道東遺跡の調査からは、側道部分の先行調査が行われ、本線部分は本年（平成22）度から発掘調査が再開されている。

2 整理業務の経過

国道354号（高崎玉村バイパス）道路改築事業に関連する発掘調査の整理業務は2003（平成15）年度より、平安時代の大量の墨書土器を出土した福島飯塚遺跡から着手された。平成16・17年度の業務中断を挟み、整理事業を再開した2006（平成18）年度に調査報告書第1集として『福島飯塚遺跡（1）』を刊行した。以降、2007（平成19）年度に第2集『福島飯塚遺跡（2）』、2008（平成20）年度に第3集『福島飯塚遺跡』、2009（平成21）年度に第4集『福島大島遺跡』・第5集『上新田新田西遺跡・上新田赤塚遺跡』・第6集『斉田中耕地遺跡』および高崎土木事務所管内の『下斎田重土薬師遺跡』と順次発掘調査報告書が刊行されてきた。

なお、下斎田重土薬師遺跡の整理は地域活力基盤創造事業、上新田新田西遺跡他の整理は地域自立活性化交付金事業に伴って実施された。

斉田竹之内遺跡の整理事業は平成21年8月に着手し、本年度は地域自立活性化交付金事業として継続作業で発掘調査報告書の刊行まで行うこととなった。

当事業団では調査報告書のデジタル原稿作成を進めているが、本遺跡の調査成果は遺構測量図のほとんどがアナログデータであったため、本文部分はアナログ版下を基本とした。遺構写真はアナログ撮影であったが、整理段階でデジタル撮影した遺物写真と共に、写真図版はデジタル版下を作成した。

高崎玉村バイパス関連の調査遺跡については、次年度以降も引き続き整理事業が予定されている。

3 遺跡の立地と周辺の遺跡

（1）遺跡の立地

斉田竹之内遺跡のある群馬県佐波郡玉村町は、関東平野の北西隅にある。町域の北東部を北西から南西に向かって利根川が流れ、町の南側を画す烏川が東に向かって流れ町の東隅で利根川と合流している。町域はこれらの河川に囲まれた、北西方向から南東方向へ緩やかに傾

斜する平坦地となっている。

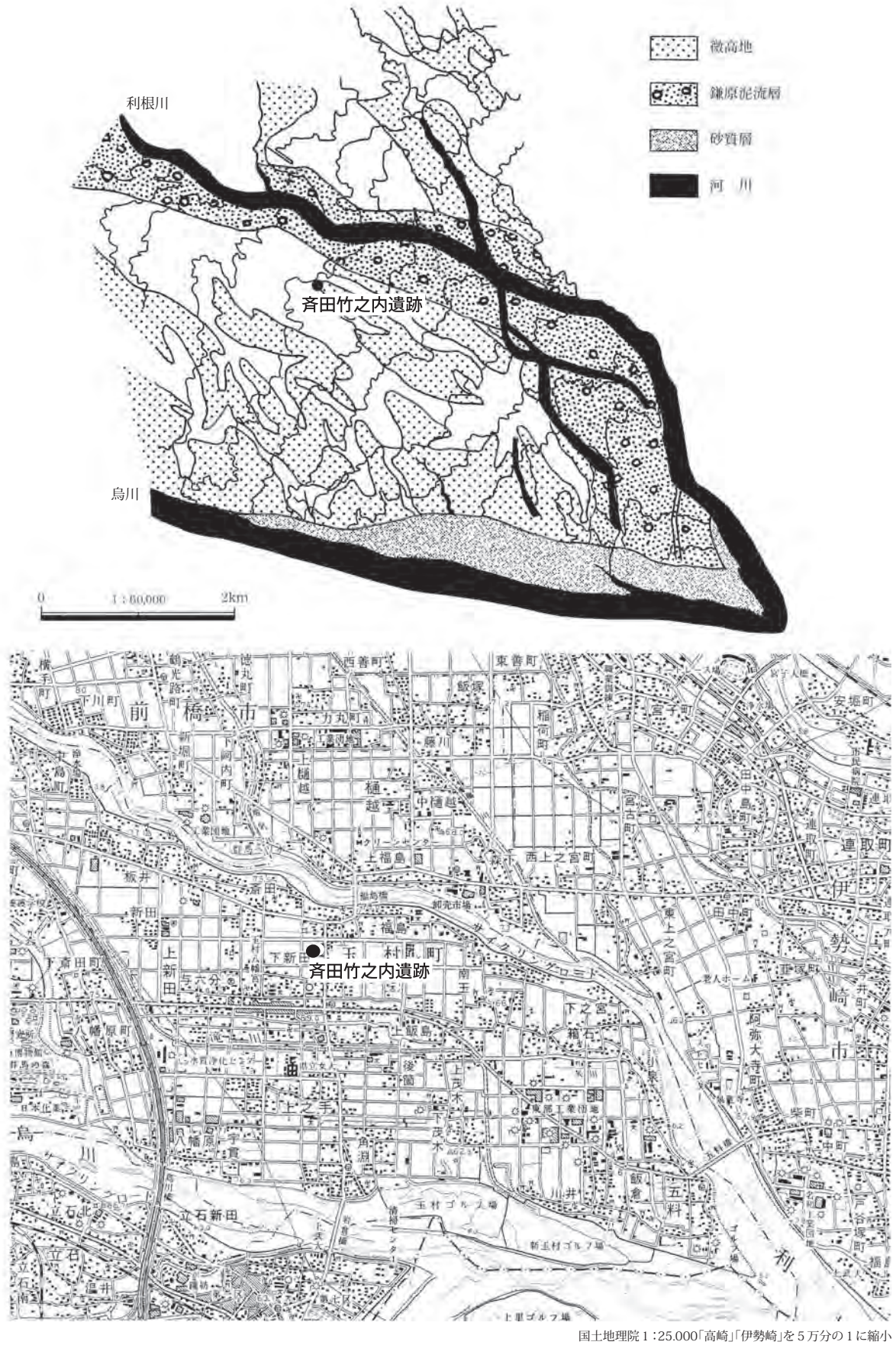
町の西側に高崎市、北側に前橋市、東側に伊勢崎市があり、これら近隣市のベッドタウンとして近年は人口増加の著しい地区である。

斉田竹之内遺跡は、玉村町の利根川右岸前橋台地の南端に位置する。前橋台地は洪積世後期、利根川によってもたらされた厚さ200m以上にも達する前橋砂礫層の上に、約20,000年から24,000年前の浅間山の山体崩落に起因する前橋泥流が短期間にこの台地を覆って堆積し、形成されたものである。凝灰角礫岩を含むこの土層は前橋泥流堆積層と呼ばれ、西は高崎市の旧群馬町域から高崎市の北・東部の平野部へと広がり、東は前橋市の北東部から伊勢崎市西部にかけて10m以上の厚さで堆積しており、烏川と広瀬川とに挟まれた県央の平野部の基盤層となっている。この前橋泥流堆積層の上には、シルト・粘土・砂・泥炭層などによって構成されている水成ローム層が堆積している。シルト・泥炭層は水中や湿潤な環境で形成されることから、この時期の前橋台地が湿地状態であったことを示している。

前橋台地上には洪積世後期以降、利根川をはじめとするいくつかの河川が流れ、小規模な氾濫原を各所に形成していった。特に台地の東側を流れる利根川は、榛名山南東麓の末端を浸食する形で南流している。約24,000年前は、総社町付近から新前橋駅を経て染谷川・滝川付近を流れ、井野川に注いでいたとされる。その後、約17,000年前には榛名山で発生した泥流により埋め立てられ、赤城南西麓縁の広瀬川低地帯にその流路を変更している。現在は前橋市大手町付近から、玉村町五料付近まで、前橋台地を貫通している。現在の河道に移ったのは中世後期と考えられている。その後、利根川は大きな変流こそ起きていないが、氾濫を度々起こし周辺の小河川に影響を与えながら前橋台地を刻み続けた。その結果、後背湿地と微高地が複雑に入り組んだ地形が形成された。

利根川は中世の変流後も幾度となく大洪水を引き起こしているが、本遺跡も利根川の洪水堆積層に被覆されたり、洪水層の上に築かれた遺構が確認されている。近年にも1947（昭和22）年のカスリーン台風によって引き起こされた氾濫による被害は、地域の人々の記憶に残るものである。

I 発掘調査と遺跡の概要



第 3 図 齊田竹之内遺跡周辺の地形

(2) 周辺の遺跡

ここでは齊田竹之内遺跡で調査された古墳時代から平安時代にかけての集落や平安時代の水田、中世の館、そして江戸時代の水田や畑を理解するために、周辺の歴史環境について辿ってみたい。

【縄文時代】玉村町域では縄文時代の遺跡の分布は希薄である。本遺跡において出土した尖頭器片は、他に上新田中道東遺跡や砂町遺跡でも出土しており、縄文時代草創期より遺物は採取されているが、遺構はきわめて少ない。また、土器より石器の出土のほうが多いようで、居住域より狩猟採集の場であったと考えたい。

【弥生時代】縄文時代に引き続き、弥生時代も遺跡の分布は希薄である。本遺跡では弥生時代中期後半の土器片が採取されているが、該期の住居跡が本遺跡の約1.5^{km}東北東にある上飯島芝根Ⅱ遺跡で、再葬墓が一万田遺跡で調査されている。弥生時代後期に至っても遺跡の少ない傾向は変わらないようである。

【古墳時代】古墳時代前期になると、周辺の遺跡分布は一変して、数多くの集落が見られるようになり、本遺跡でも不明瞭ながら1区微高地部分から竪穴住居が1軒調査され、2区での該期遺物の出土はきわめて多い。高崎玉村バイパス関連の遺跡にも福島曲戸遺跡・福島大光坊遺跡・上新田中道東遺跡などに類例がある。その他の集落としては町域の南側の烏川左岸に位置する上之手八王子遺跡や角瀧城遺跡などが知られ、水田適地の沖積地を望む微高地に該期の集落が展開することが分かる。

生産遺跡としては5世紀後半から6世紀前半にかけて、榛名山の噴火に由来するHr-FA泥流下もしくはHr-FP層下の水田も調査例が増えている。本遺跡では確認できなかったが、隣接する福島飯塚遺跡・齊田中耕地遺跡の他、福島大島遺跡などで小区画水田とも呼ばれる遺構が沖積地部分で調査されている。なお、砂町遺跡では4世紀代に開削された大規模な溝が調査され、水田開発の過程も確認されてきた。

墓制では福島飯塚遺跡、上新田中道東遺跡、赤城遺跡などで古墳時代前期の方形周溝墓が、下郷遺跡では方形周溝墓や円形周溝墓とともに前方後方墳や前方後円墳が調査されている。前期古墳としては前方後円墳の川井稲荷山古墳（芝根7号墳）や下郷天神塚古墳、円墳の軍配山古墳が知られている。中期古墳には前方後円墳とされ

る梨ノ木古墳の他に、横堀遺跡で円墳が調査されている。後期古墳には町域東南部に古墳群が目立つ。前方後円墳としては小泉大塚越3号墳やオトカ塚古墳が知られる。烏川左岸には若宮・八幡原古墳群や角瀧古墳群・川井古墳群では6～7世紀の群集墳が形成されている。反面、本遺跡周辺での古墳分布は希薄となっている。

【奈良・平安時代】律令期の町域は倭名類聚抄記載の那波郡7郷のうち、鞆田郷および佐味・朝倉の2郷の一部にあたる地域と考えられている。

奈良時代の集落は福島稲荷木遺跡や上之手八王子遺跡など、古墳時代同様に微高地に立地している。平安時代の集落は本遺跡の他、福島飯塚遺跡、行人塚遺跡など町域の広い範囲に広がっている。中でも一万田遺跡では直径1mの柱穴を持つ柵列と瓦の出土があり、官衙や寺院などの施設が存在していたことも想定される。福島曲戸遺跡には「村長」と記された線刻紡錘車と多量の緑釉陶器の出土があり、福島飯塚遺跡では大溝から「家」などの文字の記された250点以上の墨書土器が出土している。上飯島芝根Ⅱ遺跡では銅印の出土が知られる。

集落のある微高地周辺の低地部分では水田が広がっていることが、1108（天仁元）年の浅間山噴火に伴う軽石：浅間B軽石下の調査で確認できる。これらの水田は条里制の区画による東西南北方向の畦畔が観察される。本遺跡や周辺の高崎玉村バイパス調査の諸遺跡の例以外にも、町のほぼ全域で水田耕地化されていたことが考えられる。

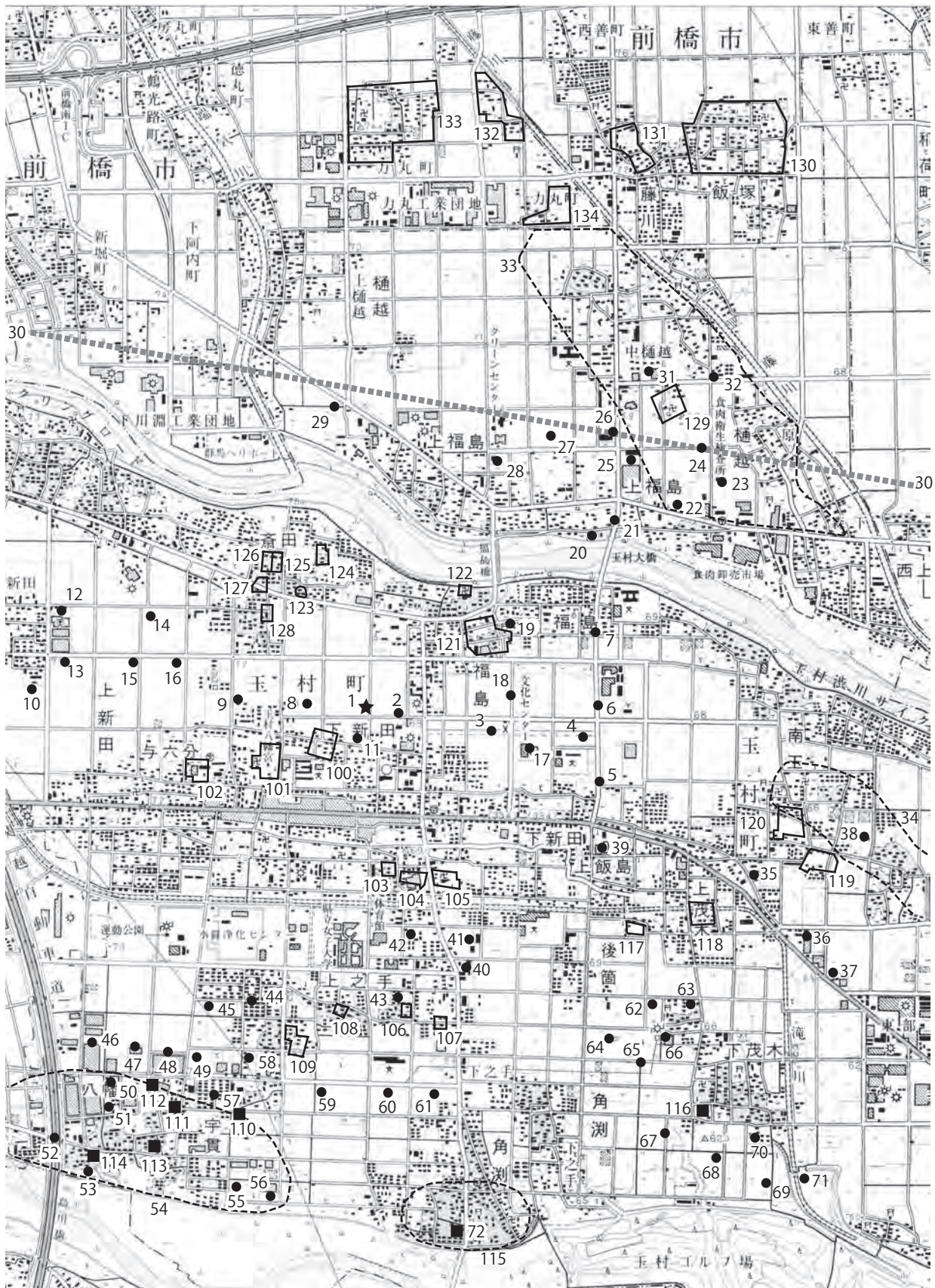
利根川左岸の砂町遺跡と上福島尾柄町遺跡では幅員4mの道跡が調査されている。これは推定東山道駅路のうち、牛堀・矢ノ原ルートと呼ばれる南寄りの道に比定されている。

12世紀中頃には伊勢神宮所領の玉村御厨が構えられたとする記録があり、これ以前には玉村保が成立していたと考えられている。

【中世】鎌倉時代の町域は上野国御家人安達氏とその被官玉村氏の支配下にあったとされる。玉村氏は、玉村御厨成立の際の在地開発領主で、霜月の乱による安達氏没落後は北条得宗家の支配下にあったと考えられている。

室町時代には、上杉氏守護のもと那波氏の領域であったとされる。

戦国時代には玉村町域に限らず上野国一帯が上杉・武田・後北条氏の争奪戦の渦中に置かれた。この中、宇津



第4図 周辺の遺跡分布図

国土地理院 1:25,000「高崎」伊勢崎使用

第1表 周辺遺跡一覧(1)

No	項目 遺跡名	縄文 弥生	古墳			奈良	平安	中世			近世			遺跡の概要 その他の遺構・遺物	参考文献											
			前・中		後			住	生	住	生	住	生													
			住	墓	住											墓	生	住	生	住	生					
1	齊田竹之内遺跡	●●	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	本報告の遺跡。 本遺跡東に隣接。中世の用水路が続く。 古代の溝から『家』など多量の墨書土器。	47										
2	福島飯玉遺跡	●		○		○	○	○	○	○	○	○	○	45・46												
3	福島飯塚遺跡	○	□	○		◎	○	○	○	○	○	○	49													
4	福島大島遺跡					○	○	○	○	○	○	○				43										
5	福島大光坊遺跡			FP		○	○		○	○	○	○					43									
6	福島久保田遺跡			FP		○	○		○	○	○	○						41								
7	福島曲戸遺跡					○	○		○	○	○	○							50							
8	齊田中耕地遺跡					○	○		○	○	○	○								48						
9	上新田中道東遺跡		○	□																	48					
10	上新田赤塚遺跡					他		○														本遺跡南側に隣接。中世と思われる大型柱穴。				
11	布留坂Ⅱ遺跡						○						12													
12	中道西遺跡						○							12												
13	中道西Ⅱ遺跡						○								37											
14	一本木遺跡						○					○				12										
15	中道東遺跡																円墳か。									
16	蛭堀東遺跡						○					○						3								
17	福島稲荷木遺跡																		44							
18	福島稲荷木Ⅳ遺跡				FA															天明三年の泥流に埋もれた江戸時代の村落。						
19	天神古墳																				39					
20	上福島中町遺跡	●				○	○	○	◎	○													弥生後期再葬墓、平安柵列。			
21	上福島遺跡						○					○												4		
22	一万田遺跡	○					○					○													39	
23	神人村Ⅱ遺跡	○				○	○	○				○														5
24	中之坊遺跡					道	○				○															
25	尾柄町Ⅱ遺跡					道							道脇の両側溝。													
26	上福島尾柄町遺跡					道	○							古墳時代前期の用水路。												
27	砂町遺跡	●		◎				○							39											
28	金免遺跡															律令期の駅路・牛堀矢野原ルート。										
29	柄田添遺跡					○	○	○			○	○					31・38									
30	推定東山道駅路					道												古墳時代中期石製模造品製作址。								
31	松原Ⅱ・松原Ⅲ遺跡		他				○	○			○	○							古墳時代前期の溝。							
32	原浦・原浦Ⅱ遺跡			他			○	○			○	○								12世紀に伊勢神宮領として成立。						
33	玉村保・玉村御厨																				町東部利根川右岸の古墳群。箱石浅間山古墳を含む。					
34	箱石古墳群			○	○																	3				
35	十王堂Ⅲ遺跡					○	○																38			
36	十王堂・十王堂Ⅱ遺跡						○																	22		
37	三滝遺跡						○	○																	13	
38	社宮島古墳			○	○																					弥生中期の住居。
39	上飯島芝根Ⅱ遺跡	○				○	○	○					30													
40	曲田Ⅱ遺跡													16												
41	曲田遺跡														15											
42	中袋遺跡															24										
43	上之手立野遺跡					○	○		○	○							36									
44	上之手八王子遺跡	○																2								
45	上之手地区遺跡群(1)					○	○				○								17							
46	八幡原赤塚遺跡							○												時期不明の溝。						
47	赤城Ⅱ遺跡																				10					
48	宇貫遺跡		○			○	○	○														18				
49	上之手地区遺跡群(2)					○																	17			
50	八幡原赤塚Ⅱ遺跡																							25		
51	赤城遺跡			□																					29	
52	下郷遺跡		○	□	○			○																		
53	上之手石塚Ⅲ・Ⅳ遺跡												8・9													
54	若宮・八幡原古墳群			○	○									29												
55	蟹沢Ⅱ～Ⅳ遺跡	●										○			6・7											
56	蟹沢遺跡							○	○	○	○	○				27										
57	行人塚Ⅲ遺跡							○									21									
58	行人塚遺跡							他	他									奈良・平安の溝・土坑。								
59	宮ノ下遺跡										○	○							20							
60	若王子Ⅱ遺跡						○				○	○								20						
61	天神巡りⅢ遺跡			○		○															土師器焼成坑。					
62	萩塚古墳			○																		3				
63	滝川南遺跡					○					○												19			
64	軍配山古墳			○																				3		
65	玉村町第3号墳																								3	
																										3

I 発掘調査と遺跡の概要

No	項目 遺跡名	縄文	弥生	古墳		奈良	平安	中世			近世			遺跡の概要 その他の遺構・遺物	参考文献
				前・中	後			住	生	住	生	住	生		
				住墓	住墓			住	生	屋	他	田	倉		
66	神明遺跡														38
67	浄土山古墳			○										前期の前方後円墳、後期に再利用。	3
68	梨ノ木山古墳				○									後期の前方後円墳。	3
69	殿台山古墳													前方後円墳か。	3
70	オトカ塚古墳			○	□									後期の前方後円墳。	33
71	房子塚古墳				○									前方後円墳か。	3
72	角洲城遺跡	○	○	○				○	○		○	○		縄文前期の土坑、円墳、中世土坑、近世井戸。	28

縄文・弥生の項で●は遺物の出土はあるが遺構の確認のないものを表わす。古墳の項の墓で□は方形周溝墓、○は古墳を表わす。古墳の項の生産でFAはHr-FA下の水田を、FPはHr-FP下の水田を表わす。中世・近世の屋敷の項は屋敷を画す堀・土塁・建物・井戸の確認を、その他の項は土坑・墓坑・溝その他の調査を表わす。○は特記事項を概要欄に記してある。

第2表 周辺遺跡一覧(2) 中・近世城館跡

No	遺跡名	中世	近世	築・在城者 (推定・伝承)	遺跡の概要	備考	文献
1	齊田竹之内遺跡	○			3か所の方形館、間に幅10mを超える用水路。	本報告の遺跡。近世は生産域。	
2	福島飯玉遺跡	○			本遺跡から続く用水路南に2か所の方形館。	本遺跡の東に隣接。近世は生産域。	47
4	福島大島遺跡	○			方一町(一辺108m)の館か。	近世は生産域。	49
5	福島大光坊遺跡	○			2重堀。外郭東西65m、南北75m規模。		43
20	上福島中町遺跡	○	○		堀。	15・16世紀。	44
44	上之手八王子遺跡	○			二重堀。南西部分を調査。	上之手八王子Ⅱ遺近接。	2
50	八幡原赤塚Ⅱ遺跡	○			一辺35～40mの区画。二重堀か。	14世紀後半。	25
53	上之手石塚Ⅲ・Ⅳ遺跡	○			屋敷3か所。新井屋敷の一部。	13・14世紀。	8・9
56	蟹沢遺跡	○	○		2か所の方形館。		27
100	玉村館		○	吉里入道	東西150m、南北120m。堀・戸口。		
101	玉村八幡館		○		堀・土居。	玉村八幡宮。	
102	与六屋敷		○	早川与六	東西120m、南北100m。堀。		
103	内田屋敷	○	○	内田善右衛門	東西90m、南北150m。二重堀・土居・戸口。		36
104	宮下屋敷	○			堀。		
105	観照寺屋敷	○		伝 玉村太郎	二重堀・土居。		
106	秋山屋敷	○		秋山氏	東西約70m。堀。	文献36では近世。	36
107	木暮屋敷	○		木暮氏	東西約45m、南北30～40m。堀。		36
108	重田屋敷	○		重田氏			
109	原屋敷	○		原嘉門	東西130m、南北80m。二重堀・土居・井戸、板碑。	東原屋敷と西原屋敷。	36
110	新井屋敷	○		新井氏	堀・土居。石仏。	北側に上之手Ⅱ・Ⅲ遺跡。	9
111	字貫館(2)	○			二重堀。	北西部分を字貫Ⅱ遺跡として調査。	18・42
112	字貫館(1)	○			外郭、東西・南北とも100m。二重堀。		18・37
113	字貫城	○		川端玄蕃	外郭100m、内郭50m。二重堀・戸口。		23
114	八幡原城	○			一城二郭。		1
115	角洲城	○		鳥山武部大輔	城郭、二重堀・戸口。	北辺・西辺の一部を調査。	28
116	下茂木屋敷	○	○	齊藤甚五兵衛			
117	後閑屋敷	○		田口広安	東西・南北とも75m。二重堀。		
118	茂木館本館(田口屋敷)	○		田口氏	東西・南北とも150m。二重堀。		
119	南玉館(原武屋敷)	○			二重堀・土居・戸口。		
120	玉村城(南玉原屋敷)	○		金原氏	城郭。堀・土居。寺五輪塔・板碑。		
121	福島砦	○			堀。		
122	宇津木館	○					
123	田村屋敷	○		田村兵衛・甚右衛門	東西70m、南北55m。堀。		
124	田口下屋敷	○		田口俊成	東西75m、南北100m。二重堀。		26
125	温井東屋敷	○		温井氏?		齊田東屋敷とも呼称。	
126	温井西屋敷	○		温井氏?		齊田西屋敷とも呼称。	
127	町田屋敷	○		町田氏	東西・南北とも40m。堀。		
128	石原屋敷	○	○	石原氏	東西65m、南北75m。堀。		
129	阿佐美館	○		藤姓那波氏	東西。南北とも130m。二重堀・戸口。		
130	飯塚環濠集落	○	○	宇津木氏			
131	藤川環濠集落	○			堀。		
132	東方丸環濠遺構群	○			堀。		
133	力丸城	○		力丸氏	根小屋、堀・土居・戸口。	15・16世紀。	
134	徳丸東環濠遺構群	○			堀		

木氏は大字福島の地を本拠地とした氏族である。

本遺跡の調査では、東に隣接する福島飯玉遺跡と併せて5か所の未周知だった方形館が、ごく近接して配置されていることが明らかになった。

玉村町域の中世城館跡については、山崎一氏の長年の研究や群馬県教育委員会が実施した城郭分布調査により明らかになっているように、城郭や周囲に堀を巡らす屋敷が多数散在している。第4図の遺跡分布図には城郭関連の遺跡について3桁の番号で表記し、一覧表についても第2表に別に記載した。

【近世】近世の玉村町域は天領・藩領が入り組んでいたようである。『玉村町史』によれば、1601（慶長6）年、諏訪頼忠転封後は徳川幕府代官伊那忠次の管掌となったという。伊那氏は1610（慶長15）年に滝川用水を完成させ、周辺の新田開発を推進した。

1647（正保4）年以降、日光例幣使の通行が記録されるが、それに先行して街道と宿の整備が行われ、本遺跡をはじめ多くの中世方形館が廃絶され、街道沿いに屋敷を移したと想定している。反面、伊那忠治の陣屋が置かれ玉村館など日光例幣使街道に近接した施設は、江戸時代にも屋敷として残っている。

1668（寛文8）年には前橋藩酒井氏の知行となる。本遺跡周辺は福島村に含まれ、村高は871.9石であった。

1783（天明三）年の浅間山噴火により発生した泥流により埋もれた遺跡の多さも町域の特色である。上福島中町遺跡では建物・付属施設・道など村落の景観が、多様な遺物と共に明らかになった。生産遺跡では本遺跡をはじめ、斉田中耕地遺跡など多数の周辺遺跡において、堆積した軽石から耕地を復旧する天地返しのための復旧溝・復旧坑が確認されている。

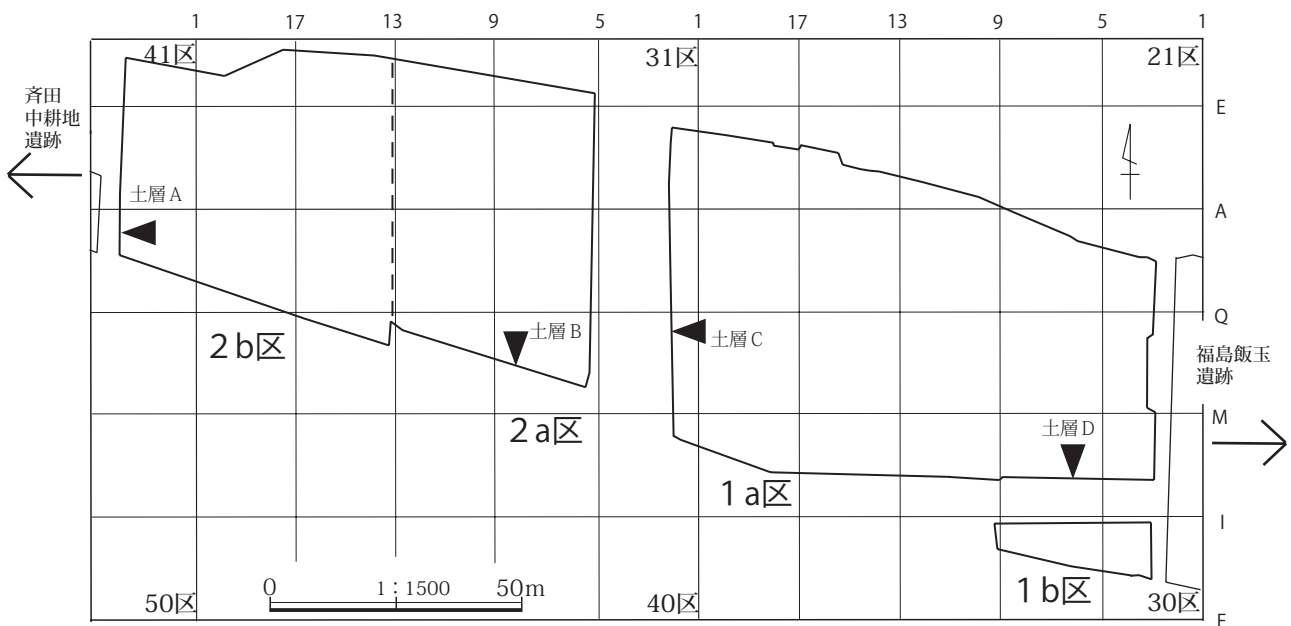
4 調査の方法と経過

(1) 遺跡の呼称と調査区の設定

調査対象地は、平成4年に玉村町教育委員会が発行した『玉村町の遺跡』に登録されている周知の包蔵地の一部であった。遺跡の呼称については玉村町教育委員会、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の3者により協議を行った上、従来からの当事業団の調査遺跡命名法に沿って、遺跡所在地の中心的大字名「斉田」と小字名「竹之内」を併せて、『斉田竹之内遺跡』とした。

本遺跡の東側には南北に走向する農業用水路を挟んで福島飯玉遺跡がある。西側には同様の水路を挟んで斉田中耕地遺跡が接している。両遺跡は名称は異なるが、同一の性格を持つ連続する遺跡である。

発掘調査に際しては、調査対象地のほぼ中央を南北に



第5図 斉田竹之内遺跡調査区図

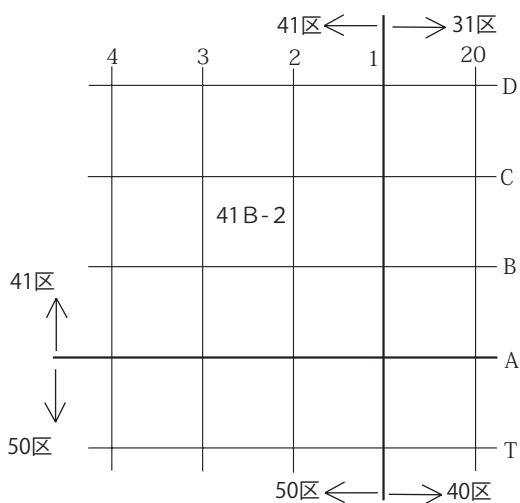
走向する町道を境に東側を1区、西側を2区とすることを先行調査の際に決定した。さらに1区では調査対象地の南寄りを東西に走向する町道を挟んで北側を1a区、南側を1b区とした。2区では平成12年度に調査した東半分を2a区、平成14年度に調査した西側半分を2b区とした。

(2) グリッドの設定

国道354号線(玉村バイパス)に伴う埋蔵文化財の発掘調査では平成8年度の調査開始以来採用しているグリッドの設定方法を本遺跡の調査でも踏襲した。すなわち、国家座標(旧測地系)に基づき玉村町全域を網羅するように南東隅の座標 $X = 30,000 \text{ m}$ ・ $Y = -60,000$ を基点とする10km四方の区画を設定し、それを「地区」と呼称した。「地区」を100m四方に100分割し、南東隅を1、北西隅を10、1の西側を11、北西隅を100となるように番号を付けて「区」(大区画)とした。

次に「区」を100m四方に100分割し、「区」同様に1~100までの番号を付けたものを「中グリッド」と呼称した。さらに中グリッドを5m四方に分割した「小グリッド」を設定した。この小グリッドには南東隅を基点として西方向にアラビア数字で1~20、北方向にアルファベットでA~Tを付し、両者の組み合わせで呼称した。すなわち基点部分はA-1とし、北隣ではB-1、西隣ではA-2となる。

本遺跡は東隅が34区30(中グリッド)、西隅が34区50(中グリッド)から35区41(中グリッド)にある。本報告書中に記載するグリッドにはこのような区画名称



第6図 グリッド呼称概念図

のうち中グリッドと小グリッドを表記単位としている。例えば「41B-2」と呼称するのは、平面図上の中グリッド41区内の、東西Bラインと南北2ラインの交点を指し、本文中ではこの点を南東隅とする5m四方のグリッドを指している。

(3) 調査の方法

調査対象地は水田地帯を横断するうえ、耕作時期にかけて調査が行われるため、地元の協力を受け、あらかじめ隣接する水田は休耕とすることができた。それでも掘削が始まれば激しい湧水が予想され、調査区の外縁には小型のバックホーと人力により排水用の溝を巡らせ、ここから動力を利用して排水を行った。(排水に使用した農業用水路は地表面より高い位置にあり、ここから水が溢れるような水量時には対策はなかった。)

この排水溝壁面により地層観察を行うとともに、重機による掘削の際の鍵層や深度を決定した。

大型重機による掘削は、表土を剥ぎA軽石面(第1面)を確認する際と、洪水砂を剥いで第5面を確認する際の2回の調査について、ほぼ調査区全域で行った。

遺構写真は、モノクロ写真を6×7判および35ミリ1眼レフカメラ、リバーサル写真を35ミリ1眼レフカメラで撮影した。その他に全景写真撮影の際には高所作業車を導入したほか、気球を利用した6×6判カメラによる撮影を業者委託した。

(4) 調査の経過

本遺跡の調査は平成12年に着手している。玉村バイパス路線域の地質調査のため、2a区に福島飯塚遺跡の調査班があたった。8月後半にトレンチを兼ねた排水溝を設け、9月から重機による表土掘削に着手し、天明三年のテフラに関わる遺構の調査を行った。10月に洪水層下、11月に中世館の調査を行い、12月に調査を終了している。

平成13年度には4月当初から調査にあっている。当初は福島飯塚遺跡の調査事務所を使用し、5月に昨年度に調査を終了した2a区に事務所を設営・移転した。本遺跡の東側に隣接する福島飯玉遺跡と同時に調査にあたったが、工事工程に沿って東側の飯玉遺跡の調査を先行した。廃土置き場を確保できず、本遺跡では最も狭い1b区のみ当初から着手した。6月に入って1a区の調査を一部開始したが、本格的に調査を開始したのは1b

区の調査を終え、廃土置き場として利用可能となった9月からである。また、掘削残土を調査区域外へ搬出する作業道を1a区北側に設けたため、この部分の調査は後続して行った。用水路埋没土を含む膨大な土量を搬出したため、作業道下の遺構は傷めてしまった部分もある。調査はこれまでの周辺遺跡で確認された文化面にあわせて順次行ったが、中世面を確認する段階で、部分的に浅間A軽石下の水田畦畔が確認できる部分があり、中世館面の膨大な遺構を掘り下げたあとでは、畦畔が壊される恐れがあるため、先行して畦畔の写真図面を撮った部分がある。このため、水田写真類には後出するはずの館内の諸遺構が見えないものがある。

10月末からは2b区の調査を開始した。1a区の中世の巨大な水路(大溝)と南北2か所の方形館をメインとした現地説明会を2月2日に実施したあと、1a区の調査を終了した。

2b区は2月前半にAs-Aに関わる調査第1面をほぼ終了し、洪水層下の調査第2面に部分的に着手した。

平成14年度は前年度の事務所を継続使用し、用地の解決した福島飯玉遺跡未調査部分を優先させ、他に斉田中耕地遺跡の調査を並行して進め、7～9月の間はいったん中断している。10月からは調査班が替わり、11月上旬まで本遺跡の調査を主に対応した。この年度は4～6月と10～11月の2回に渡って調査を断続的に行い、すべての調査を終了させている。

(5) 調査日誌抄

平成12年度(福島飯塚遺跡調査班対応 2a区の調査)

- 8月22日 2a区に発掘区域確定。
- 25日 休憩・機材用テント設置。
- 31日 排水溝を兼ねたトレンチを掘削とともに、壁面を使用した土層断面精査。
- 9月4日 表土機械掘削開始。第1面(洪水層上面)遺構確認(～19日)。
- 6日 As-A復旧溝調査開始。グリッド杭打設。(9月中旬まで降雨による冠水のため中断多い)。
- 19日 第1面記録化開始。
- 26日 南部分As-A混土除去(2面遺構の確認)。
- 28日 玉村小学校児童地層見学。
- 10月6日 第3面(As-B混土上面)表出作業着手。
- 10日 第1面調査完了。第2面調査着手。

- 16日 第3面水田表出作業着手。
- 24日 第2面、第4面(As-B混土上面)調査着手。第3面測量着手。
- 26日 第6面40R-11グリッド付近で試掘、遺構確認。
- 27日 第3面測量継続。
- 11月7日 第4面測量着手。
- 9日 第5面(中世館面)調査着手。ピット群等掘り下げ。
- 15日 第4面終了。
- 16日 調査区南側の館(西館)内部精査。
- 22日 玉村町教委中島氏来跡。
- 29日 館内遺構の記録化開始。
- 12月6日 旧石器時代試掘開始。(遺跡なしを確認)
- 12日 西館空中写真撮影。
- 22日 発掘調査(第1年次調査)終了。
- 25日 機材・テント等撤去作業。(～12月26日)
- 平成13年度(福島飯玉遺跡と同時調査 1区・2b区の調査)
- 4月2日 担当職員配属。調査準備着手。
- 4日 福島飯玉遺跡調査着手、以後9月13日まで福島飯塚遺跡と並行して調査を行う。
- 18日 1b区機械表土掘削開始(～19日)。
- 5月7日 1面遺構確認。遺構なし。
- 8日 2面(As-B混土上面)遺構確認作業・表出作業開始。
- 14日 1b区As-B混土上面全景写真撮影。
- 15日 福島飯玉遺跡専念のため調査中断(～28日)。
- 21日 事務所移転。(2a区調査終了地点)
- 30日 1a区排水溝を兼ねたトレンチ掘削開始。
- 6月4日 1a区表土機械掘削開始。
- 7日 福島飯玉遺跡とともに、1区写真撮影準備。
- 8日 1a・1b区調査経過空中写真撮影。
- 9日 福島飯玉遺跡へ作業専念するため調査中断(～7月24日)
- 7月25日 1b区調査再開。中世面で膨大な数の遺構を確認。館の存在を推測。
- 27日 上記確認面遺構調査開始。以降、8月はピット群および溝・土坑等の掘り下げと記録。
- 9月5日 1b区全景写真撮影。Hr-FP泥流下調査開始。

I 発掘調査と遺跡の概要

- | | | | |
|---------------------------|---|--------|--|
| 6日 | 1b区では古代以前の遺構なく、調査終了。
1a区表土掘削開始。(この頃より11月下旬まで本遺跡の調査が主体となる。) | 4月1日 | 年度前半の担当着任。 |
| 7日 | 1b区埋め戻し開始。(～14日) | 3日 | 調査区にて担当者引継ぎ。 |
| 13日 | 1a区近世面調査開始。以降、復旧溝・畠・水田・溝等の掘り下げと記録。 | 9日 | 工程打ち合わせ(伊勢崎土木事務所・県教委文化財保護課・事業団 福島飯玉遺跡の調査から先行着手を確認) |
| 9月14日 | 1a区周囲の排水を兼ねたトレンチ設定のため小型機械による掘削開始。 | 22日 | 作業員呼集。(以後、福島飯玉遺跡と並行調査) |
| 9月22日 | 1a区トレンチの記録 | 23日 | 区北側機械掘削(～30日)。遺構確認着手。 |
| 10月28日 | 1a区第1面全景写真撮影。 | 24日 | 区遺構調査開始。 |
| 10月29日 | 2b区試掘(トレンチ)調査。(～11月1日) | 25日 | 1面(As-A混土面)終了。2面(As-A下面)調査開始。 |
| 31日 | 2b区表土掘削開始。 | 30日 | 西館の堀調査先行着手。 |
| 11月5日 | 1a区中世面調査開始。以降、ピット群および中世館に伴う溝等の掘り下げと記録。 | 5月13日 | As-B面までの機械掘削着手(～16日)。 |
| 6日 | 2b区遺構確認作業開始。 | 18・20日 | 夕立により冠水。 |
| 14日 | 伊勢崎土木事務所へ範囲確認のための杭打依頼。 | 22日 | 3面(As-B混土下面)遺構確認開始。(～28日) |
| 20日 | 工程会議。 | 29日 | 発掘調査中断。(福島飯玉遺跡調査に専念) |
| 12月11日 | 大溝掘削のため機械導入開始。廃土を2b区西側の斉田中耕地遺跡調査予定地へ搬出する。このため2b区の調査を一時中断。 | 6月11日 | 調査区養生作業(～12日)。 |
| 12月21日 | 屋外作業中断(～平成14年1月7日)。 | 25日 | 安全柵設置。 |
| 1月11日 | 1a区第2面空中写真撮影。 | 27日 | 事務所撤去作業(～28日)。 |
| 18日 | 2b区調査再開(As-A復旧遺構面掘り下げ)。 | 30日 | 年度前半の調査終了。 |
| 2月2日 | 現地説明会開催。見学者329人。 | 10月1日 | 年度後半の調査担当着任。 |
| 5日 | 1a区As-B下水田全景写真撮影。 | 3日 | 2b区排水作業開始(～8日)。 |
| 8日 | 2b区1面全景写真撮影。1a区北隅、機械用搬入路下の調査開始。大溝一部を埋め戻しながらの調査となるが排水先を失い、以降湧水に苦慮。 | 8日 | 調査面被覆シート除去作業(～9日)。 |
| 19日 | 1a区北隅搬入路下から古墳時代・平安の遺物出土。住居跡確認のための精査。
2b区1面測量継続しつつ2面(As-B混土上面)調査開始。(機械掘削併用) | 9日 | 清掃等の作業(～10日)。 |
| 3月11日 | 2b区2面全景写真撮影。南東隅より3面(As-B下面)調査に着手。
14日以降、記録および年度内調査終了準備。 | 11日 | 3面(As-B混土下面)遺構調査開始。 |
| 3月15日 | 飯島静男氏による大溝・井戸石組みの礫調査。1a区の調査終了。 | 16日 | As-B降下後の遺構調査終了。
(21日より斉田中耕地遺跡と並行調査開始) |
| 平成14年度(福島飯玉遺跡・斉田中耕地遺跡と同時調 | | 23日 | 3面空中写真撮影。 |
| | | 24日 | 廃土用通路下部分3面調査(～25日)。 |
| | | 28日 | 4面以下の調査開始。機械掘削、遺構確認着手。 |
| | | 29日 | 遺構調査開始。 |
| | | 11月1日 | 調査終了。
(11月5日より斉田中耕地遺跡のみの調査) |
| | | 12月18日 | 埋め戻し開始。(～20日)
この年度の高崎玉村バイパス関連の調査は12月で終了している。 |

第Ⅱ章 発掘調査の記録

1 遺跡の概要

(1) 基本土層と確認遺構

昭和30年代の圃場整備事業によって、調査対象地一帯は水田地帯となっているが、明治九年の地図（第175図）によると付近は水田と畠が入り組んでいた。

発掘調査でも低地と微高地が入り組んだ複雑な地形が確認された。標高差にして数十センチの緩やかな差であるが、低地は水田として使われ続け、微高地には古代の集落・中世の館跡・近世の畠と変遷する土地利用のあり方が周辺の遺跡とともに明らかになりつつある。

本遺跡の土層観察記録から、深度のある南壁を中心とした基本土層図（第7図）を作成した。1区と2区から2か所ずつ選んだ調査地点は第5図を参照されたい。ここでは東側に隣接し、内容の連続する福島飯玉遺跡の報告書（2008）の土層名を原則的に踏襲し、併せて本遺跡内各所の土層堆積状況を柱状図に記した。

【1層】表土 1783（天明三）年の浅間山噴火以降の耕作土で、As-A（浅間A軽石）を混入する土層である。調査範囲の全地点で見られる。この上に昭和30年代に実施された圃場整備事業時の客土が明瞭に分かれる部分がほとんどだったが、報告では同一に扱った。

なお、As-Aの混入が多く、軽石降下後間もない耕起部分と想定された土層を1-2層とした。As-Aの純層が確認できる地点はほとんどなかった。

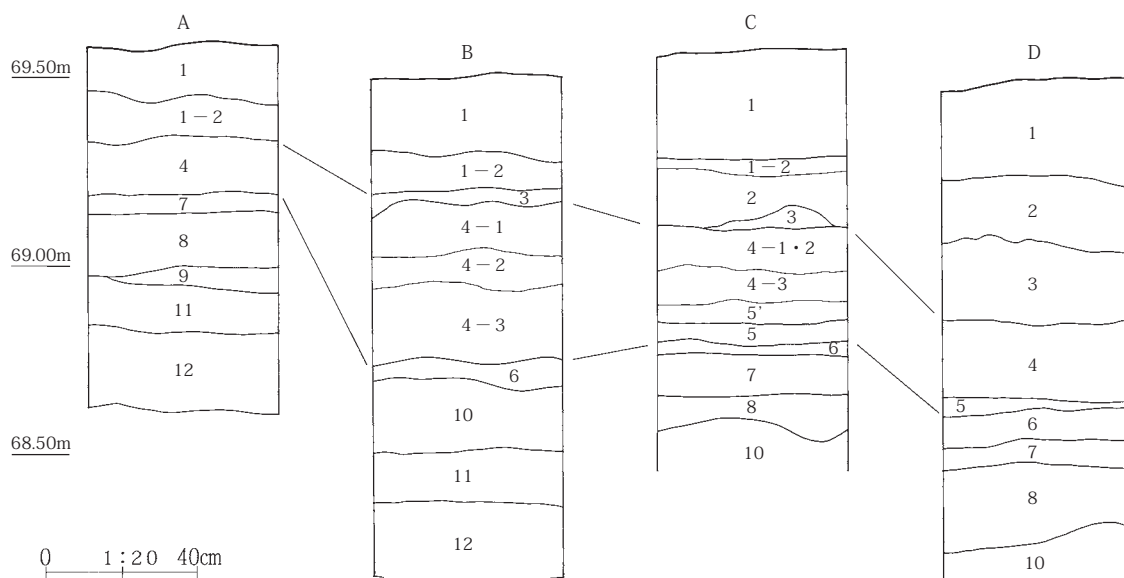
【2層】褐灰色土層 As-A直下に見られる洪水による堆積土を主体とする層である。水田耕土としてはやや砂質だが、斑鉄層が見られる部分が多い。

【3層】黄灰色土層 数次にわたる洪水堆積層で、2層よりさらに砂質である。粘性土ブロックやパミスなどの混入物が多い。調査地点によって混入物の差により層相差の大きな層でもある。

【4層】暗褐色・褐色土層 調査担当者が「B混」と通称する、浅間B軽石の混じる弱粘性の土層である。上位ほどB軽石の密度は低くなり、上から4-1層・4-2層・4-3層と細分した地点もある。

【5層】As-B（浅間B軽石）層 1108（天仁元）年の浅間山噴火による一次堆積テフラ層である。1a区の南側や1b区の一部、2区西隅などに部分的に見られ、この層下では水田が確認できる場合が多い。純層ではないが、テフラ密度の高い部分を5'とした。

【6層】黒褐色土層 B軽石下の水田下で見られる粘性土層。水田耕土と思われるが斑鉄層などは不明瞭。水田が確認できなかった地点でも広く見られる。



第7図 基本土層図

【7層】青灰色・褐灰色土層 古墳時代、榛名山二ツ岳の二度の噴火に伴って発生した泥流堆積層と考えられる。微高地状の高まり部分を除き、調査範囲のほぼ全域で確認されている。

【8層】黒色土層 弥生時代末から古墳時代初頭にかけての浅間山噴火に伴うC軽石の混入する土層で、調査担当者は「C黒」と通称する。本遺跡のこの土にはC軽石の混入はあまり多くなく、As - YP等その他のパミスの混入も見られる。

【9層】黒色・黒褐色土層 C軽石を伴わない粘性土層で、地点によって層相に差が大きい。

【10層】黄褐色・灰褐色土層 二次堆積ローム。

【11層】浅間板鼻黄色テフラ (As - YP)層 還元して灰色味が強くなっている。

【12層】黒褐色・褐灰色粘性土層 還元したローム土。1区大溝の底部付近では、この層下の前橋泥流層が観察できる。

(2) 遺構の概要

齊田竹之内遺跡の調査では、数次にわたる氾濫の影響を受けた複数面の文化層があり、ここでも福島飯玉遺跡の調査面呼称を基本的に継承し、異なる点については併せて記した。

【第1面】発掘調査時には、天明三(1783)年の浅間山噴火による降下軽石層(As - A)を鍵層として最上面の遺構を確認した。この面にはAs - A層を挟んで2つの面があった。一つはAs - Aを直接被覆した面である(軽石を除去した面でも、火山灰が観察できる場合が多い)。もう一つが軽石を耕作土内に埋める復旧目的の溝や、As - A層の上から耕作した跡など、軽石降下後の痕跡である。同一調査面で確認した両者を整理段階で分類し、As - A降下後に築かれた遺構を第1面とした。軽石を除去した畦や空き地は両方の面に共通するものが多く、水田や畠の一部にも両方の面で確認できるものがある。

【第2面】最上面の調査面のうち、As - Aに直接被覆された面と、軽石降下に先行するがこの調査面で確認可能であったサク跡を扱った。厚いAs - A層が見られることはなく、降下テフラの最下部の火山灰の存在で、第2面を判断することが多い。福島飯玉遺跡で1面と一括して扱ったものを、本書では2時期に分けた。

【第3面】発掘調査時2面としたのは、遺跡全体を覆う

最上面の洪水層土を除去した面である。この洪水層は比較的深く、除去の途中で確認できた遺構を第3面として扱った。時期を特定する資料をもたないが、玉村パイパスに関連した遺跡では広範囲に確認される洪水層で、重複が多く数次の文化層からなる。2区の溝には該期の重複が確認できる。中世館跡が埋没した後に見られる施設で、主に江戸時代の洪水層に埋もれた遺構と考えられる。

【第4面】発掘調査時2面は、前述の洪水層を除去し、基本土層4層上で確認した面である。このうち、洪水層土を埋没土とする遺構、および墓坑など中世館内が最も盛んに使用されていた時期(第5面)以降の施設と考えられる遺構を第4面として扱った。

【第5面】発掘調査時2面のうち、洪水層土を埋没土としない、主に中世の方形館に関連すると考えられるピット・土坑・井戸などの遺構を扱った。ただし溝のような後世まで使われる遺構は開削時期を推定して、洪水砂を埋没土の主体とする施設でも第5面として扱ったものが多い。調査範囲全体で最も広く、多数の遺構が確認された面である。

【第6面】発掘調査時3面とした調査成果で、天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴う降下軽石層(As - B)直下の遺構を扱った。1a区・1b区・2b区の水田があたる。周辺の遺跡でも広く確認されている面であるが、本遺跡ではあまり明瞭なものではなかった。福島飯玉遺跡の第7面にあたる。

【第7面】発掘調査時4面にあたり、第6面より下位の遺構をすべて7面とした。周辺の遺跡では5世紀末から6世紀にかけての榛名山噴火に伴う火山灰や泥流下(福島飯玉遺跡第8面)、および3世紀末から4世紀にかけてと推測される浅間山噴火に伴うテフラ(As - C)を鋤き込んだ水田を部分的に調査しているが、本遺跡では古墳時代の水田は確認できていない。かわりに古墳時代初頭から平安時代にかけての住居・井戸・土坑などを1区北西側や2区南東側で部分的に調査している。

なお、縄文時代・弥生時代の遺物はわずかに出土しているが、遺構は確認されていない。

2 第1面・2面の調査

(1) 概要

本項では発掘調査時に、天明三年（1783）降下の浅間A軽石を鍵層として確認した最上面調査面のうち、第1面のA軽石降下後の遺構と、A軽石除去面で確認できる第2面について扱う。

A軽石（As - A）層は1b区を除いた調査区で確認できた。A軽石降下後の主な第1面遺構には、軽石を鋤き込んだ畠耕作痕や転地返しにより軽石を埋めた復旧痕跡がある。一方、軽石を除去したのみで復旧した田や畠ではA軽石降下面にあたる第2面をそのまま軽石降下後にも使用しているため、第1面と同一である。第8図に1a区・第9図に2区の第1面遺構の概略を示したが、第2面以前と共通する部分について、図中の線をハーフトーンにして表した。また第2面については第30図に1区・第31図に2区の概略を記した。

1a区では中世から続く水路の跡が窪地として残り、地元では鯉沢【こいざわ】と呼ばれ、近年までそのまま水路として使用されている。中世面では大溝と呼んだが、調査時には出土遺物を分けることを試み0号溝とした。この0号溝部分の輪郭を捉えることはできなかった。A軽石復旧溝はこの水路に隣接した地点では確認されていない。

2区でも水路（第3面15号溝の上側）が調査区北側をクランク状に流下していた。この溝も頻繁に改修が行われ、1面遺構としての規模は把握できていない。2区では15号溝に近接した地点で復旧溝が顕著である。この復旧は水田面での操作であったと思われるが田面そのものは不明瞭であった。2a区では畦脇の窪みと思われる溝にA軽石の堆積が明瞭に見られた。

(2) 復旧溝（サク状）

浅間A軽石をサク状に掘り下げた溝の中に埋め、転地返しを行った連続する溝群からなる痕跡を復旧溝と呼んだ。残存状態が良ければ、復旧溝上に築いた田や畠の下から確認される遺構だが、後世の耕作や圃場整備事業によって失われ、復旧直後の上面耕作土を抽出することはできなかった。平面図上では畠耕作痕に近似した形態をとるものが多いが、以下の観点で畠と区別した。

①A軽石を直接被覆した水田や畠には、軽石に先行して降下した火山灰が認められるが、復旧溝にはこれがない。②復旧溝では埋没土中の軽石の量が多く、ブロック状に混入する機会が多い。

③サクとサクの間隔が狭く、畝に相当する部分がほとんどないことも特徴である。

本遺跡では1b区を除く各区で観察できた。分布は2区では水路に近接した低い地点で集中して見られた。1区では対照的に大溝に近接した地点では確認できず、微高地上に偏る異なった傾向がある。

1号復旧溝（第8図 PL-1②）

1a区北西隅の31A-1グリッドから40R-1グリッドにかけて見られる南北走向の復旧溝であるが、南側ほど不明瞭である。サク内は埋没土中のA軽石の密度が高く、北隅が直線的に揃っており、その下に直交する第2面の畦跡らしい高まりが見られた。残存状態はあまり良くないが、畦畔に接する部分と考え水田復旧痕跡と推定した。サクは最大で全長10.1mあるが深さは2cm前後の不明瞭な個所が多い。北隅のみ幅45cm前後、深さ12～15cmの明瞭なサク痕であった。この部分ではサクとサクがほとんど隙間なく掘り込まれていた。

2号復旧溝（第8・10図 PL-1③）

1a区中央北側の大規模な南北走向の復旧溝で、残存状態は良い。確認できた範囲では30T-12グリッド付近を中心とし、北側は調査区域外となる。グリッドのTラインに沿って東西走向の幅80cmの空白部分があり、ここに畦畔もしくは道があったと想定される。周囲にも畦状の高まりがあり、この復旧溝も水田の復旧痕跡と考えたい。サクの最大長が北側で6.5m、南側で16.3mを測る。走向はN-2°E前後である。溝幅は30～45cmで本遺跡内では幅の広い復旧溝である。また、南北両側のサクに規模の差はほとんど認められない。深さは3～10cmあり、埋没土はA軽石の多い砂質土であった。復旧溝全体では15.3mの東西幅がある。

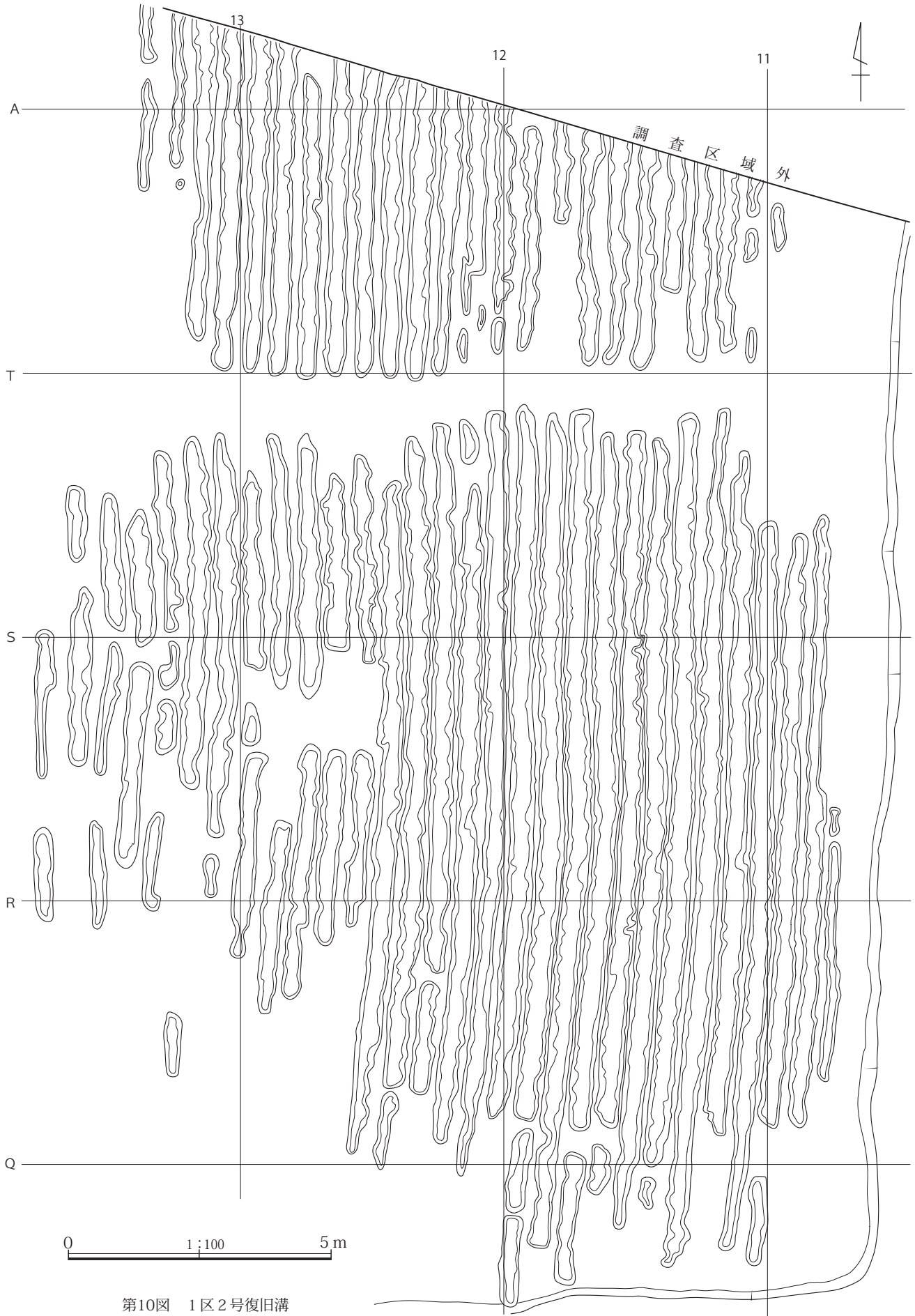
この復旧溝下から東西走向サクの5号西畠が確認できる（第30図参照）。5号西畠は水田耕土内の耕作痕の可能性もあるが、畠であれば、この地点は天明三年の浅間山噴火前後に畠から田へ変更したことになる。



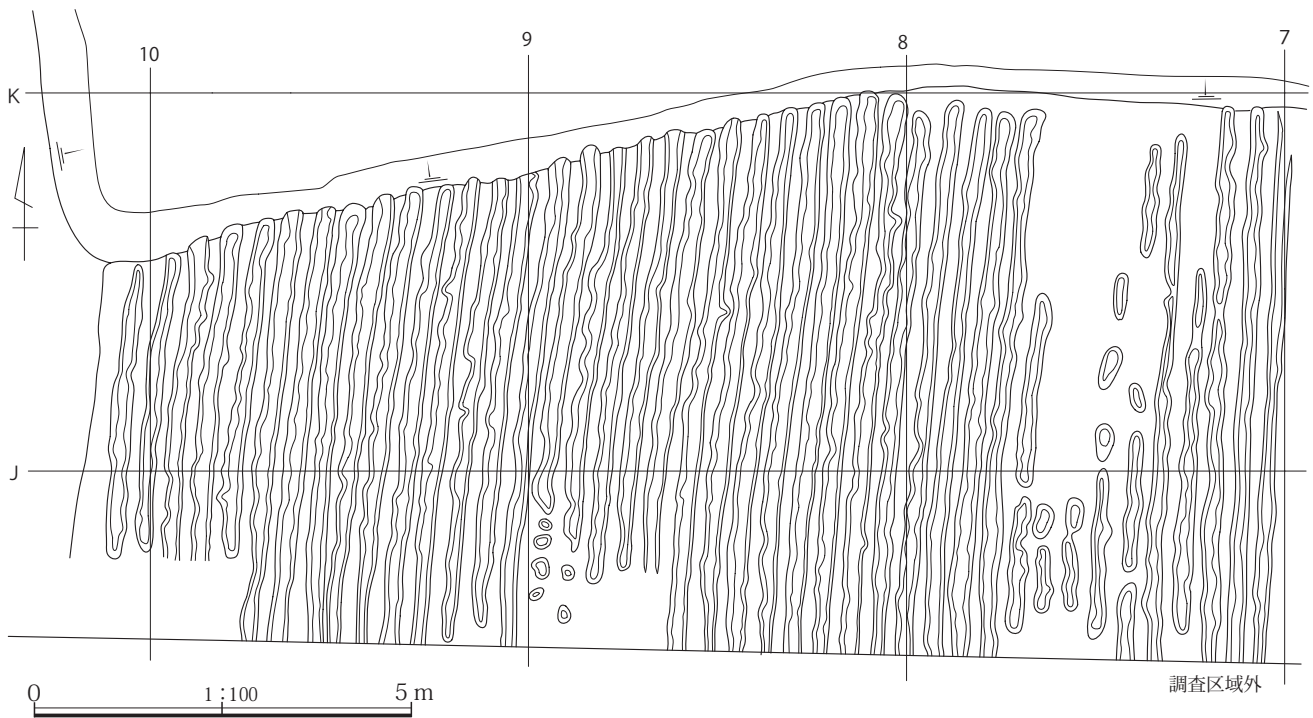
第8図 1 a 区第 1 面の遺構



II 発掘調査の記録



第10図 1区2号復旧溝



第11図 1区3号復旧溝

3号復旧溝 (第8・11・18図 PL-1④⑤・33)

1a区東寄り南隅の南北走向の復旧溝である。確認できた範囲では30 K-8グリッド付近が中心で、南側は調査区域外となっている。北・西側を畦畔に接し、水田に対する復旧痕跡と思われる。特に北側縁部は畦畔脇まで隙間なく溝が穿たれている。溝は最長7.3mを測るが、幅は16~28cmと他の復旧溝に比べ細くなっている。走向はN-5°E前後である。復旧溝全体では15.4mの東西幅があり、2号復旧溝と近似した規模である。

本復旧溝の東側部分では下面から6号島の東西サクが確認されている。これも2号復旧溝と共通する点である。出土遺物のうち陶器片と鉄製農具(鎌)各1点を図示した。他に土師器1片の混入と陶磁器18片・軟質陶器6片の出土がある。

4号復旧溝 (第9・12図 PL-3②~④)

2区北東側の15号溝の南側で東西方向に長く伸びた復旧溝である。この部分は18号溝上面の窪地にあたる。41C-5グリッドからC-16グリッドにかけて長さ約54m、幅4~5mの規模がある。走向はN-80~84°E付近が中心となっている。

残存状態が良く、耕具痕が明瞭に観察される(第12図)。1本の溝は幅25cm前後で、重複が見られない。耕具痕の切っ先側が交互に入れ替わっている事が分かる。

鍬を使って溝を切っては軽石を埋め、隙間なく東西交互に行き来して隙間なく天地返しを行った痕跡であろう。

各溝は途中で途切れることがなく、水田畦畔の痕跡を見ることはできない。溝群の南側部分には水田畦畔脇の溝と想定される南北走向の溝(2区3・7号溝)が、本復旧溝の直前で止まっている。本復旧溝とこれらの間には畦畔があり、次に扱う5号復旧溝との隙間にあたるものとする。

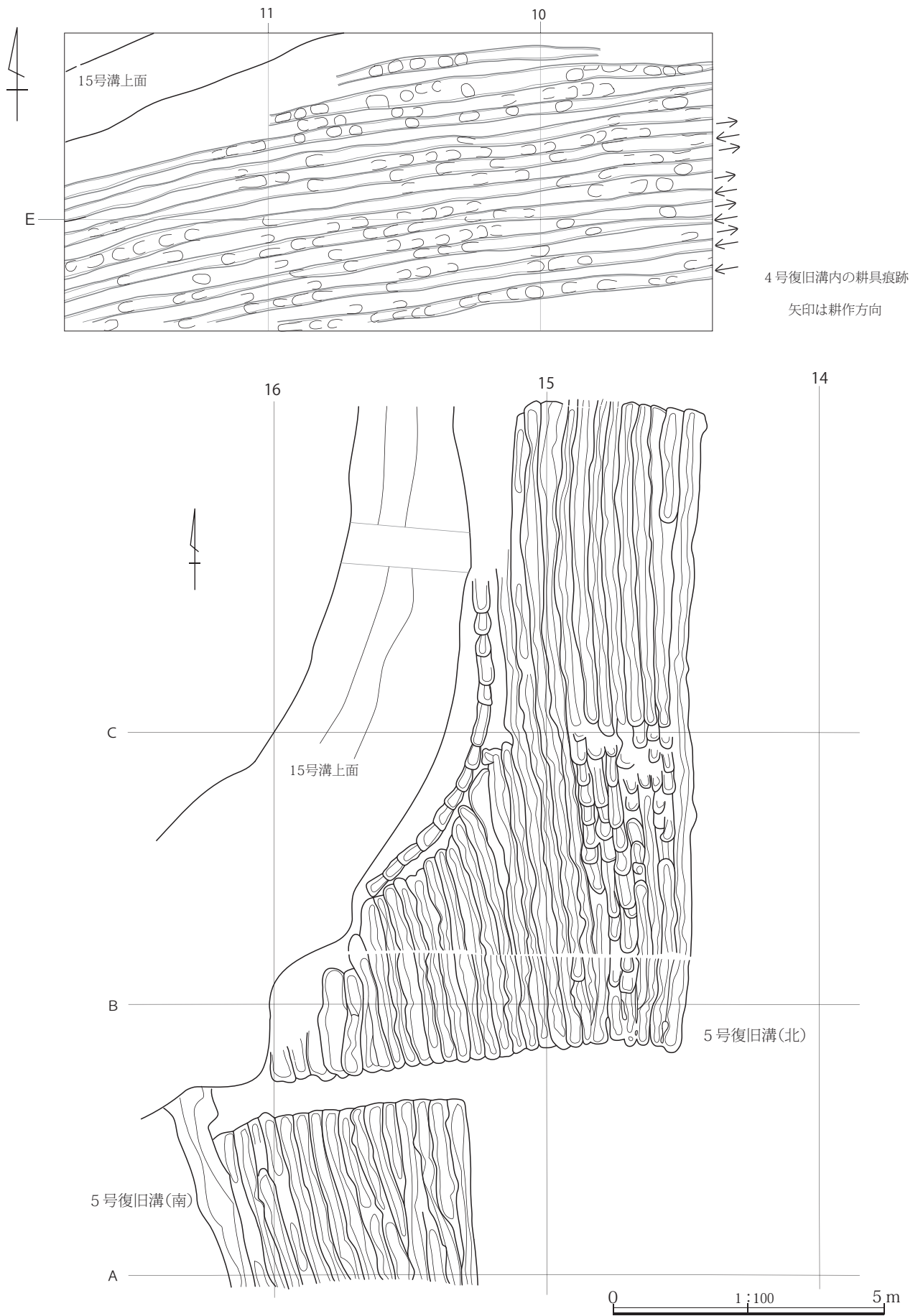
5号復旧溝 (第9・12図 PL-3⑤)

2区のほぼ中央、31C-16グリッド周辺が中心にある南北走向の復旧溝である。西から東へ流れる15号溝が北側に屈曲する地点から東方へ帯状に伸びる畦畔跡と思われる隙間を挟んで南北2地点に広がっている。

北側は41C-16グリッドから40T-16グリッドにかけての長さ約12m、幅は最も広い南隅で約7m、狭い北隅で約4.3mの規模である。走向はN-0°からN-15°Wまでと差が大きい。個々の溝は上端が乱雑に重なり隙間がない。幅は25~40cm、深さ5cm前後である。4号復旧溝同様に耕具痕が鮮明に確認できる部分がある。

南側は40T-16グリッドからP-16グリッドにかけての長さ約15m、幅は最も広い北隅で約5m、狭い南隅で約1mの規模である。個々の溝は北側の溝と同規模である。また、北側同様に溝間の隙間がない。

II 発掘調査の記録



第12図 (上) 2区4号・(下) 5号復旧溝

(3) 畦畔下復旧坑 (第8・13図 PL-4)

大溝の西側にある南北に長い水田畦畔内(水田の項でi畦として扱う)では、土坑状に連続して掘り下げた窪みにA軽石を埋めた復旧痕跡が、41区B-18グリッドから30区N-17グリッドにかけて約40mの長さで確認されている。北隅は調査区境にあり、北側へさらに広がるはずである。土坑状の個々の窪みは南北径が90~110cmの規模がある。東側が削平されていて東西径は計測できないが南北径と同規模と思われる。東側田面からの深さは20cm前後で、平面の大きさに比してあまり深くない。底面や壁面には明瞭ではないが耕具痕が確認できる。水田に対する降下軽石復旧作業の痕跡と考えるが本遺跡周辺には他に例がない。

降下軽石を耕作地に埋めて田畠を復旧するのは作物を放棄しないと難しい。畦畔内に埋めることは、軽石除去範囲は限定されるが作物育成中にできる作業である。

(4) 畠

1面で畠のサク跡として確認したものは、A軽石を鋤き込んだ耕作痕が多い。天明3年という上限年代は明確だが、下限を推定する根拠に乏しい。調査区の土層調査の際に、ここで扱う畠は、さらに上面畠跡サク内の土よりも軽石密度の高いことが確認でき、軽石降下からあまり間を置かない江戸時代の耕作痕であることには問題ないと考える。なお、1a区1号畠と2b区9号畠(PL-3⑧)は明治以降と想定した耕作痕で、本報告では除外した。4・6~8号畠は第2面の遺構である。

2号畠 (第8・14図 PL-1⑥⑦・2①)

1a区南西隅、30M-17グリッド付近を中心に、東西サクが並ぶ畠である。サクは長さ7.5m前後で、南北14.1mの幅に繋がり、走向はN-81°E前後となる。サクとサクの間隔は20cm以下の部分が大半で、畠としてはやや狭い。底面は耕具痕と思われる不明瞭な凹凸がある。埋没土にA軽石の混入があるが、サク底面にAs-Aに伴う火山灰は観察できない。A軽石はサク内の北寄りに多く見られるようだ。

微細な遺物の混入が多く、陶器片18片、焙烙3片、土師器の混入2片が出土している。

3号畠は2号畠の15m以上北側の30Q-18グリッ

ド以北8mほどの範囲に部分的に観察できるサク跡である。2号畠に近い東西幅があり、2号畠から続く遺構と考えられる。

4号畠 (第30図 PL-2⑦)

1a区西隅、40O-1グリッド付近を中心とするA軽石降下前の第2面畠である。西側は調査区域外となる。周辺をA軽石降下後の浅い『コ』の字状の削平があり、その間に取り残されるように畠跡が確認できた。確認できた範囲は南北約20m、東西最大8mの規模である。

東西方向にサクの切られた畠で、サク内部にA軽石は見られない。深さは北側4~9cm、南側3~11cmで南側に深いサク跡が多い。サクの幅は20cm前後、サク間は10cm未満の場所がほとんどで、間隔が狭く2時期のサク跡が交互に表れていることも考えられる。遺物の出土はなく時期決定の根拠はないが、確認された面が高く、A軽石降下前の比較的新しい時期の畠痕跡と考えたい。

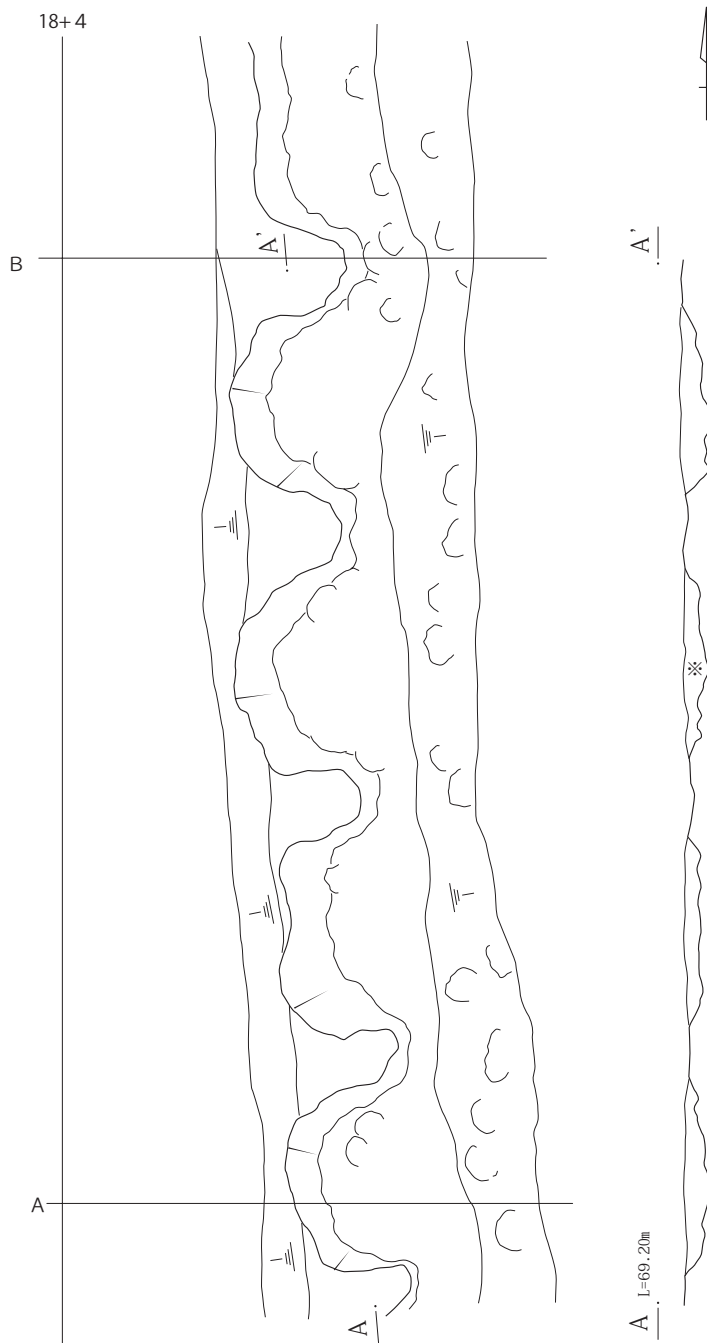
5号畠 (第8・30図 PL-2③・④・33)

2号復旧溝の東側に隣接する、30R-8グリッド付近を中心とする東西走向のサク跡である。北側は調査区域外となる。発掘調査では一気に掘り下げてしまったが、断面の観察から、軽石降下以降の畠下に、降下前のサク跡が残っていたことが分かった。この部分を5号東畠、2号復旧溝下部分を5号西畠とする(第8図と第30図を比較されたい)。東畠は第1面と第2面下まで跨るサク跡、西畠が第2面下のサク跡である。

東畠と西畠はともに畦畔状の高まりに囲まれたサク痕であり、両畠の間にも畦畔状の高まりがある。東畠は東西19m、南北16m以上の規模がある。西畠は東西15m、南北15m以上の規模があるが、北隅は不明瞭になる。サクの走向は両方ともN-90°前後となる。深さは西畠が12cm前後、東畠西側で8cm前後、東畠東側で5cm前後の部分が多い。サクの幅は35~40cm、サク間は西畠で25cm前後、東畠で10cm前後である。周囲に畦畔があり水田の耕作痕と捉えたいが、稲作休耕期に畠作を行った痕跡となる可能性もある。

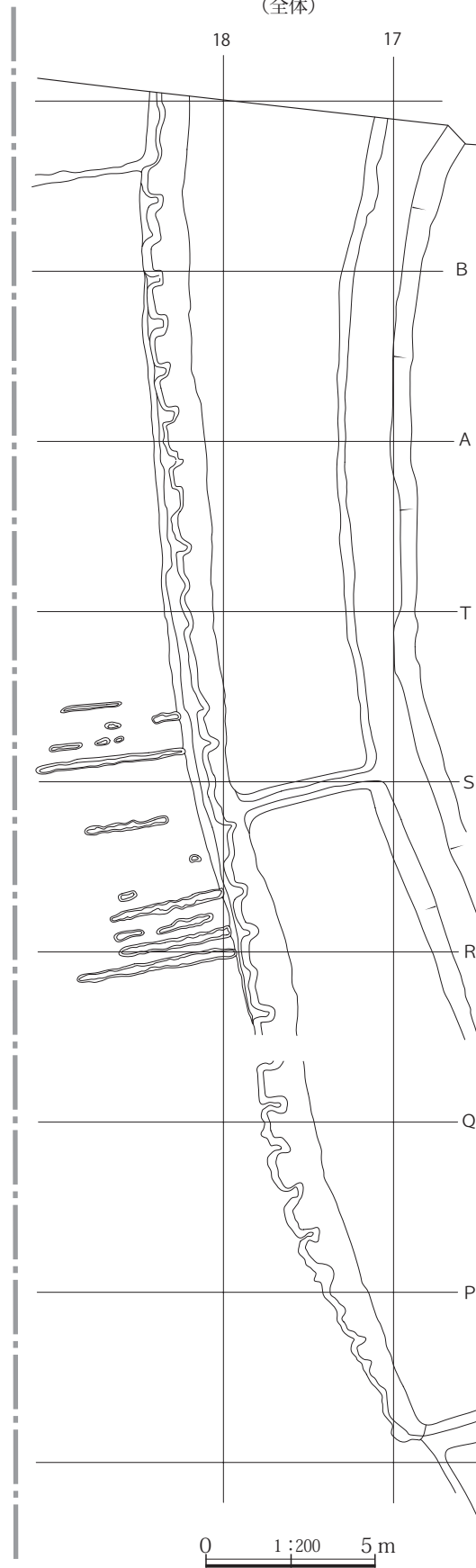
出土遺物は畠跡としては多かった。陶器類2点、火打ち石と思われる礫1点を図示した。他に土師器34片の混入と陶磁器類46片・軟質陶器51片の出土がある。

(部分 詳細および断面)

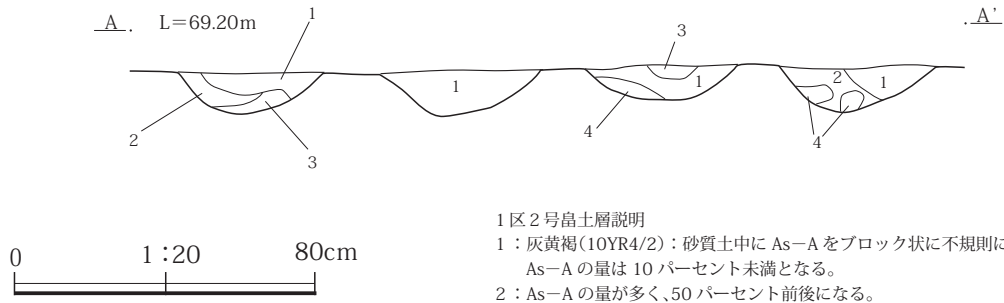


1区畦畔下復旧坑土層説明
 褐灰色のAs-A主体の層。ブロック状の火山灰も見られ、降下直後のパミス
 を寄せ集めたもの。地山は灰黄褐色のやや砂質土で、As-Aは全く見られない。

(全体)

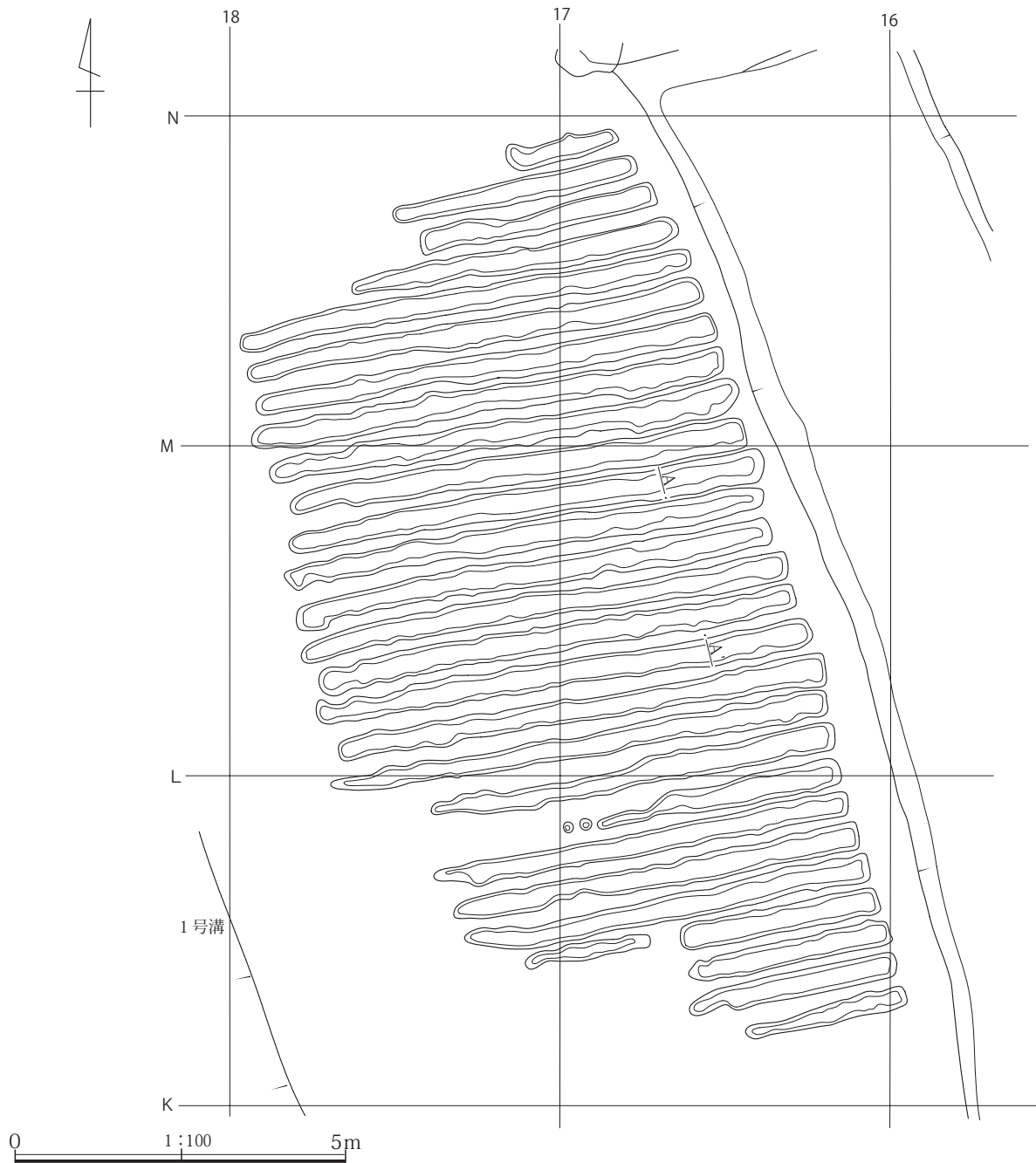


第13図 1区畦畔下復旧坑



1区2号畠土層説明

- 1: 灰黄褐(10YR4/2): 砂質土中に As-A をブロック状に不規則に混入する。
As-A の量は 10 パーセント未満となる。
- 2: As-A の量が多く、50 パーセント前後になる。
- 3: As-A のごく少ない、黒色味の強い土。
- 4: 黒褐色粘質土のブロック。



第14図 1区2号畠

6号畠 (第18・30図 PL-2⑤・33)

1a区南東隅の30K-7グリッド付近を中心とする地点で、南北走向の3号復旧溝の下から確認した東西走向のサク跡である。深さ2~5cmの浅く不明瞭な遺構で、埋没土は灰黄褐色の砂質土でA軽石の混入は見られなかった。サクは西側が揃っていて畠の隅が捉えられるが、東側は不明瞭になる。サクの規模は最大7.85mの長さがあり、幅は14~29cm、走向N-86°W前後であった。サク間は7~22cmで一定ではない。

出土遺物のうち鉄製品(釘か)2点を図示した。微細な遺物の出土に、陶片5点、軟質陶器4片、カワラケ2片の他、土師器・須恵器の混入2片がある。

7号畠 (第31図 PL-3⑥)

2区中央の40T-15グリッド付近を中心とする南北方向のサク跡である。北隅は明瞭で6号溝直前で止まっており、南隅は不明瞭だが7号溝の延長部分で止まると想定される。畠の範囲は東西10.9m南北13.3m、サクの長さは最大で10.8m、幅35cm前後、深さは5~6cmの部分が多い。サク間は25cm前後でほぼ均等である。走向はN-1°W前後である。

埋没土はB軽石混じりの砂質土で2面の遺構である。陶磁器と軟質陶器小片が1片ずつ出土している。

8号畠 (第31図 PL-3⑦)

2区北西寄りの31D-19グリッド付近を中心とする南北方向のサク跡である。サクの間隔のきわめて狭い8号東畠と、規模の小さな8号西畠の2地点があり、別の畠と思われる。

東畠はA軽石の混じる埋没土の2b区6号溝から90cm西側以西で確認できる。この溝が畦畔脇の窪みであれば西畠と同溝との間に畦畔があった可能性も考えられる。東畠は東西幅7.8mで両端が明確に捉えられ、南北幅6.5mである。サク幅38~53cm、深さ6~11cm前後の部分が多い。走向はN-86°W前後である。東畠のサク内の埋没土はB軽石混じりの砂質土で、上面にA軽石混じりの土が所々で見られた。天明3年のA軽石降下後の耕作痕が部分的に見られるようだ。

西畠は東畠から1.7m離れた地点から確認できる。サクは長さが最大で3.2m、幅30cm前後、深さ2~5

cmである。サクの走向は東畠よりわずかに北に振れ、ほぼN-90°である。広い畠の一部分のみ確認できたものであろう。西畠にはA軽石の混入は見られない。

出土遺物には陶磁器3片のほか、土師器4片の混入があった。

(5) 水田

1b区を除く各区で畦畔を伴った田面もしくは畦畔脇の溝から復元できる水田を確認している。1a区ではAs-A直下の田面が確認できる。1面(第8図)と2面(第30図)でわずかな差が見られる。

水田区画や畦畔規模を計測するための田面や畦畔番号を第15図に示した。畦畔にはグリッド呼称との混乱を避け東西方向に算用数字、南北方向にアルファベット小文字を用いた。田面には丸で囲った算用数字を用いた。

・1区の水田(第15・30図 PL-5①~④)

第2面の区画をほとんどの地点で踏襲している。1a区では東寄りで畦畔の変更が認められた。大溝の北側では5号畠下位面に4畦が確認できる。大溝南側でも1面では確認できない2畦やb畦、およびc'畦脇の窪みなどを2面の遺構とした。

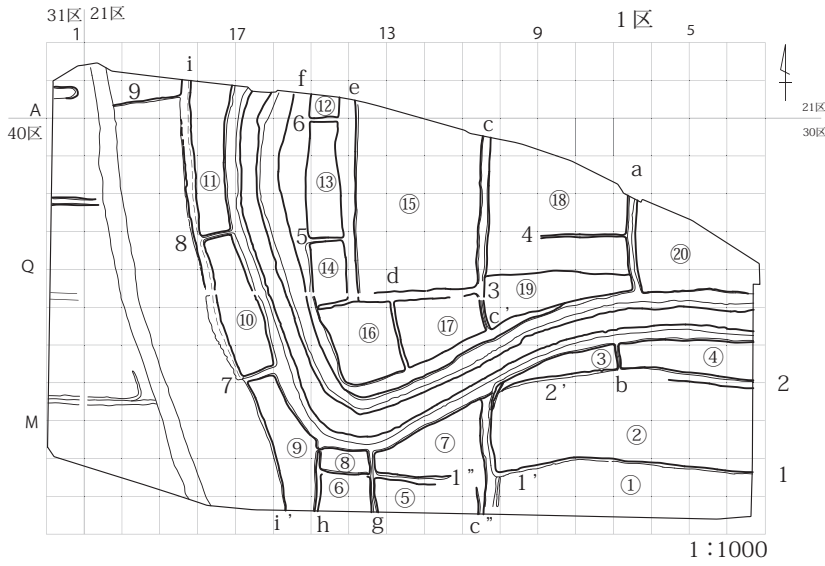
畦の中には1畦・9畦のように田面の段差部分としてのみ把握できる(調査担当者間で片畦と呼称されることのある)畦畔痕跡も含まれる。

南北畦畔のうち最も規模の大きなものがc-c'畦であり大溝跡にある用水路を跨いだ両側で確認できる。As-B下の平安時代水田の大畦はグリッドの11ラインからわずかに西側にあり、c畦は東へ約5m移動した位置にある。古代の水田区画が江戸時代まで継承されず、若干離れた地点に移動していることが分かる。

水田区画が用水路周辺の標高のやや低い地点で細かくなっているのは、微高地部分(⑩など)では後世の耕作により削平が及んだため、本来はさらに細かな区画だったと思われる。

・2区の水田(区画溝)(第15・31図)

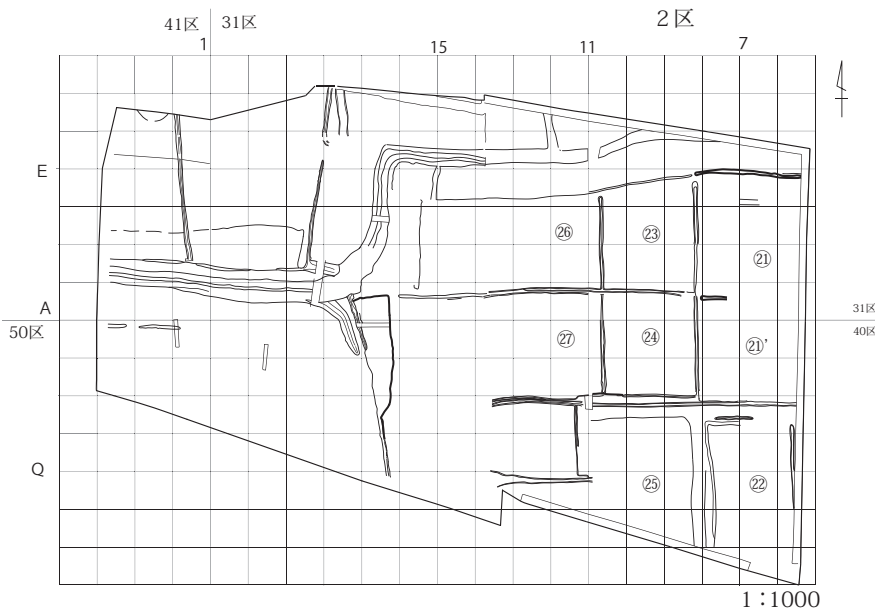
2区東側ではクランク状に屈曲する15号溝の南東側で、広い範囲に方形区画を作る小規模な溝が見られた。直接田面は確認できていないが、水田区画に関連する施



第3-1表 第2面水田面積計測表

No	標高 (m)	面積 (㎡)
①	68.97	[224.7]
②	68.68	[390.8]
③	68.69	34.1
④	68.61	[72.6]
⑤	68.97	[58.8]
⑥	68.95	[32.5]
⑦	68.92	91.2
⑧	68.93	17.6
⑨	68.92	[77.85]
⑩	68.89	88.8
⑪	68.88	[74.0]
⑫	68.96	[11.1]
⑬	68.97	65.5
⑭	68.85	37.6
⑮	69.02	
⑯	68.78	88.4
⑰	68.79	78.8
⑱	68.88	
⑲	68.64	81.6
⑳	68.71	[136.0]
㉑	(69.21)	
㉑'	(69.25)	
㉒	(69.19)	[257.5]
㉓	(69.22)	165.1
㉔	(69.28)	152.2
㉕	(69.21)	[254.5]
㉖	(69.24)	
㉗	(69.25)	

() 内の標高は As - A 直下より下位



第15図 第1・2面水田略図

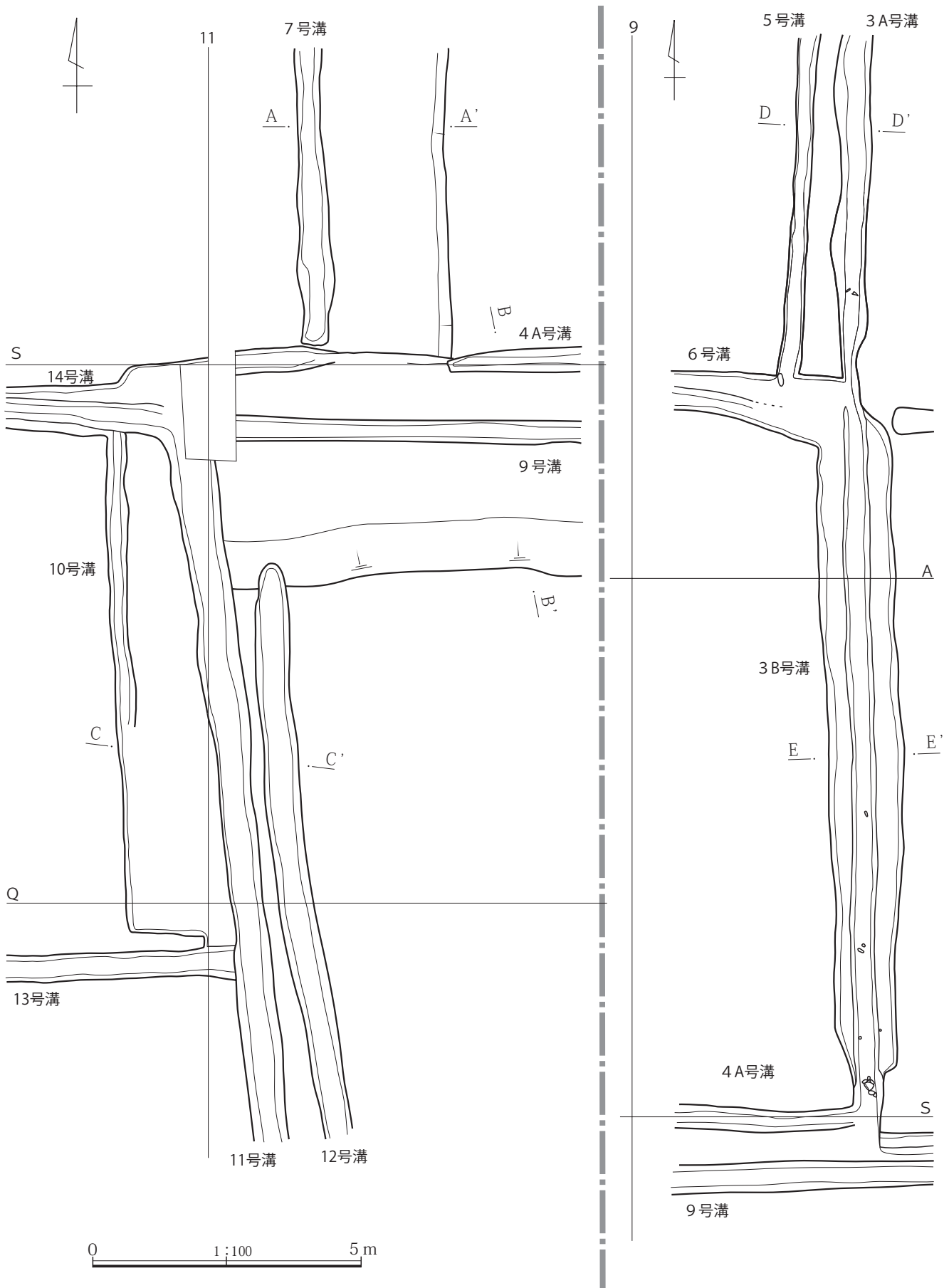
第3-2表 第2面水田南北畦畔計測表

No	軸方向	長さ (m)	幅 (cm)	高さ (cm)
a	N-2°W	15.25	113 ~ 119	22.0
a'	N-17°W	2.68	107	15.0
b	N-6°E	3.52	44 ~ 56	9.0
c	N-2°E	20.40	125 ~ 150	13.0
c'	N-15°W	3.80	55 ~ 70	15.0
c''	N-4°W	14.52	140 ~ 153	15.0
d	N-14°W	9.20	36 ~ 55	1.0
e	N-3°W	26.95	125 ~ 271	5.0
f	N-1°W	28.12		4.0
g	N-6°W	8.10	60 ~ 75	4.0
h	N-1°E	8.09	60 ~ 81	1.0
i	N-11 ~ 18°E	40.5	113 ~ 158	17.0
i'	N-12 ~ 23°E	18.15		11.0

第3-3表 第2面水田東西畦畔計測表

No	軸方向	長さ (m)	幅 (cm)	高さ (cm)
1	N-85°W	24.45		13.0
1'	N-79°E	10.45		15.0
1''	N-76°W	[17.40]	78 ~ 109	8.0
2	N-84°W	17.85	120	10.0
2'	N-82°E	16.10		5.0
3	N-86°E	15.15	112 ~ 123	13.0
3'	N-89°E	4.18	55	0
4	N-89°E		34	2.0
5	N-87°E	4.46	38 ~ 67	6.0
6	N-89°E	3.68	47 ~ 65	0
7	N-70°E	4.11	87 ~ 135	13
8	N-75°E	4.14	63	6.0
9	N-82°E	8.63		14.0

II 発掘調査の記録



第16図 2 a区 第1・2面の溝

設と考えられる。

純層に近いA軽石が底面付近まで充填される第1面の遺構には2～4・7・10号溝の5条がある。軽石降下後の早い時期に溝に埋められたものと推測する。北側はA軽石を鋤き込んだ4号復旧溝の直前で止まっている。調査段階では畦脇の溝部分に軽石を埋めたものと推測したようだが、底面に火山灰の堆積が見られず、畦下の復旧痕の可能性も検討すべきと考える。

・第1面の溝（2～4・7・10号溝）

2号溝（第9図）

位置 調査区東境にかかり不明な部分が多い。北隅は40R-5グリッドで途切れ、南側は400-5グリッドより先で不明になる。

形状規模 南北走向の細い直線溝である。全長11.2m、幅46～54cm、確認面からの深さ12～15cmを測る。底面レベルはほぼ水平である。

方位 N-2°W

埋没土 純層に近いA軽石が充填されている。

備考 遺物の出土はない。

3号溝（第9・16・19図 PL-4④⑤）

位置 40S-8グリッドで4号溝から分岐して北へ向かい、31D-8グリッドで途切れる。

形状規模 南北方向のほぼ直線溝である。断面はU字状で底面は比較的平坦である。全長28.1mを測るが、6号溝を挟んでレベルに差があり北側15.0m部分（3A号溝）と南側13.1m部分（3B号溝）に分けた。3A号溝はごくわずかに北へ向かって低くなり、南隅と3cmの比高差がある。幅は60cm前後である。3B号溝北端は3A号溝南端より10cm低い段が生じている。3B号溝でも北へ向かって低くなる傾向があり、南端と北端で7cmの比高差がある。3B号溝では上面に幅135cm前後の広範囲に掘り直しを行っている。

方位 N-0°を中心とする。A溝はやや東へ振れる。

埋没土 ブロック状のA軽石が不均等に混入する。

遺物 A B両地点併せて出土したのは軟質陶器片と須恵器甕混入破片の各1片のみである。

備考 2号溝の北側延長線よりほぼ12mの距離で平行に並ぶ位置にある。本溝南側にはA軽石混じりの窪地が続くが、溝の痕跡は確認できない。

4号溝（第9・16・19図）

位置 東端は40R-5グリッドの調査区東隅排水溝部分で確認され、40R-11グリッドで終わる。途中R・S-7グリッド付近で不明瞭な部分があり、ここから西側を4A号溝、東側を4B号溝とした。

形状規模 全体では東西方向にほぼ直線走向し、全長28.9mを測る。4A号溝部分は幅35～44cm、深さ13～17cmであるのに対し、4B号溝部分は幅最大50cmと幅広だが深さ3～9cmで不明瞭になる。底面のレベルは4A号溝がほぼ水平で、4B号溝では比高差6cmの細かな凹凸がある。4A号溝南側には幅3.8m前後、深さ10cm前後の本溝に後出する窪地がある。4B号溝南にも同様の窪地があるようだが、東側ほど不明瞭になる。

方位 N-87°W

埋没土 純層に近いA軽石が充填されている。

備考 出土遺物はない。

7号溝（第9・16・19図 PL-4）

位置 南端は40S-10グリッド、北端は31D-10グリッドにある。3号溝の西側12mの地点に平行している。

形状規模 南北走向の直線溝である。全長23.9m、幅、37～54cm、深さ9～17cmを測る。底面のレベルは緩やかに波打つような比高差3cmほどの凹凸があり、一定方向へ傾斜するような傾向は認められない。東西走向の6号溝を挟んだ南側では、東側に幅2.3m前後、深さ5～7cmの本溝に後出した窪地が認められる。

方位 N-1°W

埋没土 純層に近いA軽石が充填され、その上を東側の窪地が切っている。

遺物 小破片であるが陶器類7片、軟質陶器1片、古式土師器1片が出土している。

10号溝（第9・16・19図 PL-4⑦）

位置 北端は40R-11グリッドの4号溝末端部分を基点として南へ向かい、40Q-11グリッド付近で確認できなくなる。

形状規模 南北走向の直線溝で、確認できた範囲では全長7.0m、幅33～42cm、深さ9～13cmを測る。底面のレベルは緩やかな凹凸があり、5cmの比高差がある。本溝東側に4A号溝や7号溝同様の窪地がある。浅いう

II 発掘調査の記録

え重複する溝のため窪地東隅が不明確だが、幅 1.3 m 部分まで確認できる。7号溝東脇の窪地より狭そうである。

方位 N - 89° W

埋没土 純層に近いA軽石が充填され、その上を東側の窪地が切っているようだ。

備考 遺物出土はない。4A号溝が南側へ屈曲した先の、南側延長部分と考えられる。

・第2面の溝 A軽石を含まない5・6・9・11～14号溝の7条がある。A軽石を含む第1面溝に平行する溝がほとんどであり、A軽石降下後とほぼ同じ区画を作っていた畦畔脇の溝状施設と考える。

5号溝 (第16・18・19図)

位置 北端は31C-8グリッドにあり4号復旧溝の直前で止まっている。南端は31A-8グリッドで6号溝と交差する。3号溝の西側に並走し、同溝との距離は北隅で20cm、南隅で70cm前後である。

形状規模 直線的な南北走向の溝だが、東側へ若干膨らむように湾曲している。全長14.6m、幅32～43cm、深さ3～11cmを測る。底面レベルは凹凸があるが北へ低くなる傾向があり、南北両隅では9cmの比高差がある。

方位 N - 1° E

遺物 渡来銭を1枚出土している。他の遺物はない。

6号溝 (第16図)

位置 31A-10グリッドで1面3号溝から西側へ向かって分岐する。3号溝より東側では東西方向に切られた復旧溝で見えない。西隅は31A-16グリッドまで続く。

形状規模 東西溝で北側へ若干膨らむ。数次の掘り直しを行っている。5号溝に繋がる部分があるはずだが、区別できなかった。長さ39m以上の規模がある。

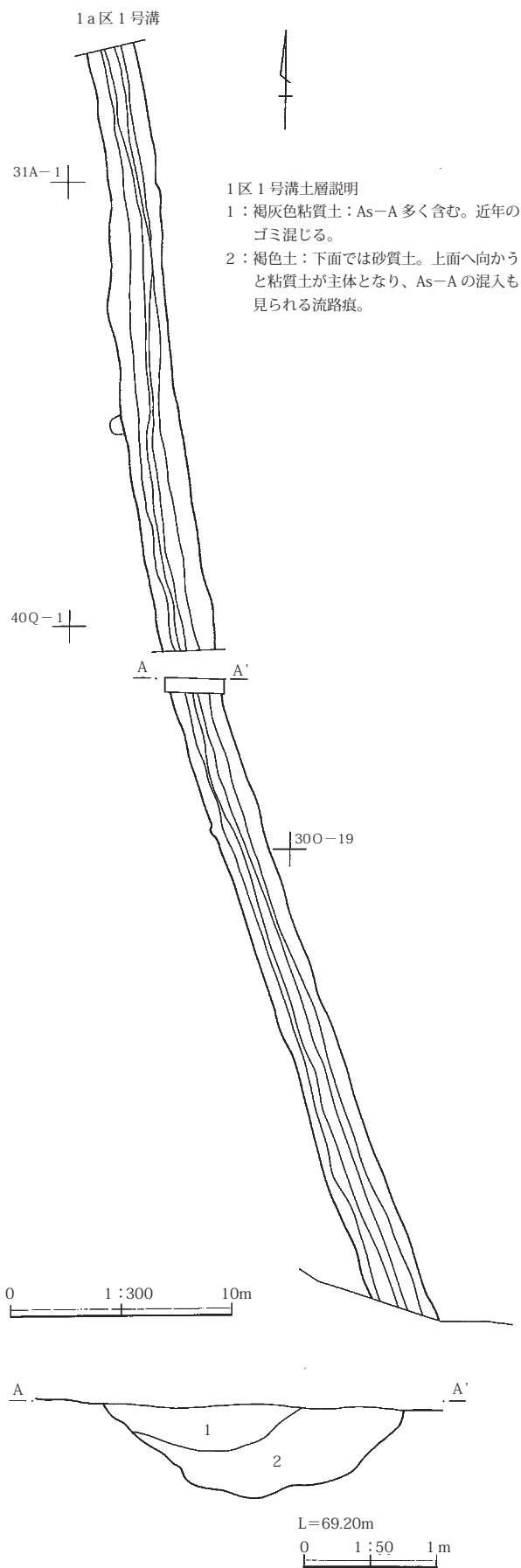
方位 N - 88° W

遺物 軟質陶器6片のほか、須恵器が1片混入していた。

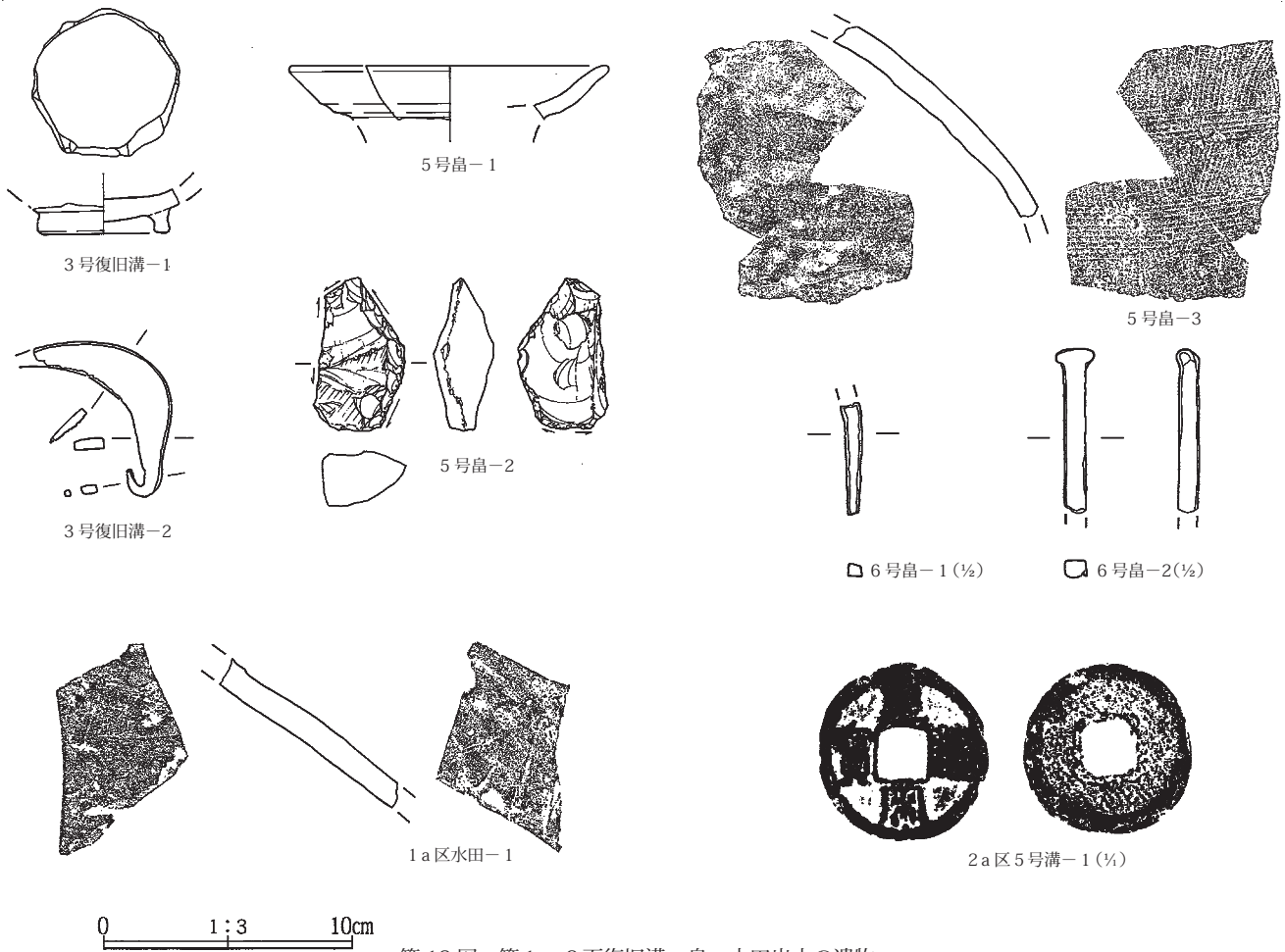
備考 1区の復旧溝は畦畔や溝部分は避けることが多かった。本溝東隅に復旧溝があることは、この部分まで溝が達していなかったと考えたい。

9号溝 (第16・19図)

位置 東側の大半がA軽石の混じる窪地下で確認できた



第17図 1区1号溝



第18図 第1・2面復旧溝・畠・水田出土の遺物

遺構である。東隅は40 R-5グリッドで調査区域外となる。西隅は2 b区境の40 R-13グリッドまで続く。6号溝の約14 m南側に平行している。1面4号溝の南に近接していて、4 B号溝部分ではほとんど接しており、4 A号溝部分からは50～85cm離れている。

形状規模 東側ではほぼ直線的で、西側では緩やかに南へ向かって曲がる。規模は全長で20.4 m、東側で幅80cm前後・深さ18cm前後、西側で幅35～40cm・深さ3～8cmを測る。底面レベルは西側から中央へ向かって10cmほど低くなり、中央から東側では4cm前後の緩やかな起伏を繰り返している。

方位 N-89°W

遺物 軟質陶器が2片出土している。

11号溝 (第16・19図)

位置 40 R-11グリッドで9号溝から南へ、直角より東方へ寄って分岐している。南隅は40 O-10グリッドで調査区域外となる。

重複 10号溝東側の窪地の下から確認された。

形状規模 直線的な南北溝である。全長14.8 m、幅65cm前後、深さは最も深い北寄り部分で20cmを測る。底面起伏は2cmほどで、ほぼ水平である。

方位 N-7°W 他の溝と比べ西側へ偏向している。

遺物 軟質陶器が3片出土している。

備考 本溝と12号溝が他の溝と比べ西方へ傾いている。

12号溝 (第16・19図)

位置 北隅は40 R-10グリッドのA軽石混じりの窪み部分より先が分からなくなる。南隅は40 O-10グリッドで調査区域外となる。11号溝の東側に近接しており、20～65cmの距離である。

形状規模 西側へ弱く湾曲している。全長12.7 m、幅は65cm前後である。深さは最大でも7cmで、底面レベルは近接する11号溝より10cm以上浅い。

方位 N-6°W

遺物 土師器が1片混入していたのみである。

13号溝 (第16図)

位置 40 R - 10 グリッドで11号溝から西側へ分岐する。西側へ向かって広く浅くなり、40 P - 13 グリッド付近から西は分からなくなる。

形状規模 底面は緩やかな凹凸があるが、全体では東へ低く傾斜している。全長 13.3 m、東側で幅 50cm 前後・深さ 8 cm、西隅で幅 2 m 前後・深さ 3 ~ 5 cm になる。

方位 N - 89° E **備考** 出土遺物はない。他の溝と形状が大きく異なるが、走向の差はほとんどない。

14号溝 (第16図)

位置 9号溝の北側に隣接する溝で東隅は 40 R - 11 グリッドで4号溝に重なる。断面の記録を欠くが、上面からの確認で9号溝に先出している。

形状規模 9号溝と同じように緩やかに屈曲している。確認できた範囲で全長 11.2 m、幅 26 ~ 35cm、深さ 6 ~ 8 cm を測る。底面は東へ低く、緩やかに傾斜している。

方位 N - 87° W

備考 出土遺物はない。12号溝が西方へ折れ、本溝と繋がる可能性がある。

(6) 水路

昭和 30 年代の土地改良事業で廃棄するまで使われていた用水路が 1 区・2 区とも確認される。これらの溝は明治 9 年の絵図に記され、発掘調査で天明 3 年に水路として使われていることが分かった。

1区の用水路

1 区では中世大溝跡の低地が農業用水路として近年まで使われていた。この用水路は氾濫の痕跡をなぞっており、鋭角に曲がっている。福島飯玉遺跡で中世・近世面の差を捉えられなかったことを踏まえ、発掘調査では近世部分を 0 号溝として大溝と区別し範囲確認に努めたが、埋没土は大溝から続く川砂で、近世部分を明確にできなかった。同様に 1 号溝が近年まで使用されていた用水路である。明治 9 年の絵地図で確認でき、開削時期は近世以前まで遡ることのできる溝である。

1区0号溝 (第19・20図 PL-5)

1 区大溝 (第 44 図) 上の近年まで水路として使われて

いた部分を指す。中世の掘削面ではなく氾濫の部分になぞるように、大溝屈曲部分では南側に大きく膨らんで曲がっていた。その反動のように断面図を描いた調査区東隅では北隅に流路が動いており、全体では大きく蛇行している。

大溝は中層以下では遺物の出土が少ないが、0号溝とした第1・2面部分のみ陶磁器類の出土がやや多かった。水路跡の出土遺物としては磨滅が少ないのが特徴で、水流に運ばれたものではなく、廃棄された遺物が中心と考えたい。明治以降の遺物も混じるが、9点を第20図(大溝)に示した。図示した以外にも72片の陶磁器、5片の軟質陶器類などが出土している。

1区1号溝 (第17・20・21図 PL-10・33)

1 区西側を北から南へやや湾曲するように流下する近年まで使われていた水路である。0号溝の南北走向部分の西側約 16 m 付近に同溝と平行するように走向している。1・2面の畠や水路がこの溝を境に途切れていることから、天明 3 年以前の江戸時代から続く溝と考える。

位置 南隅は 30 J - 17・18 グリッドで調査区境になり、北隅は 21 B - 20 グリッドで調査区境となる。

形状規模 調査できた範囲で全長 60.1 m、幅 2.6 m、深さ 91 ~ 101cm を測る。北隅に対し南隅の底面レベルは 10cm 前後の深さで、水路としては緩やかな傾斜である。西側に 11 号溝など浅い溝を伴っている。

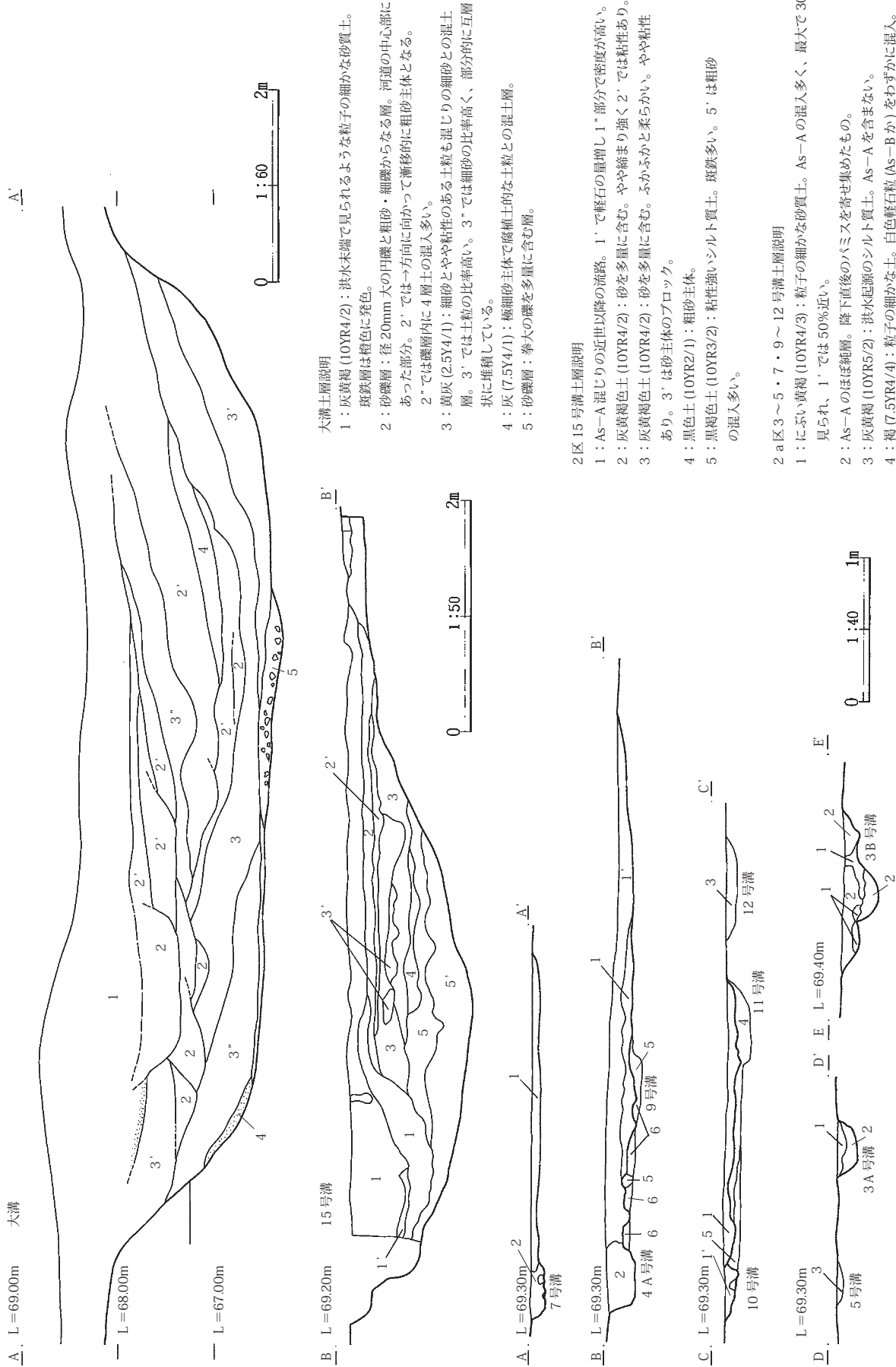
走向 北側で N - 11° W、南側で N - 16° W

遺物 上面での遺物出土が特に多く、第 20・21 図に示した。図示した以外にも 107 片の陶磁器類の他、26 片の軟質陶器が出土している。また土師器・須恵器 46 片や明治以降の陶磁器・瓦類も 130 片混入していた。磨滅した遺物が少ないことは 0 号溝と共通する。

2区の用水路

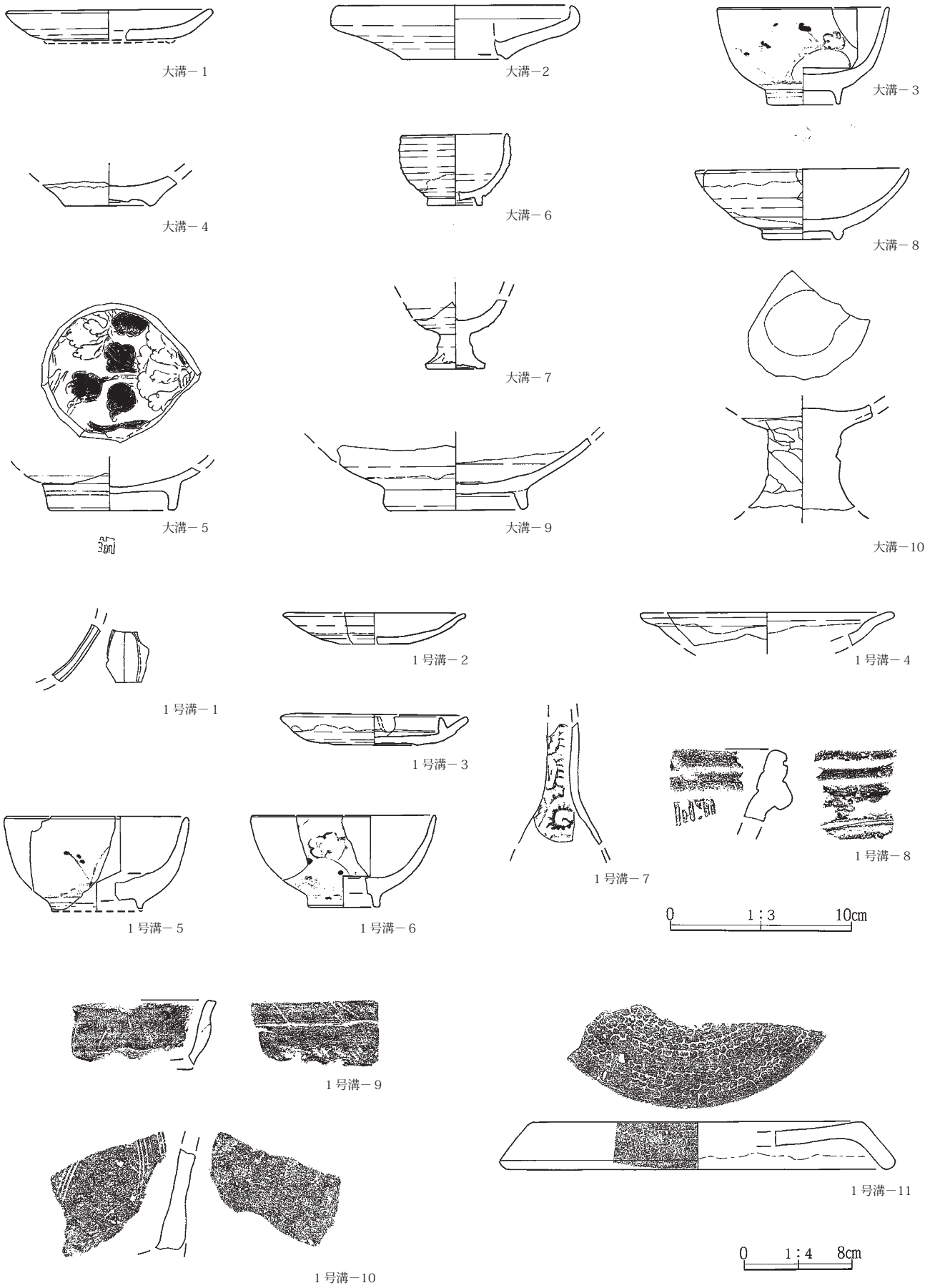
2 区には西館堀跡の窪みとは別に北側に水路が開削されて、クランク状に屈曲している。ここも中世以降数次の改修が行われ近年まで使用された溝である。

第 1・2 面の遺構として扱ったが、中世まで遡ることができるようである。3 年次に渡る断続的調査のため溝番号に混乱もあり、煩雑さをさけるため、最初に調査した 2 a 区の番号に整理作業段階で統一した。

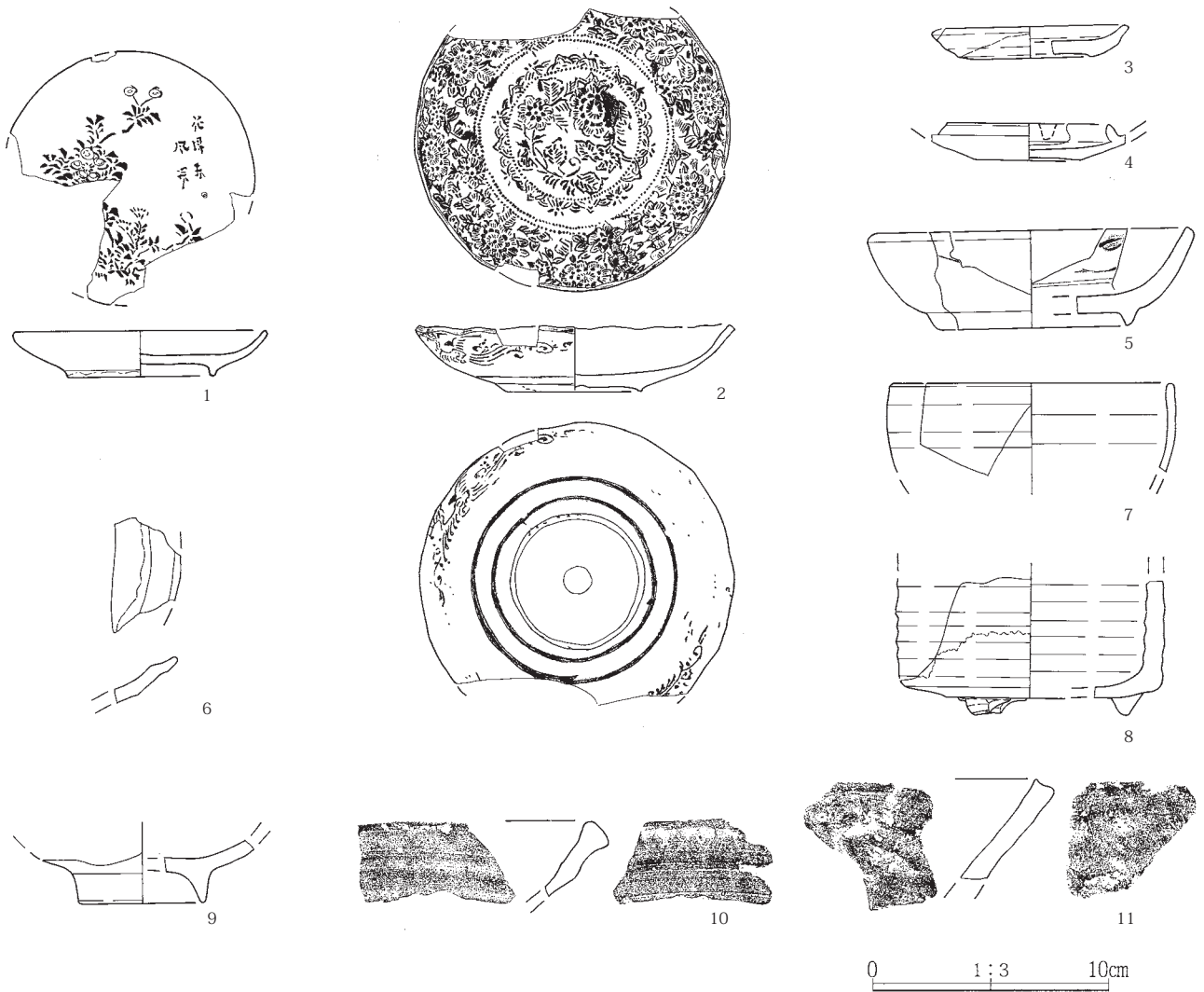


第19図 大溝・2区15号溝他断面

II 発掘調査の記録



第20図 大溝・1区1号溝出土遺物



第21図 2b区1号溝(15号溝上面)出土遺物

2区15号溝 (第21～26図 PL-6・33)

2区北側を西から東に向かう溝群の内、最も規模の大きな溝である。北西側から南東側へ下がる地山の傾斜に逆らって31B-17グリッド付近で10mほど北側へ向かい、再び東側へ曲がるクランク状の屈曲部分があり、中世西館部分を迂回していることがわかる。中世館の存在していた時期に開削されていたことが想定できよう。西隅から最初の屈曲までを西側、屈曲して北へ向かう部分を中央、最後の屈曲から再び東へ向かう部分を東側と呼び、説明を加える。中央から南へ分岐する2a区12号溝等は3・4面の遺構として扱った。

位置 西隅は41B-3グリッド付近で調査区境となり、東隅は31D-5グリッドで調査区境となる。

重複 18号溝に後出する。

形状規模 西側は長さ約37m、幅は重複の少ない西隅

付近で4.7m前後を測る。中央は長さ17m、幅は7m近い。東側は長さ61m、幅5m前後である。中央・東側部分では南側にくらべ底面が30cm以上深くなっている。

方位 西側N-85°W 中央N-4°W

東側N-87°E

埋没土 西側は3時期以上の流路痕が確認でき、近年まで使用された最新部分が北隅に、次ぐ部分が南隅にある。

出土遺物 西溝に特に新しい遺物が見られ、それらを含め第21図に11点を図示した。また東溝出土の6点を第26図に示した。それ以外に磁器36片・軟質陶器9片の他、明治以降の陶磁器やガラス片があり、土師器・須恵器の混入もある。

備考 西館を意識して18号溝を屈曲させて掘り直しているようだが、18号溝とは重複を避けるように別地点で開削し、旧流路を再利用していない。館から水路を遠

ぎける目的なら、西側部分で館により近い18号溝の南に流路を移動させることが説明できない。館の外堀としての機能を併せ持つ水路と想定したい。

2区 16・17号溝 (第22・23図)

15・18号溝へ合流する並走する2本の南北溝である。北側は調査区域外となる。17号溝は近年まで使われていたようで表層にはビニールなどのゴミも見られた。

位置 2a区北隅の31E・F-11・12グリッドにある。2本の溝の間隔は35cm前後である。

重複 17号溝が16号溝に後出する。

形状規模 調査できた範囲ではどちらも直線的な溝である。16号溝は長さ5.6m、幅218～245cm、深さ70cm前後で、底面は北側へ低く3cmほど傾斜している。17号溝は長さ5.0m、幅145～163cm、深さ45cm前後で、底面は南側へ低く15cm傾斜している。

方位 16号溝N-5°W 17号溝N-6°W

備考 遺物は16号溝から陶磁器1片を出土したのみである。17号溝は傾斜から北側から流下する水路と思われるが、16号溝の傾斜は調査範囲からは明確にできない。16号溝は18号溝へは繋がらず、15号溝の古段階に繋がる遺構のようだ。

2区 18号溝 (第22～26図 PL-6・34)

15号溝に各所で壊され不明瞭な部分があるが、2区を東西に貫く直線的な溝である。

位置 西隅は41B-3グリッド付近にあり、さらに西は調査区域外となる。東隅は31D-5グリッドで調査区域外となる。

重複 15号溝に先出する。東側では30・32・36号溝など多数の溝が後出し、その上に4号復旧溝が本溝上面を覆うように広範囲に作られている。

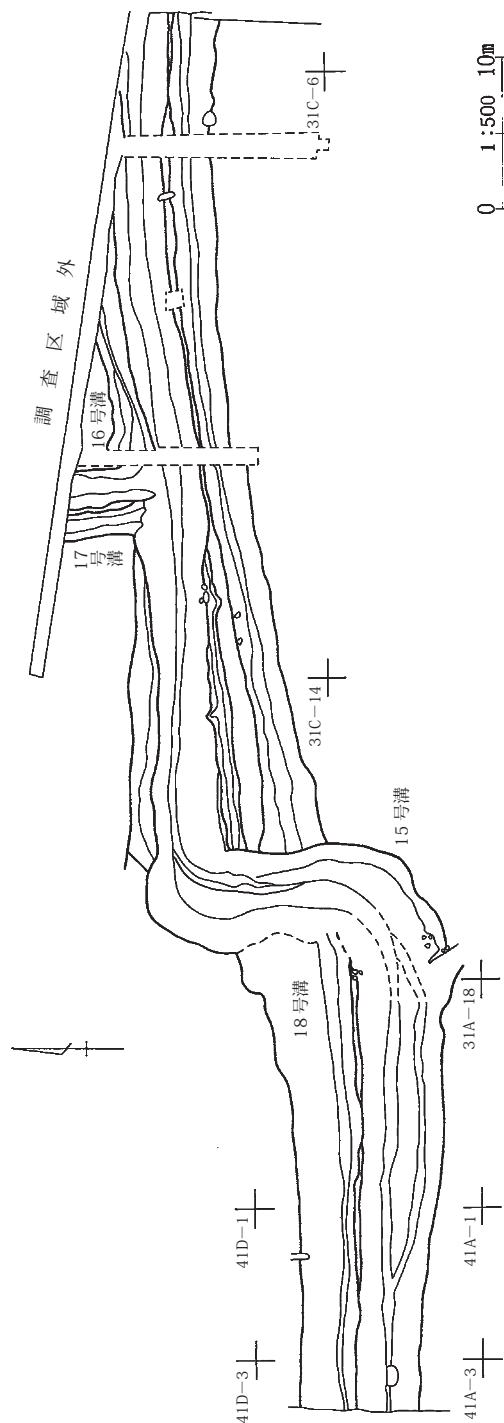
形状規模 西側では3時期以上の底面が観察できるが、東側は1面の平坦な底部である。全長93.2m、幅は東側で140cm前後、深さ60cm前後を測る。底面は東へ低くごく緩やかに傾斜しており、東西両隅では20cmほどの比高差がある。

方位 N-83°E前後となる。

出土遺物 広い範囲の遺構としては遺物は少なく、軟質陶器5点を図示した以外、陶磁器・軟質陶器小片2片の

他、土師器・須恵器の混入があったのみである。

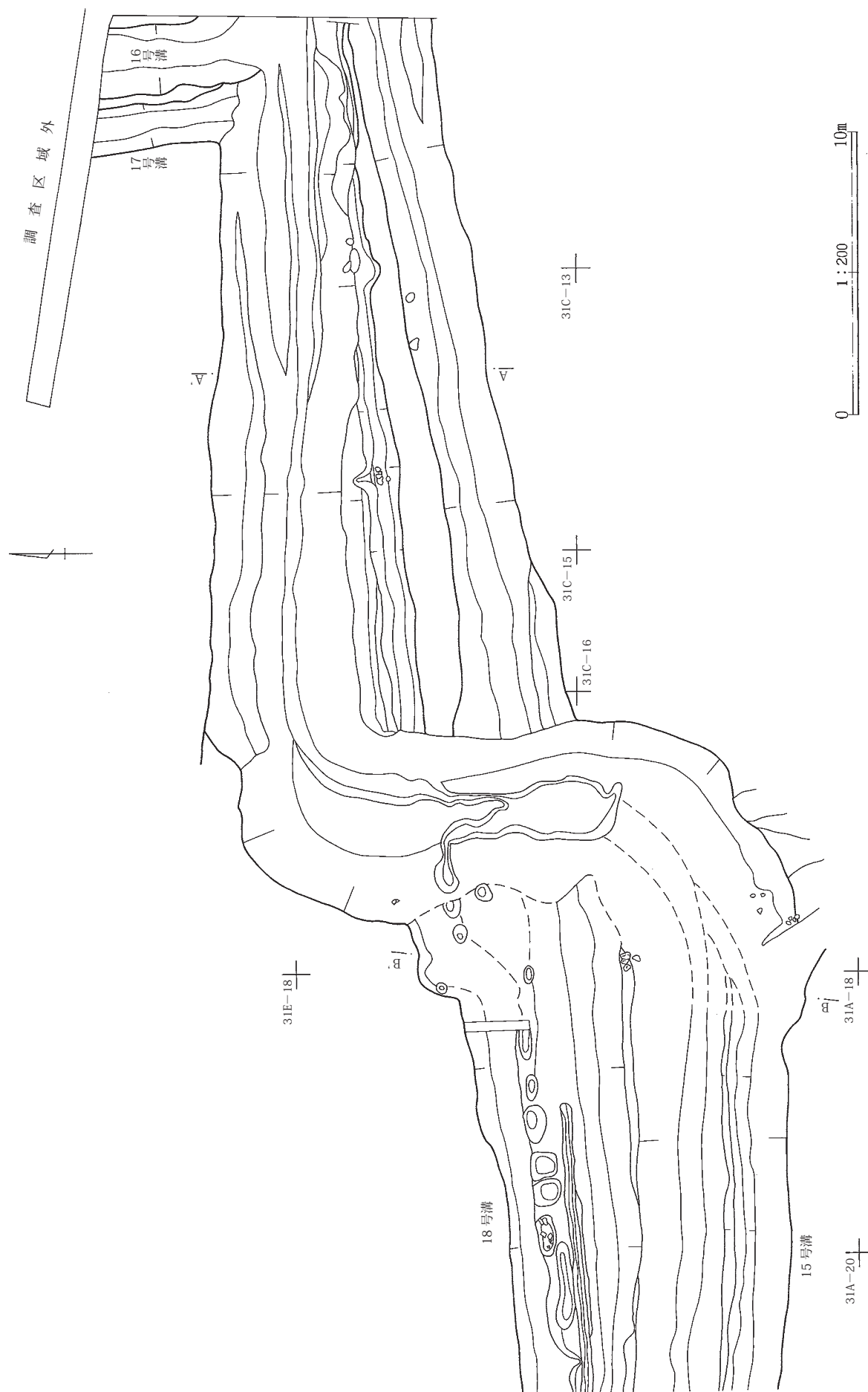
備考 地山の傾斜に沿わず、やや北側へ偏って走向する、15号溝に先行する用水路であろう。15号溝が西館区画を意識して屈曲させた溝であるなら、本溝は館区画に係わらない溝となる。最初の開削は館以前の可能性も考えられる。平安時代の水田区画(6面水田)とは直接結びつかないようである。



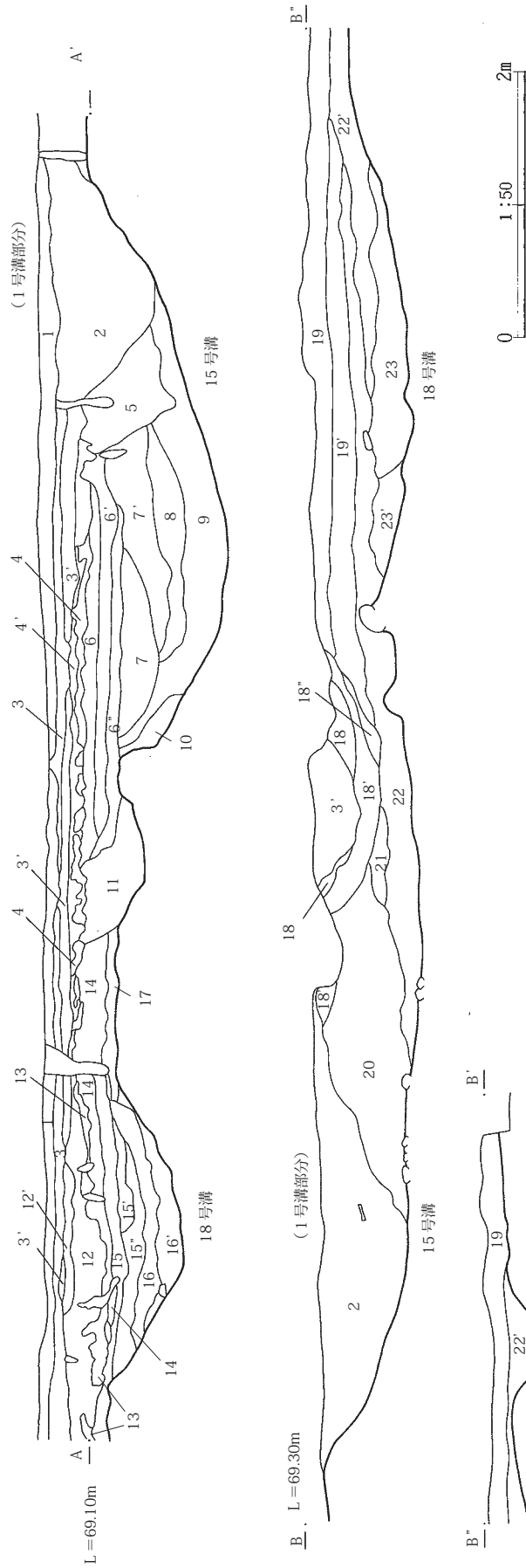
第22図 2区15～18号溝全景



第23図 2区15~18号溝東側



第24図 2区15~18号溝西側



第25図 2区1・15・18号溝断面

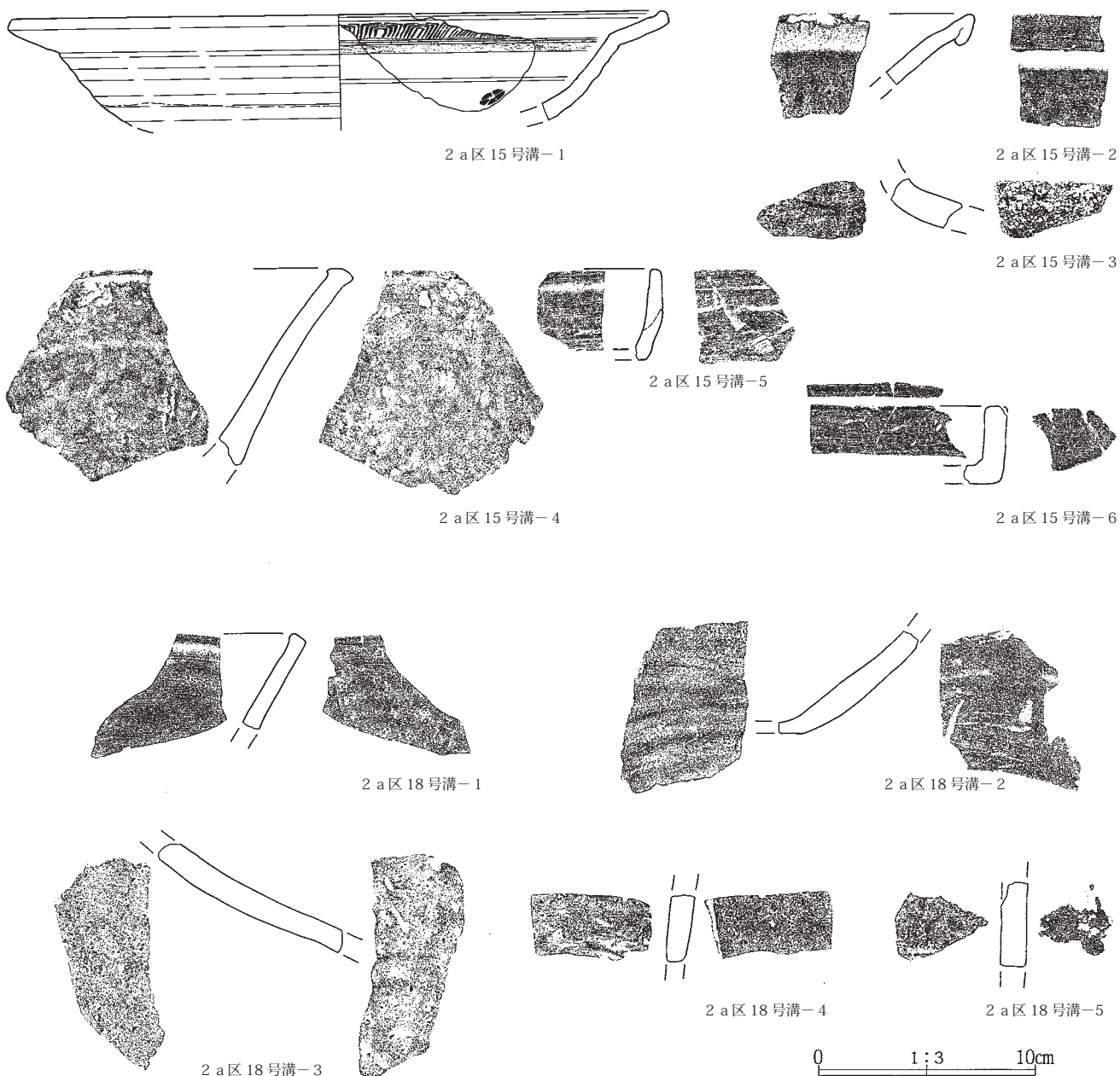
2区15・18号溝(2a区部分) 土層説明

- 1：圃場整備時の各土
- 2：圃場整備前の溝埋没土。As-A降下直前もこの位置に溝があったと思われる。
- 3：灰黄褐色土(10YR5/2)：As-Aを3%ほど含み、3'では10%近い。
- 4：As-Aのほぼ純層。降下バミスの上に寄せたバミスが混じる。4'は砂質土との混土。
- 5：暗褐(10YR3/4)：シルト質土。
- 6：暗褐(10YR3/4)：シルト質土。5に類似する。6'には白色バミスがやや多い。
- 7：灰黄褐(10YR4/2)：シルト質土。細砂を少量混入するが、7'にはほとんど見られない。
- 8：暗褐(10YR4/3)：やや粘性の強いシルト質土。稗鉄が見られる。
- 9：灰黄褐(10YR4/2)：粘性の強いシルト質土。一部でラミナ状の堆積も見られる。
- 10：にぶい黄褐(10YR4/3)：シルト質土。壁崩落土である白色粘質土ブロックの混入が多い。
- 11：にぶい黄褐(10YR5/3)：シルト質の細砂層。単独の溝埋没土。
- 12：褐(10YR4/6)：シルト質土でプライマリーな状態に近い洪水堆積層。12'は砂質土との混土。
- 13：褐(10YR4/4)：As-B混じりの粘性土にシルト・細砂混入。洪水層が地山を攪拌した痕跡か。
- 14：暗褐(10YR3/3)：As-B混じりの粘質土と砂質土との混土。しまり強い。
- 15：黒褐(10YR2/3)：As-B混じりの黒色味強い土。15'に向かってブロック状の砂の混入が多くなる。
- 16：にぶい黄褐(10YR4/4)：シルト質土で粘性・しまりの強い細砂。16'には礫の混入も増える。
- 17：黒褐色土(10YR2/2)：白色軽石を含む粘質土。地山が埋没土が明確に区別できなかった部分。

2区15・18号溝(2b区部分) 土層説明

- 17までの層は15・18号溝の土層説明に同じ。
- 18：にぶい黄褐色土：しまりやややく砂質土。15'に向かって黒色味をおびた粘質土の混入が増える。
- 19：にぶい黄褐色土：砂質土。褐灰色粘質土混入し、16'に向かって混入量が増える。11層に対応か。
- 20：にぶい黄褐色土：砂質土。褐灰色粘質土混入。
- 21：にぶい黄褐色土：細粒砂質土。灰白色粘質土混入。10・11層土に相当か。
- 22：灰黄褐色土：やや粒の粗い川砂状の砂粒の多い土。22'では砂粒細かく、褐灰色粘質土の混入が多い。
- 23：暗褐色土：As-B混じりの粘性土にシルト・細砂が混入した土。23'では黒褐色土の混入が多い。

II 発掘調査の記録



第 26 図 2区 15・18号溝出土遺物

(7) 集石 (第 27～29 図 PL-6・34)

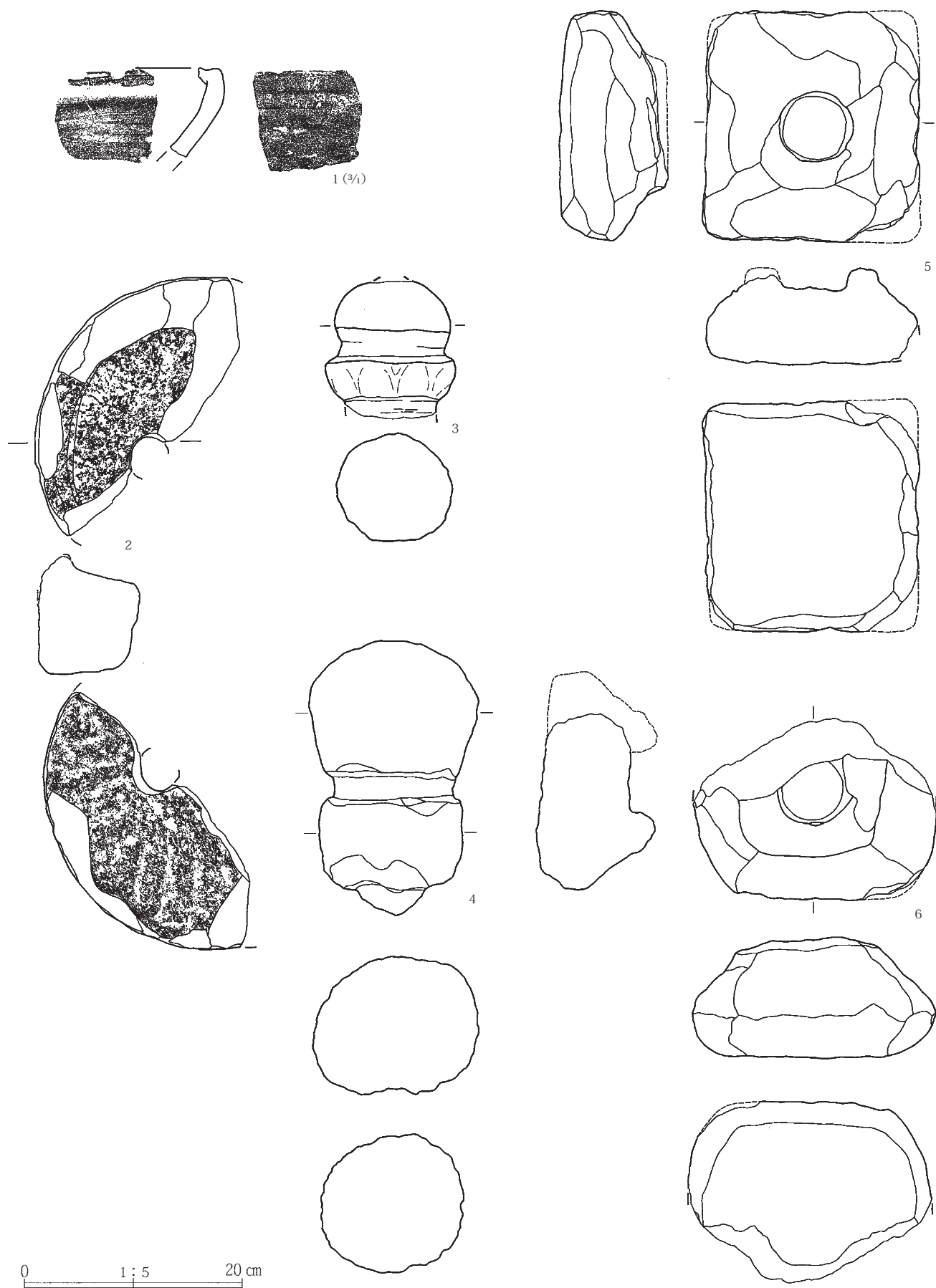
東へ向かっていた 15 号溝が北へ向かって最初に屈曲する 2 b 区 31 B-17 グリッド付近には、多量の礫が敷き詰めのように廃棄されている地点があり、集石と呼んだ。礫の大きさは最大で径 50cm 近くあり、20cm 前後のものが最も多かった。反面拳大を下回るような細かな礫はほとんど見られず、構造物を壊してこの場所へ埋めたものと推測する。北西側では礫が少ないが、15 号溝の新しい流路がこの付近にあるため、改修の際に礫が

抜かれたものと思われる。

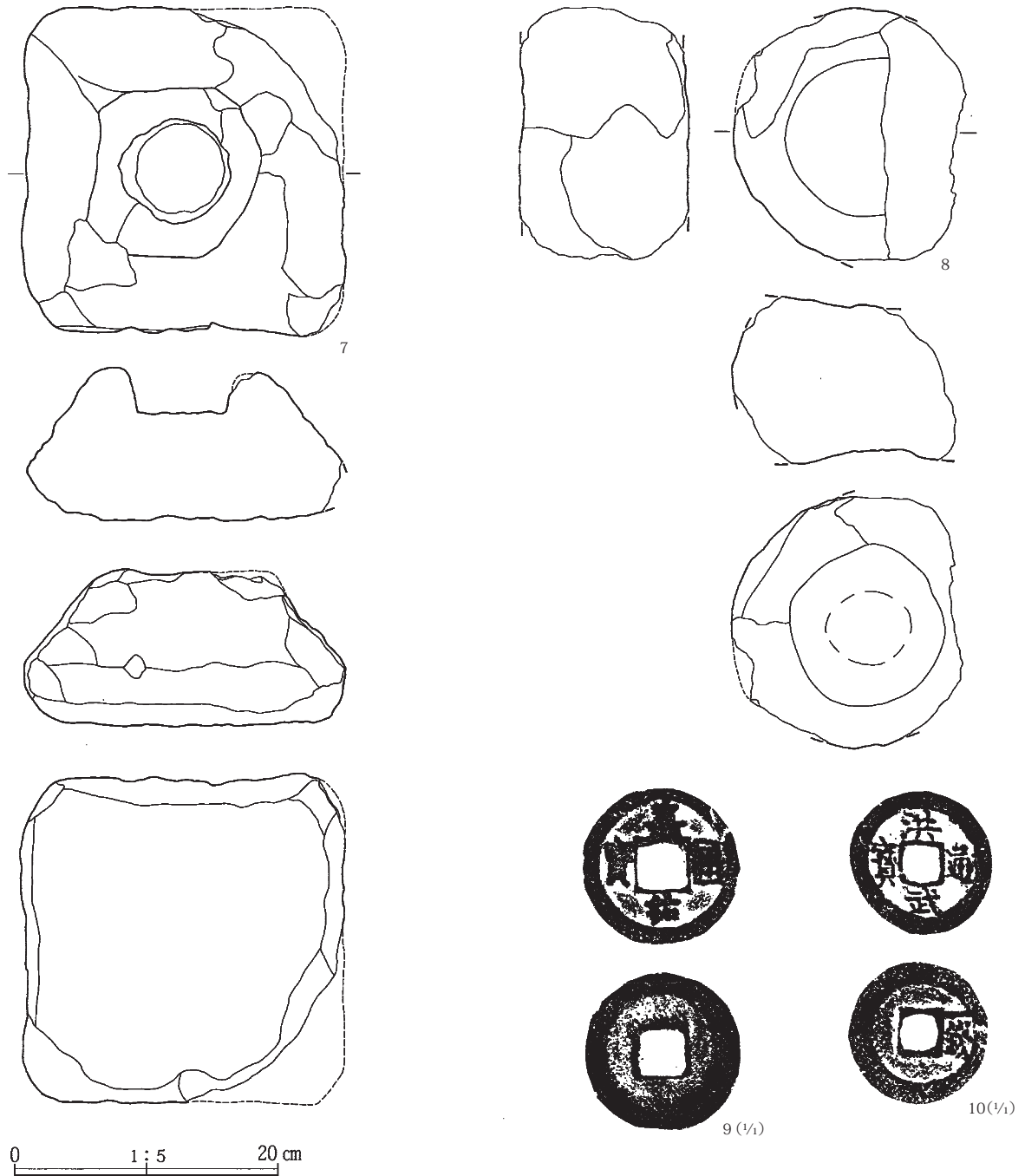
集石の範囲は径約 8 m で溝底面付近まで礫が見られ、層厚は 40cm 前後あり平面的に広がっていた。礫上面で多量に見られる A 軽石が礫下になくことから、廃棄が天明三年以前の作業であることが分かる。五輪塔などの石造物が多く、板碑破片と思われる緑色片岩の混入も多かったのに対し什器類は少ない。墓域を含む地点の改修によって多量の礫が溝内へ投げ込まれたものと想定したい。大きめの礫は南東隅付近に多く、重い礫を遠方まで



第27図 集石



第28図 集石出土遺物(1)

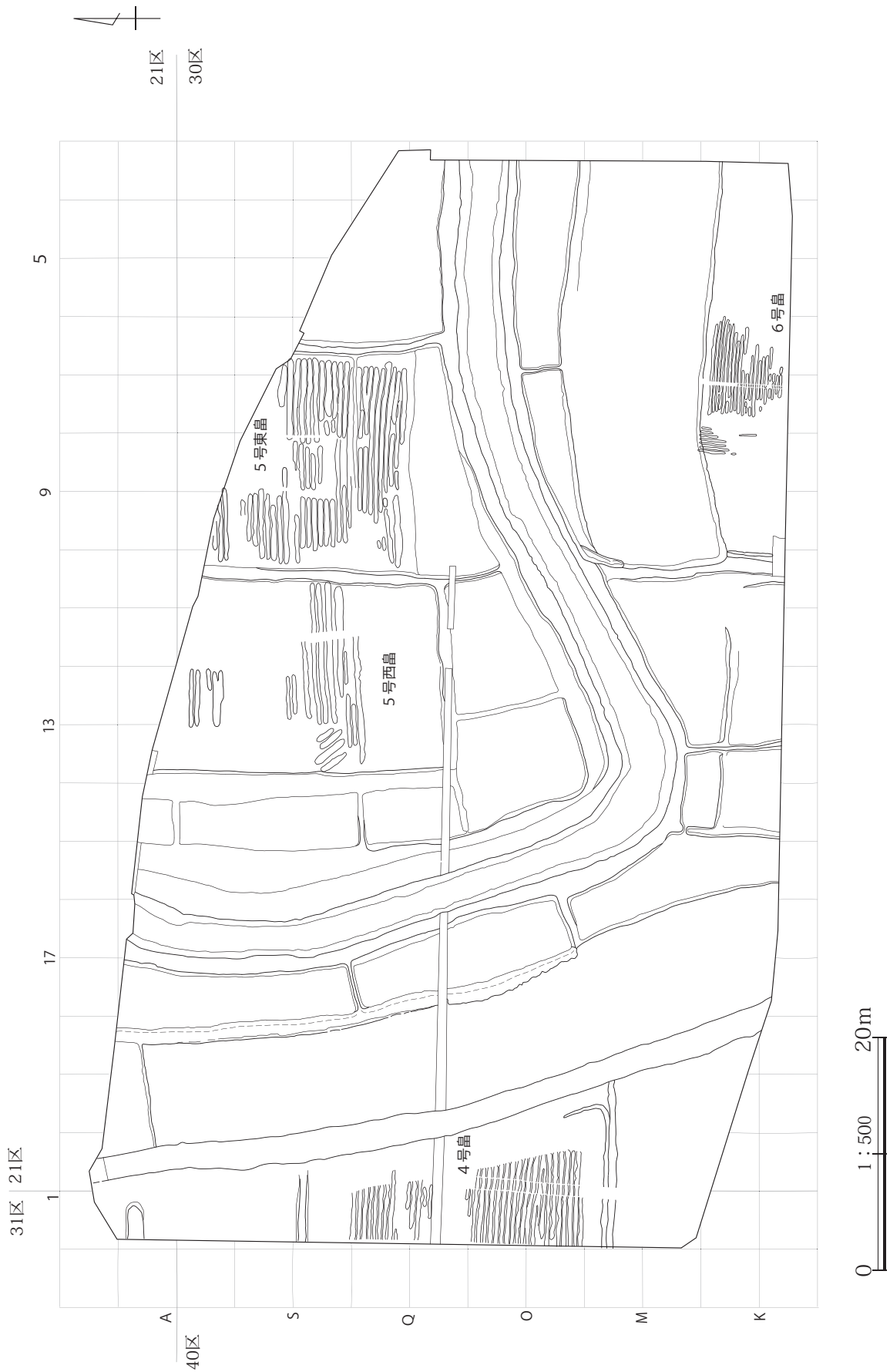


第29図 集石出土遺物(2)

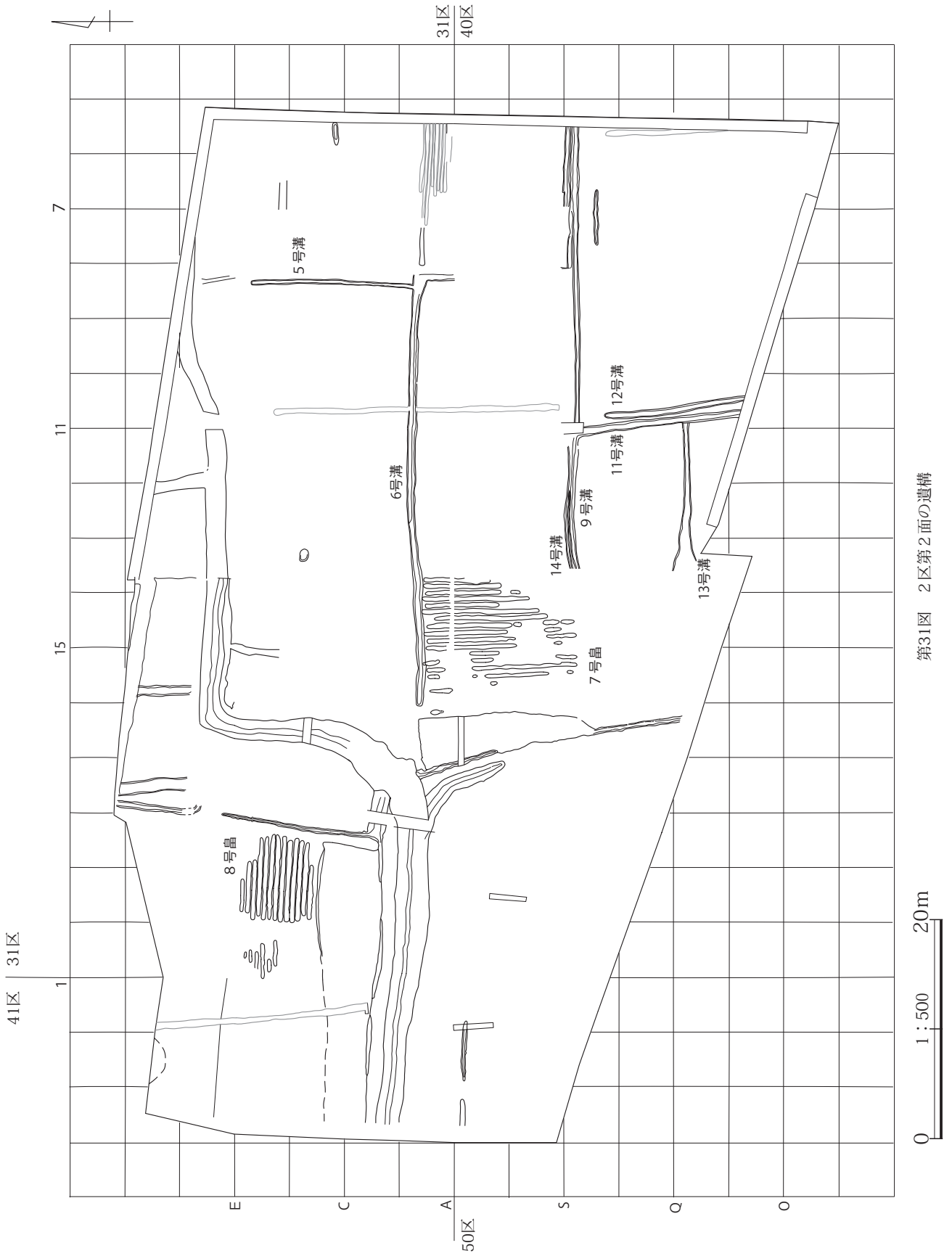
移動させない作業効率を勘案すれば、南東側から運ばれたものとなろう。本地点の南東側には西館があるが、2区全体でも墓坑は確認されておらず、付近の別地点から運ばれたものであろう。

出土遺物のうち軟質陶器1点、石製品7点、銭貨2点を図示した。石製品のうち什器は2の石臼のみで、他は墓所に関連するものである。銭貨9・10は下層から出土している。

図示した1以外の陶磁器等中近世遺物は3点で、土師器など古代遺物が5点混入している。4は宝篋印塔などの石塔類頂部破片で、本遺跡では唯一例である。緑色片岩の板碑破片は出土位置を記録し取り上げたものだけで7点あるが、剥落や風化が進み、図示に耐えられるものは見られなかった。他にも微細な緑色片岩破片は多量に出土していた。



第30図 1区第2面の遺構



第31図 2区第2面の遺構

3 第3面・4面の調査

(1) 概要

A軽石直下の調査1面では確認できなかったが、発掘調査時2面（基本土層4層）上での遺構確認に至る間に調査された遺構があり、これらを第3面の遺構として扱う。畝や水田面下で検出したものが多いが、第4面の遺構と同時期のものも混じるはずである。1区では粘土坑、2区では溝や畦を調査している。

中世の館の時期を中心に第5面を設定したが、溝には重複が多く、第5面の諸施設に後出する遺構があり、これを第4面の遺構として扱った。埋没土に洪水砂を含むことより分けた施設のほかに、重複や遺構の性格から館跡に後出すると考えたものが含まれている。

(2) 粘土坑 (第32図 PL-6①②)

1a区西側で1号溝と10号溝の間の水田面下から、溝状に長い、埋没土に粘性土を多量に含む土坑を確認した。調査時の粘土坑の名称をそのまま踏襲した。表層付近にA軽石の混じる埋没土が見られ、調査時にはA軽石直下の遺構と想定したが、この軽石は沈降した部分と判断し第3面の遺構として扱った。

確認段階では1本の溝上の施設と想定したが、掘り下げる過程で、ほぼ同じ規模の2本の溝状遺構であることが分かった。重複があるはずで、断面観察から西側の遺構が新しい可能性を想定したが、明確なものではない。

位置 30P-18～30K-17グリッド

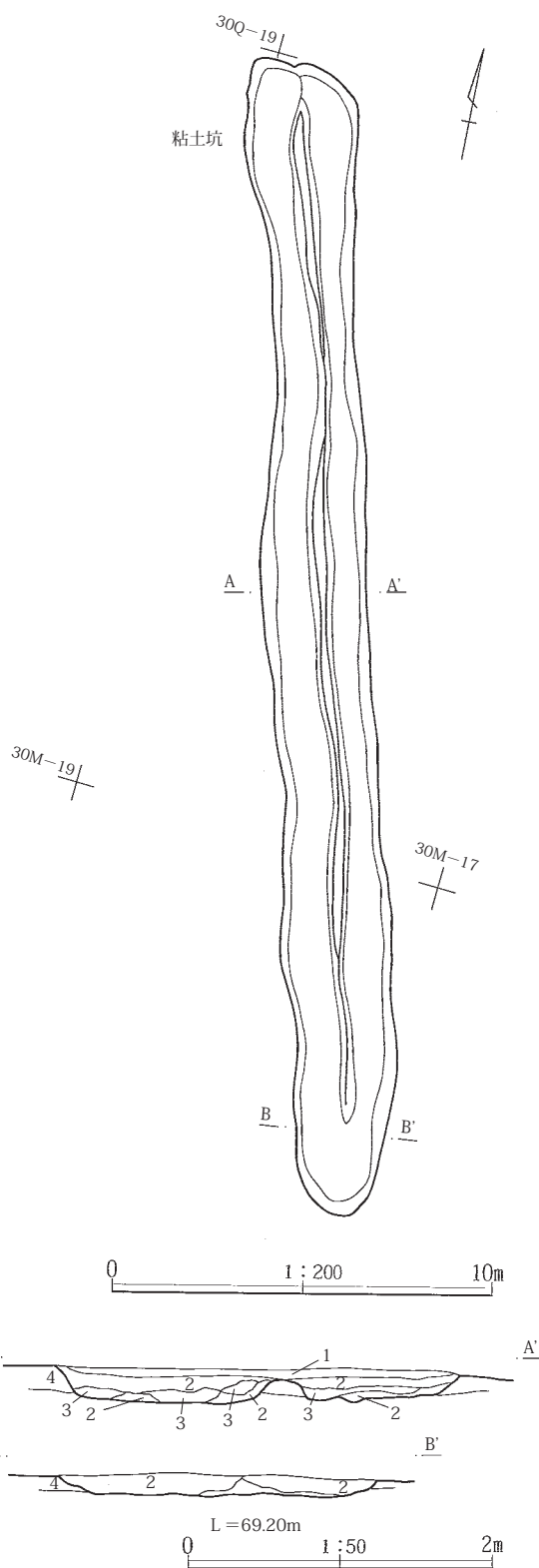
規模 全長30.5m (西側) 幅92～148cm 深さ15～24cm
(東側) 幅82～136cm 深さ14～24cm

埋没土 ブロック状の粘性土を人為的に埋め戻したものの。しまり易い土だが、特に踏み固めたような痕跡はない。溜まり水や水流の痕跡は認められない。掘削後の早い段階で埋め戻した施設と考えられる。

軸方向 N-18°W。天明三年(第1・2面)水田の南北畦畔に近い軸方向である。

備考 底面はほぼ平坦で、完掘状態は溝と差がない。二つの遺構の底面レベルは西側がやや低めである。それぞれの遺構とも南北両隅がやや深くなっている。

地山の観察では、上面にある洪水砂質土部分は余さず掘り下げ、B軽石の混じる黒色土は多少削る程度で止め



粘土坑土層説明

- 1: 灰褐色粘性土: 2層土にAs-Aがやや多く混じる後世の攪乱部分。
- 2: 灰色粘性土: 水成堆積のロームらしい径φ20mm前後のきわめて多量に、ブロック状を含む。As-YPブロックや黒色粘性土ブロックもほぼ同じ大きさ。しまりもきわめて強い。斑鉄も見られる。
- 3: 灰褐色土: 2層と同じ粘性土主体の土だが、ブロックは小粒で径10mm前後になる。
- 4: 暗灰黄(2.5Y4/2): 地山。粒子の細かな洪水砂で上面にはAs-Bを少量混入。斑鉄は少ない。

第32図 粘土坑

ている。洪水砂質土除去を目的としたのか、暗褐色土上面で掘削を止めたようにも見える。1号溝と10号溝のほぼ中間地点にあり、周辺には先行する溝・畦畔等の施設は確認できず、全くの平坦面に穿った坑のようなものである。埋戻しに使った粘性土が採取できる深い遺構は隣接せず、最も近いのは東側10mほどの距離にある大溝である。

(3) 溝

2区ではAs-A下(第2面)と中世面(第5面)の間で多数の溝を調査している。

2a区1面に2時期の東西走向の溝を確認している。南側にあった溝を北側へ移動した経過が断面から確認できた。第1・2面の項で触れたが、北側の新しい15号溝は3面、先行する南側の18号溝は4面以前に相当するものであろう。

また、西館の東堀(第5面の遺構)は3面の時期には埋もれて平坦になっているが、この堀跡部分から北側へ向かって直線的に伸びる畦状の高まり(以下、畦と略す)を確認した。この畦に平行して東側に4条の溝が並んでいる。溝は東側から順に30・32・33・34号溝とした。両脇の30・34号溝が深くなっている。北側では18号溝(上面に4号復旧溝がある)から先で分からなくなる。畦と接しているのは34号溝で、畦との間に重複や隙間は認められない。調査段階では溝が先出し畦は後出する施設としたが、同時存在と考えたほうが自然であろう。

浅い33号溝はグリッドのAライン北側で分からなくなっている。南側では直角に分岐して東へ向かう31号溝を伴っている。31号溝は30・32号溝と直交しているが、両溝との新旧は確認できていない。

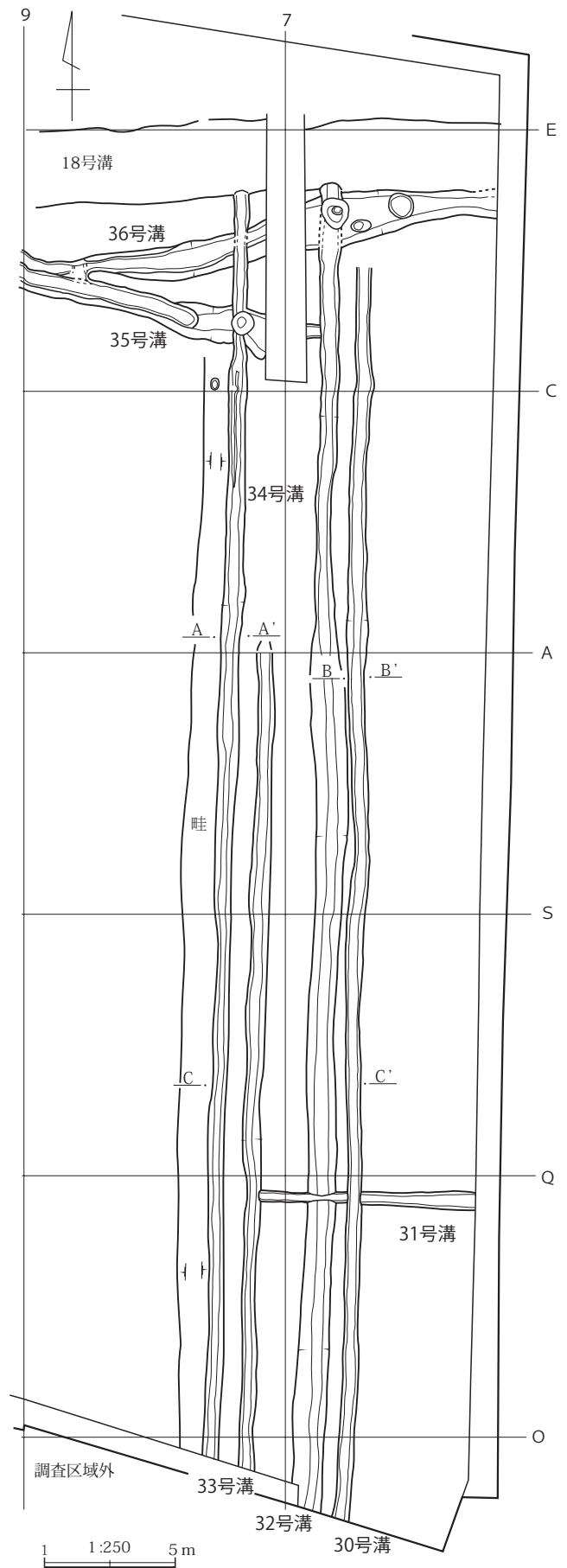
畦は幅1mを超える明瞭なものだが、水田畦畔を想定すると、直交する東西方向の畦畔・平行する南北方向の畦畔が全く確認できない。北側に水口状の窪みを1か所伴うが、この面を水田面と確認するには至らなかった。

2a区30号溝(第33・34・36図 PL-7⑤・34)

30・32～34号の、平行して並ぶ4本の南北溝のうち東隅にある。

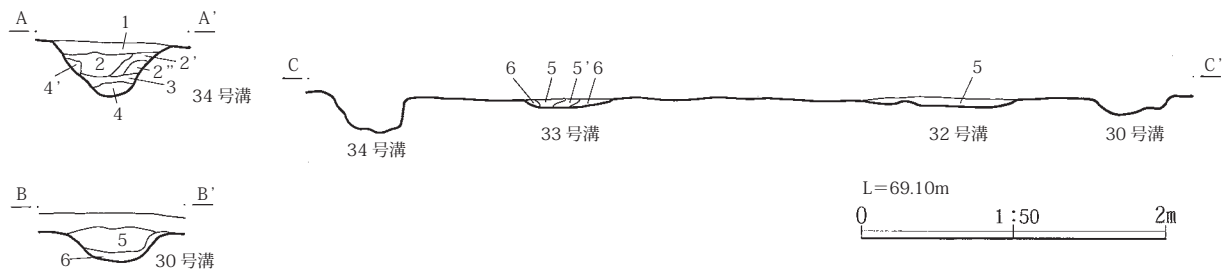
位置 南隅は40N-6グリッドで調査区境にあり、北へ直線的に伸び、31C-6グリッド付近で分からなくなる。

形状規模 直線的な溝だが、ごく細かな蛇行がある。全



第33図 2a区30～36号溝

II 発掘調査の記録



2 a 区 34 号溝土層説明
 1：にぶい黄褐 (10YR4/3)：砂質土。白色軽石粒や灰黄褐色シルトを含む。
 2：黒褐 (10YR3/2)：白色軽石粒含む弱粘性土。斑鉄あり。2'以下はしまり強く、2'にはブロック状の4層土を多量に含む。
 3：褐灰 (10YR4/1)：粘性・しまりの強い層。
 4：黒 (10YR 2 7/1)：ローム粒を5%程含む粘性強い層。4'では混入物少ない。

2 a 区 30・32・33 号溝土層説明
 5：灰黄褐 (10YR4/2)：しまりの強い砂質土。白色軽石粒含み、斑鉄見られる。5'は6土との混土。
 6：暗褐 (10YR3/3)：砂質土。As-B 混じりの粘性土の混入多い。白色軽石粒含み、斑鉄見られる。

第34図 2a区30・32～34号溝断面

長 47.9 m、幅 65cm 前後、深さ 11～15cm を測る。
 底面レベルはほぼ水平で、傾斜は見られない。

走向 N - 0° 2～3度の振れはあるが全体の走向。

埋没土 砂質土だが、水流の痕跡は確認できない。

遺物 埋没土内の混入品であるが、舶載青磁1点を図示した。他には土師器14片の混入が見られる。

所見 西側に隣接する31号溝とは上端で最短15cmほどの間隔の部分もあり、同時存在は考えにくい。

2 a 区 32 号溝 (第33・34図 PL-7⑤)

30号溝の西側15～65cmにある。浅い部分もあるが、北隅まで確認することができた。

位置 南隅は40N-6グリッドで調査区境になり、北へ直線的に延びて31D-6グリッドで36号溝を越え、18号溝と合流する。

形状規模 直線的な溝で細かな蛇行がある。蛇行の振幅は30号溝に沿う部分がある。全長50.8m、深さ10～25cmを測る。幅は53～118cmで南側が太くなっている。底面レベルは北側が深くなり、南隅と20cm以上の比高差がある。

走向 N - 1° E

埋没土 砂質土だが、水流の痕跡は確認できない。

遺物 北側で軟質陶器鍋1片が出土し、他は17片の土師器が混入していた。

所見 底面レベルの傾斜からは18号溝へ続く排水溝が

想定されるが、埋没土や底面の形状からそれを確認することはできなかった。

2 a 区 33 号溝 (第33・34図 PL-7⑥)

4条の溝の中で最も浅く小規模である。31号溝が本溝から分岐する。

位置 南隅は40N-7グリッドで調査区境にあり、北へ直線的に延び、31A-7グリッド付近で分からなくなる。

形状規模 ほぼ直線的な溝である。確認できた範囲で長さ31.5m、幅52～61cm、深さ5～8cmを測る。底面レベルはほぼ水平である。

方位 N - 1° E

埋没土 砂質土だが水成堆積の痕跡はない。

備考 遺物の出土はない。

2 a 区 34 号溝 (第33・34図 PL-7①②⑤)

4条の溝のうち最も西側にあり、33号溝の西70～95cmにある。本溝の西隣に幅110cm前後、高さ3cmの畦状の高まりがあり、それに伴う施設のようなだ。

位置 南隅は40N-7グリッドで調査区境にあり、北へ直線的に延びて31D-7グリッドで18号溝と合流する。

重複 北側で35・36号溝と交差するが先後関係は確認できていない。

形状規模 直線的な溝で、北隅でやや細くなる。北側で

は水流に削られたような弱い窪みが見られる。全長 48.5 m、幅 55～83cm、深さ 16～28cm を測る。底面レベルはわずかに北へ低く傾斜しており、南側と 5 cm 前後の比高差がある。

方位 N - 2° E

埋没土 水平に近い堆積状況が部分的に見られる。

遺物 軟質陶器挿鉢・焙烙各 1 片の他、土師器・須恵器 11 片が混入する。

所見 底面の形状や傾斜から排水溝の可能性がある。

2 a 区 31 号溝 (第 33 図)

位置 40 P - 7 グリッドで 33 号溝から東へ直角に分岐し、40 P - 5 グリッドで調査区境に至る。

重複 30・32 号溝とほぼ直角に交差する。

形状規模 直線的な浅い東西溝で、東側がやや幅太になる。全長 8.2 m、幅 39～73cm、深さ 3～5 cm を測る。底面は他の溝との重複部分周辺で深くなる傾向がある。

方位 N - 89° W

備考 遺物の出土はない。埋没土の記録を欠く。

2 a 区 35・36 号溝 (第 33・36 図 PL - 34)

位置 35 号溝は 31 D - 10 グリッドで 18 号溝から南寄りに分岐し直線的に延び、32 号溝と合流する地点付近で浅くなり分からなくなる。36 号溝は 31 C - 8 グリッドで 35 号溝から北寄りに分岐して湾曲するようにして 18 号溝へ再び合流する。

形状規模 35 号溝は西側で掘り直しの可能性がある。西側 16.6 m 部分は深く、底面のレベルが 32 号溝に近い。全体では全長 21.4 m、幅 88～135cm、深さは西側で 20cm 前後、東側で 5 cm 前後である。36 号溝は全長 15.6 m、幅 67～126cm、深さ 4～13cm を測る。

方位 (35 号溝) N - 78° W

遺物 不明瞭な遺構だが出土遺物は比較的多い。図示できたものは軟質陶器が主体で、35 号溝から 5 点、36 号溝から 2 点を選んだ。他に 36 号溝からは近世陶器碗と軟質陶器鍋が各 1 片出土している。土師器・須恵器の混入が 35 号溝に 29 片、36 号溝に 37 片ある。

所見 埋没土の記録を欠く。36 号溝は人為的な溝か自然流路か判断できなかったが、18 号溝の氾濫から生じた派生する流路のようである。

2 b 区 の 溝

15 号溝の屈曲部分で集石の見られた地点付近から南へ分岐する溝群が見られた。12 号溝は畦畔状の高まりを伴っており水田への導水路と考えられるが明確ではない。

2 b 区 2 号溝 (第 35 図)

15 号溝から南東方向へ分岐し弧を描くように 12 号溝側へ向かう 2 本の溝のうち、西側の明瞭な溝である。

位置 2 号溝は 31A - 17・18 グリッドで 15 号溝から分岐し、40T - 17 グリッドで途切れる。

形状規模 全長 9.1 m、幅は南側 110cm・北側 130cm、深さは南隅で 20cm を測る。底面は北側へ低く 40cm 傾斜している。

方位 南側の直線部分で N - 27° W

遺物 土師器 2 片の混入が見られたのみである。

所見 底面の傾斜から、15 号溝へ向かう排水溝と想定できよう。上面には礫が散在しており、集石と同時期または若干後出する時期の施設と考えたい。

2 b 区 12 号溝 (第 35 図 PL - 7 ③④)

両側に畦状の高まり (以下畦と略す) のある溝で水田水路のような第 3 面の施設である。途中で水口状の小溝が東側に向かって切られている。

位置 北側は 31 A - 16 グリッド付近で 15 号溝から分岐して南流し、40 P - 16 グリッド以南は調査区域外となる。

重複 北側で後出する 13 号溝が合流する。

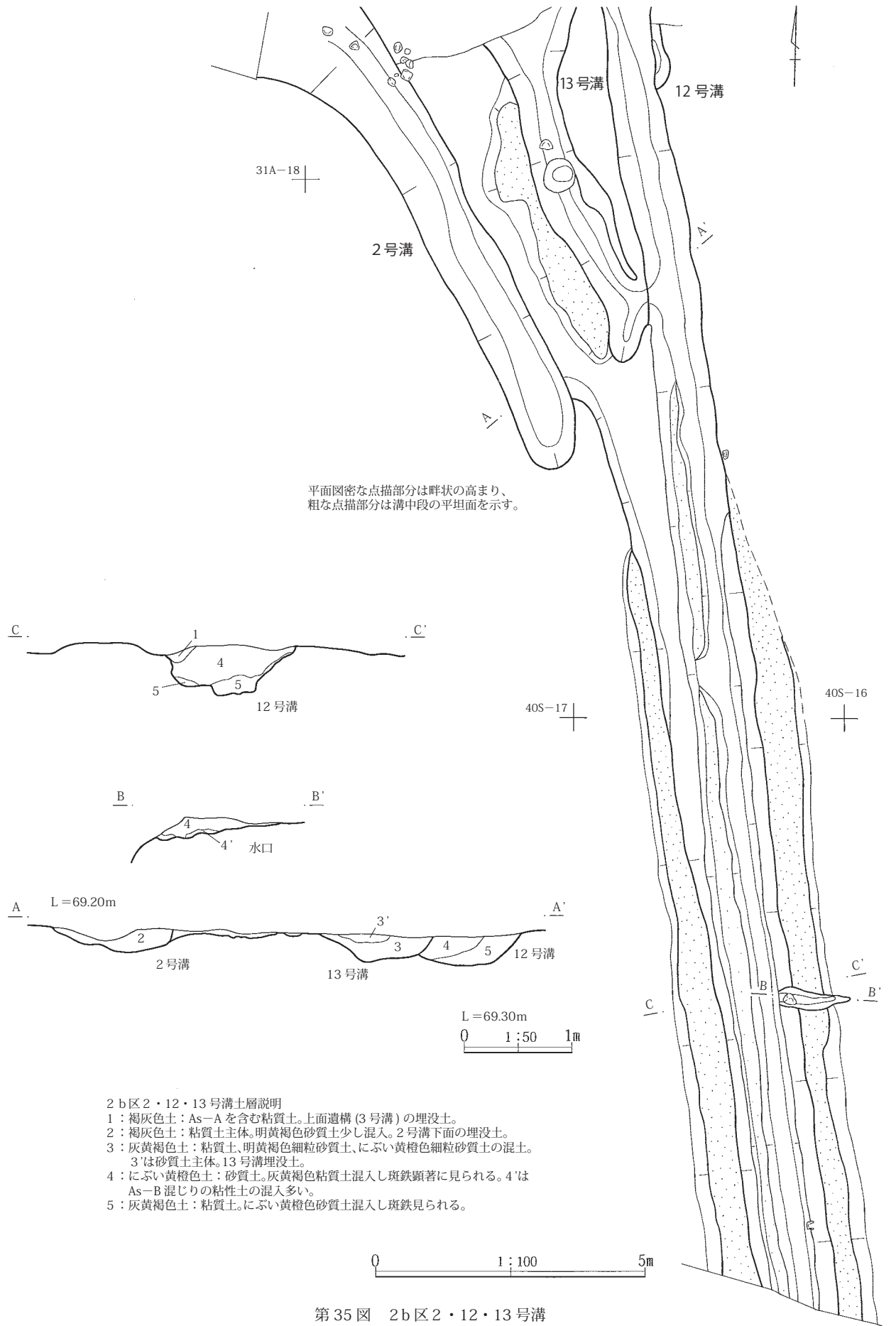
形状規模 直線的な溝で長さ 25.4 m を測る。畦のない北側で幅 110cm 前後・深さ 45cm 前後、南側で畦上端から計測すると幅 120cm 前後、深さ 55cm 前後となる。底面は緩やかな凹凸があり、調査範囲での水流の方向は確認できなかった。両脇の畦は地山からの高さが 3～11cm で、両脇の畦を含めた規模は幅 3.0 m 前後になる。

水口は長さ 1.4 m、幅最大 30cm、深さ最大 20cm の規模で、西隅最深部は 12 号溝底面より 25cm 高い地点で止まっている。12 号溝との接点付近で径 25cm の礫が取水口を塞ぐように据えられていた。

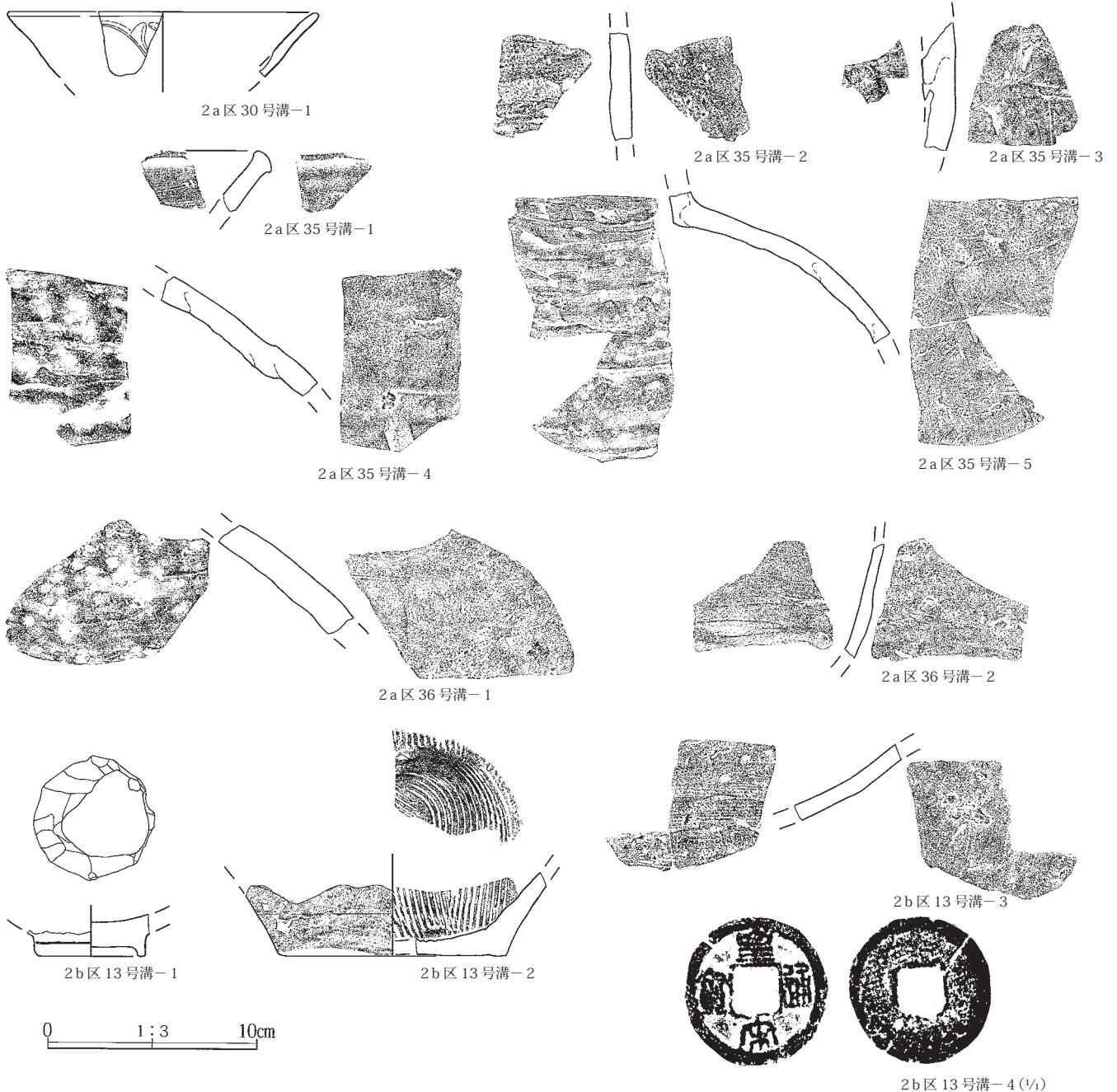
方位 N - 7° W

埋没土 B 断面の西上隅に As-A 混じりの窪みが観察できたが、本溝に係わらない小溝状の窪みと思われる。

所見 遺物の出土はない。C 断面の本溝埋没土は A 断面



第 35 図 2b 区 2・12・13 号溝



第36図 2a区 30・35・36号、2b区 13号溝出土遺物

と同じで、合流する13号溝は途中で途切れ、本溝埋没土が続くと考えられよう。

2b区 13号溝 (第35・36図 PL-34)

2号溝の東側にある不明瞭な溝である。

位置 31A-17グリッドで15号溝から分岐し、40T-16グリッドで12号溝と合流する。

重複 12号溝に後出している。

形状規模 本溝西側に畦状の高まりを図示したが、付近が低く相対的な高まりが残った地点のようで、畦とは確

認できなかった。全長5.7mを測る。南側では60cm前後の幅だが、15号溝付近では広がって2m以上の幅になる。深さは南寄り8cm、北側2cm前後だが、底面レベルはほぼ水平であった。

方位 N-27°W前後

遺物 北寄り埋没土出土の播鉢など3点と渡来銭1点を図示した。他に陶磁器片5片が出土している。

所見 12号溝に合流しているが、同溝で記したように途中で途切れるようだ。2号溝で多数見られた礫が本溝にはなく、集石に先出する施設と考えたい。

2 b区 28号溝 (第37図 PL-7⑦)

12号溝両脇に見られた畦状の高まり(第35図)直下から2本の直線的な溝が確認された。このうちの、東側の小規模な南北溝である。上面にある12号溝に西側を削られた部分が広く、残存状態は良くない。第4面の遺構である。

位置 北隅は31A-16グリッドにあり、南へ向かい40T-16グリッドで調査区境となる。

形状規模 北隅は15号溝と合流する直前の地点で、西側に約60cmの長さで小さく折れている。屈曲点から南側は長さ25.5m、幅33~62cm、深さ8~14cmを測る。底面は緩やかな凹凸があり、全体的な傾斜の傾向は調査範囲では確認できなかった。

方位 N-6°W

埋没土 砂質土の堆積で、29号溝と近似する。上面にある畦状の高まりを築く盛り土は観察できない。

遺物 陶磁器小片2片を出土している。他に土師器19片の混入がある。拳大の礫も散見した。

所見 北隅の屈曲部分は15号溝側から取水する水田水口に類似している。本溝西側の後出遺構である12号溝部分に畦があり、掌握できていない4面水田が存在することも想定できる。

2 b区 29号溝 (第37図 PL-7⑧)

12号溝西脇の畦状高まり下から確認された、28号溝より幅の広い南北溝である。28号溝との間隔は北側で120cm前後だが、南側では90cm以下に狭くなり、同溝に平行する溝ではない。

位置 北側は31A-16・17グリッドで15号溝と重なり、南へ向かって40T-16グリッドで調査区境となる。

形状規模 直線的な溝で底面は広く平坦で、断面は逆台形を呈している。全長24.5mを測る。幅は北側で65cm前後、南側で太く95cm前後となる。深さは20~34cmで、底面レベルは若干南へ低く傾斜していて、北側と5cmほど比高差がある。

方位 N-7°W

埋没土 下層にラミナ状の堆積が見られ、水流の痕跡が観察されているが、底面や壁面に浸食の痕跡はなく、恒常的に強い水流があったとは思えない。

遺物 土師器・須恵器11片の混入が見られた。

所見 限られた範囲の底面傾斜からの推測だが、15号溝から取水した導水路と思われる。28号溝と本溝が畦畔脇の両側溝となる可能性もあるが、2条の溝が平行の位置にない点が問題となる。

2 b区 31~35号溝 (第37図 PL-7⑨)

15号溝や18号溝から40号溝へ向かって不規則に流下する、5本の小規模な水流痕と思われる溝である。北西側31号から順に南東側へ向かって35号までの番号を付けた。31号溝以外埋没土の記録を欠いている。

位置 31B-15グリッド付近を中心に見られる。

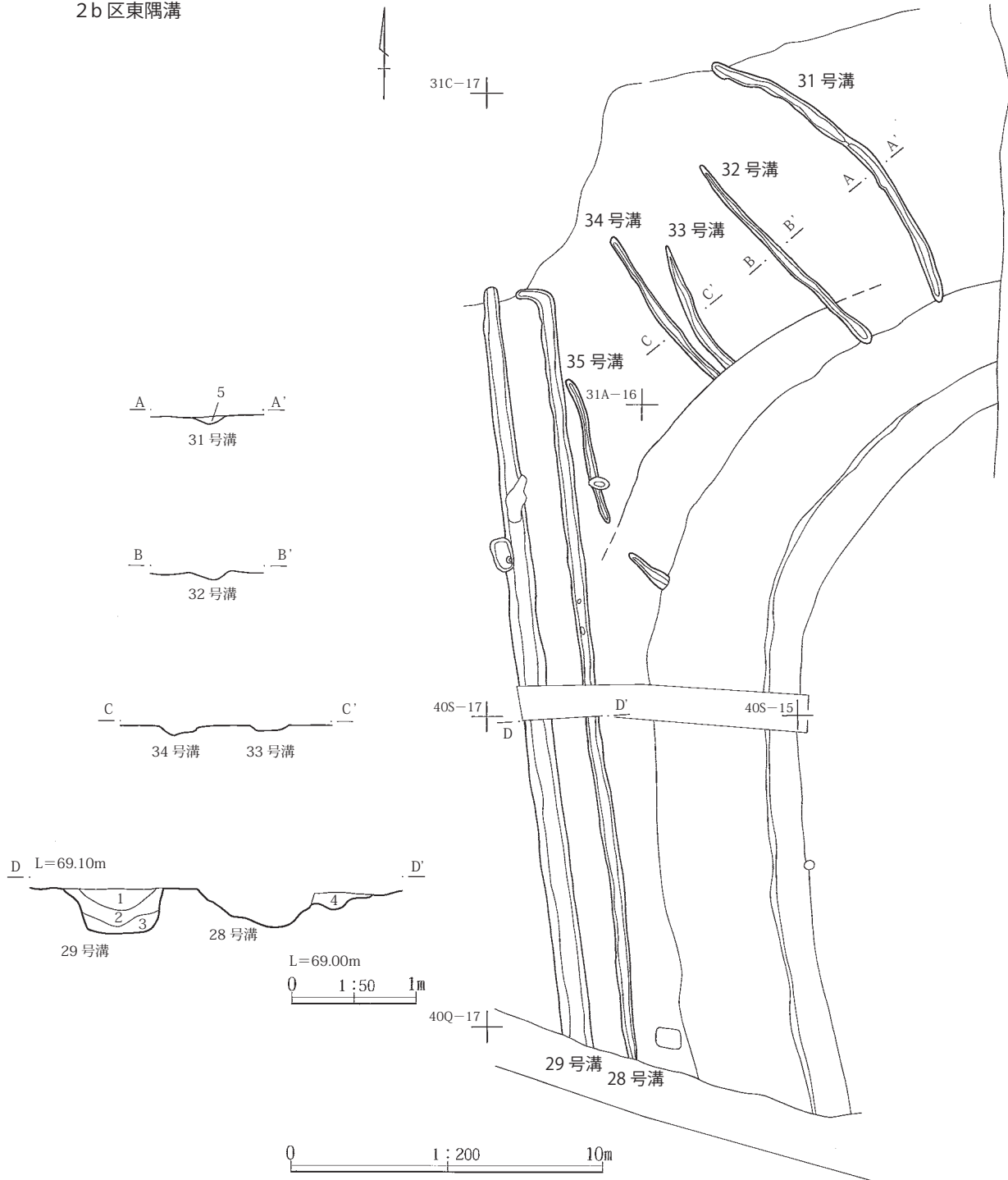
形状規模 32・34号溝は直線的で、31号溝は北東側へ膨らむように湾曲し、33号溝は南西側へ膨らみ、35号溝はS字状に曲がっている。蛇行の方向などに統一性はないが、全体では15号溝の屈曲部分から40号溝が湾曲する部分へ広がって流下したように見える。最も長い31号溝で11m、短い33号溝で5m前後の長さを測る。幅は太い部分が31号溝の東側で40cm前後、細い部分が35号溝で20cm前後であった。各溝の底面レベルはほぼ水平で、18号溝へ繋がる31号溝のみ北西側が5cm低くなっている。各溝の断面は平坦であるか不規則なU字状で、強い水流は想定できない。

方位 32号溝 N-45°W 34号溝 N-37°W

遺物 32号溝に土師器片が1片の混入が見られる以外、出土遺物はない。

所見 他の地点では見られない痕跡で、15号溝と40号西溝(館西堀)が同時期に開口していたことを示すものと考え、遺構とは想定しにくいを図示した。明確な根拠はないが、15号溝屈曲部分に見られる多量の礫廃棄(集石)により、氾濫を引き起こした可能性がある。

2b区東隅溝



2b区28・29・31号溝土層説明

- 1：暗オリーブ褐 (2.5Y3/3)：粒子粗い砂質土。ローム粘質土ブロック (径2～5 cm) を含む。しまり弱い。人為的埋土。
- 2：黒褐 (2.5Y3/1)：砂。ローム粘質土粒 (径1～2 mm) を混入。粒子粗くしまり弱い。
- 3：黒褐色粘質土 (10YR3/1)：2層の砂をラミナ状に含む。ロームブロック (径3 cm) を混入。粒子細かくしまり良い。水流痕。
- 4：にぶい黄褐 (10YR5/4)：砂質土。微小のAs-Bをやや多く含む。粒子やや粗く、しまり良い。28号溝埋没土。
- 5：灰褐 (7.5YR4/2)：砂質土。微細な黄色土粒少量と、白色軽石 (径1～3 mm) やや多量に含む。水流痕のようだ。粒子細かくしまり良い。31号溝埋没土。

第37図 2b区28・29・31～35号溝

(4) 墓坑

調査では骨の出土が確認できた土坑状の施設に墓坑と名付け、13基を扱った。このうち8・10・11の3基は馬の骨が埋葬したような状態で確認できた。報告では動物骨出土の遺構はA墓坑として、通番はそのままAの文字を加え(5)項で扱った。

北館内で7基、北館周辺で1基、南館内で2基の墓坑を調査した。いずれも30区内の遺構である。北館では方形区画の南側に墓坑が散在しており、建物が密集する地点と一部で重複している。館内が居住域であった時期に同時存在した施設とは考えにくい。また、2号墓坑は大溝の縁に設けられており、6号墓坑は掘立柱建物に後出することから、墓坑は館内が居住域であった時期に後出する遺構と判断した。

各墓坑は最低でも約2mの距離を離して掘削されているが、まとまりをもっているようでもある。4～6号墓坑はグリッド12ラインに沿うように南北一列に並んでいる。3・7～9・12号墓坑は12ラインから12mの間隔を置いて散在している。

副葬銭を伴う遺構が7基あったが、3枚のみの出土という遺構が3基あり、当初から半数の副葬があった可能性があるものとする。銭種は北宋銭が主体だが明銭や朝鮮通寶等と混在するものが5基と多い。

各墓坑の記載について、規模は長軸長×短軸長×深さの順で記した。出土銭貨はすべて渡来銭で、寛永通宝は含まれていない。銭貨については275頁以下の一覧表に記した。出土した骨類については本文238頁に記した。東側に隣接する福島飯玉遺跡では火葬遺構の他、墓坑を1基調査している。西側に隣接する本遺跡2区の西館やさらに西側の斉田中耕地遺跡でも墓坑は確認されていない。北館・南館とその東側へわずかに続く特徴的な遺構で、比較的短期間の墓域であったと推測する。

1号墓坑 (第38図 PL-8①) 南館北隅の建物群の間で調査した遺構だが、建物とは重複していない。18・19号の平行する2本の溝の中間にある。整った方形プランを呈しているが、底面の立ち上がりが緩やかで、規模も小さくピットとあまり差がない。ピットとして掘り下げ中に人骨片の出土があり墓坑とした。骨の出土地点は記録できていない。 **位置** 30L-8グリッド

軸方向 N-84°E **規模** 42×34×5.0 (cm)

備考 出土遺物はない。出土人骨は乳歯歯冠部分との鑑定結果が得られた。規模の小ささは、1歳前後の小児の墓坑であるためと分かった。それでも伸展葬には足りない規模である。

2号墓坑 (第38図 PL-34) 北館の南堀外、大溝の縁部にかかる位置にある。骨片状の白色出土物から墓坑とした。南側を24号溝に大きく削られるが、底面付近に影響はない。 **位置** 30Q-9グリッド

軸方向 N-5°W **規模** 104×52×31.0 (cm)

備考 南隅底面から5cmの高さで砥石を出土している。副葬品であれば本遺跡で銭貨以外の唯一例となるが、上面溝からの混入の可能性もある。骨片は分析に耐えるものではなかった。

3号墓坑 (第38・39図 PL-8②・34) 北館東寄りの墓坑の多い地点にある遺構で、南側4mに7号墓坑、北東側2.5mに9号墓坑がある。20号建物区画内にある。浅く不明瞭な遺構である。ピットと差のない規模であるが、骨片と副葬銭の出土があり、墓坑として扱った。

位置 30S-10グリッド

軸方向 N-6°W **規模** 53×51×3.0 (cm)

出土遺物 六道銭が西寄りの床直上で、まとまって融着した状態で出土した。最新銭は宣徳通寶(明・1433年)で他の5点は北宋銭である。

備考 1号墓坑に類似した小規模な遺構で、出土した歯は同様に5～6歳男児と推定されるものだった。小児でも伸展葬には足りない規模である。

4号墓坑 (第38・39図 PL-8③・34) 北館の南東隅にある平面形が歪んだ長円形の遺構で、骨片の出土により墓坑とした。2体の人骨が報告されたが、1体分(小児)の出土位置記録を欠いている。1体は屈葬が窺える。壁の立ち上がりは緩やかで、不明瞭である。

位置 30R-12・13グリッド

軸方向 N-0° **規模** 93×59×9.5 (cm)

出土遺物 六道銭を出土している。出土位置はやや離れていて、北枕西向きに埋葬姿勢から2・4は頭位付近、1・3は懐に入れたと思われる地点が分かる。他の2点は覆

土中の出土である。最新銭は治平元寶（北宋・1064年）である。

備考 骨片は肢骨が想定されるが鑑定に耐えうるものではなく、遊離歯のみの鑑定を行った。

5号墓坑（第38・39図 PL-8④・34・35）北館の南東寄り、4号墓坑と6号墓坑の中間地点にある。31号土坑に後出するが、確認段階で重複を見落とし、人骨片の出土で墓坑の存在に気付いた遺構である。土坑との切り合いの記録を欠いている。平面形や立ち上がりは不明瞭である。

位置 30S-12グリッド

軸方向 N-0° **規模** (63) × (52) × 8.0 (cm)

出土遺物 12枚の副葬銭を伴う。2組の六道銭であろうか。あるいは31号土坑が把握できていない墓坑を壊した可能性もある。最新銭は永楽通寶（明・1587年）で2枚出土している。

備考 北枕西向きの屈葬姿勢が想定できる。出土人骨の状態はあまり良くない。確認できたのは30歳代女性と推定される歯冠部である。

6号墓坑（第38・39図 PL-8⑤・35）北館の南寄り、5号墓坑の北側6mの位置にある。平面形は幅の広い長方形を呈している。26号掘立柱建物P2に後出する

位置 30T-12グリッド

軸方向 N-0° **規模** 130 × 101 × 9.5 (cm)

出土遺物 副葬銭を3枚出土している。最新銭は洪武通寶（明・1580年）である。

備考 出土人骨は5号墓坑同様に30歳代女性と推定される歯冠部である。頭位および腿や脛部分と推定される骨より北枕西向きの屈葬姿勢が推定される。骨は鑑定できる状態を保てなかった。

7号墓坑（第38・40図 PL-8⑥・35）北館の南寄りにある5基の墓坑群中、最も南側にある。浅い遺構で、確認できた範囲では不整形になっている。

位置 30R・S-10グリッド

軸方向 N-6°W **規模** 84 × 67 × 6.0 (cm)

出土遺物 頭位付近から六道銭を出土している。最新銭は朝鮮通寶（朝鮮・1423年）である。

備考 出土人骨は20歳代女性と推定される歯冠部であ

る。肢骨や頭骨が想定でき、その位置から北枕西向きの屈葬姿勢が復元できる。

9号墓坑（第38・40図 PL-8⑦・35）北館内の建物の密集する地点にあり、19～21・23号建物の区画内にあるが、柱穴との直接重複はない。3号墓坑から北東2.7m、12号墓坑から北西1.9mの距離にあり、墓坑が最も近くに隣接する位置でもある。

位置 30T-9グリッド

軸方向 N-7°E **規模** 109 × 76 × 19.0 (cm)

出土遺物 六道銭を出土している。調査時には背中側にあたる地点より3点の把握であったが、骨クリーニング時に頭骨周辺と思われる位置から3枚が追加確認された。最新銭は永楽通寶（明・1587年）である。

備考 肢骨らしい骨から、通常より膝が下を向いた屈葬姿勢がわかる。鑑定できた出土人骨は40歳代男性と推定される歯冠部である。

12号墓坑（第38・40図 PL-8⑧・35）北館内の建物の集中する地点にあり、20号建物の柱穴と重複している。また、墓が多い地点の東隅にあたる。

位置 30S・T-9グリッド

軸方向 N-10°W **規模** 75 × 61 × 34.5 (cm)

出土遺物 副葬銭を3枚出土している。最新銭は元豊通寶（北宋・1078年）である。

備考 出土人骨は7～8歳男児と推定される歯冠部である。1・3号墓坑などに類似し小型で長軸と短軸の差の少ない方形プランである。本遺跡での子供が埋葬される墓坑の特徴が捉えられる。

13号墓坑（第38・40図 PL-35）南館の北寄りの建物群の間にある平面形が整った長方形を呈す墓坑である。建物との重複はない。1号墓坑から南東7.6mの位置に離れている。底面は平坦で、壁も垂直に近い立ち上がりをしている。

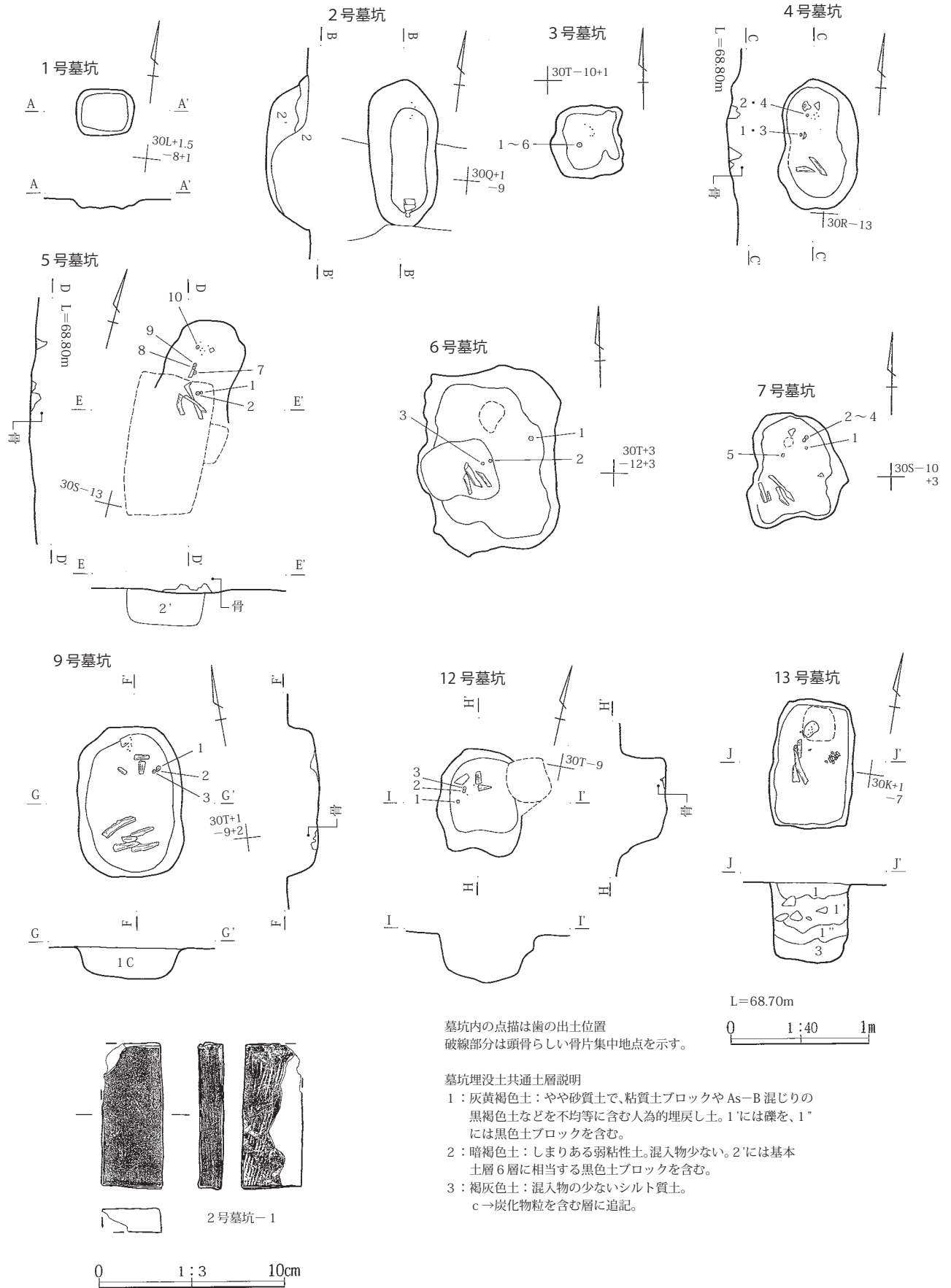
位置 30K-7グリッド

軸方向 N-1°W **規模** 94 × 60 × 48.5 (cm)

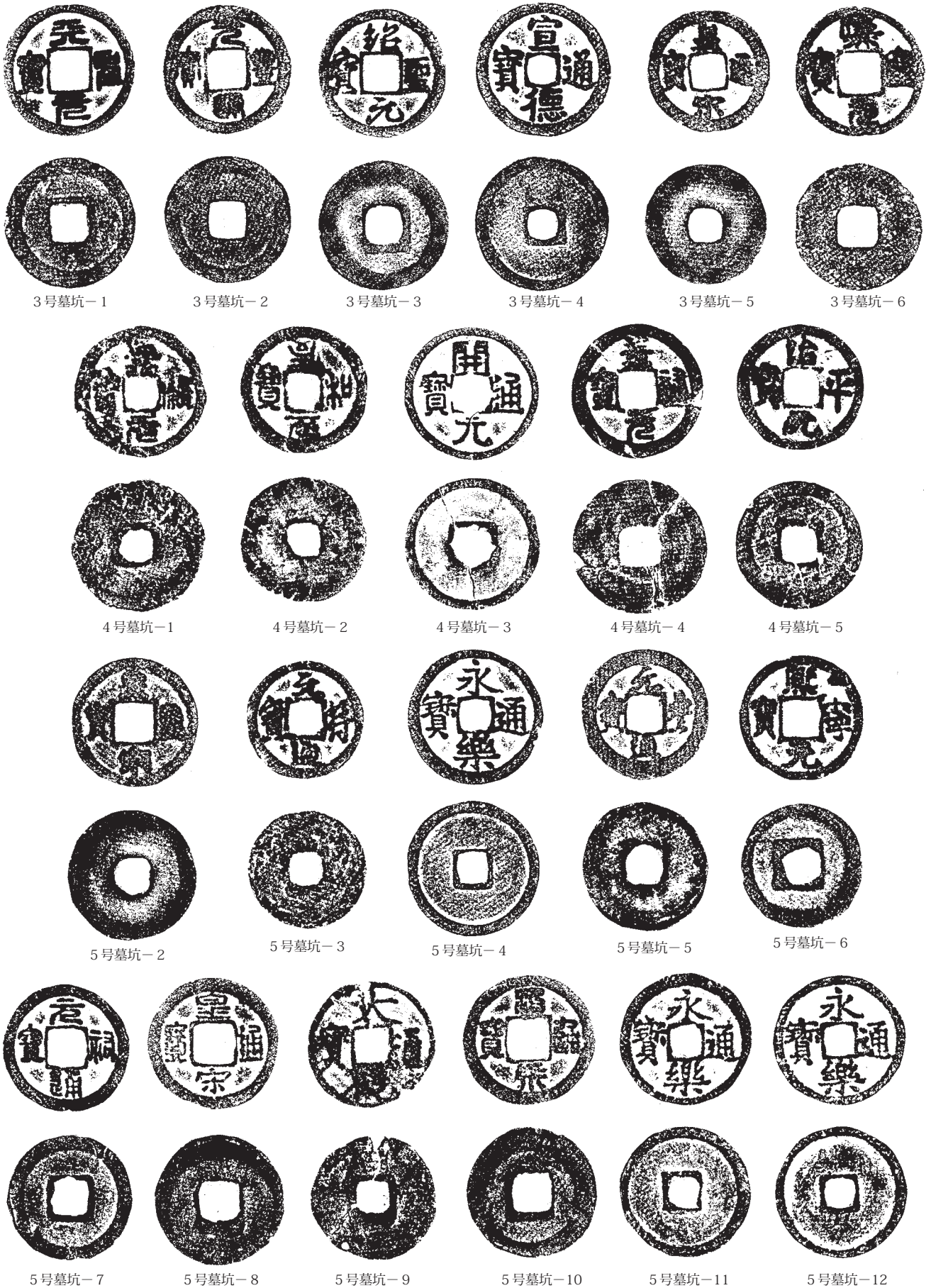
出土遺物 副葬銭を3枚出土している。12号墓坑同様に明銭を伴っていない。

備考 本遺跡の墓坑中、最も深さのある遺構である。埋没土中層以上で礫の混入が多かった。

II 発掘調査の記録



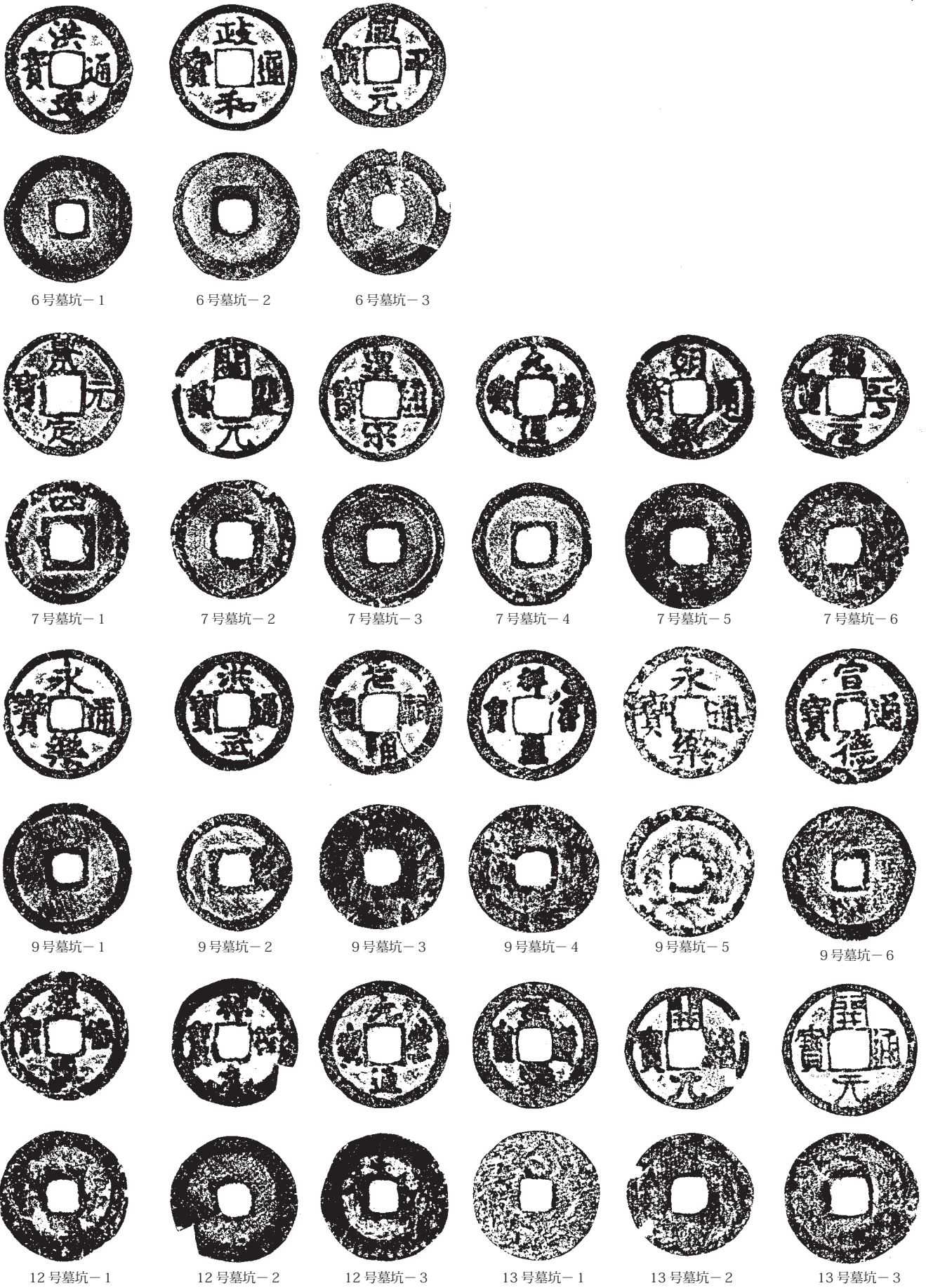
第 38 図 墓坑および出土遺物



第39图 墓坑出土钱货(1)

0 1:1 2cm

II 発掘調査の記録



第40図 墓坑出土銭貨(2)

0 1:1 2cm

(5) 獣骨出土土坑 (A墓坑)

1区の3基の土坑から、埋葬された可能性のある馬骨が出土している。形状は3基とも異なる。また、3基とも馬を埋葬した施設としては浅い。調査段階では人骨出土と同じ墓坑名称で扱ったが、整理段階で墓坑番号は変えずに数字の後にAを付け、A墓坑として一括してここで扱った。

出土した骨類については242頁に記した。

8号A墓坑 (第41図 PL-9④) 北館の南寄り、墓坑が集中して確認された一画の南隅にある。7号墓坑の東3.3m、12号墓坑のほぼ南3.2mにある。23号土坑と僅かに重複する。浅く不整なプランを呈し、底面は皿底状であった。骨の出土位置は床面よりやや浮いた状態であった。

位置 30S-9グリッド

軸方向 N-25°W 規模 119×99×8.0(cm)

備考 南側頭位の埋葬が推測されている。浅い遺構で歯の出土がなく、馬の年齢・性別等の詳細は不明である。出土遺物はない。土層観察を欠いている。

10号A墓坑 (第41図 PL-9②) 北館の建物群南隅にある。2号掘立柱建物の北東コーナー柱穴の東に接するようにして確認された。南北に長い方形で西辺が短く台形気味の平面形だが、四隅に丸みの少ない整美なプランである。底面は比較的平坦である。壁の立ち上がりは北・西側で急で、南・東側で緩やかである。

位置 30R-5グリッド 軸方向 N-12°W

規模 163×102×23.5(cm)

備考 出土した骨の状態が悪く、馬と推定されたが、埋葬状態は不詳である。出土遺物はない。

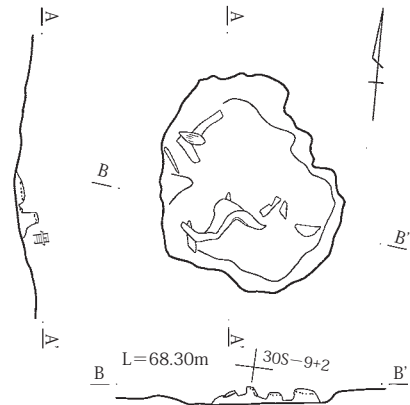
11号A墓坑 (第41図 PL-9③) 唯一館区画の外にあるA墓坑で、南館西外にある。東西に長い方形で規模は10号A墓坑に近いが、隅の丸い歪んだプランである。2面水田下から確認された8号溝に先出し、床面近くまで壊されている。埋没土は館区画内の10号A墓坑と変わらない。

位置 30L-13グリッド

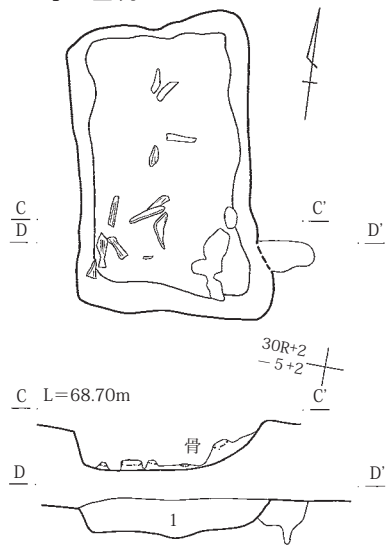
軸方向 N-12°W 規模 165×100×20.5(cm)

備考 遺物の出土はない。東側頭位で埋葬されているようだ。

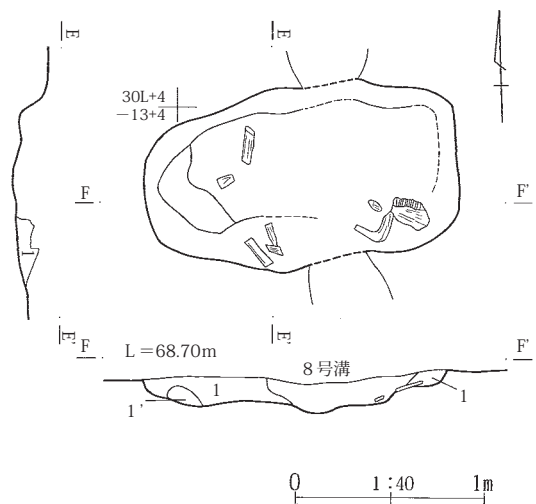
8号A墓坑



10号A墓坑



11号A墓坑



10号A・11号A墓坑土層説明

1: 灰黄褐色土: 粒子の細かな粘性土でAs-Bの混入やや多い。
1': 褐灰色粘性土ブロックの混入多い。

第41図 獣骨出土土坑

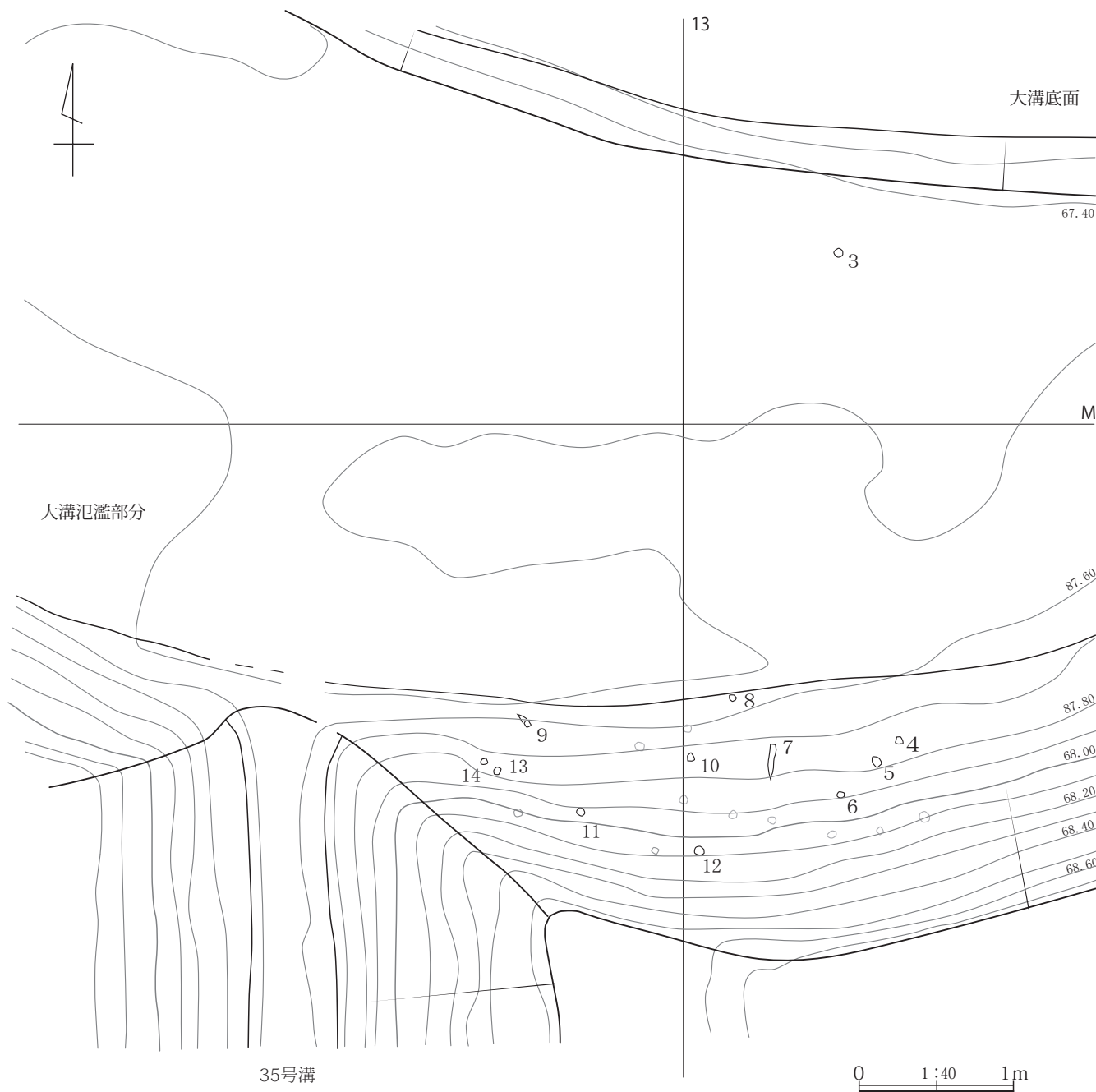
(6) 大溝（氾濫部分）と杭

(第42・43図 PL-9④~⑧・33・35・36)

北側から南側へ直線的に開削された大溝は、二つの中世方形館の間をほぼ直角に曲がって東へ流路を変える。このコーナー部分にあたる南館の一部を削った氾濫の痕跡が30区M-14グリッド付近を中心に残っている(第44図参照)。下端の計測でも幅27m、奥行き6mの大規模なもので、複数次の氾濫痕跡のようである。天明三年段階で確認される大溝跡の水路(0号溝)はこの氾濫

部分をトレースしている。この氾濫部分南側斜面や底面に多数の木杭が打ち込まれていた。目的不明の施設であるが、氾濫後の復旧作業に打設した杭が、たび重なる氾濫で復旧土砂が流出し、杭の根本部分のみ残存したものと推測する。

これらの杭は、用水路が開削された第5面の時期以降、氾濫部分がほとんど埋もれる第3面以前の施設として第4面で扱った。その他に周辺から2地点で、小規模ではあるが同様の杭が出土しており、ここで一括して扱った。



第42図 大溝氾濫部分の杭

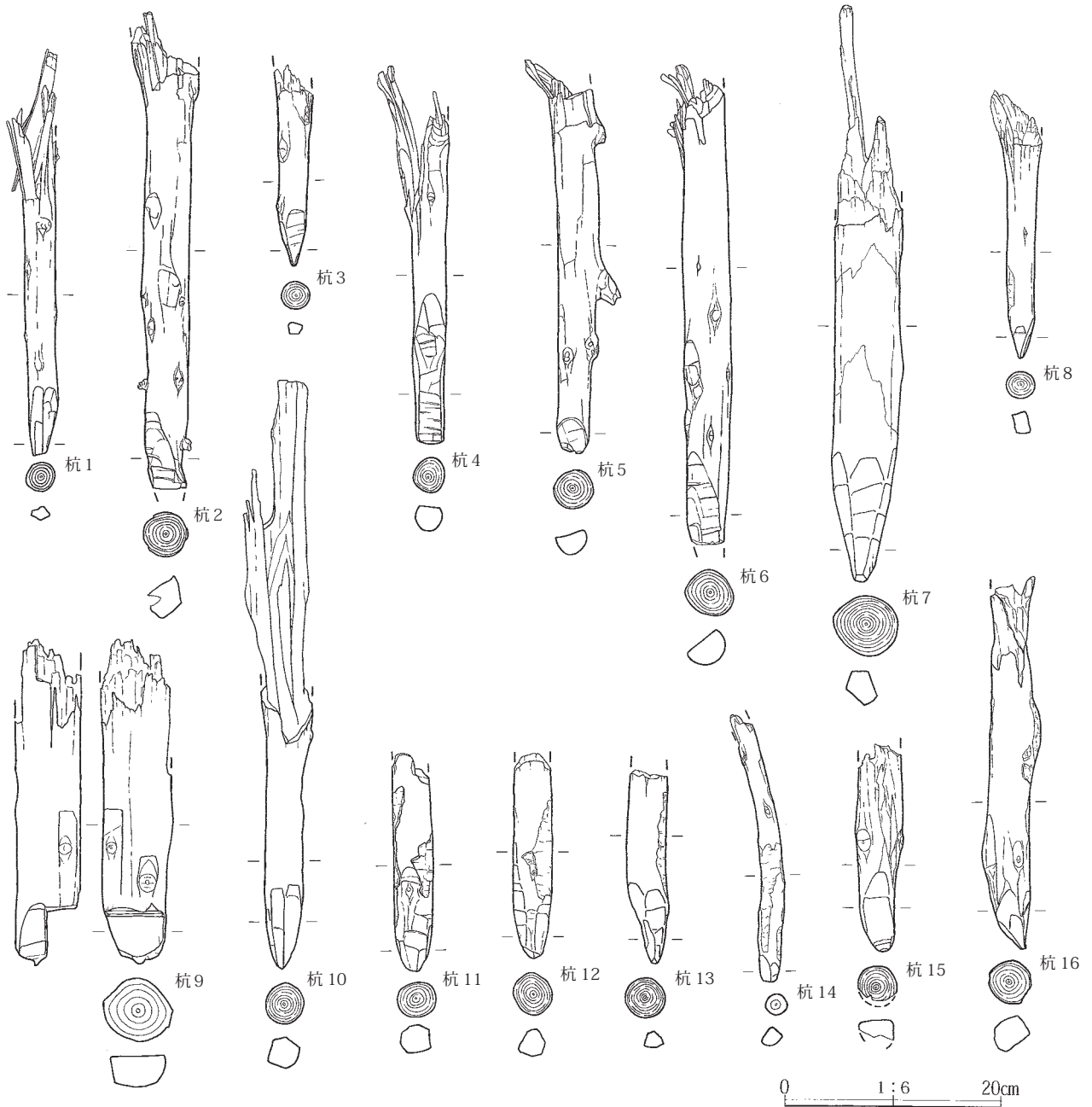
杭は建築材再利用と思われるものが1点で、他は自然木の根元側を1～4回斜めに削り落としただけの簡単なもので、枝払いの不十分なものもあった。

図示した杭は16本ある。1・2は用水路北側斜面が37号溝と交差する地点の西側、Q-7・8グリッド付近の杭である。(PL-9⑥参照)

3～14は氾濫部分K・L-14グリッド付近の杭である。3は北側の平坦面に1本だけ離れて確認された。4以降は南側の斜面に打設されたもので集中して確認でき

た一画にある。氾濫で削られた壁面沿いに、西隅は南館主堀である35号溝が交差する地点直前まで約4mの長さで集中して打設されていた。この斜面の高さは1.1m、平均斜度32度で、杭は比較的傾斜の緩い下側に偏っていた。図示した以外に残存状態が悪くて取り上げられなかった杭が2本、杭の痕跡だけできたものが8本あった。

15・16は54号溝(第71図参照)東寄りの底面付近に打設されていたもので、次期を推定する根拠を持たない杭であるが、大溝開削後の遺物と考えたい。



第43図 出土杭

4 第5面の調査

(1) 概要

調査区域のほぼ全域で遺構が確認できた面である。ただし、大溝のような規模の大きな施設の場合、後世まで使用されており第4面以降と共通している部分も多い。大溝の屈曲部分を囲むように3か所の方形館が確認され、その内部を中心に多数の遺構があった。柱穴状の小ピットは1800を超え、ここから81棟の建物を把握した。他に竪穴状遺構8軒、井戸22基、土坑98基がある。これらの中には時期不明の遺構も多く、不明瞭な施設はこの面で扱ったものもある。

(2) 5面土層観察の共通記号

5面の遺構にはピット等の小形施設がきわめて多いため、土層の説明にあたっては以下のような共通記号を設けた。

- A 暗褐色砂質土 2.5Y5/3 粒子の細かな洪水砂を主体とする層。基本土層の3層に近い。黄色味をおびることが特徴で砂質だが粘性もある。若干斑鉄が見られ、炭化物粒を散見する場合がある。
- A' では黒色土が混入し黒色味が増す。粒径はやや細くなり粘性もやや増す。
- B にぶい黄褐色土 10YR4/3 Aに近い砂質土だが、粒径やや粗く、黒色味やや増す。規模の大きな溝の埋没土などにみられる土で、ピット中に見られることは少ない。浅間山と考えられるが給源不明のパミス細粒を霜降状に含む。
- B' では基本土層4・6層相当の黒色土の混入が多い。
- B'' は黄褐色のシルトの混入が多い。
- C 灰黄褐色土 10YR4/2 浅間B軽石下の黒色土と砂質土の混土で、榛名山給源のパミスやAs-YPやその下のシルトなどの粒状土が混じるしまりの強い層。混入物の様子で次のように細分した。
 - C-1 比較的混入物少ない。
 - C-2 黒色土の比率が高い。
 - C-3 榛名山二ツ岳の噴火を起源とする泥流土の混入が多い。3'は同じ泥流を少量含む。
 - C-4 前述の混入物を雑多に多量に含む。
- D 暗灰黄色土 2.5Y4/2 A、Bに比べ、さらに粒質の

粗い砂質土主体だが、シルトの混入も多いのか、ねっとりした土となっている。

D'にはシルト質土のブロックの混入さらに多い。

E 黒褐 10YR3/2 粒子の細かな弱粘性土。基本土層に対応しない不明な土。混入物少ない。

F 色調Dに近いが、As-Bの混入多く、基本土層3層土と4層土の中間的な土質となっている。

F'には雑多な混入物多い。

G 黒褐色土 As-C混じりの黒色土。この土が主体的な埋没土となっている遺構は古代の可能性がある。

・ その他に灰を混入するa、焼土を混入するb、炭化物粒の混入のあるc、締まりが強いd、締まりが弱いe、を記号末尾に付した。

(3) 大溝(用水路)(第44・45図 PL-11)

北側から流れ込み、1区の中央で東側へ直角に曲がる人工的な水路である。本遺跡の東に隣接する福島飯玉遺跡でもこの水路の延長部分を調査しているがさらに東側にある、福島飯塚遺跡には存在しない。飯玉遺跡と飯塚遺跡の間でさらに直角に南へ曲がるのが推測される。

方形館群と本水路との新旧は把握できていないが水路の規模から推測して、方形館群に先出する施設と考えるのが妥当であろう。

埋没土は圧倒的に川砂が多い。東隅の土層観察(第19図参照)では南寄りではラミナ状の堆積場所が多いが、北側では流路を頻繁に変えながら埋没していった過程が看取できる。底面付近に礫が多い点は、開削後の通水時に強い水流があり、大きな河川からかなりのサイズの礫が流れ込んだ痕跡と判明した(伊勢屋ふじこ氏の発掘調査現場でのご教示による)。大きな川に該当するのは利根川以外考えられず、本溝の開削時期は、利根川が中世に現在の地点に変流した以降と想定できよう。なお、大溝最下層の礫については本文237頁に記した。

深い遺構のうへ埋没土が砂で湧水も激しく、調査区境では段掘りや傾斜を付けながらの調査となった。それでも壁はすぐに崩落し、十分な土層観察はできなかった。

位置 21C-16グリッド付近の調査区境で北隅が確認できる。ほぼ直線的に南へ下った後、東方へ直角に曲がる。屈曲点は内側が30R-15グリッド、外側は汜



第44図 大溝全体図

濫のため判りにくいが 30 N-17 グリッド付近である。東隅は 300-3 グリッド付近で調査区境となるが、隣接する福島飯玉遺跡で約 70 m 東先まで確認されている。
形状 膨大な規模を持つ遺構で、氾濫によって崩れた箇所も多いが、本遺跡東寄りから福島飯玉遺跡にかけての残存状況は整った形状の断面逆台形を呈しており、開削時の様子を留めていると思われる。屈曲部分内側は直角に曲がる整美な旧状が残っているにもかかわらず、北館直下の南側や西側には底面から 75 cm 上から始まるテラス状の中段が見られ、2 回以上の工程で掘り下げられたことが想定された。中段部分は北側で 32 m の範囲がある。中段が見られなくなる地点付近から溝の走向はやや南へ傾いて福島飯玉遺跡へと繋がっていく。底面は前橋泥流層に相当する硬質な地山上にあり、開削時の状況を留める平坦な面が残存している。

規模 内側で南北走向部分は 30.4 m、東西走向部分は 59.7 m 分を調査した。比較的氾濫の影響の少ないと思われる東隅 5 ライン付近で上幅 12.1 m、下幅 6.4 m、深さ 235 cm 前後を測る。南北走向部分の S ライン付近では上幅 10.1 m、底面は二段底状であるが、下面で 3.6 m、中段を含めると 4.7 m、深さ 225 cm 前後を測る。底面レベルはこの間に 18 cm 東側へ向かって低くなっている。

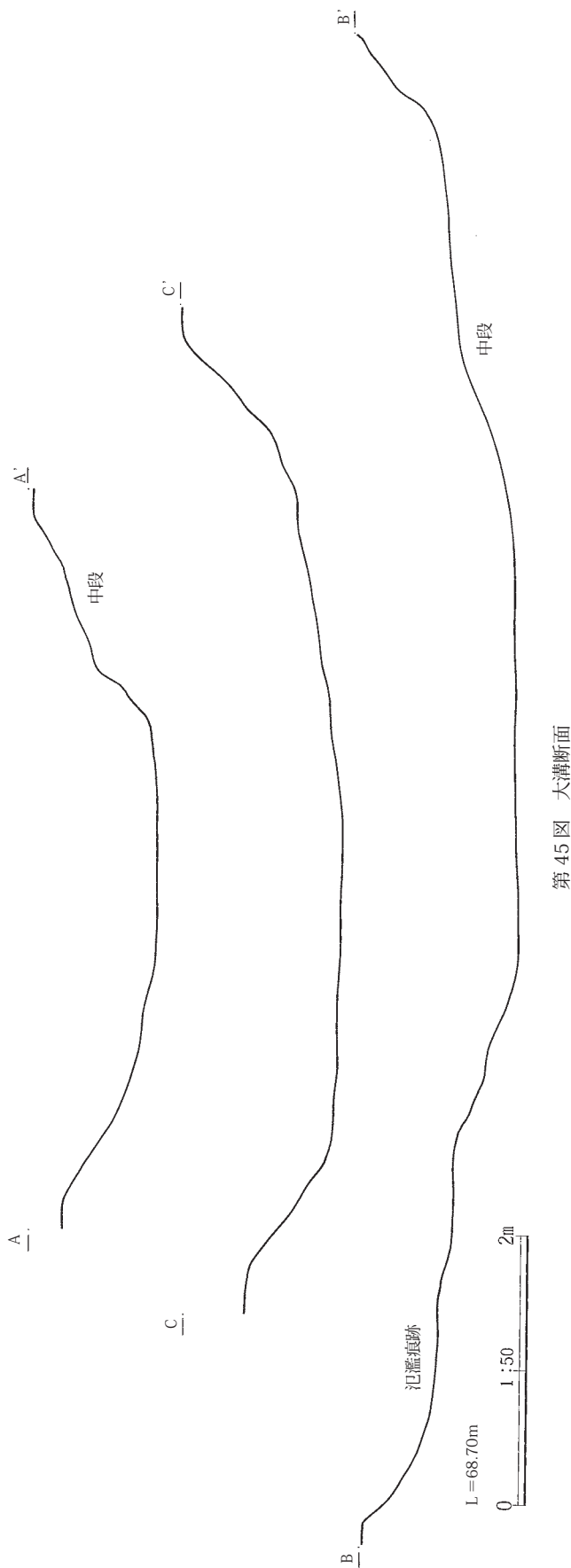
方位 (南北走向部分) N-3° E ~ 2° W
 (東西走向部分西側) N-90° ~ 86° E
 (東西走向部分東側) N-79° W

埋没土 本文 31 頁に記した。

遺物 本文 32 頁 (第 20 図) に 10 点を示した。上層流路での出土がほとんどで、溝の開削時期を推定する資料はない。最新の流路跡 (0 号溝: 第 8・30 図参照) では近年の陶磁器片やガラス製品も見られる。図示した以外にも陶磁器碗皿類 154 片、軟質陶器 31 片、その他近世遺物 25 片がある。他に土師器・須恵器の混入品 59 片、近代陶磁器 79 片がある。

所見 本水路が B 軽石下水田に伴う水路等の施設を踏襲したものでないことは、福島飯玉遺跡 3 区 11 号溝が大溝を斜めに横切った位置で確認できることから推測できる。

北館周辺でテラス状の高まりが見られることより、縄張り段階の直角な掘削面と、水流を考慮して外側の丸みをつけた 2 つの掘削工程があることを想定した。



第 45 図 大溝断面

(4) 方形館と区画溝

大溝の屈曲地点を囲うようにして、3か所の方形館が確認されている。いずれも調査区域外まで広がっており、全容を把握できた施設はなかった。これらの館跡を大溝の屈曲点を基点に北館・南館・西館と呼んだ。この項では3か所の方形館ごとに、館を囲う堀と関連する溝について記した。

北館 大溝屈曲地点の内側（北西側）に立地する施設である。大溝自体が外堀になるような位置にあるため、防衛には最も適した占地である。21 溝を基本的な堀とし、調査範囲で南側全体と西側・東側の南寄りにあたる『コ』の字状部分が調査できた。21 号溝の外側には、西側・南側に 22 号溝が隣接して開削されている。東隅にある 51 号溝は 21 号溝東隅から 7.5 m 離れている。

西辺と南辺は用水路の上端脇に溝を配し、東辺には間隔を広くして 2 重堀の構造になっている。北側は調査区域外である。

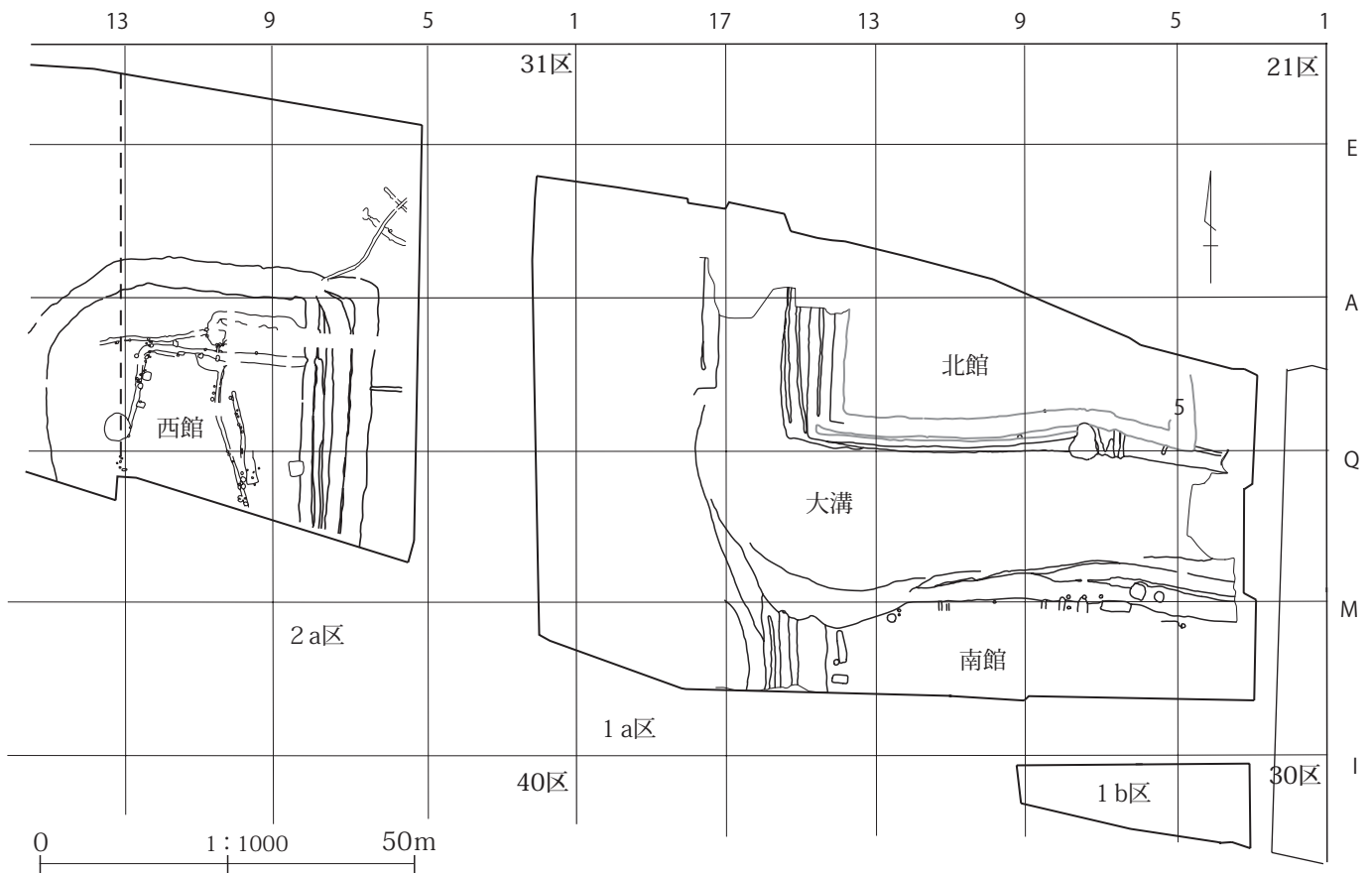
21 号溝 (第 47～51 図 PL13・36)

北館の内側区画を囲う堀である。西辺を 21 号西溝、南辺を 21 号南溝、東辺を 21 号東溝と呼ぶ。

位置 西隅は北側調査区境 21 B - 13・14 グリッドから確認でき、直線的に南へ向かう。南西隅 30 Q - 13・14 グリッドで直角に東へ折れた後、東寄りの 37 号溝付近で大きく北側へ膨らむが、南東隅の 30 R - 4 グリッドからやや鋭角に北へ折れ調査区域外へ抜ける。

重複 西溝内に 11 号井戸、東溝内に 9 号井戸が穿たれている。館区画内にある南北溝の大半は本溝と交差し、同時存在していない。

形状規模 方形館の内堀にあたる溝で、西溝・東部分は直線的だが、南溝は内方へ湾曲している。南西隅には 22 号溝へ続く張り出し部分がある。長さは全体を調査できた南溝は、底面で計測すると 39.8 m を測る。さらに西溝 13.9 m と東溝 12.4 m が調査できた範囲である。幅は西溝と東溝が広く 3.1～3.4 m あり、南溝では西側で 2.5～2.6 m、東側で 2.2 m 前後となる。底面レベルは標高で西



第46図 方形館区画概念図

溝部分では 67.95 m 前後を測り、南溝で 10cm、東溝で 20cm ほど低くなり、おおそ地山の傾斜に沿っている。

方位 (西溝) N - 4° E (南溝西側) N - 87° E

(南溝東側) N - 74° W (東溝) N - 6° W。

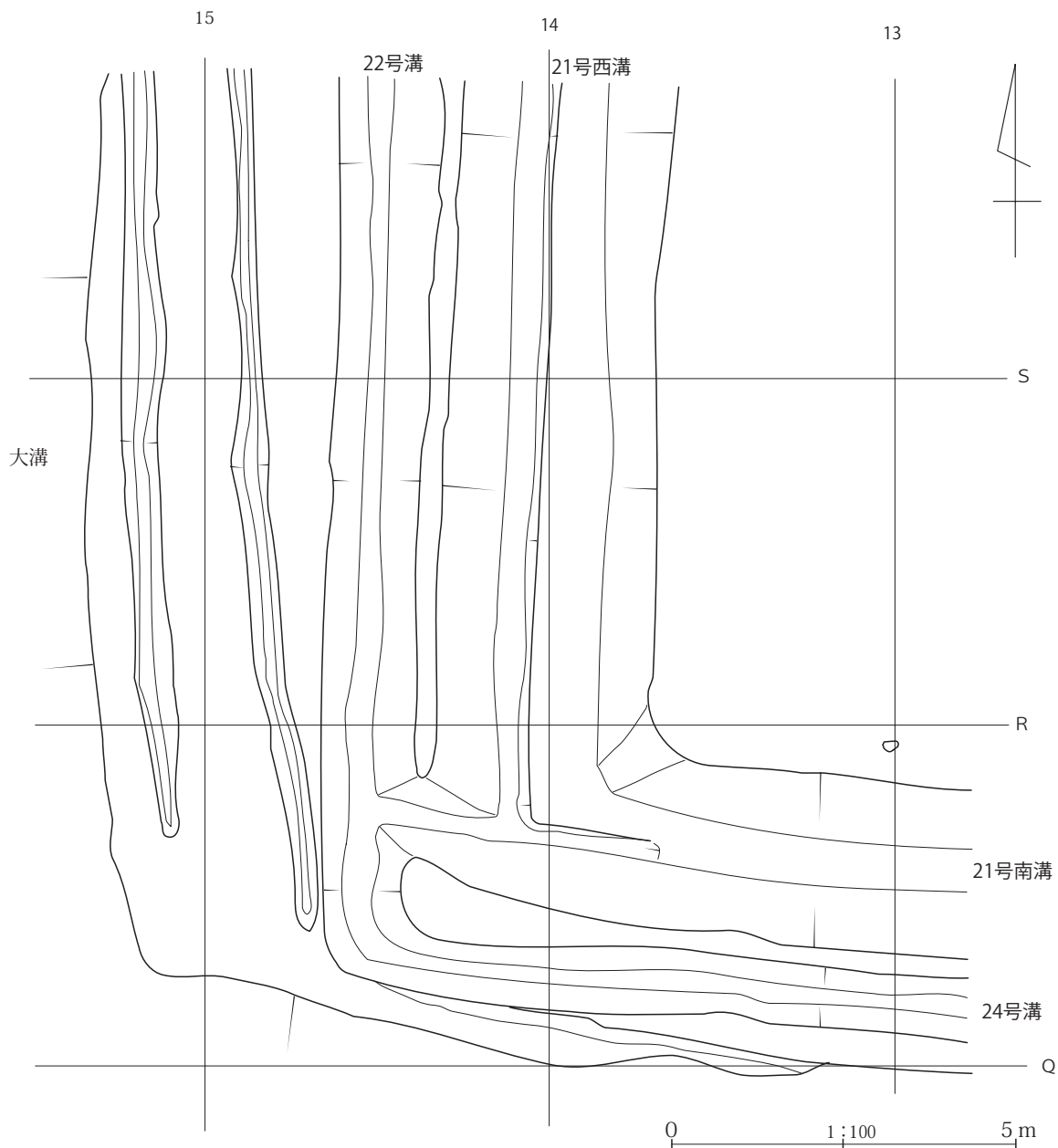
埋没土 貯水・流水の痕跡はなく、空堀であった。

遺物 37 号溝との重複部分周辺を中心に、中世の遺構としては最も多い遺物を出土した。図示したのは土器類 14 点、石製品 11 点であるが、溝底面直上からの出土はなく、中層から上層にかけて廃棄された多量の礫に混じって出土したものである。土器では鍋類が目立ち、石製品では 15 の砥石・26 の板碑以外は白であった。図示した以外でも鍋類 163 片、陶器 5 片、播鉢 3 片で鍋類

が著しく多い。他に土師器・須恵器が 8 片混入していた。所見 遺物が廃棄されるのは 21 号溝が半分ほど埋もれかけた段階である。什器類が中心で、石製品に墓所を想定する遺物は少ない。鍋類から 15 ~ 16 世紀代の年代が想定されるが、溝に廃棄するのはさらに後年と考えたい。

22・24 号溝 (第 47・51 図 PL12・37)

調査段階で西辺を 22 号溝、南辺を 24 号溝と呼んだが連続する遺構である。21 号溝の外側に近接して鍵の手状に曲がっている。調査面で 21 号溝とは 25 ~ 30cm の間隔にあるが、旧時の上端では重複しており、21 号溝より先に埋没していることが確認できる。



第47図 北館西側の溝

位置 北西隅は21B-14グリッドの調査区境で確認でき、ほぼ直線的に南へ向かう。30Q-15グリッドで直角に東へ折れる直前に21号南溝が西側へ突き出る部分と交差する。東へ折れた後、21号溝に沿うように北側へ湾曲するが、曲がり方は同溝より緩やかである。30Q-7グリッドで37号溝と重なり、その先では不明になる。

形状規模 底面は比較的平坦である。規模は22号溝が調査できた長さ17.1m、幅113~152cm、深さ45cm前後を測る。底面はほぼ水平で、南隅のみ21号南溝との合流点に向かって20cm低くなる。24号溝は全長35.4m、幅79~98cm、深さ35cm前後を測る。底面は比高差10cm前後の緩やかな凹凸がある。

方位 (22溝) N-3°E (24溝西側) N-86°W
(24溝東隅) N-80°E

埋没土 砂質土を主体としているが、水平に堆積する部分はなく、洪水による埋没ではなさそうである。

遺物 22溝部分で土師器5片が混入する。

所見 22号溝底面は南端を21号溝へ向かって低く傾斜させ、21号溝との段差を少なくしている。2本の溝が同時存在していた時期があると思われるが、本溝が先に埋没し、21号溝はその後も使用されたと考える。

51号溝 (第51・52図 PL13・37)

北館の東側外堀にあたる溝と考えた。東側が福島飯玉遺跡境の水路にかかり、一部しか確認できなかった。

位置 30Q-2から30R-4グリッド。

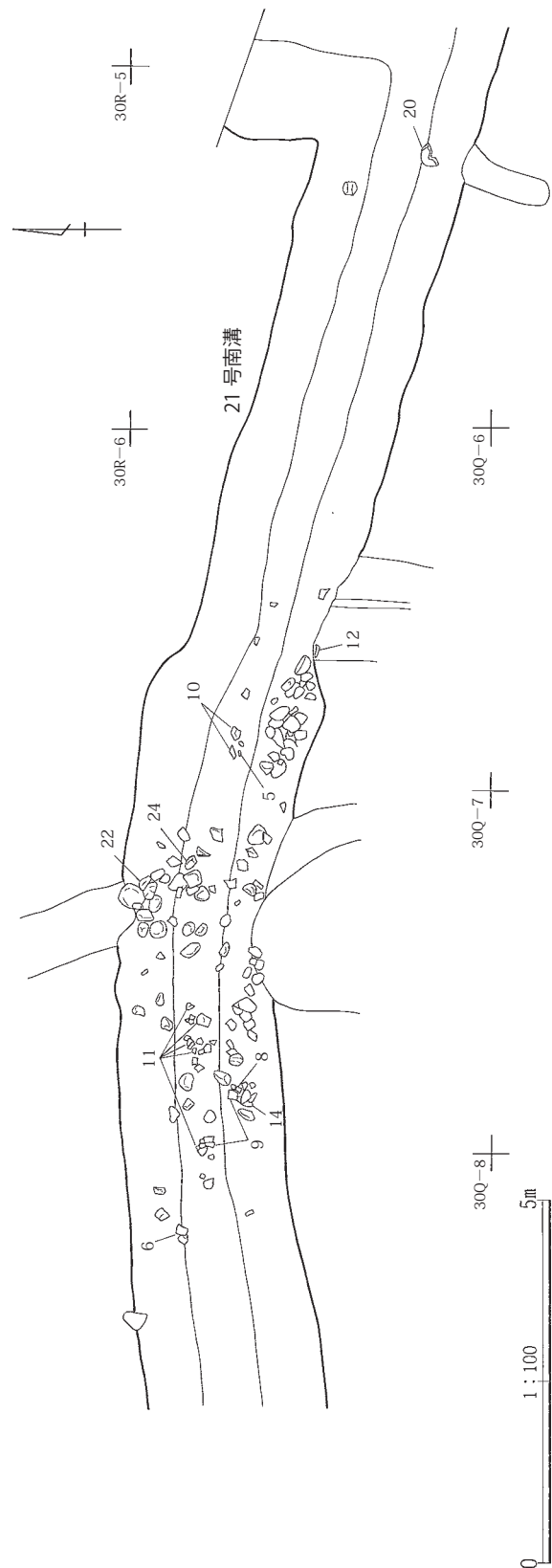
形状規模 直線的な溝だが、21号溝に比べ西側に大きく振れている。底面が狭い断面逆三角形に近い溝である。調査できたのは西上端9m部分で、東側上端は全く確認できていない。調査範囲内の形状から推定すると幅は3m前後になる。深さ94cmを測る。

方位 N-13°W

埋没土 洪水砂の堆積が多く、掘り直しや水流の痕跡は確認できない。

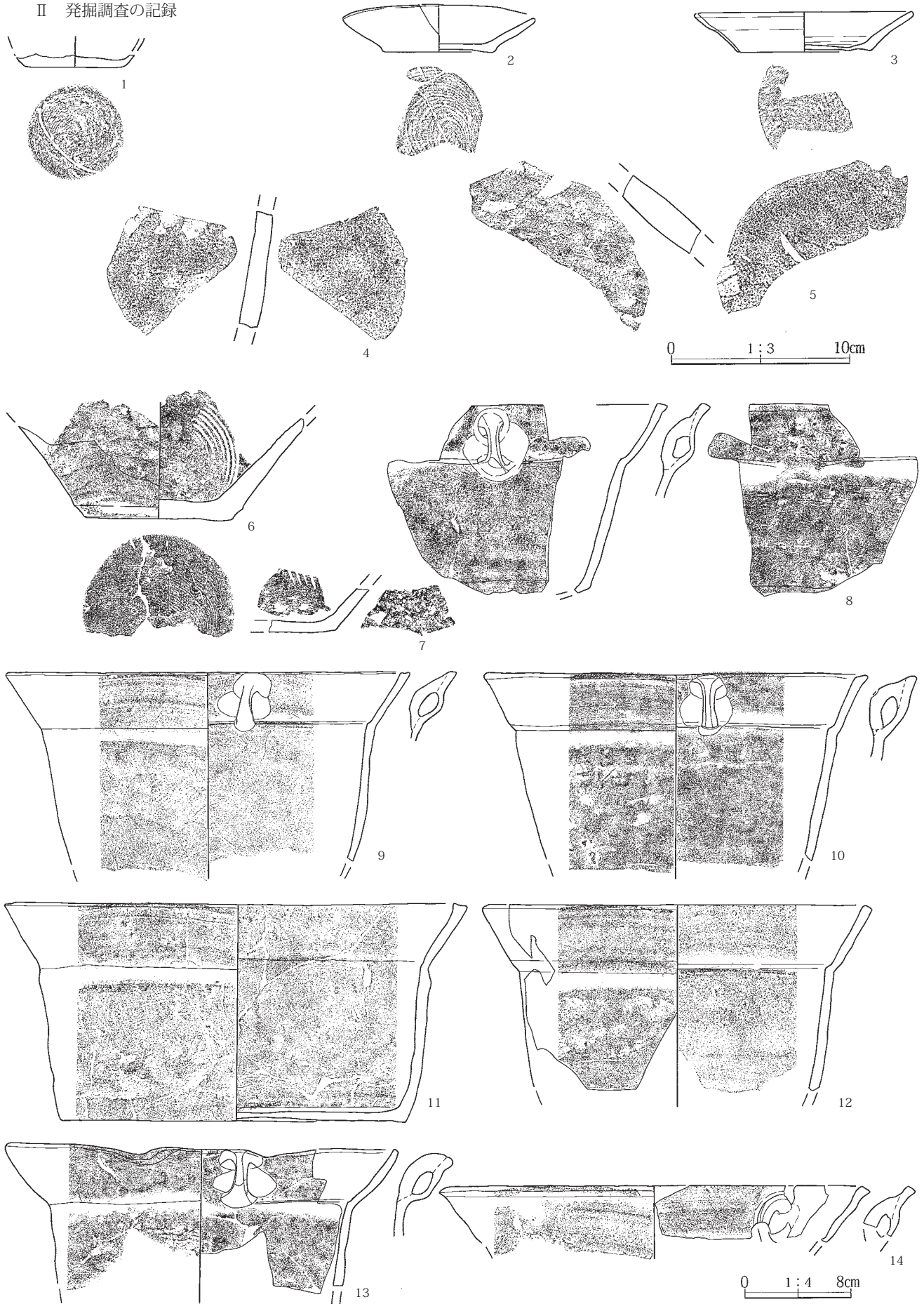
遺物 鍋の小片が1片出土したのみである。

所見 館内側にあたる本溝西側に土塁の痕跡は認められない。深さ・断面形状とも北館内には他に見られない溝である。

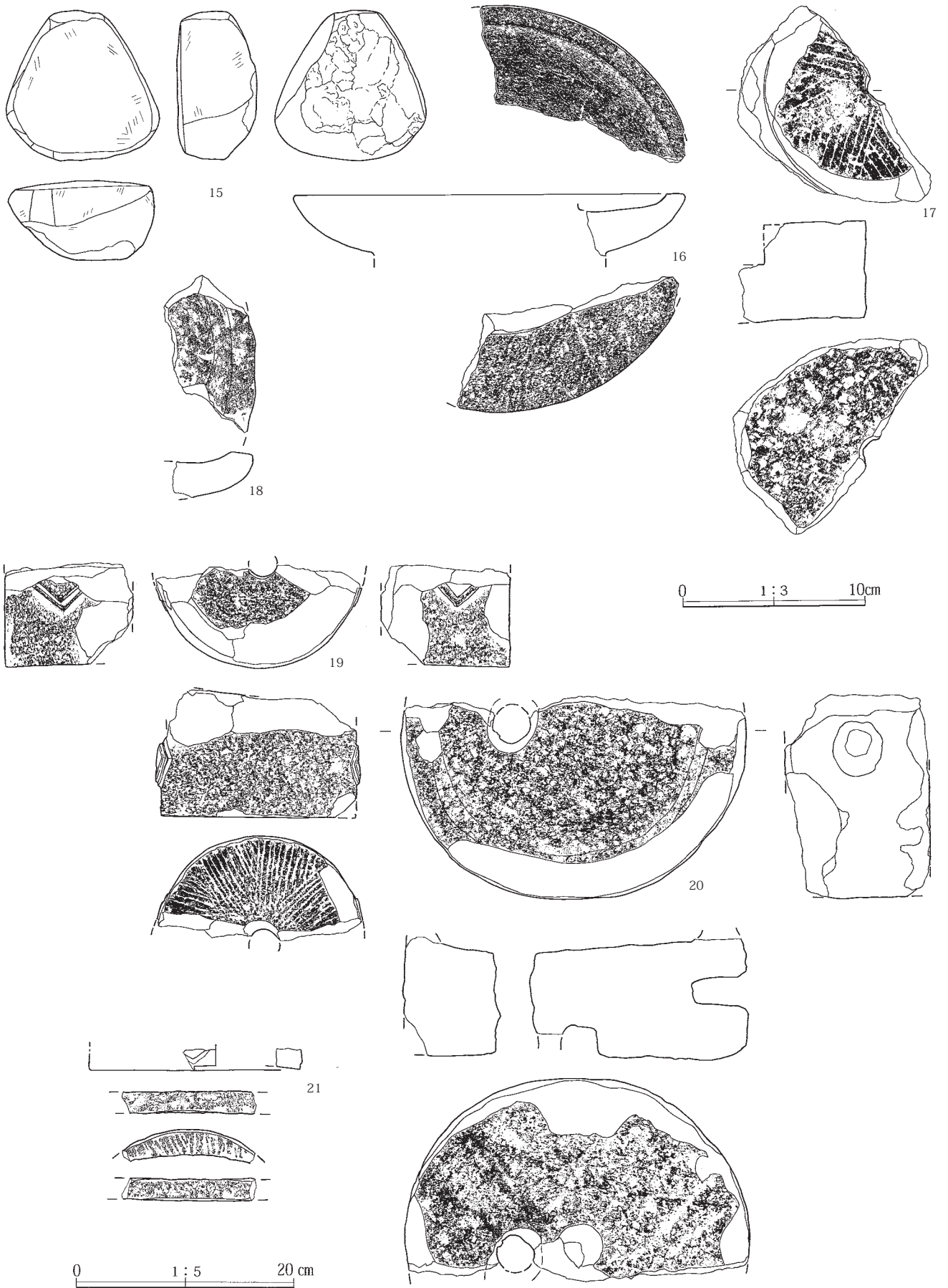


第48図 北館南側の溝

II 発掘調査の記録

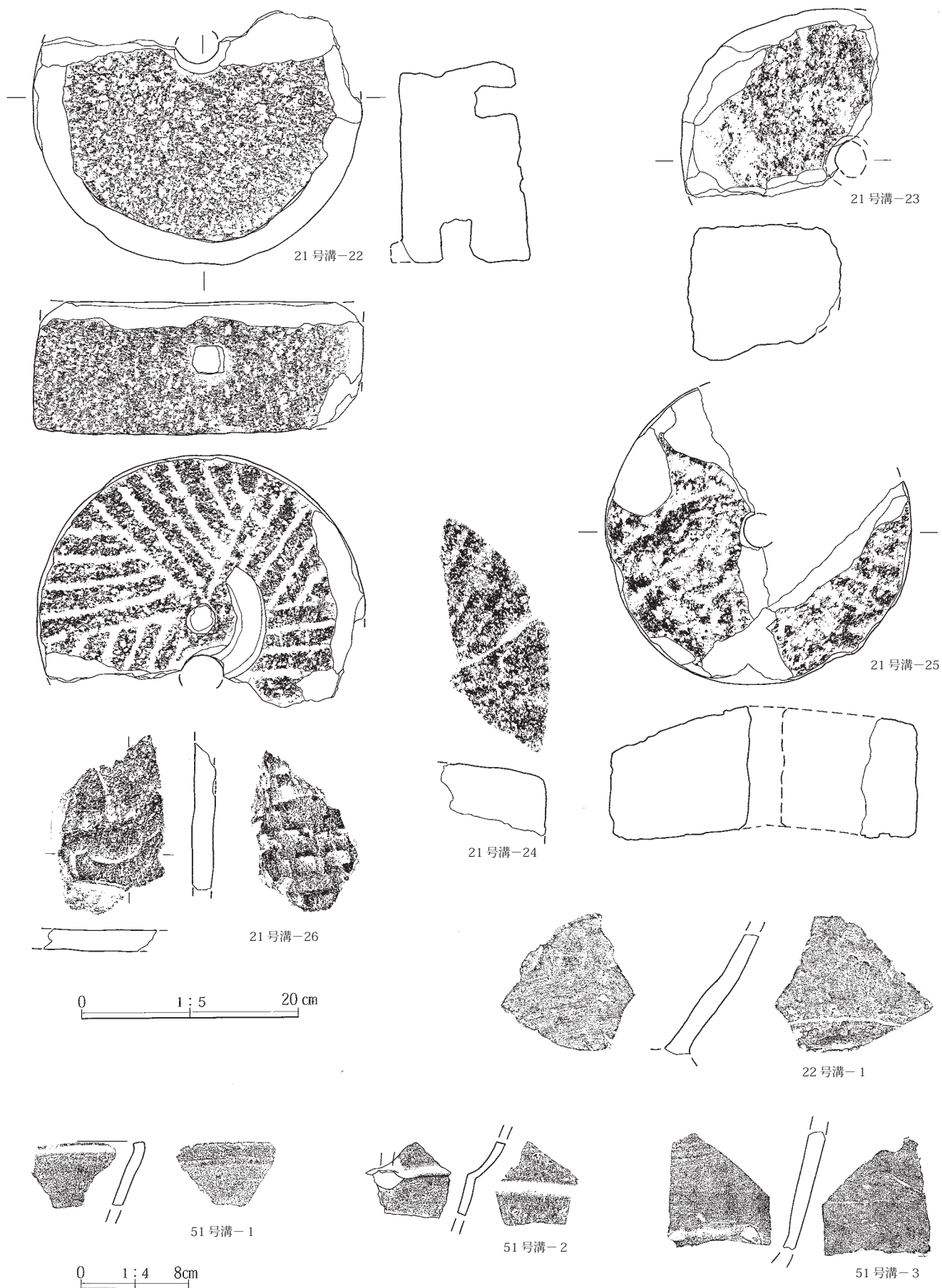


第 49 図 21 号溝出土遺物(1)

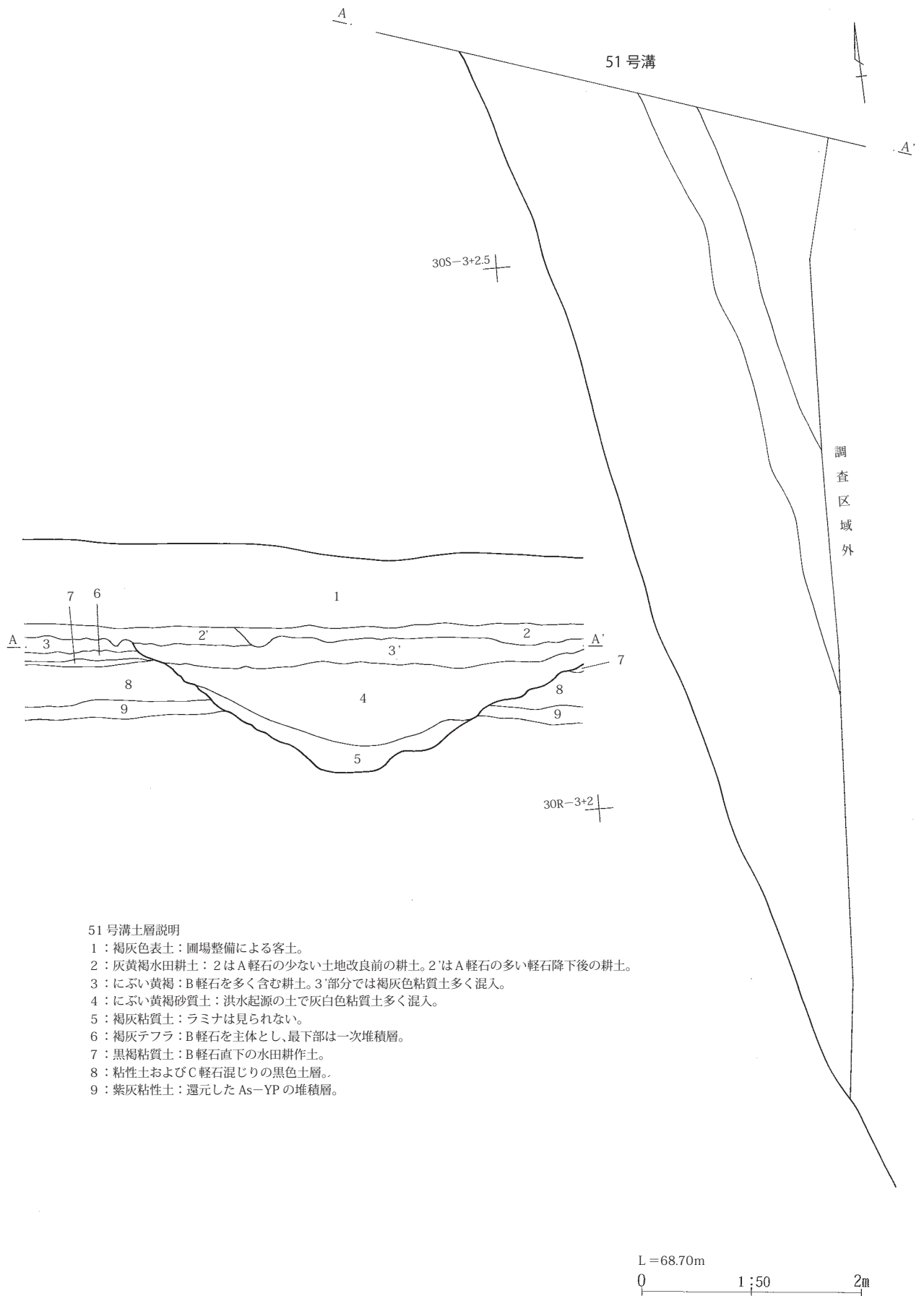


第50図 21号溝出土遺物(2)

II 発掘調査の記録



第51図 21・22・51号溝出土遺物



51号溝土層説明

- 1：褐灰色表土：圃場整備による客土。
- 2：灰黄褐水田耕土：2はA軽石の少ない土地改良前の耕土。2'はA軽石の多い軽石降下後の耕土。
- 3：にぶい黄褐：B軽石を多く含む耕土。3'部分では褐灰色粘質土多く混入。
- 4：にぶい黄褐砂質土：洪水起源の土で灰白色粘質土多く混入。
- 5：褐灰粘質土：ラミナは見られない。
- 6：褐灰テフラ：B軽石を主体とし、最下部は一次堆積層。
- 7：黒褐粘質土：B軽石直下の水田耕作土。
- 8：粘性土およびC軽石混じりの黒色土層。
- 9：紫灰粘性土：還元したAs-YPの堆積層。

第52図 1a区51号溝

37号溝 (第53・54図 PL13・17)

北館の内側区画を作る21号南溝が、本溝と重なる部分を頂点に大きく内側に湾曲している。21溝の開削時に先出していた施設と考えられよう。

位置 30P・Q-7グリッド。

重複 24号溝東隅を跨ぎ、大溝と21号南溝上端を繋ぐ。32号溝に先出する。

形状規模 確認できた長さ5.1mに対し、幅は最大3.85mを測る。北側の細い、狭い台形状もしくは三角形に近い歪んだ平面形を呈している。底面中央に幅80cmほどの溝状の窪みがあり、緩やかな階段状の段差をつけて南側へ低く傾斜していた。(第54図)

方位 N-5°W 上端が歪んでいるので、底面の溝状の窪み部分での計測である。

埋没土 底面直上に拳大の礫が多い。版築状の路面を探したが、人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。

遺物 2片の軟質陶器を図示した。他に軟質陶器1片と土師器5片の混入がある。

所見 調査段階では、大溝開削時の工所用斜路、または北館内へ舟を引き上げる施設などを想定し、付属施設の確認に努めたが、用途を推定する資料を得られなかった。想定した施設にしても、21号南溝を湾曲させる説明ができない。

31号溝 (第55図)

21号溝の南東隅から東側へ張出すように続く小規模な溝である。埋没土の記録を欠く。

位置 30P・Q-4グリッドで24号溝から分かれ、東方へ向かい、30P-3グリッドで止まっている。

形状規模 ほぼ直線的な溝で、底面は細かな凹凸があり、水路ではない。全長3.95m、幅58~31cmで西側が広く、深さは5~9cmを測る。

走向 N-77°W 大溝と並走している。

所見 21号溝からは中心部分ではなく、南側上端を揃えるようにして派生している。同溝とは同時存在の遺構と考えたい。遺物の出土および他の遺構との重複はない。

32・53号溝 (第53図)

位置 32号溝は30P-6グリッドで大溝から分かれ、北側に向かって直線的に延び、30T-8グリッドで調

査区域境になる。53号溝は30T-8グリッドで32号溝から直角に離れて東側へ向かい、30T-7グリッドで調査区域境になる。

重複 2条の溝の分岐点には12号井戸があり、32号溝は16号建物東側柱筋が重なり、このうちP2に後出することが確認できる。他にも6棟の建物と重複する。南隅では37号溝に後出する。

形状規模 直線的で底面の狭い断面U字状の溝である。32号溝は全長21.1m、幅85cmで北隅のみ10cmほど狭く、深さ15~26cmを測る。53号溝は全長南側で2.3m、幅35~52cm 深さ13~15cmを測る。

走向 (32溝) N-20°W (53溝) N-64°W

遺物 32号溝では軟質陶器片2点、53号溝では焙烙片1点が出土している。

所見 16号建物柱筋が32号溝中央に重なるように、掘立柱建物の軸方向と並んでおり、館内の区画に係わる施設と考えられる。21号溝上面の礫と同じように32号溝南側に礫が多数見られる。集落が廃絶される時期まで存在した溝と推測する。53号溝は32号溝と同時期の遺構であろう。

38号・42号溝 (第55図 PL37)

位置 21号溝を挟んで調査時に別遺構名を付けたが同一の溝であり、本項では38号溝に統一する。30R-6グリッドの24号土坑との重複部分を北隅とし、南へ向かい21号溝を超えて30P-6グリッドで大溝へ繋がる。

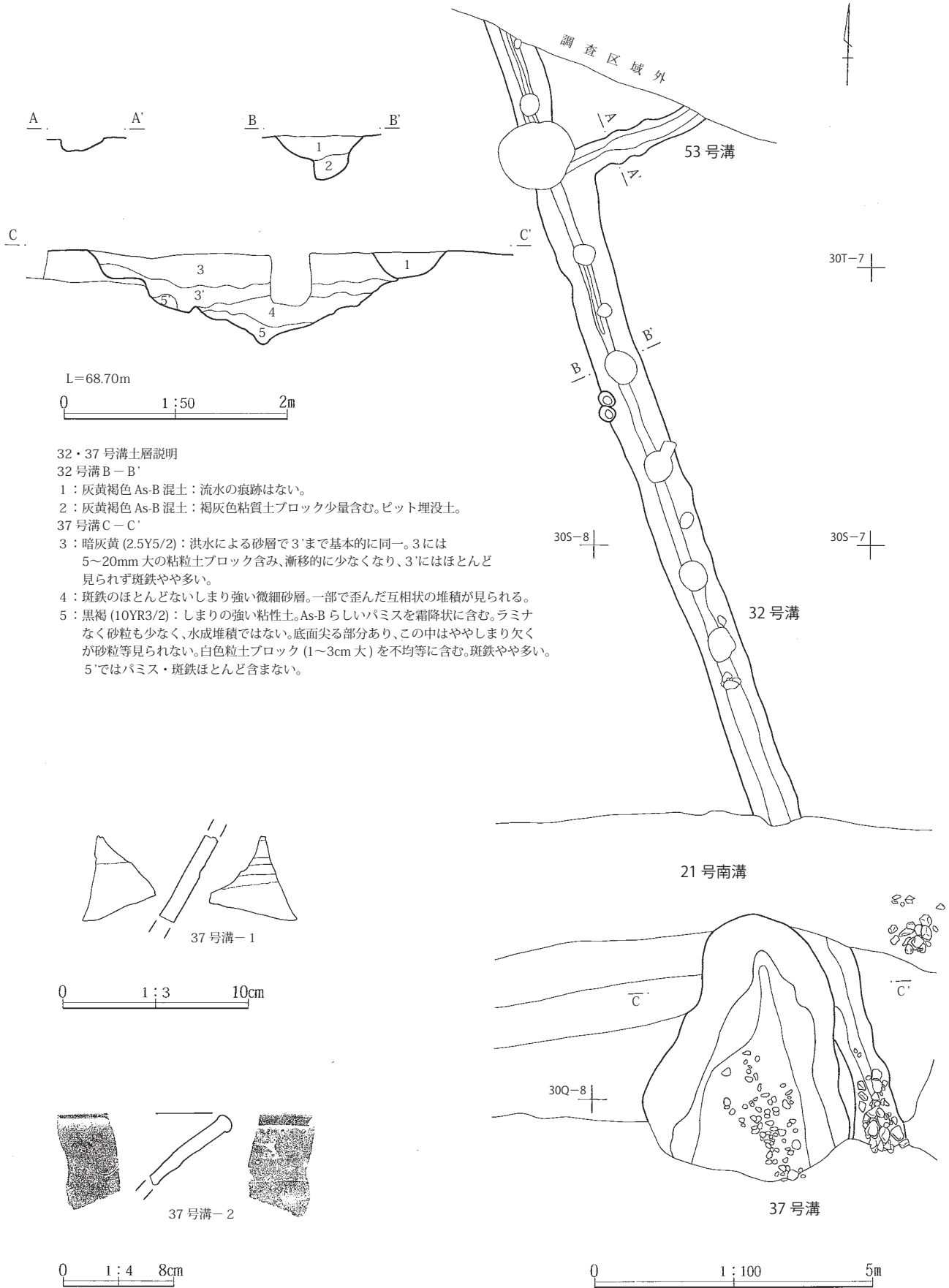
重複 43号溝に後出。

形状規模 東方へ張出すように弱い屈曲がある。全長7.4m、幅は北側で55cm前後、南隅では110cmを測る。深さは北側4cm前後、南側12cm前後で、底面レベルは南へ低く傾斜し、北隅とは38cmの比高差がある。

方位 N-6°E

埋没土 ベルト状に残した断面記録から確認面より上位の土層が観察でき、39号溝や西側にある礫を廃棄したような43号溝に後出することがわかる。上層に水成堆積の痕跡あり。

所見 南側(42号溝)部分から陶器皿を出土している。排水路的であり、水成堆積の痕跡が見られる。南側底面には水流が浸食したと思われる痕跡が認められる。



32・37号溝土層説明

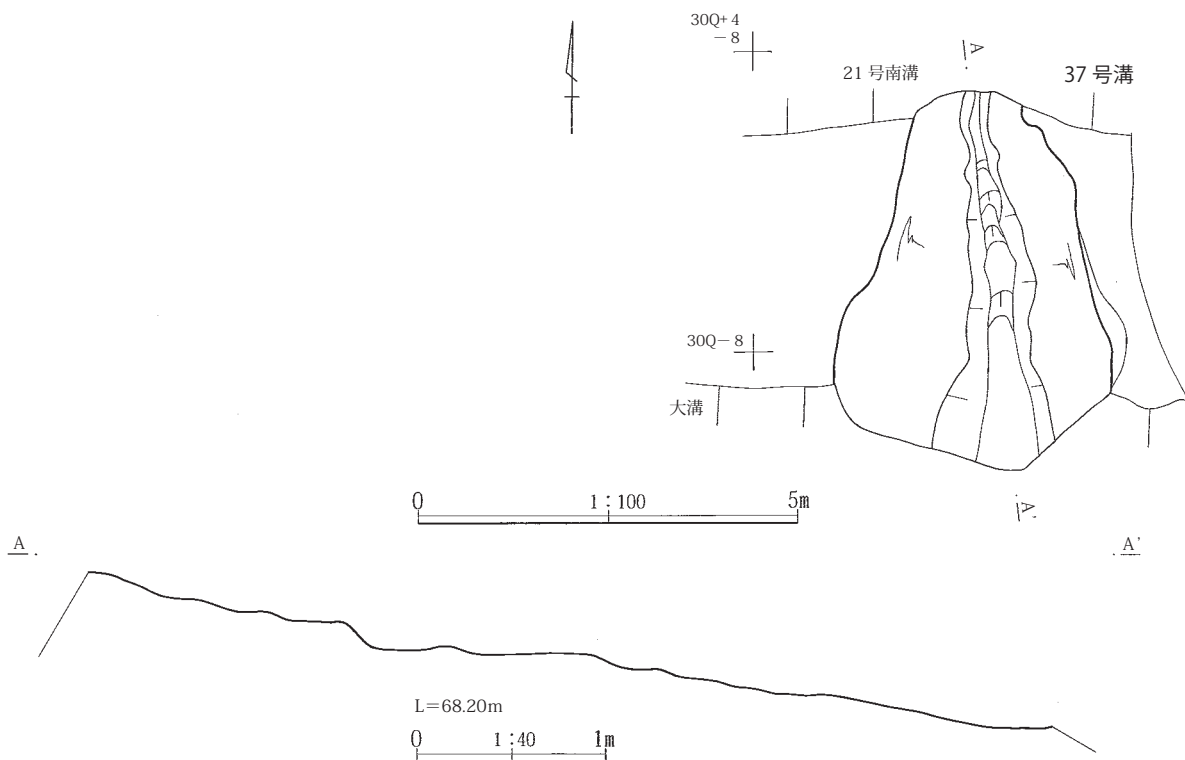
32号溝B-B'

- 1: 灰黄褐色 As-B 混土: 流水の痕跡はない。
- 2: 灰黄褐色 As-B 混土: 褐灰色粘質土ブロック少量含む。ピット埋没土。

37号溝C-C'

- 3: 暗灰黄 (2.5Y5/2): 洪水による砂層で3'まで基本的に同一。3には5~20mm 大の粘粒土ブロック含み、漸移的に少なくなり、3'にはほとんど見られず斑鉄やや多い。
- 4: 斑鉄のほとんどないしまり強い微細砂層。一部で歪んだ互相状の堆積が見られる。
- 5: 黒褐 (10YR3/2): しまりの強い粘性土。As-Bらしいソピスを霜降状に含む。ラミナなく砂粒も少なく、水成堆積ではない。底面尖る部分あり、この中はややしまり欠くが砂粒等見られない。白色粒土ブロック (1~3cm 大) を不均等に含む。斑鉄やや多い。5'ではソピス・斑鉄ほとんど含まない。

第53図 1a区32・53・37号溝と出土遺物



第54図 37号溝底面および断面

39号・41号溝 (第55図)

38号溝同様に調査時に2条の溝として扱ったが、本項では39号溝に統一する。

位置 30S-6グリッドから北側は調査時残土の搬出路にあたり、遺構を痛め不明瞭になってしまった。この付近から南へ向かい21号溝を超えて30P-6グリッドで用水路に繋がる。38号溝からは北側で15cm前後、南側で40cm前後の間隔がある。

埋没土 下層ほど粘性土となり、水成堆積の痕跡は38号溝ほど明らかでない。

形状規模 ほぼ直線的な細い溝である。確認できた範囲で全長10.4m、幅25~28cm、深さは北側で4cm前後、南側で15cm前後を測る。底面レベルは南へ低く傾斜していて、北隅と16cmの比高差がある。

方位 北側N-7°E 南側N-3°E

所見 断面や底面形状から水流の痕跡は観察できないが、38号溝同様の排水路的な性格の施設と推定したい。

52号溝 (第55図)

位置 21号溝東部分から30R・S-4グリッドで分岐し南東へ向かい、30P-3グリッドで止まる。

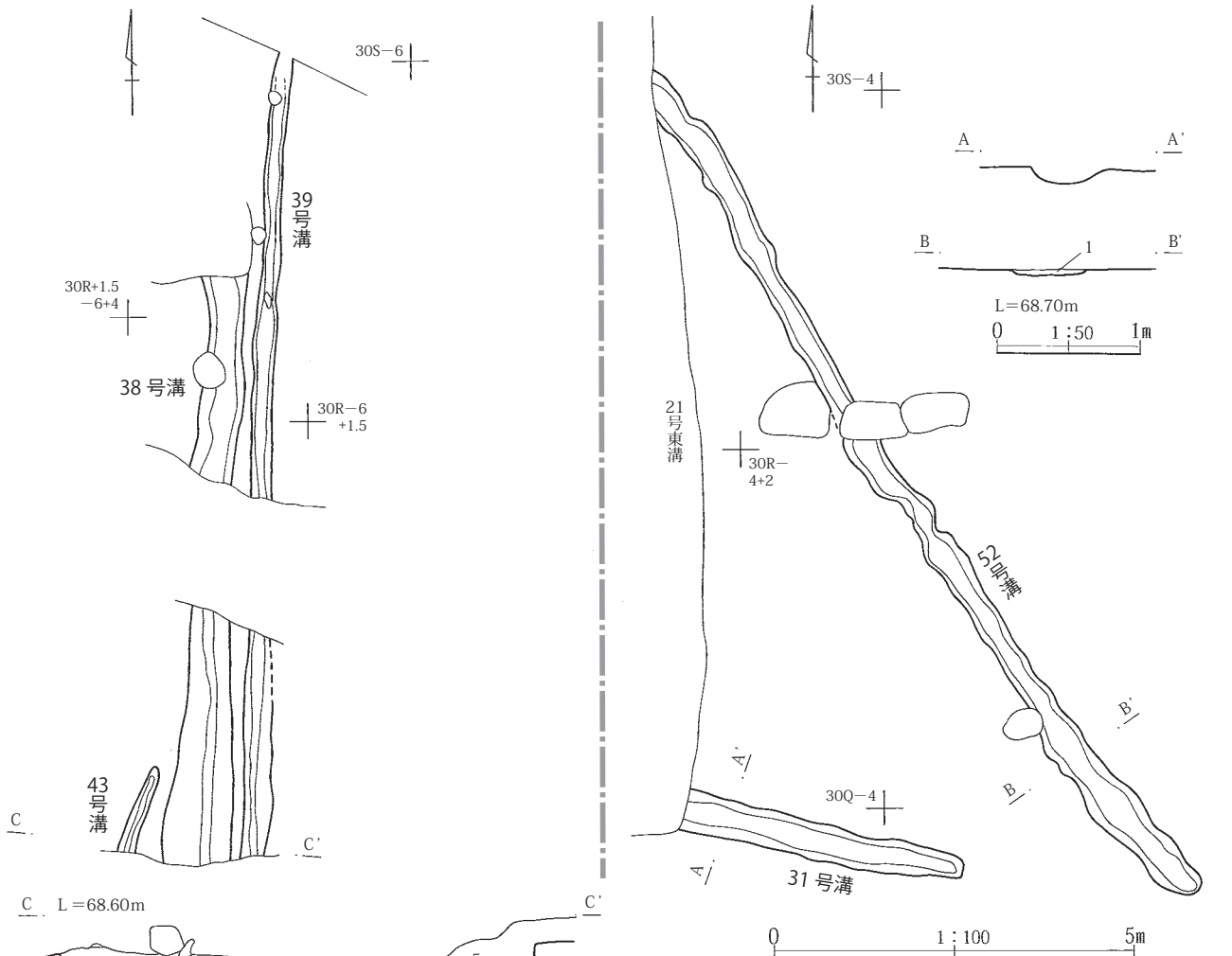
重複 35号土坑に先出か。1号建物が本溝を跨ぐように建てられている。

形状規模 上面の乱れが強いが、全体ではほぼ直線的に延びている。全長13.0m、幅30~35cm、深さ3cm前後である。底面は南北両隅が僅かに深くなっている。

方位 N-31°W

埋没土 As-Bの混入が多い。

所見 時期・性格とも不明な浅い施設である。遺物の出土はない。水田脇の溝に近い規模だが、近世・古代の両水田区画に沿うものではない。時期決定の根拠を欠くが、南隅は21号溝の東西走向部分の延長線上にあたり、中世の区画に無縁ではないようだ。

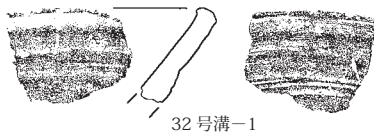


52号溝B-B'土層説明

1 : As-Bを多量に含む層：畦際の落ち込みのようでもあるが不明瞭。

41～43号溝C-C'土層説明

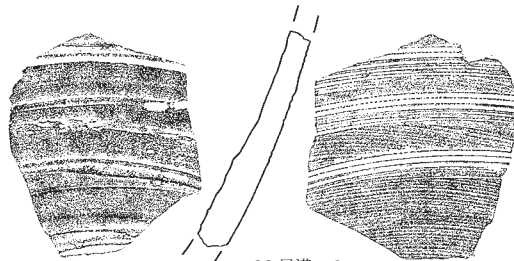
- 1 : 灰黄褐 (10YR4/2) : 粒径の細かな砂質土主体だが微細粒砂もまじり、しまり強い。黒色粘性土や細礫 (円) 等の混入物やや多い。不明瞭だがラミナ状に近い堆積か。斑鉄やや多い。
- 2 : 黒褐色土 (10YR5/2) : 極細砂。ややバサバサした土層。黒色味の強い砂と白色味を帯びる砂が不均等に縞状に混入。ややしまり欠く。2'は3'と中間的な層。
- 3 : 黒褐 (10YR5/2) : 極細砂主体だが細砂の混入多く、水成堆積状。ややしまり欠く。3'は細砂少なく、やや腐食土質で黒色味さらに強い。斑鉄見えない。
- 4 : 暗灰黄 (2.5Y5/2) : 1に近いがより砂質。黒色土等の混入無し。43号溝埋没土。
- 5 : 灰黄褐 (10YR5/2) : 細砂。3条の溝中で最も粒径粗いが、下側ほど細くなる。しまり強い。斑鉄あり。混入物少ない。5→5''と下層に向かうほどやや粘性をおび斑鉄は減る。5''に至っても水成堆積の痕跡は見えない。39号溝埋没土。



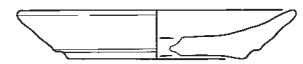
32号溝-1



32号溝-2



32号溝-3



42号溝-1

0 1:4 8cm

0 1:3 10cm

第55図 北館区画内の溝群および出土遺物

南館 用水路屈曲地点の南東側、北館の南に用水路を挟んで対峙する位置にある。中央部分を東西に現道が横断し、道路を挟んだ南側では館堀の続きを確認できなかったが、掘立柱建物が集中しており、館区画が続くことが確認できる。東側の館堀は現水路に重なっていると思われる、調査可能範囲では確認できなかった。

東側に隣接する福島飯玉遺跡で調査された2つの方形館と連続して、3軒の建物が並立することがわかった。

用水路屈曲点の外側に隣接する位置にあるため、氾濫で堀が壊されている個所がある。

西側にある35号溝が基本的な堀で、これに対応する北東側の33・34号溝は氾濫後の補修により2本の溝が確認できたものとする。

確認できなかった東側は、未調査部分の範囲が狭いことから、1重の比較的細い溝となるはずである。

35号溝 (第56図 PL14)

南館の西堀部分で、北隅は用水路の氾濫によって消失している。南側は調査区域外となる。

位置 30 J～L-14 グリッド。

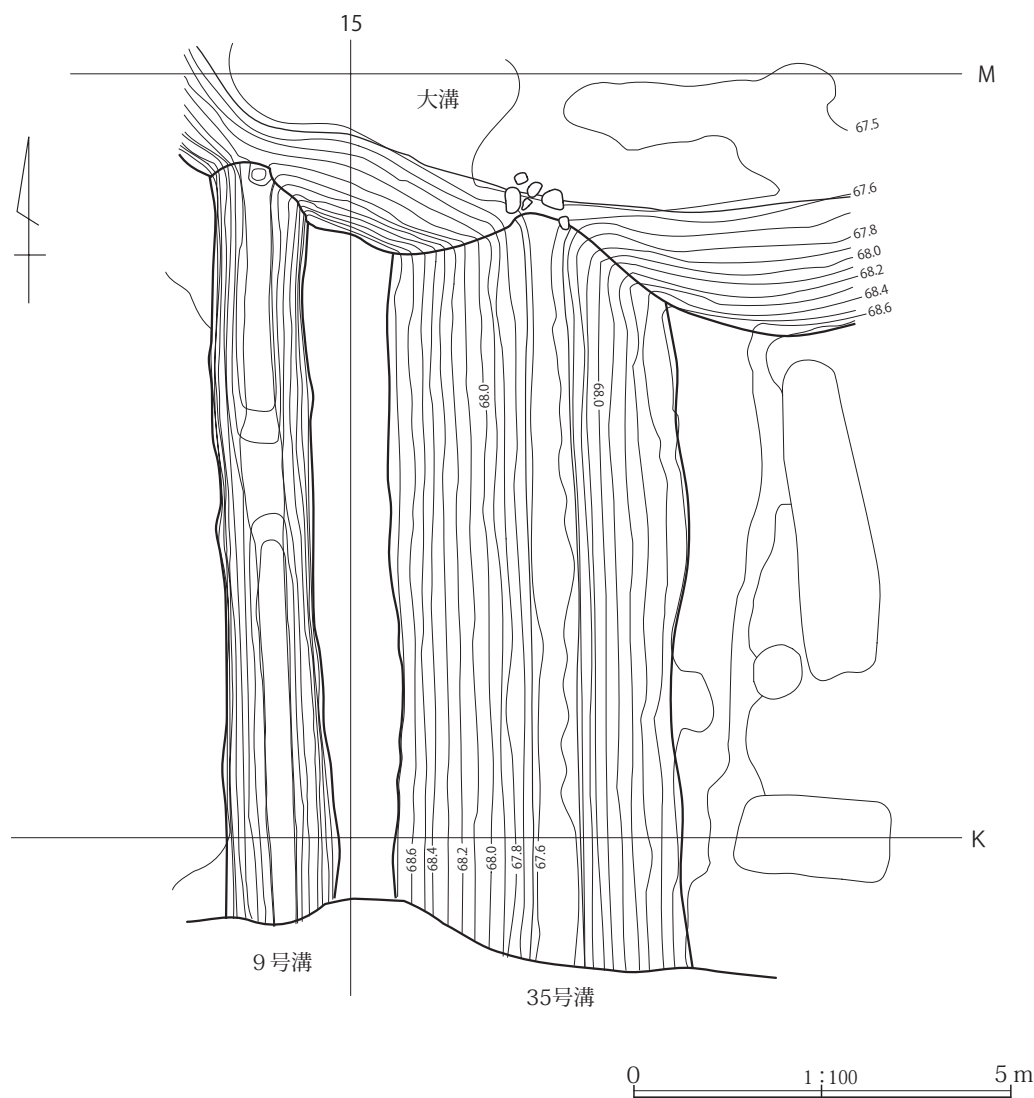
重複 確認できた範囲では重複は全くない。館内施設のない一画であったようだ。

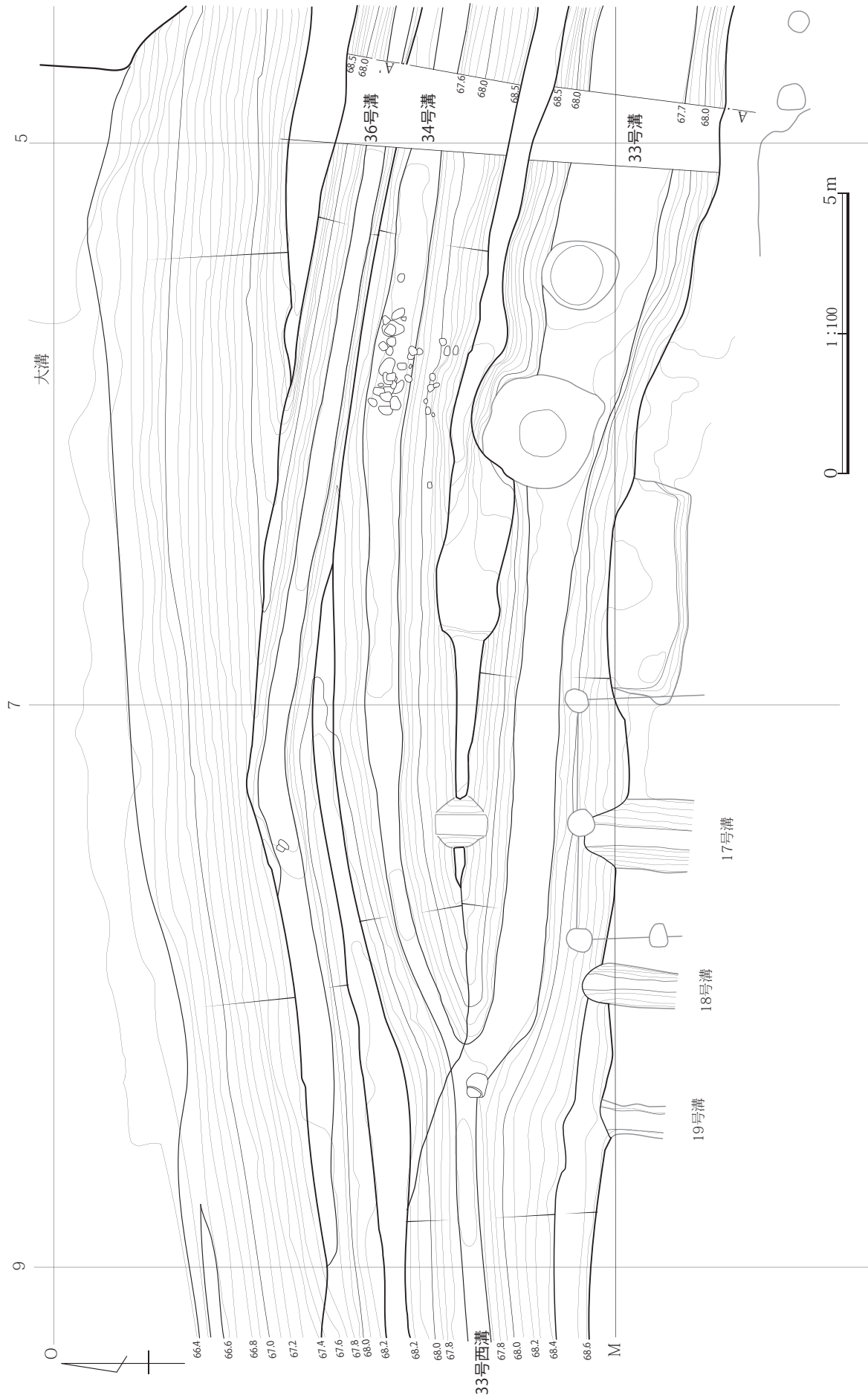
形状規模 ほぼ直線的に伸びる南北溝である。確認できた長さ9.9 m、幅3.5～3.9 m、深さ110cm前後を測る。上幅に比して底面幅が60cm前後と狭く、断面は逆三角形に近い形状を呈し、北館51号溝に類似している。底面レベルはほぼ水平で平坦である。

方位 N-0°

埋没土 下面はAs-B混じりの粘性土、上面は砂質土。

所見 遺物の出土はない。本溝北隅の大溝氾濫部分に流れ落ちたようにして、本溝底面よりわずかに低いレベル





第57図 南館北堀(33・34・36号溝)

に礫がまとまって確認されている。氾濫後の水が引いた段階で大溝側へ流れ落ちたものであれば、本溝底面付近が埋もれていない時期に氾濫があったこと、および水路は通常高い位置まで水が達していなかったことが推測されよう。

33号溝 (第57・58図 PL37)

南館の北側は大溝の氾濫後の補修があったためか、不規則な溝が3本見られる。33号溝は这其中で最も内側(南側)にあるやや湾曲した溝(東溝)である。西側は直線的な溝で、本溝北側にある34号溝と共有しているが、33号西溝として本溝と共に扱う。

位置 東隅は30L-3グリッドより東で調査区域外になる。西側は弱く屈曲して西溝へ繋がり、30M-11・12グリッド付近で氾濫による削平部分となる。

重複 34号溝に後出する。17号溝にも後出か。

形状規模 西溝が直線的なのに対し、東側は湾曲気味で、東隅へ向かうほど南側へ振れる。全長32.6mでこのうち西溝部分が18.1mある。東溝は上幅2.9m前後で一定しているが下幅は5号井戸を境に東側で180cm、西側で80cm前後になる。深さは80cm前後でほぼ一定している。西溝は幅2.6m前後でやや狭いが深さは90cm前後を測る。底面レベルも東溝より10cm前後低い。底面幅は40cm前後で狭く、断面は逆三角形に近い。

方位 N-82°W 西溝 N-86°E

埋没土 上~中層付近まで砂質土で、35号溝より砂質土部分が深い。

所見 遺物の出土はない。西館の北西隅で見られるような丸いコーナーの館堀となりそうである。

34号溝 (第57・58図 PL14・37)

33号溝の北側50cm前後の位置にあり、同溝に先行する館堀である。西側部分を33号西溝と共有している。

位置 30M-8グリッドで33号西溝から分岐し、21M-5グリッドで調査区域外となる。

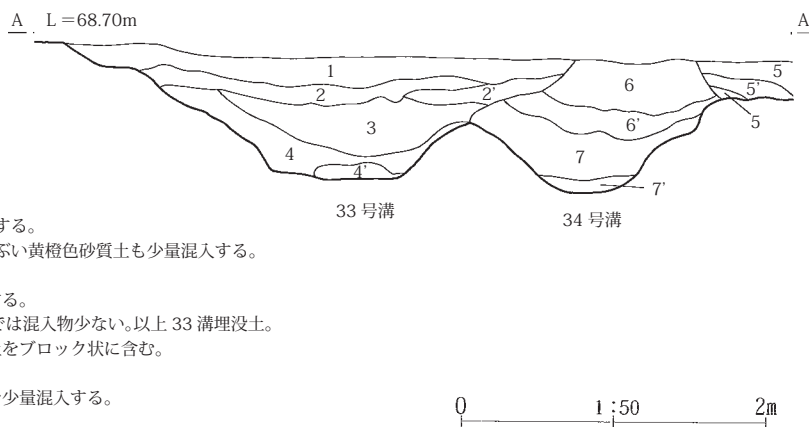
重複 33・36号溝に先出する。

形状規模 33号溝同様に北側へ膨らむように湾曲している。東側は36号溝と重複し、上面を確認できない部分がある。長さ24.2m、西側の上幅210cm、下幅30~60cm、深さ90cm前後を測る。下幅は西隅で特に細くなっている。底面のレベルは凹凸があって一定でないが、33号溝より10cm以上深い箇所が多い。

方位 N-81°E 東半部分で計測

埋没土 中層まで砂質土で35号溝に近い。

所見 遺物の出土はない。30M-5グリッドに径20cm前後の多量の礫が見られる。調査段階では南側に隣接する33号溝内にある5号井戸掘削時の廃土をこの地点に廃棄したと考えたが、溝のすぐ脇に井戸を掘削するのは不自然で、別の原因があろう。



1区 33・34・36号溝土層説明

- 1: にぶい黄褐色土: 砂質土で灰白色粘質土が多量に混入する。
- 2: 灰黄褐色土: 弱粘質土。褐灰色粘質土を多量に含み、にぶい黄褐色砂質土も少量混入する。
2'は灰白色粘質土が多く混入する。
- 3: にぶい黄褐色土: 砂層。灰白色粘質土をわずかに混入する。
- 4: 褐灰色粘質土: 3の砂や川砂などを少し混入する。4'では混入物少ない。以上33号溝埋没土。
- 5: にぶい黄褐色土: 灰黄褐色のAs-B混土や褐灰色粘質土をブロック状に含む。
5'では混入物少ない。36号溝埋没土。
- 6: にぶい黄褐色土: 褐灰色粘質土多く含み、褐色砂質土を少量混入する。
6'では砂質土の混入少ない。
- 7: 褐灰色粘質土: 褐色粘質土をわずかに混入する。7'では混入物少ない。以上34号溝埋没土。

第58図 33・34号溝断面

36号溝 (第57図 PL-14②)

確認できる南館の北堀群の中では最も外側(北側)にあり、規模も小さい。

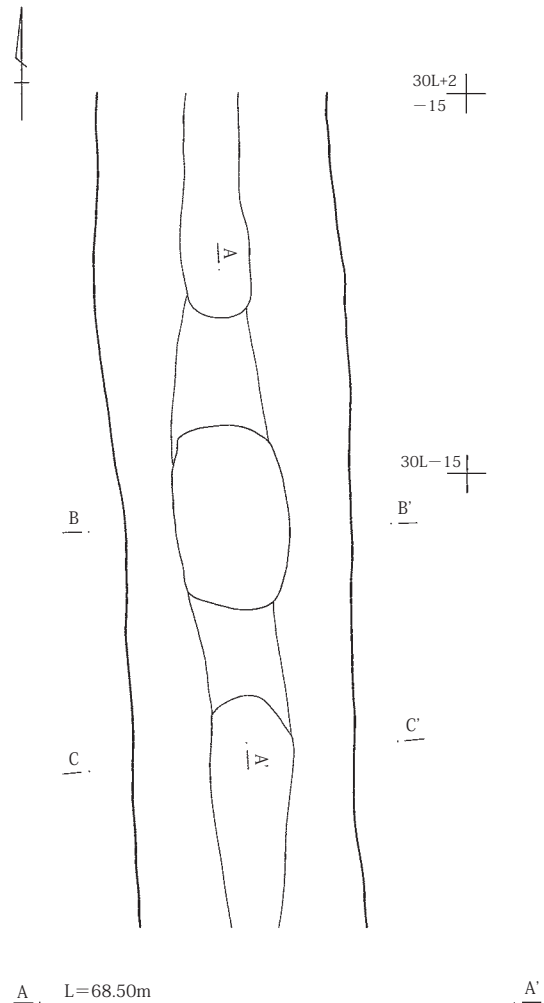
位置 東隅は30M-3グリッドで調査区境となる。この地点寄り西側で南北両側の壁の立ち上がりが確認できたのが、30N-7グリッド付近で南側へ小さく屈曲するとともに北壁が大溝に削られ不明になり、南壁や底面も30LM-9グリッド手前で分からなくなる。

形状規模 両壁が確認できるのは東寄りの部分のみだが、ここでの幅は130cm前後と推定される。断面逆台形で平坦な底面は幅30cm前後で一定している。

方位 東側N-81°W 西側N-83°E

埋没土 上~中層まで砂質土で33号溝に近い。

所見 遺物の出土はない。南館西側に照合すれば本溝は9号溝に対応する外堀状の施設となる可能性がある。この場合内堀に対応するのが33号溝になるが、本溝と33号溝との距離が東隅で2.5m、西側では0.4mまで近接し並走しておらず、同時存在の2条の溝とは考えにくい。



9号溝 (第56・59図 PL14③)

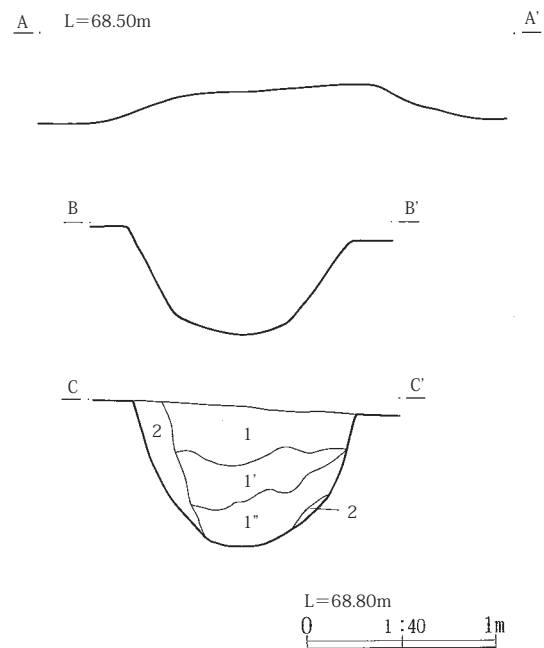
調査段階では館より後出する遺構として確認した溝である。35号溝の西側に、同溝と並走し、中世の施設の可能性がある。隅は用水路の氾濫によって消失している。南側は調査区域外となる。35号溝からの距離は75~105cmである。

位置 30J~L-15グリッド。

形状規模 直線的な溝である。調査できた範囲では長さ9.9m、幅1.25~1.47cm、深さ70cm前後を測る。底面から最大18cmの高さまで地山を掘り残した部分がある(第59図に詳細)。最も高い地点でも上面からの深さは50cm近くあり、土橋にはならないと考えた。この高まり以外の底面レベルはほぼ水平である。

方位 N-2°W

所見 遺物の出土・重複遺構はない。館西区画を意識した施設で、館外堀となる可能性もある。



- 1区9号溝土層説明
 1: 褐灰色土: 褐灰色As-C混土とブロック状の灰白色シルトと灰黄褐色As-B混土との混土。
 1'→1'': 灰白色シルトの混入が少なくなる。
 2: 暗褐色土: 灰黄褐色混じりの地山土。緩んだ壁部分か。

17号溝 (第60図 PL37)

33号溝から分岐して南館中央付近を南北に縦断する3本の溝がほぼ等間隔に並んでおり、現道を隔てた1b区でも確認できた。これを東側から17・18・19号溝と

第59図 1区9号溝詳細と断面

呼んだ。17号溝はの中で最も規模の大きな溝である。

位置 北側は33号溝脇30M-7グリッドで確認でき、南へ向かって現道を超え、30G-7グリッドで調査区域境に至る。30L-7グリッドで15号溝が東へ直角に分岐する。なお、北隅から2.7m北の34号溝へ達する部分で再度確認できる(第57図)。

形状規模 直線的な溝である。調査できた範囲で全長17.4m、幅120~130cmを測る。底面のレベルはほぼ水平で、排水溝とは断定できない。

方位 1a区N-2°E 1b区N-0°

埋没土 15号溝交差点の南北で埋没土が異なり、南側は15号溝と同じ土質になっている(第62図参照)。

所見 2点の中世陶器を図示した。図示部の北側延長部分33・34号溝の間に、本溝の続きとなる窪みが底面の長さの範囲で90cm確認できる。本溝の続きであれば33号溝に先出する氾濫前の施設となる。

18号溝(第60図)

3本の溝の中央にある。3本中、唯一調査範囲内で屈曲が確認できる溝である。

位置 北隅は33号溝脇の30M-7・8グリッドで確認でき、南へ向かい現道を超え、30G-8グリッドで西方へほぼ直角に曲がり調査区域境に達している。

重複 19号溝に先出する。2・3号井戸と重複。

形状規模 調査範囲では直線的な溝だが、現道を挟んだ両側での齟齬があり、未調査地点で弱い屈曲が予想される。幅は南側で細くなり東西走向部分で再び太くなっている。長さは南北走向部分で16.8m、東西走向部分で3.2mを測る。幅は70cm前後で、1b区で45cm前後となる。底面レベルは17号溝同様ほぼ水平である。

方位 N-2°E 南側はN-90°

遺物 土師器片の混入が1点見られたのみである。

所見 北側延長部分の33号溝を超えた地点で本溝の続きを確認できない(第57図)。34号溝と繋がる施設でないなら、17号溝に後出することになる。

19号溝(第60図)

3本の溝のうち西隅にある。他の2本に比べ走向がやや西側へ偏っている。

位置 北隅は33号溝脇の30M-8グリッドで確認で

き、南へ向かい現道を超え、30G-8グリッドで調査区域境となる。

重複 18号溝に後出する。

形状規模 直線的な溝である。長さ17.5m、幅60~85cm、深さ8~18を測る。底面のレベルは3本の溝中唯一北側へ低く傾斜し、南側と8cmの比高差がある。

方位 N-2°W

所見 遺物の出土はない。北側延長部分の33号溝を超えた地点は34号溝が合流しており、本溝がどちらの溝に繋がるか確認できない。

14号溝(第61図)

17~19号溝の東西両側に、間隔は一定でないが走向の近似する南北溝が並んでいる。これらの溝はいずれも埋没土が近似していて、洪水砂で埋もれた施設ではない。本溝は調査区東隅で確認された浅い溝である。

位置 南隅は30J-3グリッドで1号井戸と重複し、その南側は調査区域外である。北隅は30K-3グリッドで5号竪穴状遺構と重複し、その北側では確認できない。

重複 40号建物の東側柱筋に近接しているが、建物との重複のない唯一の館内溝である。

形状規模 直線的な溝で、調査できた範囲で長さ6.5m、幅33~50cm、深さ4~7cmを測る。底面は凹凸が多く不整だが、全体のレベルはほぼ水平である

方位 N-1°E

所見 遺物の出土はない。流路とは考えにくい。東西溝である16号溝へ繋がる可能性がある。

25号溝(第61図)

19号溝の約11.5m西側にある南北溝である。

位置 南隅は30K-10グリッドで途切れている。北隅は30M-10・11グリッドから先で大溝氾濫部分に削られ、分からなくなる。

形状規模 小さな蛇行のある断面U字状の溝である。全長7.4m、幅28~42cm、深さ4~10cmを測る。底面レベルは波打つような凹凸があり中央部分がやや深い。全体の傾斜傾向は確認できなかった。

方位 南側N-3°E 北側N-5°W

所見 遺物の出土はない。南隅は緩やかに立ち上がっており、さらに南方へ続く施設であろう。

26号溝 (第61図)

25号溝の60cm前後西側にある南北溝である。

位置 北隅は30M-11グリッドで大溝氾濫部分に削られる。南隅は30J-11グリッドで調査区境になる。

形状規模 ほぼ直線的な断面U字状の溝である。全長12.1m、幅35~41cm、深さ9~16cmを測る。底面のレベルは凹凸が多いが全体では北側に低く傾斜しており、南側と北側では5cm前後の比高差がある。

方位 N-0°

所見 出土遺物はない。時期不明の遺構だが、28・29号建物の柱筋に接しており、中世建物区画と係わった施設である。

29号溝 (第61図)

26号溝の約5m西側にある南北溝である。

位置 北隅は30K-12グリッドで途切れている。南隅は30J-12グリッドで調査区境に達している。

重複 28号溝に後出する。

形状規模 小さな蛇行のある浅い溝である。全長6.5m、幅38~54cm、深さ4~13cmを測る。底面レベルは南側へ低く傾斜しており、北隅と7cmの比高差がある。

方位 N-2°W(南)

備考 遺物の出土はない。

30号溝 (第61図)

南館北側の南北溝群中唯一途中で緩やかな屈曲のある溝だが、直線部分の走向は周辺の溝とほぼ同一である。北側ではやや幅広になる。

位置 北隅は30M-11グリッドで大溝氾濫部分に削られる。L-11グリッドで西側へ斜行した後再度南を向き、南隅は30J-11グリッドで調査区境になる。26号溝との距離は北側で1.4m、南側で2.5mある。

形状規模 周辺の溝と比べ幅広だが、浅く不明瞭な溝である。底面は狭く皿底状である。長さ12.2m、幅48~73cm、深さ2~8cmを測る。底面は比高差6cmの緩やかな凹凸がある。

方位 南側でN-1°W 蛇行部分N-23°E

所見 遺物の出土はない。埋没土の記録を欠く。底面の凹凸があり水路とは考えにくい。

27号溝 (第61図)

1a区南隅に、本遺跡の館内には少ない2本並走する東西走向の溝を調査した。道路状遺構の両側溝の可能性も考慮し、硬化面の検出に努めたが道路とする根拠は確認できなかった。南側を27号溝とした。

位置 西側は30J-13グリッドで途切れる。東隅は26号溝と重複する30J-10グリッドから先で分からなくなり、同溝へ繋がる可能性がある。

形状規模 北側へ膨らむ弱い湾曲がある。全長13.8m、幅46~52cm、深さ6~11cmを測る。底面レベルには弱い凹凸があり、傾斜傾向は確認できない。

方位 N-85°W

所見 出土遺物はない。26号溝との重複部分で底面は同溝より7cm高く、底面を共有することはない。

28号溝 (第61図・63図 PL-37)

27号溝の北側約80cmの位置に並走する東西溝である。

位置 西隅は20号土坑と重複する30J・K-13グリッドから先で分からなくなる。東隅は30J-10グリッドで立ち上がり途切れる。

重複 29号溝に先出する。

形状規模 全長17.8m、幅31~53cm、深さ3~6cmを測る。底面レベルは27号溝よりやや浅い。弱い凹凸があり傾斜傾向は確認できない。

方位 N-85°W

埋没土 南北走向の溝群と同質である。

遺物 埋没土出土陶器1点を図示した。他の遺物はない。

所見 27・28号溝の走向は南北溝群とは直交しない。掘立柱建物の柱筋とも無縁のようで、29号溝との重複以外に時期を推定する資料を欠く。

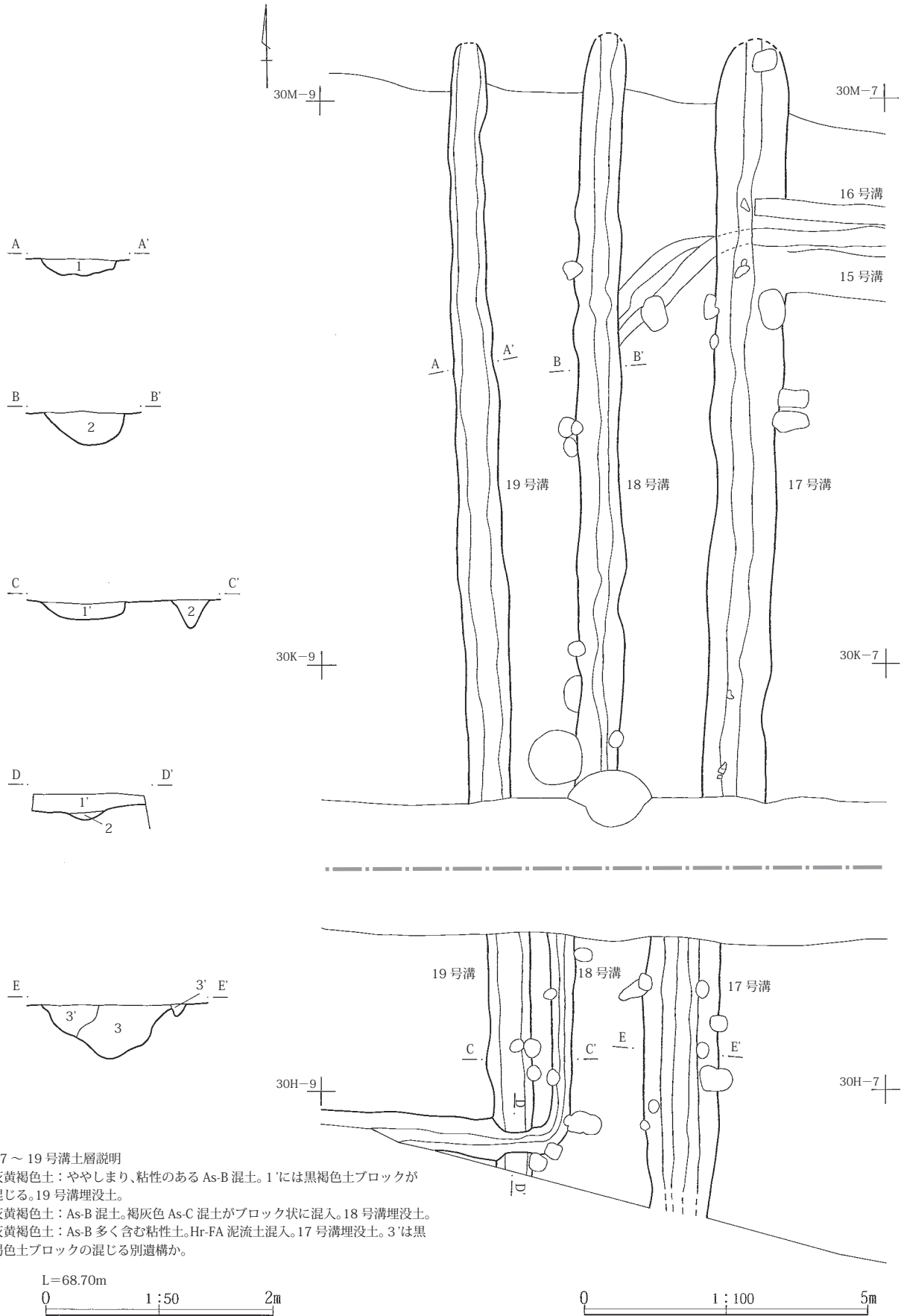
15号溝 (第62図)

館区画内の北東側に東西走向の溝群が確認されている。この地点は第2面6号畠の直下にあたり、調査段階では当初畠下のシミ状の変色部分と判断したため、土層観察に不備が多い。遺物はいずれの溝も出土していない。15号溝は最も南側にある、やや幅広の溝である。

位置 東隅は30K-3グリッドで5号竪穴状遺構と重なる地点で途切れる。西隅は17号溝と直角に交差する。

形状規模 ほぼ直線的な溝だが、幅は2号竪穴状遺構西

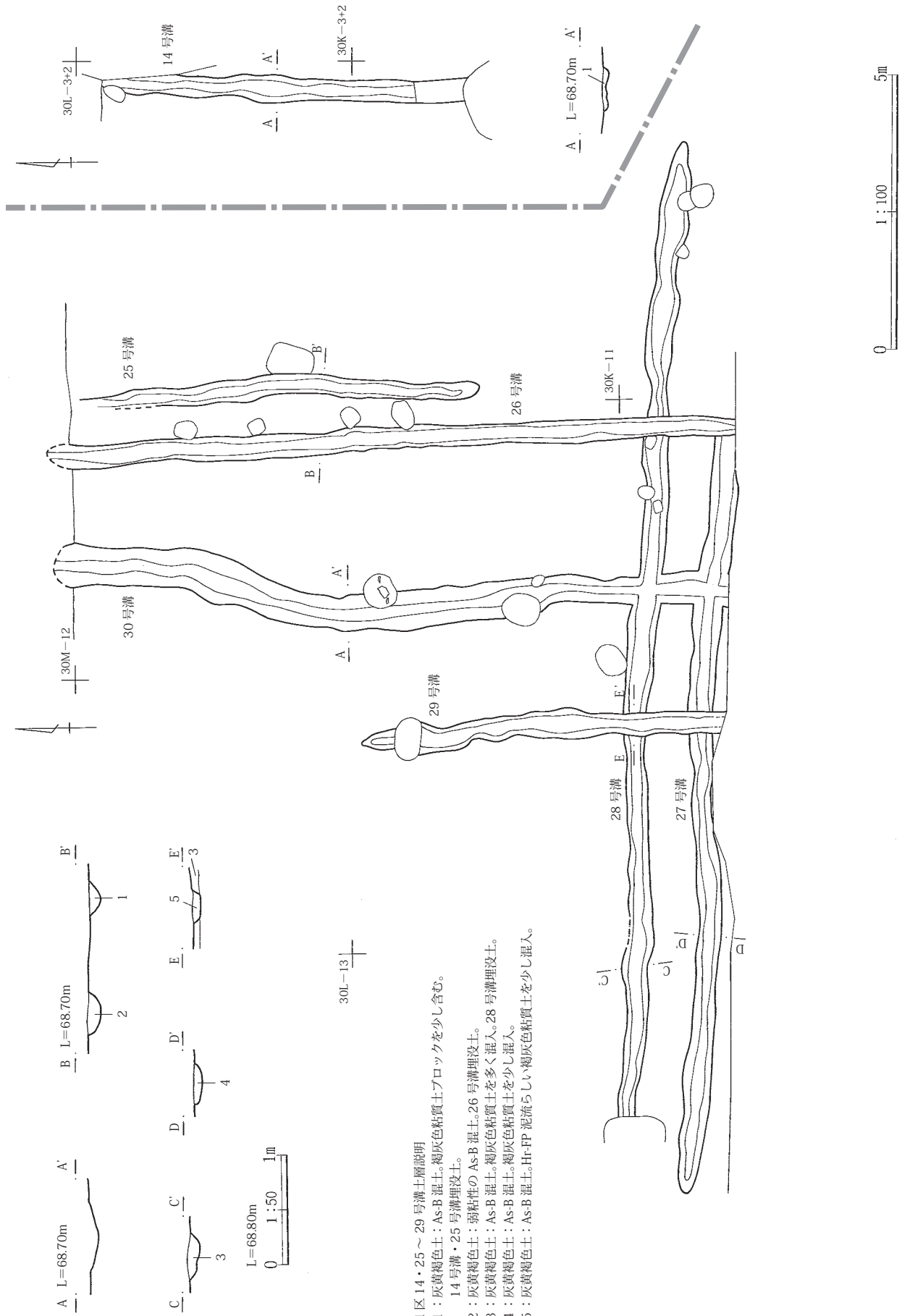
II 発掘調査の記録



1区 17～19号溝土層説明

- 1：灰黄褐色土：ややしまり、粘性のあるAs-B混土。1'には黒褐色土ブロックが混じる。19号溝埋没土。
- 2：灰黄褐色土：As-B混土。褐灰色As-C混土がブロック状に混入。18号溝埋没土。
- 3：灰黄褐色土：As-B多く含む粘性土。Hr-FA泥流土混入。17号溝埋没土。3'は黒褐色土ブロックの混じる別遺構か。

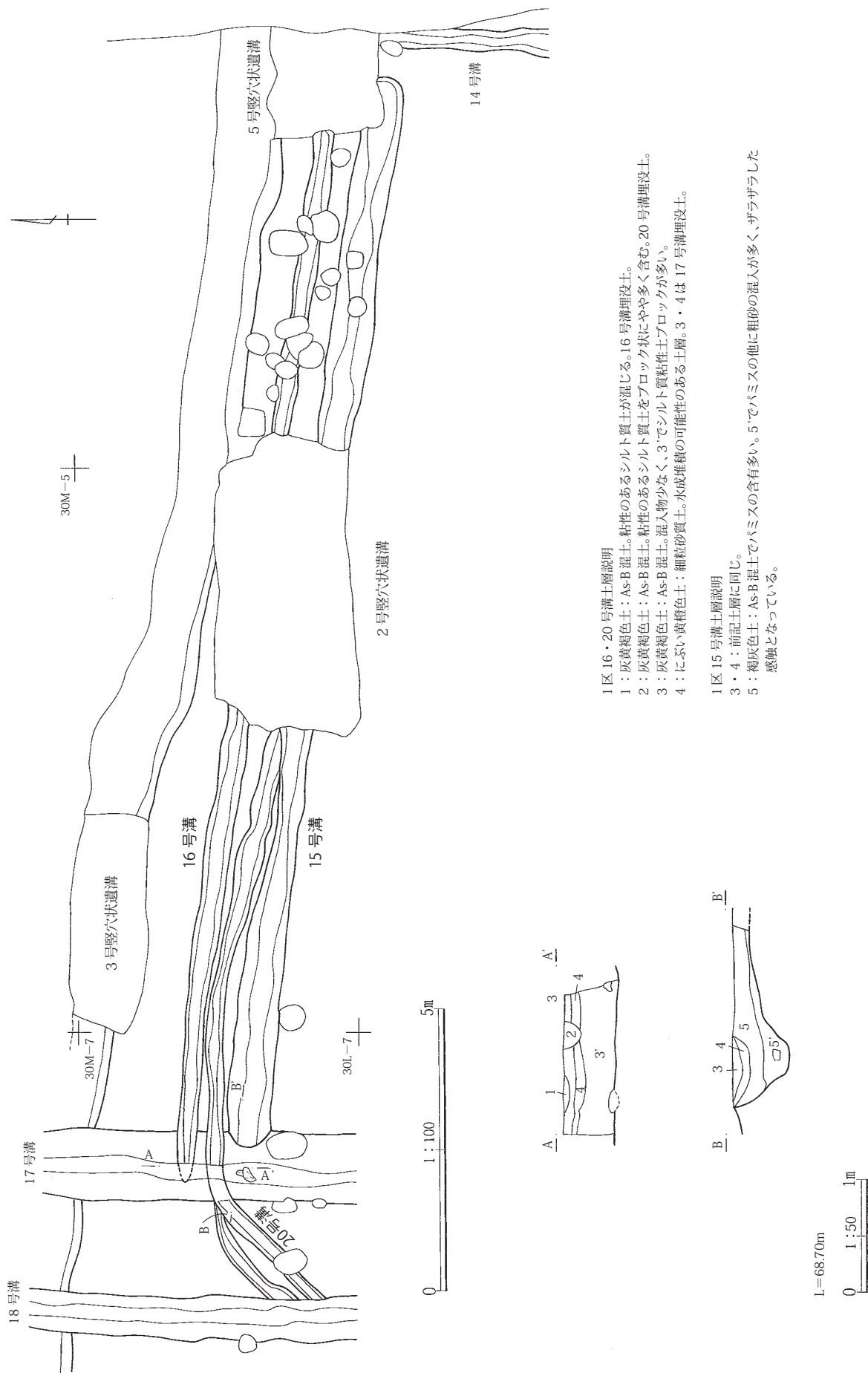
第60図 南館内の溝（1区17～19号溝）



1区 14・25～29号溝土層説明

- 1：灰黄褐色土：As-B混土。褐灰色粘質土ブロックを少し含む。
- 2：灰黄褐色土：弱粘性のAs-B混土。26号溝埋没土。
- 3：灰黄褐色土：As-B混土。褐灰色粘質土を多く混入。28号溝埋没土。
- 4：灰黄褐色土：As-B混土。褐灰色粘質土を少し混入。
- 5：灰黄褐色土：As-B混土。Hr-PP 泥流らしい、褐灰色粘質土を少し混入。

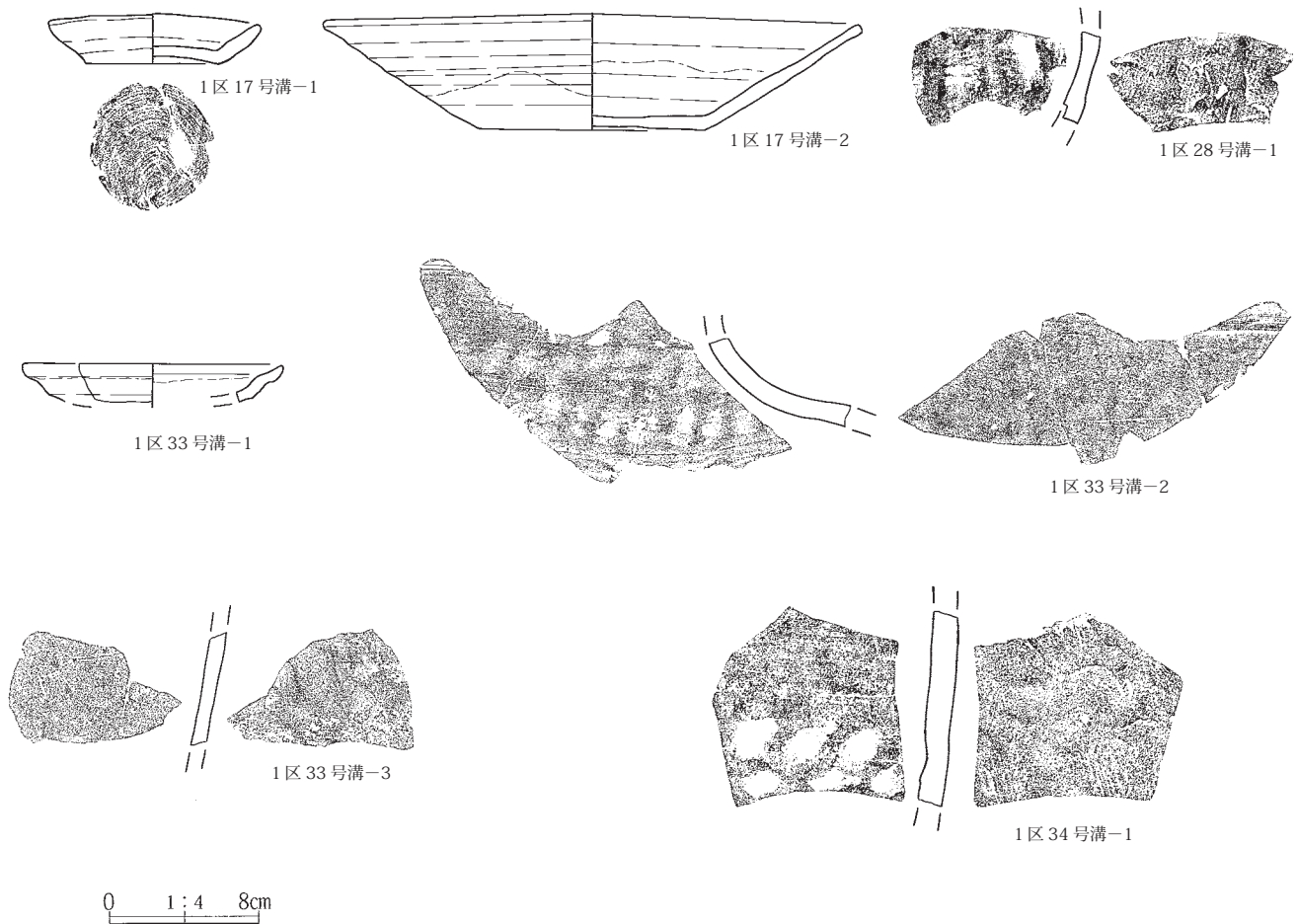
第61図 南館内の溝（1区14・25～30号溝）



1区 16・20号溝土層説明
 1：灰黄褐色土。As-B混土。粘性のあるシルト質土が混じる。16号溝埋没土。
 2：灰黄褐色土。As-B混土。粘性のあるシルト質土をブロック状にやや多く含む。20号溝埋没土。
 3：灰黄褐色土。As-B混土。混入物少なく、3'でシルト質粘性土ブロックが多い。
 4：にぶい黄褐色土。細粒砂質土。水成堆積の可能性のある土層。3・4は17号溝埋没土。

1区 15号溝土層説明
 3・4：前記土層に同じ。
 5：褐灰色土。As-B混土でバミスの含有が多い。5'でバミスの他に粗砂の混入が多く、ザラザラした感触となっている。

第62図 南館内の溝（1区 15・16・20号溝）



第63図 南館溝出土遺物

脇で細くなり一定でない。全長 14.2 m、幅 47～79cm、深さ 14～16cm を測る。底面レベルはほぼ水平である。
 方位 N - 82° W
 所見 17号溝と交差し、南側へ繋がっている。

16号溝 (第62図)

15号溝の北側 1.5 m の位置に同溝に並走する溝である。
 位置 東隅は 30L - 3 グリッドで 5号竪穴状遺構に切られ、その先で不明となる。西隅は 17号溝内で途切れるようだ。
 重複 5号竪穴状遺構に先出し、17号溝に後出する。
 形状規模 ほぼ直線的な溝である。長さは 13.6 m、幅 32～47cm、深さ 9～17cm を測る。底面レベルは東側ではほぼ一定で、西側は徐々に高くなり、西隅は東隅に比べ 15cm の比高差がある。
 方位 N - 83° W
 所見 14号溝と繋がり、南館内小区画の北・東側を画す施設となる可能性がある。

20号溝 (第62図)

15・16号溝の間にある。西側で2本の溝に分かれる。この部分の北側を 20号北溝、南側を 20号南溝と呼ぶ。
 位置 東隅は 30L - 5 グリッドで 15号溝と重なる。西隅は 17号溝を越えて北溝は湾曲気味に、南溝は直線的に南側へ向きを変え、18号溝と繋がる。南北両溝間の新旧関係の記録を欠く。
 形状規模 北側に膨らみ、弧状に歪む溝である。確認できた長さ 13.6 m、幅 23～47cm、深さ 5～12cm を測る。
 重複 18号溝に先出するようで同溝の断面 (第62図) には本溝の痕跡が見られない。底面レベルは 17号溝以西で高くなり、北溝部分は全体的に高く、南溝は西側へ向かって高くなっている。
 方位 中央付近 N - 89° W 南溝 N - 45° E
 所見 南館内の小区画溝の可能性のある 15・16号溝のような整った形状を呈していないが、想定される区画に沿った施設である。

西館 大溝屈曲点外側から西へ約 43 m 離れた位置にあり、前述 2 か所の館跡と相違点の多い施設である。特に北西隅部分が丸くなっていることが、本遺跡および福島飯玉遺跡で調査した 4 か所の館跡に残存する部分からは確認できない特徴である。西辺に丸みがあって規模を計測しにくいのが、堀外側の東西長は最大で 48 m を測る。

館区画堀は 40 号溝 (27 号溝) を主堀としている。他の館の堀と比べて規模が大きいのは、大溝から離れていることが理由と考えられる。西辺では 19 号溝が内側にあるが、2 重堀ではなく先出する溝で北側部分では 40 号溝によって消失したと考えた。東辺は 4 条の溝があるが、上端はほとんど重なる状況で、4 重の溝ではなく、作り替えと考えたい。形状から、40・43 号溝の 2 本の溝は直角に近い北東コーナーを築いており、同時存在の 2 重溝とし、隅の丸い 41 号溝は北西コーナーと対になる 1 重の溝と推測した。これら 3 条の溝の新旧を確認することはできなかった。北西隅には直角の屈曲部分がないことより、19 号溝と対になる 41 号溝が最も古く、隅の直角な 40・43 号溝の 2 本の溝を作り直したと想定したい。

館内に浅い溝 (42 号溝) で囲われたより小さな区画があり、東辺は 41 号・43 号溝の間であって西館区画と共有している。42 号溝は東辺で最も内側にある 43 号溝に先出していることが確認できる。

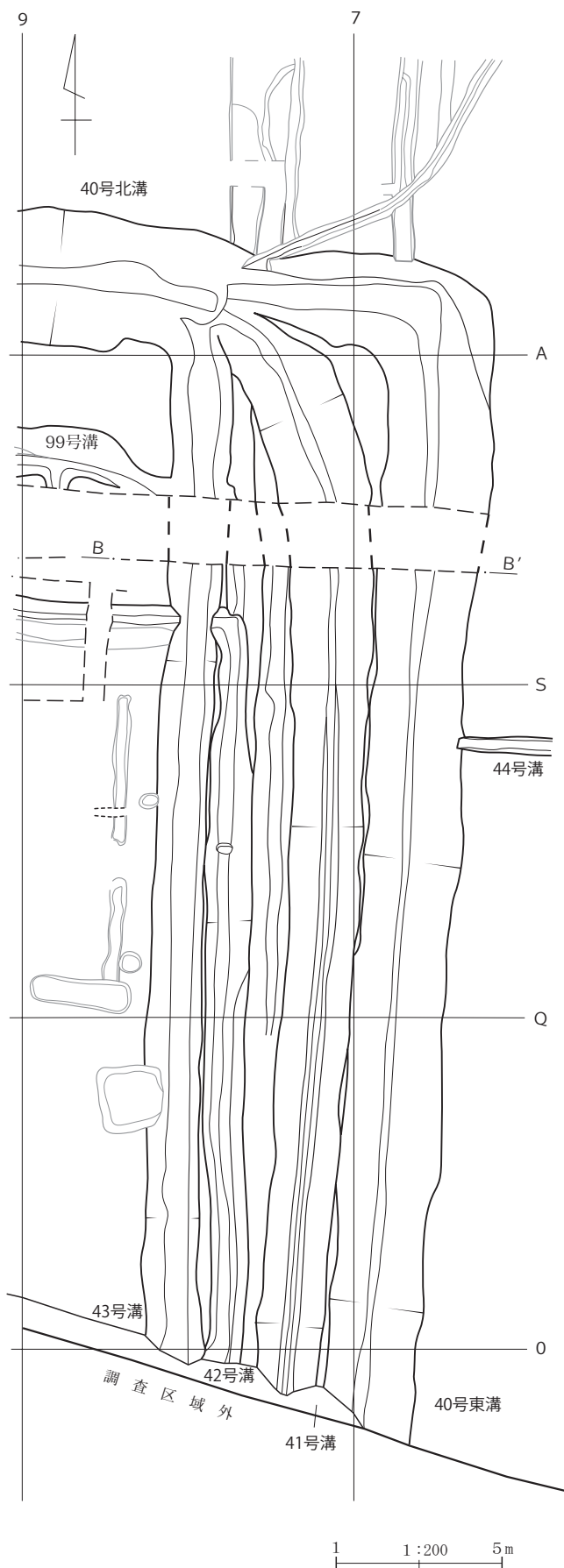
40 号溝は東側へ直角に分岐する直線的な小溝 (44 号溝) を伴っている。

40 号溝 (第 64～66・70 図 PL14・37)

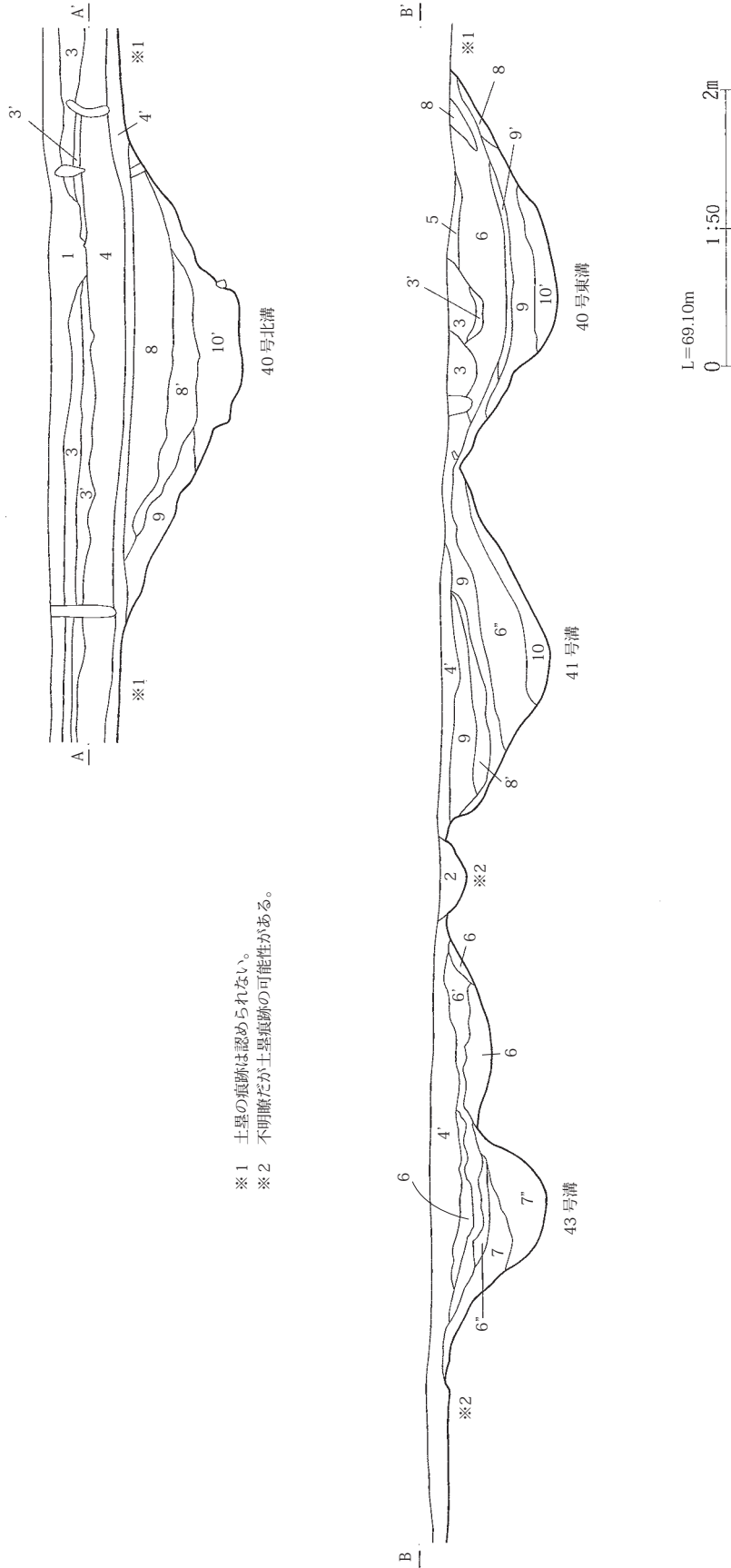
西館東辺にある 4 本の溝を外側 (東側) から 40・41・42・43 号溝と呼び、本溝は最も外側の溝である。北側・西側へ続く溝にも外側溝の 40 号溝の名をつけたが、この部分はさらに規模が大きくなり、他の溝を併せた施設であることが分かる。東辺を 40 号東溝、北辺を同北溝、2 a 区に位置する西辺を同西溝と呼んだ。

位置 東溝は南隅が 40 N-6・7 グリッドで調査区境から確認でき、北隅は 31 A-6 グリッドで西側へ曲がる。北溝は 31 A-7 グリッドで東溝の延長部分から繋がりが、31 A-13 グリッドから弧を描くように南へ曲がり、西溝へ続く。南へ向かった西溝は 40 P-15 グリッドで調査区域境に至る。

形状規模 東溝は直線的な溝で北東隅も直角に近い屈



第 64 図 西館東堀 (2 区 40~44 号溝)



※1 土塁の痕跡は認められない。
 ※2 不明瞭だが土塁痕跡の可能性がある。

西館上面の覆土

- 1 : 褐 (10YR4/4) : As-A 混じりの砂質土洪水層。1'では細砂・シルト質土、1''ではシルト質土で黄色味が強くなる。
- 2 : 黒褐 (10YR2/3) : As-B 混土。第3・4面34号溝埋没土。
- 3 : 褐 (10YR4/6) : 洪水起源の細砂とシルト質土からなる層で、一部でラミナ状を呈す。3'ではシルト質土主体で黄色味が強くなる。
- 4 : 褐 (10YR4/4) : As-B 混土。4'では黒色味増す。

2区40・41・43号溝土層説明

- 5 : 黒褐 (10YR3/2) : As-B を多量に含む他の地点では見られない層。
- 6 : 黒褐 (10YR2/3) : As-B 混土。6''では褐色粘質土をブロック状に混入する。
- 7 : 黒褐 (10YR2/2) : As-B 混土。還元したロームである褐色粘土ブロック混じりの土。7'では混入物を多量に含む。
- 8 : 暗褐 (10YR3/4) : 黄褐色土粒混じりの粘性土。8''では軽石粒の混入も多い。
- 9 : 灰黄褐 (10YR4/2) : ブロック状の粘質土。9''では黒褐色土などがブロック状に混じる。
- 10 : 黒褐 (10YR2/1) : シルト質土と細砂からなる溝底面付近の埋没土。10''では粘性がある。

第65図 2区40・41・43号溝断面

曲を見せる。上面に対して底面が狭く、壁は直線的に立ち上がっている。全長は外側で 34.7 m、幅は南側で 270cm、北側はやや広く 315cm 前後になる。深さは 76～85cm、底面レベルはほぼ水平である。北溝は東側では直線的だが、西側は南へ向かって緩やかに屈曲している。東溝東隅から 7 m 西側へ寄った部分から深くなり、15cm の段差を生じている。西隅をグリッド 15 ライン、東隅を東溝屈曲部とした外側斜距離は約 47 m を測る。幅 390～415cm、深さ 82～97cm を測る。西溝は北溝のカーブをそのまま引き継ぎ緩やかな丸みがある。調査できた長さは外側斜距離で 22.8 m、幅 370cm 前後、深さ 85cm 前後を測る。

方位 東溝 N-1° E 北溝 N-84° W 西溝 N-12° E
埋没土 明瞭ではないが水平に近い堆積となる部分が多い。A 断面には掘り直しのような痕跡も観察できる。

遺物 西溝埋没土から出土した 14 点と東溝・北溝埋没土中から出土した 3 点の軟質陶器を図示した。全容を把握できるような個体の出土はない。図示した以外に 557 片の破片があるが、軟質陶器 5 点を除くと土師器・須恵器の混入品で、西溝部分からの出土が多かった。

所見 東側の 3 条の溝が集まる北溝東隅で段差をつけて深くなり、この部分を深く堀直したことが想定される。この深さに対応する規模の溝が東側にはないので、東側の複数の溝と同時存在した施設と考えたい。

43 号溝 (第 64・65 図 PL-14・37)

東辺の溝群中、最も内側(西側)にある。

位置 南隅は 40 N・O-7・8 グリッドの調査区境にあり、北隅は 31 A-7・8 グリッドで 40 号北溝に繋がる。対になると想定した 40 号東溝の西壁からは南側で 4.1 m、北側で 4.7 m の位置にある。

重複 42 号溝に後出している。

形状規模 直線的な溝で底面は 40 号東溝より広い。壁の立ち上がりは左右非対称で、東壁がやや急になっている部分が多い。全長 31.4 m、幅 170cm 前後、深さ 54～66cm を測る。

方位 N-2° E

埋没土 下層では東側(館外側)から埋もれていった痕跡が認められる。人為的な埋戻しの可能性もある。

遺物 埋没土中出土の陶器 1 点を図示した。他に 18 片

の土師器が混入していた。

所見 西館東側の溝群の中では 40 号東溝と対になる直線的な溝で、同溝と同時存在した館内堀を想定したい。

41 号溝 (第 64・65 図 PL-14)

40 号東溝の西側に接するようにして並ぶ南北溝で、北側が弱く屈曲して西へ向きを変え 40 号北溝に繋がる。
位置 南隅は 40 N-7 グリッドの調査区境にあり、北側は 31 A-13 グリッドで 40 号北溝に繋がる。

形状規模 直線的な中央から南側にかけては底面が狭くなっている。全長 34.5 m、幅は広い北側で 268cm、狭い南側で 196cm を測る。底面は南側で 15cm、北側で 30cm 前後である。深さは 70cm 前後、底面レベルはほぼ水平で、北側の屈曲部分のみ 40 号東溝に向かって 10cm 低く傾斜している。

方位 N-5° E (直行部分)

埋没土 42 号溝同様に、底面付近では東側(館外側)からの埋没が確認できる。

遺物 9 片の土師器が混入していた。

所見 規模は 40 号東溝に次いで大きく、深さもほぼ同じである。40 号溝との新旧関係は把握できていないが、同時存在は考えにくく、コーナーの丸い北西隅に対応する古い段階の館堀と想定したい。

44 号溝 (第 64 図)

40 号東溝から東へ向かう排水路状の小規模溝である。
位置 40 R-6 グリッドで 40 号東溝の東壁上端からほぼ直角に分岐し、東隅は 40 R-5 グリッドで調査区域境となる。

形状規模 直線的な溝で、断面は U 字状を呈す。調査範囲で全長 4.2 m、幅 43～52cm、深さ 10cm を測る。底面レベルは水平であった。

方位 N-89° W

所見 遺物の出土はない。東隅にピット状の窪みがあるが、重複遺構か本溝の窪みか区別できなかった。40 号東溝のごく上面にかかるのみで、排水路としては浅く小規模すぎる。類似施設としては福島飯玉遺跡 1 号屋敷の北側区画堀から北へ向かって大溝まで延びる排水溝がある。44 号溝がそのまま東へ延びれば大溝に達するのだが、1 区の調査ではこの溝の延長部分を確認できていない。

19号溝 (第66図 PL14)

40号西溝の内側(東側)に接する溝で、40号北溝と重なり分からなくなる。

位置 南隅は40P-14グリッドの調査区境にあり、北隅は31A-13グリッドで40号北溝と重なる。

重複 40号北溝に先出する。

形状規模 40号西溝内側に沿うようにして緩やかに屈曲している。確認できた範囲は外側の長さで26.5m、幅110~124cm、深さ60cm前後を測る。下幅は北側で45cm前後、南側で20~25cmで狭くなっている。底面レベルは最大10cmの比高差のある緩やかな凹凸があった。東側の3条の溝と比べると40号東溝・41号溝より40cm、43号溝より10cm前後浅い。

方位 N-88°W

所見 出土遺物はない。40号溝に先行することが第65図A断面に本溝が現れないことで分かる。40号溝がつくるのは最も規模の大きい館堀で、それに先行する館堀と思われる。東側の3条の溝のうちでは、41号溝と底面レベルや形状が近似し、本溝と併せて隅の丸い方形館が想定できる。

42号溝 (第64・65・67・69図 PL14・37)

東側は館東辺の溝群の中にあるが、他の溝が屈曲する地点より13m南で西側へ折れ、館内に一回り小さな区画を作る溝である。

位置 南隅は40N-7グリッドの調査区境にあり、40S-7グリッドで西側へ折れ(この部分を42号東溝とよぶ)、40S-12グリッドで南へ折れ(ここままでを42号北溝と呼ぶ)、48号土坑に繋がる(ここままでを42号西溝とよぶ)。この土坑の西側にさらに西へ向かう小溝があり、本溝の続きの可能性はある。

重複 43号溝に先出している。97号溝とも重複する。

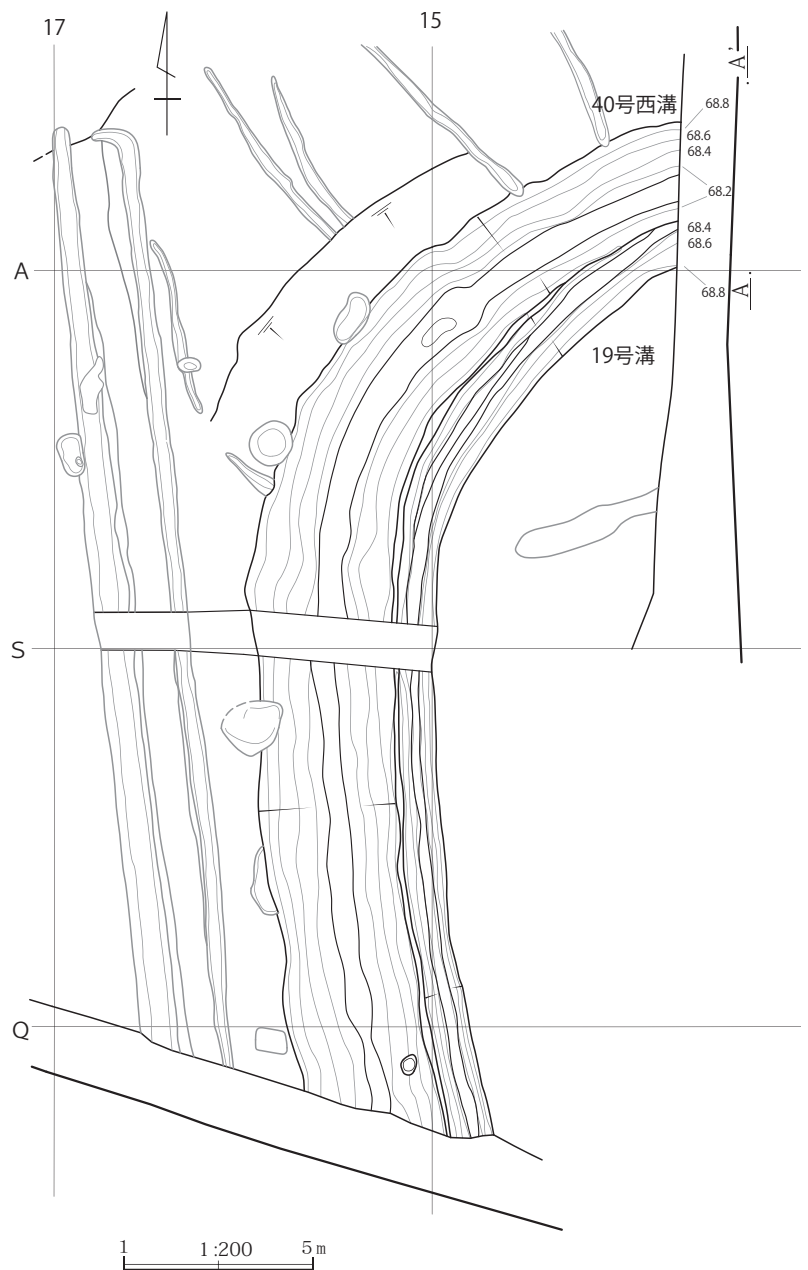
形状規模 東溝は長さ22.6m、幅80cm

前後である。東壁が一部で広がるが、底面形状に変化ないことから上面部分の崩れと判断したい。北溝は長さ24.3m、幅80cm前後、底面は高低差が著しく深さ10~51cmである。東側半分が97号溝と重なり不明瞭になっている。西溝は長さ10.6m、幅60cm前後である。

方位 東溝 N-1°E 北溝 N-85°W
西溝 N-7°E

埋没土 西館東側溝群の他の溝と差はほとんどない。

遺物 埋没土出土の軟質陶器1点と石器1点を図示した。他に軟質陶器1片と土師器18片の混入がある。



第66図 西館西堀(2b区40号西溝・19号溝)

所見 東辺を他の溝と共有していることから、本溝は館区画内の分画溝ではなく、大区画が作られる前の先行する小区画溝と考えたい。同様の区画は南館の北東側でも確認できる。

97号溝 (第67図)

42号溝同様に北館内に小区画を区切る溝である。北辺を97号北溝、西辺を97号西溝と呼ぶ。

位置 北溝は42号溝南側に接して並走し、東隅は40S-8グリッドの43号溝との重複部分から先は不明で、西隅は40S-10グリッド付近で南に屈曲するようだ。

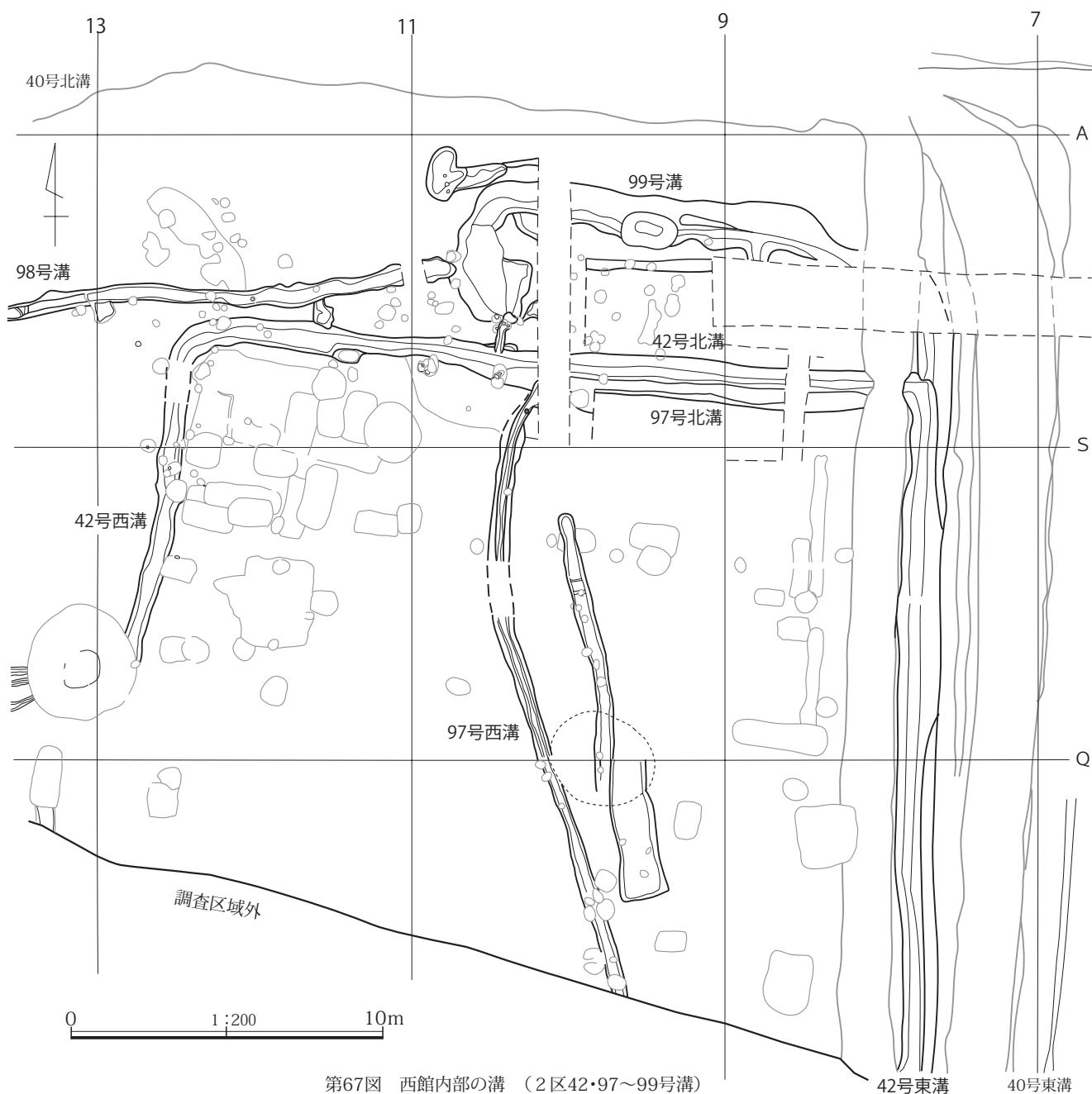
西溝は屈曲地点から南下して400-9グリッドで調査区境に達する。

形状規模 北溝は北辺を42号溝と重複して不明だが、直線的で長さ10.5m、幅50cm以上が確認でき、深さは20cm前後である。西溝は北側で湾曲するが、南側は直線的である。長さ20.3m、幅35~65cmを測る。

方位 北溝 N-87° W 西溝 N-18° E

遺物 土師器3片の混入がある。

所見 方形区画を形成し館に係わる施設と思われるが、建物など館内の施設は本溝を跨いで築かれるものが多い。



第67図 西館内部の溝 (2区42・97~99号溝)

98号溝 (第67図)

42号溝の北側にある溝で、館内の区画を作る可能性があるが、他の遺構との係わりが不明な溝である。

位置 東隅は40 T - 10グリッドで不明な窪みによってわからなくなり、西隅は19号溝の東側1mの40S - 14グリッドで途切れている。

重複 124号建物の北側柱筋の大半が本溝上にある。
 形状規模 弱い蛇行のある東西溝で、全長18.8m、幅50cm前後、深さ14~26cmを測る。底面レベルには15cmを越える起伏がある。

方位 東側 N - 85° E 西隅 N - 21° E

所見 遺物出土はなく、埋没土の記録を欠いている。

99号溝 (第67図)

西館区画内の北東隅にある、短い幅広の溝である。

位置 東隅は40 S - 8・9グリッドで43溝から分岐し、西隅は2 a区19号溝の東側1mの40S - 10グリッドで南方へ折れ、直後に不明瞭な窪みの中で分からなくなる。また、42号東溝の北側延長部分に不明瞭な幅細の落ち込みがあり、本溝がこの部分へ繋がる可能性もある。

形状規模 ほぼ直線的な東西溝で、東西走向部分は長さ12.5m、幅122~143cm、深さ50cm前後を測る。西隅から南北走向部分は南方へ立ち上がり、20cm以上高くなる。東隅は42号東溝の北側へ延びる窪み部分に繋がる可能性があるが、この底面は本溝より10cm以上高い。

方位 N - 82° W (中央部分)

備考 本溝南西隅にある落込み部分を意識したように121号建物の張り出し施設が築かれている。98号とは形状が異なり、同溝へ繋がることは想定しにくい。

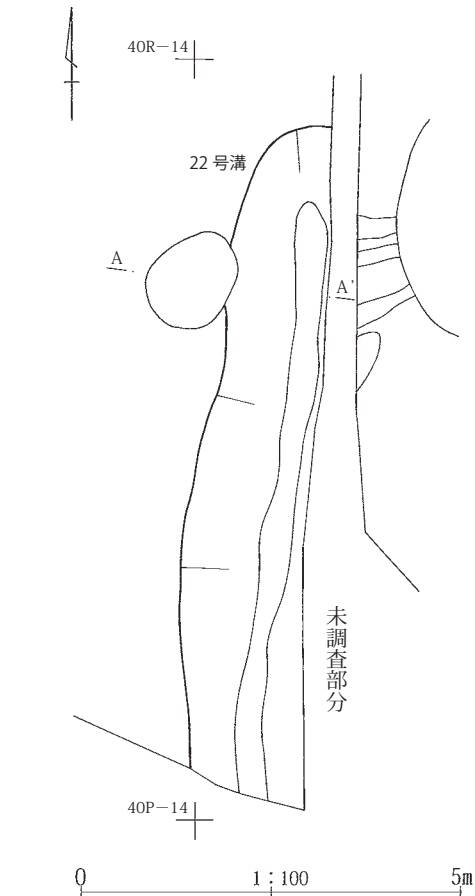
22号溝 (第68図)

東隅が2 a区と2 b区の調査区境にかかり、排水溝を設定するため壊されて全容を確認できていない。

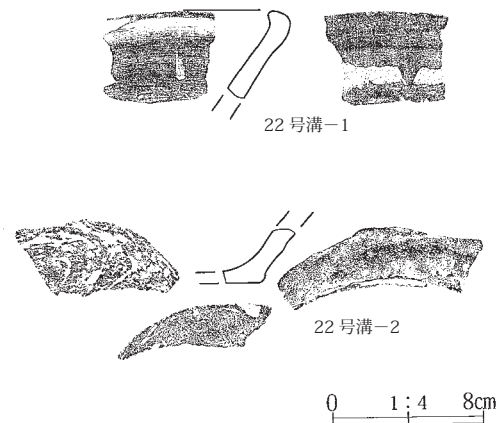
位置 北隅は40Q - 13グリッドの井戸の集中地点付近で途切れ、南隅は40P - 13グリッドで調査区境になる。

重複 2 b区1号井戸に先出する。

形状規模 弱い屈曲はあるが直線的な南北溝で、全長17.6m、深さ36~46cmを測る。上幅は1.5m分まで確認でき2.6m前後まで広がる可能性がある。下幅も45~85cmあり、西館内の溝としては最も大きい。底



2 b区22号溝土層説明
 1: 黒褐色土層: As-B混土。弱粘性土。1'では混入物少ない。
 2: 褐灰色土層: ロームブロック混じりのシルト質土。2'では混入物少なく粘性増す。



第68図 2 b区22号溝と出土遺物

II 発掘調査の記録

面は比高差 15cm 前後の凹凸があり、調査範囲内では南側が浅くなっていた。

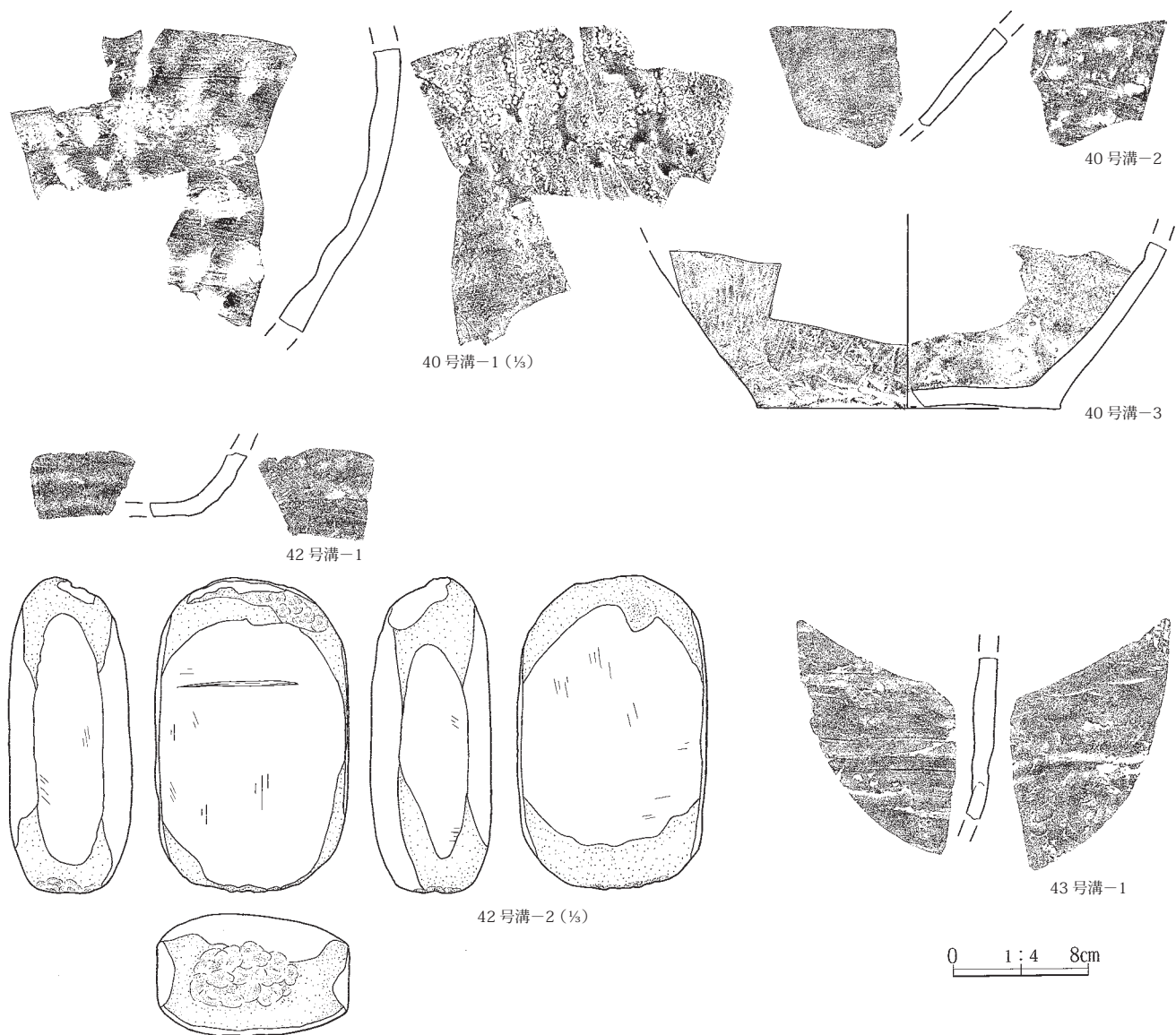
方位 N - 10° E

埋没土 水流の痕跡はない。

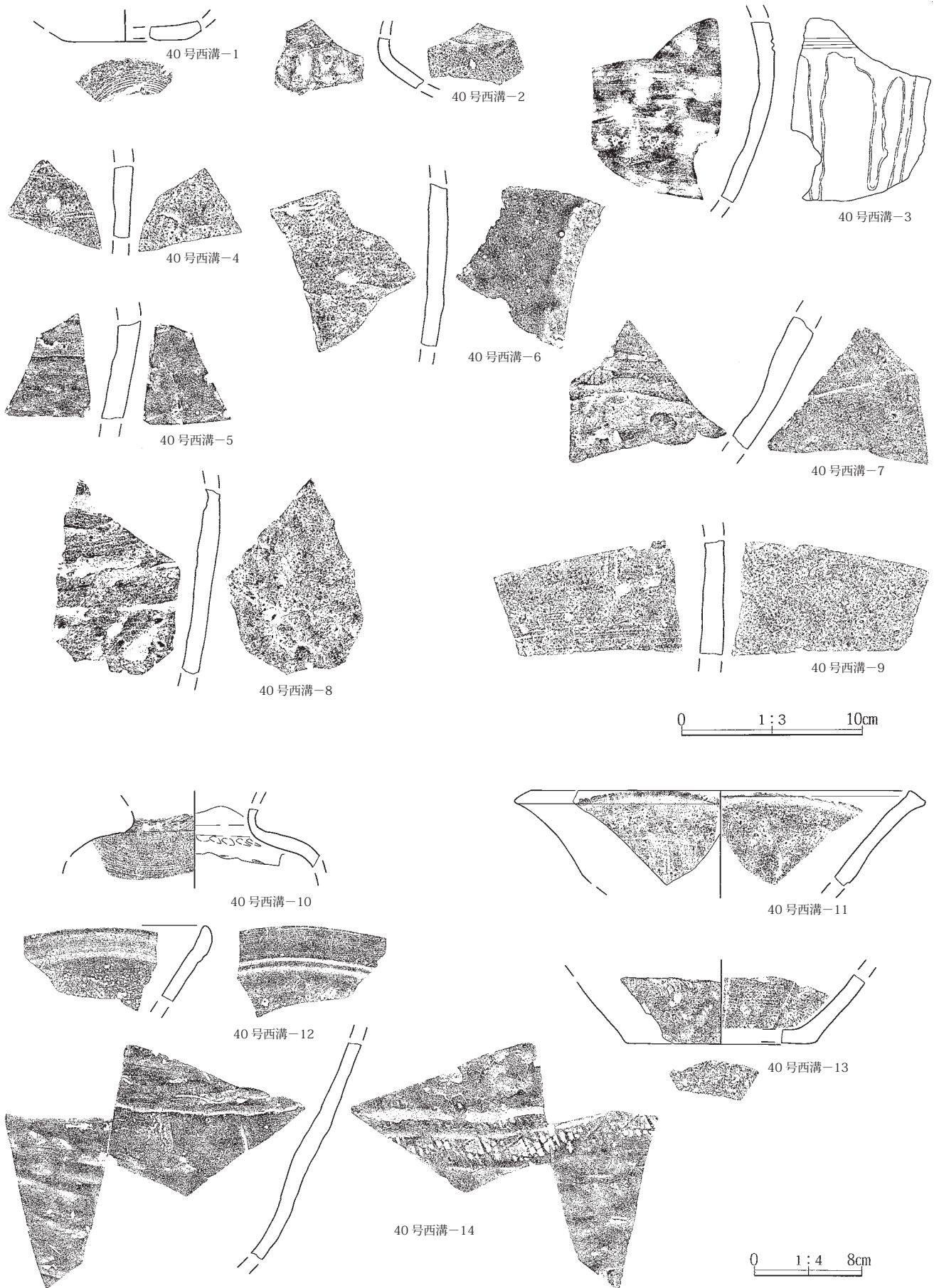
遺物 埋没土内の軟質陶器 2 点を図示した。図示した以外は土師器 1 片が混入していたのみである。

所見 性格不明の施設である。48 号土坑を経由して 42

号溝に繋がる施設の可能性もあるが、規模が大きくて不自然であろう。西館外堀の 40 号西溝と走向が食い違い、館区画に関連する施設とも考えにくい。48 号土坑について調査担当者は洗い場的な施設を想定している。調査範囲での底面傾斜とは合致しないうえ、流水の痕跡も確認できてはいないが、周辺井戸を含め本溝北隅周辺にある諸遺構からの排水施設の可能性も考えられる。



第 69 図 西館出土遺物 (40・42・43 号溝)



第70図 西館出土遺物(40号西溝)

(5) 館区画外の溝

1 a 区北西隅には方形館から離れた一画だが、近世の水田下から性格の不明な溝群が見られた。古式土師器を含む多量の土師器・須恵器を伴っているが、陶磁器類もわずかに見られる。発掘調査残土の排出路下にあたり、遺構を痛め検出を難しくした地点であり、加えて湧水も多く、不明瞭な部分を残してしまった。

窪地部分で調査段階では平安以前の時期を想定したが、時期決定のための確実な根拠に欠く。第1面では1号復旧溝が南北方向で調査されているが、近世水田の区画とも合致しておらず、この項で一括して説明を加える。

1区55号溝 (第71・72図)

北西隅溝群の中で最も南側にある東西溝である。

位置 西隅は31A-2グリッドで調査区境となり、東側は21A-18グリッド付近の窪みの中で分からなくなる。

重複 1号溝に先出する。

形状規模 直線的な溝で、調査できた範囲は長さ18.1m、幅65~98cm、深さ13~25cmを測る。底面レベルは東に低く傾斜していて、特にグリッド19ライン以東で傾斜がきつく、西隅と20cmの比高差がある。

方位 N-77°W 東隅はやや南へ振れる。

埋没土 上層にAs-B混じりの土が見られる。

遺物 古式土師器を中心に173片の土師器・須恵器片が出土した。

所見 全体の傾斜からは、大溝付近の低地部分への排水路と考えられる。As-B下水田の東西畦畔に近似した走向である。

1区57号溝 (第71・72図)

位置 西隅は31C-3グリッドで調査区境になる。東側は21B・C-20グリッドで1号溝西側の窪みと重なり、その1号溝東側の窪地には表れない。

形状規模 幅が上面・底面とも一定せず、形状が不安定な溝である。調査できた長さ6.4m、幅93~115cm、深さ15~34cmを測る。底面レベルは東側へ低く傾斜しており、西隅と18cmの比高差がある。

方位 N-84°W

埋没土 中層に洪水層と思われる砂質土を含む。As-B混じりの土を確認できないが、中世の施設を想定する。

遺物 土師器・須恵器361片と陶磁器1片がある。

所見 55号溝同様の排水路と考えられる。1号溝へ繋がる可能性がある。

1区54号溝 (第71・72図 PL38)

調査区の北西隅にあって調査区境に沿うように走向する溝である。湧水が多く全容を明瞭にしきれなかった。北側にある直線的な走向溝を54号北溝、南へ折れる部分を54号南溝と呼ぶ。南溝東隅には打設された杭やその痕跡が見られるが、本遺構に伴うものか不明である。

位置 西隅は31C-3グリッドで調査区境になる。東側は北溝が21B・C-18グリッドで47号溝と重なっている。南溝は21B-18グリッド付近でわからなくなる。

形状規模 西側は幅2m近い窪地であるが、1号溝との区別が明確にできていない。東側の北溝部分は長さ11.5m、幅90cm前後のほぼ直線的な溝である。南溝は北溝から分岐して弧を描くように南側へ屈曲する。長さ約8m分を調査した。幅は北側で50cm前後だが、南隅では150cm以上になる。

方位 北溝N-74°W 南溝南側N-39°E

遺物 埋没土内出土軟質陶器1点を図示した。他に土師器・須恵器47片と陶磁器1片がある。本遺構に伴うか不明だが、杭2点を図示した(第43図-15・16)。

所見 埋没土の記録を欠く。As-Aは認められないが、2区15・18号溝周辺から続く窪地の末端に該当し、底面はさらに低くなる可能性がある。

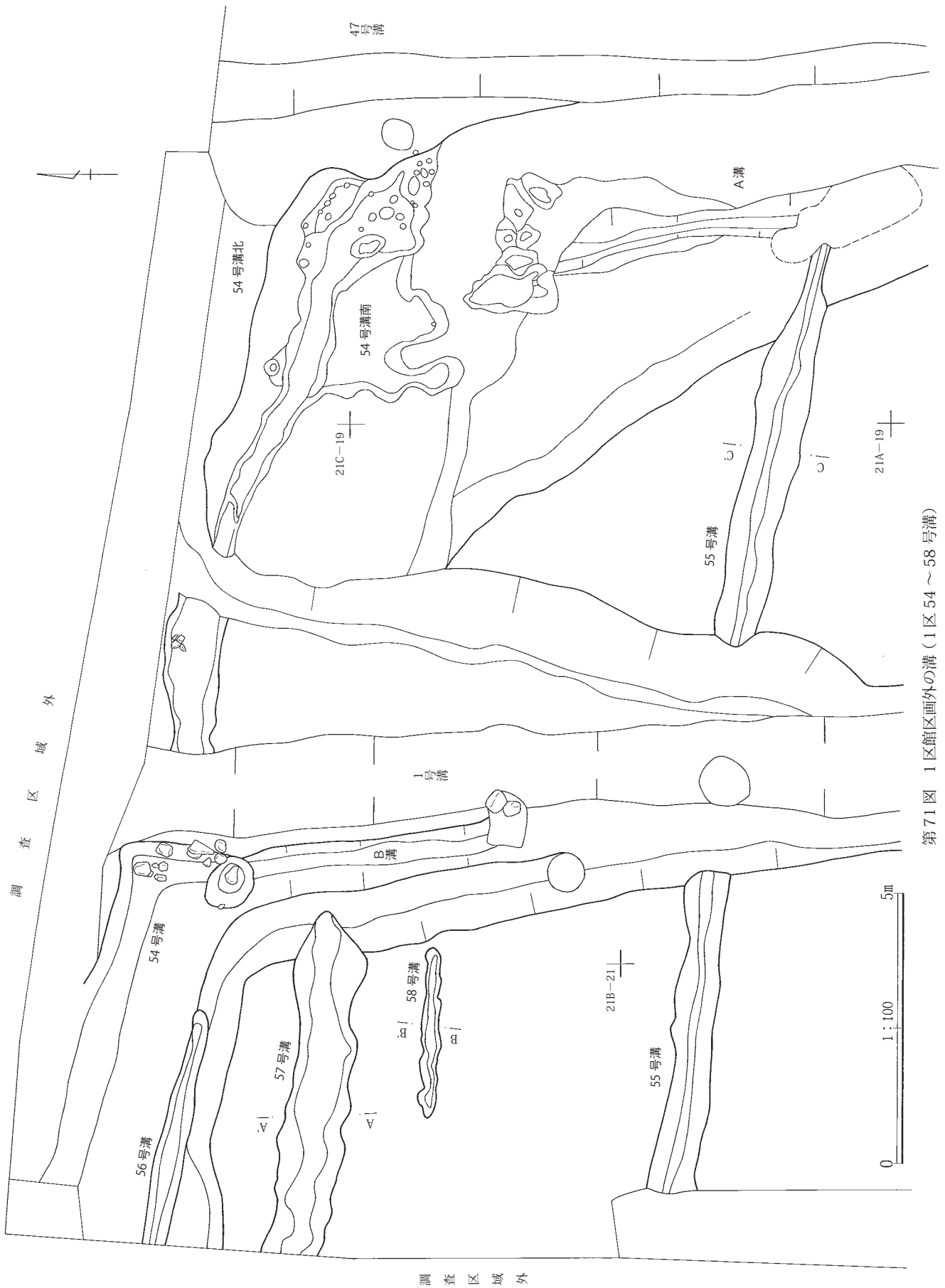
その他の溝 (第71図)

56号溝は57号溝の北2m付近にある幅40cm前後の東西溝で、東隅は1号溝と重なって分からなくなる。

58号溝は55号溝の北4.3mにある長さ3m、深さ5cm前後の小溝で耕作痕に近い。走向はN-87°W前後で、周辺を含め143片の土師器・須恵器を出土している。調査段階で名称のなかった2条の溝をA・Bとした。

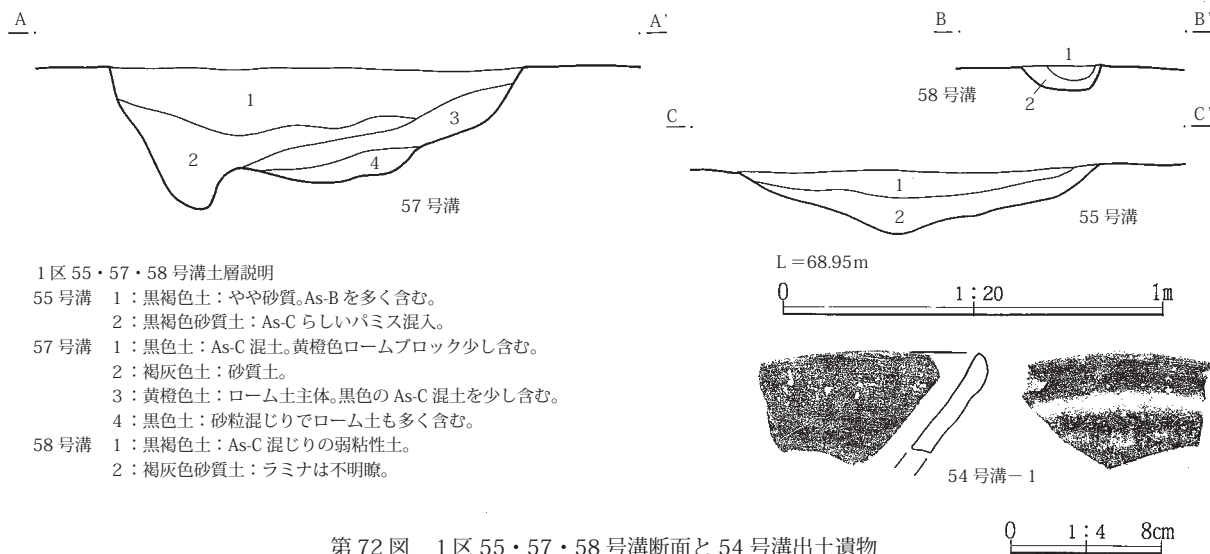
A溝は調査時に番号を付けなかった遺構だが、21A-18~19グリッドにある南北溝で54号北溝から続く可能性がある。走向はN-15°W前後で1号溝と並走する。

B溝は1号溝西脇に見られる窪みで54号溝から南へ折れ走向はN-9°W前後である。深さ10cm前後の不明瞭な溝だが、57号溝はこの部分へ繋がる可能性もある。



第71図 1区箱区画外の溝(1区54~58号溝)

II 発掘調査の記録



(6) 掘立柱建物

5面の調査では、総数で1800基を超えるピットの調査を行った。ほとんどが方形館の区画内で確認されたものである。調査段階で掘立柱建物としたものは25棟であるが、整理段階で飯森康弘の指導により、81棟の建物を復元した。調査区ごとの建物内訳は1a区40棟、1b区16棟、2区25棟である。館区画ごとの内訳は北館内が1～27号まで、南館内が28～56号まで、西館が101～125号までである。

その他に建物と考えられるが1列の柱のみの確認で建物の存在が確定できないものを柱列として扱った。1a区・1b区に2棟ずつある。

柱穴間の計測値は芯芯距離を表わしている。面積もこの測点を用いたものである。軸方向は梁間方向の角度である。本文中では掘立柱建物を建物と省略して記している。調査と整理段階での建物把握に齟齬が生じたため、遺構写真には不備が多数生じてしまった。なお、第IV章244頁以下に掘立柱建物についての考察を加え、文中の246頁(第17表)に一覧を掲載した。所見に記した分類はこの考察に拠るものである。

北館内の建物 27棟の掘立柱建物と2か所の柱列を確認している。本遺跡で調査した3個所の方形館の中で、館内の南側を調査できたのはこの北館のみであるが、敷地内南西側には建物が少ない等、建物占地傾向が看取で

きた。総柱建物がないこと、変則的な建物の少ないこと、建物間の重複も少ないことが北館内建物の特徴である。

1号掘立柱建物(第73図 PL-15・16)

概要 北館の東隅に1棟だけ離れたピットの少ない一画にある建物である。北館の東側外堀である51号溝との距離は狭く、上端で計測してP3で53cm、P4で45cmである。

位置 30Q-3・4グリッド。

重複 52号溝が建物区画を斜めに横切っている。

形状規模 2間×2間の側柱建物である。P4とP8が外側に張り出すため、六角形に近い平面形となっている。

面積 16.48㎡を測る。

軸方向 N-10°W

柱穴 8本の柱穴は径40cm台前後の近似した規模である。P7・P8では断面に柱痕が確認できる。

所見 3類。北館西隅にある26号建物も形状が似ており、館内の東西両隅に類似した建物が配置されている。

2号掘立柱建物(第73図 PL-16)

概要 北館内の建物密集地点の南東隅にあり、北館の南区画堀から最短で1.1mしか離れていない。

位置 30R-5・6グリッド。

重複 8号掘立柱建物南東隅が本建物南西隅に重なっている。38・39号溝が建物区画内西側を横切っている。

P 6は24号土坑に先出すると思われる。

形状規模 南・東側柱筋に柱穴がない2間×2間の建物で、総柱建物の可能性もあろう。面積13.76㎡を測る。

軸方向 N-16°E

柱穴 7本の柱穴のうち北西側のP1・2が小規模である。西側に並ぶ3基は長方形に近い平面形をしているが、個々の軸方向が建物の柱筋より西側に振れている。

所見 6類。

3号掘立柱建物 (第74図 PL-16)

概要 調査区北隅にあり、北側柱穴の大半は調査区域外で確認できなかった。桁行は本遺跡最大である。

位置 30S・T-6~8グリッド。

重複 南側に4~7・10~16号の11棟の建物・1号柱列が重複する。他に12号井戸・32号溝が西側区画内にあり、16号井戸が東側に近接している。

形状規模 南側6間×西側2間以上の規模の側柱建物である。西側梁間4.38m、南側桁行12.60mを測る。

軸方向 N-4°E

柱穴 大型建物であるが、柱穴は比較的小規模である。南側の柱穴は柱筋状に並ぶが、柱間はP1・2およびP4・5の間が短くなっている。

所見 5類。桁行6間の規模は本遺跡南館の45号建物の他、斉田中耕地遺跡6号建物の例がある。

4号掘立柱建物 (第74図 PL-16)

概要 北館内の建物が最も密集する一画にある。縦横比1:2の細長い小型建物で、面積は北館内最少である。

位置 30S-6・7グリッド。

重複 3・5~7・10~14号の9棟の建物が重複する。

形状規模 1間×2間の側柱建物である。P5が柱筋のやや内側にあるが、他は規則的な配置である。東側梁間2.25m、北側桁行4.50m、面積10.13㎡を測る。

軸方向 N-10°E

柱穴 6本の柱穴は比較的小規模であるが、四隅のピットは南東のP4を除いて深くなっている。

所見 6類。

5号掘立柱建物 (第75図 PL-16)

概要 北館内南東側の建物が最も密集する一画にある。

縦横比がおおよそ1:2の細長い建物である。

位置 30S-6・7グリッド。

重複 3・4・6・7・10~15号の10棟の建物が重複する。P7が29号土坑に、P8が32号溝と重複する。

形状規模 1間×3建の側柱建物である。東側梁間2.68m、北側桁行5.25m、面積14.07㎡を測る。

軸方向 N-5°E

柱穴 8本の柱穴は、形状はまちまちだが小規模で、径40cmを超えるものはない。

所見 4類。

6号掘立柱建物 (第76図 PL-16)

概要 北館南東側の建物が密集する一画北東寄りにある。

位置 30S-6・7グリッド。

重複 3~5・7・10~14号の9棟の建物が重複する。

形状規模 1間×2間の側柱南北棟建物である。北側梁間3.42m、東側桁行4.35m、面積14.88㎡を測る。

軸方向 N-85°E

柱穴 全体に平面は小規模で、P6を除きコーナー柱穴が深くなっている。P2の北側への偏りがやや大きい。

所見 4類。

7号掘立柱建物 (第75図 PL-16)

概要 北館内の建物が最も密集する一画中央にある。

位置 30S-6・7グリッド。

重複 3~6・8・11~16号の11棟の建物の他、29・30号土坑、32号溝と重複している。

形状規模 1間×3間の側柱建物である。東側梁間3.72m、北側桁行6.23m、面積23.18㎡を測る。

軸方向 N-0°

柱穴 8本の柱穴はいずれも平面は小規模で、P1以外は深さも20cm前後である。

所見 4類。

8号掘立柱建物 (第76図 PL-16)

概要 北館内南東側建物群の南隅にある。南西隅付近は館堀である21号溝と重複し、館区画から南側外へはみ出す唯一の建物となってしまった。

位置 30R-6・7グリッド。

重複 2・9・17号建物の他、7号井戸・24号土坑・

32号溝と重複する。

形状規模 桁行3間で北側に下屋が付く建物を想定した。梁間1間と思われ、下屋の張り出しは1.1mである。

1間×4間の建物から復元した場合、身屋部分の面積23.68㎡、下屋部分は6.84㎡を測る。

軸方向 N-13°W

柱穴 身屋部分5本、下屋部分3本の柱穴を調査した。下屋部分より身屋部分のほうが規模は大きい。

所見 2類。北館内の北下屋建物は本址のみである。

9号掘立柱建物 (第77図 PL-16)

概要 北館内南東側建物群の南隅にある。北館の南区画堀にあたる21号南溝から最短で0.7mしか離れていない。

位置 30S・T-6・7グリッド。

重複 6～8、10・13～16号の8棟の建物の他、7号井戸・32号溝と重複する。

形状規模 1間×変則2間の側柱建物を想定した。この場合、東側梁間3.95m、北側桁行5.82m、面積22.99㎡を測る。

軸方向 N-13°W

柱穴 6本の柱穴は平面規模が近似する。深さは西側2本のみ浅くなっている。

所見 2類。西側に底の付く1間×1間の建物となる可能性もあろう。

10号掘立柱建物 (第77図)

概要 北館内南東側建物群の北隅にある。北東コーナー柱穴は調査区域外にかかり確認できていない。

位置 30S・T-6・7グリッド。

重複 3～7・9・11～15の11棟の建物の他、29号土坑・32号溝と重複する。

形状規模 1間×3間の側柱建物を想定した。南側梁間3.85m、西側桁行6.45m、復元面積24.83㎡を測る。

軸方向 N-3°W

柱穴 6本の柱穴はいずれも平面径30cm以内で小規模である。東側が深い傾向がある。

所見 4類。

11号掘立柱建物 (第78図 PL-16)

概要 確認できた範囲では変則的な建物である。柱穴は

浅いものがあり、残存しない柱穴が存在すると想定した。

位置 30S・T-7・8グリッド。

重複 3～7・10・12～17号の12棟の建物の他、32号溝と重複する。

形状規模 梁方向では柱筋西側の柱穴が確認できなかつたとし、規模から梁行1間が妥当とし、1間×3間の側柱東西棟を想定した。東側梁間4.08m、北側桁行6.40m、面積10.48㎡を測る。

軸方向 N-4°W

柱穴 東側の柱穴のみ平面規模が大きく、深い。

所見 4類。北柱筋の柱穴は32号溝と重複する位置にあったと想定され、確認できなかった可能性がある。重複する12号建物等とは軸方向が異なっている。

12号掘立柱建物 (第78図 PL-16)

概要 北館内の建物が最も密集する一画の北東寄りにある。12～15号の4棟の建物は、軸方向が近く、ほぼ同じ地点に建て替えられている。

位置 30S・T-7・8グリッド。

重複 3～7・10・11・13～17号の12棟の建物と重複し、32号溝を跨いでいる。

形状規模 1間(東側に中間柱穴あり)×3間の東西棟側柱建物である。東側梁間3.50m、北側桁行6.42m、面積22.47㎡を測る。

軸方向 N-15°W

柱穴 小規模な柱穴による建物が多い一画にあって、やや規模の大きい柱穴からなる。9本の柱穴中、西側2本が小さく浅い。南側が深い傾向がある。

所見 1類。

13号掘立柱建物 (第79図 PL-16)

概要 12号建物とは西・北の柱筋を、14号建物とは東・南の柱筋が30cm以内に近接している。

位置 30S-7・8グリッド。

重複 3～7・10～12・14～17号の12棟の建物の他、32号溝・29号土坑と重複する。P3・4は14号建物柱穴と直接重複するが、新旧関係の記録を欠いている。

形状規模 1間×3間の南北棟側柱建物である。配置はやや不規則で柱筋から外側へ逸れる柱穴が多い。北側梁間4.90m、東側桁行6.15m、面積30.14㎡を測る。

軸方向 N-24～25°W

柱穴 8本とも小規模で、径・深さとも30cm前後を超えるものはない。

所見 1類。

14号掘立柱建物 (第79図 PL-16)

概要 14号建物とは東・南の柱筋をほぼ共有するように重複し、同建物を一回り小さくしたような遺構である。

位置 30S-7・8グリッド。

重複 3～7・10～13・15～17号の12棟の建物の他、32号溝・29号土坑と重複する。

形状規模 1間×3間の南北棟側柱建物である。北側梁間3.60m、東側桁行5.25m、面積18.90㎡を測る。

軸方向 N-22～24°W

柱穴 8本とも小規模で、北西隅のP8のみやや深い。

所見 1類。

15号掘立柱建物 (第80図)

概要 南辺の柱筋を13・14号建物の南辺柱筋とほぼ共有する。

位置 30S-7・8グリッド。

重複 3・5～7・10～14・15・16号建物の他、32号溝・29号と重複する。

形状規模 南辺4.10m、東辺3.95mで正方形に近い形状である。短い東辺・西辺が2間、長い北・南辺が1間となっている。面積は16.39㎡を測る。

軸方向 N-66°E

柱穴 径・深さとも差が大きい、P3を除きコーナー柱穴が深くなる傾向がある。

所見 1類。

16号掘立柱建物 (第80図 PL-16)

概要 大きめの隅丸方形で類似した柱穴からなり、建物の密集する一面にあって最も把握しやすい遺構であった。12～15号の建物群の西寄りにあり、北辺は12号建物・南辺は13～15号建物の柱筋に近接している。

位置 30R・S-7・8グリッド。

重複 3・7・9・11～15・17号の9棟の建物と重複する。東側の柱筋は32号溝中央に並んでおり、P2で同溝に先出する(第53図)。

形状規模 1間×3間の南北棟側柱建物である。南側梁間3.80m、東側桁行6.15m、面積23.99㎡を測る。

軸方向 N-17～19°W

柱穴 8本の柱穴は隅丸方形のプランを呈し、規模も径50cm前後と大型で揃っている。平面の大きさに比べ深さはあまりない。P3・4・7など柱穴底面に柱痕状の窪みが観察できるものがある。

所見 2類。

17号掘立柱建物 (第81図 PL-17)

概要 北館内南東側建物群の西隅にある。

位置 30R・S-8グリッド。

重複 9・11～16号の7棟の建物と重複する。

形状規模 2間×2間の側柱建物と思われるが、東側の柱穴を1本欠いている。南辺は北片より35cm、西辺は東辺より25cm長く、台形気味の平面となっている。面積は17.46㎡を測る。

軸方向 N-65～67°E

柱穴 径は小規模で揃っており、P7以外は径に比して深さがある。

所見 1類。

18号掘立柱建物 (第81図 PL-17)

概要 北館内北西側建物群の東隅にある。北西隅は調査区域外となり、完掘できていない。

位置 30T-8・9～21A-9グリッド

重複 19～23号の5棟の建物および34・38号土坑と重複する。東側に隣接する32号溝とは75cm離れている。

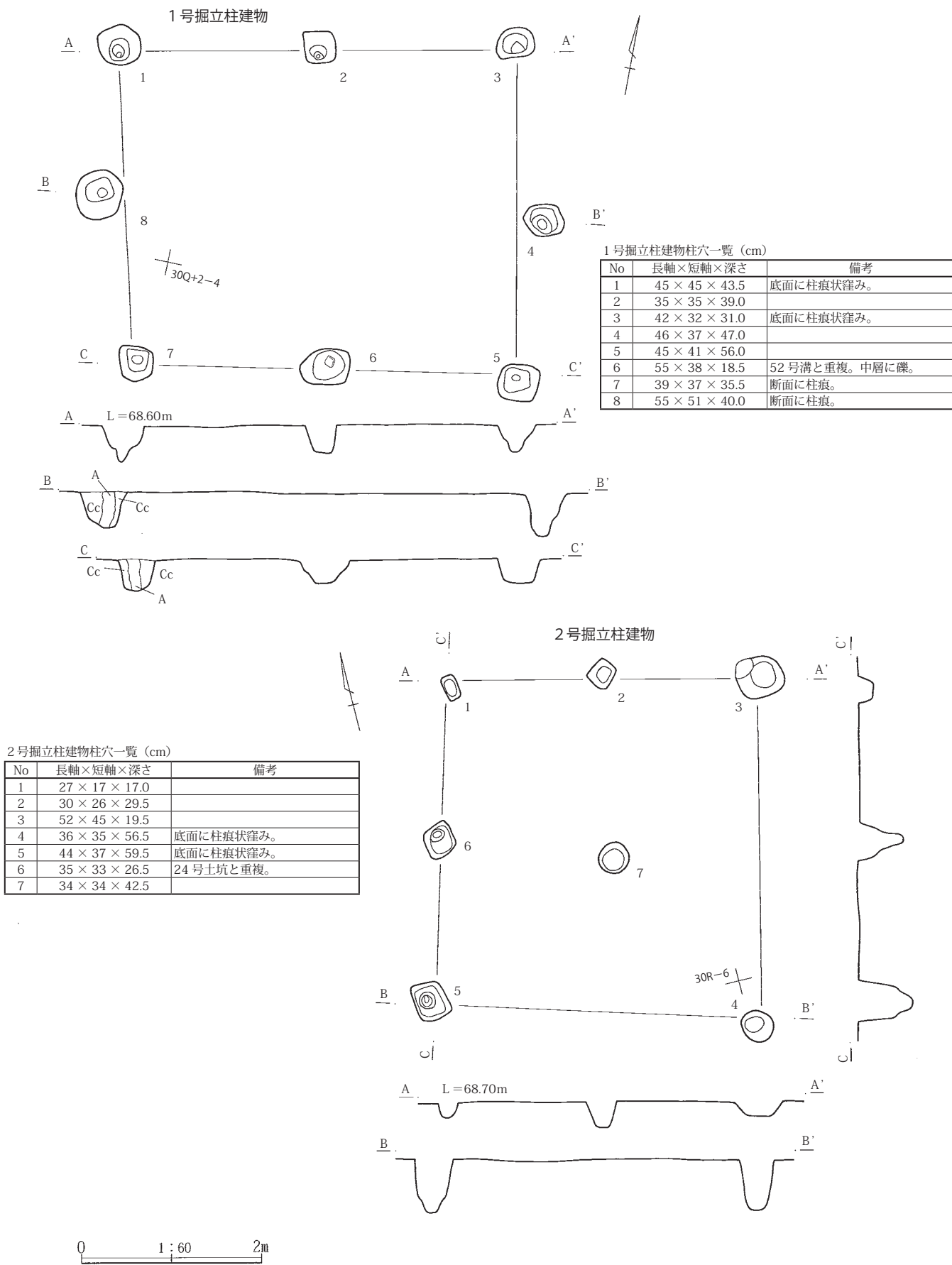
形状規模 1間×3間の東西棟側柱建物であろう。西側梁間4.10m、南側桁行6.30m、残存面積22.01㎡を測り、復元面積は25.8㎡となる。

軸方向 N-70°E

柱穴 6本の柱穴は径・深さとも揃っているが、断面形状は先が柱痕状に尖るもの(P3・4・6)と平底気味(P1・2・5)に二分される。

所見 2類。

II 発掘調査の記録



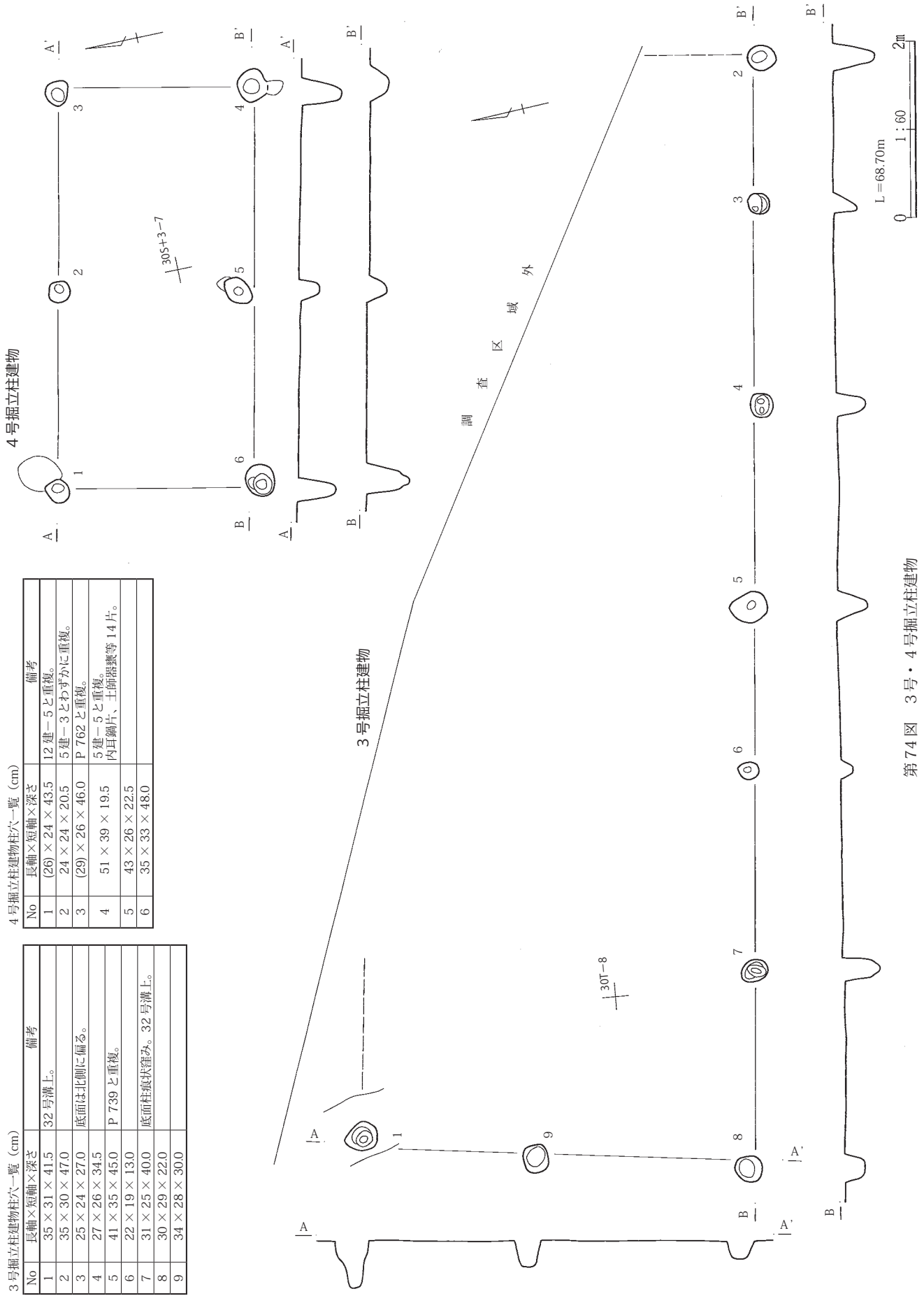
第73図 1号・2号掘立柱建物

4号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	(26) × 24 × 43.5	12建-5と重複。
2	24 × 24 × 20.5	5建-3とわずかに重複。
3	(29) × 26 × 46.0	P 762と重複。
4	51 × 39 × 19.5	5建-5と重複。 内耳銅片、土師器残等 14片。
5	43 × 26 × 22.5	
6	35 × 33 × 48.0	

3号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

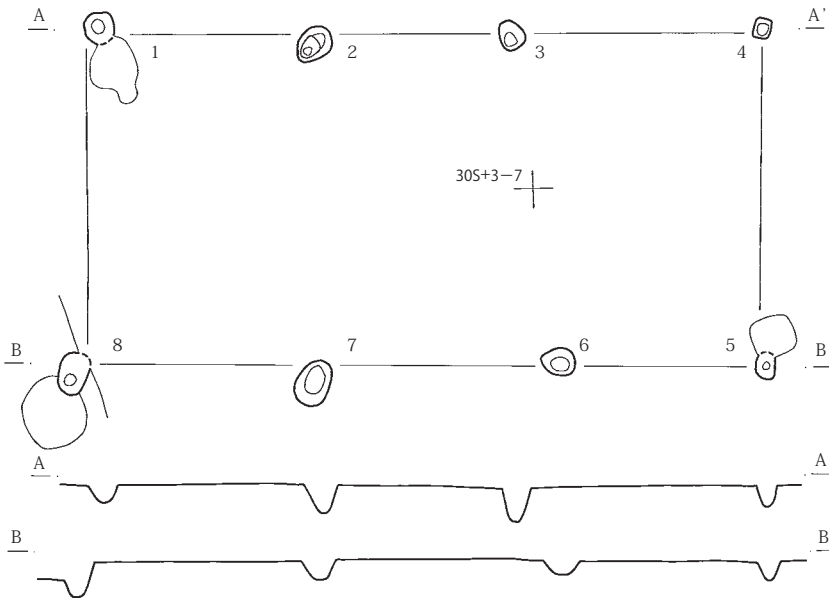
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	35 × 31 × 41.5	32号溝上。
2	35 × 30 × 47.0	
3	25 × 24 × 27.0	底面は北側に偏る。
4	27 × 26 × 34.5	
5	41 × 35 × 45.0	P 739と重複。
6	22 × 19 × 13.0	
7	31 × 25 × 40.0	底面柱痕状窪み。32号溝上。
8	30 × 29 × 22.0	
9	34 × 28 × 30.0	



第74図 3号・4号掘立柱建物

II 発掘調査の記録

5号掘立柱建物



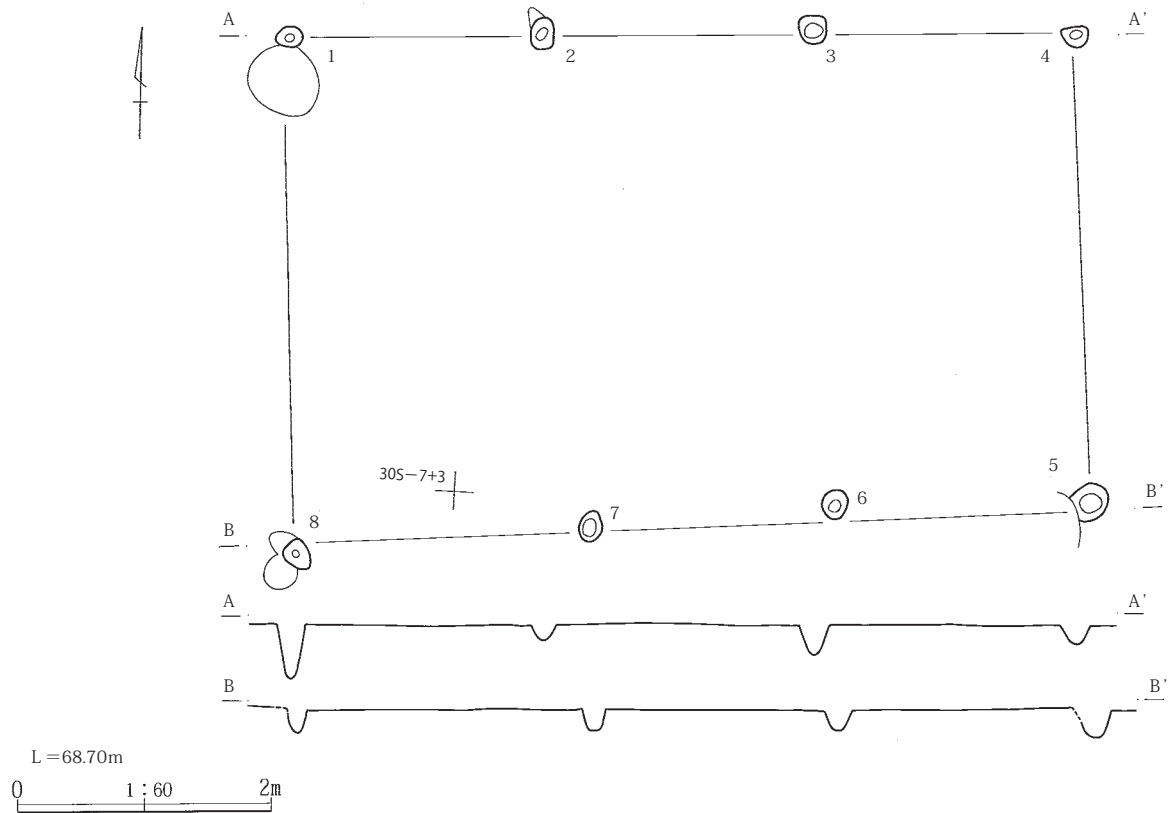
5号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	(22) × 22 × 13.5	15建-1と重複。
2	32 × 23 × 31.0	
3	23 × (20) × 28.0	4建-2とわずかに重複。
4	15 × 14 × 16.0	
5	20 × 16 × 13.5	4建-4と重複。
6	27 × 22 × 11.0	
7	38 × 27 × 15.5	29号土坑と重複。
8	26 × 23 × 28.0	16建-3・32号溝と重複。

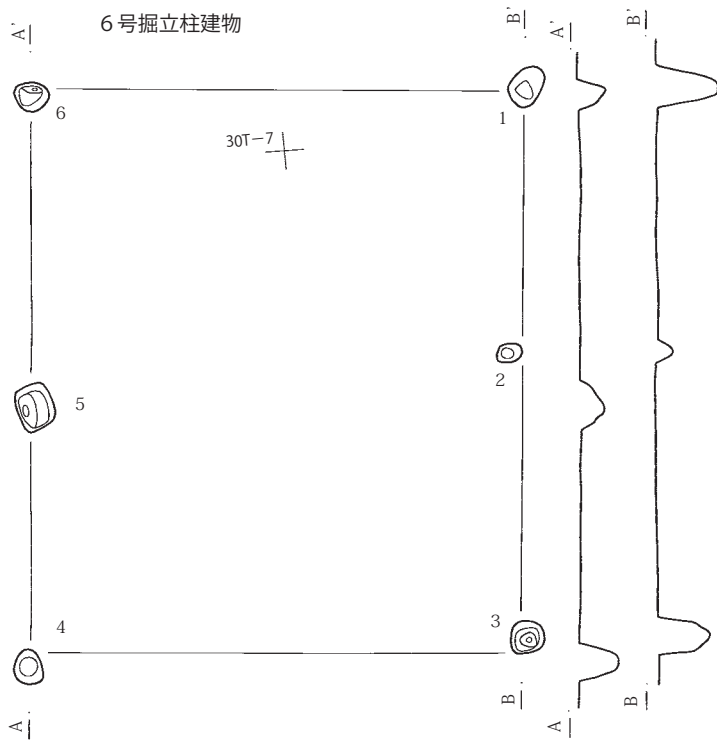
7号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	20 × 16 × 44.0	16建-2と重複。32号溝上。
2	34 × 19 × 21.5	北側に抜柱痕か。
3	23 × 22 × 22.5	
4	21 × 15 × 12.5	
5	31 × 30 × 21.5	30号土坑とわずかに重複。
6	21 × 20 × 14.5	30号土坑と重複。
7	23 × 19 × 17.5	
8	23 × 20 × 19.5	14建-5と重複。

7号掘立柱建物



第75図 5号・7号掘立柱建物

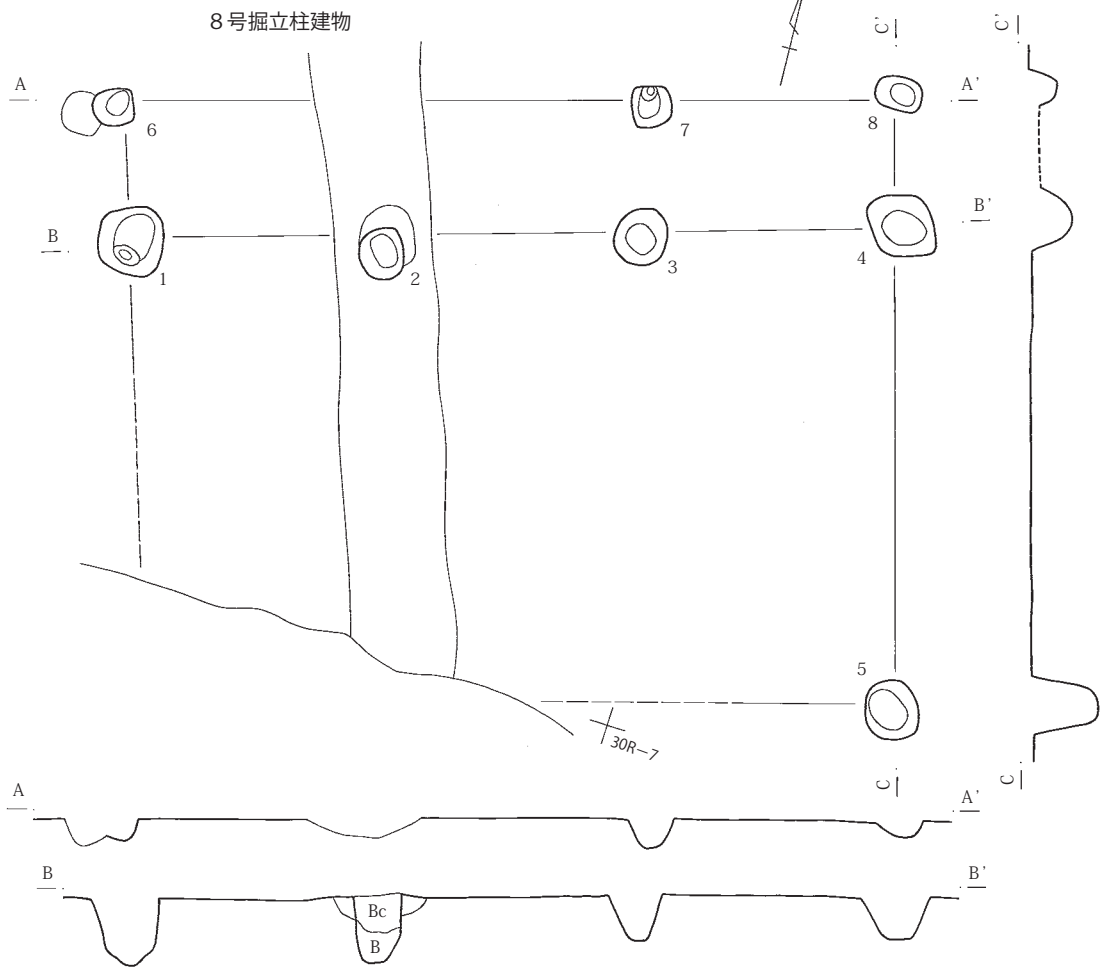


6号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	33 × 25 × 48.5	P 754 とわずかに重複。
2	21 × 15 × 12.5	
3	26 × 26 × 39.5	
4	28 × 24 × 31.5	29号土坑と重複。
5	34 × 28 × 17.5	
6	25 × 22 × 21.5	

8号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	54 × 52 × 55.5	
2	40 × 34 × 53.5	先出ピットあり。32号溝上。
3	45 × 42 × 38.5	
4	51 × 48 × 31.0	30号土坑と重複。
5	48 × 42 × 50.0	38号溝と重複。
6	(28) × 31 × 17.0	P 356 と重複
7	34 × 32 × 33.5	
8	36 × (25) × 19.5	30号土坑と重複。

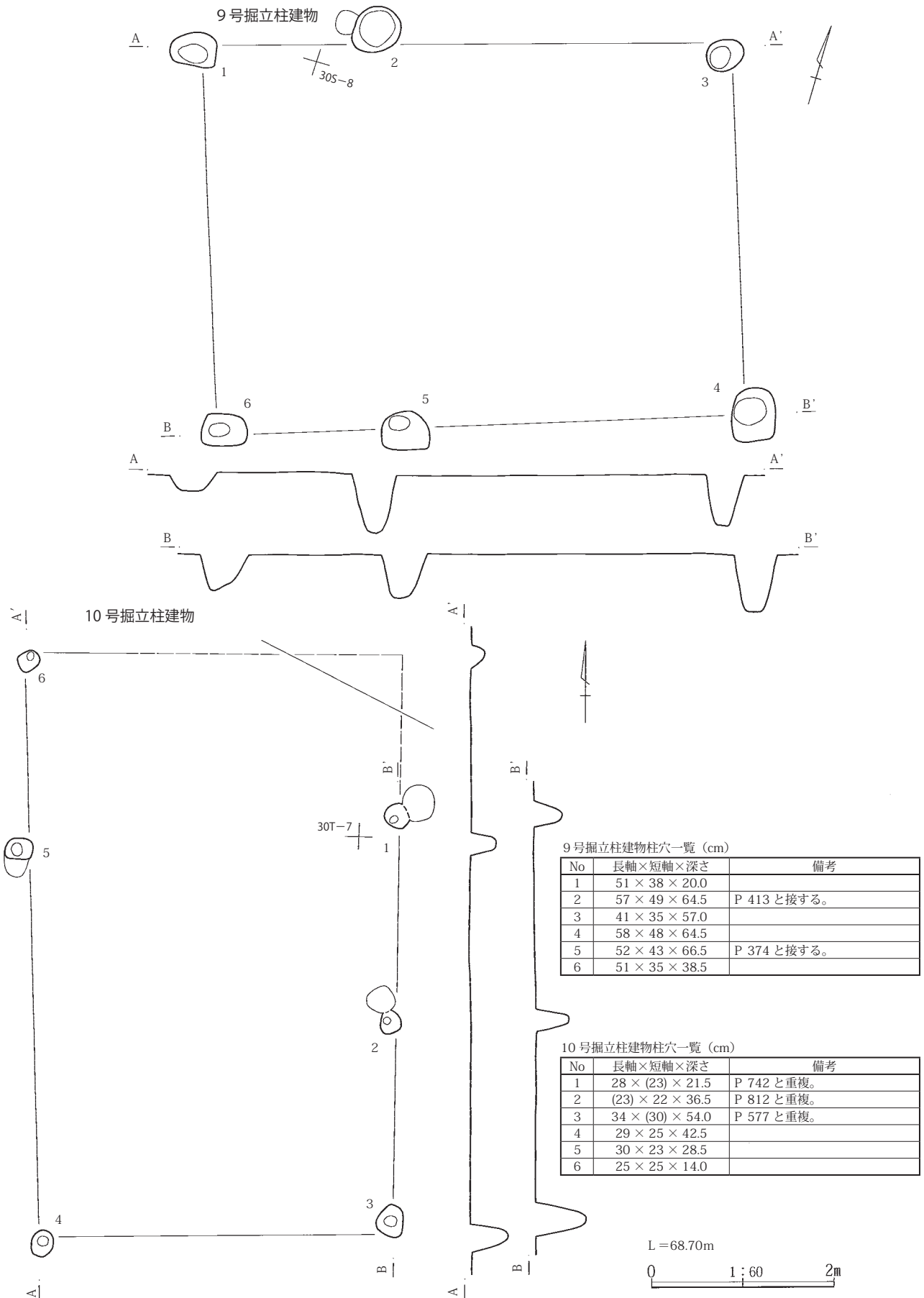


L = 68.70m

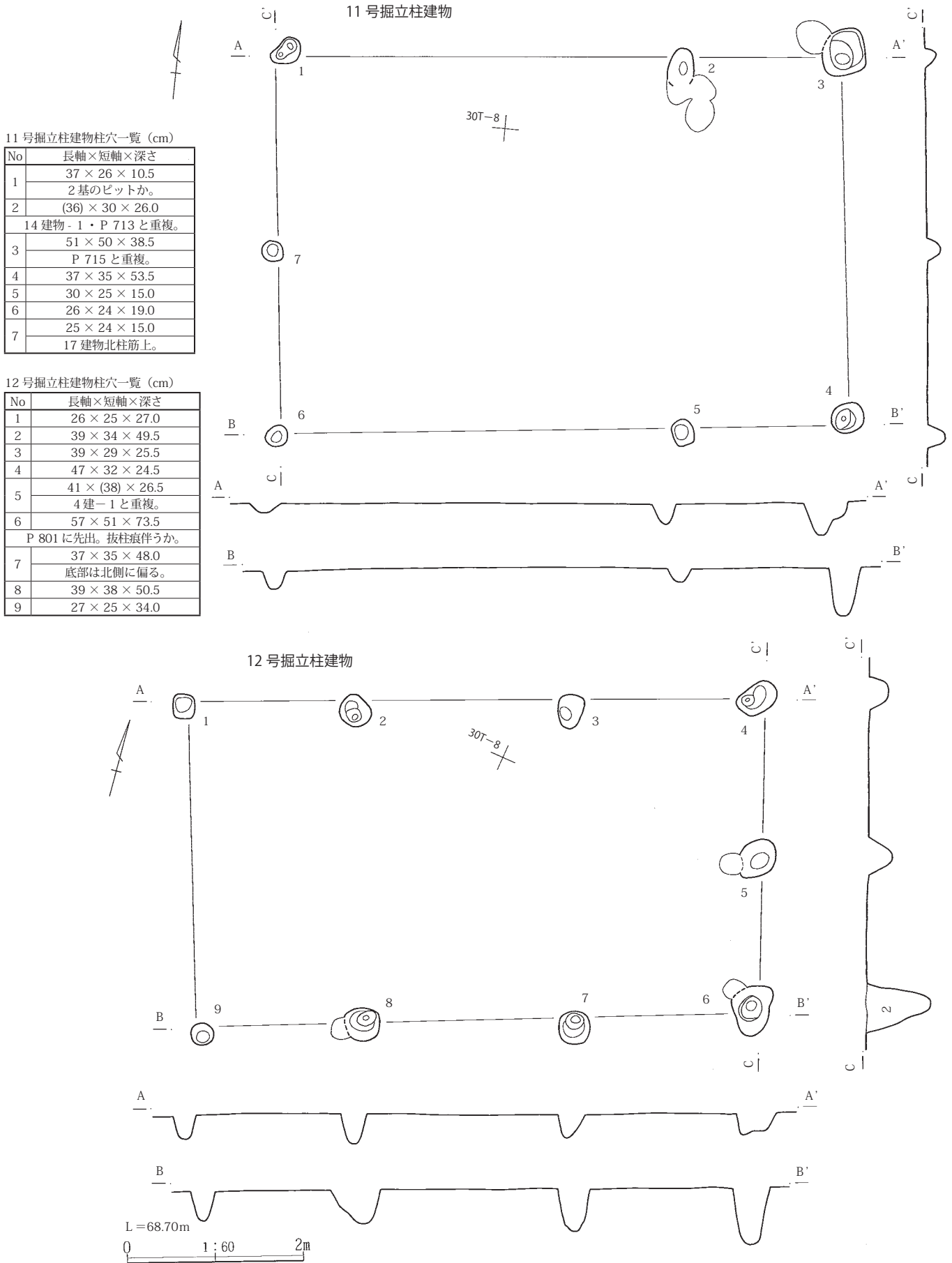
0 1 : 60 2m

第76図 6号・8号掘立柱建物

II 発掘調査の記録

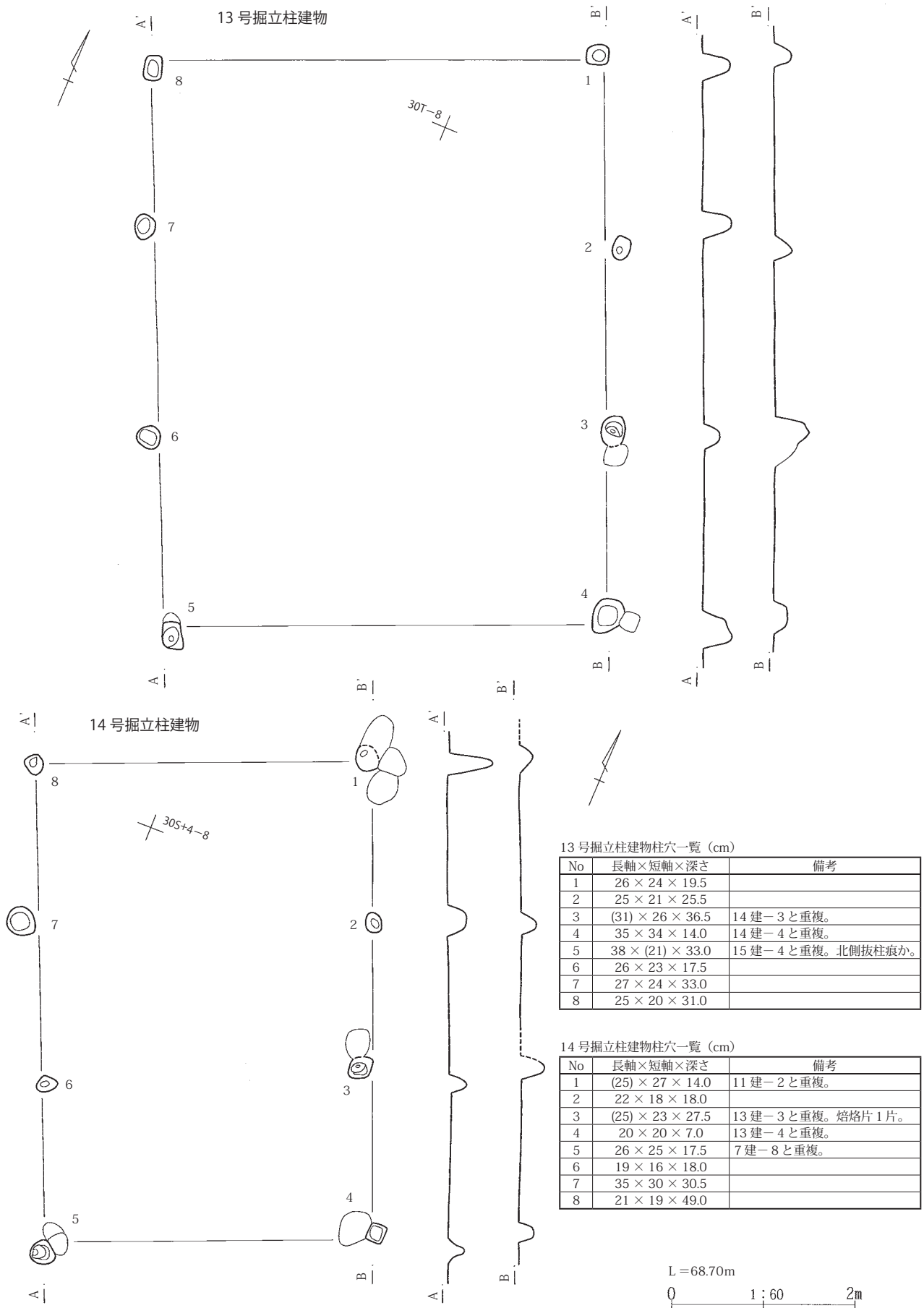


第77図 9号・10号掘立柱建物

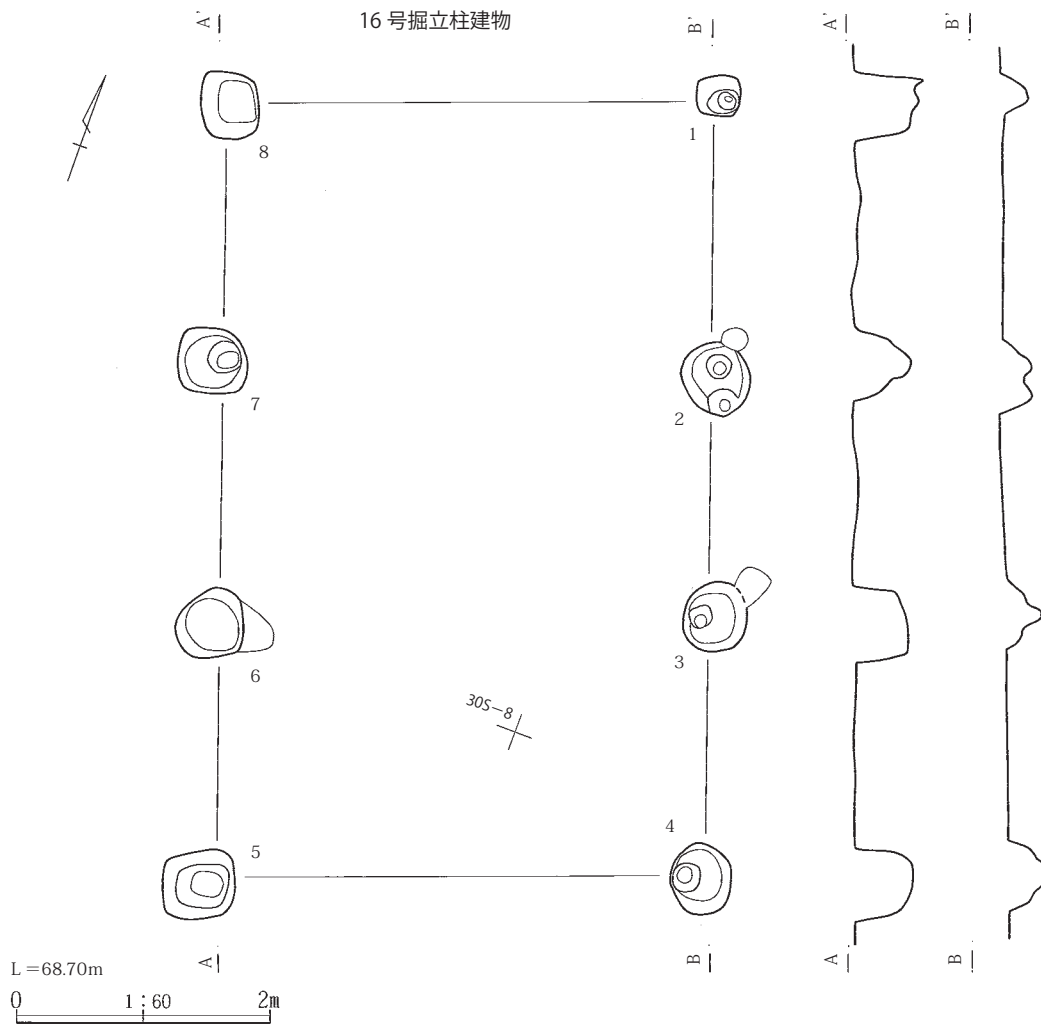
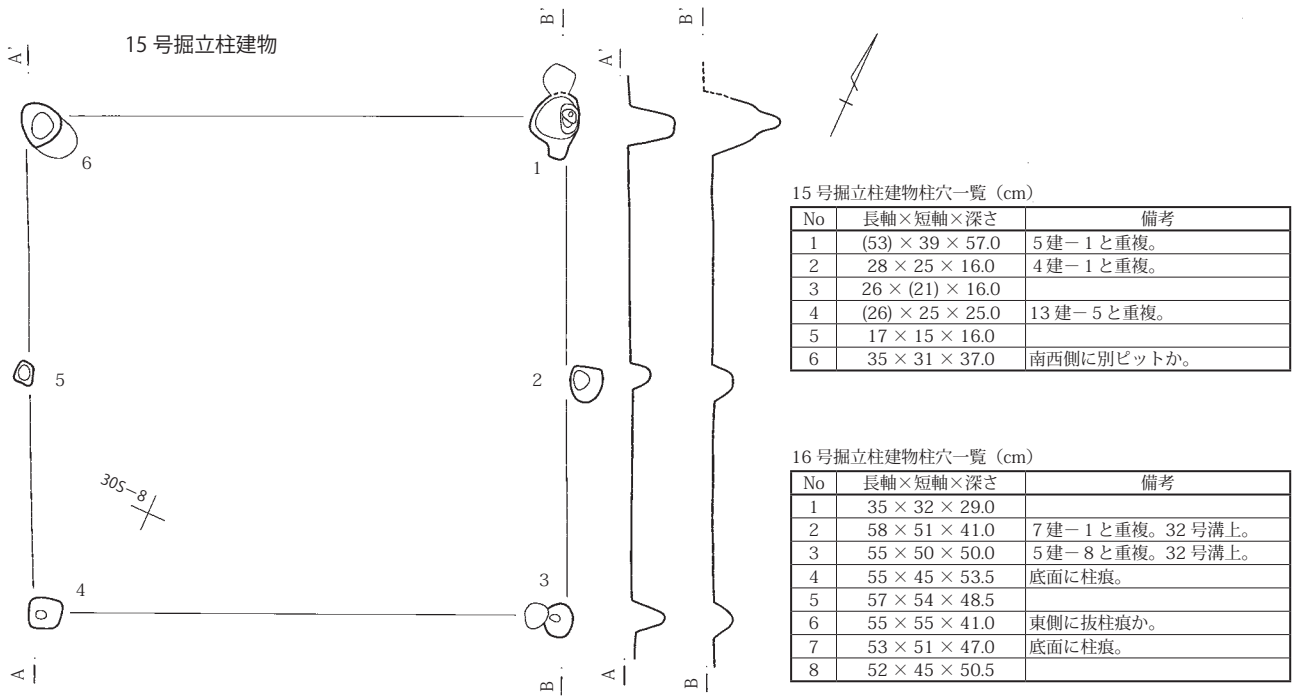


第78図 11号・12号掘立柱建物

II 発掘調査の記録



第79図 13号・14号掘立柱建物



第80図 15号・16号掘立柱建物

II 発掘調査の記録

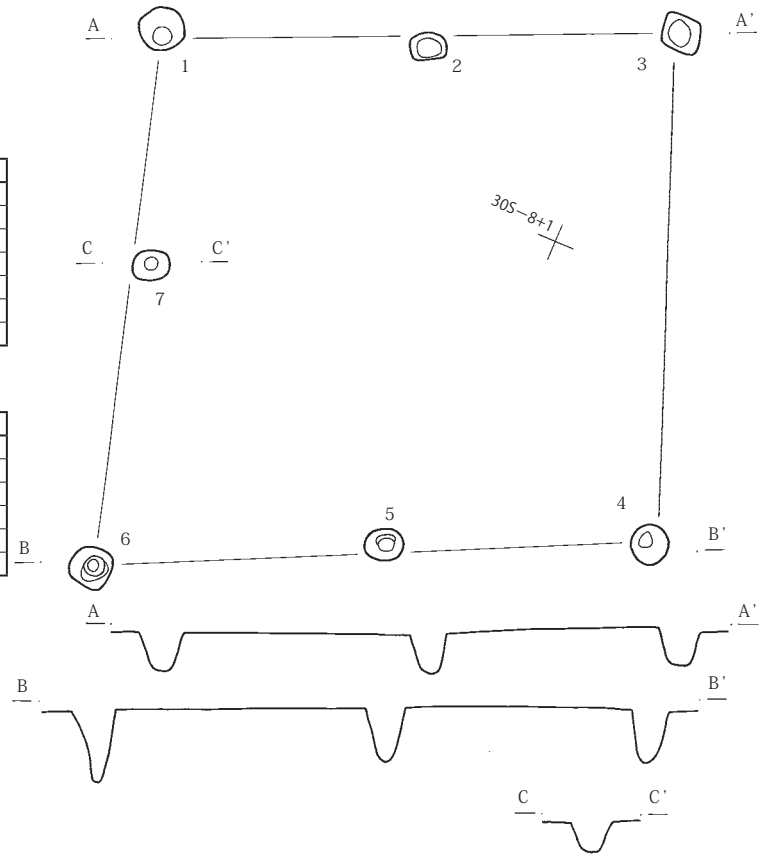
17号掘立柱建物

17号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

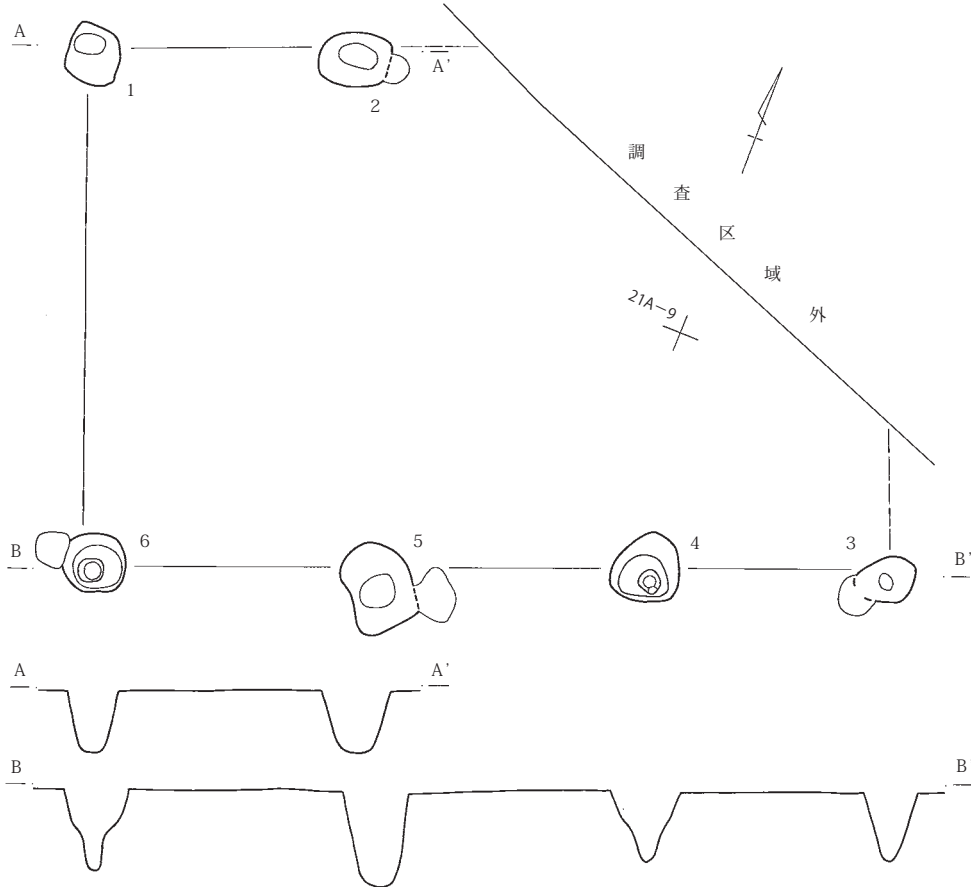
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	37 × 34 × 33.0	
2	28 × 21 × 33.0	
3	30 × 26 × 30.0	
4	30 × 28 × 42.5	
5	31 × 24 × 44.0	
6	33 × 32 × 58.0	底部東に偏る。
7	29 × 24 × 22.0	

18号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

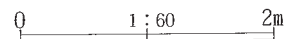
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	44 × 42 × 48.0	
2	55 × 42 × 52.5	東側に小ピット重複。
3	(40) × 37 × 53.0	P 725 と重複。
4	54 × 54 × 57.0	
5	71 × 50 × 74.5	P 689 と重複。
6	(49) × 46 × 52.0	P 524 と重複。



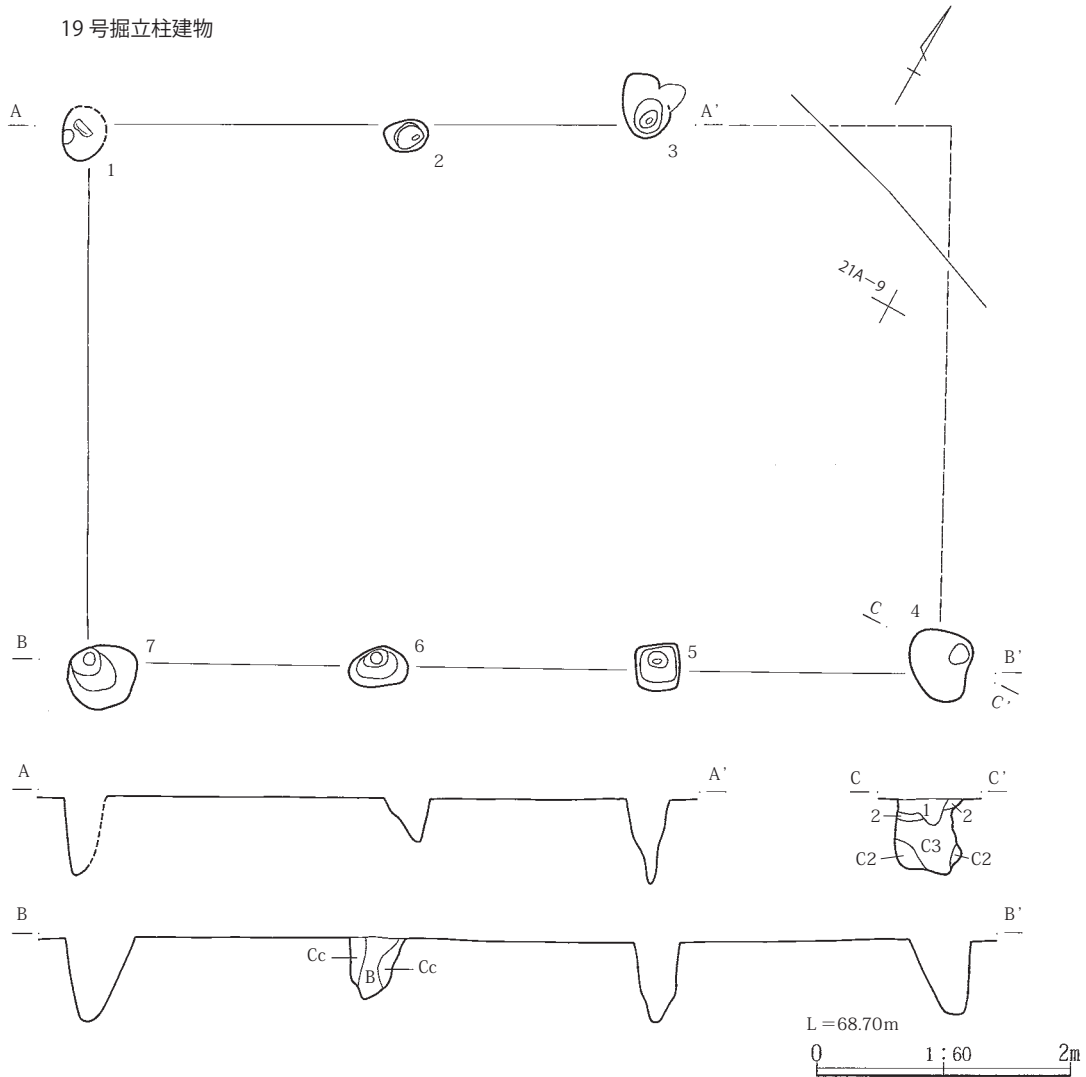
18号掘立柱建物



L = 68.70m



第81図 17号・18号掘立柱建物



第82図 19号掘立柱建物

19号掘立柱建物 (第82図 PL-17)

概要 北東隅は調査区域外で、コーナー柱穴1本を把握できていない。北側柱筋は22号建物南側の身屋部分柱筋と近接する。

位置 30 T-8・9・10 ~ 21 A-8・9 グリッド。

重複 18・20 ~ 23号の5棟の建物と重複し、区画内に4・38号土坑、9号墓坑が含まれる。

形状規模 1間×3間の側柱建物である。個々のピットは長円形気味だが、P5のみ整った方形を呈している。西側梁間4.23m、南側桁行6.93mを測り、復元面積は29.3㎡になる。

軸方向 N-63°E

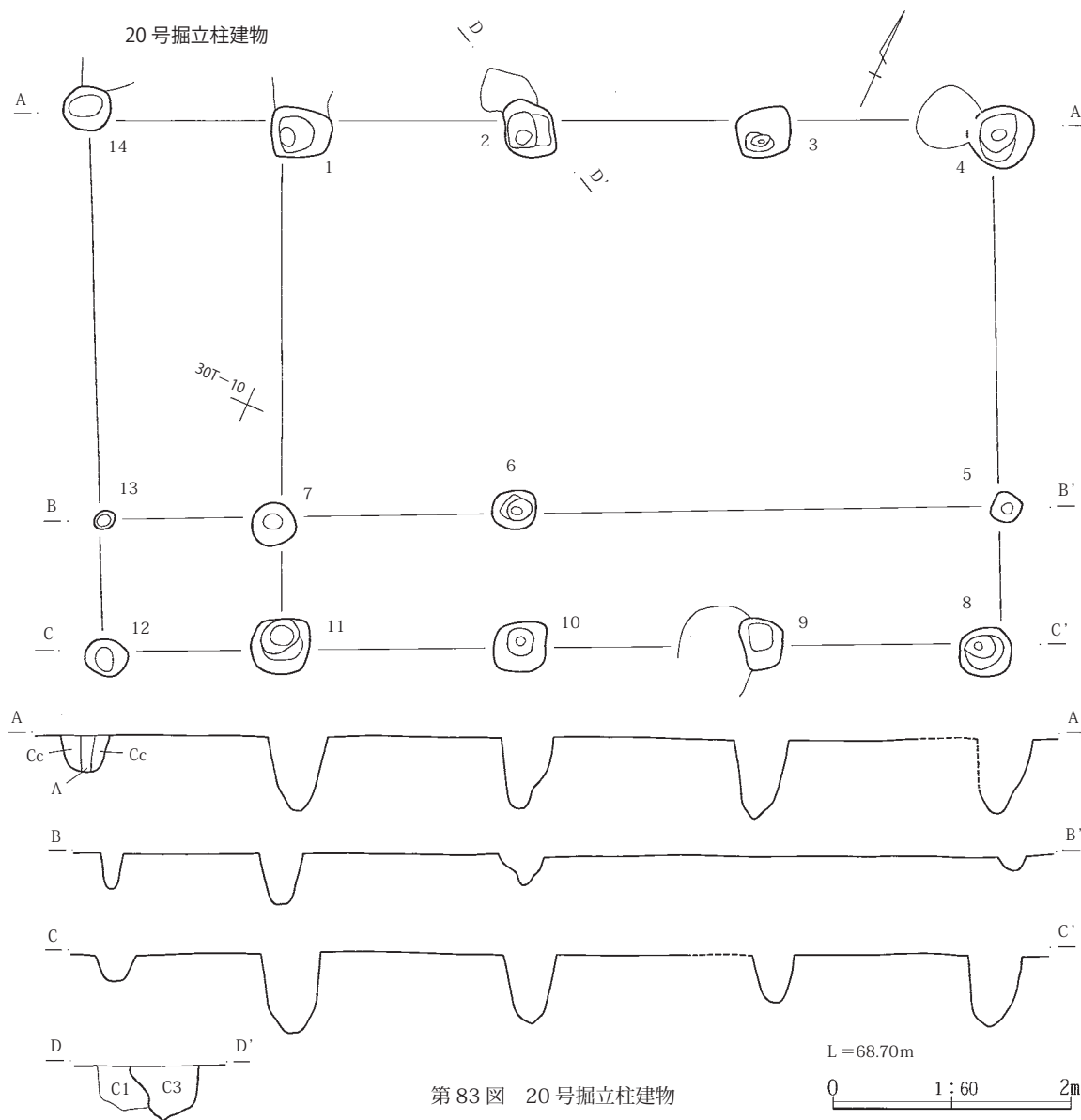
19号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	(31) × (35) × 61.0	中層に隣。底部は西側に偏る。
2	35 × 24 × 35.5	底部は東側にやや偏る。
3	52 × 36 × 69.0	北側に別ピットあり。
4	57 × 50 × 56.5	34号土坑に先出。
5	38 × 35 × 64.5	
6	46 × 31 × 49.0	24建南側柱筋上。
7	57 × 53 × 66.5	

柱穴 径・深さとも比較的揃っている。断面観察のあるP6に柱痕が認められるほか、P2・3・5などの底面に柱痕状の窪みが認められる。P4上面は38号土坑埋没土で、1は混入物の少ない灰褐色土層、2はB軽石の混じる暗灰褐色粘性土層である。

所見 1類。

II 発掘調査の記録



第83図 20号掘立柱建物

20号掘立柱建物 (第83図 PL-17)

概要 北西側建物群の南隅にある。

位置 30 T-8~10 グリッド。

重複 18・19・21・23号の4棟の建物、34・38号土坑、3・9・12号墓坑と重複する。

形状規模 1間×3間の東西棟で南に下屋、西に庇の付く建物である。西側梁間3.24m、南側桁行5.96m、下屋の張り出し1.25m、南側庇の張り出し1.5m、身屋面積19.2㎡、総面積36.33㎡を測る。

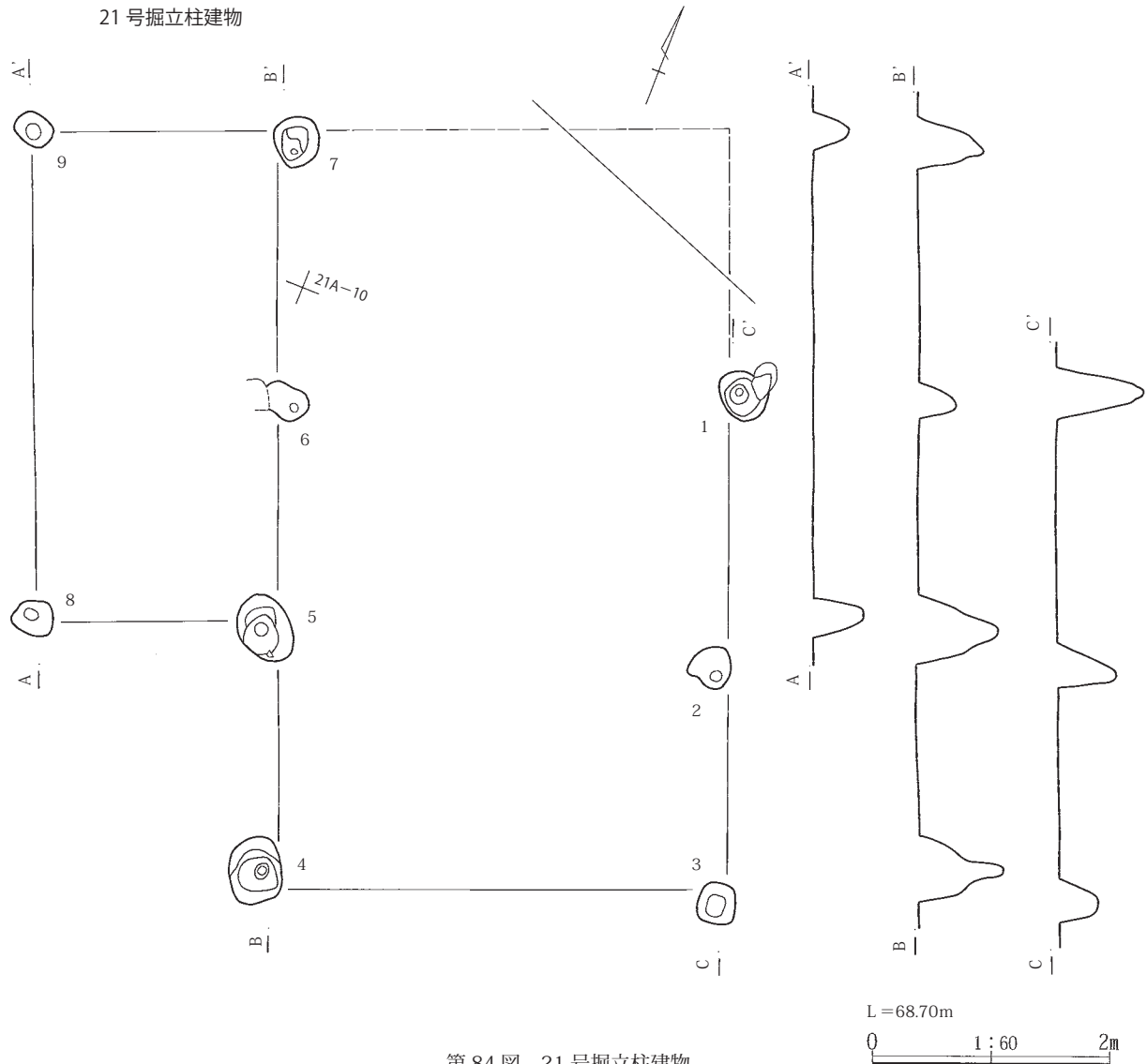
軸方向 N-66~68° E

柱穴 底部分の柱穴は径・深さとも貧弱で、下屋部分には北側柱筋とともに規模が大きい。土層観察のあるP1で細い柱痕が確認できる。

20号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	51×41×64.0	北側に別ビットあり。
2	(43)×41×60.5	22建-10に後出。
3	45×42×69.5	38号土坑と重複。
4	52×(43)×63.5	P 691と重複。
5	24×24×10.0	
6	37×34×25.5	底面に柱痕状の窪み。 土師器・須恵器片4片混入。
7	37×37×44.0	
8	43×39×58.0	
9	47×34×39.0	12号墓坑と重複。
10	44×41×59.0	底面に柱痕状の窪み。
11	49×46×72.0	
12	35×30×22.0	12号墓坑と重複。
13	16×16×30.5	
14	41×36×31.0	P 544とわずかに重複。 断面に柱痕。須恵器片1片混入。

所見 1類。22号建物柱穴との直接重複で本建物が後出することが確認できた。併せて12号墓坑に先出しており、建物→墓域への土地利用変遷を想定する根拠となる遺構の一つである。



第84図 21号掘立柱建物

21号掘立柱建物 (第84図 PL-17)

概要 北隅が調査区域外で、コーナー柱穴1本を把握できていない。

位置 30 T-9・10～21 A-9・10グリッド。

重複 18～20・22・23号の5棟の建物と重複し、38号土坑、9号墓坑が区画内に含まれる。

形状規模 1間×3間の南北棟側柱で西側に変則的な下屋が付く建物を想定した。南側梁間3.85m、西側桁行6.20m、下屋の南側張り出し1.95m、身屋面積23.87㎡、下屋部分面積9.02㎡を測る。

軸方向 N-18°W

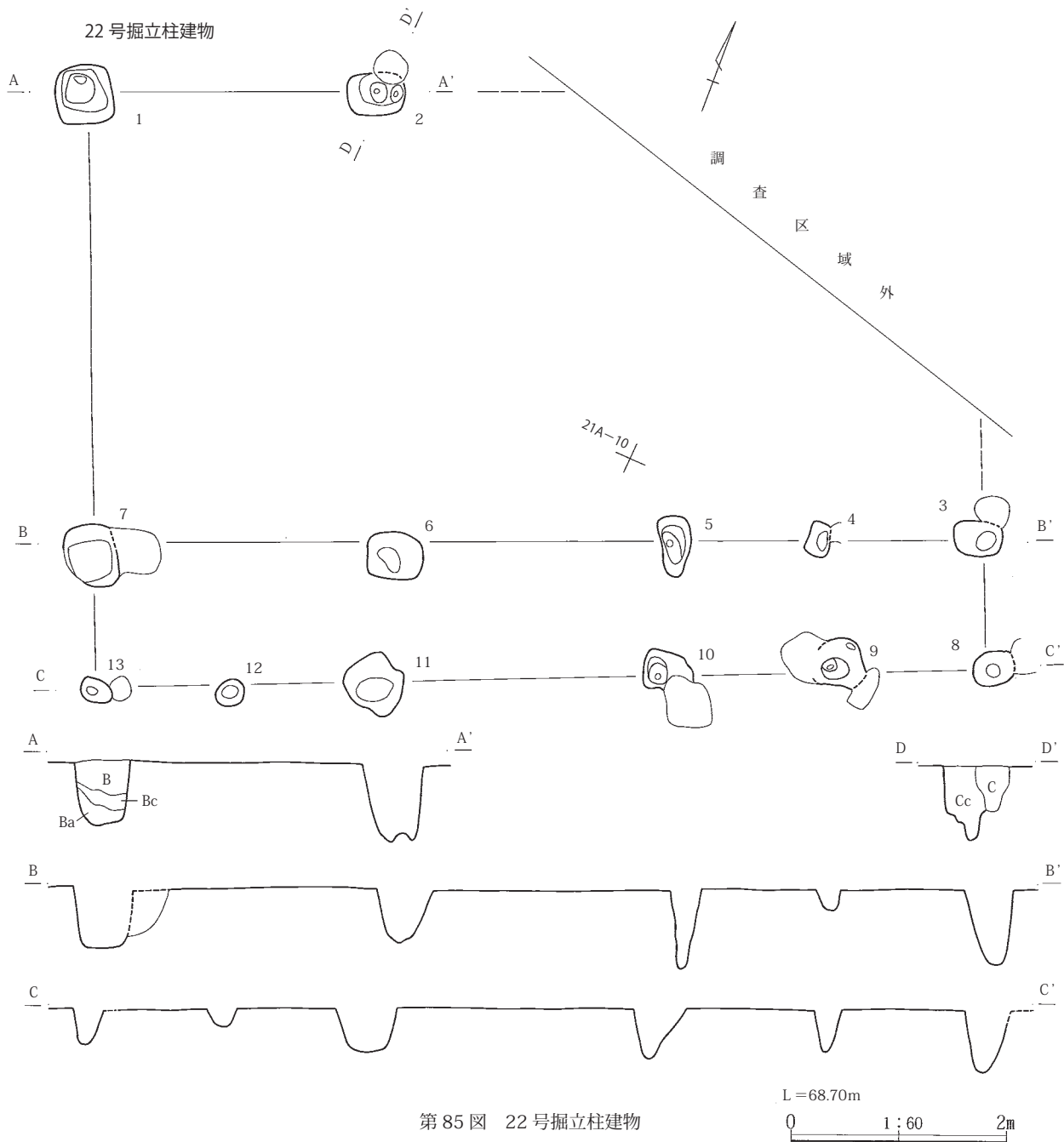
21号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	55 × 45 × 75.0	北西側に別ビット。
2	37 × 35 × 54.5	P 675 と重複。
3	35 × 31 × 31.5	
4	55 × 45 × 72.5	19 建南側柱筋上。
5	60 × 41 × 66.5	P 555 と重複。土師器費1片混入。
6	(45) × 28 × 31.0	P 704 に先出。
7	43 × 37 × 56.5	底面に柱痕状の窪み。
8	34 × 31 × 43.5	
9	33 × 27 × 28.5	

柱穴 9本の柱穴は径・深さとも比較的揃っている。先の尖る断面形状も類似している。

所見 2類。確認できた範囲では北館内で唯一鍵の手状配置のある建物である。

II 発掘調査の記録



第85図 22号掘立柱建物

22号掘立柱建物 (第85図 PL-15・17)

概要 北西側建物群の北隅にある。北隅は調査区域外であり、全容を把握できていない。

位置 30 T-9・10～21 A-9・10グリッド。

重複 18・19・21・23号の4棟の建物と重複する。

形状規模 1間×3間で南側に下屋の付く東西棟建物と推定できる。西側梁間4.40m、南側桁行8.30m、西側下屋張り出し1.30m、身屋面積残存範囲で30.44㎡、復元面積36.5㎡、下屋部分面積10.79㎡を測る。

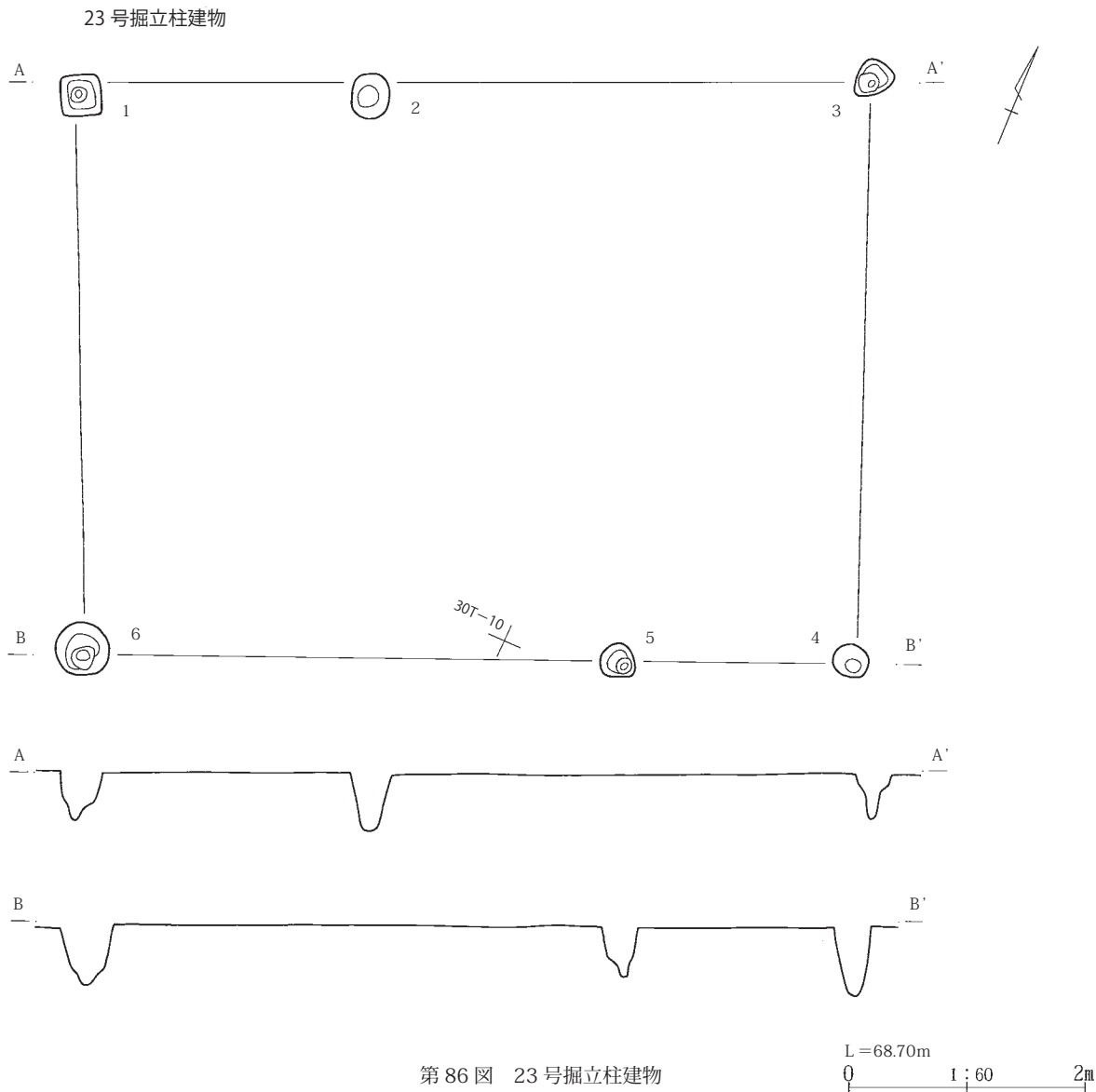
軸方向 N-67°E

柱穴 径・深さ・断面形状とも一様ではない。

22号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	53×53×68.0	底部は北側に偏る。
2	53×38×71.5	P 643に先出。
3	45×35×69.0	P 828と重複。
4	33×(19)×18.0	
5	54×29×74.0	
6	51×44×54.0	21建下屋筋上。
7	58×(47)×54.5	P 531・533と重複。
8	(37)×32×56.0	P 668と重複。
9	45×(35)×37.5	P 824・826と重複。
10	(41)×33×44.5	20建-3に先出。
11	57×51×41.0	21建下屋筋上。
12	26×25×15.0	
13	32×21×31.0	P 542と重複。

所見 1類。20号建物に先出することが確認できている。同建物とは間取りは異なるが、近似した規模である。



23号掘立柱建物 (第86図 PL-17)

概要 北西側建物群の西隅にある。北辺・南辺でそれぞれ1本ずつ想定される柱穴が見つかっていない。

位置 30 T-9・10 グリッド。

重複 18～22号の5棟の建物、3・9号墓坑と重複する。

形状規模 1間×3間の東西棟側柱建物である。ピットは円形を呈するものが多いが、P 1のみ整った方形を呈している。西側梁間4.30 m、南側桁行6.60 m、面積33.17㎡を測る。

軸方向 N-66～67° E

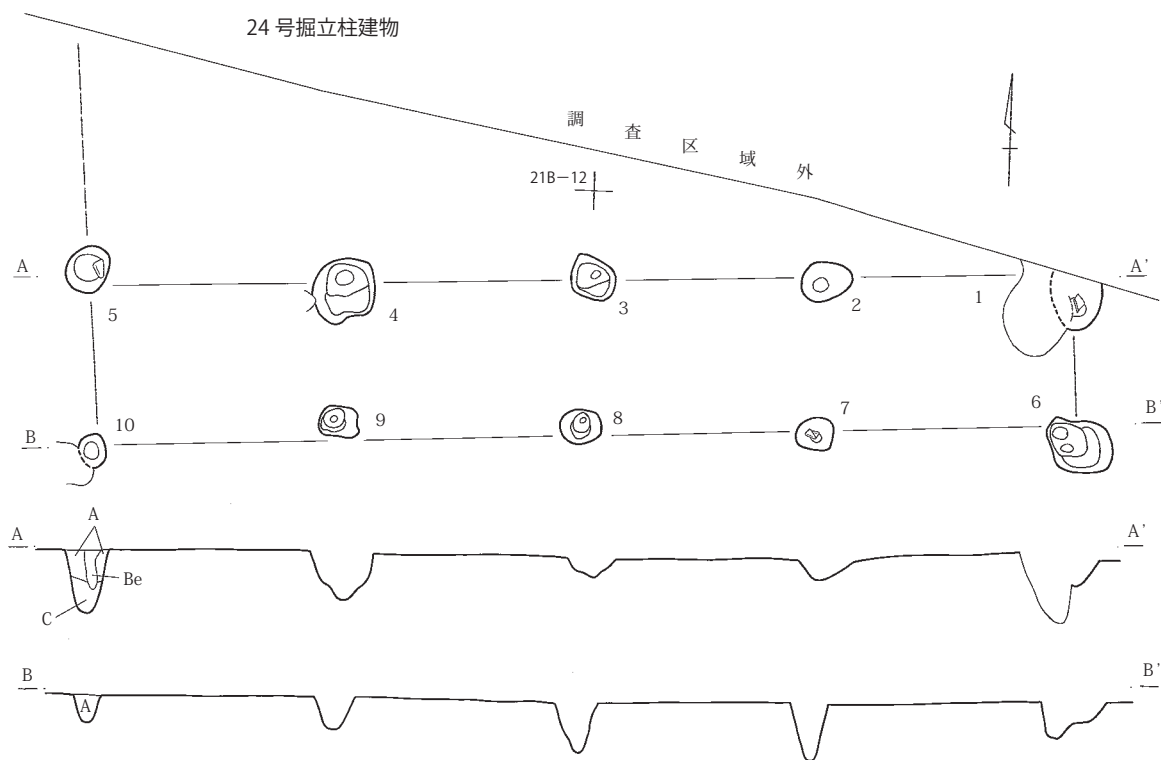
23号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	35 × 34 × 41.0	平面方形。底面に柱痕状の窪み。
2	37 × 31 × 46.0	
3	33 × 31 × 36.5	底面に柱痕状の深い窪み。
4	31 × 28 × 57.0	P 592と重複。土師器甕1片混入。
5	31 × 30 × 42.0	底面に柱痕状の窪み。
6	46 × 45 × 50.5	底面に柱痕状の窪み。

柱穴 P 1は整った方形プランを持つ。調査した6本の柱穴は、いずれも径に比して深さがある。また、P 1・3・5・6の底面に柱痕状の窪みが観察できる。

所見 1類。

II 発掘調査の記録

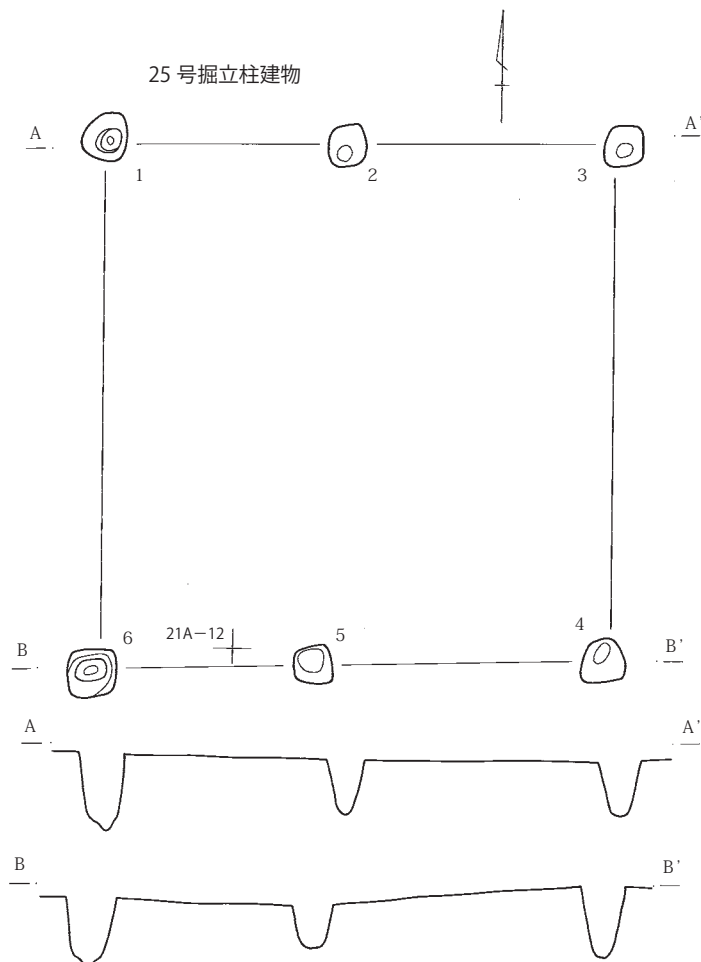


24号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	(40) × (25) × 26.5	P 629 に後出。
2	40 × 31 × 14.0	
3	36 × 32 × 14.0	
4	50 × 48 × 34.0	P 607 と重複。
5	39 × 32 × 49.5	断面に柱痕。土師器甕3片混入。
6	57 × 42 × 26.5	
7	28 × 26 × 45.5	中層に礫。
8	33 × 27 × 39.0	37号土坑と重複。
9	33 × 24 × 25.5	
10	26 × (20) × 22.0	P 604 に後出。

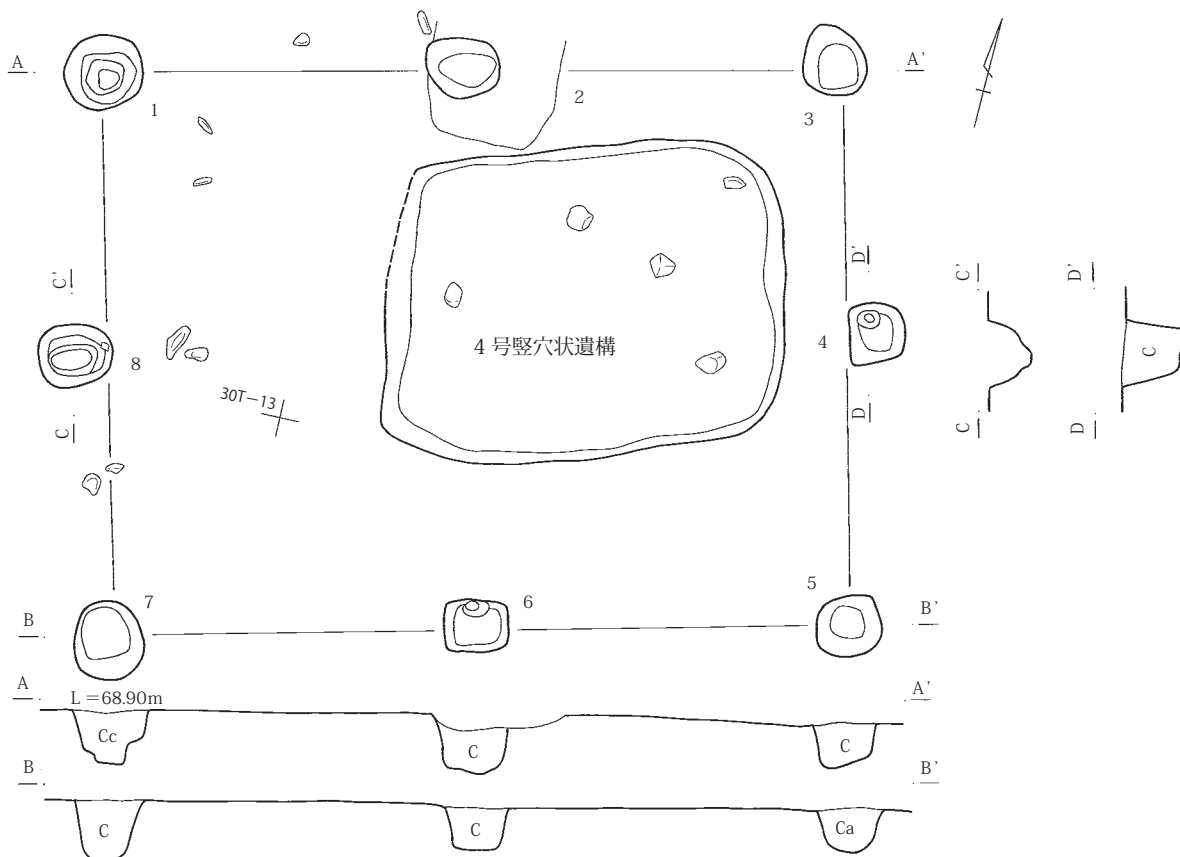
25号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	37 × 34 × 61.5	底面に柱痕状の窪み。
2	33 × 30 × 42.5	
3	32 × 32 × 44.0	
4	35 × 35 × 54.5	
5	31 × 31 × 38.5	
6	39 × 36 × 52.5	底面に柱痕状の窪み。 土師器甕等5片混入。



L = 68.80m
0 1 : 60 2m

第87図 24号・25号掘立柱建物

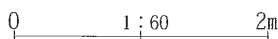
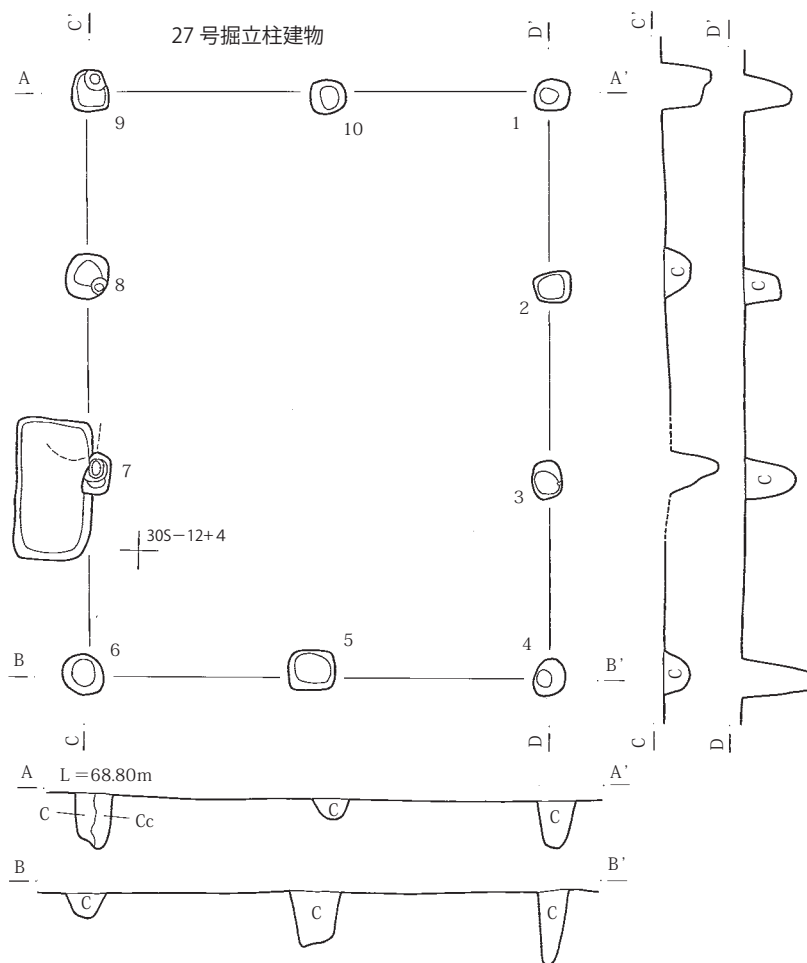


26号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	63×58×47.0	土師器甕片混入。
2	61×46×47.0	6号墓坑に先出。
3	58×51×37.0	
4	49×44×51.0	底面北側に柱痕状の窪み。
5	54×48×34.5	
6	47×42×41.5	底面北側に柱痕状の窪み。 土師器甕1片混入。
7	68×55×45.0	土師器甕1片混入。
8	58×49×34.0	土師器刷毛目甕等3片混入。

27号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	28×24×36.5	
2	29×24×27.5	
3	29×23×38.5	
4	28×24×55.5	
5	37×31×45.0	
6	32×31×19.0	土師器甕1片混入。
7	33×(22)×36.0	31号土坑に後出。
8	35×34×31.0	底面南東隅柱痕。 須恵器杯1片混入。
9	31×28×43.0	断面・底面に柱痕。
10	27×27×14.0	土師器・須恵器甕類2片。



第88図 26号・27号掘立柱建物

24号掘立柱建物 (第87図 PL-17)

概要 北西側建物群から若干離れた調査区北西隅にある。北側が調査範囲外で北側の柱穴は全く確認できない。

位置 21 A・B-11・12 グリッド。

重複 25号建物・2号柱列・37号土坑と重複する。

形状規模 確認できたのは大半が下屋部分にあたる。桁方向4間分が確認でき、東西両隅を把握できたようだ。下屋部分の柱穴は捻じれた配列になっている。西側梁間残存部分1.90m、南側桁行7.80m、下屋西側張り出し1.43m、身屋残存面積7.41㎡、下屋面積11.15㎡を測る。

軸方向 N-90°

柱穴 径・深さとも不揃いになっている。断面観察のあるP1に柱痕が確認でき、P2・P6などの底面には柱痕状のわずかな窪みも見られる。

所見 1類。

25号掘立柱建物 (第87図 PL-17)

概要 調査区の北西隅付近の遺構の少ない一画にある。

位置 21 A・B-11・12 グリッド。

重複 24号建物、2号柱列、37号土坑と重複する。

形状規模 1間×2間の正方形建物である。西辺4.20m、南辺4.05m、面積16.61㎡を測る。

軸方向 N-89~90°E

柱穴 6本の柱穴はいずれも隅丸方形に近いプランを呈している。径・深さとも比較的揃っている。

所見 1類。個々の柱穴の規模は異なるが、15号建物と形状・規模が類似している。やや短い南辺・北辺が2間となる点も同一である。

26号掘立柱建物 (第88図 PL-15・17)

概要 北館の西隅にあり、建物北西隅の柱穴は館西堀から上端で60cmの距離である。柱穴の少ない地点に規模の近い柱穴が並び、把握し易かった。

位置 30 S・T-12・13 グリッド。

重複 27号建物と南隅が重複するほか、6号墓坑、4号竪穴状遺構、32・33号土坑と重複する。

形状規模 2間×2間の側柱建物である。東西辺中央の柱穴が2本ともやや外側に張り出し、北館東隅の1号建物と類似している。西辺4.54m、南辺5.90m、面積25.81㎡を測る。

軸方向 N-78°E

柱穴 径は50cmを超えるものが多い。P3・P6は平面方形で、底面形状も方形である。いずれも北隅に柱痕状の窪みがある。他の柱穴も深さは近似し揃っており、底面が平坦な柱穴が多い。

所見 3類。4号竪穴状遺構が建物区画内北東側に含まれている。本建物に伴う施設となる可能性があろう。6号墓坑に先出し、建物→墓域と土地利用変遷を辿る根拠を示す遺構である。

27号掘立柱建物 (第88図 PL-15・17・36)

概要 北館内の南西隅にある。26号建物同様に柱穴の少ない一画にあり、把握しやすかった。

位置 30 R・S-12 グリッド。

重複 26号建物と北隅でわずかに重複する。31号土坑に先出すると思われる。

形状規模 2間×3間の南北棟側柱建物である。南側梁間3.65m、東側桁行4.65m、面積16.97㎡を測る。

軸方向 N-1°W

柱穴 径は比較的揃っているが、深さには差が大きい。P5・P9など平面方形を呈す柱穴が混じる。P4の埋没土には柱痕が観察される。

所見 4類。P1埋没土内より灰釉陶器片(第108図)を出土している。

南館内の建物 東西に走向し、館内を二分した現道のため調査できなかった部分があるが、道路北側の1a区13棟、南側の1b区は16棟、他に2か所の柱列を確認した。1a区では調査区のほぼ中央を南北に走向する3条の溝(17~19号溝)を境に建物群は東西に二分できる。狭い1b区は土坑や井戸が少ない反面、ピットが多く、番号を付けて調査したものが1a区とほぼ同数の330基におよび、館内の中心部分を実感させられる地点であった。このため調査中に建物を把握できたものはなく、整理段階で復元したものである。北館とは建物の傾向が異なり、大型建物・変則的な建物が多いことが特徴である。このため建物間の重複のきわめて多い一画となった。4類の建物が多く、軸方向が揃っていて、柱筋を共有していたり、ごく近くを並走する建物が目立った。

28号掘立柱建物 (第89図 PL-17・18)

概要 1a区西隅にある変則大型建物である。南側は調査区域外にかかり、全容は把握できていない。

位置 30J・K・L-10・11・12グリッド。

重複 29・30号建物と重複する。とくに29号建物とは柱筋を共有している個所がある。他に25・26・28号溝、21・22号土坑と重複する。

形状規模 梁行2間以上×桁行5間の東西棟で、北側下屋の先にさらに北東側に張り出しのある建物を想定した。東側梁間4.30m、北側桁行20.61m、東側下屋張り出し1.75m、北東側張り出し施設東辺4.10m、北辺4.25m、身屋部分面積46.66㎡、下屋面積20.62㎡、張り出し施設面積17.42㎡を測る。

軸方向 N-85~87°E

柱穴 深さ50cmを超える柱穴が多いことが特徴である。張り出し施設の柱穴は小規模で浅くなる傾向がある。断面観察のあるP1に柱痕が確認できる。底面に柱痕状の窪みを観察できるピットも多い。

所見 3類。P4が29号建物P8に後出することが確認できる。総面積は本遺跡中最大となる。

29号掘立柱建物 (第90図 PL-18)

概要 28号建物と共に1a区西隅にある。P2からP9までの南北柱筋が28号建物の柱筋と重なっている。

位置 30J・K-10・11グリッド。

重複 28号建物に先出する。他に25・26・28号溝、21・22号土坑と重複する。

形状規模 1間×3間の南北棟に、東側に張り出し施設2か所の付く変則建物を想定した。北側梁間4.53m、東側桁行6.75m、北東施設張り出し2.00m、南東施設張り出し南側で3.70m、身屋面積29.90㎡、北東施設面積5.46㎡、南東施設面積15.20㎡を測る。

軸方向 N-3°W

柱穴 径・深さが比較的揃っている。P2・3は方形プランを持ち、P4・9なども当初は方形を呈したと思われる。底面に柱痕状の窪みが残るものが多い。

所見 4類。P1中層から硯片(第108図)を出土している。

30号掘立柱建物 (第91図 PL-15・18)

概要 1a区西側建物の中では北隅にある。北側柱筋は28・31号建物の北辺北側50cmの位置に平行している。

位置 30L-9・10グリッド。

重複 28・31・32号建物の他、10号土坑と重複する。

形状規模 1間×2間の東西棟である。西側梁間3.50m、南側桁行5.30m、面積18.55㎡を測る。

軸方向 N-87~88°E

柱穴 径に差はあるが、6本とも深く揃った柱穴であった。底部に柱痕状の深い窪みが見られるものが多い。

所見 4類。

31号掘立柱建物 (第92図 PL-18)

概要 西側柱筋が28号建物の東辺の東側30cmの位置に平行し、北側柱筋は同建物北辺延長線上にある。

位置 30K・L-9・10グリッド。

重複 30・32号建物、10号土坑と重複する。

形状規模 南辺は柱間3間だが、他辺では1本ずつ少ない。P7のように浅い柱穴もあり、不明な個所はさらに浅いため残存しない可能性があり、3間×3間の正方形建物を想定した。西辺5.50m、南辺5.70m、面積31.63㎡を測る。

軸方向 N-88°E

柱穴 径は小規模で揃っているが、深さには差が大きい。

P3・7の方形プランに加え、P4・9など歪んだ方形プランを呈す柱穴が目立つ。

所見 4類。

32号掘立柱建物 (第93図 PL-18)

概要 西側建物群の北東隅にある。東側1mに19号溝が位置している。

位置 30J・K-8・9グリッド。

重複 30・31・33号建物、11号土坑と重複する。

形状規模 1間×3間の南北棟で東西に下屋が付く。身屋部分北東隅の柱穴が土坑と重複して確認できていない。柱穴が想定される部分では土坑は28cmの深さがある。身屋部分南梁間3.53m、西桁行7.43m、西側下屋張り出し0.47m、東側下屋張り出し0.98m、身屋面積35.66㎡、西側下屋面積3.72㎡、東側下屋面積7.28㎡を測る。

軸方向 N-1°W

柱穴 平面円形の柱穴が多く、身屋部分のほうが大きめで、下屋部分がやや浅い。

所見 4類。

33号掘立柱建物 (第94図 PL-18)

概要 南側が調査区域外で、身屋の大半が確認できていない。東辺が18・19号溝の間に並んでいる。

位置 30 K・L-8・9グリッド。

重複 32号建物・3号井戸と重複し、東側は35号建物と接している。19号溝を跨いでいる。

形状規模 桁行4間の東西棟と思われる。北東側に鍵の手状の下屋がある。P3・4間の柱穴が確認できていないが、重複遺構等の障害はない地点である。身屋部分は梁間東側で1.25m以上、桁行7.53m、下屋東側張り出し1.80m、身屋面積10.17㎡、下屋面積11.08㎡を測る。

軸方向 N-88°E

柱穴 径・深さとも不揃いである。下屋の柱穴のほうが身屋部分より深い傾向がある。

所見 4類。

34号掘立柱建物 (第91図 PL-15)

概要 南館北隅に孤立して建つ。北側柱筋は館堀の始まる斜面上にあり、東側は15・16号溝などの東西走向溝群のため不明である。

位置 30 L・M-6・7グリッド。

重複 17号溝・26号土坑と重複する。

形状規模 梁行2間×桁行2間以上の東西建物を想定した。西梁間4.40m、P3・4を東隅とした場合の南桁行4.35m、面積18.92㎡を測る。

軸方向 N-88°E

柱穴 南側の柱穴が揃って深くなっている。この深さの窪みは南辺の東側延長部分には認められない。

所見 4類。北館内では建物間の重複のない唯一の建物である。26号土坑が本遺構に伴う可能性もある。

35号掘立柱建物 (第94図 PL-18)

概要 1a区西側建物群の南東隅にある。

位置 30 J・K-7・8グリッド。

重複 西隅は33号建物東辺と接している。17・18号溝を跨いでいる。南西コーナー柱穴が想定される位置に深さ1.4mの3号井戸がある。

形状 北・東辺の中間柱穴が確認できないが、2間×2間の正方形建物を想定した。

軸方向 N-0°

柱穴 いずれも小規模で不明瞭な柱穴であった。

所見 4類。

36号掘立柱建物 (第95図 PL-18)

概要 東側建物群の西隅にある。

位置 30 J・K-5・6グリッド。

重複 37・38号建物、3号土坑と重複する。

形状規模 1間×2間の東西棟側柱建物である。西梁間4.15m、南桁行4.40m、面積21.12㎡を測る。

軸方向 N-83~86°E

柱穴 規模の近似した柱穴が揃っている。底面に柱痕状の浅い窪みのあるものが多い。東側ほど深くなる傾向がある。

所見 3類。37号建物と共に軸方向が他の建物と異なっているが、北側にある7号土坑など、建物以外に軸方向が近似する遺構が点在する。

37号掘立柱建物 (第95図 PL-19)

概要 南側は調査区域外に接しており、南側へ規模が大きくなるか、付属施設を有す可能性がある。3方向に下屋が付くのは本遺跡では唯一例である。

位置 30 J・K-5・6グリッド。

重複 36・38号建物と重複する。3号土坑は身屋部分にあり本建物に伴う施設の可能性もある。

形状規模 南側に拡大する可能性があるが、調査できた範囲では1間×2間の南北棟で南を除いた三方に下屋が付く。身屋部分では南梁間3.60m、西桁行3.7m、北および東下屋張り出し0.50m、西下屋張り出し0.95m、身屋面積14.64㎡、東下屋面積2.22㎡、北下屋面積2.54㎡、西下屋面積3.33㎡を測る。

軸方向 N-7~9°W

柱穴 身屋部分の柱穴が径は大きく、P4を除いて深さもある。断面に柱痕の残る柱穴も多い。

所見 3類。下屋の数と共に、60cm前後の狭い下屋の張り出しも本遺跡では唯一例である。

38号掘立柱建物 (第96図 PL-19・36)

概要 37号建物同様に南側は調査範囲境界に接しているが、全容を把握できたと考える。

位置 30 J・K-4~6グリッド。

重複 36・37号建物、1・3号土坑と重複する。

形状規模 2間×5間の東西棟総柱建物も考えられるが、南側を除く柱列に確認できない柱穴が多い。東西に下屋のある2間×3間の総柱建物を想定した。西梁間3.70m、南桁行5.35m、西下屋張り出し北側で1.7m、東下屋張り出し2.0m、身屋面積19.24㎡、総面積32.56㎡を測る。

軸方向 N-89~90°E

柱穴 径・深さの差が著しい。断面観察のあるP6・10に柱痕が確認できる。

所見 4類。2間×5間の総柱建物には2区114号建物の例がある。下屋の付く総柱建物であれば、本遺跡では唯一例である。P1埋没土からカワラケを出土している(第108図)。

39号掘立柱建物(第97図 PL-19)

概要 1a区南東隅にある。北側に下屋を持つ建物を想定した。南東側2本の柱穴が下屋部分より不明瞭である。

位置 30J・K-3・4グリッド。

重複 40号建物と大きく重複する。南側柱列は16号溝上にあり、15号溝を跨いでいる。38号建物の柱筋に柱穴が重なる。他に5号竪穴状遺構・2号土坑と重複する。

形状規模 不明瞭な柱穴が多く、全体を捉えにくい。北側に下屋のある1間×3間の建物を想定した。南梁間4.30m、西桁4.40m、下屋張り出し2.25m、身屋面積19.35㎡、総面積29.48㎡を測る。

軸方向 N-7~9°E

柱穴 径・深さとも揃っていない。P3・4が著しく小規模になっている。

所見 5類。

40号掘立柱建物(第98図 PL-19)

概要 1a区の東隅、14号溝の西10cm未満の位置に接するように建ち、建物はさらに東側へ続く可能性がある。

位置 30K-3・4グリッド。

重複 39号建物・5号竪穴状遺構と重複する。

形状規模 2間×2間の正方形建物を想定した。北東隅は深さ16cmの5号竪穴状遺構との重複部分にある。南側桁行4.52m、西側梁間4.45mを測り、想定面積は20.34㎡である。

軸方向 N-1°W

柱穴 径・深さに差が大きく、東側柱穴が著しく小規模である。P3・4の断面に柱痕が確認できる。

所見 4類。

41号掘立柱建物(第99図 PL-19)

概要 1b区の密集する建物群の中で最も東側にある。本建物の東側調査区境まで3mの範囲では建物は確認できていない。縦横比1:2を超える細長い遺構である。

位置 30G・H-4・5グリッド。

重複 42~50号建物・3号柱列と重複する。42号建物には先出している。

形状規模 1間×3間の東西棟側柱建物である。西梁間2.98mで東より30cmほど広い。南桁行6.20m、面積19.29㎡を測る。

軸方向 N-88°W

柱穴 径・深さとも比較的揃っている。P5断面には柱痕が確認でき、底面に柱痕状の窪みがある柱穴も多い。

所見 4類。

42号掘立柱建物(第99図 PL-19)

概要 1b区の東隅にある。南側は調査区境に接しており、南へさらに広がる可能性がある。

位置 30G・H-4・5グリッド。

重複 41・43~48号の7棟の建物および3号柱列と重複する。41号建物には後出している。また、建物区画内に4号土坑がある。

形状規模 1間×3間の南北棟である。柱穴配置がやや乱れ、P6の北側への偏りが大きい。中間柱穴は総じてやや内側に入る。北梁間3.90m、西桁行は5.35mで東より20cmほど短い。面積20.46㎡を測る。

軸方向 N-5°W

柱穴 径は小規模で、深さは揃っていない。

所見 3類。

43号掘立柱建物(第100図 PL-19)

概要 1b区の東寄りにある。縦横比1:4を超す本遺跡で最も細長い建物の1棟である。

位置 30G・H-4・5グリッド。

重複 41・42・44~52号の11棟の建物と重複する。

形状規模 1間×4間の東西棟で、狭い梁間は本遺跡内

で最も短い桁方向は長く、変則的建物である。西梁間 1.75 m で東より 20cm 短く。南桁行 7.60 m で北より 25cm 短くなっている。面積 15.70m²を測る。

軸方向 N-89~90°E

柱穴 径・深さとも一様ではない。P4のように掘り直ししか重複が不明瞭なものが多い。断面観察のある柱穴が多いが、柱痕は確認されていない。

所見 4類。西側に隣接する細長い53号建物と方向・規模など類似点が多い。

44号掘立柱建物 (第100図 PL-19)

概要 1b区東側建物群の東寄りにある。

位置 30G・H-4・5グリッド。

重複 41~43・45~50号の9棟の建物と重複する。

形状規模 1間×2間の東西棟で、計測値は正方形に近い。西梁間 4.65 m、南桁行 4.30 m、面積 20.50m²を測る。

軸方向 N-88~89°E

柱穴 径は小さなものも多く、深さは一様でない。

所見 4類。長辺側が1間、短辺側が2間となり、北館 15・25号建物と共通する。

45号掘立柱建物 (第101図 PL-19)

概要 1b区中央にある建物で、南西隅部分が調査区域外であるが、ほぼ全容は想定できたと思われる。

位置 30G・H-4~6グリッド。

重複 1b区のすべての建物と重複している。1号井戸が南側柱筋上にある。

形状規模 東西にきわめて長い2間×6間の東西棟である。P11の西側には1号井戸があり、想定される位置の柱穴は確認できなかった。縦横比は1:3.4で43・53号建物に次ぐ細長い建物となる。東梁間 4.30 m、北桁行 12.5 m、復元面積は 53.75m²になる。

軸方向 N-86°E

柱穴 大型建物としては、径は小さめのものも多く、深さも 50cm を超えるのは 1 基のみである。長円形に歪んだプランを呈す柱穴が多いことも目立つ。

所見 3類。身屋部分の面積は本遺跡中最大である。また、梁間 2 間以上の建物では最も細長い遺構になる。

46号掘立柱建物 (第102図 PL-19)

概要 1b区の東側南寄りにあり、南側が調査区域外になる。建物範囲も南側へ広がる可能性がある。

位置 30G・H-4・5グリッド。

重複 41~45・47・49・50号建物と重複する。

形状規模 1間×2間以上の南北棟である。確認できた範囲では北梁間 2.35 m、東桁行 3.50 m を測り、1間×2間の規模で面積 11.73m²となる。

軸方向 N-2°E

柱穴 径は比較的揃っている。P4はピットの重複の激しい地点にあり、図示した断面は2基以上のピットからなっている。

所見 3類。

47号掘立柱建物 (第102図 PL-19)

概要 1b区の中央にある。南側は調査区境付近にあるが、全容を把握できたものと思われる。

位置 30G・H-4~6グリッド。

重複 41~46・48~53号の12棟の建物と重複する。47・50号建物や3号柱列と柱穴間の重複があるが、新旧関係は確認できなかった。

形状規模 1間×3間の東西棟である。西梁間 4.30 m、南桁行 6.60 m、面積 29.53m²を測る。

軸方向 N-85~89°W

柱穴 総じて径が小さく、深さは一様でない。比較的大きなP7も別ピットの重複部分が大半と思われる。

所見 4類。

48号掘立柱建物 (第103図 PL-19)

概要 1b区中央にある。南北両側とも調査区境に接しており、どちらにも広がる可能性がある。

位置 30G・H-4・5グリッド。

重複 41~45・47・49~52号建物と重複する。

形状規模 2間×3間の南北棟総柱建物を想定した。調査範囲では北梁間 4.05 m、東桁行 6.53 m を測り、復元面積 26.45m²となる。

軸方向 N-0°

柱穴 径は比較的小さいものが大半である。底面中央付近に柱痕状の浅い窪みが見られる柱穴が多い。

所見 4類。

49号掘立柱建物 (第104図 PL-20)

概要 1b区の中央にある。

位置 30G・H-5・6グリッド。

重複 41・44～48・50～53号の10棟の建物と重複する。

形状規模 2間×3間の東西棟側柱建物であるが、南側の柱穴を1本欠いている。西梁間4.65m、南桁行6.50m、面積28.54㎡を測る。

軸方向 N-89～90°E

柱穴 径が不揃いで、北西側の柱穴が特に小規模である。底面に柱痕状の浅い窪みのあるものが多い。

所見 4類。

50号掘立柱建物 (第107図 PL-20)

概要 南西隅が調査区域外で完掘できていないが、南西コーナー柱穴1本を除いた全容は把握できたと思われる。49号建物を南側へ1m移動したような配置にある。

位置 30G・H-5・6グリッド。

重複 41・43～49・51～54号の12棟の建物と重複する。

形状規模 2間×3間の東西棟である。P9が北側へ大きく偏っている。東梁間4.25m、北桁行6.30mを測り、復元面積は26.78㎡となる。

軸方向 N-89°W

柱穴 径・深さ・形状いずれも不揃いである。

所見 4類。

51号掘立柱建物 (第105図 PL-20)

概要 1b区の西寄りにある。北辺は1b区でもピット重複の激しい一画にあり、不明瞭な部分もある。

位置 30G・H-5～7グリッド。

重複 43・45・47～50・52～56号の11棟の建物と重複し、このうち55号建物に後出する。

形状規模 2間×4間の東西棟である。四辺とも柱間が不均等であり、北辺中央の柱穴にはP3・4の2基が候補となっている。西梁間4.40m、南桁行8.75m、面積38.28㎡を測る。

軸方向 N-83～84°W

柱穴 大型建物としては、各柱穴は小規模で、深さも50cmを超えるものはない。

所見 5類。1b区の建物中、軸方向が最も東側に振れた建物である。

52号掘立柱建物 (第106図 PL-20)

概要 1b区西寄りにあり、東辺と南辺は51号建物の東・南辺と近接している。

位置 30G・H-5～7グリッド。

重複 43・45・47～51・53～56号の11棟の建物と重複する。45・55号建物には後出する。

形状規模 1間×3間の東西棟である。西梁間4.00m、南桁行6.35m、面積26.24㎡を測る。

軸方向 N-83～84°W

柱穴 ピット間の重複のため不明瞭になっているが、径はやや小さめで、深い柱穴が多い。

所見 5類。

53号掘立柱建物 (第106図 PL-20)

概要 1b区北西隅にある。形状の類似する43号建物の北西隅柱穴と本建物の南東隅柱穴では上端で45cmの近接した距離にある。

位置 30H-5～7グリッド。

重複 45・47・49～52・54・55号建物と重複する。

形状規模 1間×4間の東西棟で、縦横比1:4に近い、きわめて細長い形状である。西梁間1.90m、南桁行7.50m、面積13.87㎡を測る。

軸方向 N-88～90°W

柱穴 建物規模に比べ柱穴は大きめである。深さは一様ではなく、中央付近の柱穴が浅い傾向がある。P9断面に柱痕が観察できる。

所見 4類。

54号掘立柱建物 (第104図 PL-20)

概要 1b区の西隅にある。北側が調査区境にかかり、全容は不明である。

位置 30G・H-6・7グリッド。

重複 45・51～53・55号建物と重複する。特に55号建物とは柱穴間の重複が多い。

形状規模 全容を把握できたと想定すれば1間×4間の細長い東西棟となる。53号建物を桁方向1間短くした規模となる。大型建物の南側下屋部分と想定することも可能であろう。現状での規模は西梁間2.20m、南桁行7.20m、面積15.85㎡を測る。縦横比は1:3.3となる。

軸方向 N-90°

柱穴 横長の43・53号建物と比べるとかなり小規模で、深さは不揃いである。

所見 4類。北側へさらに広がる建物と考えたい。

55号掘立柱建物 (第108図 PL-20)

概要 1b区西寄りにある。縦横比おおよそ1:3の細長い建物である。

位置 30G・H-6・7グリッド。

重複 45・49～54・56号建物と重複する。51号建物には先出している。

形状規模 1間×3間の東西棟である。P7が若干東へ偏っているが、比較的整った柱穴配列である。西梁間1.85m、南桁行5.65m、面積11.48㎡を測る。

軸方向 N-87～89°E

柱穴 8本とも径が大きく揃っている。43・53号建物の柱穴と似ている。

所見 4類。梁間1間の建物としては桁行4間の43・53号建物に次いで細長い建物となる。

56号掘立柱建物 (第107図 PL-20)

概要 1b区西隅にある。南側の大半が調査区域外となり、全容は把握できていない。柱穴の規模に差が大きい。

位置 30G・H-6・7グリッド。

重複 6・12・13・15・16の5棟の建物との重複で、1b区では最も建物間の重複が少ない。

形状規模 1間×3間の東西棟や、西側に下屋を伴う南北棟などが推定される。調査できた範囲では北辺5.55m、東辺3.20m、面積14.98㎡、東西棟を想定した場合、西梁間2.20m、面積9.90㎡となる。

軸方向 N-2°E

柱穴 形状不整な柱穴が多く、径・深さは不揃いである。

所見 4類。

1号柱列 (第109図 PL-20)

概要 北館東側建物群の北寄り4本の柱穴からなる。

位置 30S-6・7グリッド。

重複 3・6・10～13号建物と重複する。

規模 桁方向5.35mを測る。北側調査区境まで最も長いP1で2.1mの距離である。

軸方向 N-85°W

所見 建物であれば桁行3間の東西棟の南柱筋部分となり、他の建物と対比すれば梁間1間となろう。

2号柱列 (第109図)

概要 北館の北西隅にあり、桁行4間以上の東西棟建物の南側柱筋部分の可能性はある。

位置 21A-11・12グリッド。

重複 24・25号建物と重複する。

規模 桁行は4間として8.35mを測る。建物の場合、梁間は西側で2.3m以上となる。

軸方向 N-88°E

所見 4類に相当する。

3号柱列 (第109図)

概要 1b区の建物密集地点ほぼ中央の4本の柱穴からなる。建物の桁部分とした場合、南側の調査区境まで最大3mの距離があり、梁間はかなり広めになる。

位置 30G-5・6グリッド。

重複 41・44～52号建物と重複する。

規模 長さは芯芯で5.50mを測る。

軸方向 N-86°W

所見 本遺跡の例から建物を想定するのは難しそうである。建物であれば4類に相当する。

4号柱列 (第108・109図 PL-20)

概要 調査地点の南東隅に直線的に並ぶ規模の大きな4本の柱穴で、東西棟北側梁行4間以上の建物と思われる。47・50号建物の南側柱筋の延長線上にある。

位置 30G-3・4グリッド。

重複 42・49号建物と重複する。

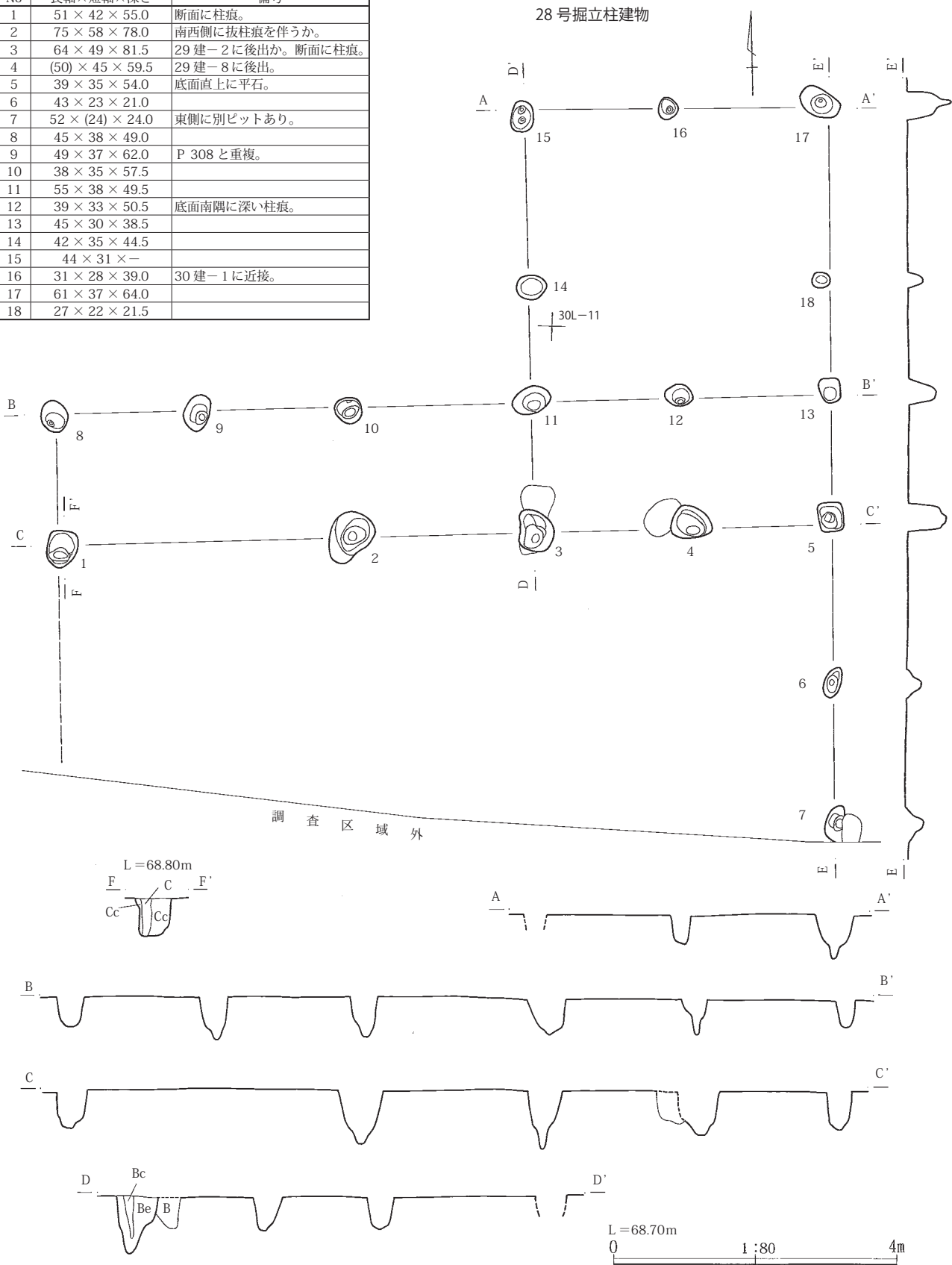
規模 芯芯の長さ6.80mを測る。

軸方向 N-87°E

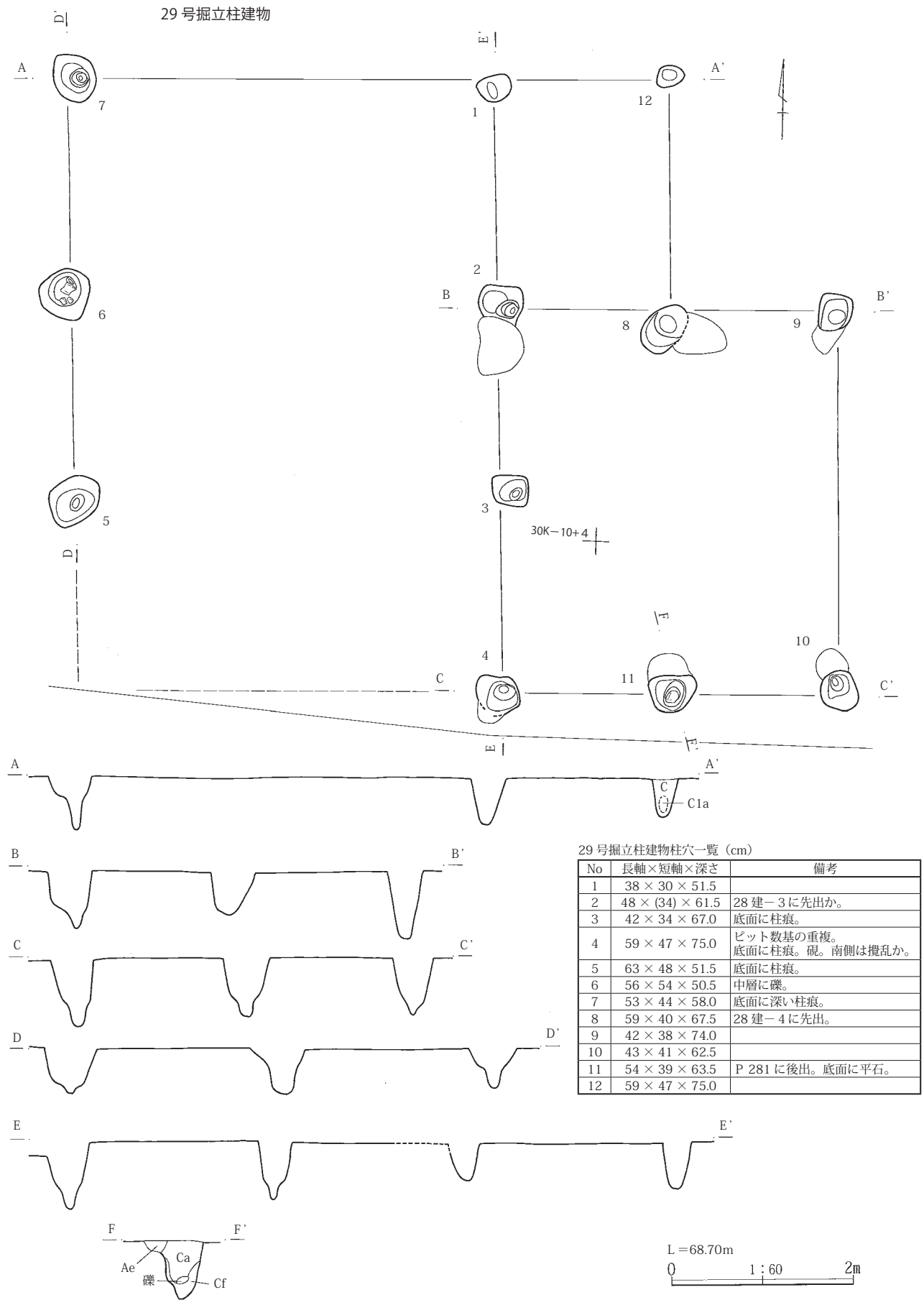
所見 南側調査区境まで最大1.6mの距離で、建物となる余地は十分にある。建物であれば4類に相当する。P4埋没土より宋銭を出土している。

28号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	51 × 42 × 55.0	断面に柱痕。
2	75 × 58 × 78.0	南西側に抜柱痕を伴うか。
3	64 × 49 × 81.5	29 建-2 に後出か。断面に柱痕。
4	(50) × 45 × 59.5	29 建-8 に後出。
5	39 × 35 × 54.0	底面直上に平石。
6	43 × 23 × 21.0	
7	52 × (24) × 24.0	東側に別ピットあり。
8	45 × 38 × 49.0	
9	49 × 37 × 62.0	P 308 と重複。
10	38 × 35 × 57.5	
11	55 × 38 × 49.5	
12	39 × 33 × 50.5	底面南隅に深い柱痕。
13	45 × 30 × 38.5	
14	42 × 35 × 44.5	
15	44 × 31 × -	
16	31 × 28 × 39.0	30 建-1 に近接。
17	61 × 37 × 64.0	
18	27 × 22 × 21.5	

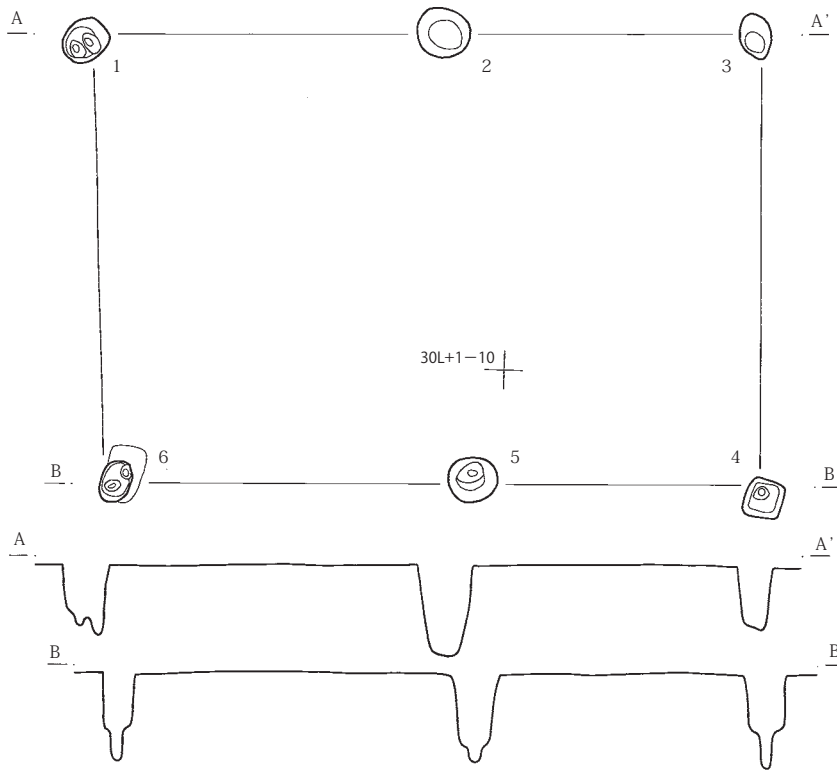


第89図 28号掘立柱建物



第90図 29号掘立柱建物

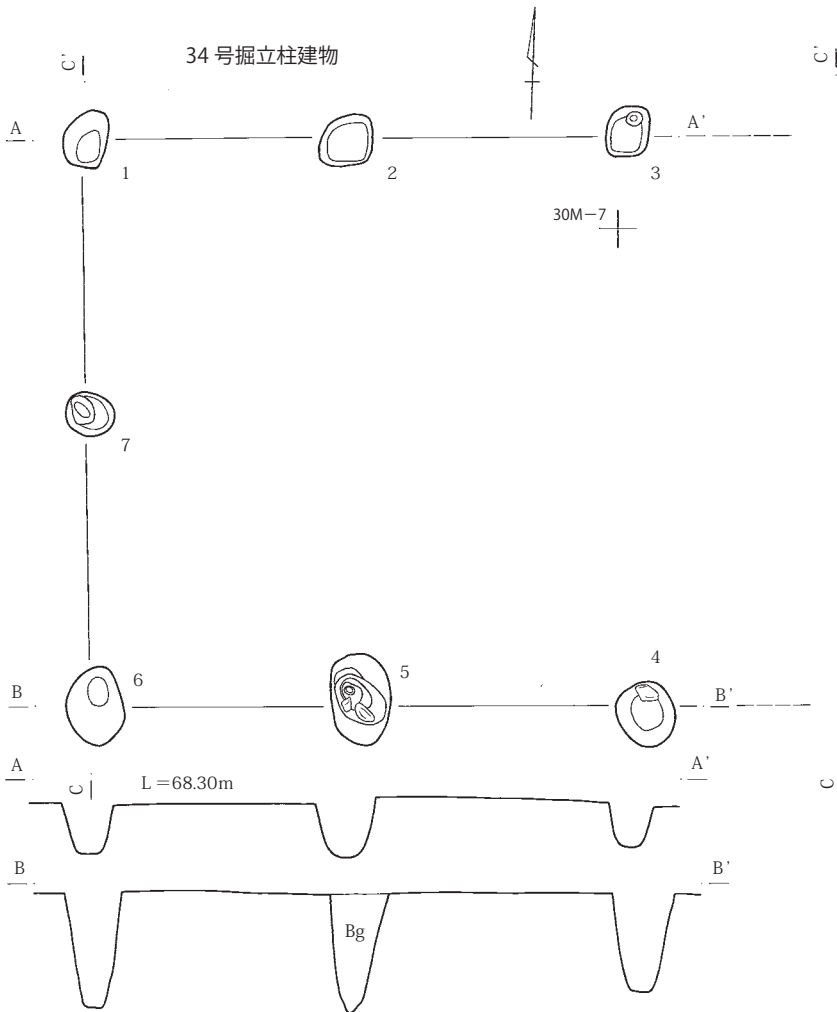
30号掘立柱建物



30号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	36 × 34 × 58.5	28 建 - 16 に近接。底面柱痕。
2	44 × 38 × 74.0	
3	36 × 24 × 28.0	
4	31 × 31 × 73.5	底面に細く深い柱痕。
5	41 × 36 × 70.0	底面に細い柱痕。
6	33 × 23 × 68.5	底面に2か所の細い柱痕。

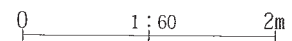
34号掘立柱建物



34号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

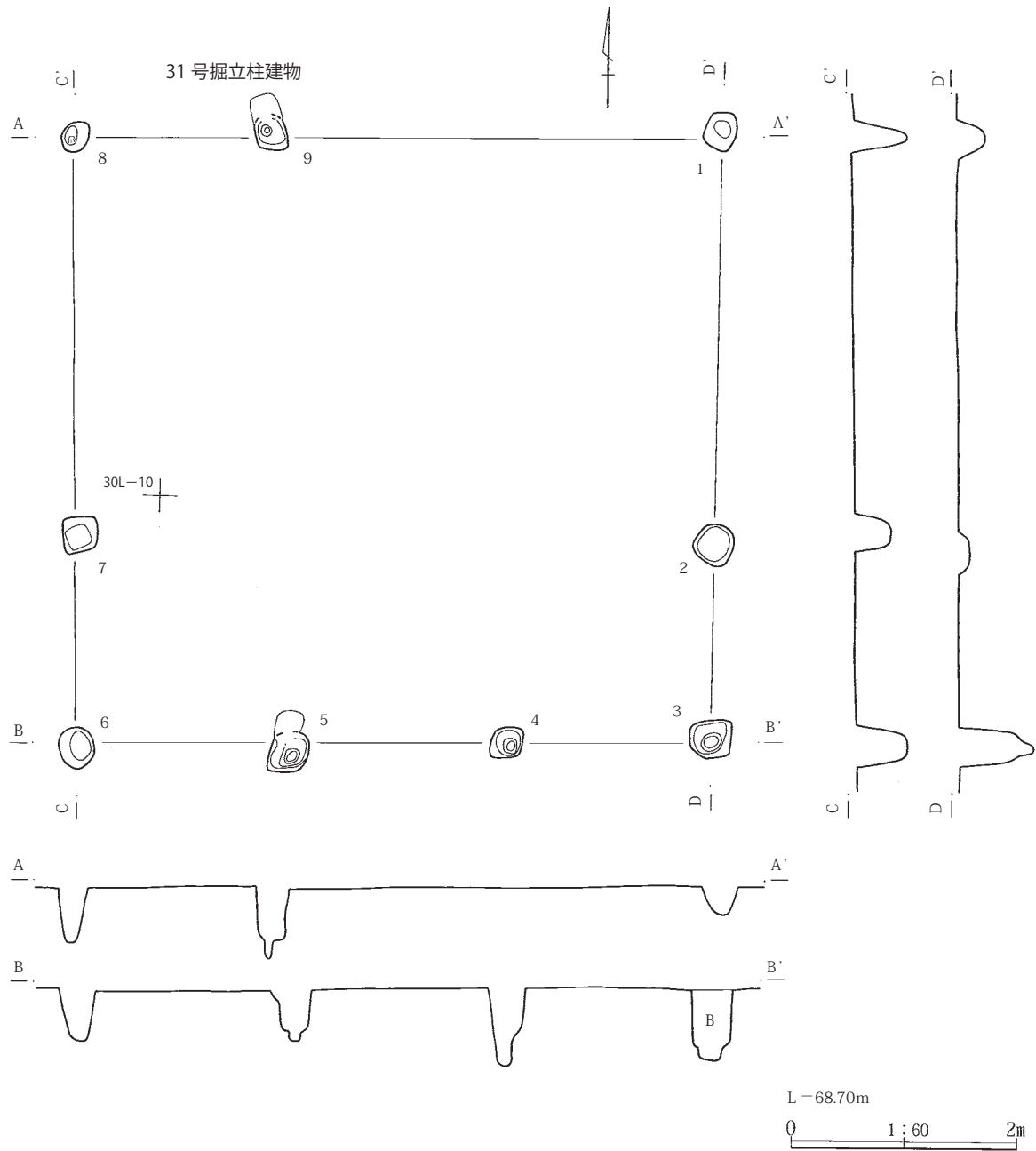
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	46 × 35 × 65.0	
2	42 × 37 × 55.0	17号溝上。
3	42 × 34 × 35.5	底面北隅に柱痕。
4	49 × 45 × 74.0	上層に礎。
5	71 × 47 × 97.5	17号溝上。上層に礎。
6	63 × 47 × 91.0	
7	39 × 33 × 17.5	底面西寄りに柱痕。

L=68.70m



第91図 30号・34号掘立柱建物

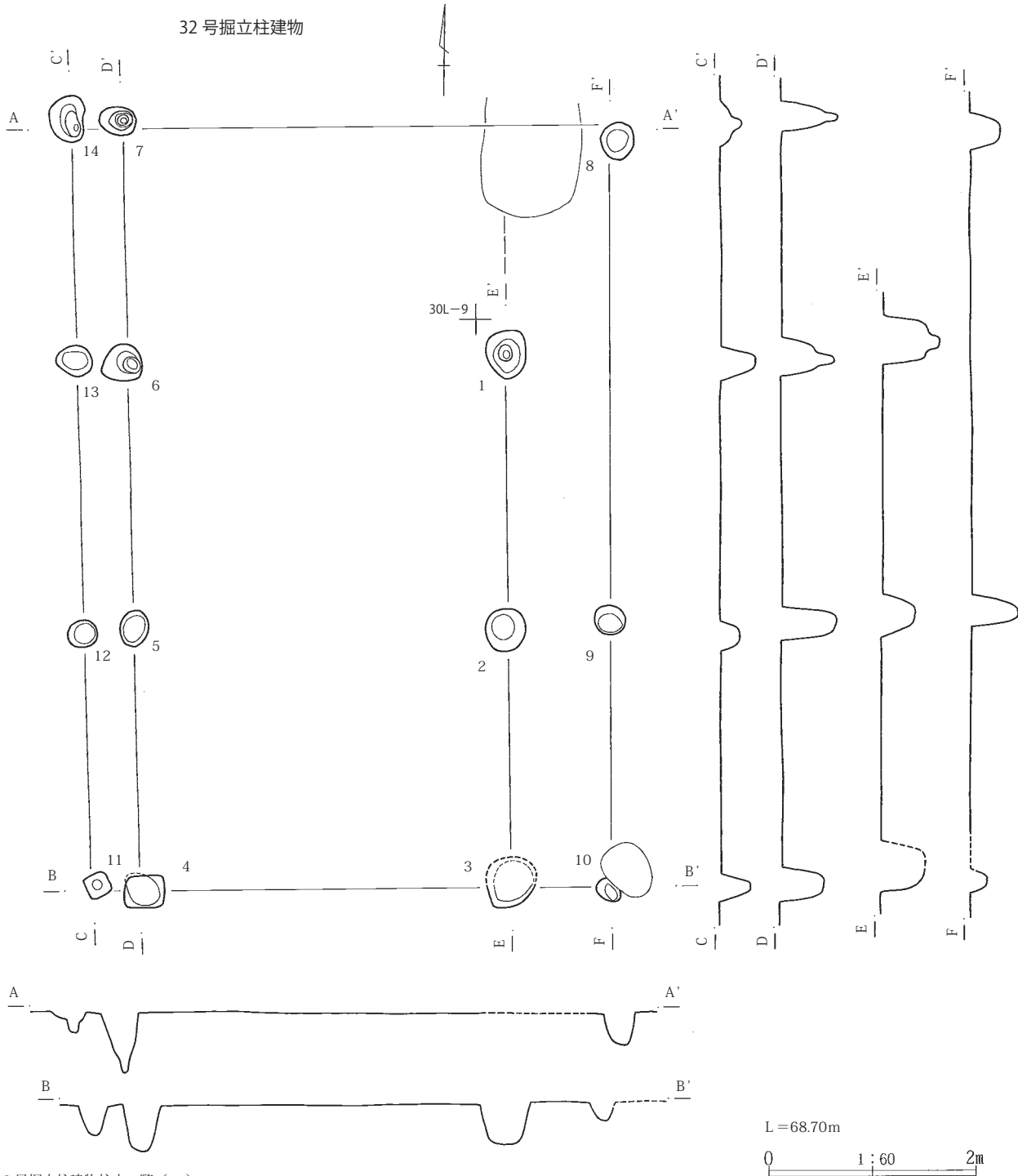
II 発掘調査の記録



31号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	33 × 29 × 24.0	
2	36 × 34 × 10.5	32建-1とわずかに重複。
3	37 × 33 × 65.5	P 201に先出。底面に柱痕。
4	30 × 25 × 72.0	
5	55 × 45 × 66.5	2基のピット。底面に柱痕。
6	36 × 33 × 46.5	
7	31 × 30 × 30.5	
8	30 × 24 × 49.5	
9	49 × 27 × 55.5	2基のピットか。底面に柱痕。

第92図 31号掘立柱建物

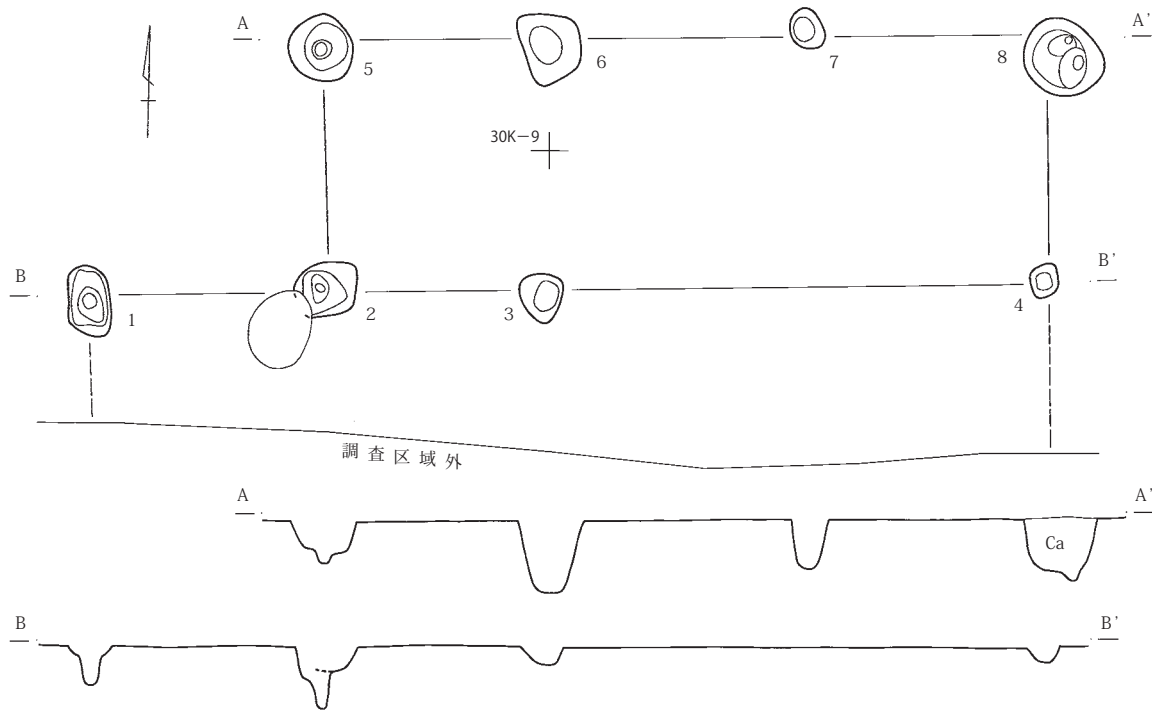


32号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

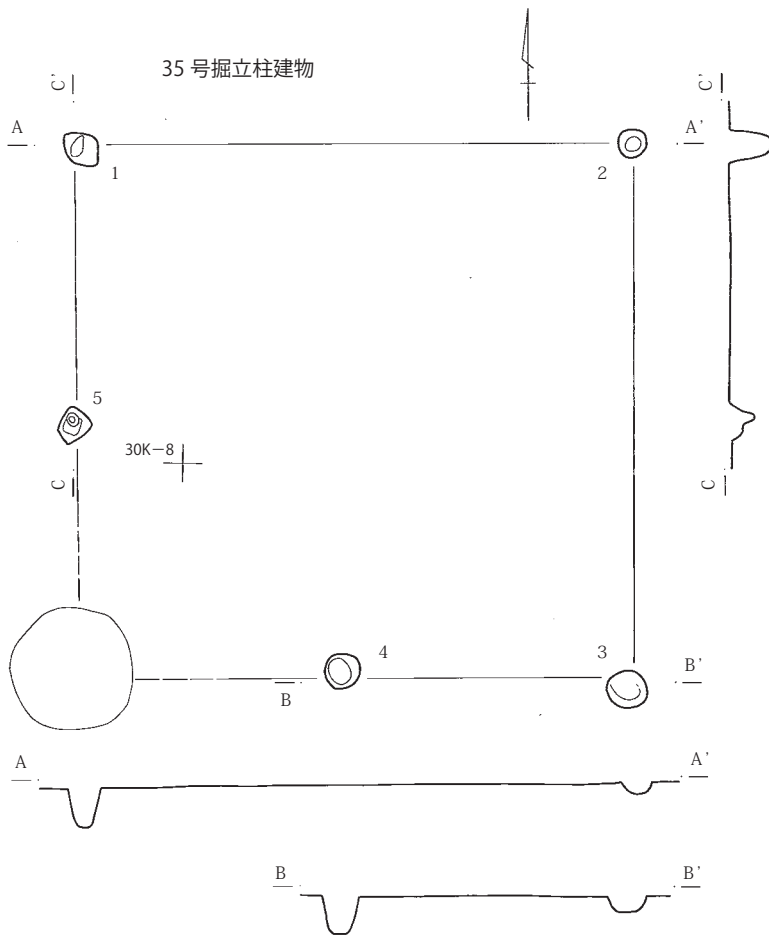
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	44 × 37 × 54.5	31 建-2 とわずかに重複。
2	41 × 39 × 33	
3	(51) × 47 × 45.5	
4	39 × 36 × 45.5	
5	33 × 27 × 53.5	
6	40 × 36 × 51.0	底面に柱痕。
7	36 × 27 × 55.5	底面に柱痕。
8	34 × 33 × 30.5	
9	29 × 27 × 45.5	
10	28 × 16 × 15.5	P 152 と重複。
11	23 × 23 × 29.0	
12	29 × 26 × 16.0	
13	36 × 29 × 34.5	
14	43 × 36 × 18.5	底面に柱痕。2基のピットか。

第93図 32号掘立柱建物

33号掘立柱建物



35号掘立柱建物



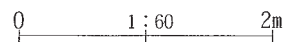
33号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	55 × 33 × 30.5	底面に細く深い柱痕。
2	48 × 42 × 48.0	P 182 と重複。底面に柱痕。
3	38 × 33 × 14.5	
4	25 × 22 × 10.0	
5	51 × 50 × 33.5	底面に柱痕。
6	58 × 46 × 57.0	
7	34 × 26 × 48.5	
8	64 × 55 × 51.5	35 建の西側柱筋上。 柱痕は 2 基分あり。

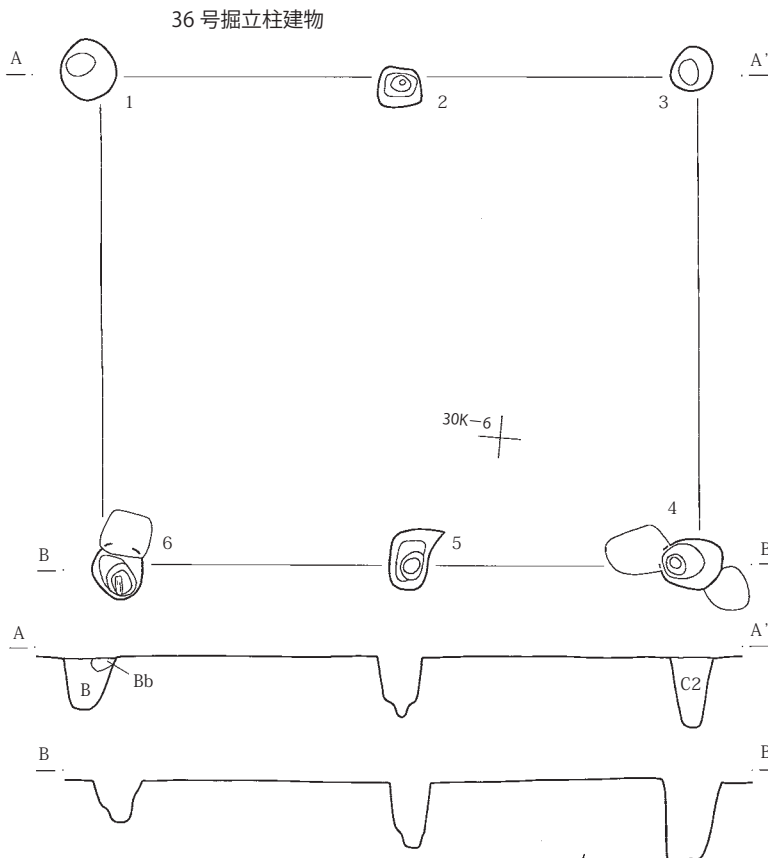
35号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	27 × 25 × 31.5	
2	22 × 21 × 8.5	
3	30 × 29 × 12.0	
4	39 × 37 × 30.5	
5	25 × 23 × 19.0	底面に柱痕。

L = 68.70m



第94図 33号・35号掘立柱建物

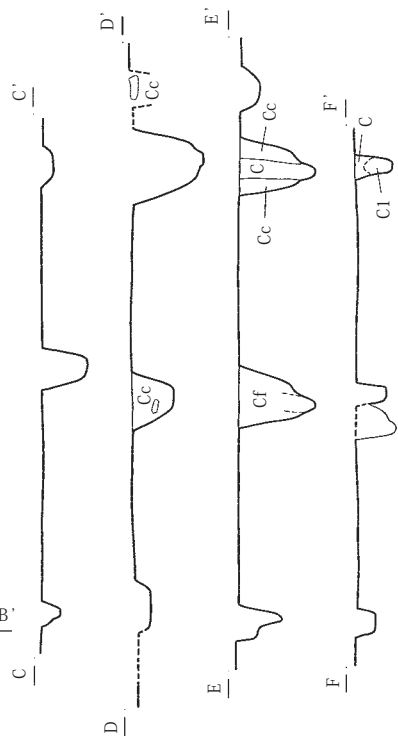
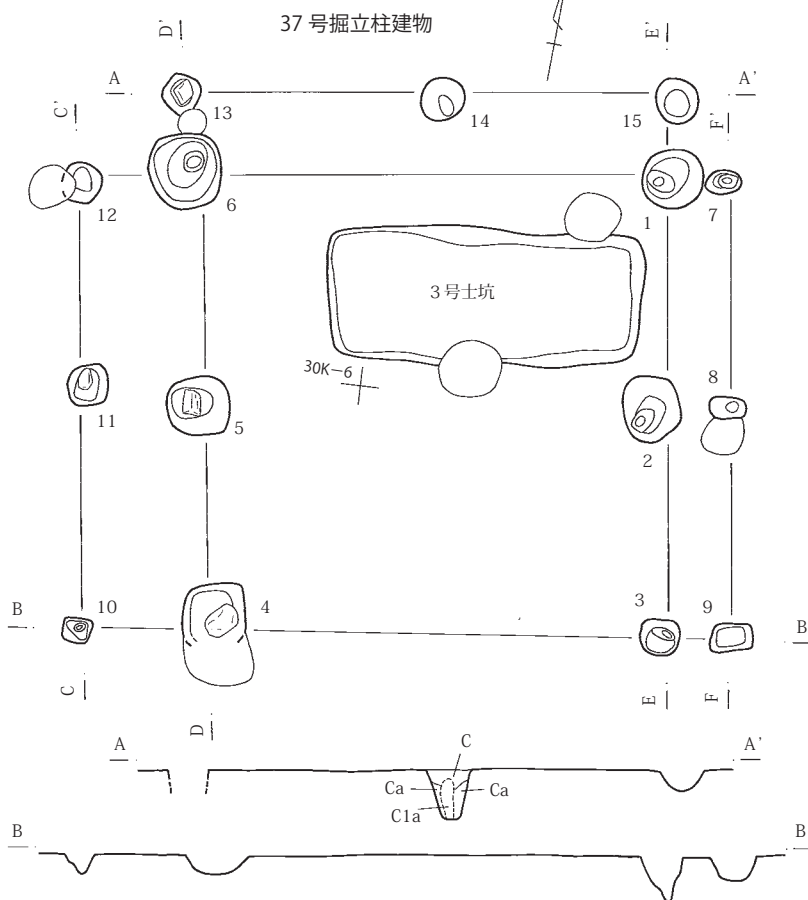


36号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

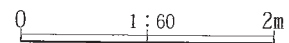
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	46 × 44 × 39.0	底面に柱痕。
2	35 × 31 × 48.5	底面に柱痕。
3	35 × 32 × 54.5	
4	(48) × 38 × 64.0	P 62・64 と重複。底面に柱痕。
5	49 × 32 × 51.5	P 102 とわずかに重複。底面に柱痕。
6	45 × 43 × 33.5	2基のビット。

37号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

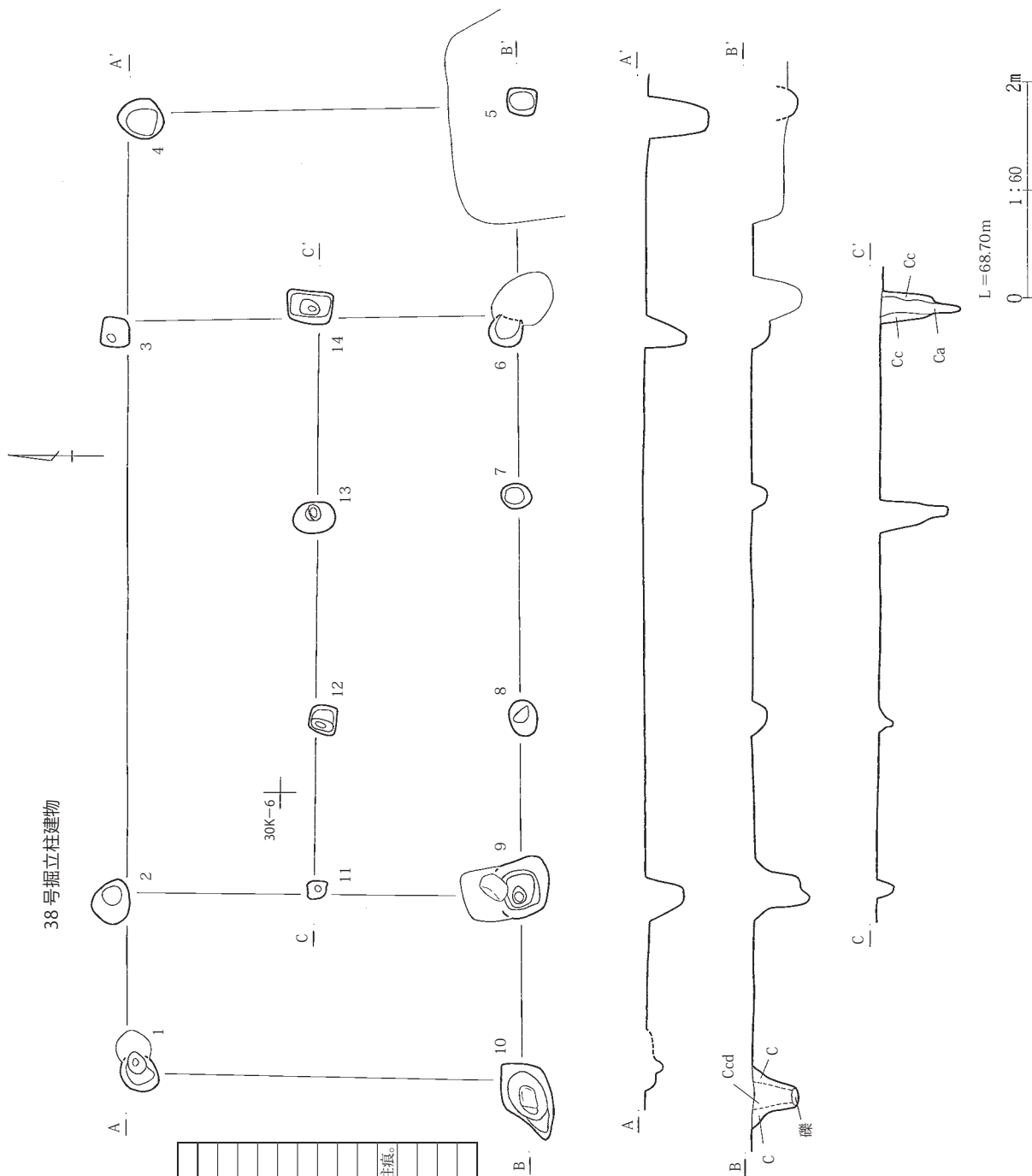
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	48 × 47 × 60.5	断面に柱痕。
2	53 × 45 × 61.0	38建-13と僅かに重複。
3	30 × 28 × 36.0	
4	49 × (42) × 12.0	38建-9と重複。底面直上に平石。
5	50 × 45 × 33.0	38建-11と僅かに重複。
6	59 × 57 × 58.5	
7	30 × 19 × 29.0	
8	29 × 17 × 23.0	P 60と重複。
9	34 × 22 × 16.5	
10	21 × 19 × 14.0	
11	32 × 31 × 36.0	底面付近に平石。
12	59 × 32 × 8.0	38建-1と重複。
13	30 × 27 × (5.5)	P 98と重複。上層に平石。
14	38 × 36 × 48.0	断面に柱痕。
15	35 × 34 × 13.5	



L = 68.70m



第95図 36号・37号掘立柱建物

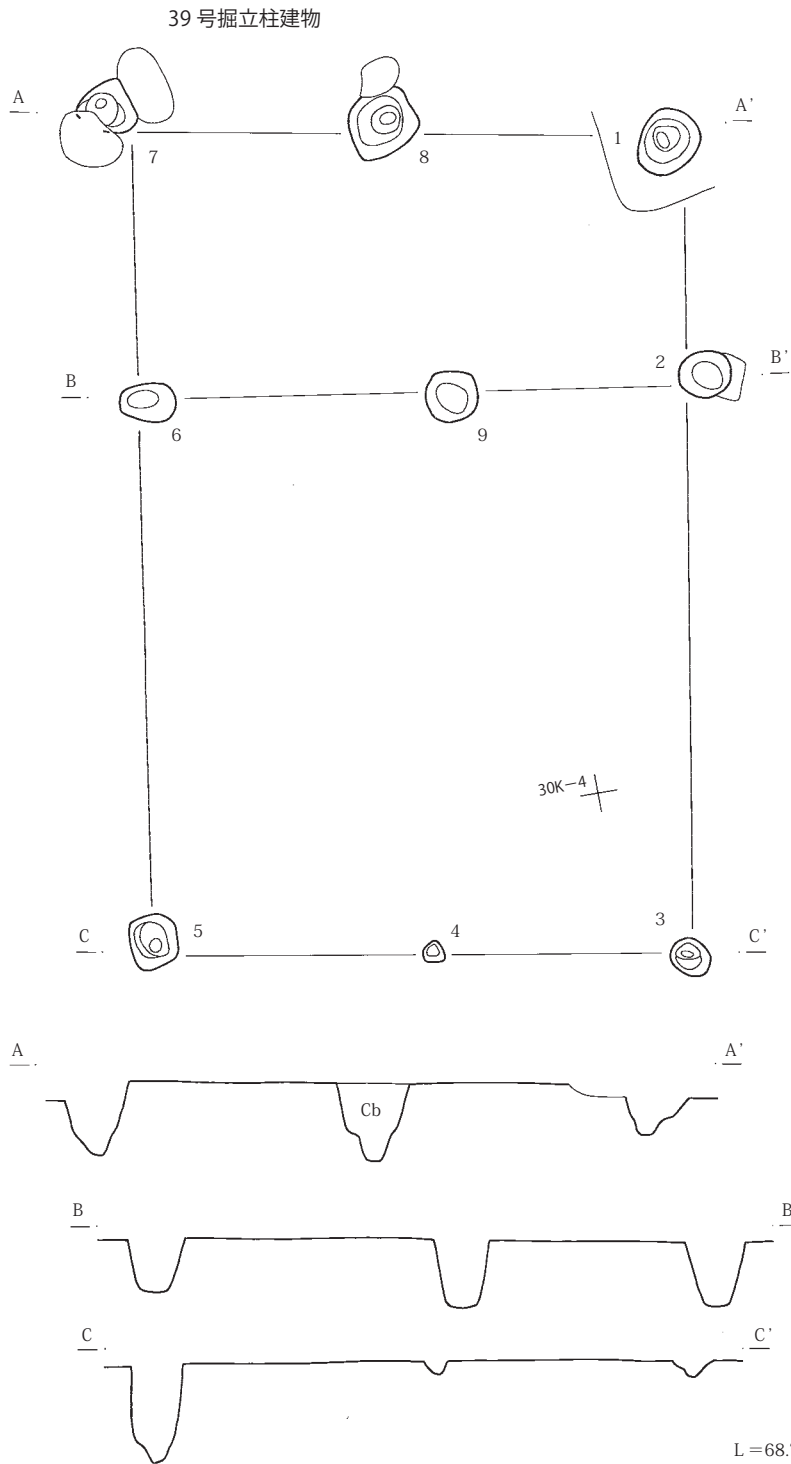


38号掘立柱建物

38号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	59 × 32 × 21.0	37建-12と重複。
2	41 × 36 × 34.5	
3	30 × 26 × 37.5	
4	43 × 38 × 55.5	
5	26 × 25 × 38.5	1号土坑内。
6	(26) × 30 × 16.0	P 32と重複。
7	27 × 24 × 14.5	
8	32 × 25 × 12.0	
9	53 × (45) × 50.0	37建-4と重複。
10	76 × 46 × 42.0	底面直上に平石。断面に深い柱痕。
11	18 × 17 × 14.0	37建-5とわずかに重複。
12	27 × 25 × 13.0	
13	39 × 30 × 64.0	37建-2とわずかに重複。
14	41 × 29 × 74.0	断面に柱痕。

第96図 38号掘立柱建物

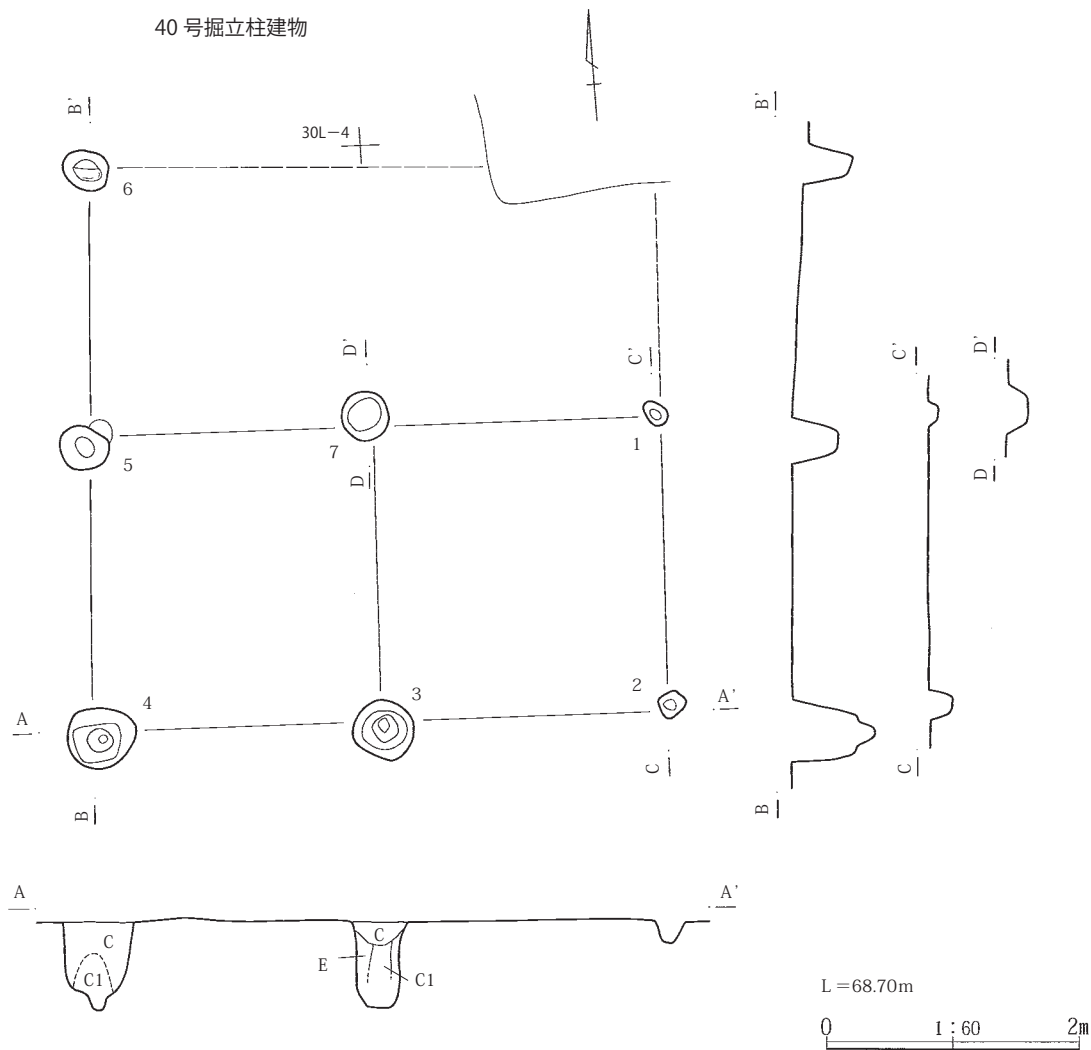


39号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	53 × 46 × 40.5	14号土坑内。
2	41 × 38 × 50.5	2基のビット。
3	33 × 30 × 11.5	
4	17 × 15 × 8.0	
5	42 × 38 × 76.5	底面わずかに柱痕。
6	46 × 20 × 44.0	
7	43 × (41) × 58.0	P 174・200 と重複。
8	55 × 50 × 64.5	P 208 に先出か。底面に柱痕。
9	41 × 40 × 53.0	

第97図 39号掘立柱建物

II 発掘調査の記録



40号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	22 × 15 × 6.0	
2	21 × 19 × 16.0	
3	48 × 44 × 67.5	
4	54 × 46 × 67.0	下層で締めり欠き柱痕状。
5	39 × 34 × 37.5	P 68 と重複。
6	35 × 30 × 38.0	軟質陶器甕片 1 片。
7	39 × 39 × 15.5	かわらけ小片 1 片。

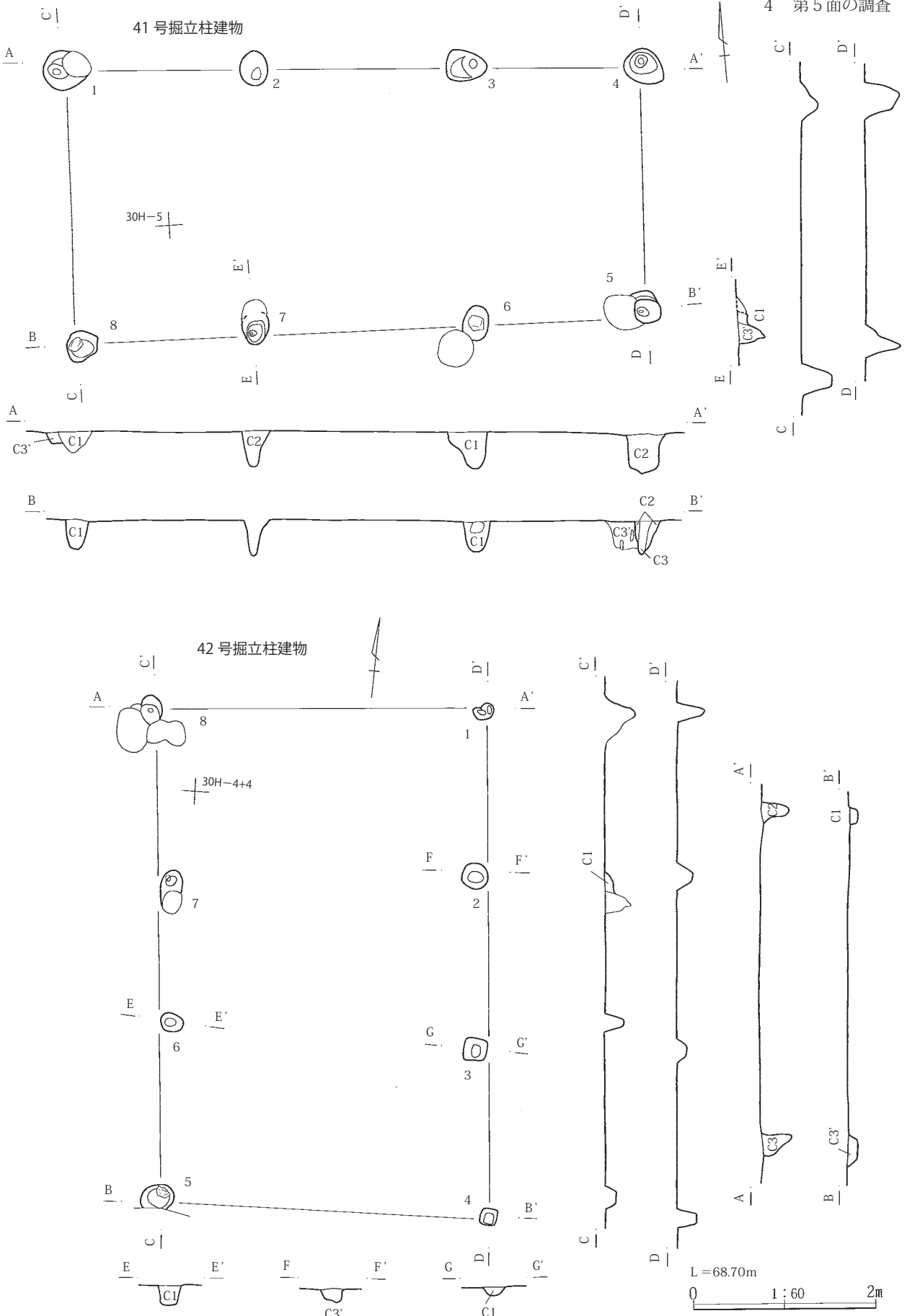
41号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	45 × (23) × 17.0	P 75 に先出。5号建物柱筋上。
2	38 × 30 × 41.5	底面わずかに柱痕。
3	43 × 34 × 42.5	断面に柱痕。
4	43 × 37 × 48.0	
5	35 × (29) × 38.0	P 36 に後出。
6	37 × 28 × 33.0	上層径 20cm の磔。P 56 と重複。
7	(24) × 29 × 40.0	42 建 - 7 に後出。
8	(33) × 33 × 31.5	西隅に磔。3 柱列 - 4 と重複。

42号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

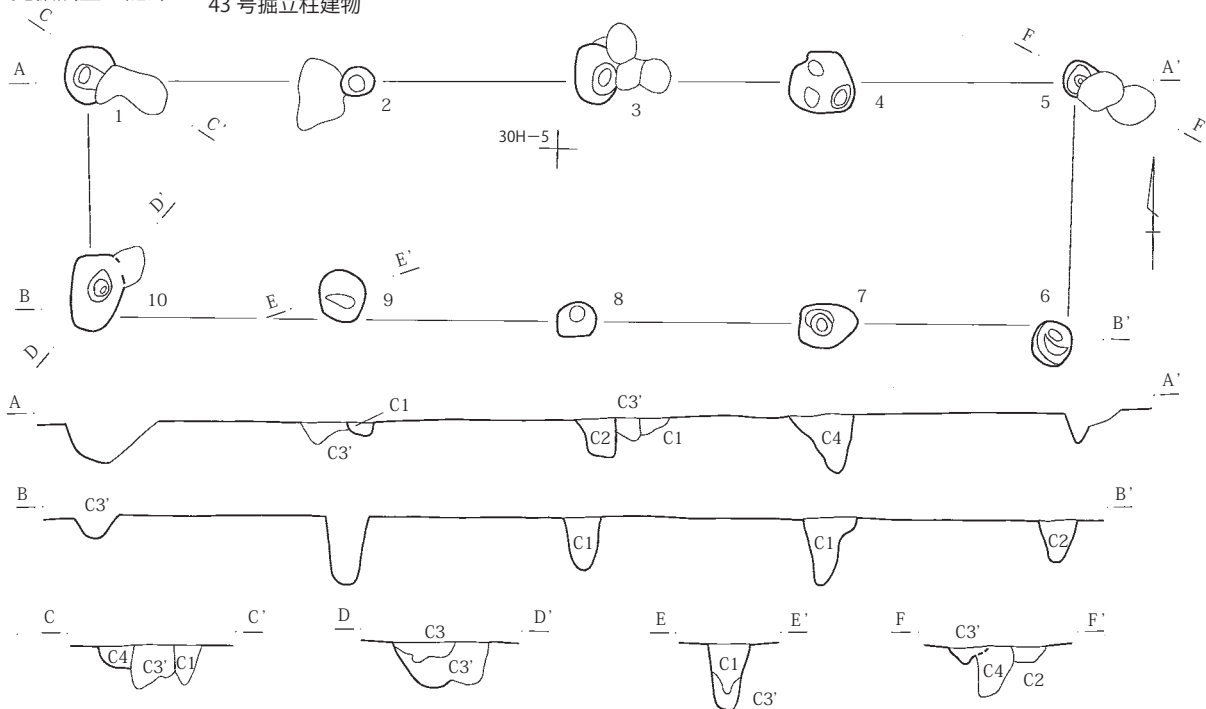
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	21 × 17 × 32.0	陶器 - 1
2	29 × 29 × 16.0	
3	26 × 24 × 9.5	
4	17 × 17 × 22.5	
5	45 × (24) × 13.5	表層に磔。南隅は調査区域外。
6	25 × 18 × 21.5	
7	(25) × 19 × 29.5	41 建 - 7 に先出。
8	(28) × (25) × 31.5	43 建 - 3 と重複。

第 98 図 40号掘立柱建物



第99図 41号・42号掘立柱建物

II 発掘調査の記録 43号掘立柱建物

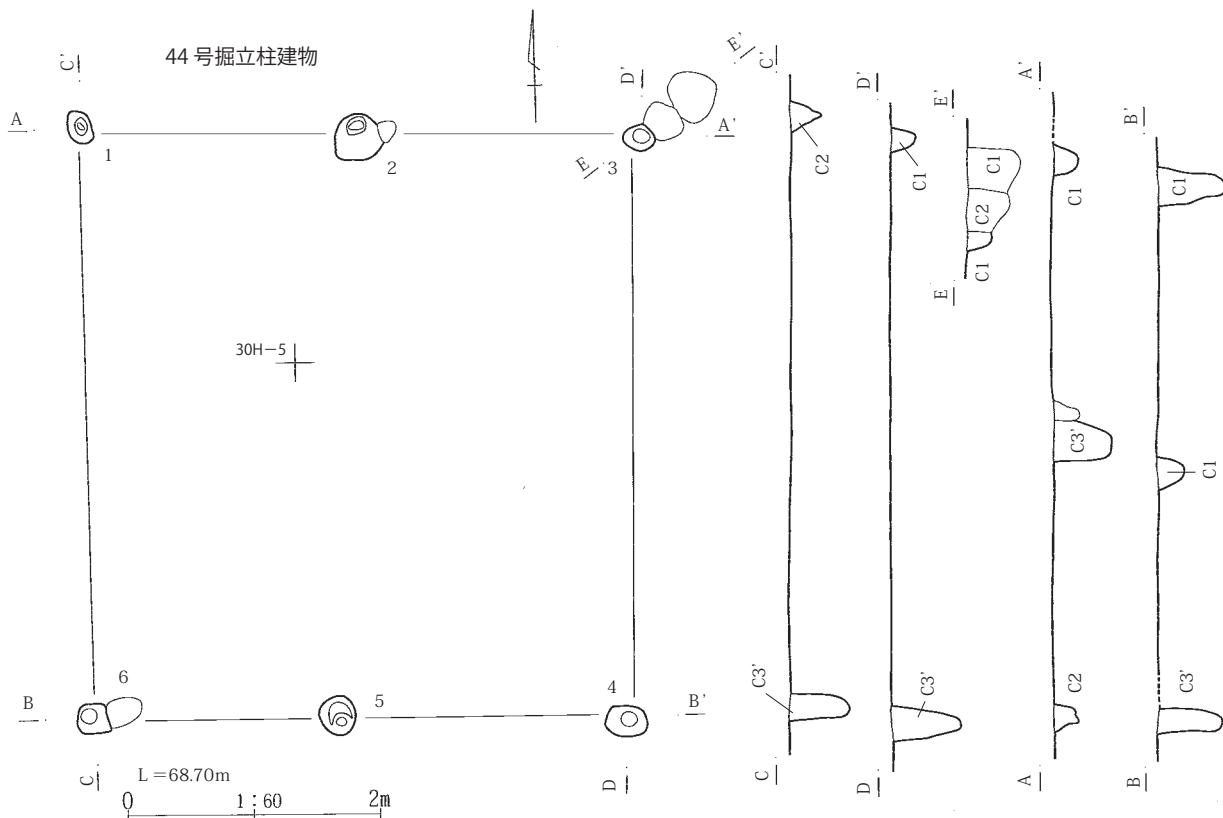


43号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

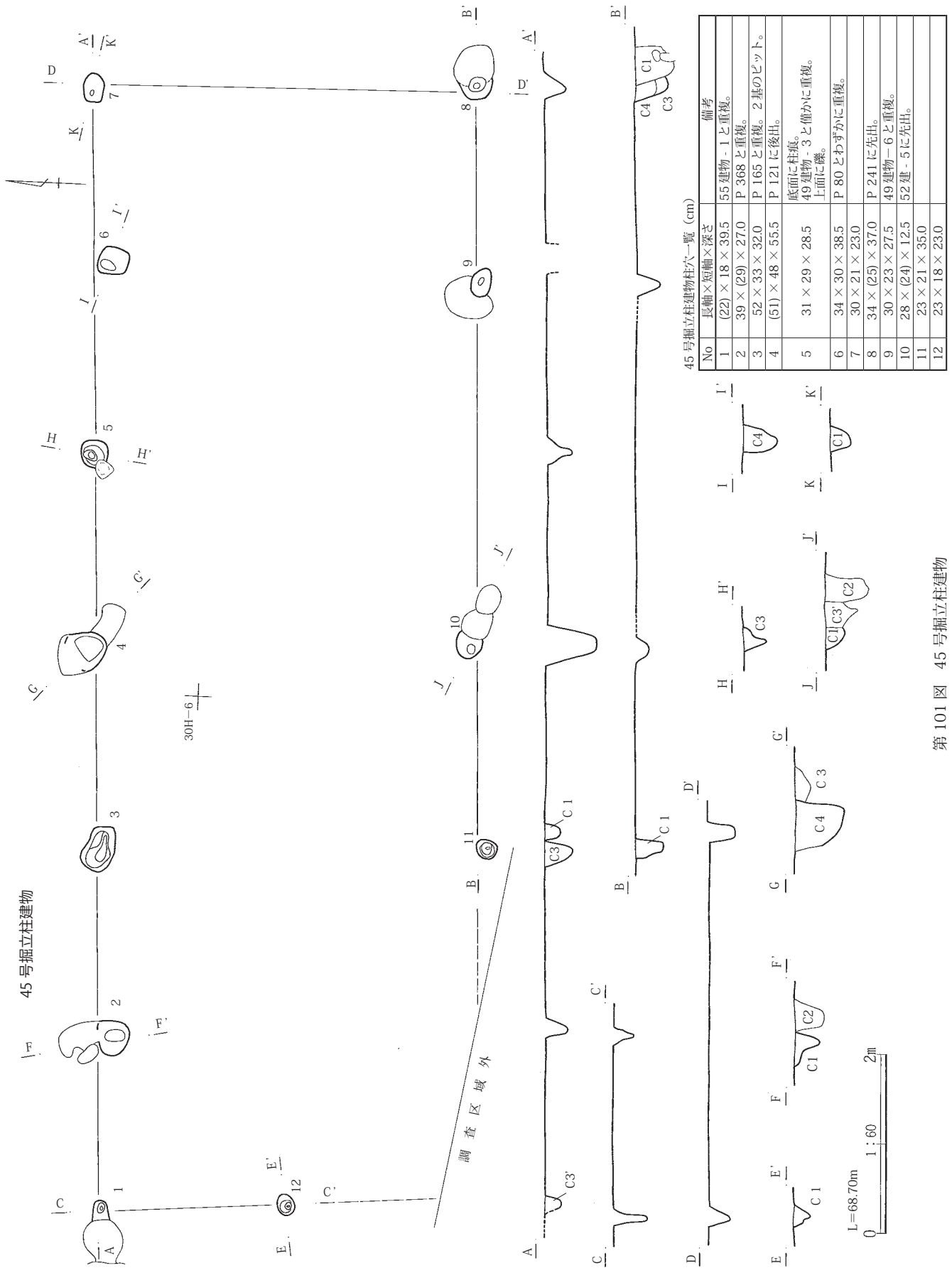
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	45 × (31) × 40.5	P 136 に後出・137 に先出。
2	26 × 21 × 14.5	P 118 に後出・271 と重複。
3	46 × (33) × 34.5	42 建 - 8 と重複。
4	52 × 46 × 52.5	建直しか数基のビットか。
5	26 × (18) × 25.0	P 32 に後出。
6	35 × 33 × 39.0	
7	44 × 34 × 53.5	
8	30 × 28 × 45.0	44 建西側柱筋上。
9	40 × 36 × 53.0	
10	58 × 42 × 48.5	51 建 - 7 と重複。底面に柱痕。

44号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	28 × 20 × 24.5	
2	37 × (35) × 61.0	P 54 に先出。
3	22 × (18) × 41.5	P 23 に先出。
4	39 × 24 × 54.0	
5	31 × 28 × 22.5	45 号建物柱筋上。
6	52 × 23 × 52.5	2 基のビット。

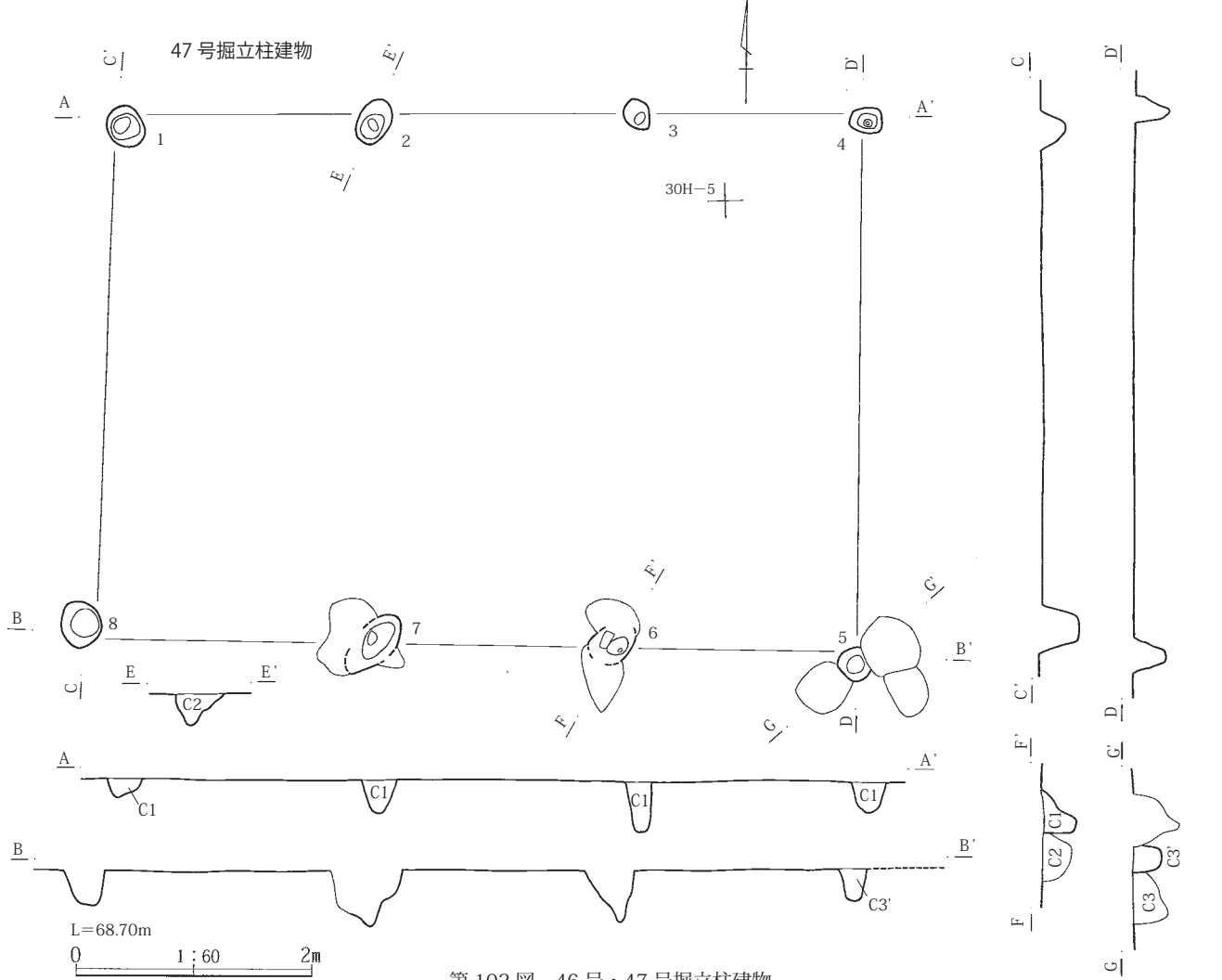
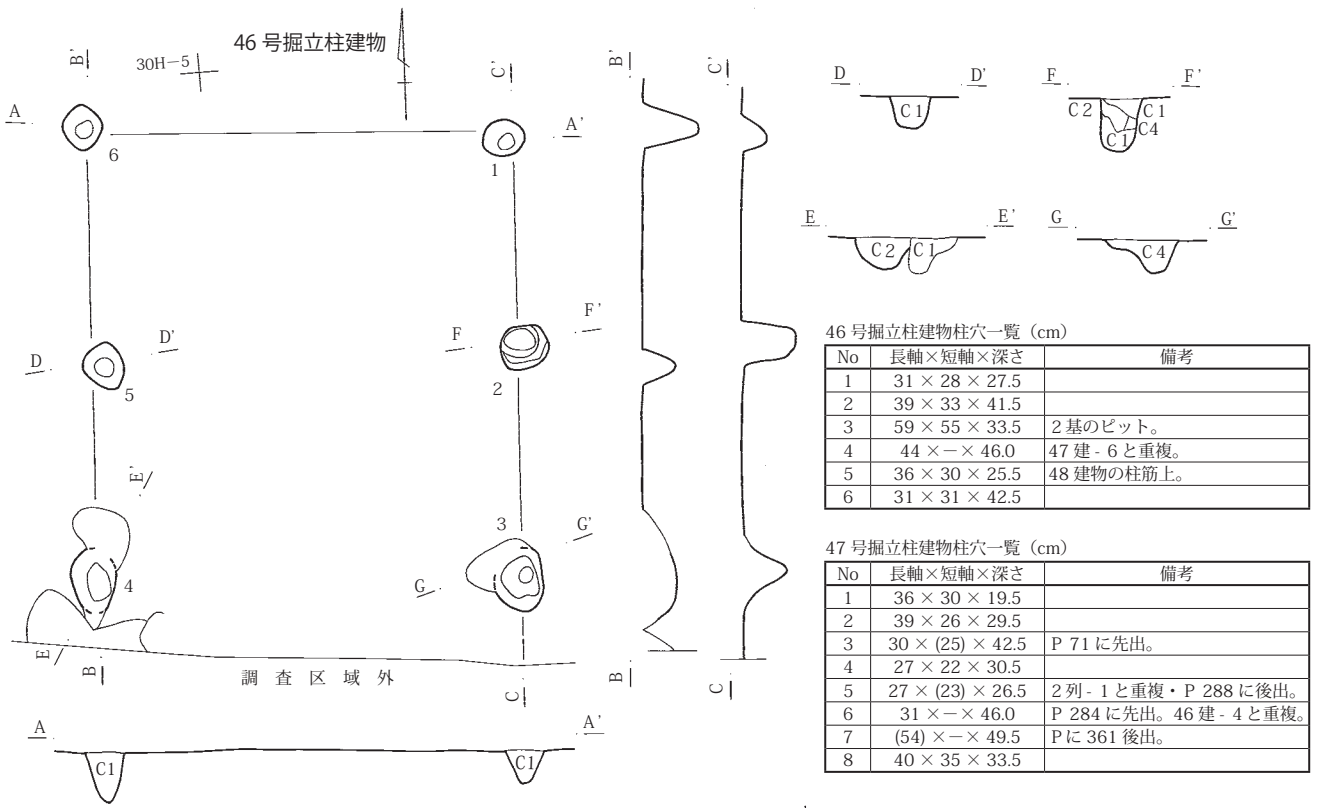


第100図 43号・44号掘立柱建物



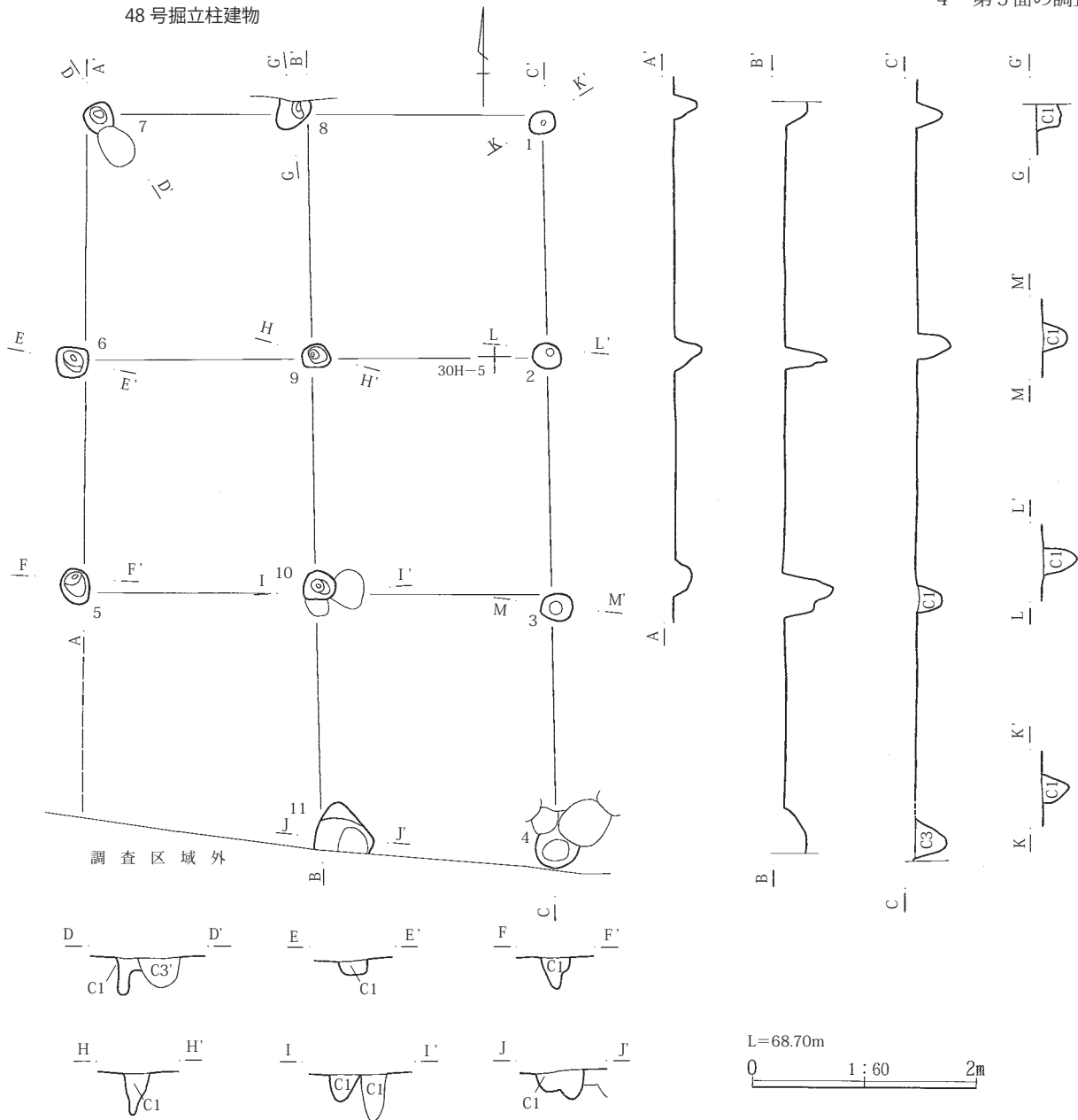
第101図 45号掘立柱建物

II 発掘調査の記録



第102図 46号・47号掘立柱建物

48号掘立柱建物



48号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	22 × 18 × 24.0	P 65 と重複。
2	25 × 21 × 32.0	
3	27 × 23 × 24.0	
4	37 × (35) × 30.0	P 288・423 と重複。
5	32 × 26 × 42.0	
6	27 × 27 × 25.5	
7	(22) × 24 × 34.5	P 141 に先出。
8	(24) × 27 × 19.5	北側は調査区域外。
9	26 × 20 × 36.0	P 117 と重複。
10	39 × (28) × 42.5	2 基のピットか。P 278 と重複。
11	(52) × (43) × 51.0	南側は調査区域外。

49号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	22 × 19 × 27.0	
2	37 × 24 × 20.0	
3	46 × 35 × 38.0	P 68 と重複。
4	63 × 30 × 27.5	P 52 に後出。
5	39 × (30) × 37.0	
6	34 × 27 × 29.5	45 建 - 9 ・ P 253 と重複。
7	49 × 40 × 58.0	底面南側に柱痕。
8	49 × (40) × 44.5	P 322 に後出。
9	30 × 29 × 22.5	

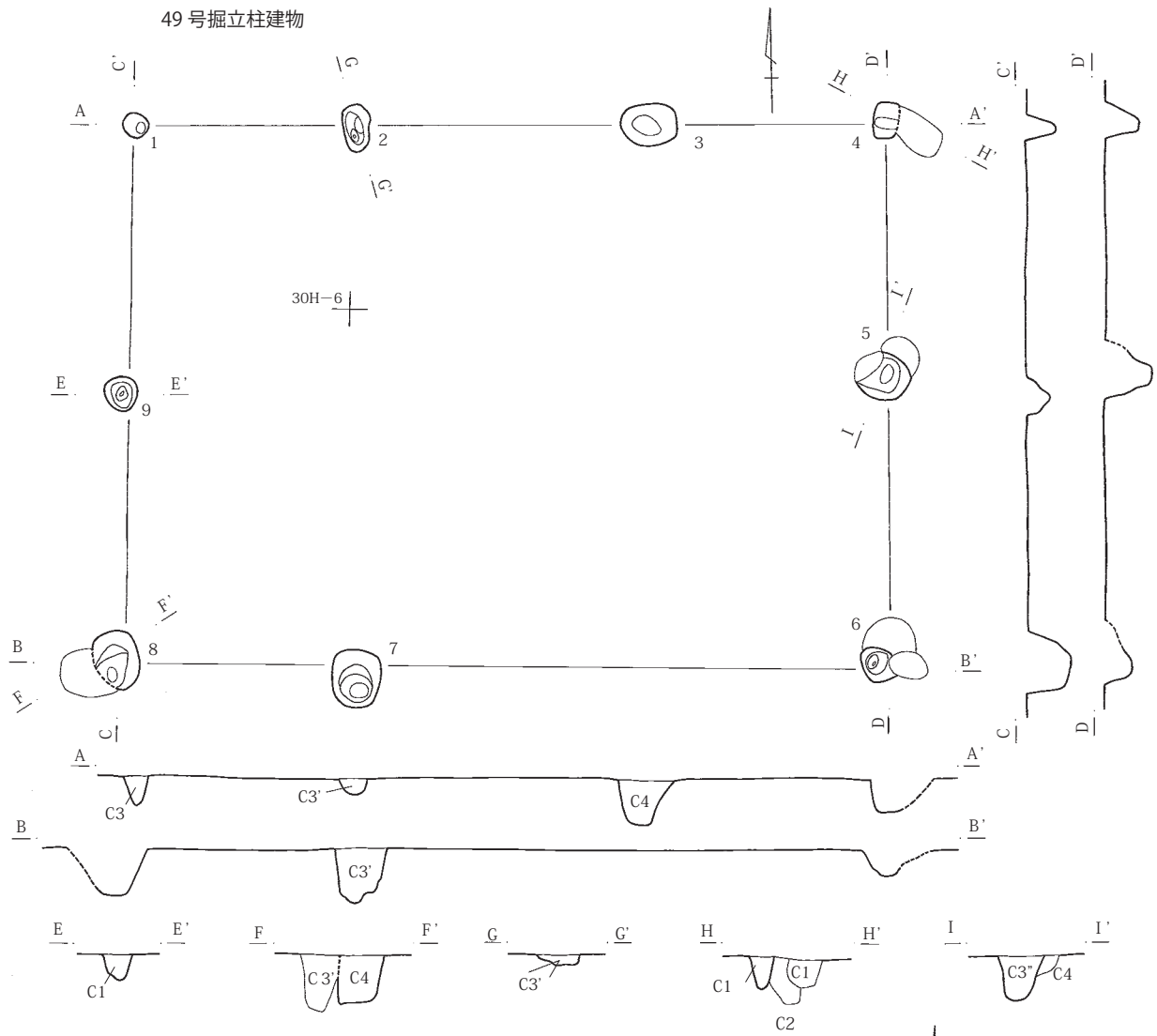
54号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	21 × 20 × 35.5	
2	39 × 26 × 19.0	
3	30 × (21) × 21.5	P 152 と重複。
4	23 × 20 × 9.5	
5	49 × (40) × 48.5	P 175 とわずかに重複。
6	49 × 35 × 23.0	56 建物 - 3 に先出。
7	(24) × 22 × 13.5	56 建物 - 2 と重複。
8	20 × 16 × 10.0	
9	26 × 22 × 24.5	56 建 - 7 とわずかに重複。

第 103 図 48号掘立柱建物

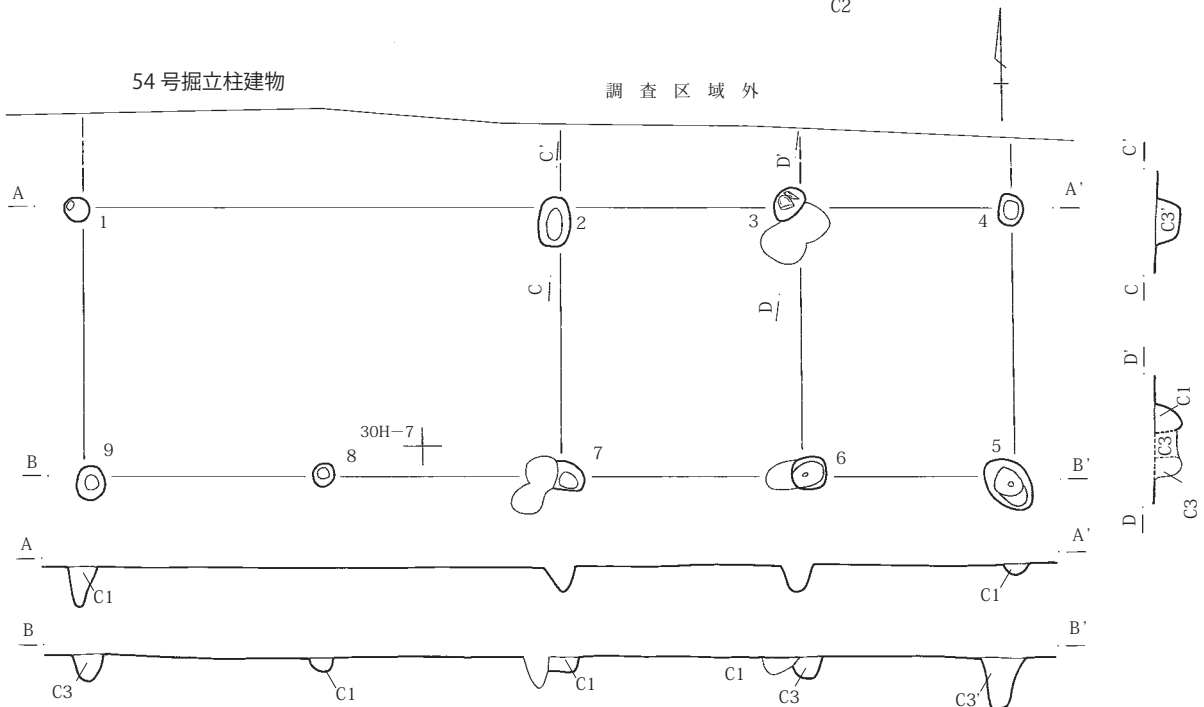
II 発掘調査の記録

49号掘立柱建物



54号掘立柱建物

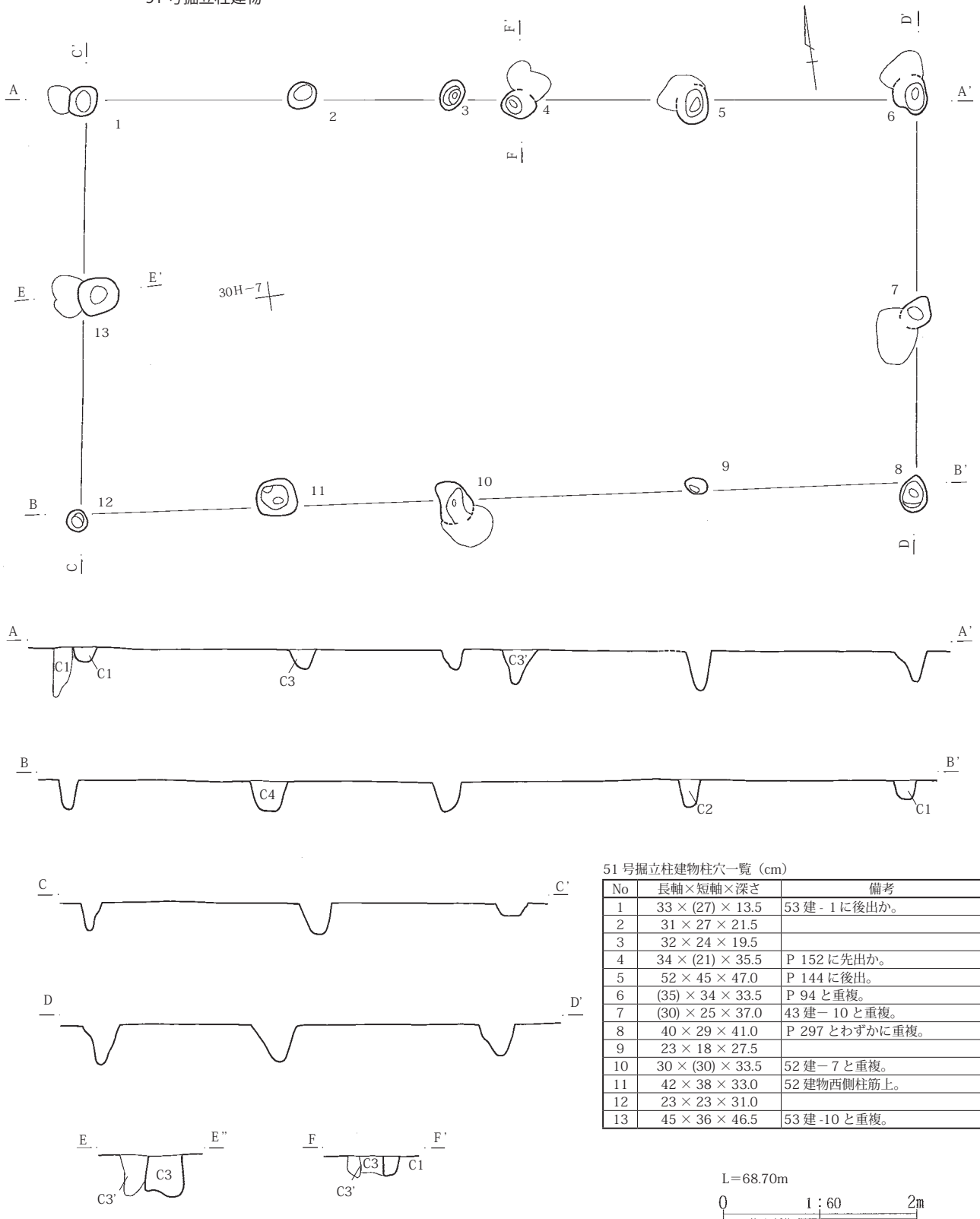
調査区域外



第104図 49号・54号掘立柱建物

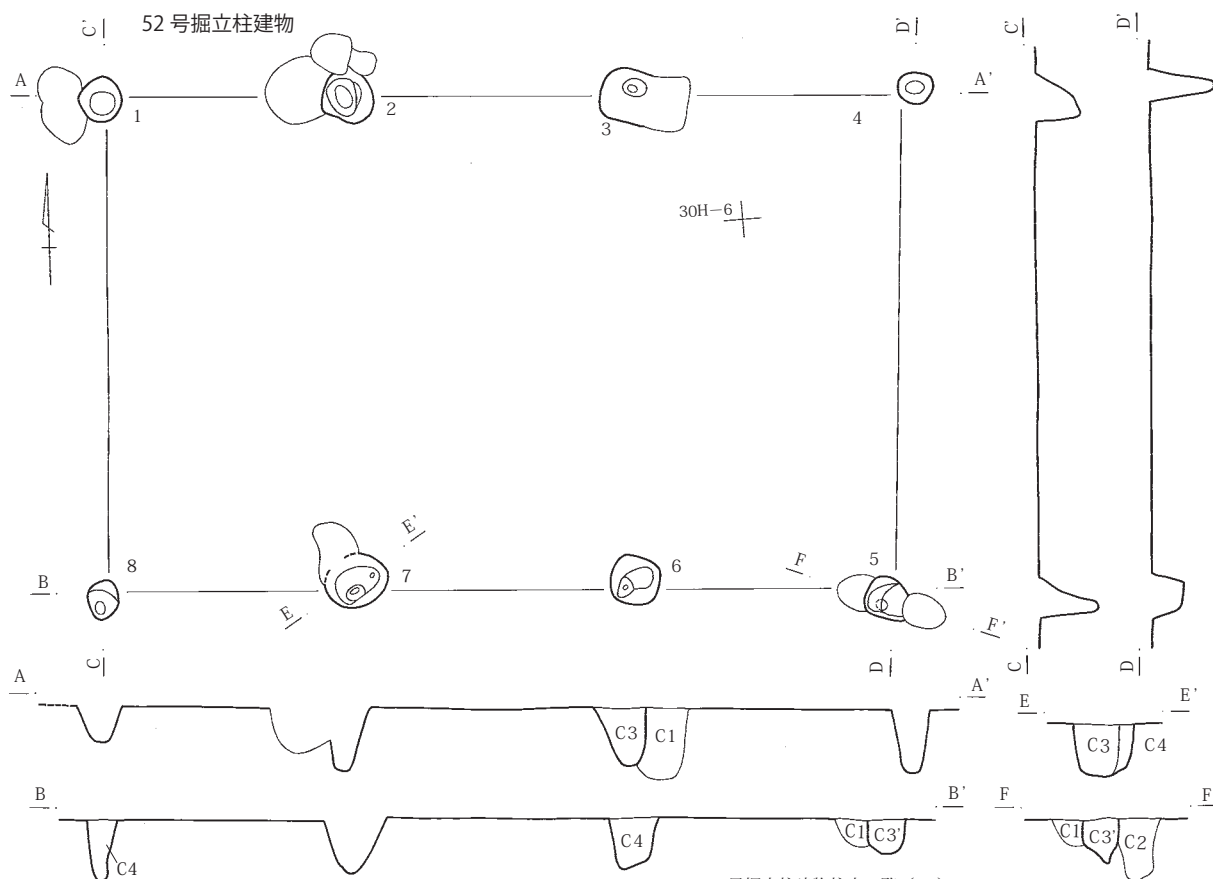
L=68.70m
0 1:60 2m

51号掘立柱建物



第105図 51号掘立柱建物

II 発掘調査の記録

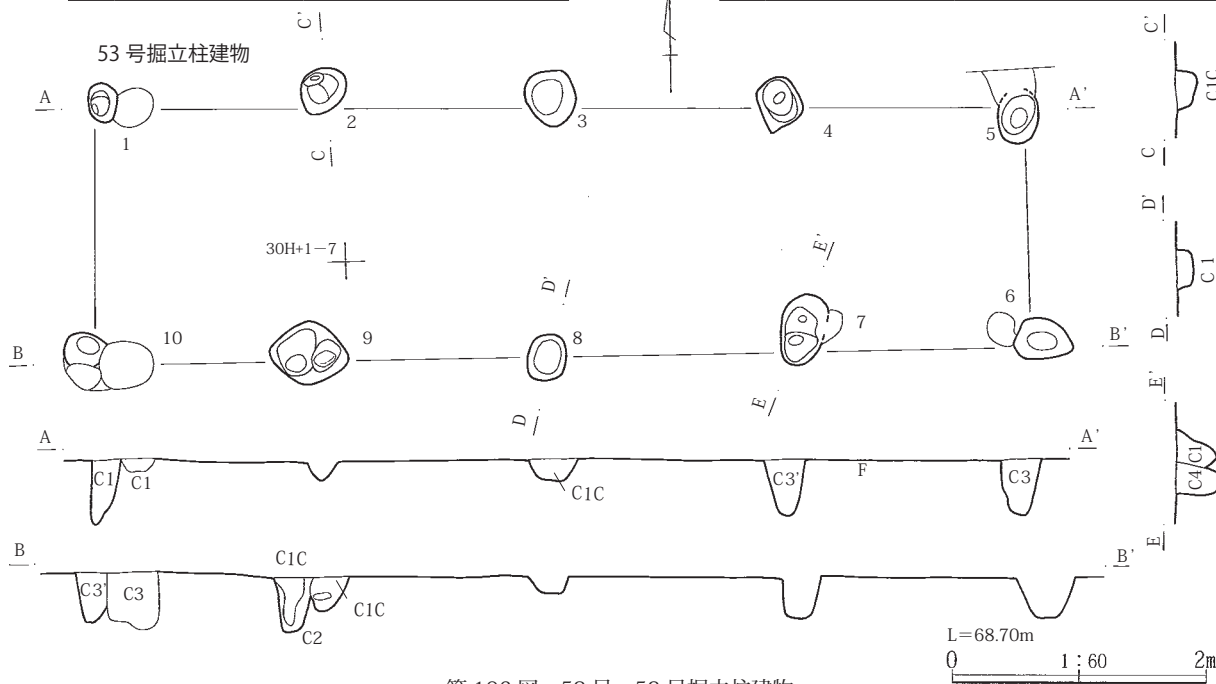


52号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

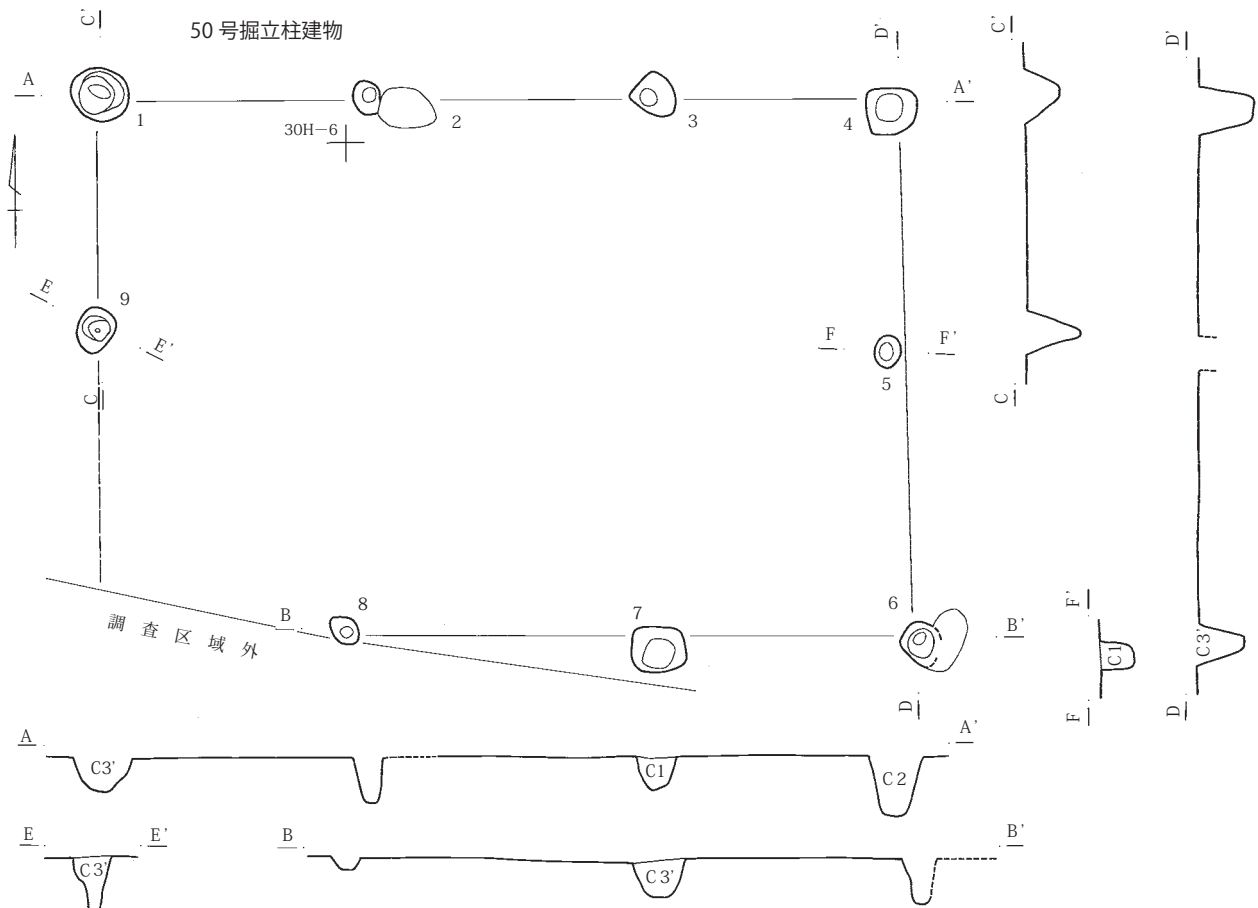
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	35 × 35 × (35.0)	P 191 と重複。
2	(41) × (39) × 51.5	P 301・3・4 と重複。
3	69 × 43 × 60.5	55 建 - 4 に後出。
4	28 × 24 × 51.5	
5	31 × (29) × 61.5	45 建 - 10 に後出。P 297 と重複。
6	40 × 38 × 39.0	
7	51 × (40) × 41.5	51 建 - 10 と重複。 別ピットに後出。
8	31 × 27 × 46.0	

53号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	29 × (22) × 51.5	51 建物 - 1 に先出か。
2	41 × 33 × 30.5	底面北側に柱痕か。
3	43 × 38 × 18.5	
4	39 × 33 × 44.0	
5	(58) × 32 × 44.0	
6	45 × 31 × 30.0	50 建 - 2 と重複。
7	57 × 47 × 40.5	2 基のピット。東側抜柱痕か。
8	37 × 31 × 13.0	
9	48 × 48 × 44.5	2 基のピット。 東側下面に平石。西側断面に柱痕。
10	44 × 29 × 45.0	51 建物 - 13 と重複。



第 106 図 52号・53号掘立柱建物

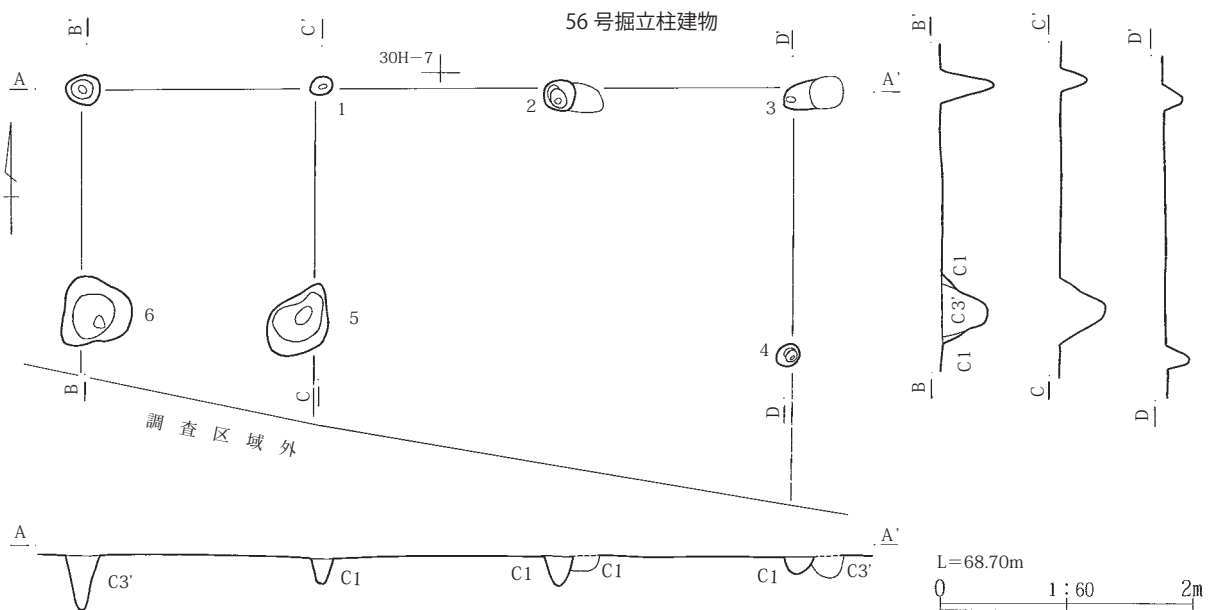


50号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	48 × 41 × 29.5	P 129とわずかに重複。
2	25 × 21 × 37.0	53建 - 6と重複。
3	37 × 29 × 26.0	
4	40 × 37 × 46.0	P 71と重複。
5	25 × 21 × 27.0	
6	57 × 47 × 44.0	数基のビット。
7	45 × 36 × 29.0	P 307・309と重複。
8	27 × 21 × 10.5	1溝と重複。
9	37 × 28 × 44.0	調査区境で南側不安。

56号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

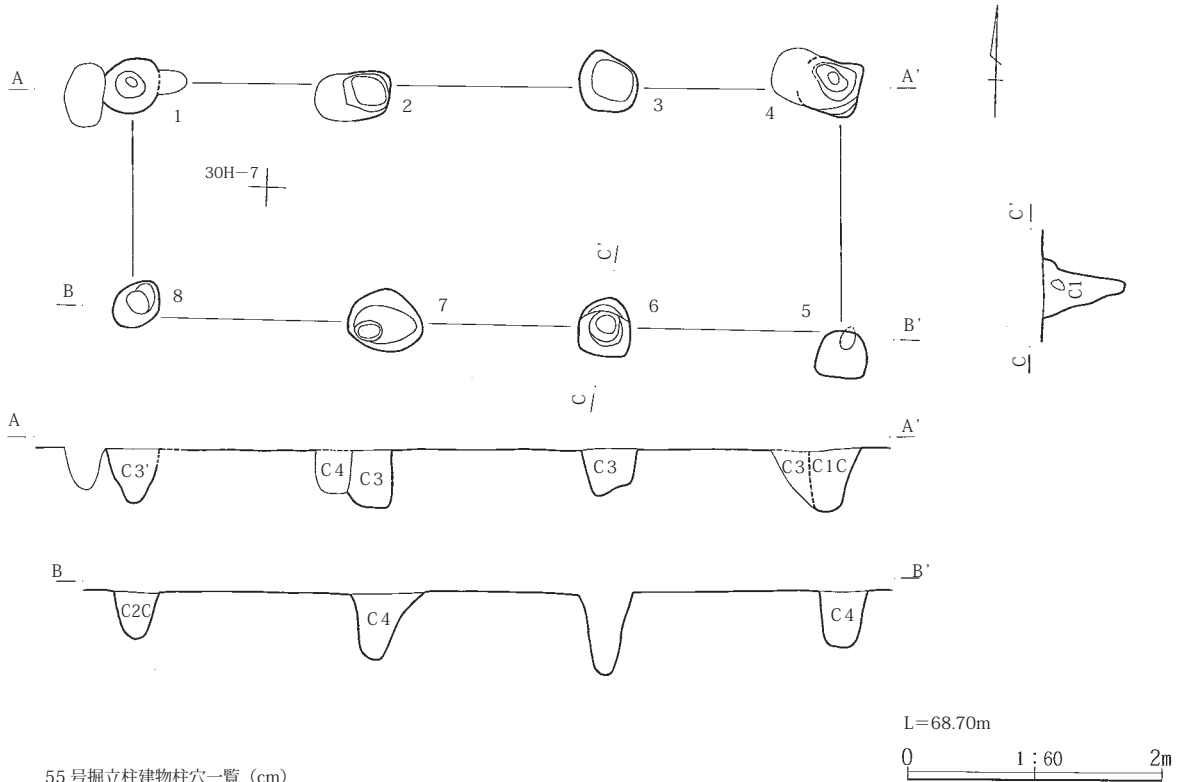
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	17 × 15 × 19.0	
2	(23) × (23) × 25.0	54建物 - 7と重複。
3	49 × 35 × 15.0	54建物 - 6に後出。
4	18 × 18 × 17.5	
5	63 × 49 × 36.5	北側抜柱痕か。
6	56 × 54 × 47.0	
7	26 × 23 × 45.5	54建 - 9と僅かに重複。



第107図 50号・56号掘立柱建物

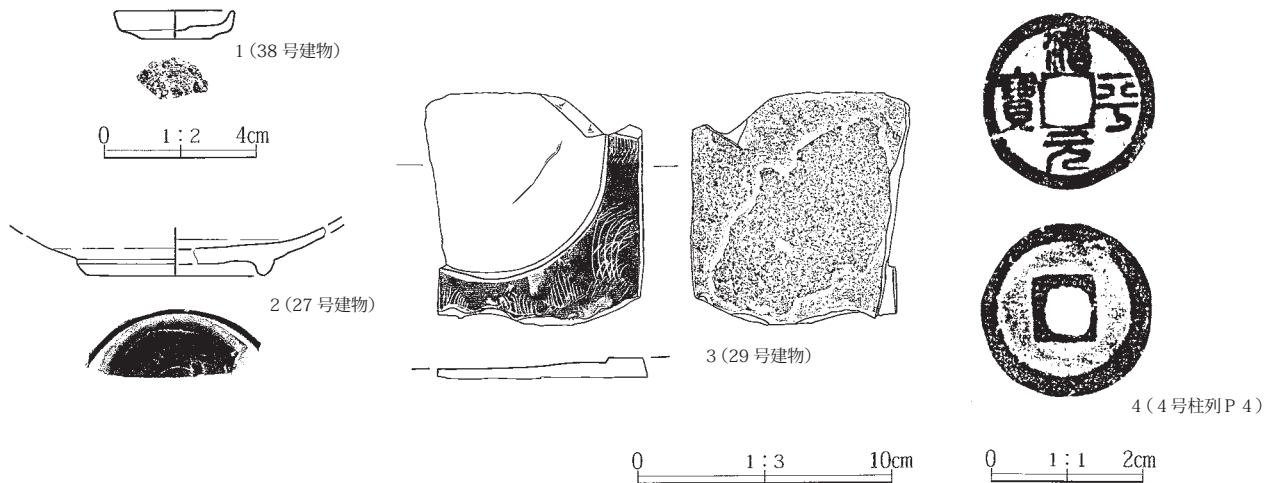
II 発掘調査の記録

55号掘立柱建物

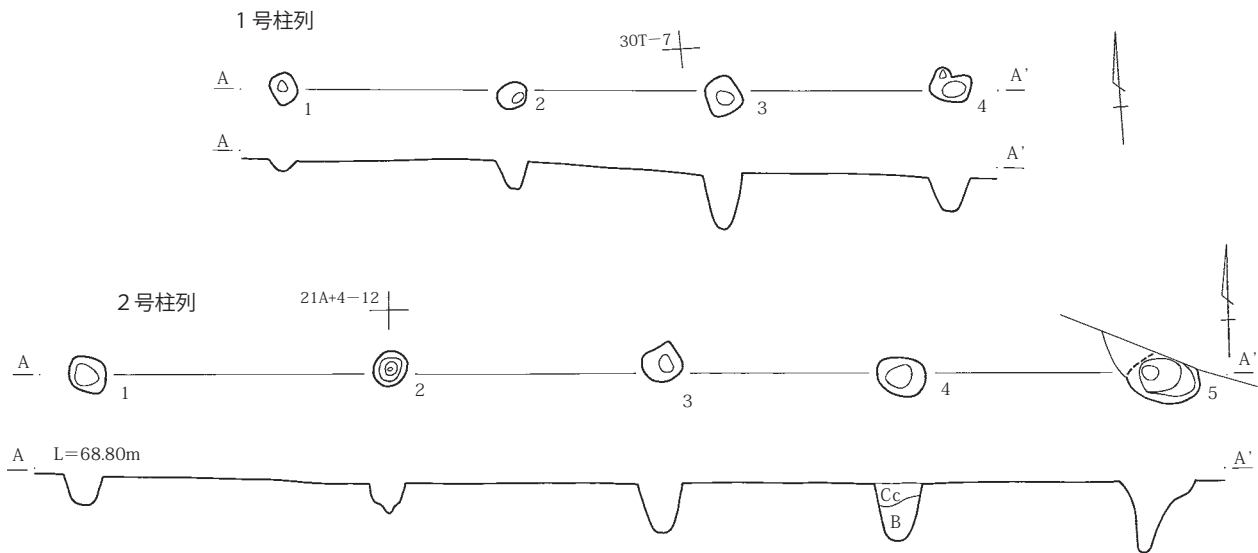


55号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	47×41×49.5	45建物-1と重複。
2	60×37×49.0	P 177に後出。
3	47×44×35.0	北西隅は抜柱痕か。
4	69×43×60.5	52建物-3に先出。
5	40×38×47.0	底面は北へ偏る。
6	46×41×65.5	中層に礎。
7	58×48×51.5	
8	42×33×44.0	



第 108 図 55号掘立柱建物および1区建物出土遺物



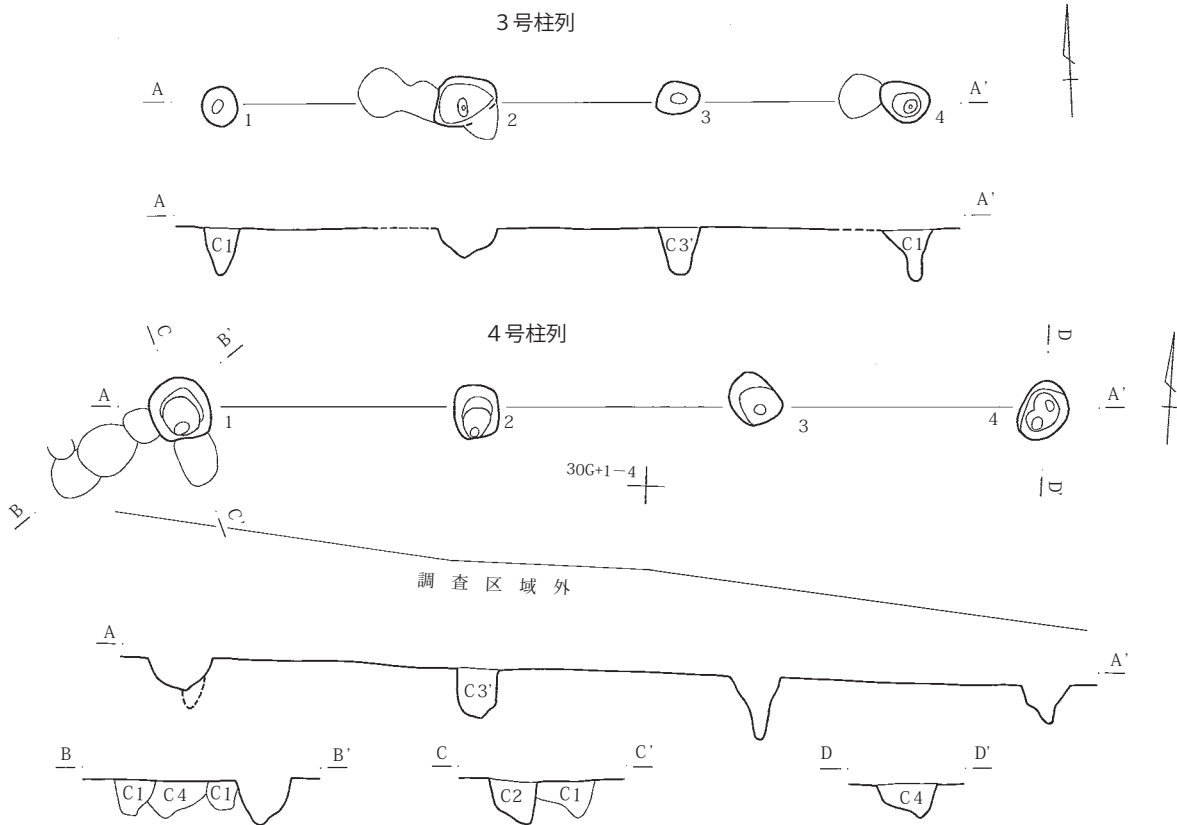
1号柱列柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	23 × 21 × 13.5	13 建東側柱筋上。
2	24 × 21 × 31.5	
3	29 × 27 × 45.5	
4	31 × 24 × 25.0	2基のピットか。

2号柱列柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	32 × 25 × 21.0	
2	29 × 26 × 22.0	底面に柱痕状の窪み。
3	30 × 28 × 38.5	P627 と近接する。
4	39 × 30 × 43.0	
5	57 × 38 × 35.0	土師器刷毛目糞2片混入。

30H-6



3号柱列柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	31 × 28 × 36.5	P 106 とわずかに重複。
2	(45) × 47 × 27.5	P 97 と重複。南側は抜柱痕か。
3	32 × 26 × 37.0	
4	(40) × 31 × 38.5	41 建 - 8 と重複。

4号柱列柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	49 × (46) × 39.0	47 建 - 5 ・ P 247 と重複。
2	41 × 35 × 47.0	底面南隅に柱痕状の窪み。
3	43 × 35 × 49.0	
4	47 × 36 × 25.0	2基のピットか。銅銭。

L=68.70m

0 1:60 2m

第109図 1~4号柱列

西館内の建物 2 a区南側から2 b区東隅にかけては微高地状の高まりのある一画で、古墳時代前期から続く多数の遺構があるうえ、近世以降の耕作による削平も多かった。建物の確認が難しい一画であったが、25棟の建物を復元した。建物は形状・規模とも様々であったが、1 b区のような特殊な構造は少ない。建物占地は館内の東西隅を避け中央部に偏る傾向があり、さらにグリッド11ライン付近を境に南側と北側で2つの建物群に分かれそうである。

各柱穴は埋没土の記録を欠くものが多いが、1区に比べ総じて洪水砂の混入が少ないようである。

101号掘立柱建物(第110図)

概要 西館内の建物中、最も東寄りにある。南側柱筋が102号建物北側柱筋と近接している。

位置 40 O・P-9・10グリッド。

重複 102・103・105号建物の他、97号溝、78・127号土坑等と重複する。

形状規模 1間×3間の東西棟である。柱間が均等でなく、東側のP3-4間・P5-6間が広がっている。西梁間2.75m、南桁行5.30m、面積14.75㎡を測る。

軸方向 N-74~76°W

柱穴 径は小さいが、深さのある柱穴が多い。

所見 6類。南側で重複する102号建物とともに、西館内で最も軸方向が東に振れる建物である。

102号掘立柱建物(第110図)

概要 南側建物群の東隅にある。南側は調査区域外で完掘できていない。

位置 40 O・P-9・10グリッド。

重複 101・103・104号建物の他、97号溝、81・128・129号土坑等と重複する。

形状規模 東西2間×南北1間以上の建物で、南側へ続く総柱建物を想定した。正方形か南北棟になると推測する。北辺4.05m、東辺2.7m、残存面積10.13㎡を測る。

軸方向 N-10°E

柱穴 P3付近は窪んでいて、平面が小さくなっている。本来は規模の揃った柱穴が並ぶはずである。

所見 6類。

103号掘立柱建物(第111図)

概要 2 a区南隅にある。南西隅が調査区域外で完掘できていない。西辺は113・114号建物の西辺に近接している。

位置 40 O~Q-10~12グリッド。

重複 101・102・104~116号の15棟の建物との重複で、107号建物などに次いで西館内では建物間重複が多い。他に6・57号土坑、97号溝と重複する。

形状規模 2間×5間の身屋に南側に庇または下屋の付く大型建物である。東桁間4.10m、北梁行10.50m、下屋の張り出し南側で1.90m、身屋面積47.15㎡、西隅までの推定下屋面積21.85㎡で、総面積69㎡前後になる。

軸方向 N-87°W

柱穴 北西側ほど小規模になっている。下屋と推定される部分も身屋と規模は変わらない。

所見 4類。西館内最大の建物である。

104号掘立柱建物(第112図)

概要 南側建物群の南隅にあり調査区境と接しているが、建物の全容は把握できたと思われる。

位置 40 P-10~12グリッド。

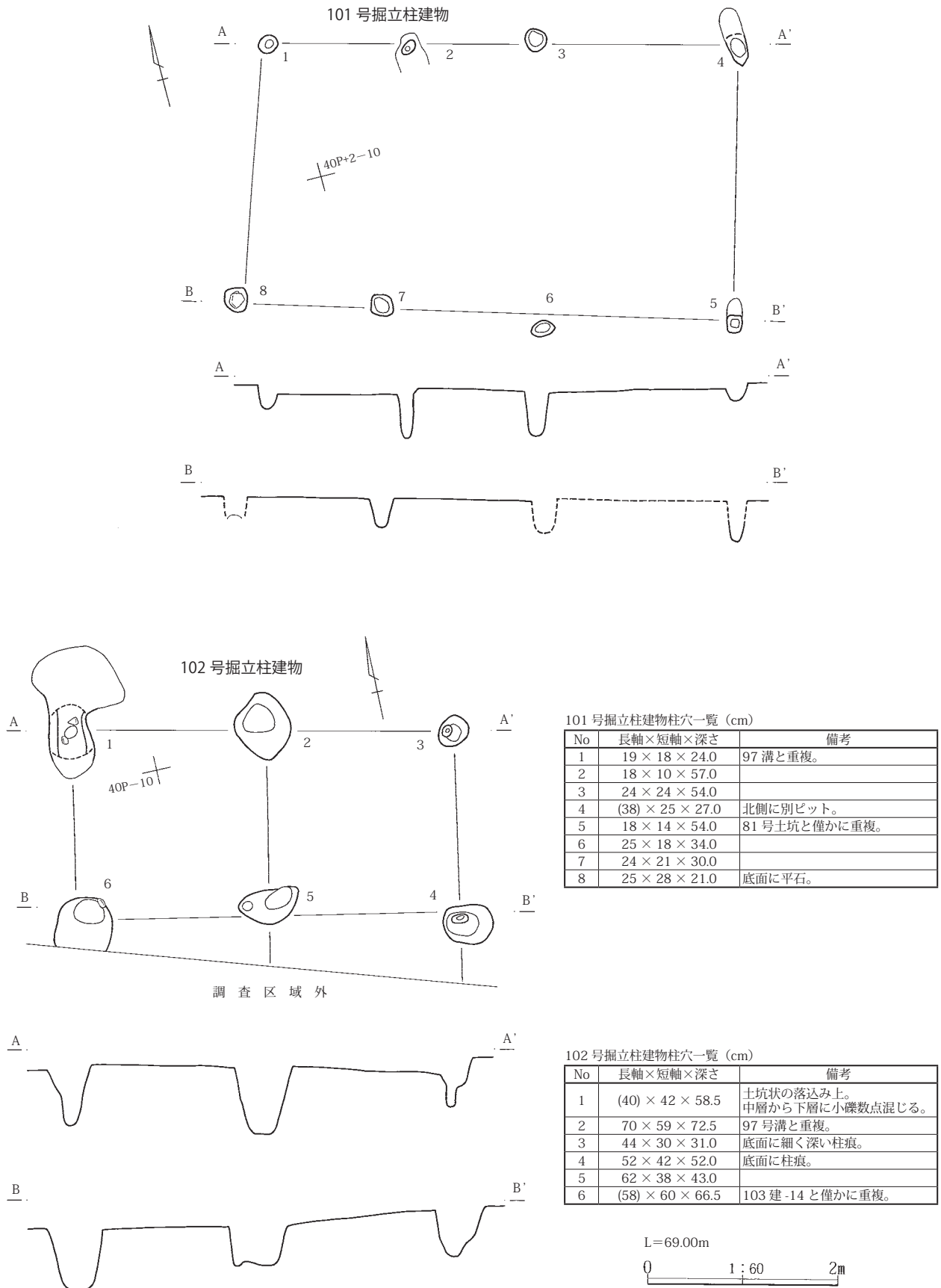
重複 103・105~113号の10棟の建物および97号溝・57・61号土坑等と重複する。

形状規模 2間×3間の東西棟で、東側に下屋の付く建物を想定した。西辺の中間の柱穴が確認できない。西梁間3.75m、北桁行6.65m。下屋の張り出し北側で1.75m、身屋面積26.27㎡、下屋面積6.91㎡を測る。

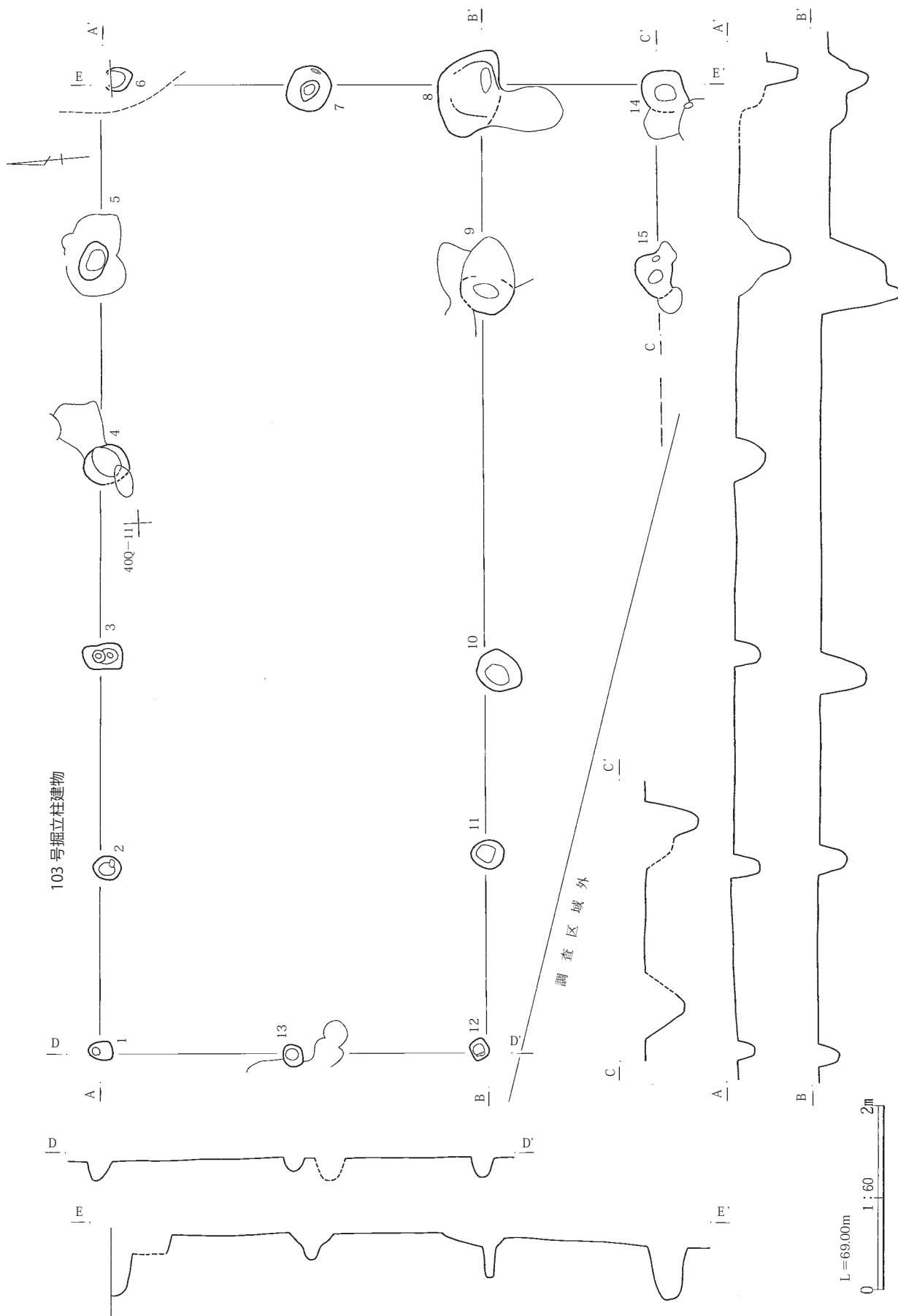
軸方向 N-88~89°W

柱穴 P1・3・9は重複遺構のため不明瞭である。P2・P11底面には礎石状の川原石が底面直上に据えられている。

所見 4類。



第110図 101号・102号掘立柱建物



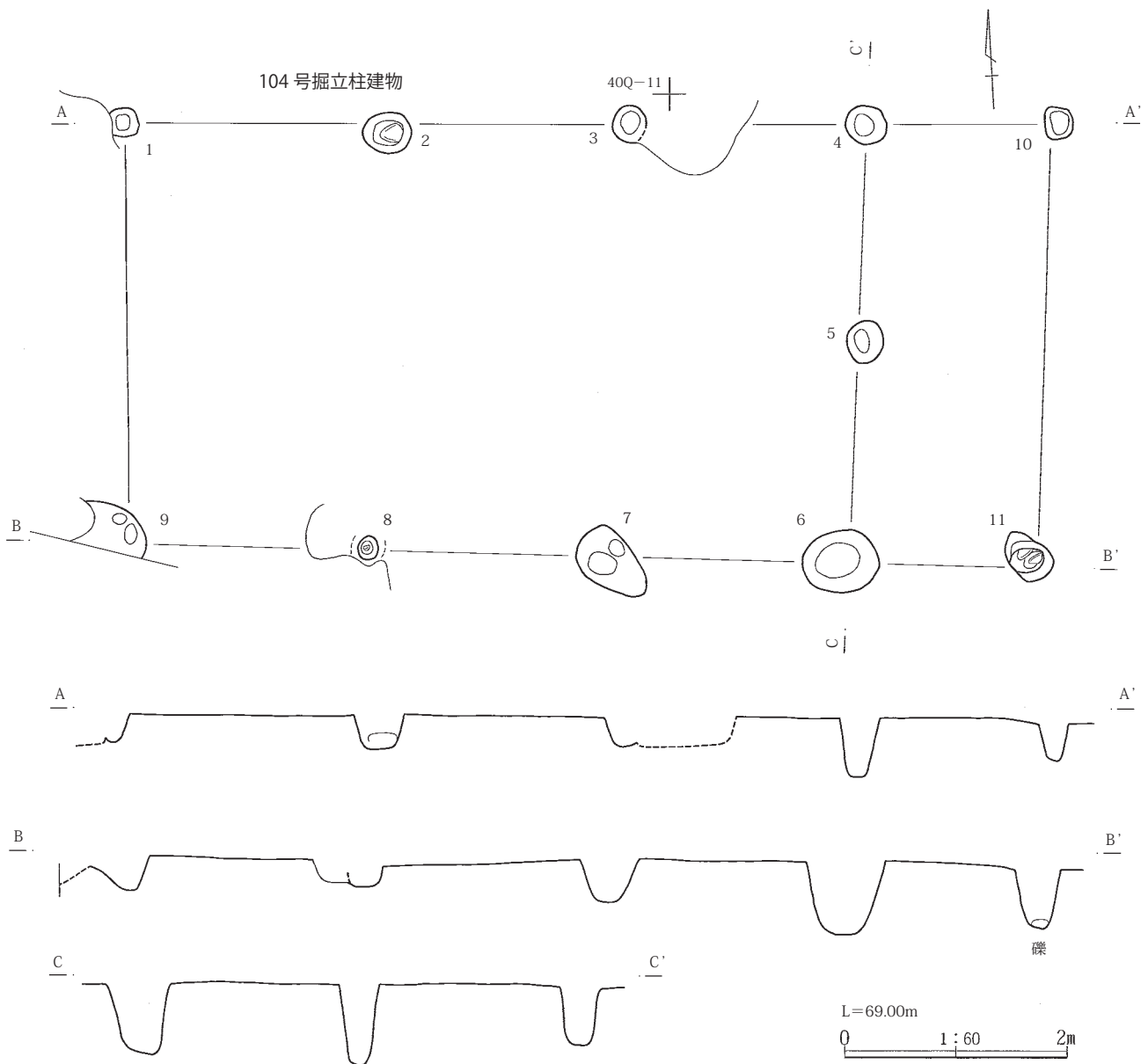
第111図 103号掘立柱建物

103号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	24 × 20 × 20.0	113建 - 1と僅かに重複。 古式土師片混入。
2	30 × 30 × 31.0	下層に小磔。
3	44 × 32 × 28.0	2基のピットか。
4	50 × (44) × 34.0	106建 - 2および 107建 - 5と重複。
5	44 × 28 × 60.0	107建 - 6と重複。
6	(24) × 25 × 65.5	倒木痕上。
7	48 × 47 × 36.5	中層東隅に小磔。
8	101 × (65) × 47.5	別遺構の中で輪郭不明瞭。
9	58 × (42) × 89.0	106建 - 5と重複。
10	49 × 45 × 51.5	
11	35 × 32 × 30.0	
12	22 × 18 × 20.5	中層に小磔。
13	22 × (20) × 12.0	
14	45 × (44) × 59.0	102建 - 6と僅かに重複。
15	60 × 42 × 43.5	別ピットとの重複あり。

104号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	25 × 25 × 24.5	111建 - 4と重複。
2	44 × 39 × 32.0	底面付近に平石。
3	34 × (30) × 27.0	
4	40 × 33 × 56.0	
5	40 × 33 × 71.5	
6	68 × 56 × 64.5	
7	75 × 48 × 59.0	
8	22 × 19 × 26.5	111建 - 8と重複。
9	50 × 35 × 31.0	
10	28 × 27 × 31.0	
11	47 × 35 × 48.0	底面付近に丸石2点。



第112図 104号掘立柱建物

105号掘立柱建物 (第113図)

概要 南側建物群の南東寄りにある。北東コーナーの柱穴は倒木痕のため把握できなかった。

位置 40 O・P-10・11 グリッド。

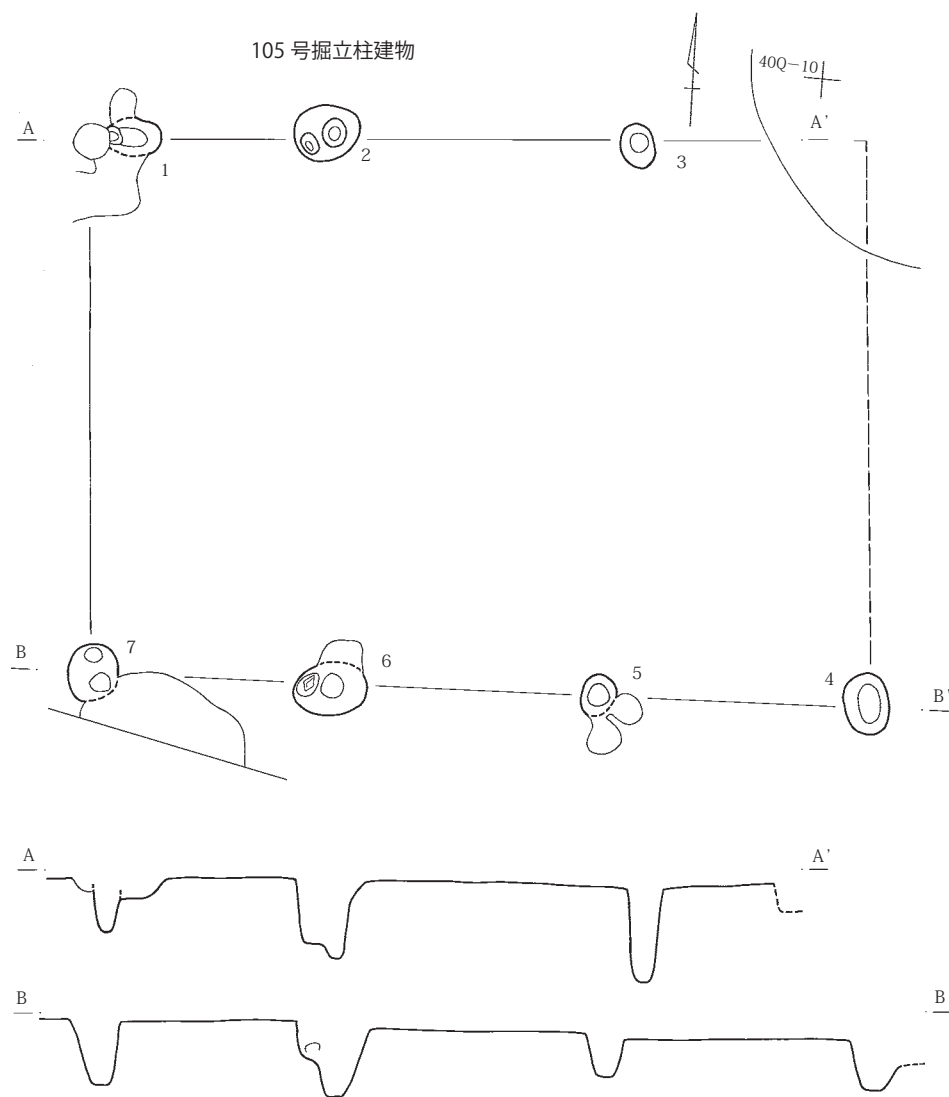
重複 101～104・106～110号の9棟の建物、および97号溝、61号土坑等と重複する。

形状規模 1間×3間の東西棟を想定した。柱間が均等でなく、特にP2-3間が広がっている。西梁間4.20m、南桁行6.11m、面積25.62㎡を測る。

軸方向 N-86°E

柱穴 小規模だが深い柱穴が多い。P2・P6は2重の柱穴で掘り直しの可能性も考慮したい。

所見 3類。



105号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	28×28×10.0	109建-5と重複。
2	52×44×61.0	2基のビット。
3	35×30×74.0	
4	50×35×42.0	97号溝と重複。
5	40×(30)×35.0	
6	60×40×55.0	中層に隣。
7	(45)×40×51.0	2基のビット。

L=69.00m

0 1:60 2m

第113図 105号掘立柱建物

106号掘立柱建物 (第114図)

概要 南側が調査区境にかかり、全容は把握できていない。

位置 40 O~Q-10・11 グリッド

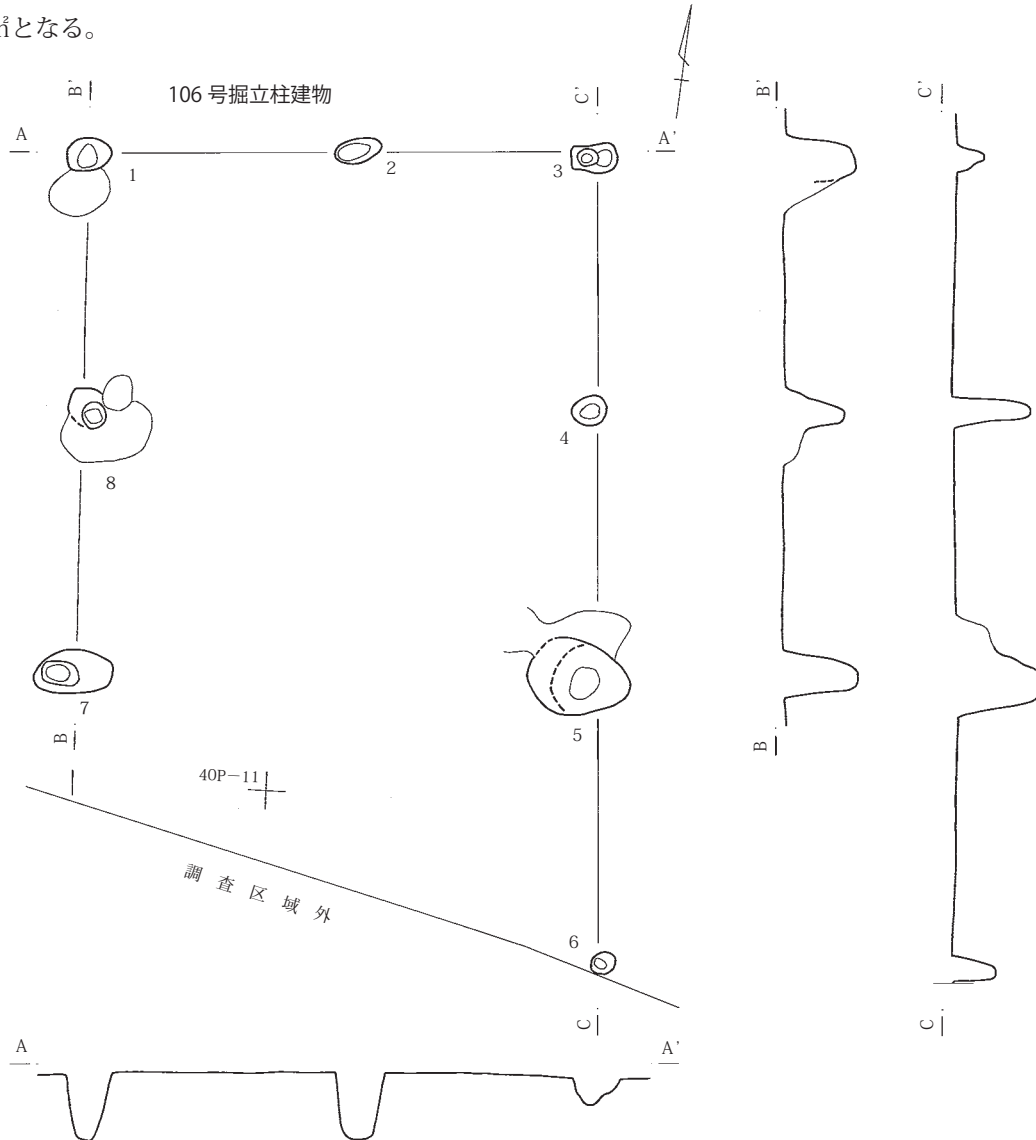
重複 103~105・107~112号の9棟の建物と重複する。

形状規模 2間×3間以上の南北棟である。2間×3間の建物とすると、北梁間4.10m、東桁行6.40mを測り、復元面積27㎡となる。

軸方向 N-2°W

柱穴 P5は柱穴間の重複で原形が分からなくなっている。全体に径・深さとも不揃いである。

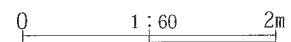
所見 4類。西館南寄りの南北棟には、他に108号建物があって、本建物と同位置に占地している。



106号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	41 × (30) × 53.0	112建-4と重複。
2	35 × 20 × 55.0	113建-4と重複。
3	36 × 23 × 20.0	
4	32 × 24 × 62.5	
5	(51) × 48 × 70.5	103建-9と重複。
6	20 × 18 × 30.5	
7	61 × 33 × 60.0	104建物の南側柱筋上。
8	(38) × 40 × 50.0	107建-9と重複。

L=69.00m



第114図 106号掘立柱建物

107号掘立柱建物 (第115図)

概要 南側建物群の中央にある。縦横比は1:3.2で西館内では最も細長い。

位置 40 P・Q-10~12グリッド。

重複 103~106・108~119号の16棟の建物との重複で、西館では109・110号建物と共に最も建物間の重複が多い。他に57号土坑等と重複する。

形状規模 1間×5間の東西棟だが、梁間が広いため1間×4間の建物(南館43号建物など)ほど細長くない。西梁間2.80m、南桁行9.00m、面積24.75㎡を測る。

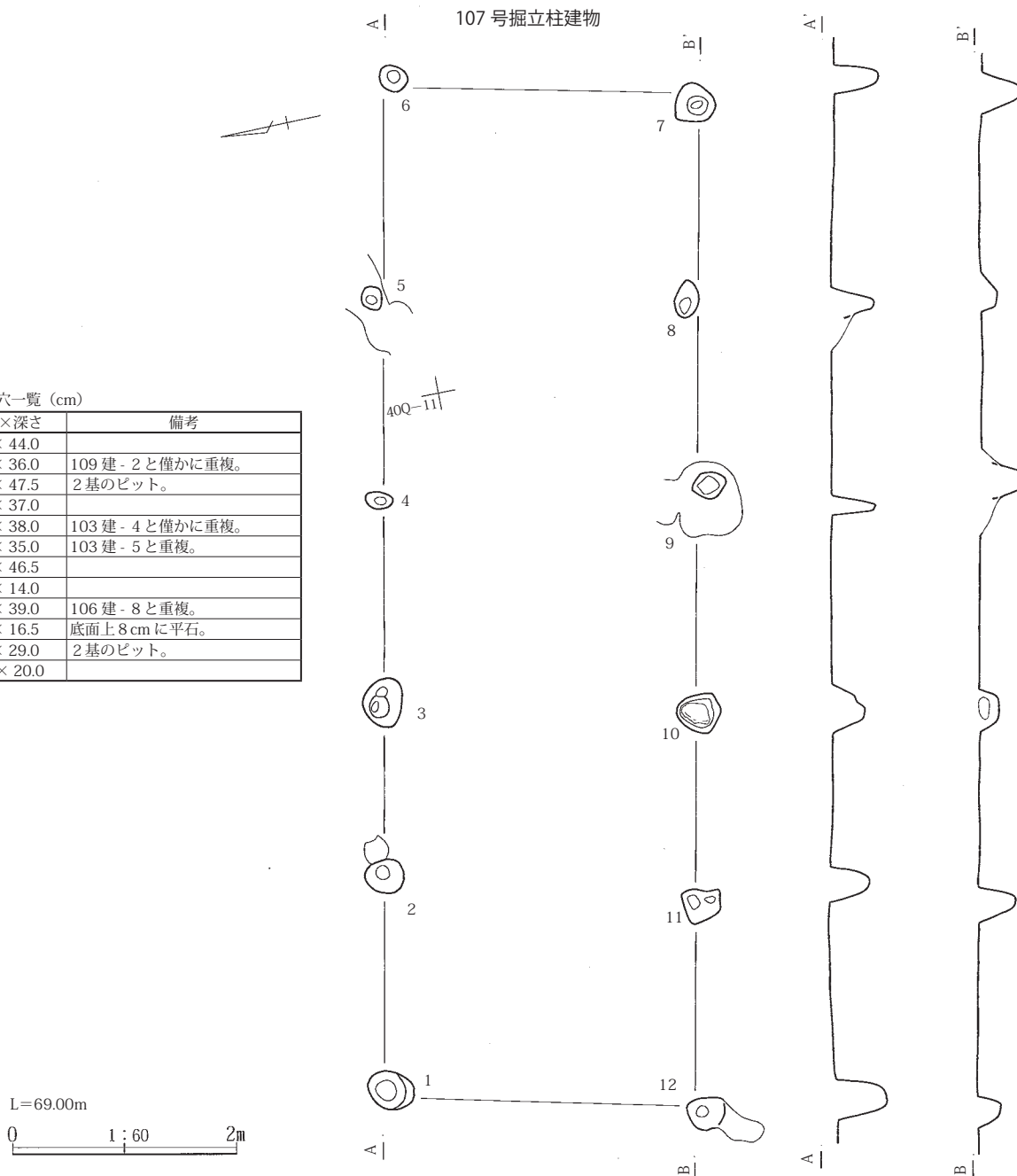
軸方向 N-78~79°W

柱穴 径・深さとも不揃いである。P10内の礫は底面よりやや浮いた状態だが、ほぼ水平である。

所見 6類。西館内の1間×5間の建物は、他に111号建物がある。

107号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	42×38×44.0	
2	35×30×36.0	109建-2と僅かに重複。
3	45×35×47.5	2基のビット。
4	24×17×37.0	
5	23×18×38.0	103建-4と僅かに重複。
6	30×25×35.0	103建-5と重複。
7	38×35×46.5	
8	33×23×14.0	
9	27×23×39.0	106建-8と重複。
10	40×39×16.5	底面上8cmに平石。
11	33×31×29.0	2基のビット。
12	(35)×31×20.0	



第115図 107号掘立柱建物

108号掘立柱建物 (第116図)

概要 南側建物群の中央南寄りにあるが、南隅が調査区域外にかかり、全容は把握できていない。

位置 40 O~Q-10・11 グリッド。

重複 103~107・109~113号の10棟の建物および57号土坑等と重複する。

形状規模 確認できた範囲では北辺2間、東辺3間以上の南北棟となる。北梁間4.50m、東桁行6.4mを測り、2間×3間で復元した面積は28.80㎡になる。

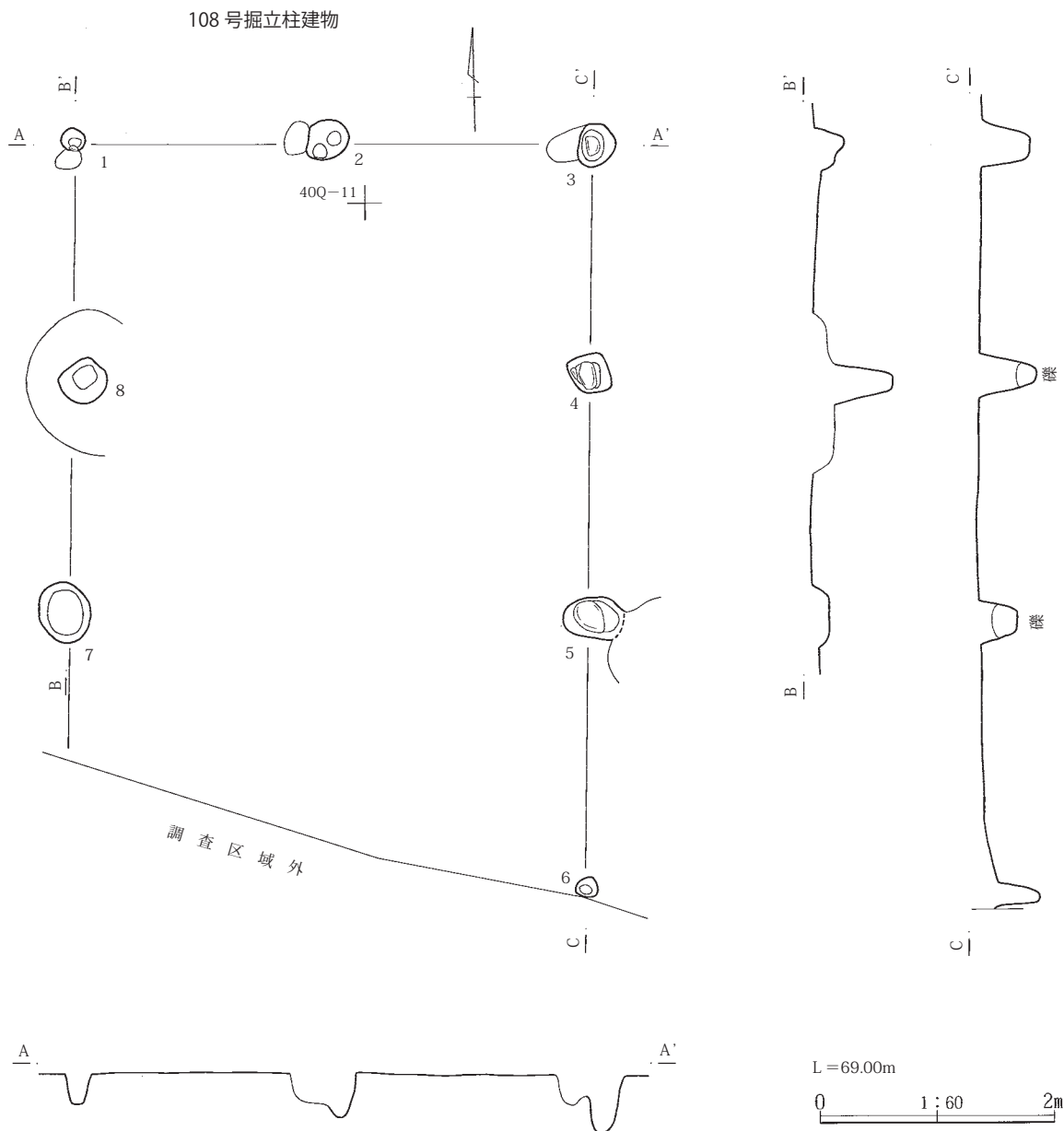
軸方向 N-1~3°E

柱穴 P3~5の東側に並ぶ3本の柱穴底面に、底径いっぱいの大きめな川原石が据えられていた。P8は57号土坑の中央に穿たれている。

所見 4類。

108号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	20×18×25.0	
2	40×35×41.0	2基のピット。
3	38×32×50.5	底面に川原石。
4	36×35×47.5	底面に川原石。
5	(53)×36×32.0	底面に川原石。
6	21×16×36.5	
7	50×43×15.5	浅く不明瞭。
8	38×38×71.5	57号土坑内。



第116図 108号掘立柱建物

109号掘立柱建物 (第117図)

概要 南側建物群の中央にある。

位置 40 P・Q-10~12グリッド

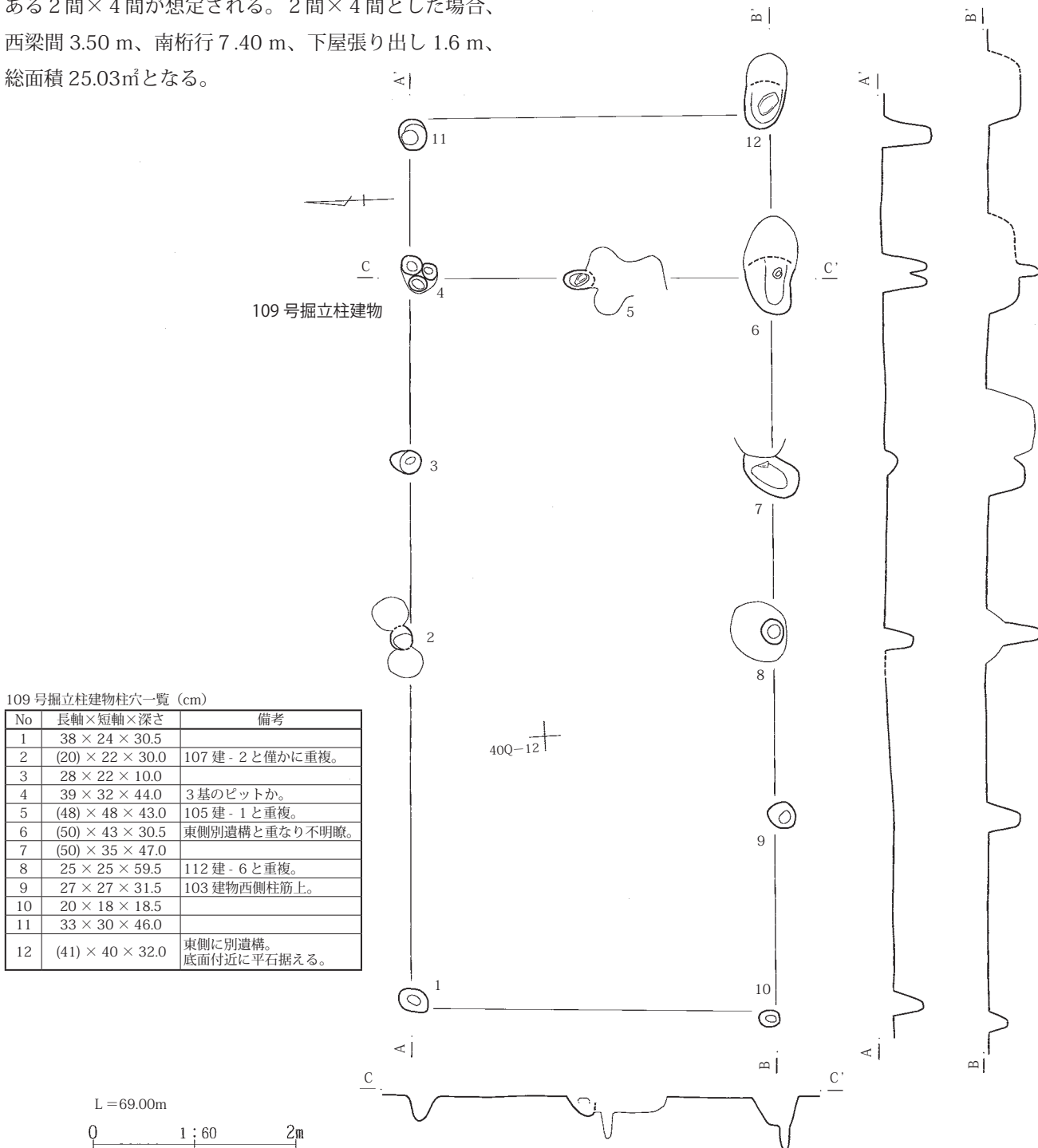
重複 103~108・110~119号の16棟の建物との重複で、西館内では107・110号建物と共に最も建物間の重複が多い。他に51・57号土坑等と重複する。

形状規模 2間×5間の東西棟、あるいは東側に下屋のある2間×4間が想定される。2間×4間とした場合、西梁間3.50m、南桁行7.40m、下屋張り出し1.6m、総面積25.03㎡となる。

軸方向 N-86°W

柱穴 重複で不明瞭になった柱穴が多いが、細く深い柱穴が目立つ。P12は底面から少し浮いた位置に平石が置かれ、他の柱穴とは様相を異にしている。

所見 4類。107号建物とは形状が近似するが、軸方向が異なっている。



109号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	38×24×30.5	
2	(20)×22×30.0	107建-2と僅かに重複。
3	28×22×10.0	
4	39×32×44.0	3基のピットか。
5	(48)×48×43.0	105建-1と重複。
6	(50)×43×30.5	東側別遺構と重なり不明瞭。
7	(50)×35×47.0	
8	25×25×59.5	112建-6と重複。
9	27×27×31.5	103建物西側柱筋上。
10	20×18×18.5	
11	33×30×46.0	
12	(41)×40×32.0	東側に別遺構。底面付近に平石据える。

第117図 109号掘立柱建物

110号掘立柱建物 (第118図)

概要 南側建物群の北寄りにある。

位置 40 P・Q-10~12グリッド。

重複 103~109・111~119号の16棟の建物との重複で、西館内では109・110号建物と共に最も建物間の重複が多い。他に62・63・88・89号土坑と重複する。

形状規模 1間×4間の東西棟である。梁間が長く、縦横比はおおよそ1:2で、重複する107・109号ほど細長いプランではない。

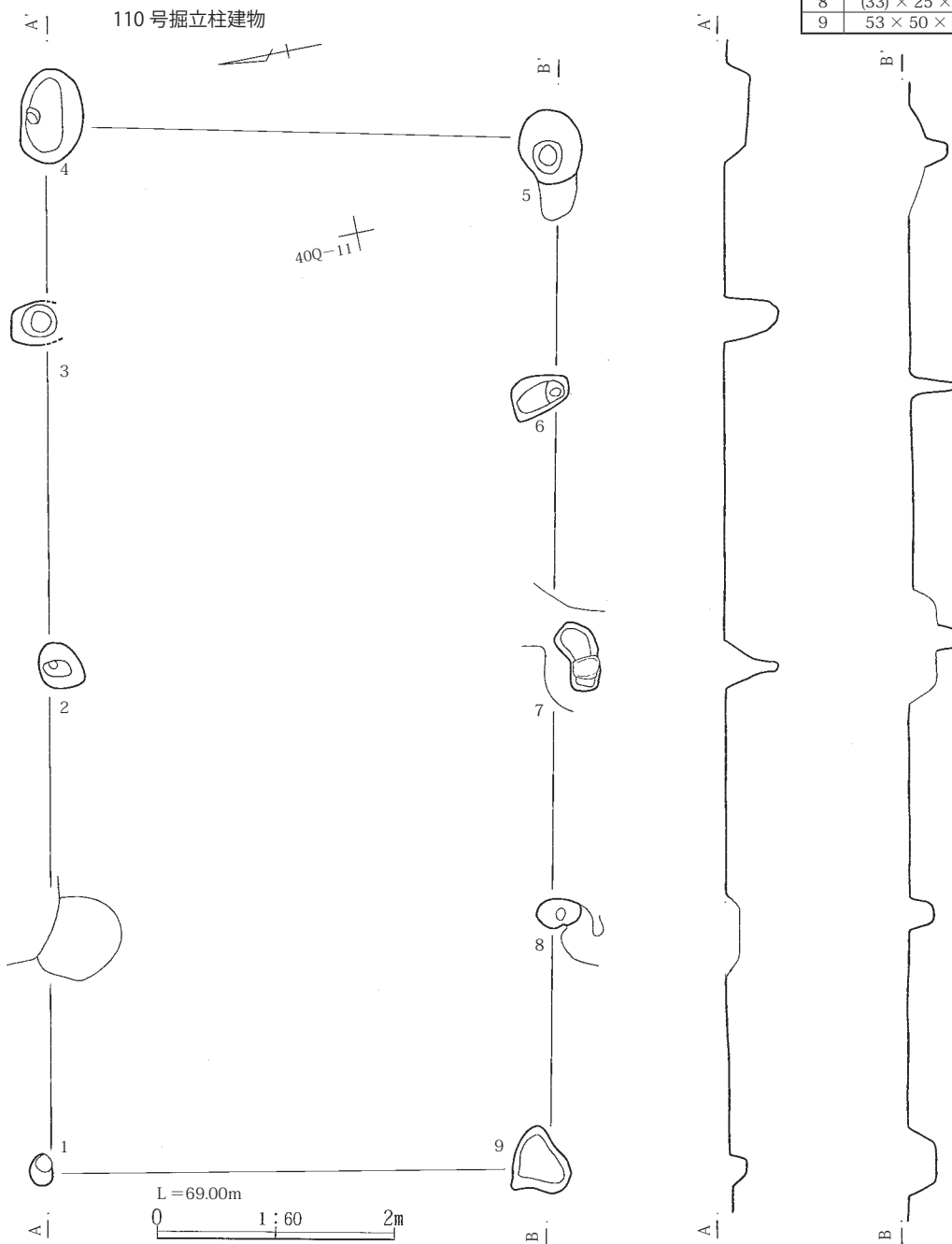
軸方向 N-78~81°W

柱穴 P5のように上面の径は広いが、底面付近では細長く深い柱痕状の窪みが見られる柱穴が目立つ。

所見 6類。109号建物同様、深く細い柱穴が主体だったと思われる。

110号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	28×22×11.0	
2	45×33×45.0	116建物東側柱筋上。
3	30×30×44.0	63号土坑と重複。
4	82×52×36.0	
5	(70)×55×32.5	
6	52×35×41.0	113建・4と重複。
7	60×35×41.5	土坑状の窪み上。2基のピットか。
8	(33)×25×17.0	
9	53×50×22.0	



第118図 110号掘立柱建物

111号掘立柱建物 (第119図)

概要 2a区南隅にあり、南西側が調査区境にかかり、全容は把握できていない。

位置 40P-11・12グリッド。

重複 103・104・106～110・112～116号の12棟の建物の他、51・57号土坑等と重複する。

形状規模 南側柱筋の西側3本の柱穴が調査区域外に延びるようで、完掘できていない。確認できた範囲では1間×5間以上の東西棟である。縦横比1:2.8で、梁間の広さを考慮するときわめて細長い建物である。建物規模を1間×5間とした場合、東梁間3.80m、北桁行10.80mを測り、復元面積は41.04㎡になる。

軸方向 N-86°W

柱穴 P7など細く深いもの、P8など広く浅いもの、P3など細く浅いものが混在している。

所見 4類。縦横比1:2.8で、梁間の広さを考慮するときわめて細長い建物である。

112号掘立柱建物 (第120図)

概要 南側建物群の中央やや西寄りにある。

位置 40P・Q-11・12グリッド。

重複 103・104・106～111・113～117号の13棟の建物と重複する。西梁間2.40mで東側より30cm長い。南桁行5.30m、面積12.96㎡を測る。

形状規模 1間×3間の小規模な東西棟である。南梁間5.35m、西梁行2.30m、面積12.96㎡を測る。

軸方向 N-77～80°W

柱穴 東側ほど広くなる傾向がある。P6は本建物の柱穴であるか確実でない。

所見 6類。

113号掘立柱建物 (第120図)

概要 南側建物群のやや西寄りにある。西辺・北辺は103号建物柱筋に近接している。

位置 40P・Q-11・12グリッド。

重複 103・104・106～112・114～116号の12棟の建物と重複する。

形状規模 1間×2間の小型正方形建物である。西辺3.80m、南辺3.60m、面積13.86㎡を測る。

軸方向 N-86～88°W

柱穴 6本とも径が小さい。浅いP1を除いて形状は類似している。

所見 4類。

114号掘立柱建物 (第121図)

概要 2a区の南西隅にある大型建物で、南西側が調査区域外にかかり、全容は把握できていない。南北の柱筋は111号建物の南北柱筋と重なり、柱穴間の重複も多い。

位置 40P・Q-11～13グリッド。

重複 103・104・106～113・115・117号の12棟の建物の他に、51・55・57号土坑とも重複する。

形状規模 梁間2間以上、桁行5間以上の東西棟総柱建物である。2間×5間の場合の東梁間3.65m、北桁行9.50mを測り、復元面積は34.68㎡になる。

軸方向 N-87°W

柱穴 細く深い柱穴が目立つ。

所見 4類。本遺跡内での桁行5間の総柱建物には、他に変則的な38号建物がある。

115号掘立柱建物 (第122図)

概要 南側建物群の西寄りにある。

位置 40P-11・12グリッド。

重複 103・104・106～114・116・117号の13棟の建物の他、51・88・111号土坑と重複する。

形規模状 2間×3間の南北棟側柱建物である。南柱筋内の柱穴が確認できない。北東コーナー柱穴の位置には不明瞭な窪みがあるが、想定される部分の深さは5cmで、明確な柱穴は存在しない。南梁間3.60m、西梁行5.60mを測り、復元面積は20.16㎡になる。

軸方向 N-3°W

柱穴 細い柱穴が目立つ。P7は柱材を打ち込んだような痕跡である。

所見 4類。

116号掘立柱建物 (第122図)

概要 南側建物群の北寄りにある。

位置 40Q-11・12グリッド。

重複 103・107～110・113・115号の7棟の建物の他、7号竪穴状遺構・62号土坑と重複する。

形状規模 1間×2間の小型正方形建物で、柱穴も小規

模である。南梁間 3.30 m、西桁行 3.53 m で僅かに長い梁方向が 2 間となっている。面積 44.65㎡を測る。

軸方向 N - 2° E

柱穴 6 本とも小規模である。東側の柱穴は底面が 2 段になっており、建て替えの痕跡の可能性がる。

所見 4 類。

117 号掘立柱建物 (第 123 図)

概要 南側建物群の西寄りにある。本遺跡で最も面積の少ない小型建物である。

位置 40 P・Q - 12・13 グリッド。

重複 111・112・114・115 号建物と重複する。

形状規模 1 間×2 間の南北棟である。西梁間 2.30 m、南桁行 4.20 m、面積 9.66㎡を測る。

軸方向 N - 78 ~ 80° E

柱穴 6 本とも細い柱穴だが、深さは不揃いである。

所見 3 類。西館内では軸方向が最も西側に振れる孤立した建物である。

118 号掘立柱建物 (第 124 図)

概要 南側建物群中、最も北側にある。北辺を除く 3 辺が 119 号建物の 3 辺に近接している。

位置 40 Q - 10・11 グリッド。

重複 109・113・116・119 号建物の他、8・63・64・151 号土坑と重複する。

形状規模 1 間×3 間の東西棟で、南・北の両柱筋で柱穴が 1 本ずつ確認できていない。西梁間 3.3 m、南桁行 5.55 m、面積 15.15㎡を測る。

軸方向 N - 85 ~ 86° E

柱穴 細く浅い不明瞭な柱穴である。

所見 3 類。

119 号掘立柱建物 (第 124 図)

概要 南側建物群の北隅にある。

位置 40 Q - 10・11 グリッド。

重複 109・116・119 号建物の他、8・63・64・号土坑と重複する。

形状規模 118 号建物と同様の 1 間×3 間の東西棟で、118 号建物で確認できなかった位置と同様の柱穴が確認できていない。西梁間 2.40 m、南桁行 5.55 m、面

積 13.79㎡を測る。

軸方向 N - 83 ~ 85° E

柱穴 6 本とも細いが深さは不揃いで、コーナー柱穴は深い。P 3 は南西側へオーバーハングしている。

所見 3 類。

120 号掘立柱建物 (第 123 図)

概要 北側建物群の南隅、西辺が 42 号溝に接する位置にある。土坑群を跨いでおり、全ての柱穴が土坑等と重複している。

位置 40 R・S - 11・12 グリッド。

重複 11 ~ 15・145 ~ 147 号土坑と重複する。北西隅は 122 号建物と近接するが、建物間の重複はない。

形状規模 1 間×2 間の正方形建物だが、台形状に歪んでいる。西辺は 3.80 m で東辺より 40cm 長い。南辺は 3.30 m で北辺より 20cm 短い。面積は 12.24㎡を測る。

軸方向 N - 81 ~ 87° W

柱穴 やや細く浅めの柱穴で、P 3 以外は揃っている。

所見 6 類。

121 号掘立柱建物 (第 125 図)

概要 北側建物群のうち、最も東側にある。

位置 40 R ~ T - 9 ~ 11 グリッド。

重複 北側の張り出し部分が 42 号溝を跨ぎ、北西隅の 124 号建物とわずかに重複する。身屋部分は 42 号溝とわずかに重複するが、他の建物との重複はない。97 号溝を跨ぎ、86 号井戸、16・143 号土坑・8 号堅穴状遺構等と重複する。

形状規模 1 間×3 間の東西棟で、南辺の 1 柱穴が確認できなかった。北側に張り出し施設をもつ。西梁間 4.20 m で、東側より 25 cm 短い。南桁行 7.00 m、身屋部分面積 30.59㎡を測る。張り出し部は西側 3.60 m、東側 2.05 m の規模である。

軸方向 N - 81 ~ 87° W

柱穴 全体にやや大きめの柱穴である。P 5 は本建物に伴うか不明である。

所見 6 類。本建物の張り出し施設は調査区内に例がない。建物北側の 99 号溝が南へ屈曲した部分にある窪みと関連するものとする。

122号掘立柱建物 (第126図)

概要 北側建物群の西隅にある。

位置 40 S・T-12 グリッド。

重複 120・123号建物と柱筋を接しているが、建物間の重複はない。42・98号溝を跨いでいる。

形状規模 2間×3間の南北棟である。南梁間3.90m、西桁行5.85m、面積23.24㎡を測る。

軸方向 N-1°W~1°E

柱穴 大きさ・深さとも不揃いである。最も大きいP6は別遺構との重複もしくは抜柱痕を含む可能性があり、P3・5は浅く不明瞭な施設である。

所見 4類。

123号掘立柱建物 (第126図)

概要 北側建物群の北隅にある。西館の北外堀から1.5m南側にある。

位置 40 S・T-11・12 グリッド。

重複 124・125号建物と重複し、81号土坑が柱筋にかかっている。97号溝隅と重複し98号溝を跨いでいる。

形状規模 南北棟であるが、1間×1間の建物北側に下屋が付くのか、変則的な1間×2間の建物となるか判断できなかった。南側は柱間が広く桁行3間の規模である。南辺が北辺より30cm長く、台形気味に歪んでいる。南辺4.8m、西辺5.95m、面積28.56㎡を測る。

軸方向 N-1°W~3°E

柱穴 大きさ・深さとも不揃いである。

所見 4類。

124号掘立柱建物 (第127図)

概要 北側建物群の北寄りにある。

位置 40 S・T-10・11 グリッド。

重複 121・123・125号建物および118号土坑と重複する。南側柱筋は98号溝上にある。

形状規模 東辺中央の1柱穴を欠くが、2間×3間の総柱東西棟を想定した。P9の西側への偏りが大きい。西辺3.53m、南辺6.45m、面積22.54㎡を測る。

軸方向 N-86°E

柱穴 P9は浅く不明瞭である。規模は小さめで、深さも比較的揃っている。

所見 3類。

125号掘立柱建物 (第127図)

概要 北側建物群の北寄りにある。

位置 40 S・T-11 グリッド。

重複 123・124号建物と重複する。

形状規模 1間×2間の東西棟で、北側柱筋の柱穴が確認できていない。西梁間3.30m、南桁行4.25m、面積14.02㎡を測る。

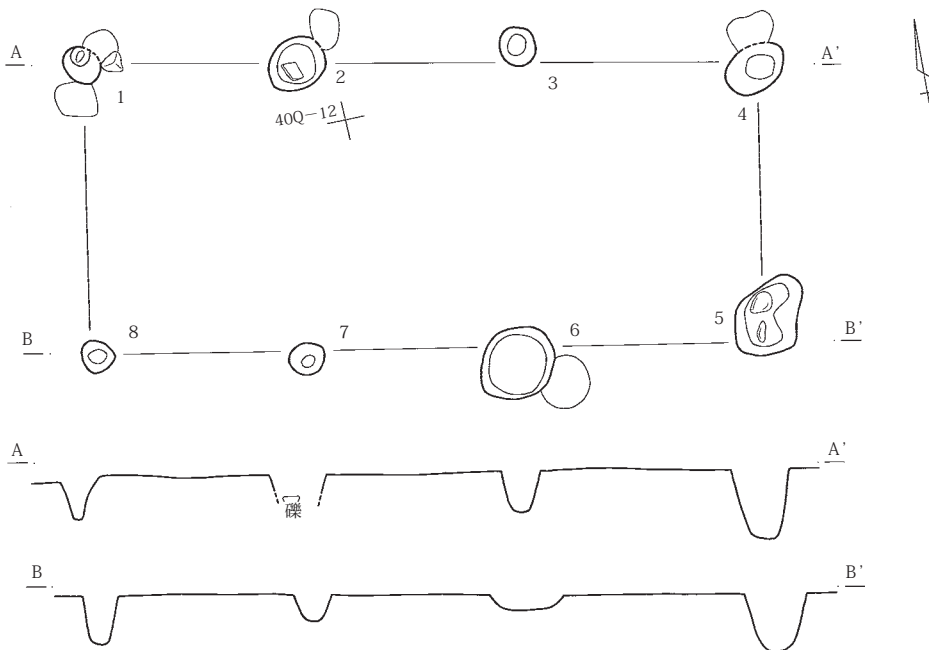
軸方向 N-83°E

柱穴 北側の柱穴が浅く不明瞭である。

所見 3類。

II 発掘調査の記録

112号掘立柱建物



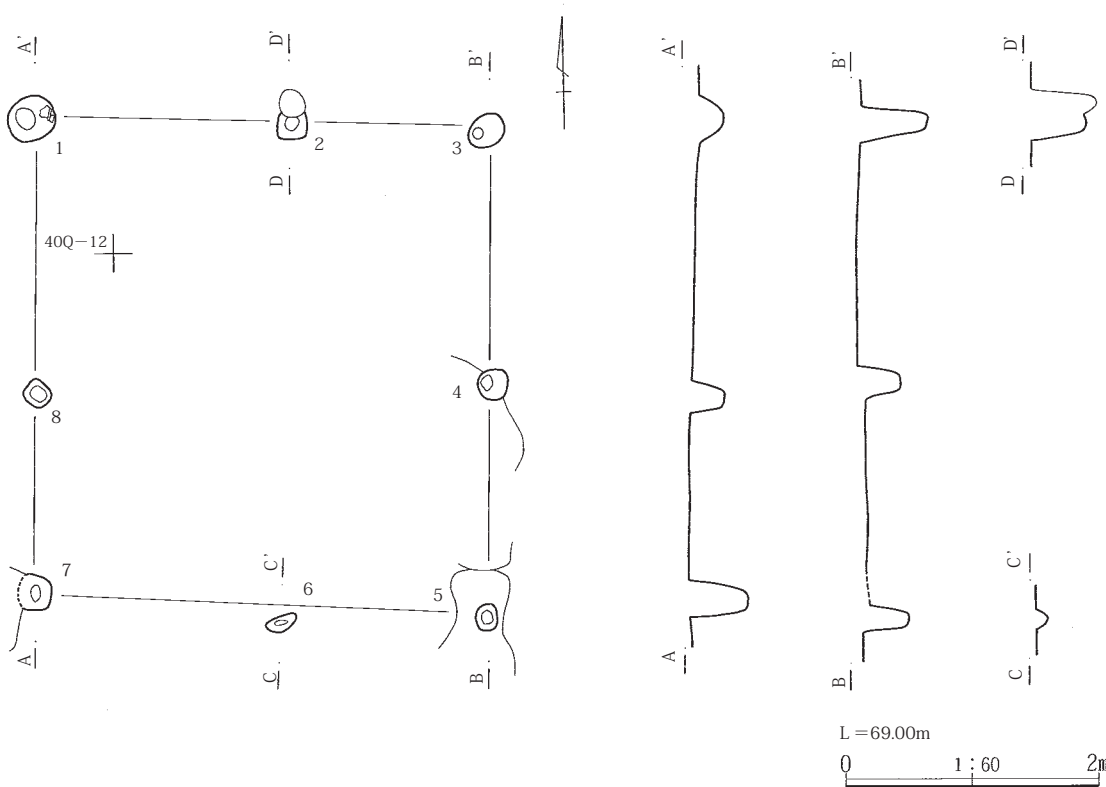
112号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	33 × (22) × 36.0	
2	47 × 43 × (29.5)	底面付近に細かな碟。
3	30 × 28 × 32.5	116建 - 3と僅かに重複。
4	52 × (39) × 57.5	106建 - 1と重複。
5	70 × 53 × 45.0	2基のピットか。下層に碟。
6	60 × 56 × 14.5	109建 - 8と重複。
7	(38) × 35 × 21.0	
8	37 × 30 × 39.5	114建 - 12と僅かに重複。

113号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

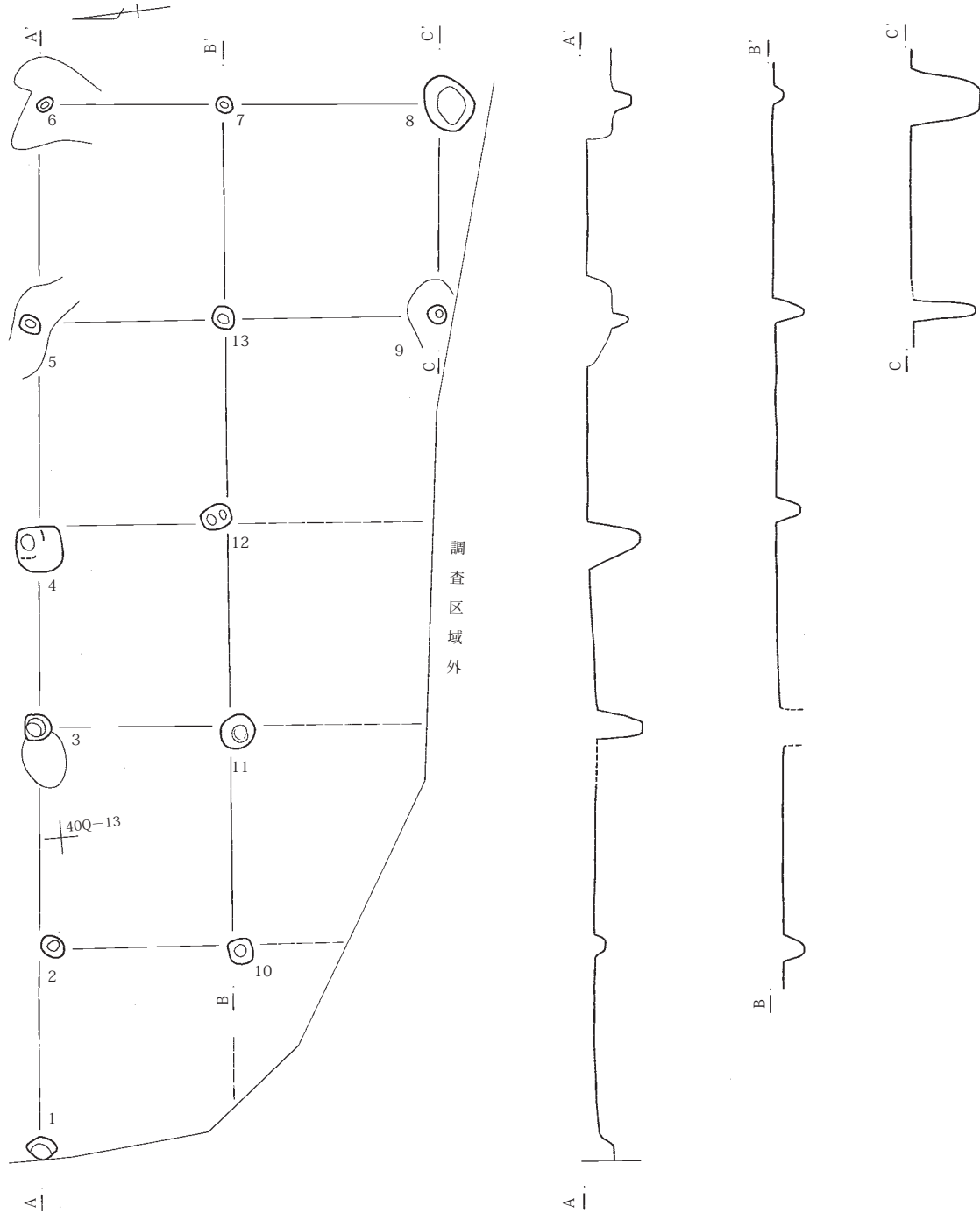
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	40 × 35 × 21.0	103建 - 1と僅かに重複。
2	24 × (18) × 42.0	
3	30 × 26 × 54.0	
4	24 × 23 × 35.0	57号土坑と重複。
5	20 × 18 × 42.0	
6	27 × 13 × 9.5	
7	(28) × 28 × 47.5	
8	22 × 20 × 27.0	

113号掘立柱建物



第120図 112号・113号掘立柱建物

114号掘立柱建物

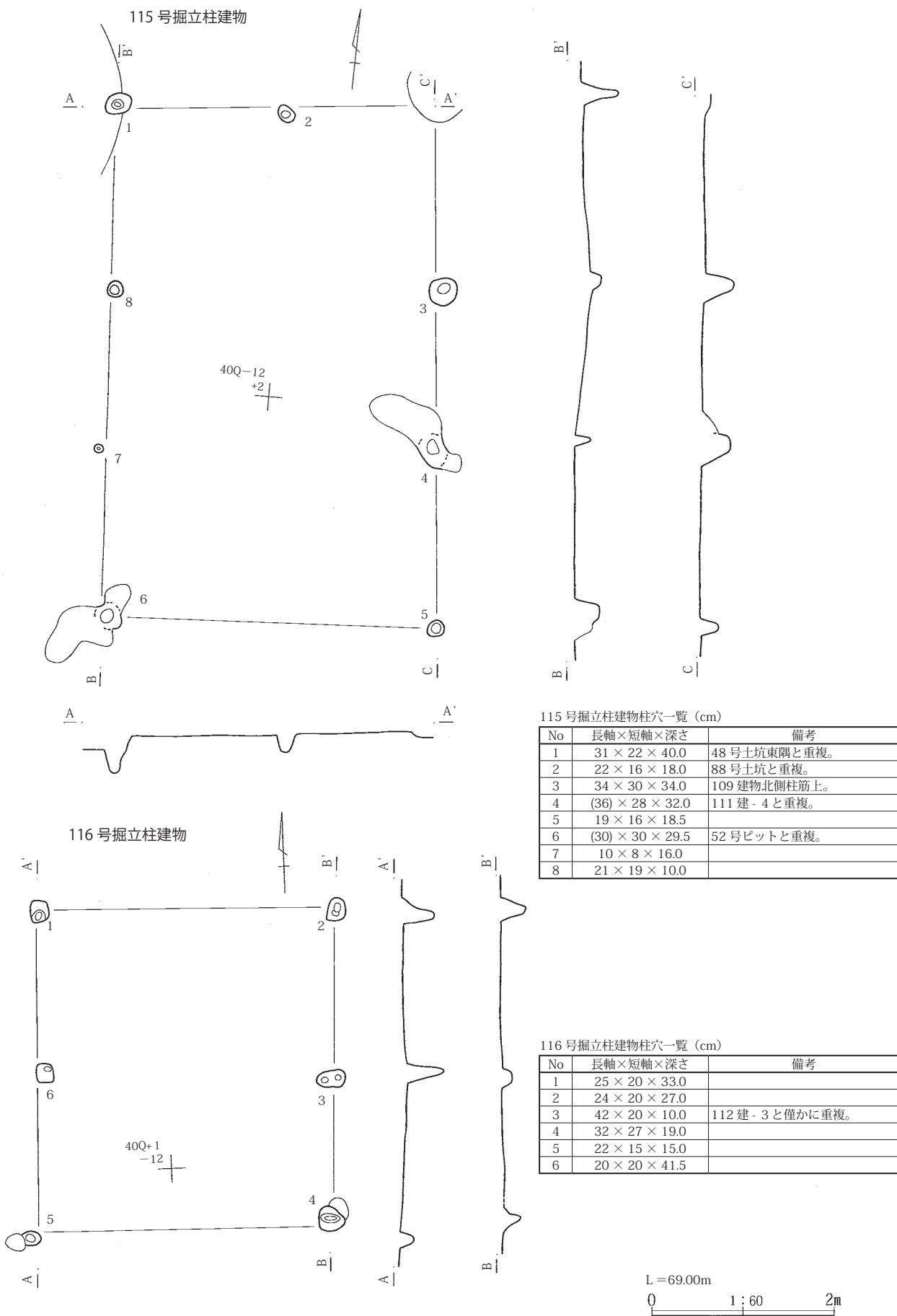


114号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

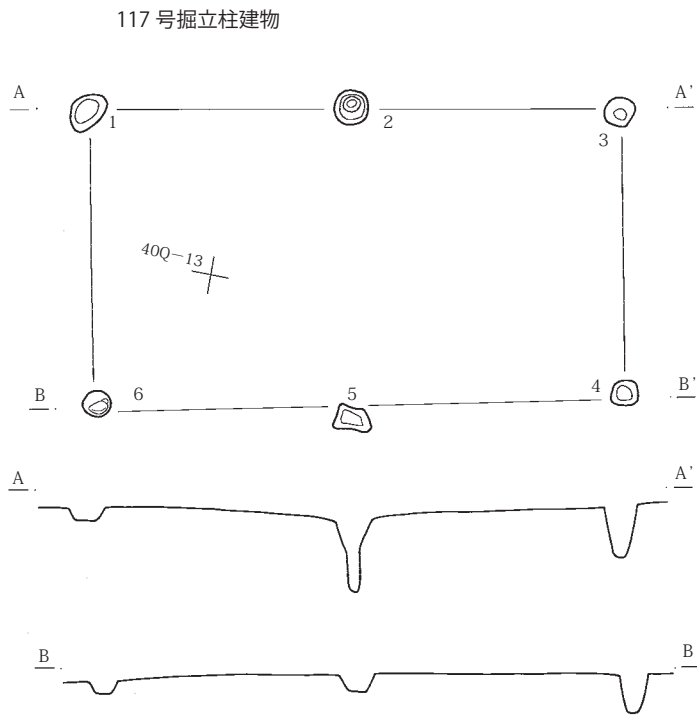
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	35 × 20 × 10.0	
2	20 × 20 × 9.0	
3	24 × 23 × 42.0	111建 - 2と重複。
4	30 × 23 × 48.5	111建 - 3と重複。
5	20 × 16 × 36.5	111建 - 4と重複。
6	18 × 13 × 42.5	土坑状の窪み上。中層に磔。
7	16 × 15 × 9.0	
8	50 × 43 × 63.0	104建物南側柱筋上。
9	22 × 18 × 58.5	111建 - 9と重複。
10	23 × 20 × 18.0	
11	30 × 30 × 18.0	
12	30 × 21 × 22.0	112建 - 8と僅かに重複。
13	20 × 18 × 26.0	

第121図 114号掘立柱建物

II 発掘調査の記録

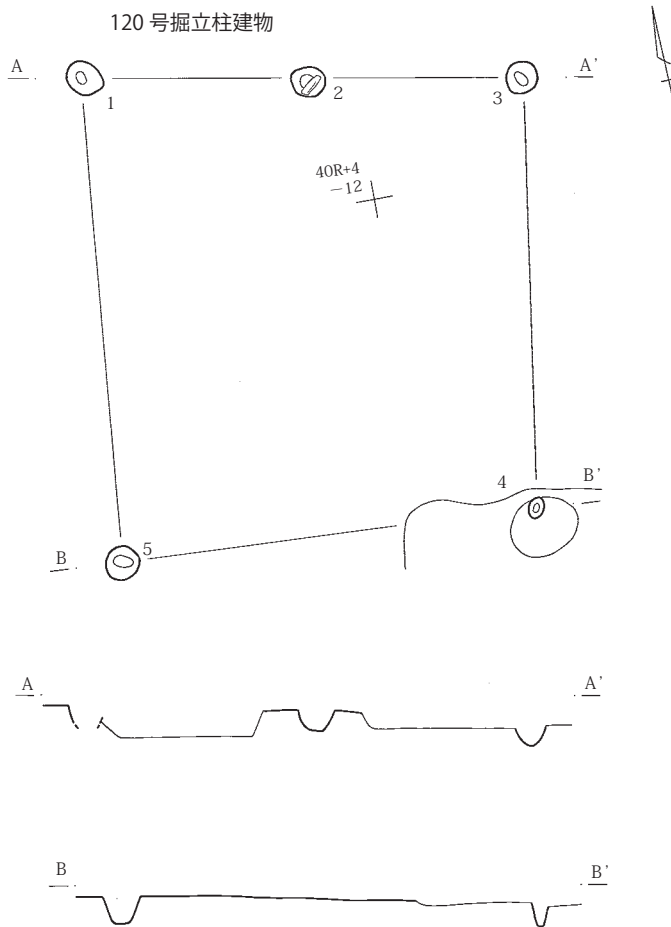


第122図 115号・116号掘立柱建物



117号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

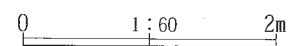
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	38 × 26 × 9.0	
2	28 × 27 × 57.5	
3	24 × 22 × 42.0	
4	22 × 20 × 30.5	110 建物南側柱筋上。
5	22 × 15 × 15.0	115 建物東側柱筋上。
6	22 × 22 × 15.0	底面に平石。



120号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	32 × 26 × -	146号土坑と重複。
2	28 × 23 × 11.0	
3	23 × 23 × 28.0	145号土坑と重複。
4	16 × 13 × 27.0	7号竖穴状遺構と重複。
5	30 × 24 × 24.0	7号土坑と重複

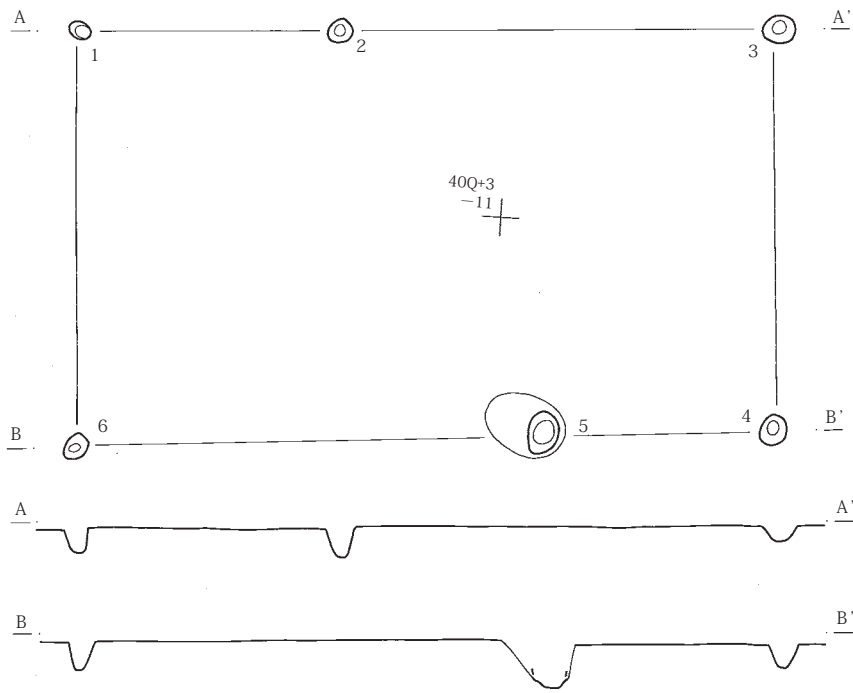
L = 69.00m



第123図 117号・120号掘立柱建物

II 発掘調査の記録

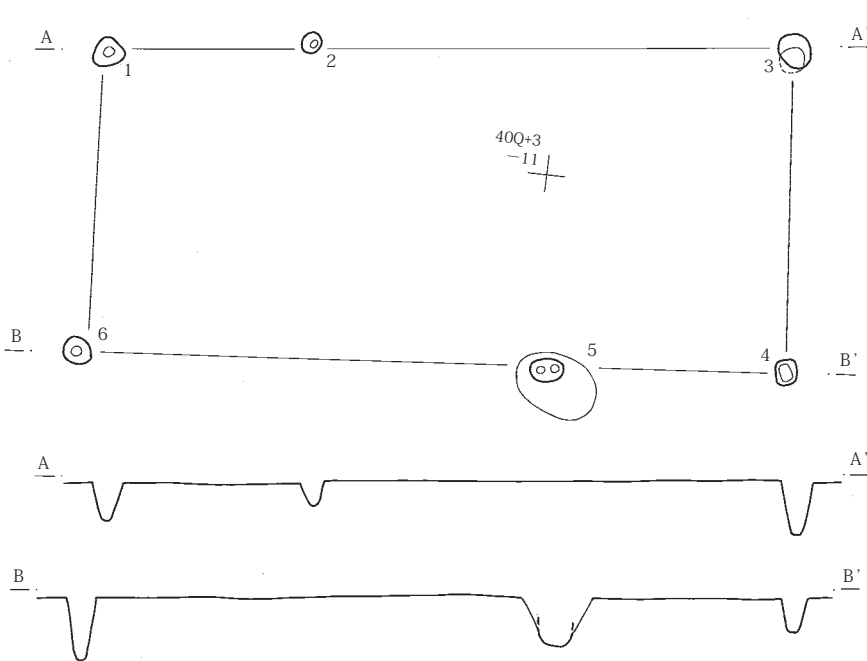
118号掘立柱建物



118号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	18 × 12 × 17.0	7号竪穴状遺構と重複。
2	20 × 18 × 22.0	
3	24 × 22 × 11.5	
4	23 × 22 × 18.0	
5	36 × 25 × 35.0	119建 - 5と僅かに重複。
6	20 × 16 × 23.0	

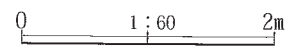
119号掘立柱建物



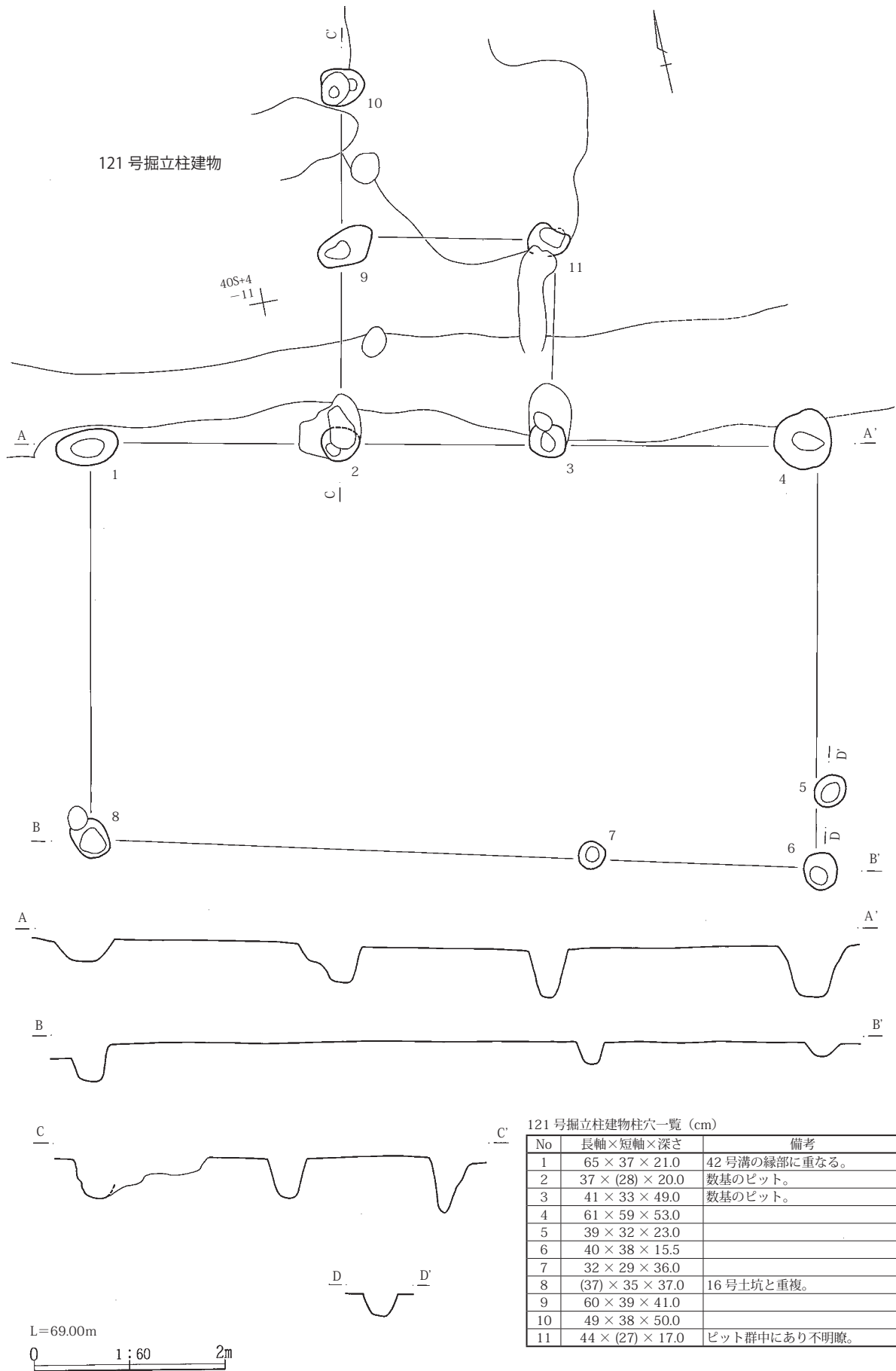
119号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	24 × 20 × 30.0	
2	18 × 16 × 17.0	
3	28 × 24 × 44.5	
4	19 × 18 × 31.0	
5	25 × 18 × 35.0	118建 - 5と僅かに重複。
6	25 × 20 × 52.0	113建 - 2と重複。

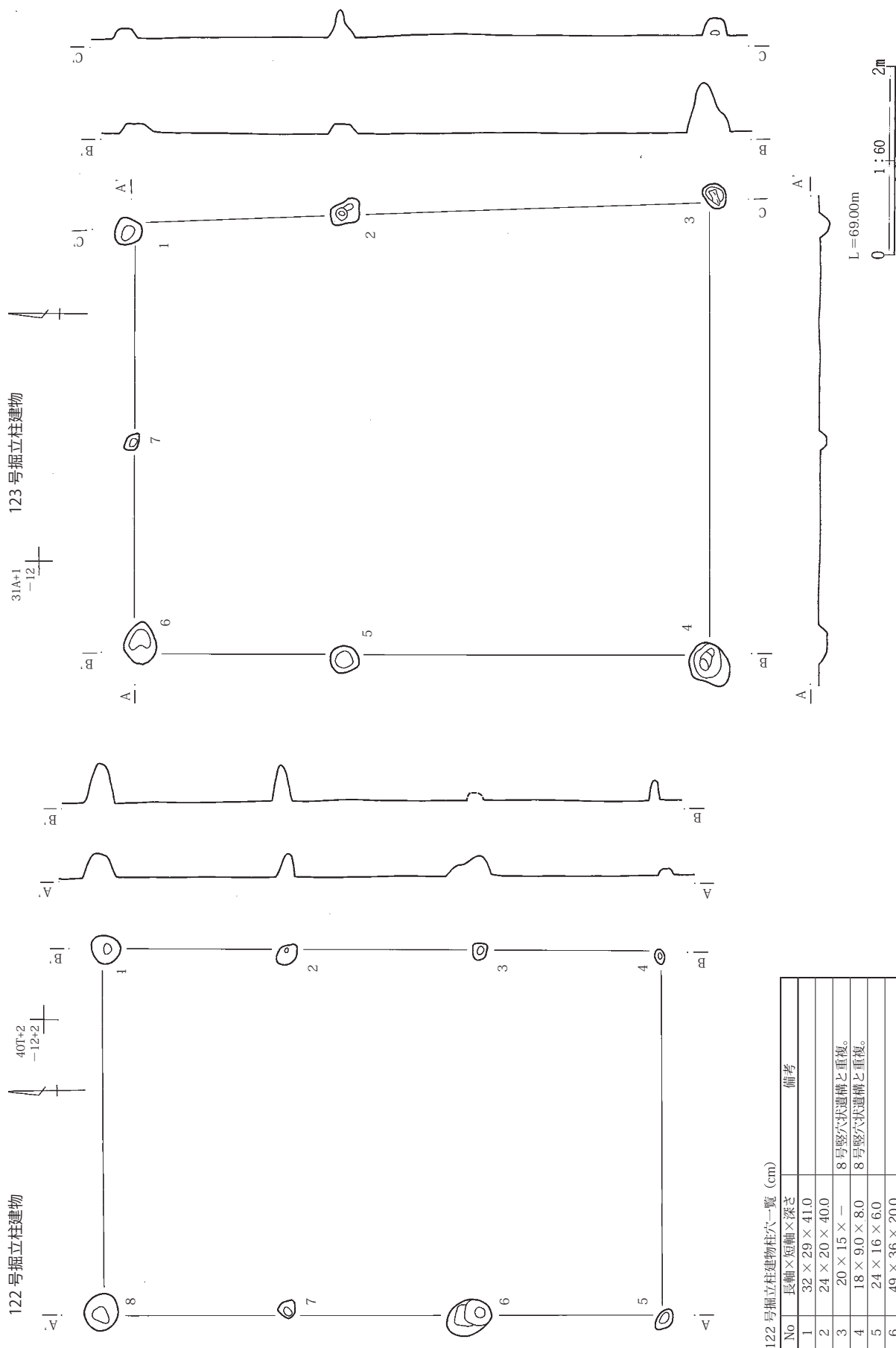
L = 69.00m



第124図 118号・119号掘立柱建物



第125図 121号掘立柱建物

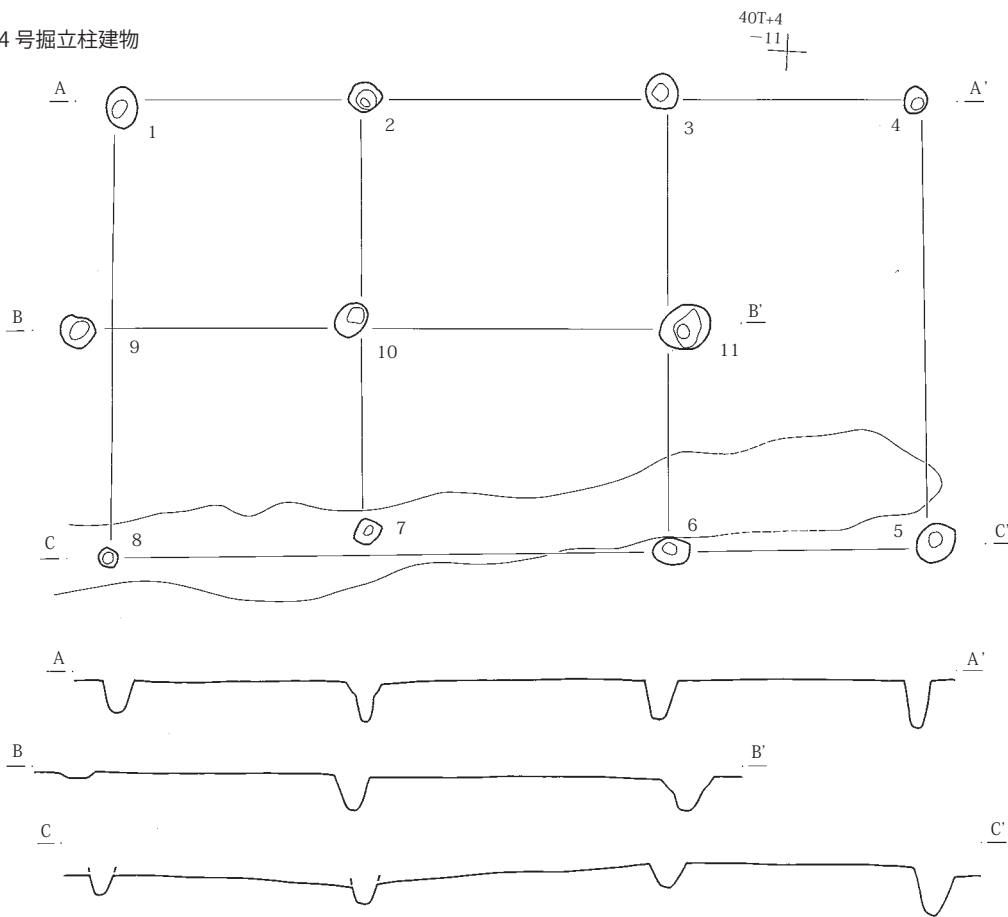


122号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

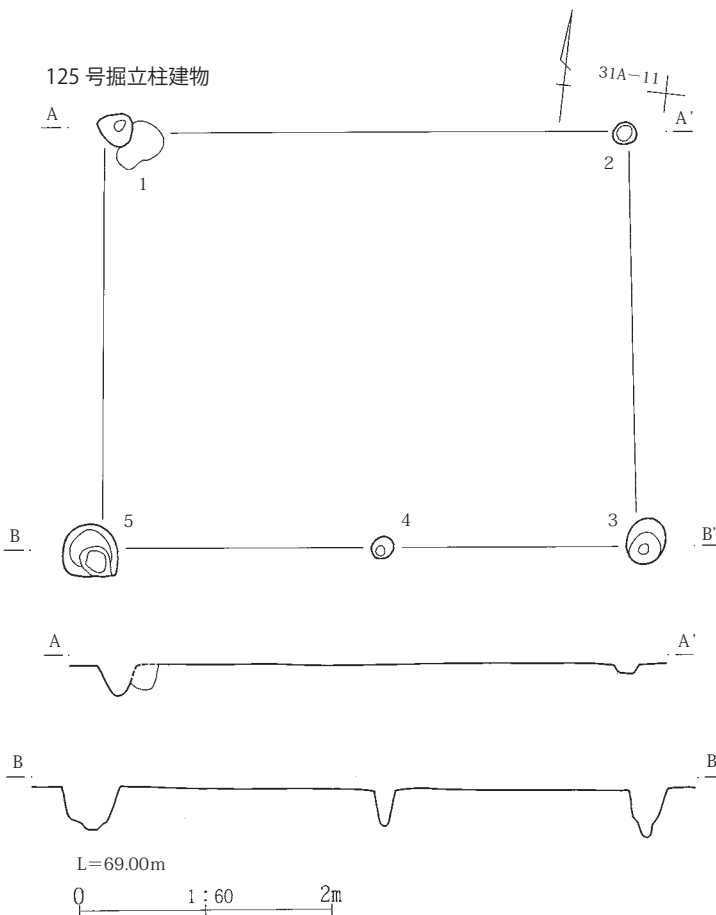
No	長軸×短軸×深さ	備考
1	32 × 29 × 41.0	
2	24 × 20 × 40.0	
3	20 × 15 × -	8号竪穴状遺構と重複。
4	18 × 9.0 × 8.0	8号竪穴状遺構と重複。
5	24 × 16 × 6.0	
6	49 × 36 × 20.0	
7	19 × 17 × 22	
8	38 × 34 × 26.0	

第126図 122号・123号掘立柱建物

124号掘立柱建物



125号掘立柱建物



123号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	33 × 29 × 35.0	
2	32 × 27 × 29.0	
3	28 × 25 × 19.0	上面に小礫。
4	54 × 43 × 52.0	42号溝上北縁部と重複。
5	31 × 31 × 10.0	
6	46 × 37 × 8.0	
7	22 × 17 × 6.0	

124号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	32 × 26 × 25.0	
2	24 × 22 × 32.0	
3	31 × 27 × 31.0	
4	22 × 21 × 35.0	118号土坑と重複。
5	34 × 31 × 37.0	
6	29 × 18 × 17.0	98号溝の縁部に重なる。
7	20 × 18 × 38.0	98号溝と重複。
8	16 × 15 × 33.0	98号溝と重複。
9	29 × 23 × 3.0	
10	28 × 25 × 27.0	
11	42 × 37 × 25.0	

125号掘立柱建物柱穴一覧 (cm)

No	長軸×短軸×深さ	備考
1	28 × 20 × 24.0	
2	18 × 18 × 6.0	
3	38 × 33 × 37.0	底面に小礫。
4	18 × 17 × 29.0	
5	47 × 42 × 44.0	

第127図 124号・125号掘立柱建物

(7) ピット (第128～131図 PL21・22・38)

概要 調査段階でピットとして番号を付けて調査したものは総数で約1300基ある。他に番号を付けていないが平面と深さを記録した遺構が500基以上ある。その大半が5面の施設である。ピット番号は1a区から2b区までの4か所の調査区毎に通し番号を付けた。ここから81棟の掘立柱建物に伴う柱穴716基を除いたものがピットとして扱った遺構である。そのため欠番を多数生じている。また、ピットの断面を記録する段階で遺構番号を付けたため、完掘段階で複数ピットの重複が確認できた場合でも番号の付け直しはしておらず、実際のピット数はさらに多い。加えて整理作業で掘立柱建物を復元する際に、これら単独番号重複ピットを建物柱穴と個別ピットに分けたものも多く、建物柱穴とピットを併せた総数は、報告数より多くなっている。

1区 南北2地点の方形館があり、1a区はその両館が含まれている。北館では342号以降の番号を付け295基を扱った。南館では1a区の2～339号までの内151基と、1b区の1～433番までの内277基が該当する。

1区のピット埋没土は比較的近似しており、地山と氾濫層土の混じったしまりの強い土であった。遺構掘り下げの際は必ず断ち割りを行って、重複の分かるものや柱痕のあるものは図示したが、断面で柱痕が確認できるものはきわめて少なかった。

ピットは北館内では区画堀から離れた調査地点中央から東寄りにかけて高い密度で分布していた。区画堀周辺は柵列や入口施設等の確認に特に注意を払った場所であったが、これらの施設を発見することはできなかった。ピット総数518に対し223基のピットが建物に復元され、建物への復元率は43.1%である。

南館は1a区では比較的ピットが少ないが、総数281基のピットの内130基が建物に復元され、復元率46.3%は本遺跡中最も高くなっている。1b区は最もピットが密集していたが、建物に復元されたのは427基中150基、復元率35.1%と低くなっている。狭くて全容が把握しにくい地点であり、ピットとして扱った遺構の中に掘立柱建物の柱穴であるものはまだ多数残っているはずである。

2区 西館内のピットである。2a区44基と2b区

15基が該当する。報告するピット数は1区に比べ極端に少ないが、これは番号を付けて扱ったピットが少ないためで、平面に記録が残るピット状の遺構は他に300基以上ある。館内南側を中心に部分的には1a区のピット密集部分と変わらないピット集中地点が見られる。建物の復元率は38%前後と思われる。

2区のピットは黒色土の混入が多く、古代の遺構との区別が難しいものが多かった。古墳時代の遺物出土がきわめて多い地点であり、竪穴住居柱穴など古代の遺構が混じる可能性があるが、土層観察や底面からの遺物出土から中世より古いと確認できたもの以外は本項で扱っている。なお、ピット内や上面に礫の混入の多いことも特徴的である。

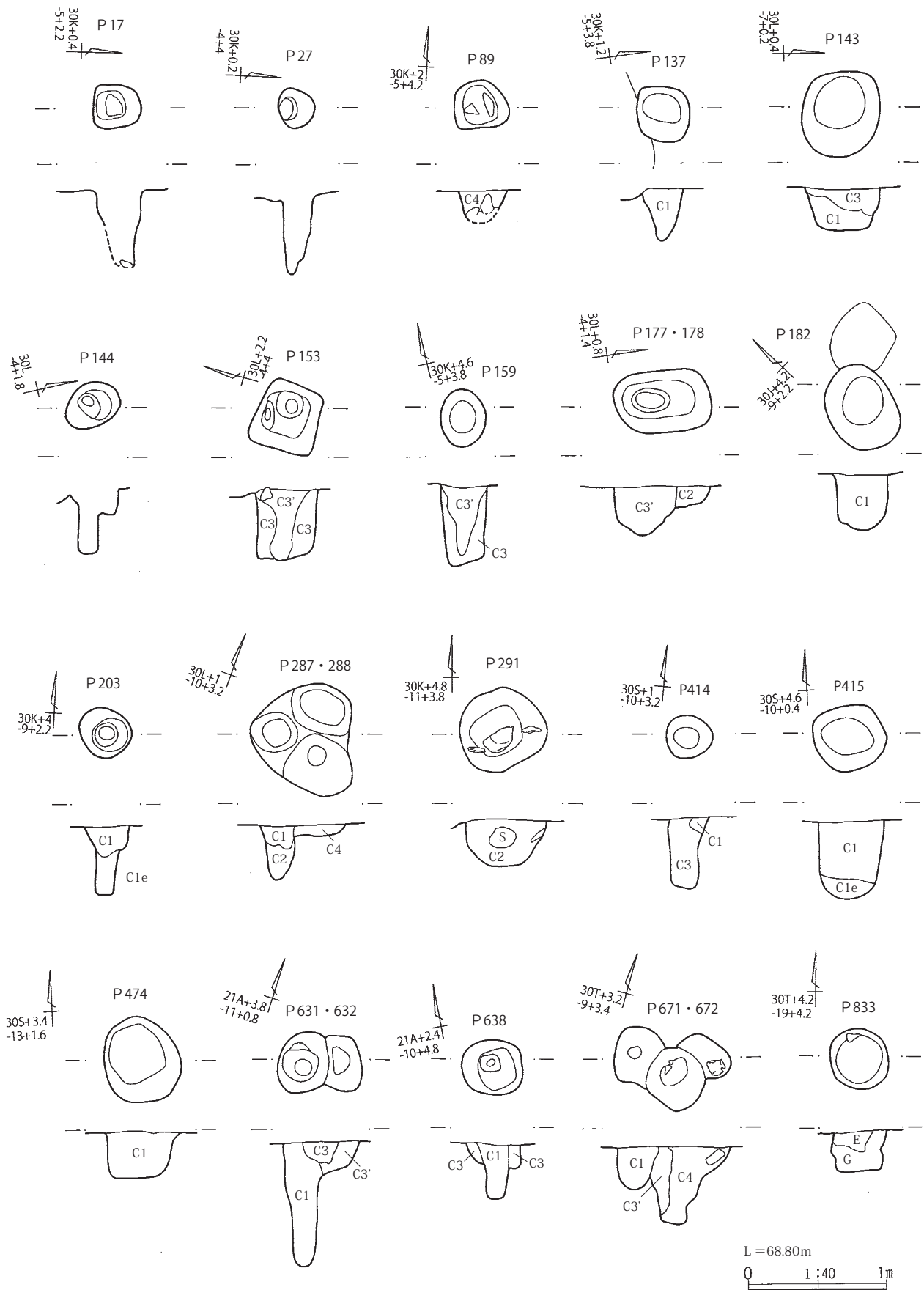
備考 本項では782基のピットを扱ったが、図化したものは柱痕や重複の明らかなものや、礫の混入のあるもの等69基を選んで第128～130図に記し、写真記録の中から36基をPL21.22に掲載した。館内のピット全体の配置については付図を参照されたい。なお2b区の第7面ピットとした3基についても配置を記すため第130図に掲載した。

本遺跡のピットおよび建物柱穴の傾向について第4表に記した。また、第5面で扱った全ピットについては、第5～9表の一覧に概略を記した。図示した12点の出土遺物については第131図に一括して掲載した。土層の説明については第5面の共通記号(本文60頁)を用いている。

第4表 ピット一覧表

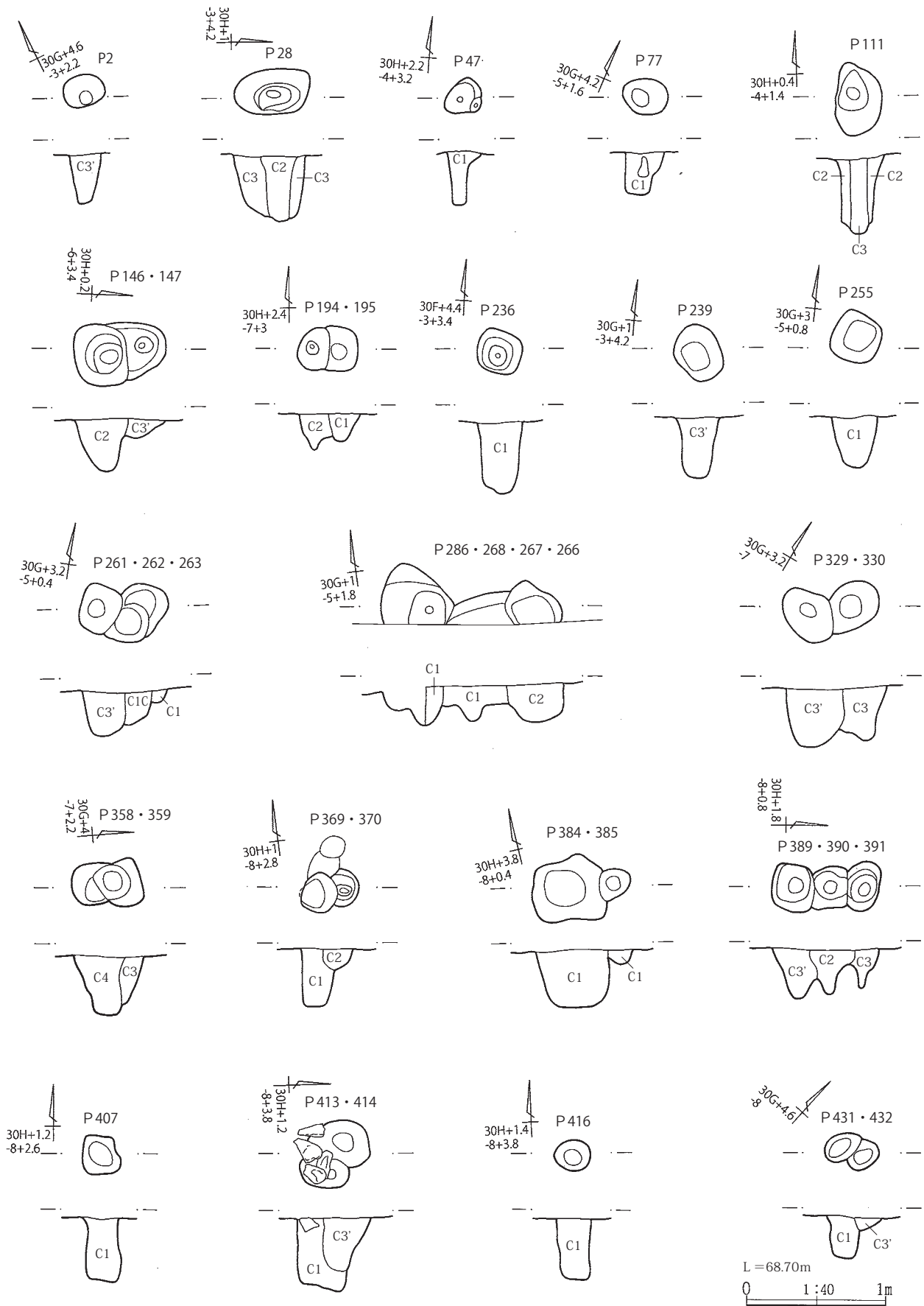
位置	総数	建物へ移動	ピット扱い	建物復元率
1a区北館	518 ※	223	295	43.05%
1a区南館	281 ※	130	151	46.26%
1b区南館	427 ※	150	277	35.12%
2区西館	約580	213	59	36.7%前後
全体	1800以上	716	782	39%前後

※には番号設定なしのピット状施設を含んでいない

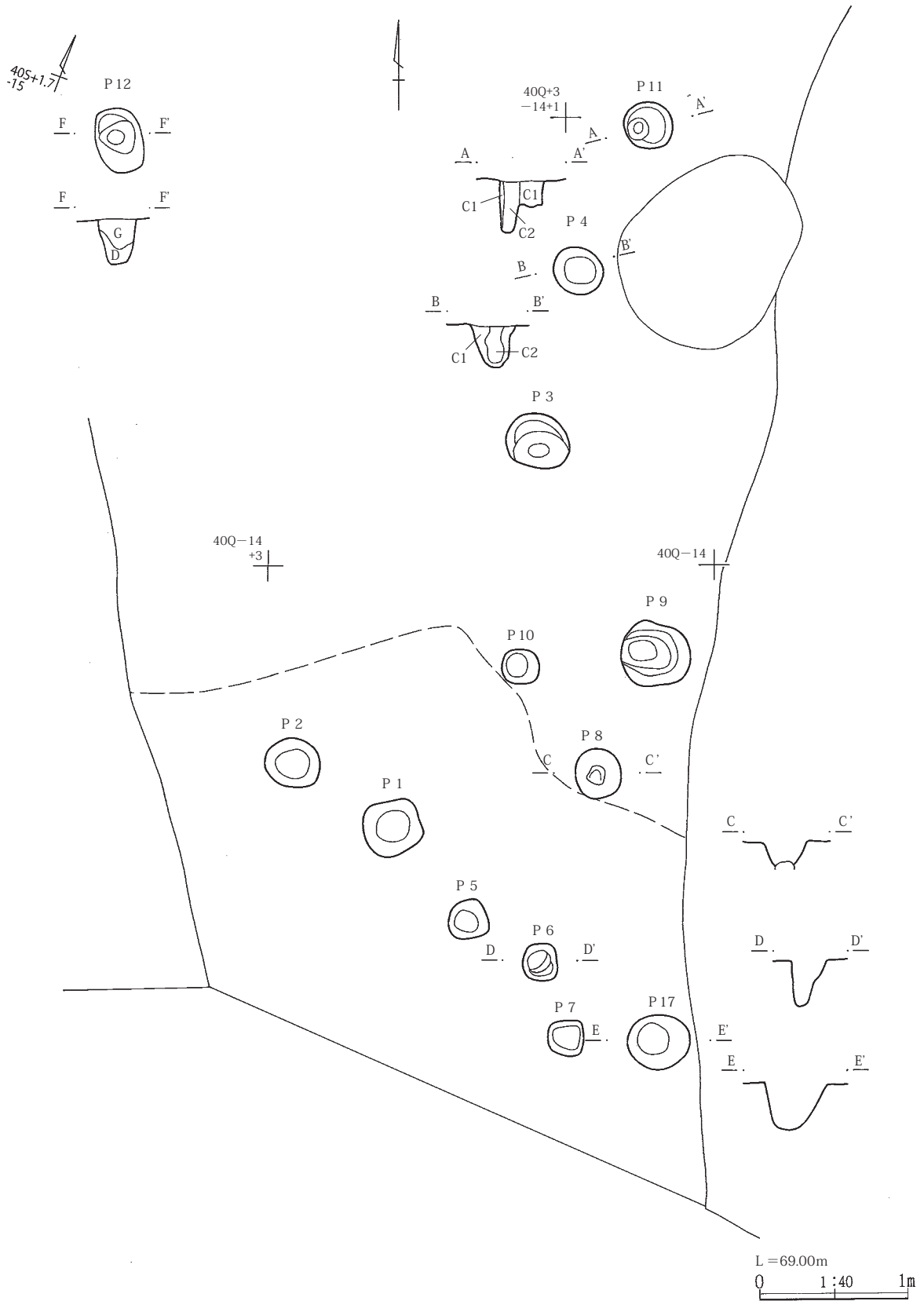


第128図 1a区のパット

II 発掘調査の記録

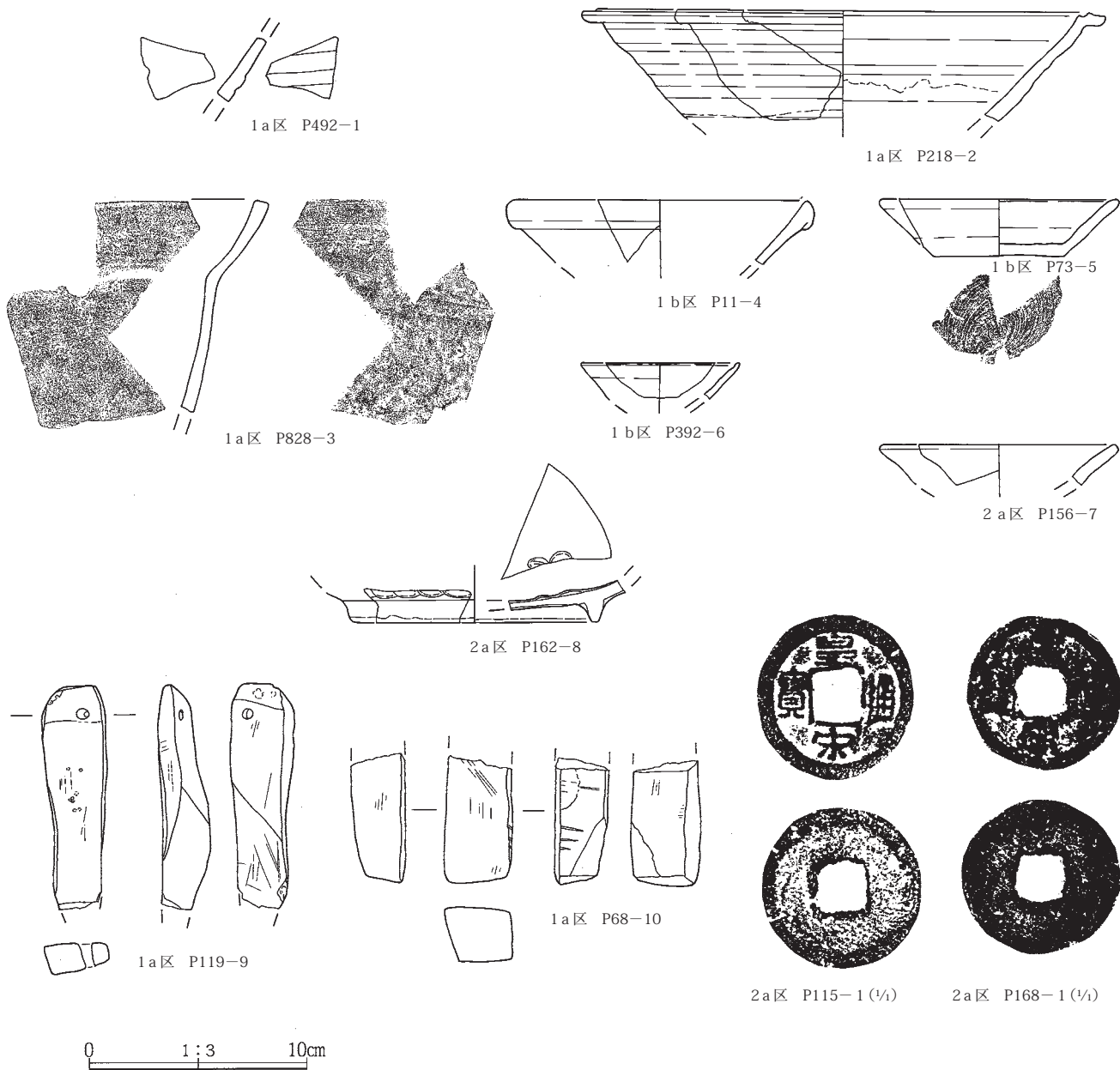


第129図 1b区のピット



第130図 2b区のピット

II 発掘調査の記録



第131図 ピット出土遺物

第5表 北館内のピット一覧

掘立柱建物は建物と略す。建物の個別柱穴は建一番号と略す（例：1建-1は1号建物P1）。以降、第9表まで同じ。

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
342	30 R-8	長円形	23 × 17 × 7.0		C-1	17号建物区画内		
343	30 R-8	長円形	31 × 24 × 31.0		C-1	17号建物区画内		
344	30 R-8	不整円形	28 × 25 × 15.0		C-1	17号建物区画内		
345	30 S-8	隅丸方形	26 × 21 × 30.5		C-1	西側建物密集区画内		
346	30 S-8	隅丸方形	20 × 19 × 30.0	底面西隅	C-1	西側建物密集区画内。15 建物柱筋上。		
347	30 S-8	隅丸長方形	21 × 16 × 17.0		C-3			
352	30 S-8	円形	29 × 29 × 25.0	底面北隅	C-4			
353	30 S-8	隅丸方形	22 × 21 × 30.5		C-4			
354	30 S-8	円形	25 × 24 × 34.5		C-1			
355	30 S-8・9	円形	35 × 33 × 21.5		C-1			
356	30 R-8	円形	35 × (31) × 20.0		C-4	8建-6と重複。		
360	30 R-7	隅丸方形	15 × 14 × 13.5		C-3	7・8号建物区画内		
361	30 S-9	円形	27 × 25 × 28.0		C-1			
362	30 S-9	円形	22 × 21 × 20.0		C-1			

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
364	30 S-9	隅丸方形	22×20×32.0		C-3			
367	30 S-9	方形	22×20×30.0		C-1			
368	30 S-9	隅丸方形	24×22×33.5	底面北隅	C-1			
369	30 R-9	円形	22×20×16.0		C-1			
371	30 R-8	円形	29×27×22.0			17号建物区画内		
372	30 R-8	円形	27×25×21.5		C-1	17号建物区画内		
374	30 R-7	—	24×24×31.0		C-1	7・8号建物区画内・9建・5に接する。2基のピット。		
375	30 R-7	円形	40×37×24.0		C-3'	7・8号建物区画内		
377	30 R-8	隅丸方形	24×24×44.0	底面南側	C-3	17号建物区画内		
379	30 R-8	円形	28×25×14.0		C-1	17・18号建物区画内		
380	30 R-8	隅丸方形	25×20×20.5			17号建物区画内		
381	30 R-7	円形	(30)×29×25.0			P 383と重複。		
383	30 R-7	円形	(22)×21×16.0		C-1	P 381と重複。		
385	30 R-7	円形	21×21×20.0		C-3	7・8号建物区画内		
389	30 R-7	長円形	31×28×53.5		C-1	7・8号建物区画内。		
391	30 R-8	隅丸方形	20×19×15.5			17・18号建物区画内。		
394	30 S-8	隅丸方形	25×21×21.5		C-1	西側建物密集区画内。		
395	30 S-8	—	(19)×29×32.5			15建-6と重複する別ピット。		
397	30 R-9	円形	27×27×17.0		C-1			
398	30 R-9	隅丸方形	21×20×32.5		C-1			
399	30 R-9	長円形	45×31×21.0		C-1			
406	30 R-8	隅丸方形	20×16×11.5			17・18号建物区画内		
407	30 R-9	円形	21×19×15.0					
409	30 R-10	方形	29×24×29.0					
410	30 S-10	隅丸方形	21×17×16.0		C-1			
412	30 S-10	双円形	30×25×30.0			西側建物密集区画内。2基のピット。		
412'	30 S-10	—	34×(20)×25.5			P 412と重複する別ピット。		
413	30 S-7	長円形	24×23×29.5			9建-2に接する。		
414	30 S-10	円形	35×31×49.5		C-3		第128図	
415	30 S-9・10	不整円形	51×46×45.0		C-1	20号建物区画内。	第128図	
416	30 R-10	円形	26×25×14.0		C-1			
417	30 R-10	円形	17×14×34.0		C-1			
418	30 R-10	隅丸方形	23×19×21.5					
420	30 S-10	円形	22×20×13.5		C-3	23号建物区画内。		
421	30 S-10	長円形	37×29×13.5	底面北隅	C-1	23号建物区画内。		
422	30 S-10	円形	25×22×		C-1	23号建物西柱筋上。		
424	30 S-10	長円形	33×26×18.5		C-3			
425	30 S-10	円形	25×24×13.5					
426	30 S-10	円形	25×25×26.5		C-3			
427	30 T-10	長円形	47×21×27.0		C-1	2基のピットか。		
428	30 T-10・11	円形	37×32×54.0		C-1	底面南側へ偏る。		
429	30 T-11	隅丸方形	25×24×13.5		C-3'			
430	30 T-11	円形	28×25×18.0		C-1			
431	30 T-11	円形	23×20×23.5		C-1			
432	30 T-11	円形	21×19×31.5					
433	30 T-11	長円形	24×21×14.5		C-1			
434	30 S-11	卵形	21×19×21.5					
435	30 S-11	円形	31×22×16.5		C-1			
436	30 S-11	長円形	34×27×20.0		C-1			
438	30 R-11	円形	37×35×28.5		C-1			
439	30 R-12	円形	38×36×15.0		C-3・3'			
440	30 R-12	円形	34×30×24.0		C-3			
451	30 R-12	円形	36×33×26.5		C-3	27建区画内。		
454	30 R-7	方形	27×23×33.0		C-1	内耳鍋片1片。7・8号建物区画内		
457	30 R-6	円形	32×28×19.0		C-1	8号建物区画内。		
459	30Q・R-5	隅丸方形	46×38×16.5		C-1			
460	30 R-5	円形	27×26×51.0		C-1			
461	30 Q-5	円形	45×41×54.5		C-1			
462	30 R-5	円形	30×23×20.5			2号建物区画内。		
464	30 Q-5・6	円形	35×33×50.5		C-1	2号建物区画内。		
465	30 Q-6	円形	36×35×40.5		C-1			
466	30 Q-6	長円形	35×24×9.0		C-1			
467	30 R-6	円形	31×27×18.5		C-1	2号建物区画内。		
468	30 R-6	隅丸方形	21×20×20.0	底面	C-3	2号建物区画内。		
469	30 R-6	長円形	28×19×12.5		C-2	2号建物区画内。		
471	30 S-10	円形	16×14×31.5					

II 発掘調査の記録

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
472	30S・T-10	円形	22×20×19.5		C-1			
473	30S・T-10	円形	66×58×69.0		C-3'			
474	30 S-13	円形	68×55×45.0		C-1	土師器杯・甕5片混入。	第128図	
483	30 Q-11	不整円形	40×39×33.5	断面	C-4	重複または抜柱痕を含む可能性。		PL-21 ⑬
484	30 Q-11	長円形	62×27×31.5		C-3	底部北側へ偏る。		
485	30 Q-11	長円形	43×21×31.0		C-3'	2基のビットか。		
486	30 Q-11	双円形	50×31×34.0		C-1	館南堀と重複。3基のビットか。		
487	30Q・R-12	長円形	54×35×15.5	底面		南東隅に小柱痕。		
488	30 S-11	円形	23×20×14.0		C-1			
489	30 R-12	長円形	38×28×10.5		C-1			
490	30 R-12	長円形	73×61×22.5		C-1	土師器甕2片混入。西側建物密集区画内。		
491	30 S-13	不整円形	53×49×15.0		C-4	底面平坦で土坑状。		
492	30 R-6	円形	23×20×21.5		C-1	遺物 40077 2号建物区画内。39溝・4号土坑と重複。		
494	30 R-6	円形	34×32×35.0		C-1			
495	30 R-6	円形	28×26×19.0		C-4	8号建物区画内。24号土坑と重複。		
496	30 S-8	円形	36×35×32.0		C-1	2号建物区画内。		
498	30 R-6	円形	35×31×9.5		C-1			
506	30 T-10	隅丸方形	34×25×11.0		C-1	20号建物区画内。		
507	30 T-10	円形	38×37×32.0		C-1	23号建物区画内。		
509	30 T-11	円形	26×24×19.0		C-1			
510	30 T-11	隅丸方形	22×22×20.0		C-1			
511	30 T-11	円形	25×20×16.0	杭状	C-1			
512	30 T-11	長円形	21×17×12.0		C-1			
513	30 T-11	不整長方形	57×42×13.5		C-3	底面広く、土坑状。		
514	21 A-12	隅丸方形	23×22×12.5		C-1			
515	21 A-12	隅丸台形	23×21×8.0		C-3'			
516	30 T-12	円形	28×25×10.0		C-1			
517	30 T-12	円形	24×23×12.0		C-1			
518	21 A-13	円形	39×23×9.5		C-1	底部東に偏る。		
522	30 S-8	円形	28×26×21.5		C-1	西側建物密集区画内。		
524	30 T-9	円形	(25)×28×25.0		C-1	18建-6と重複。		
531	30 T-10	不整長方形	(61)×53×48.0		C-3	22建-7と重複。		
533	30 T-11	不整長方形	(40)×39×46.5		C-4	22建-7と重複。		
535	30 T-9	方形	31×27×25.0		C-1	20号建物区画内。		
536	30 T-9	隅丸方形	24×23×29.5		C-3	20号建物区画内。		
537	30 T-9	円形	31×27×16.0		C-1	20号建物区画内。		
538	30 T-9	長円形	45×28×35.0	底面西隅	C-1	20号建物区画内。		
539	30 T-9	円形	38×33×58.0	底面東隅	C-1	20号建物区画内。		
542	30 T-10	長円形	22×21×30.0		C-1	土師器甕1片混入 22建-13と重複。		
543	30 T-10	円形か	79×55×61.0		C-1	P 544と重複。22号建物区画内。		
544	30 T-10	円形か	-		C-1	22号建物区画内。20建-1と重複。		
546	30 T-10	円形	32×25×49.0		C-4			
548	30 T-10	円形	-		C-1	22建-11と重複する別ビット。		
549	30 T-10	長円形	(71)×51×64.0		C-1	20建-2と重複。		
551	30 T-9	長円形	53×46×41.0		C-4	P 671と重複。		
552	30 T-9	隅丸方形	21×27×28.0		C-1	西側建物群区画内。		
553	30 T-9	円形	24×19×20.0		C-3	内耳鍋1片。21建-5と重複。西側建物群区画内。		
555	30 T-9	円形	33×30×26.5		C-3'	21建-5と重複。西側建物群区画内。		
558	30S・T-9	隅丸方形	27×23×23.0		C-1	20号建物区画内。		
559	30 S-9	隅丸方形	34×24×33.5		C-1			
563	30 S-7	隅丸方形	25×23×27.0		C-4	建物密集区画内。	PL-21 ⑭	
565	30 R-5	長円形	32×(27)×18.0		C-1	10号墓壇と重複。		
567	30 S-7	隅丸方形	21×19×14.5		C-1			
572	30 S-9	円形	32×29×61.0		C-1	23号土坑と重複。	PL-23 ⑯	
574	30 S-7	長円形	37×24×24.0		C-1	建物密集区画内。		
577	30 S-6	隅丸方形	47×43×34.5		C-3	東側建物密集区画内。10建-3と重複。		
583	30 S-7	隅丸方形	23×23×17.0		C-1	建物密集区画内。		
584	30 S-7	円形	37×34×35.0		C-1	建物密集区画内。		
587	30 S-6	隅丸方形	28×26×27.5		C-3'	7建東柱筋上。		
588	30R・S-6	円形	29×29×40.0					
589	30 R-5	隅丸方形	28×27×37.0		C-1			
592	30 T-9	長円形	45×36×60.0			23建-4と重複。西側建物群区画内。		
593	30 Q-12	長円形	38×31×19.0		C-4	館堀に接する。		
594'	30 Q-12	長円形	31×23×37.5		C-1			
594	30 S-6	隅丸方形	29×28×31.5			30号土坑と重複。		
595	30Q・R-12	長円形	40×31×30.5		C-4			
601	30 R-7	隅丸方形	28×28×30.5		C-2	7・8号建物区画内。不明瞭。		

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
602	30 S-9	長円形	37×19×54.5		C-3'	23号土坑と重複。		PL-23 ⑥
604	21 A-12	不整形	(45)×37×13.5		C-1	24建-10に先出。		
606	21A・B-12	隅丸方形	30×28×52.0		C-1			
607	21 A-12	不整三角形	21×19×10.5		C-1	24建-5と重複。		
611	21 A-12	円形	33×31×13.5		C-1	24建の南下屋筋上。不明瞭。		
615	21 A-12	円形	21×17×14.5		C-2	25建区画内。		
620	21 A-11	不整長円形	26×24×60.0		C-1	土師器甕1片混入。		
621	21 A-11	長円形	18×14×23.0		C-1	25建区画内。		
623	21 A-11	隅丸方形	21×16×12.5		C-1	25建区画内。底部細い。		
624	21 A-11	長円形	28×21×22.5		C-1			
625	21 A-11	不整形	35×35×58.5	底面北隅	C-4			PL-21 ⑤
626	21 A-11	隅丸長方形	31×27×17.0		E			
627	21 A-11	長円形	56×39×59.0	底面	C-1	2柱列柱筋上。		
629	21 A-11	円形	(61)×(55)×49.5		C-2	24建-1に先出。		
631	21 A-11	円形	43×(35)×89.0		C-1	P 632に先出。	第128図	
632	21 A-11	円形	42×(23)×21.5		C-3	P 631に後出。2柱列柱筋上。	第128図	
635	21 A-11	隅丸方形	29×24×31.5		C-4			
637	21 A-10	円形	24×24×15.5	断面	C-3'・4			
638	21 A-10	円形	43×40×39.5		C-1・3		第128図	
639	21 A-10	隅丸方形	21×19×17.0		C-3			
640	30T・21A-10	隅丸長方形	40×36×35.5	底面西隅	C-1	22号建物区画内。		
642	30 T-11	長円形	39×27×41.5		C-3			
643	21 A-10	円形か	(19)×31×45.0		C-1	22建-2に後出。		
645	21 A-10	不整形	69×52×89.5		C-1	22号建物区画内。複数のビットか。		
646	21 A-10	不整円形	36×32×24.0		C-1	土師器台付甕1片混入。22号建物区画内。		
648	21 A-10	双円形	41×30×22.0		C-3	21・22号建物区画内。2基のビット。		
649	21 A-10	隅丸方形	27×22×27.0		C-1	21・22号建物区画内。		PL-22 ①
653	21 A-9	円形	41×39×61.5		C-1	2基のビットか。		
654	21 A-9	長円形	(48)×(52)×91.5		C-1	北側は調査区域外。		
655	21 A-9	隅丸方形	30×23×15.0		C-2	21・22号建物区画内。		
657	21 A-9	円形	29×26×39.5		C-1	13・21号建物区画内。		
660	30T・21A-9	不整形	(55)×26×18.5		C-1・4	複数の小ビット。		
663	30 T-9	隅丸方形	22×17×29.5		C-1			
664	21 A-9	卵形	54×(17)×26.5		C-1	西側建物群区画内。		
665	21 A-9	長円形	48×32×45.0	底面東隅	C-1	西側建物群区画内。		
666	30 T-9	円形	30×24×10.5		C-1	22建-8と重複。西側建物群区画内。		
668	30 T-9	不整形	(35)×33×50.5	底面北隅	C-2			
669	30T・21A-9	円形	21×19×17.5		C-1	西側建物群区画内。		
671	30 T-9	長円形	41×(29)×37.5		C-4	P 672に後出。西側建物群区画内。	第128図	
672	30 T-9	双円形	57×(42)×60.5		C-1・4	P 671に先出。2基のビット。	第128図	
673	30 T-9	隅丸方形	32×(29)×49.5		C-1	西側建物群区画内。		
675	30 T-9	隅丸方形	29×26×34.5		C-1	西側建物群区画内。21建-2と重複。		
679	30 T-8	長円形	34×24×17.5		C-3'	20号建物区画内。		
680	30 T-8	円形	27×27×26.5		C-1			
681	30 T-8	隅丸方形	29×24×18.0		C-1	20号建物区画内。		
682	30 T-8	隅丸方形	24×24×26.5		C-1	20号建物区画内。		
684	30 T-8	隅丸方形	37×30×33.0	底面東隅	C-1			
685	30 T-8	円形	37×37×60.0		C-1	西側建物群区画内。		
686	30 T-10	円形	20×19×13.0		C-1	P 687と重複。22号建物区画内。		
687	30 T-10	円形	28×25×46.5		C-3'	P 686と重複。22号建物区画内。		
689	30 T-9	不整長円形	42×(32)×30.5	断面?	C-4・2	18建-5と重複。		
691	30 T-9	円形	53×(55)×60.5		C-1	20建-5と重複。		
693	30 T-8	円形	22×22×26.5		E	西側建物群区画内。		
694	21 A-9	長円形	25×21×22.0		C-1	18・19号建物区画内。		
695	30 T-8	長円形	19×15×18.0		C-1	18・19号建物区画内。		
696	30 T-8	円形	38×31×30.0	底面北寄り	C-3'	18号建物区画内。		
697	30 T-8・9	円形	23×21×26.5		C-1	西側建物群区画内。		
700	30 T-8・9	円形	21×21×19.5		C-1			PL-22 ②
701	30 T-10	長円形	43×(30)×21.0		C-3'	P 702に後出。西側建物群区画内。		
702	30 T-10	円形	55×(48)×57.0		C-4	P 701に先出。703に後出。西側建物群区画内。		
703	30 T-10	不整円形	(43)×45×41.5		C-3	P 702・704に先出。664と重複。西側建物群区画内。		
704	30 T-9・10	円形	27×(16)×28.0		C-3'	P 703・21建-6に後出。		
706	30 T-7・8	不整長円形	53×44×16.0		C-1	底部は東側に偏る。		
707	30 T-7	円形	24×18×14.0		C-1			
713	30 T-7	円形か	(30)×(25)×41.0	底面	C-1	11建-2・14建-1・P 714と重複。建物密集区画内。		
714	30 T-7	長円形	(37)×32×16.5	底面2ヶ所	C-1	P 713と重複。建物密集区画内。		
715	30 T-7	長円形	(40)×36×43.0		C-3	11建-3と重複。		

II 発掘調査の記録

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
717	30 T-7	円形	48×37×38.5		C-3	底部は南側に偏る。南に小ピット。		
718	30 T-7	長円形	27×24×21.5		C-1	3・10号建物区画内。		
720	30 S-7	隅丸長方形	29×22×16.0		C-3	東側建物密集区画内。1号柱列上。		
722	30 T-8	長円形	41×35×15.0		C-1	P 723 と重複。		
723	30 T-8	円形	35×(33)×54.0		C-1	P 722 と重複。		
725	30 T-8	円形	(27)×31×49.5		C-1	18建-3と重複。		
731	30 S-7	長円形	30×23×34.0		C-3'	建物密集区画内。13建東柱筋上。		
733	30 S-7	長円形	(24)×24×18.5		C-3'	建物密集区画内。		
734	30 S-7	双円形	(55)×35×26.0		C-1	2基のピットか。		
736	30 S-7	円形	17×17×8.5		C-1	建物密集区画内。		
737	30 S-7	隅丸方形	25×23×37.5		C-1	東側建物密集区画内		
739	30 S-7	長円形	32×(27)×50.0	底面	C-1	3建-5と重複。建物密集区画内。		
742	30 T-6	隅丸方形	38×34×12.0		C-2	10建-1と重複。不明瞭。		
744	30 S-6	隅丸方形	18×15×13.5		C-1	東側建物密集区画内。10号建物東柱筋上。		
745	30 S-6	円形	36×32×26.0		C-1・4	東側建物密集区画内。		
746	30 S-6	隅丸方形	37×34×44.0	底面2ヶ所	C-1・4	東側建物密集区画内。7号建物北柱筋上。		
747	30 S-6	隅丸方形	23×23×18.0		C-1・4	東側建物密集区画内。		
752	30 T-6	円形	24×21×14.0		C-1			
754	30 T-6	円形	21×19×15.0		C-1	6建-1とわずかに重複。		
756	30 S-7	長円形	25×20×27.5		C-1			
760	30 T-7	長円形	31×19×33.0	底面?	C-1			PL-22 ③
762	30 S-6	円形	(29)×27×31.0		C-2	4建-3と重複。		
763	30 S-6	隅丸方形	35×35×53.0	底面?	C-3	3号建物区画内。		
764	30 S-6	長円形	30×25×43.5		C-1			
765	30 S-6	不整形円形	17×17×24.5		C-1	3号建物区画内。		
766	30 S-6	円形	24×22×23.5		C-2	3号建物区画内。		
768	30 S-6	円形	26×24×29.0		C-1			
769	30 S-6	不整形円形	22×19×23.0		C-1			
770	30 S-6	方形	24×23×23.0		C-1			
771	30 S-6	長円形	41×39×53.0		C-4	底部は北側へ偏る。		
773	30 S-5	隅丸方形	22×17×23.0	底面?	C-1			
774	30 S-5	双円形	56×35×13.5		C-1	2基のピットか。		
780	30 S-4	双円形	41×35×13.0		C-1	2基のピットか。		
781	30 S-4	隅丸方形	24×22×20.0		C-1			
782	30 R-4	長円形	27×25×18.0		C-1	底面は方形。		
783	30 R-4	長方形	33×24×17.0		C-2	不明瞭。		
784	30 R-4	隅丸長方形	23×21×24.5		C-1			
785	30 R-4	長円形	71×53×15.5		E			
786	30 R-4	円形	27×25×19.0		C-1			
787	30 R-3・4	長円形	66×46×17.5		C-2			
788	30 R-3	不整形方形	21×17×11.0		C-1			
789	30 R-3	不整形円形	34×28×27.0		C-1	中端は方形。		
790	30 R-4	円形	31×26×23.5		C-3			
801	30 S-7	円形	(19)×23×20.0		C-1	12建-6に後出。建物密集区画内。		
807	30 S-6	円形	21×(18)×24.5		C-2	P 808 と重複。		
808	30 S-6	円形	25×(20)×18.5		C-1	P 807 と重複。		
809	30 S-6	長円形	107×71×44.0		C-3'	P 810 に後出。3号建物区画内。		
810	30 S-6	長円形	27×(23)×22.0		C-3	P 809 に先出。3号建物区画内。		
811	30 R-5	不整形円形	22×18×28.5		C-1			
812	30 S-6	円形	30×(27)42.5×	底面	C-3	東側建物密集区画内。10建-2と重複。		
813	30 S-6	円形	(23)×22×36.5		C-4	10建-2		
814	30 S-6・7	長円形	35×20×41.0		C-2	東側建物密集区画内		
818	30 T-8	円形	28×24×31.5	底面北隅	C-3'			PL-22 ④
819	30 T-8	長円形	34×26×43.0	底面				
821	30 T-8	円形	22×16×25.5					
824	30 T-9	円形か	43×(34)×41.5		C-1	22建-9と重複。2基のピットか。		
826	30 T-9	不整形長円形か	41×(20)×		C-1	22建-9と重複。20号建物柱筋上。		
827	30 T-9	不整形長円形	48×38×56.5			西側建物密集区画内。		
828	21 A-9	円形	33×(25)×47.0		C-1	遺物-3(軟質陶器)出土。22建-3と重複。	第131図	
831	30 S-8	長円形	28×22×49.0		C-1			
833	30 T-19	円形	43×40×29.0		G e	北館西外に孤立したピット。底面平坦。石鉄。	第128図	

第6表 南館内1a区のピット一覧

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
2	30 K-3	隅丸長方形	23×18×15.0			40号建物区画内。		
4	30 K-3	長円形	20×15×8.5			40号建物区画内。		

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
5	30 K-3	隅丸方形	17×15×4.5			40号建物区画内。		
6	30 J-3	隅丸方形	18×18×18.5					
9	30 K-3	隅丸長方形	37×26×9.0			39・40号建物区画内。		
10	30 K-3	隅丸方形	44×38×63.0	底面	C-3	39・40号建物区画内。		
12	30 J-4	隅丸方形	18×16×6.5					
13	30 J-4	隅丸長方形	19×15×8.0					
14	30 J-4	隅丸方形	17×17×5.0					
16	30J・K-4	円形	18×12×9.0			39号建物区画内。		
17	30 K-5	隅丸方形	33×32×57.0		C-3'	底面に平石。38号建物区画内。	第128図	
18	30 J-4	円形	36×30×49.0		C-3	39号建物区画内。		
20	30 K-4	隅丸方形	25×20×18.0		C-1	39・40号建物区画内。		
21	30 K-4	円形	29×26×11.0	底面	C-1	39・40号建物区画内。		
22	30 K-4	円形	21×19×25.0			39・40号建物区画内。		
23	30 K-4	長円形	38×31×59.0		C-3	P 24に先出か。39・40号建物区画内。		
24	30 K-4	長円形	34×(28)×12.0		C-4	P 23に後出か。39・40号建物区画内。		
25	30 J-4	長円形	35×31×47.0		C-1			
27	30 K-4	円形	28×26×54.5	底面	C-3	38号建物区画内。	第128図	
29	30 J-4	円形	26×25×48.5		C-1	38号建物区画内。南西に抜柱痕か。		
31	30 J-5	隅丸方形	37×35×48.0	底面	B、C-1	38号建物区画内。		
32	30 J-5	長円形	57×41×49.0		C-1	38建-6と重複。38号建物区画内。		
33	30 J-5	円形	29×21×18.0	底面	C-1			
34	30 J-5	円形	30×27×30.0		C-3	38号建物区画内。		
35	30 J-5	円形	30×26×30.0		C-3'			
39	30 J-5	方形	15×(12)×17.5			P 92と重複。		
40	30 J-5	円形	25×25×41.0		C-1	38号建物区画内。		
41	30 J-5	長円形	23×17×31.0			38号建物区画内。		
45	30 K-4	円形	38×35×17.0	底面	C-3'	39号建物区画内。		
47	30 J-5	長円形	32×20×11.5		C-3	38号建物区画内。		
48	30J・K-5・6	長円形	25×18×17.0		C-3'	38号建物区画内。		
49	30 J-5	円形	(21)×19×18.5		C-1	P 50と重複。38号建物区画内。		
50	30 J-5	円形	28×25×19.5		C-3'	P 49と重複。38号建物区画内。		
51	30 J-5	隅丸方形	28×26×34.5	底面	C-1			
52	30 J-5	長円形	21×20×26.5		C-1	37・38号建物区画内。		
54	30 J-5	長円形	21×21×38.0		C-3			
55	30 J-5	円形	23×23×20.0		C-1	37・38号建物区画内。		
56	30 J-5	隅丸方形	25×24×32.0		C-4	37・38号建物区画内。		
57	30 J-5	方形	28×27×19.5	底面	C-3			
58	30 J-5・6	円形	37×35×27.0	底面	C-1	37・38号建物区画内。		
59	30 J-5・6	隅丸方形	28×23×10.0	底面南隅		中層に川原石。37・38号建物区画内。	PL-21 ①	
60	30J・K-5	円形	(30)×34×31.5	底面		37建-8と重複。36～38号建物区画内。		
62	30 J-5	長円形	48×37×25.0		C-1	36建-4と重複。中層に礫。36～38号建物区画内。	PL-21 ②	
64	30 J-5	円形	35×(34)×28.0	底面		36建-4と重複。36～38号建物区画内。		
65	30 J-5	円形	27×23×32.0		B	36～38号建物区画内。不明瞭。		
67	30 J-5	隅丸方形	37×31×32.0		C-2	36～38号建物区画内。		
68	30 K-4	隅丸方形	23×(15)×6.5	底面東隅	C-1	40建-5と重複。39・40号建物区画内。遺物-10(砥石)。		
69	30 K-4	円形	31×29×15.5		C-1	39・40号建物区画内。		
70	30 K-4	長円形	34×23×32.0	底面東隅	C-1	38号建物区画内。	第131図	
71	30 K-6	円形	21×18×10.0		C-1	37・38号建物区画内。		
73	30 K-6	不整形	21×21×10.5		C-1	36～38号建物区画内。		
74	30 K-6	隅丸方形	28×26×19.5		C-1	37・38号建物区画内。		
75	30 K-6	円形	28×23×14.0	底面北隅	C-1	37・38号建物区画内。		
76	30 K-6	不整形	25×24×14.0		C-1	37・38号建物区画内。		
77	30 K-6	隅丸長方形	53×41×52.5		C-2	上面に礫。		
78	30 K-6	隅丸方形	26×20×14.0	底面	C-3	36・38号建物区画内。		
82	30 K-5	円形	47×44×57.5		D'	3号土坑に先出。	第134図	
89	30 K-5	不整形	39×35×22.0		C-4	中層に丸石。36・37号建物区画内。	第128図	PL-21 ③
91	30 J-5	長円形	(71)×57×57.0			複数のビット。P 92と重複。37・38号建物区画内。		
92	30 J-5	不整形	(43)×43×39.5			P 39と重複。38建物柱筋上。		
93	30J・K-5	双円形	33×29×27.5		C-1	2基のビット。37・38号建物区画内。		
94	30 K-5	不整形円形	25×22×8.5		C-4	37・38号建物区画内。		
95	30 K-5・6	円形	24×23×15.5			36・37号建物区画内。		
96	30 K-6	円形	20×17×15.0		C-3	36号建物区画内。37建-13と重複。		
98	30 K-6	隅丸方形	26×24×12.0		C-1	36・37号建物区画内。		
102	30 J-6	不整形	43×36×40.0		C-3'	36～38号建物区画内。36建-5とわずかに重複。		
103	30 J-6	隅丸方形	38×35×55.5		C-1	36～38号建物区画内。		
104	30 K-4	長円形	21×13×8.0		C-1	39・40号建物区画内。		
105	30 K-4	長円形	33×24×8.0		C-1	39・40号建物区画内。		

II 発掘調査の記録

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
106	30 K-4	隅丸方形	26 × 19 × 14.0		C-1	39号建物区画内。		
107	30 K-4	隅丸方形	26 × 22 × 9.0		C-1			
108	30 K-4	円形	22 × 19 × 11.0		C-3'			
109	30 K-4	円形	24 × 23 × 21.0		C-1			
110	30 K-5	隅丸方形	30 × 27 × 38.0		C-1			
111	30 K-5	不整形	32 × 26 × 13.5		C-3'			
112	30J・K-6	円形	30 × 27 × 22.5	底面	C-3			
113	30 K-5	円形	21 × 18 × 9.0		C-1	36・37号建物区画内。		
114	30 K-5	方形	31 × 26 × 9.0			36・37号建物区画内。		
116	30 J-6	円形	26 × 23 × 10.0					
117	30 K-6	隅丸方形	24 × 19 × 24.5		C-3'			
118	30 K-6	長円形	26 × 21 × 26.0		C-1			
119	30 K-7	不整形	22 × 21 × 26.0		C-3'	底面より遺物-9(砥石)出土。	第131図	PL-21 ④
120	30 K-7	隅丸方形	19 × 18 × 12.5		C-1			
122	30 L-7	隅丸方形	30 × 25 × 41.0		C-1	底部は細く深い。		
123	30 L-7	隅丸方形	18 × 15 × 8.5		C-1			
124	30 L-7	不整形円形	22 × 20 × 22.0		C-4			
125	30 L-7	方形	18 × 17 × 21.5	底面	C-1			
126	30 K-7	不整形長円形	62 × 37 × 16.0		C-3'	17号溝東縁とわずかに重複。		
127	30 K-7	長方形	53 × 30 × 7.5		C-1	17号溝東縁とわずかに重複。		
128	30 L-7	長円形	26 × 17 × 16.0			17号溝西縁とわずかに重複。		
129	30 L-7	双円形	43 × 27 × 15.5			2基のピット。17号溝西縁とわずかに重複。		
130	30 J-8	長円形	33 × 27 × 21.5		C-3'	底面は長方形。35建物の西柱筋上。		
132	30 J-7	円形	23 × 22 × 13.5		C-3	35号建物区画内。		
133	30 K-7	長円形	37 × 26 × 16.0			35号建物区画内。		
135	30K・L-6	円形	35 × 34 × 70.0					
136	30 L-3	円形	37 × 32 × 15.5		C-3'	39号建物区画内。		
137	30 K-5	隅丸方形	40 × 38 × 37.0		C-1	1号土坑に先出か。36～38号建物区画内。	第128図	
138	30 J-6	長円形	25 × 20 × 35.5		C-4			
140	30 K-7	円形	31 × 29 × 19.0		C-1			
143	30K・L-6・7	長円形	63 × 56 × 32.0	断面	C-3・1	底面平坦。人為的埋戻しか。	第128図	
144	30 L-4	長円形	41 × 33 × 46.0		C-3'	39号建物区画内。	第128図	
145	30 L-4	円形	29 × 24 × 29.5		C-4	39号建物区画内。		
146	30 J-10	長円形	37 × 32 × 18.5		C-1	29号建物区画内		PL-21 ⑤
147	30 J-5	隅丸方形	26 × 20 × 21.0		C-	37・38号建物区画内。		
149	30 K-8	不整形長方形	33 × 22 × 20.5		C-4	35号建物区画内。		
151	30 K-8	隅丸長方形	44 × 34 × 15.5	底面	C-3			
152	30 J-8	卵形	54 × 43 × 15.0		C-2	32・33号建物区画内。32建-10と重複。		
153	30 L-4	方形	50 × 46 × 71.0	断面	C-3・3'		第128図	PL-21 ⑥
154	30 K-5	方形	24 × 24 × 16.0					
155	30K・L-6	隅丸方形	22 × 20 × 10.5					
156	30 L-6	円形	27 × 24 × 30.0			底面小さく北東側に偏る。		
157	30K・L-6	円形	27 × 24 × 12.0					
158	30 L-6	円形	48 × 46 × 18.5		C-2、D	土師質皿1片。		
159	30 K-5	長円形	41 × 32 × 57.0	断面	C-3・3'		第128図	
161	30 K-8	長円形	34 × 25 × 22.0			18号溝西縁。		
162	30 K-8	円形	34 × 23 × 32.5			18号溝西縁。別ピットと重複。		
163	30 K-8	円形	25 × 25 × 23.5					
164	30 K-8	長円形	28 × 18 × 27.0		C-4			
165	30 K-8	円形	49 × 49 × 22.5		C-3	2基のピットか。		
167	30 L-7	長円形	43 × 34 × 46.5			土師器裏を1片混入。34建物西柱筋上。		
169	30 K-8	方形	25 × 25 × 18.0			32号建物区画内。		
172	30 L-4	円形	37 × 31 × 30.5					
173	30 L-4	円形	43 × 37 × 45.5			16号溝と重複。		
174	30 L-4	長円形	63 × (34) × 33.0		C-3	39建-7と重複。		
175	30 L-7	長円形	34 × 23 × 36.0			34建物西柱筋上。		
177	30 L-4	長円形か	68 × 45 × 59.0		C-3'	P 178に先出。図は178ピットと共通。	第128図	
178	30 L-4	隅丸方形か	—×—× 17.0		C-2	P 177に後出。	第128図	PL-21 ⑦
179	30 J-8・9	不整形長円形	39 × 33 × 14.5		C-1			
180	30 J-9	円形	39 × 35 × 25.5		C-4	33建柱筋上。不明瞭。		
182	30 J-9	長円形	64 × 48 × 47.5		C-1	33建-2に後出か。	第128図	
183	30J・K-9	円形	31 × 29 × 19.0		C-1	32・33号建物区画内。		
185	30 K-9	円形	18 × 16 × 14.5	底面	C-4	32号建物区画内。		
188	30 J-9	長円形	55 × 41 × 28.5	底面西隅	C-2			
189	30 K-9	長円形	36 × 34 × 51.5	底面南隅	C-4	32号建物区画内。		
190	30 K-9	不整形円形	47 × 44 × 25.5			32号建物区画内。		

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
192	30 K-9	卵形	32×25×15.0	底面	C-3			
193	30 K-9	長方形	45×45×46.0	底面	C-4	31・32号建物区画内。		
194	30 K-9	円形	31×29×48.5		C-1	32号建物区画内。		
197	30 K-8	円形	33×28×37.5	底面	C-3・1	32号建物区画内。		PL-21 ⑧
198	30 K-8	長円形	62×50×18.5		C-1	32号建物区画内。		
200	30 L-4	円形	52×(41)×59.0	断面	C-2・4	39建-7と重複。		
201	30 K-9	円形か	(19)×24×8.0		C-3	8号土坑・31建-3に後出。浅く不明瞭。		
202	30 K-9	円形	32×27×34.5		C-4			
203	30 K-9	円形	39×34×48.5	断面	C-1・1e	31・32号建物区画内。	第128図	
204	30 K-8	隅丸長方形	67×41×14.0			32建東下屋筋上。		
208	30 L-4	円形	39×28×51.0		C-4	39建-8に先出か。		39建-8
211	30 J-9	長円形	49×(39)×41.5		C-3'	32・33号建物区画内。		
213	30 K-10	円形	25×25×13.5		C-3			
214	30 L-8	円形	29×28×53.0		C-1			
216	30 L-8	円形	25×23×26.0	断面?	C-1			
218	30 L-9	長円形	38×28×24.0		C-1	遺物-2(陶器)出土。31号建物区画内。	第131図	
219	30 L-9	長円形	61×46×25.5		C-4	31・32号建物区画内。		
220	30 L-9	円形	42×41×27.0		C-1	31・32号建物区画内。		
223	30K・L-8	方形	27×22×32.0		C-1	32号建物区画内。		
226	30 L-8	円形	25×24×46.0		C-1	32号建物柱筋上。		
227	30 K-9	円形	26×20×19.0		C-3	31・32号建物区画内。		
228	30 K-9	円形	20×19×7.0		C-3			
231	30 L-9	隅丸方形	27×27×5.5		C-1	31・32号建物区画内。		
236	30 K-9	円形	32×27×33.5	底面	C-1			
237	30 K-9	長円形	45×39×21.0		C-1			
238	30 K-9・10	隅丸長方形	33×30×58.0	底面南隅	C-3・1			
239	30 K-10	円形	26×19×11.5		C-4 c			
240	30 J-10	円形	37×35×60.0		C-1			
242	30 K-9	長円形	26×18×14.5		C-3			
244	30 K-9	隅丸方形	25×20×21.5		C-1	31号建物区画内。		
247	30 L-10	長円形	33×25×47.0		C-1	28・30号建物区画内。4列-1に先出。		PL-21 ⑨
248	30 L-9	長円形	40×29×30.0		C-1	30・31号建物区画内。		
254	30 K-10	円形	35×33×34.5	底面	C-1	28・29号建物区画内。		
256	30 K-10	円形	33×31×16.0		C-1	28・29号建物区画内。		
257	30 K-10	円形	39×37×46.0		C-1	28・29号建物区画内。		
258	30 K-10	円形	32×31×17.5			28・29号建物区画内。		
261	30J・K-10	隅丸長方形	42×26×14.5		C-4	28・29号建物区画内。		
262	30 L-10	隅丸方形	23×20×11.0		C-3	28号建物区画内。		
264	30 L-10	円形	33×30×34.5		C-4	39・40号建物区画内。		
267	30 L-10	円形	33×23×20.5		C-3			
272	30 L-11	隅丸方形	28×27×21.0		C-3・4	28建柱筋上。		
274	30J・K-11	隅丸台形	21×20×19.0		C-4	28号建物区画内。		
278	30K・L-11	不整長円形	36×26×20.5		C-3			
279	30 K-11	円形	37×36×45.5	底面	C-1	28・29号建物区画内。		
280	30 K-11	長円形	22×17×25.0		C-1	28・29号建物区画内。		
281	30 J-10	円形	46×(23)×15.0			29建-11に先出。		
282	30 J-7	長円形	34×27×37.0		C-1	18号溝の東脇。		PL-21 ⑩
285	30 L-9	円形か	38×25×26.5		C-4			
287	30 L-10	隅丸方形か	34×26×42.5		C-1・2	P 288に後出。	第128図	
288	30 L-10	長円形か	48×40×26.0		C-4	P 287に先出。	第128図	
289	30K・L-10	方形	24×23×19.0					
290	30K・L-10	方形	30×21×42.5					
291	30 K-11	隅丸方形か	62×55×36.5		C-2	中層に礎石状の丸石。28・29号建物区画内。	第128図	
294	30J・K-11	円形	(45)×45×75.5		C-3・1	28号建物区画内。P 295と重複。		
295	30J・K-11	不整形	52×(45)×52.5	底面に複数	C-1	28号建物区画内。P 294と重複。		
298	30K・L-11	卵形	45×43×44.0					
299	30 J-12	長円形	37×28×27.0		C-3			
300	30 K-12	不整長円形	27×27×22.0					
302	30 K-12	円形	37×34×37.5		C-1			
304	30 K-12	長円形	58×(45)×20.0		C-3'			
305	30 K-12	不整長方形	(61)×37×24.5		C-1	P 314と重複。		
308	30 K-11	円形	45×40×29.0		C-1	28建-9に後出か。29号建物区画内。		
309	30 K-5	長円形	51×33×16.5		C-1	1号土坑と重複。		
310	30 K-5	円形	59×57×31.5		C-1	35号建物区画内。底面広く土坑状。		
311	30 L-8	不整円形	34×32×23.5			18号溝西縁部。		
311'	30 K-8	円形	31×26×18.5					
313	30 L-12	円形	47×43×30.5		C-1	底面直上に平石。		

II 発掘調査の記録

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
314	30 L-12	長円形か	23×23×14.5		C-3	P 305 と重複。		
315	30 L-12	円形	28×27×16.5		C-3・1			
316	30K・L-12	方形	22×21×15.5		C-4			
317	30 L-12	円形	28×24×19.0		C-3			
319	30 K-12	不整長円形	39×29×48.0		C-3'			PL-21 ㉑
320	30 K-12	長円形	26×17×15.0		C-1			
321	30 K-12	円形	70×58×5.05	底面		二段底。		
322	30L・M-9	円形	34×27×26.0					
323	30 L-11	円形	25×23×14.5		C-1			
325	30 K-11	長円形	26×21×41.5			28・29号建物区画内。		
327	30 K-11	菱形	43×38×48.0	底面	C-3	28・29号建物区画内。2基のビットか。		PL-21 ㉒
328	30 L-12	円形	31×(19)×9.5			4号井戸と重複。		
329	30 L-12	円形	25×21×17.5					
331	30 J-11	隅丸長方形	21×15×11.0			28号溝内。		
332	30 J-11	長円形	32×25×26.5			28号建物区画内。28号溝に重複。		
333	30 J-11	円形	22×20×24.0			28号建物区画内。28号溝内。		
339	30K・L-10	長方形	(46)×39×13.5			30建物-6と重複。		

第7表 南館内1b区のビット一覧

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
1	30 G-3	双円形	39×28×20.5		C-1			
2	30 G-3	長円形	29×23×25.5		C-3'		第129図	
3	30 G-3	円形	31×30×75.0		C-3	2基のビットか。		
4	30 G-3	長円形	31×24×37.0		A			
5	30 H-3	隅丸方形	36×34×45.0		Dc	1号土坑内に重複。		
6	30 G-4	長円形	38×32×24.0		C-2			
7	30 H-3	円形	17×15×10.0		C-1			
8	30 H-3	不整形	30×16×16.0		C-1			
9	30G・H-3	不整菱形	30×23×20.0		C-1			
11	30 H-3	円形	19×19×27.0		C-1	遺物-4(かわらけ)出土。	第131図	
12	30 H-3	円形	22×18×13.0		C-1			
13	30 G-3	不整形	34×(18)×13.0		C-1	P 14に先出。		
14	30G・H-3	不整円形	(45)×(37)×56.0		C-3	P 15に後出。		
16	30 H-3	長円形	45×30×49.0		C-2			
19	30 H-3	不整形	31×29×49.0		Dc	1号土坑内に重複。		
20	30 H-3・4	長方形	33×19×13.5		C-1			
23	30 H-4	円形か	33×(26)×60.0		C-1	44建物-3・P 24に後出。		
24	30 H-4	隅丸三角形	41×(37)×48.0		C-1	P 23に先出。		
25	30G・H-4	円形	25×21×32.0		C-1			
26	30 H-4	円形	22×19×12.5		C-1			
27	30G・H-4	不整形	36×32×34.5		C-3			
28	30 H-3	長円形	53×43×55.0	断面	C-2・3		第129図	
30	30 H-3	長円形	26×21×18.0		C-1			
32	30 H-4	長円形	33×(28)×39.0		C-3	43建-5・P 33に後出。		
33	30 H-4	長円形	35×(24)×17.0		C-1	P 32に先出。		
34	30 H-4	隅丸方形	28×25×19.5		C-1			
36	30 G-3・4	長円形	38×(33)×30.0			41建物-5に先出。		PL-22 ㉓
38	30 G-4	円形	26×25×18.5		C-1			
41	30 H-3	不整形	37×36×63.0		C-1			
43	30 H-5	不整円形	36×35×26.5		C-2			
46	30G・H-4	円形	21×18×41.5		C-2	北に向かい斜めに穿たれる。		
47	30 H-4	卵形	25×25×39.5		C-1	底面広い。	第129図	
49	30 H-4	円形	(23)×(20)×19.5		C-2	P 48に先出。P 50に後出か。		
50	30 H-4	不整形	25×(22)×14.5		C-1	P 49に先出か。		
52	30 G-5	円形か	33×(17)×29.0		C-2	49建-5に先出。		
55	30 G-4	円形	31×21×51.5		C-1	P 56と重複。		
56	30 G-4	円形	40×18×41.5		C-1	41号建物-6と重複。		
57	30 H-4	円形	(21)×20×32.0		C-1			
58	30 H-4	長円形	30×(28)×34.5		C-1			
59	30 H-4	隅丸方形	28×26×39.5		C-4			
60	30 G-4	長円形	34×24×52.5		C-1			
64	30 H-4	円形	20×18×16.0		C-1			
65	30 H-4	円形か	(14)×(11)×26.0		C-1	48建物-1に後出か。		
68	30 H-5	円形か	-×-×47.0			P 67・69に先出。		
69	30 H-5	円形か	-×-×28.0		C-1	P 68に後出。		
71	30 H-5	長円形	(55)×27×-		C-1	47建-3に後出。		PL-22 ㉔
73	30 H-5	円形	32×(25)×27.0		C-1	遺物-5(かわらけ)出土。	第131図	
75	30 H-5	円形か	(25)×30×22.5		C-2	41建-1に後出。		
77	30 G-5	長円形	34×27×34.0		C-1	中層に隣。	第129図	PL-22 ㉕
78	30 G-5	円形	24×24×12.5		C-1			
80	30 H-4・5	長円形	37×25×34.5		C-1	45建物-6とわずかに重複。		

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
82	30 G-5	円形	23×21×12.0		C-1			
83	30 G-5	円形	26×24×11.5		C-3'c			
84	30 H-5	長円形	19×15×14.0		C-1			
85	30 H-5	円形	16×16×12.5		C-1			
86	30 G-5	円形	25×23×28.0		C-1			
87	30 G-5	長円形	23×18×12.0		C-1			
88	30 G-5	円形	22×21×7.0		C-1			
90	30 G-5	隅丸方形	25×22×17.5		C-1			
91	30 H-3	卵形	35×32×55.0		C-3'	P 92 に先出。		
92	30 H-3	長円形	30×26×45.0	底面	C-3'	P 91 に後出。		
94	30 H-5	長円形	49×30×32.0		C-2	51 建物-6 と重複。中層に礫。		PL-22 ⑨
96	30 G-4・5	隅丸台形	(40)×39×46.0		C-2			
97	30 G-5	円形か	30×(26)×43.0		C-1			
99	30 H-5	隅丸方形	28×24×12.5		C-1	48 号建物柱筋上。		
100	30 H-5	長円形	53×32×34.0		C-3'			
101	30 G-5	卵形	35×29×39.0		C-1			
104	30 G-5	長方形	35×25×12.5		C-1			
105	30 G-6	長円形	29×17×12.0		C-1			
106	30 G-6	長円形	25×19×13.5		C-1	3 柱列-1 とわずかに重複。		
111	30G・H-4	長円形	51×32×59.5	断面	C-2・3		第129図	
116	30 G-3	円形	29×(26)×45.0		C-1	P 249 と重複。		
117	30 H-5	円形	16×(15)×12.5		C-1	48 建物-9・P 334 と重複。		
118	30 H-5	不整形	55×37×22.0		C-1	43 建物-2 に先出、271 と重複。複数ピットの可能性。		
121	30 H-5	長円形か	(37)×26×46.0		C-4	45 建物-4 に先出。		
124	30 H-5	隅丸方形	23×21×21.0		C-3'			
125	30 H-6	不整形	32×28×36.5		C-3'	P 126 とわずかに重複。		
128	30 H-6	不明	-		C-3	P 127 に後出。抜柱痕か。		
129	30 H-6	長円形	32×25×13.0		C-1	50 建物-1 とわずかに重複。		
130	30 H-6	長円形	35×27×44.0		C-4			
132	30 H-6	長円形	38×25×30.0	底面	C-3'			
133	30 H-6	不整形	70×55×35.0		C-3	P 134 と重複。抜柱痕を伴うか。		
134	30 H-6	円形か	-×-×10.0		C-1	P 133 と重複。		
136	30 H-5	不整形	(25)×25×43.5		C-3	42 建物-1 に後出、P 135 に先出。		
137	30 H-5	円形か	(30)×27×40.0		C-3'	P 136 に後出。		
141	30 H-5	長円形	(36)×27×29.5		Dc	48 建物-7 に後出。		
146	30 H-6	方形	45×(37)×42.5		C-2		第129図	
147	30 H-6	長円形か	36×(29)×21.5		C-3'	P 146 に先出。	第129図	
149	30 H-6	円形か	-×37×37.5			45 建物-3 と重複。		
150	30 H-5	長円形	25×18×20.5		C-1			
152	30 H-6	円形	(34)×(25)×30.0		C-4	51 建物-4・54 建物-1 と重複。		
154	30 G-6	隅丸長方形	27×25×12.5		C-3'			
155	30 H-6	円形	27×26×13.5		C-3'			
159	30 H-6	長円形	23×20×18.5		C-1			
160	30 G-6	円形	19×17×43.5		C-1			
161	30 G-6	長円形	(25)×25×18.0		C-1	P 162 と重複。		
164	30 H-6	長円形	(22)×23×52.5		C-3	P 165 と重複。		PL-22 ⑩
165	30 H-6	隅丸方形か	(44)×37×42.0		C-3	P 164 と重複。		PL-22 ⑩
166	30 G-4・5	円形	38×26×9.5		C-1			
167	30 G-5	方形か	××14.0		C-3'			
175	30 G-6	円形	38×32×41.0	底面	C-3c	P 176 とわずかに重複。		
177	30 H-6	隅丸方形か	60×37×49.0		C-3	55 建物-2 に先出。		
179	30 H-6・7	円形	23×22×14.0		C-3'			
185	30 G-7	円形	15×13×10.0		C-1			
186	30 G-7	円形	15×15×21.5		C-1			
189	30 H-7	円形	31×23×10.5		C-1			
191	30 H-7	長円形	37×31×35.5		C-1	52 建物-1 と重複。		
192	30 H-7	隅丸方形か	35×(21)×43.5		C-1	P 191 と重複。		
193	30 G-4	隅丸方形か	40×(27)×45.5	底面	C-3	1 号溝と重複。		
194	30 H-7	円形か	44×32×25.5	底面	C-2	P 195 に後出。	第129図	PL-22 ⑪
195	30 H-7	円形か	-×-×21.0		C-1	P 194 に先出。計測値は P 194 が含まれる。	第129図	PL-22 ⑪
197	30 H-7	隅丸方形	31×27×35.0		C-3'	17 号溝東上面と重複。		
198	30 H-6	長円形	26×22×14.5		C-1			
201	30 H-5	双円形	52×30×24.0		C-1	2 基のピットの可能性。		
205	30 G-3	円形	37×35×41.5	底面	C-4			
206	30 G-3	円形	35×34×27.0		C-1			
207	30 G-3	卵形	29×25×35.5		C-1	P 208 と重複。		
208	30 G-3	円形	26×26×29.5		C-1	P 207 と重複。		
209	30 G-3	隅丸方形	27×21×12.5	底面	C-3'			
210	30 G-3	台形	25×23×11.5		C-1			
211	30 G-3	長円形	21×(13)×29.0	底面	C-3	P 212 と重複。		
212	30 G-3	不整形	(23)×25×22.5	底面	C-1・2	P 211 と重複。		
213	30 G-3	円形	27×23×26.5		C-1			

II 発掘調査の記録

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
215	30 G-3	長方形	25 × 19 × 27.5		C-1			
216	30 G-3	不整形	57 × 30 × 49.0		C-4	上層に礫。		
217	30 G-3	卵形	32 × 22 × 46.5		C-1			
218	30 G-3	台形	24 × 23 × 38.0	底面	C-3'			
221	30 H-4・5	不整形三角形	23 × 23 × 17.0		C-2			
225	30 G-3	円形	21 × 20 × 40.0	底面	C-1			
226	30 G-4	双円形	43 × 37 × 36.5	底面	C-1			
228	30 G-3	円形	27 × 24 × 40.0		C-3'			PL-22 ㊟
229	30 G-3	円形	20 × 18 × 43.0		C-1	P 230 と重複。		PL-22 ㊟
230	30 G-3	長円形	20 × 13 × 22.5			P 229 と重複。		
231	30 G-3	円形	23 × 21 × 25.5		C-1 c			
232	30 G-3	隅丸長方形	36 × 24 × 36.0	底面	C-1 c			
233	30 G-4	長方形	33 × 19 × 9.5		C-1			
236	30 F-3	方形	33 × 29 × 49.0		C-1		第129図	
237	30 G-4	円形	26 × 23 × 25.5		C-1			
238	30 G-4	長方形	24 × 16 × 16.5		C-1			
239	30 G-4	長円形	41 × 32 × 51.0		C-3'		第129図	
241	30 G-4	長円形	44 × (35) × 46.0			45 建物-8 に後出。		
242	30 G-4	隅丸長方形	28 × 18 × 22.5	底面	C-1			
243	30 G-4	長円形	29 × 19 × 14.0		C-1			
244	30 G-4	隅丸長方形	20 × 18 × 15.0		C-1			
247	30 G-4	長円形	40 × 31 × 30.5		C-1	4 柱列-1 に先出。		
248	30 G-4	長円形	32 × 26 × 18.0		C-3'			
249	30 G-3	長円形か	(22) × 29 × 31.0		C-1			
252	30 G-4・5	円形	28 × 26 × 12.5		C-1			
253	30 G-5	不整形	45 × (28) × 15.0		C-1	45 建物-9 ・ 49 建物-6 と重複。		
254	30 G-5	円形	24 × 22 × 13.0		C-1			
255	30 G-5	隅丸方形	35 × 35 × 36.5		C-1		第129図	
257	30 G-5	長円形	24 × 20 × 12.0		C-1			
258	30 G-4	円形	24 × 18 × 14.0		C-1			
259	30 G-4	長円形	30 × 23 × 12.5		C-1			
261	30 G-4・5	隅丸方形	33 × 31 × 31.0		C-3'	P 262 に後出。	第129図	
262	30 G-4・5	円形か	(29) × 28 × 22.5		C-1 c	42 建-5 に先出、P 263 に後出。	第129図	
263	30 G-4	長円形	33 × (17) × 16.0		C-1	P 262 に先出。	第129図	
266	30 G-5	不整形方形	41 × 29 × 30.0		C-2	P 267 に後出。	第129図	
267	30 G-5	長方形か	—		C-1	P 266 ・ 268 に先出。	第129図	
268	30 G-5	不整形	50 × (26) × 50.0		C-1	P 267 に後出。	第129図	
270	30 H-5	円形か	25 × 26 × 30.5		C-1	P 334 と重複。		
271	30 H-5	長円形	31 × 21 × 30.0		C-1	48 建物-10 と重複。		
276	30 G-5	円形	29 × 26 × 23.5		C-1			
278	30 G-5	長円形	34 × (25) × 43.5	底面	C-1	43 建物-2 と重複。		
279	30 G-5	円形	26 × 25 × 50.0		C-1			
281	30 G-5	隅丸方形	24 × 24 × 22.0		C-3'			
282	30 G-5	不整形	45 × 56 × 39.0		C-2	P 283 に後出。		
283	30 G-5	円形か	— × 35.0		C-3'			
284	30 G-5	長円形	46 × (35) × 43.5		C-3'	47 建物-6 に後出。		
288	30 G-4	隅丸方形か	43 × 40 × 33.5			48 建物-4 ・ 8 建-5 に先出。		
292	30 G-5	円形	20 × 19 × 33.0		C-1	P 293 とわずかに重複。		
293	30 G-5	長円形	32 × 25 × 17.5		C-1	P 292 とわずかに重複。		
294	30 G-5	長円形	40 × 29 × 41.0		C-1			
297	30 G-5	長円形	(34) × 25 × 50.5		C-2	51 建物-8 ・ 52 建-5 と重複。		
298	30 G-5・6	長円形	25 × 19 × 24.5		C-1			
299	30 G-6	長円形	40 × (20) × 24.0		C-2			
300	30 G-6	不整形円形	20 × 16 × 14.0		C-3'c			
301	30 H-6	円形	(51) × (46) × 35.0			52 建物-2 と重複。		
303	30 H-6	隅丸台形	31 × 30 × 28.0			P 304 と重複。		
304	30 H-6	円形	21 × 18 × 10.5			P 303 と重複。		
306	30 G-5	円形か	22 × (13) × 16.0		C-2	P 361 と重複。		
307	30 G-5	不整形	31 × (20) × 26.5		C-1	50 建物-7 と重複。		
309	30 G-5	不整形	40 × (20) × 24.0		C-2	50 建物-7 と重複、P 310 に先出。		
310	30 G-5	円形か	28 × 25 × 34.0		C-1	P 309 に先出。		
312	30 G-6	円形	26 × 22 × 37.5		C-3'			
315	30 G-6	長円形	45 × 28 × 41.5		C-3'			
316	30 G-6	長円形	26 × 19 × 27.0	底面	C-1			
322	30 G-6	円形か	41 × (30) × 50.0		C-3'	49 建物-8 に先出。		
327	30 G-6	円形か	—		C-4	52 建物-7 東側の別ビット。		
328	30 G-6	隅丸長方形	29 × 20 × 32.5		C-3			
329	30 G-6	長円形	45 × (32) × 45.0		C-3'	P 330 に後出。	第129図	
330	30 G-6	長円形	(35) × 33 × 46.0		C-3	P 329 に先出。	第129図	
331	30 G-6	円形	27 × 23 × 22.5		C-3			
332	30 H-5	不整形	27 × 24 × 14.0		C-4			
334	30 H-5	長円形	(26) × 21 × 33.0		C-3'	P 270 と重複。		

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
339	30 G-7	円形	34 × 30 × 41.0		C-3			
340	30 G-6	卵形	23 × 19 × 21.5		C-3'			
341	30 H-5	隅丸方形か	(40) × 45 × 50.5	底面		北側は調査区域外。		
342	30 G-6	円形	23 × 23 × 46.5		C-3'b			
343	30 G-4	長方形	29 × 17 × 51.0		C-3'			
346	30 H-7	円形	20 × 19 × 43.0		C-1			
347	30 H-7	長円形	49 × 37 × 45.5		C-4	掘り直ししか2基のピットの可能性。		
353	30 G-7	円形	21 × 21 × 23.0		C-1			
354	30 H-7	長円形	48 × 28 × 33.0		C-3'			
357	30 G-6・7	長円形	31 × 20 × 34.0		C-3			
358	30 G-7	長円形か	39 × 35 × 57.0		C-4		第129図	
359	30 G-7	長円形か	41 × 27 × 57.0		C-3	P 359 と同一遺構か。	第129図	
360	30 G-7	円形	31 × 29 × 44.0		C-2	底面付近に小礫。		
361	30 G-5	隅丸長方形か	59 × (42) × 26.5		C-3'	47 建-7 に先出、P 306 と重複。		PL-22 ㉓
364	30 G-7	円形	28 × 28 × 34.0		C-1			
365	30 G-7	円形	20 × 19 × 23.0		C-1			
366	30 G-7	長円形	28 × 21 × 26.5		C-1			
368	30 H-6	不整形	(45) × 30 × 32.0		C-2	45 建物-2 と重複。		
369	30 H-8	不整形	27 × 24 × 41.0		C-1	P 370 に先出。	第129図	PL-22 ㉔
370	30 H-8	長円形か	25 × (15) × 20.0	底面	C-2	P 369 に後出、419 と重複。	第129図	PL-22 ㉔
371	30 H-6・7	長円形	53 × 37 × 29.5			2 基のピットの可能性。		
372	30 H-8	長円形	45 × 31 × 52.5		C-2			
373	30 H-8	長円形	43 × 27 × 47.0		C-2			
374	30 H-8	長円形	34 × 31 × 31.0		C-1			
375	30 H-8	円形	27 × 26 × 37.5		C-1			
376	30 H-8	方形	27 × 25 × 45.5	底面	C-1			
377	30 G-8	円形	20 × 19 × 31.5		C-1			
378	30 H-8	方形	35 × 35 × 46.0		C-1			
379	30 H-8	隅丸長方形	22 × 18 × 14.5		C-1			
380	30 H-8	長方形	26 × 22 × 33.0		C-1			
381	30 G-7	円形	31 × 26 × 33.0		C-1			
382	30 H-8	不整形長円形	35 × 19 × 50.0		C-1	抜柱痕を伴う可能性。		
383	30 H-8・9	長方形	25 × 24 × 45.5		C-1			
384	30 G-7・8	不整形	(48) × 45 × 43.0		C-1	P 385 と重複。	第129図	
385	30 G-7	長円形か	(22) × 21 × 15.5		C-1	P 384 と重複。	第129図	
386	30 G-6	円形	20 × 19 × 14.0			P 299 と重複。		
387	30 H-8	円形	28 × 24 × 38.5		A	19 号溝東上面・P 403 と重複。		
388	30 H-8	円形	34 × 29 × 27.0		C-3'	19 号溝・P 400 と重複。		
389	30 H-8	方形	32 × (29) × 36.0		C-3'	P 390 に先出。	第129図	
390	30 H-8	円形か	30 × (18) × 30.0		C-2	P 389・391 に後出。	第129図	
391	30 H-8	長円形	37 × (20) × 25.0	杭状	C-3	P 390・394 と重複。	第129図	
392	30 H-7・8	長円形	31 × 26 × 35.5		C-1			
393	30 H-7	円形	19 × 18 × 40.0		C-3'			
394	30 H-7	長円形	(39) × 28 × 14.5		C-1			
395	30 H-7	円形	33 × (25) × 39.0		C-1			
396	30 H-8	円形	35 × 35 × 39.0		C-1			
397	30 H-8	隅丸方形	15 × 15 × 14.5		C-1			
398	30 H-8	長円形	25 × 16 × 12.0		C-3'	18 号溝西上面で重複。		
399	30 H-8	円形	19 × 18 × 18.5	底面	C-1			
400	30 H-8	円形	26 × 21 × 18.5		C-1	17 号溝底面に穿たれる。P 388 と重複。		
401	30 G-8	方形	29 × 25 × 40.0		C-1	18 号溝と上面で重複。		
402	30 G-8	不整形	33 × 26 × 36.0		C-1	18・19 号溝とわずかに重複。		
403	30 H-8	円形	28 × 22 × 36.0		C-2			
404	30 H-7・8	長円形	26 × 22 × 33.5					
405	30 H-8	円形	26 × 22 × 46.0		C-1	18 号溝西側に穿たれる。		
406	30 G-7	隅丸長方形	43 × 38 × 45.5	底面	C-1			
407	30 H-8	不整形	28 × 26 × 47.5		C-1		第129図	
408	30 H-8	方形か	22 × (7)17.0		C-1	P 409 に後出、抜柱痕部分か。		
409	30 H-8	円形	(31) × 32 × 47.0		C-2			
410	30 H-8	円形	(39) × 38 × 47.0		C-3'			
411	30 G・H-7	長円形	39 × 34 × 32.5		C-1			
412	30 G-8	双円形	42 × (39) × 57.5		C-2			
413	30 H-8	長円形	45 × (29) × 50.0		C-1	P 414 に先出。	第129図	PL-22 ㉕
414	30 H-8	長円形か	36 × 22 × 53.0		C-3'	P 413 に後出。上面に礫多い。	第129図	PL-22 ㉕
415	30 H-8	方形	41 × 39 × 45.5		C-1	5 号土坑と僅かに重複。		
416	30 H-8	円形	25 × 22 × 48.0		C-1		第129図	
418	30 H-8	円形	20 × 19 × 26.0		C-1			
419	30 H-8	円形	17 × 15 × 21.5		C-1	P 369・370 と重複。		
420	30 H-8	円形	21 × 18 × 30.0		C-1			
421	30 H-9	円形	33 × 27 × 33.5		C-2	5 号溝と重複。		
422	30 H-9	円形	32 × 25 × 43.5		C-1			
423	30 G-4	円形か	22 × (18) × 22.0			48 建物-4、P 248・288 と重複。		

II 発掘調査の記録

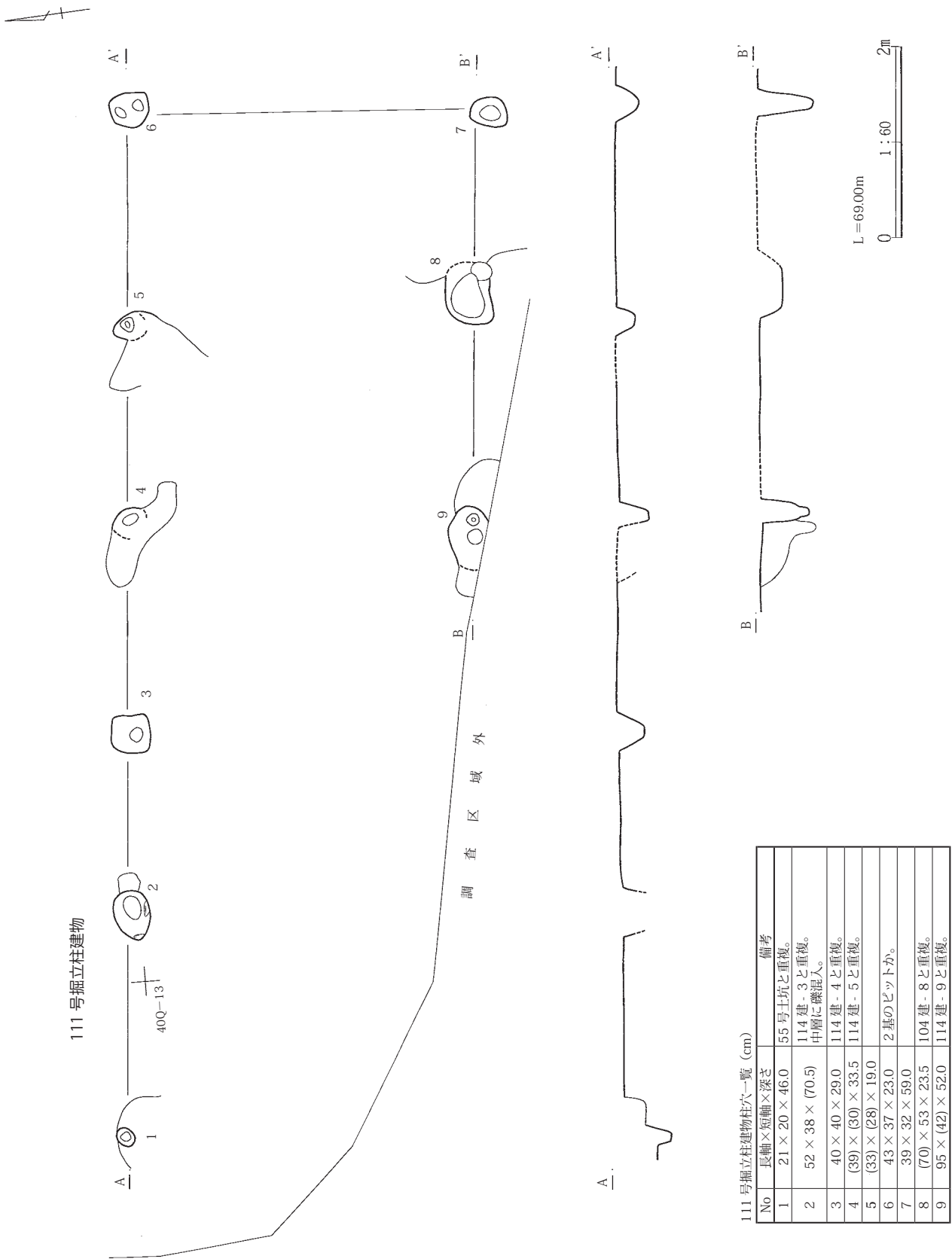
No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
424	30 H-8	不整形	40×25×41.0		C-1			
425	30 H-7	長円形	31×24×27.5		C-1	17号溝東側面にある。		
426	30 H-7	円形	27×25×33.0		C-1	17号溝と重複。		
427	30 G・H-7	長円形	56×41×52.5		C-1	17号溝東側面にある。複数のピットの可能性。		
428	30 G-7	円形	19×18×27.0		C-1	17号溝西上端と重複。		
429	30 G-7	円形	20×20×9.5		C-1	17号溝西斜面にある。		
430	30 H-9	不整形	57×31×53.5		C-2	複数のピットの可能性。南隅に隣。		
431	30 G-7	長円形か	30×19×31.0		C-1	P 432に先出。	第129図	
432	30 G-7	円形か	21×(15)×9.5		C-3'	P 431に後出。	第129図	
433	30 G-8	双円形	32×21×33.0		C-1	P 412と重複。2基のピットか。		

第8表 西館内2 a区のピット一覧

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
19	31 D-10	長円形	60×28×23.0			15号溝と重複。		
20	31 E-8	円形	42×42×6.0					
22	31 D-12	円形	37×24×10.0			15号溝と重複。		
23	31 E-7	長円形	28×20×13.0					
24	31 D-13	長円形	34×26×20.0			18号溝と重複。		
25	31 D-13	不整形円形	42×29×13.0			18号溝と重複。		
52	40 P-12	不整形	(30)×29×22.0			115建物-6と重複。		
58	40 P-11	長円形か	(38)×29×25.5			南側は調査区域外。		
100	40 P-11	円形	38×30×30.0			下層に隣。		
102	40 Q-11	不整形	62×38×27.0			4基以上のピット。		
103	40 Q-11	不整形	—			不明瞭な窪みで遺構ではないか。		
104	40 Q-11	円形	36×34×37.0			109建物-2と僅かに重複。		
110	40 P-12	円形	52×52×45.5					
112	40 P-12	不整形	20×20×22.0			51号土坑と僅かに重複。		
115	40 P-12	不整形	120×53×28.0			5基以上のピット。115建物-6を含む。銭貨出土。	第131図	
116	40 P-12	長円形	67×28×22.0			3基のピット。		
117	40 S-13	不整形円形	30×28×17.0					
120	40 Q-10	長円形	45×30×51.5					
122	40 P-9	円形	14×14×26.0	杭状				
123	40 O-9	長円形	33×20×57.5			2基のピット。		
126	40 P-9	長円形	42×35×37.0					
130	40 P-10	長円形	43×32×48.0					
131	40 P-10	円形	32×30×42.5			土師器片。104建物柱筋上。		
132	40 P-8	方形	26×24×22.0					
133	40 O-8	方形	32×32×9.0					
135	40 P-8	方形	19×18×15.0					
136	40 P-8	隅丸方形	25×24×32.0			43号溝西縁に近接。		
137	40 O-8	不整形円形	20×17×23.0					
138	40 O-8	不整形円形	18×17×26.0					
150	40Q・R-11		45×36×29.0					
155	40 P-10	円形	16×13×27.5			土師器片。		
156	40 P-10	円形	20×16×14.5			遺物-7(船載磁器)出土。他に土師器片。		
157	40 O-10	長円形	32×23×32.0					
164	40 R-9	円形	32×32×52.5					
168	40 P-12	円形か	(20)×(20)×(45.0)			銭貨出土。	第131図	
174	40 S-9	円形	32×30×65.0					
175	40 S-9	円形	30×22×45.0					
176	40S・T-9	円形	42×38×57.0					

第9表 西館周辺2 b区のピット一覧

No.	位置	形状	長軸×短軸×深さ (cm)	柱痕	埋没土	備考	挿図	写真
2	40 P-14	円形	37×31×20.0			土師器片1片混入。	第130図	
3	40 Q-14	長円形	44×35×37.0				第130図	
4	40 Q-14	円形	34×32×29.0	断面	C-2・1	2基のピットか。	第130図	
5	40 P-14	円形	27×26×13.0			刷毛目ある土師3片混入。	第130図	
6	40 P-14	円形	25×24×31.5				第130図	
7	40 P-14	不整形	25×23×15.0				第130図	
8	40 P-14	円形	32×31×17.0			底面に平石。	第130図	
9	40 P-14	円形	46×43×25.0				第130図	
10	40 P-14	円形	26×23×28.5				第130図	
11	40 Q-14	円形	35×30×35.5	断面	C-2・1	2基のピットか。	第130図	
12	40 S-14	円形	45×34×33.0		G・D	刷毛目ある土師6片混入。	第130図	
14	40 R-14	円形	48×38×29.5					
15	40 R-14	円形	40×40×32.0			土師器9片混入。		
16	40 R-14	円形	36×35×20.0			土師器2片混入。		
17	40 P-14	円形	43×36×33.0				第130図	



第 119 図 111 号掘立柱建物

(8) 竪穴状遺構

調査時に土坑として扱った遺構のなかで、おおよそ畳一枚分を超える広さがあり、床面も平坦な施設について竪穴状の遺構となる可能性があると考え、遺構番号を変え本項に集めた。4・7号竪穴状遺構については調査段階から他の土坑と異なる性格の施設として把握していたが、同様の施設をこれに加えた。

1区1号竪穴状遺構 (第132図 PL-29①②)

南館北側にあり、掘立柱建物群の北側に近接し、36・37号建物からの距離は50cmである。2号竪穴状遺構に後出する。

位置 30K・L-5グリッド。

規模形状 北半が2号竪穴状遺構埋没土内にあり、形状

は不明である。南半から推測すると西辺の歪みの大きい不整長方形を呈し、規模は東西長338cm、南北残存長210cm、深さ32cmを測る。

埋没土 残存範囲では2号竪穴状遺構に近似した埋没土で、同遺構との境を平面的に追うことはできなかった。

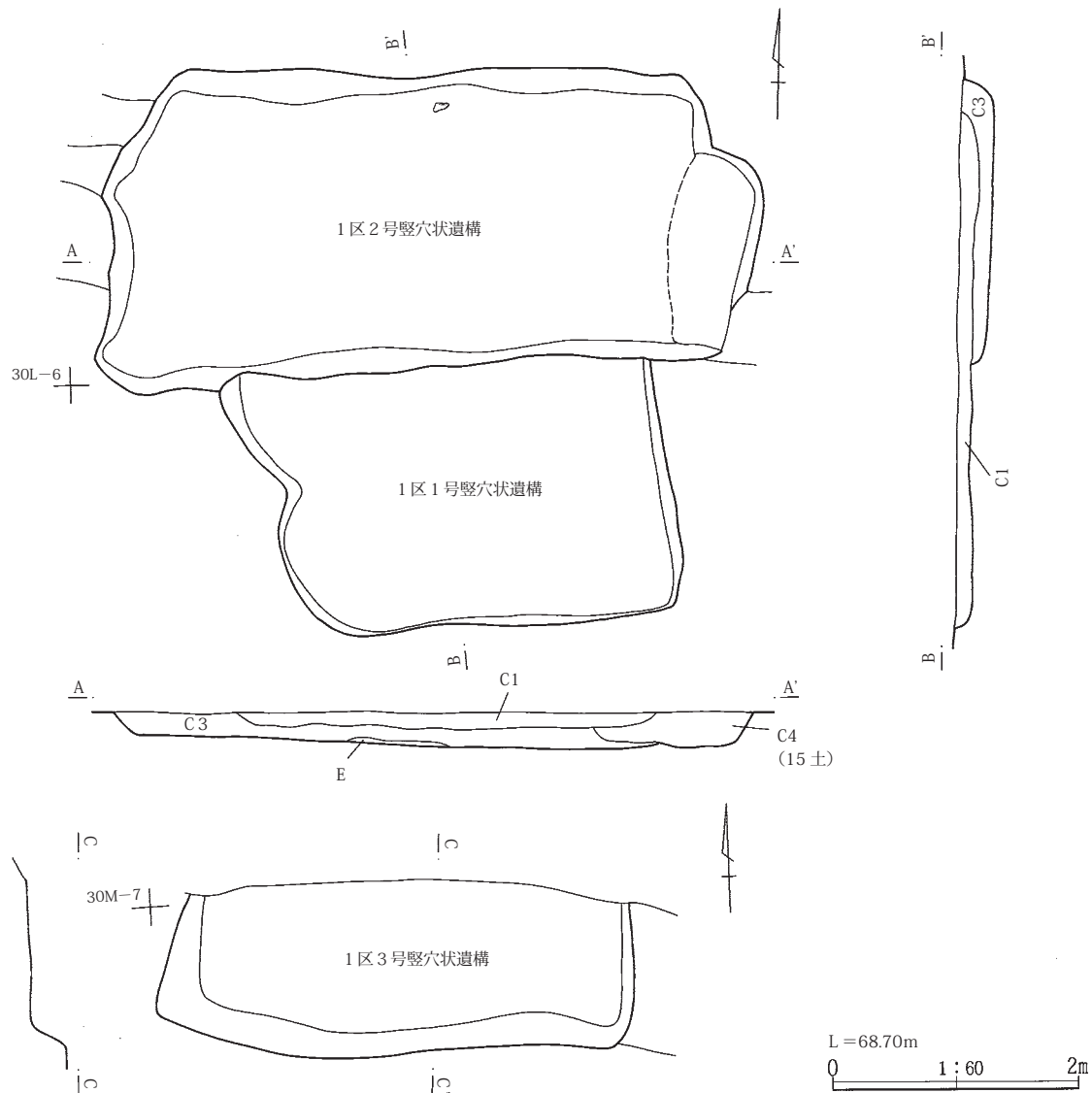
方位 推定N-87°E 面積 残存6.67㎡

床面 細かな凹凸があるが、ほぼ水平な床である。貼床や竪穴住居に見られるような汚れはない。

その他 柱穴・壁溝等の施設は確認されない。出土遺物はなかった。

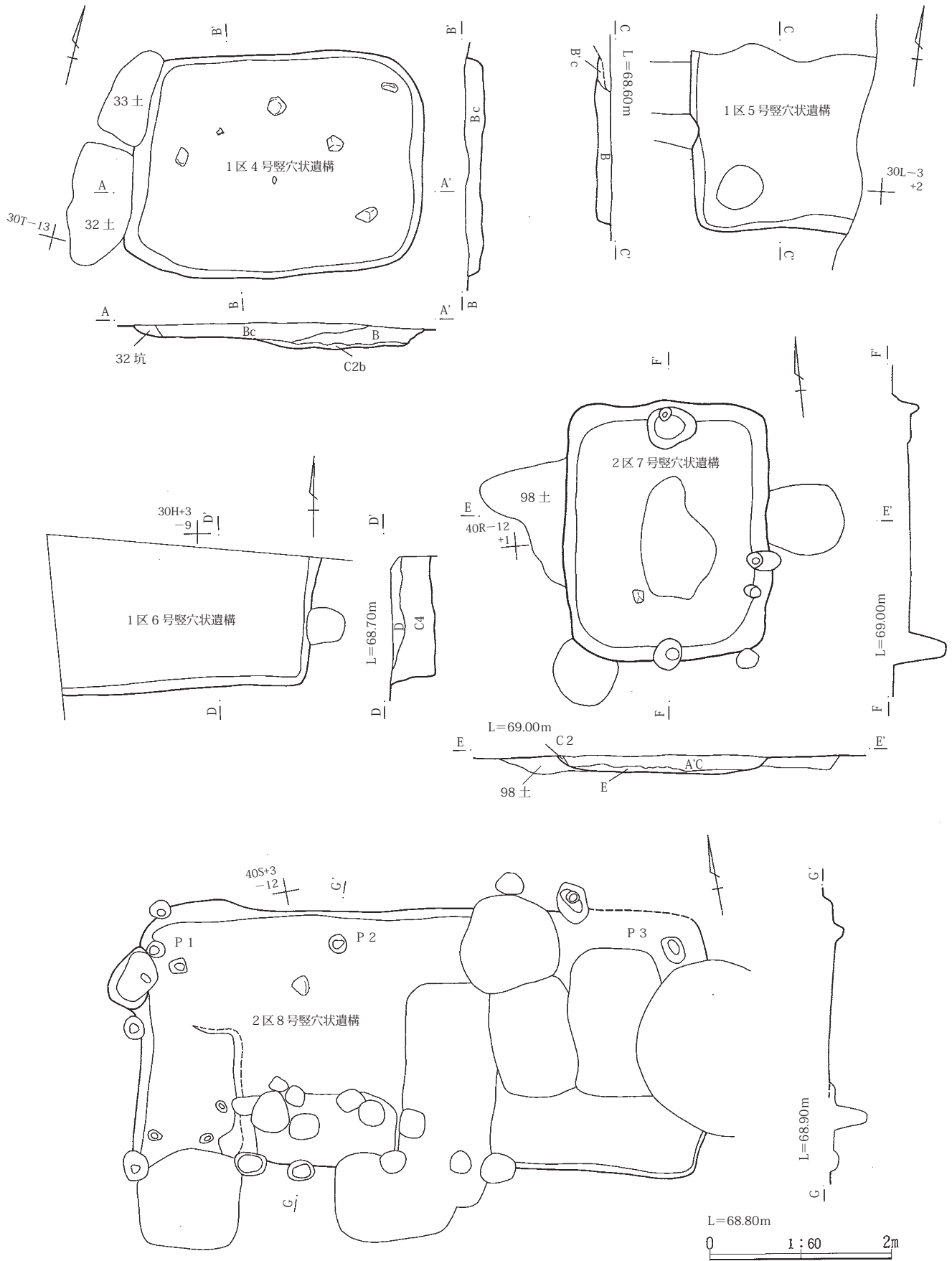
1区2号竪穴状遺構 (第132図 PL-29①②)

南館北掘にあたる33号溝から1.5m南側にある。付近は小竪穴状遺構の多い一画となっている。1号竪穴状



第132図 竪穴状遺構 (1)

II 発掘調査の記録



第133図 竪穴状遺構 (2)

遺構に先出し、15・16・20号溝に後出する。

位置 30 L—5グリッド。

規模形状 不整長方形を呈し、規模は東西長488cm、南北長241cm、深さ32cmを測る。

埋没土 重複する1号竪穴状遺構等と近似し、分かりにくい埋没土であった。

方位 N—88°W **面積** 13.64㎡

床面 東側に向かって低く傾斜しており、西側と10cmの比高差がある。中央付近に掘り下げ時の土を踏み固めたような面が確認されている。床面の汚れは少ない。

その他 柱穴・炉等の施設は確認できない。

遺物 焙烙らしい微細な土器片が2点出土している。他に土師器杯3片を混入していた。

1区3号竪穴状遺構 (第132図 PL—29③)

南館北隅にあり、33号溝と重複するが、新旧を確認することはできなかった。2号竪穴状遺構の北西2.5mにある。

位置 30 L・M—6グリッド。

規模形状 残存する南東隅・南西隅がともにやや鋭角なので、北側がやや狭くなる台形気味の形状となる可能性がある。南辺は382cm、東辺残存部分が105cm、深さ19cmを測る。

埋没土・壁 埋没土の記録を欠いている。壁は緩やかで直線的な立ち上がりをしている。

方位 推定N—79°W **面積** 残存4.95㎡

床面 緩やかな凹凸があり、最大5cmの比高差がある。

その他 柱穴・壁溝等の施設は確認されない。出土遺物はなかった。

1区4号竪穴状遺構 (第133図 PL—29④)

北館建物群の南東隅にあり、26号建物の区画内にあり、そっくり収まっている。32号土坑に後出する。北辺は6号墓坑と確認面で3cmほどしか離れていない。

位置 30 S・T—12グリッド。

規模形状 隅丸長方形を呈し、規模は長軸315cm、短軸245cm、深さ19.5cmを測る。

埋没土・壁 埋没土は人為的に埋め戻した可能性がある。径30cm前後の礫が混入している。

方位 N—75°E **面積** 7.17㎡

床面 北東に向かって低く傾斜する床で、北東側と南西側では9cmの比高差がある。東側は貼床状に埋戻し土を踏み固めた床面のようなだ。埋戻し土に焼土の混入が見られるが、床面の汚れはほとんどない。

その他 柱穴・壁溝は確認できない。

遺物 図示に耐えるものはなかったが、古代の土器小片が埋没土中からやや多く出土している。

1区5号竪穴状遺構 (第133図 PL—29⑤)

南館北西隅で確認し、北側・東側は調査区域外で不明部分が広いが、残存する範囲の規模から竪穴状遺構に加わると判断した。39号建物柱穴と直接重複する。3号竪穴状遺構同様に33号溝と重複し、14号溝とも重複するが、新旧は確認できていない。また、2号竪穴状遺構同様に小溝群に後出する。

位置 30 K・L—3グリッド。

規模形状 唯一残存する南西隅がほぼ直角であり、比較的整った四角形の遺構になると考える。西辺が198cm、南辺が197cm残存し深さは17.0cmを測る。

埋没土・壁 北側の埋没土に若干炭化物粒の混入が見られる。

方位 推定N—4°W **面積** 残存3.54㎡

床面 比高差5cm前後の緩やかな凹凸がある。竪穴住居のような汚れは見えない。

その他 柱穴・壁溝等の施設は確認できない。

遺物 図示できなかったが、内耳鍋胴部と思われる土器小片が埋没土より1点出土している。

1区6号竪穴状遺構 (第133図 PL—29⑥)

5号竪穴状遺構とは対称的に北側・西側が調査区域外だが、残存する範囲の規模からこれも竪穴状遺構に加わると判断した。

位置 30 H—8・9グリッド。

規模形状 南東隅に丸みはないが、やや鈍角に開き、不整な四角形となる可能性がある。残存部分で南辺275cm、東辺158cm、深さは46cmを測る。

埋没土・壁 表層に洪水砂が確認できる。壁は他の竪穴状遺構にくらべ垂直に近い立ち上がりである。

方位 0°に近い。 **面積** 残存部分で4.38㎡

床面 ほぼ水平で踏み固めのある住居床のような面が

検出されている。

その他 柱穴・壁溝等の施設は確認できていない。遺物の出土はなかった。

2区7号竪穴状遺構 (第133図 PL-29⑦⑧)

西館内の2か所の建物群の間にあり、18・20号掘立柱の柱穴と直接重複している。98号土坑に後出している。

位置 40Q・R-11・12グリッド。

規模形状 南北に長い隅丸長方形を呈す。南北軸285cm、東西軸222cm、深さ18cmを測る。

埋没土・壁 他の竪穴状遺構に比べ、洪水砂の混入の少ない黒色味の強い埋没土である。壁の立ち上がりは緩やかである。

方位 N-4°E **面積** 6.36㎡

床面 南へ低く若干傾斜しており、北隅と3cmに比高差がある。中央付近の床直上に焼土・炭化物粒混じりの灰層が床面直上に確認できる。

柱穴 南辺・北辺の壁際中央に形状の異なる2本の柱穴があるが、本遺構に確実に伴う施設であるかは確認できていない。北柱穴は床面からの深さ7cmだが、南柱穴は44cmを測る。

遺物 図示していないが、古式土師から平安期の須恵器まで、古代の土器小片が34点出土している。

2区8号竪穴状遺構 (第133図)

北壁東側など不明瞭な部分があるが、本遺跡中最も長い竪穴状遺構となった。土坑との重複が激しく、1軒の施設と断定できないが、南辺・北辺の壁筋や床面レベルに問題はない。埋没土の観察を欠いている。

位置 40R・S-10・11グリッド。

規模形状 東西に長い長方形で、南北軸275cm、東西軸624cm、深さ14cmを測る。

方位 N-75°W **面積** 18.21㎡

床面 ほぼ水平だが3cm前後の凹凸があるが、ほぼ水平の床になると思われる。汚れは見られない。

柱穴 重複ピットが多いが、北側に並ぶ3基のピットが本遺構に伴う可能性があると考えた。床面からの深さはP1→27cm、P2→32cm、P3→25cmである。

その他 遺物の出土はない。

(9) 土坑 (第134～142図 PL-23～26・38)

1a区31基、1b区4基、2a区65基、2b区3基の土坑を調査した。時期の不明な遺構が多いが、方形館区画内にあるものが圧倒的に多く、第5面および第4面の時期に相当するものと考えられる。時期が不明確なものは第5面で扱った。

土坑の外形的な分類を行うのにあたり、以下のような基準を設けた。

・**大型長方形土坑(A1類)** 長軸2m前後・短軸1m前後のもの。底面が平坦な場合が多い。

・**小型長方形土坑(A3類)** 長軸1m前後以内・短軸0.6m以内。大型土坑に比べ、中央が深い皿底状になる場合が多い。本遺跡ではこの大きさの墓坑が多い。

・**中型長方形土坑(A2類)** 大型土坑と小型土坑の中間的な規模。やや大型の墓坑に見られる形である。

・**方形土坑(A4類)** 短軸が長軸の3/4前後以上ある土坑をさす。

・**大型円形土坑(B1類)** 径1mを超えるもの。底面は中央が深く皿底状で、本来の開口部はさらに大きかったと推測できる。

・**小型円形土坑(B2類)** 径0.8m前後以下の、柱穴とするには大きすぎるもの。形状や深さは一様ではない。座棺型の墓坑に見られる大きさである。

出土遺物は一括して第142図に示した。一覧表(193～196頁)に個別土坑の基本的な内容を記したが、その他の内容について以下に記した。

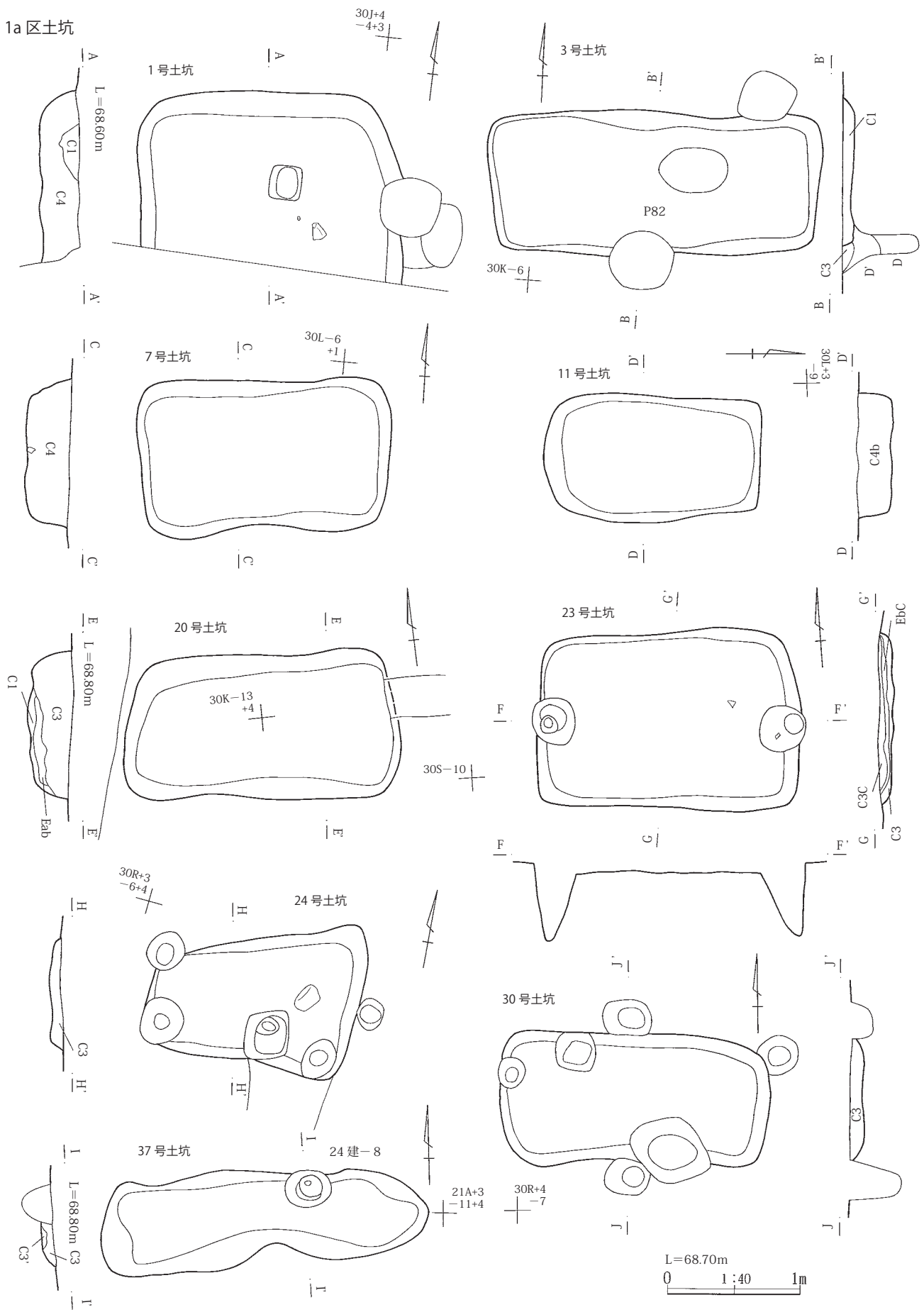
1a区の土坑 調査範囲の広さに比べ、土坑の数は少ない。また土坑間の重複の少ないことも特徴的である。定型的な平面形状を呈する施設がほとんどである。大型長方形土坑の多いことが目立ち、3・7・11・20・23・30号の6基がある。小型長方形土坑は31・35・38・40号の4基がある。中型長方形土坑は34号がある。方形土坑には27・28号がある。

このうち、長軸方向の壁際に柱穴状の施設のある23号土坑は小竪穴遺構と呼べるような形状である。柱穴が確実に本遺構に伴うか不明であり、土坑の中に留めた。35・40号土坑は唯一の土坑間重複例である。

小型円形土坑も多く、21号土坑など9基ある。

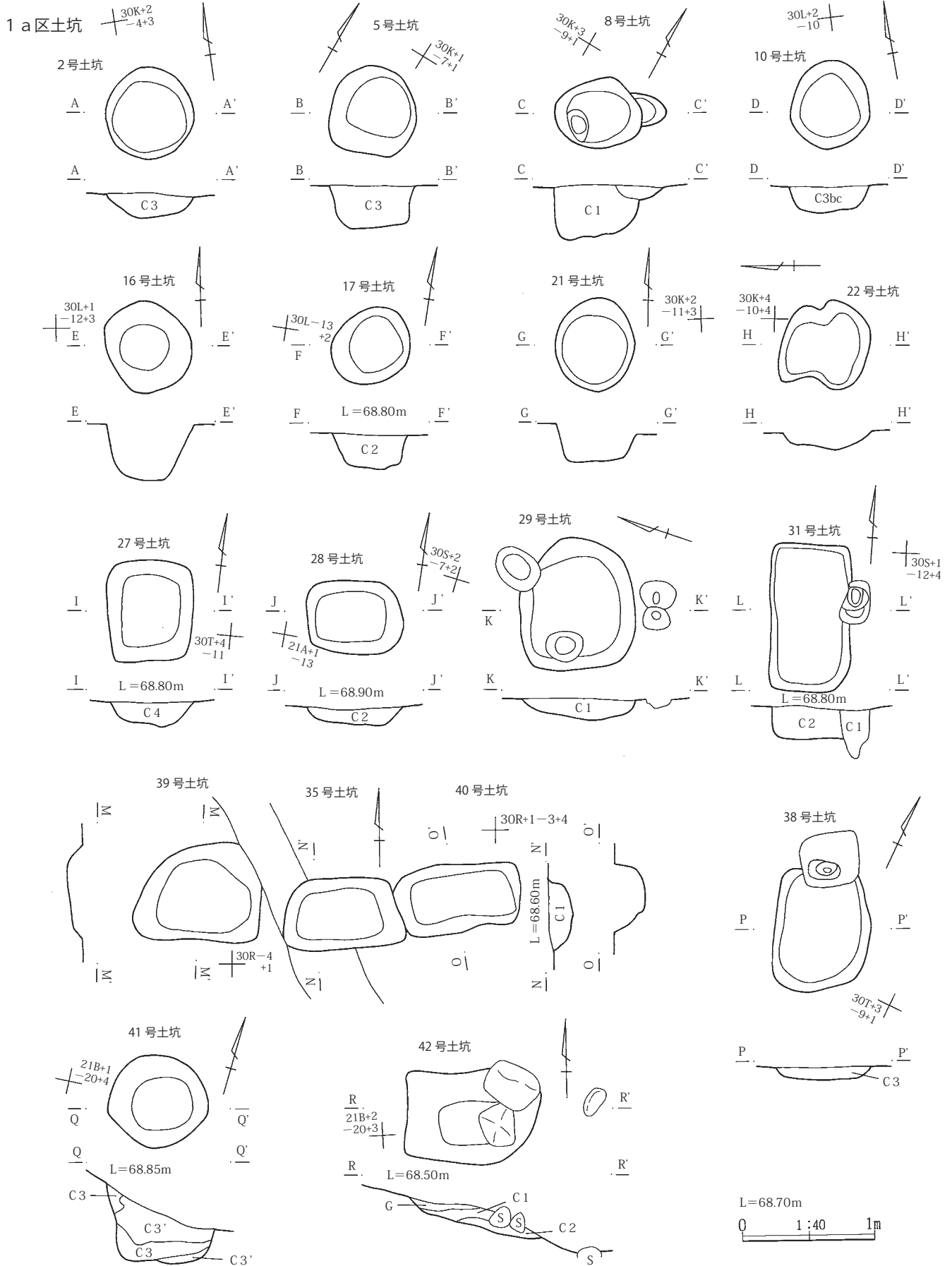
18号土坑は長軸が4mを超える細長い土坑である。

1a区土坑



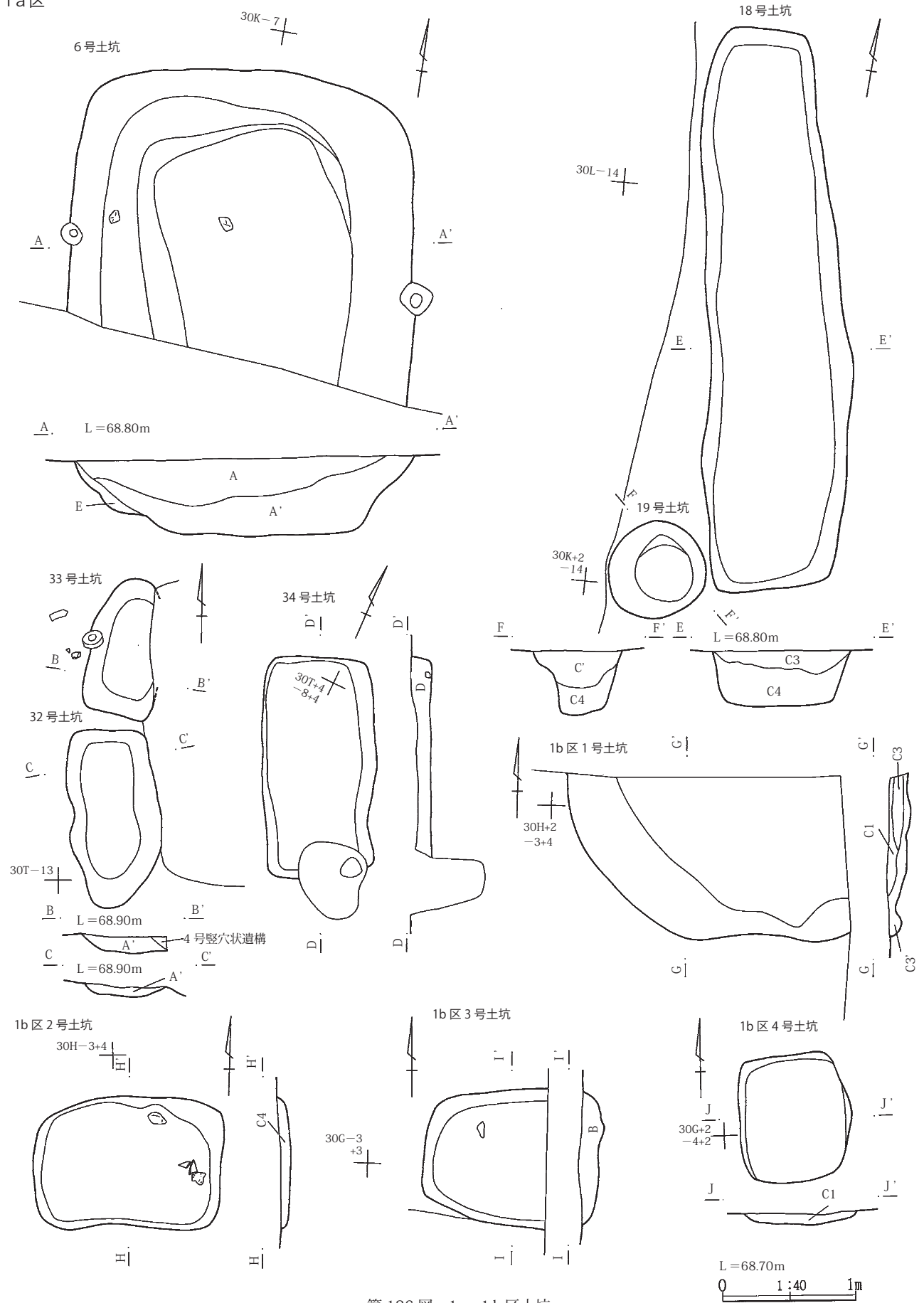
第134图 1a区土坑 (1)

II 発掘調査の記録



第135图 1a区土坑 (2)

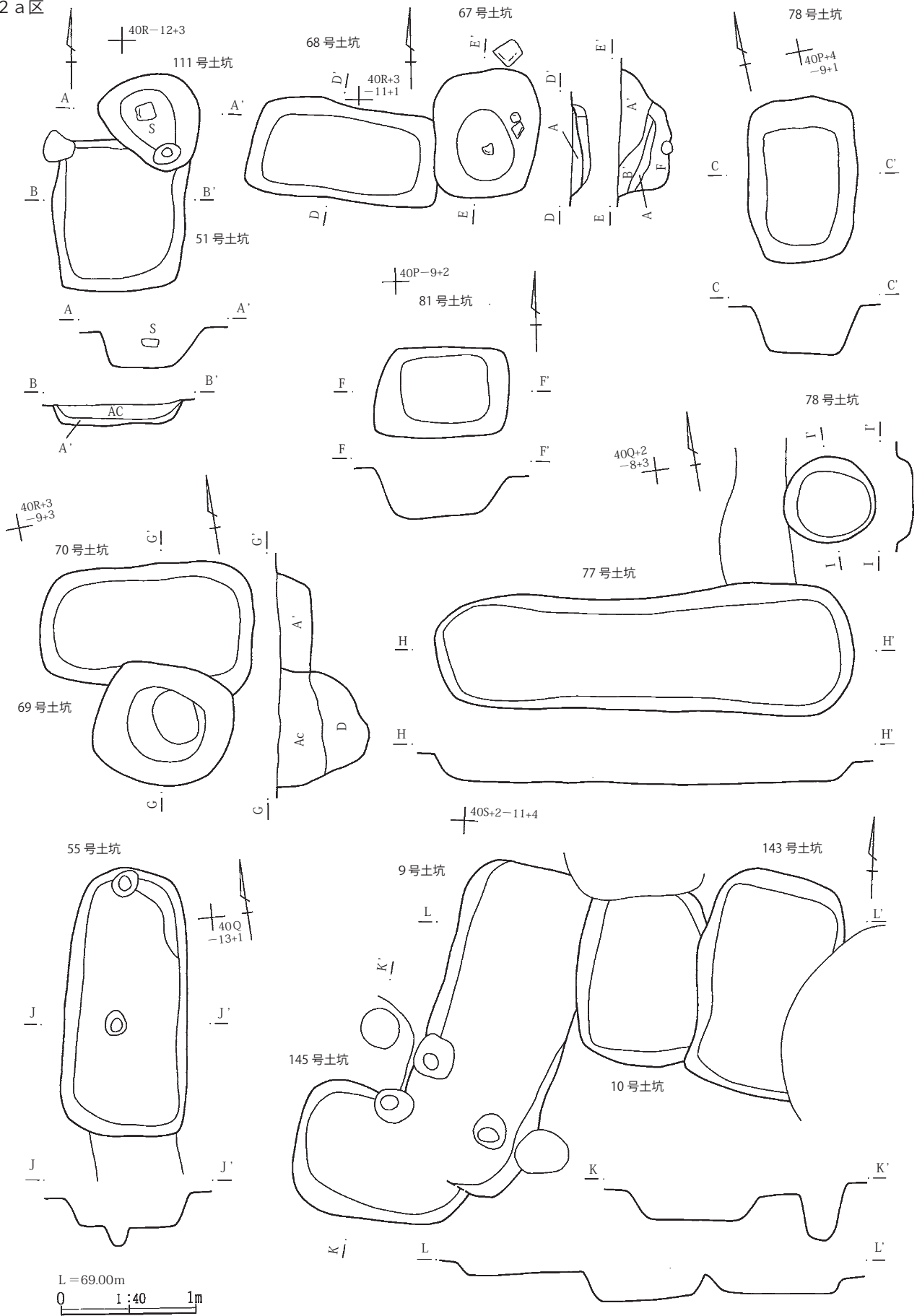
1a区



第136図 1a・1b区土坑

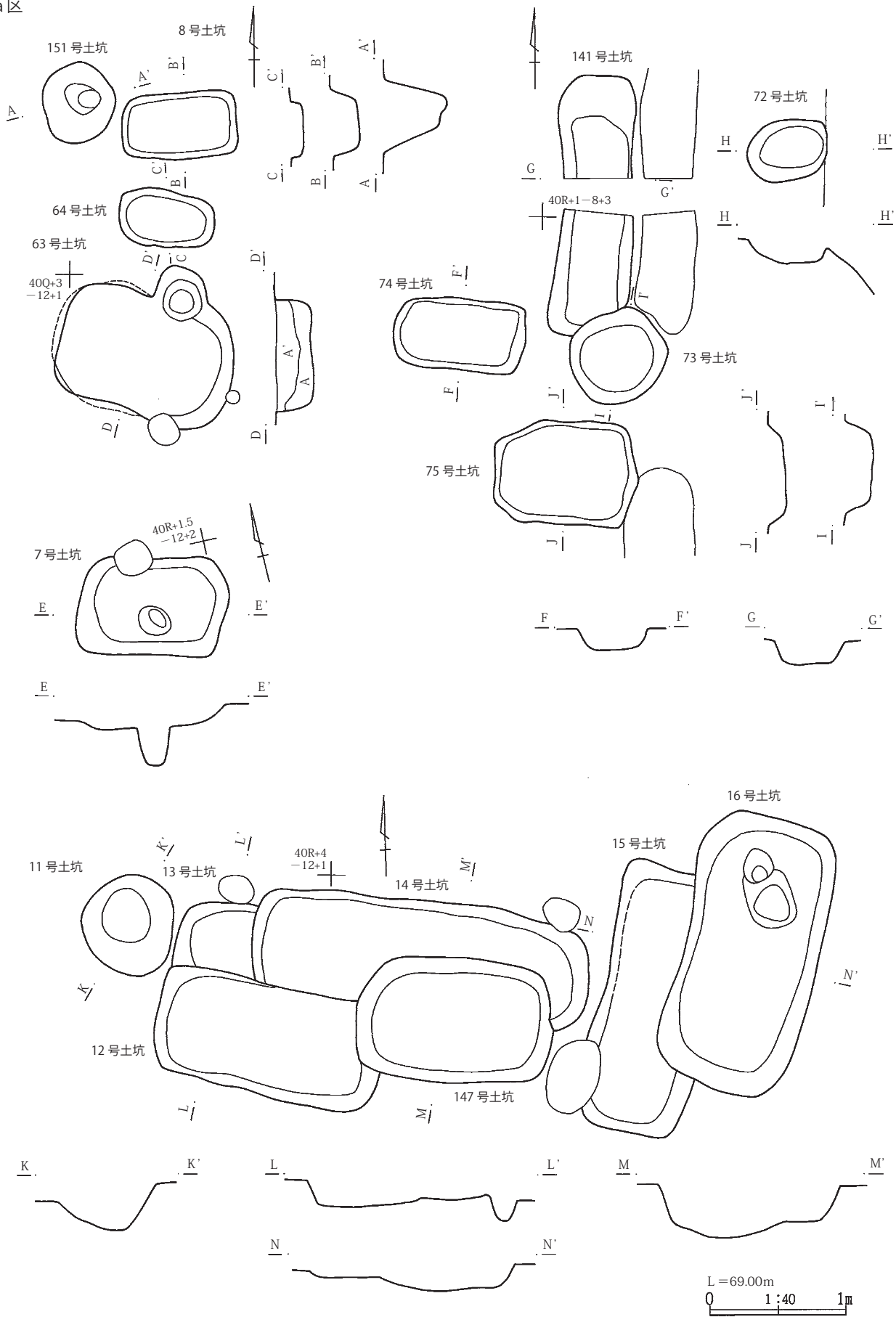
II 発掘調査の記録

2 a 区



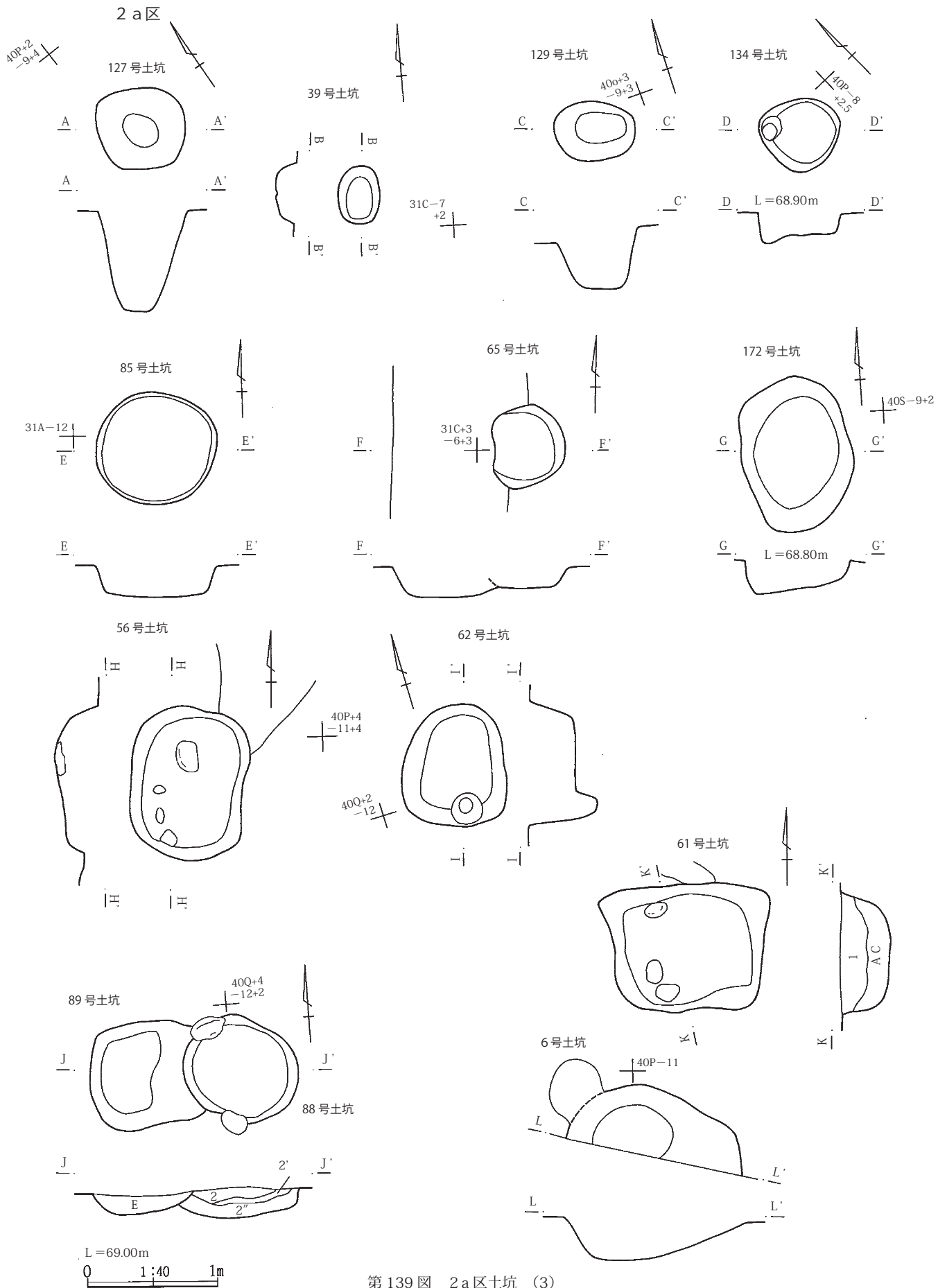
第137图 2a区土坑 (1)

2 a 区

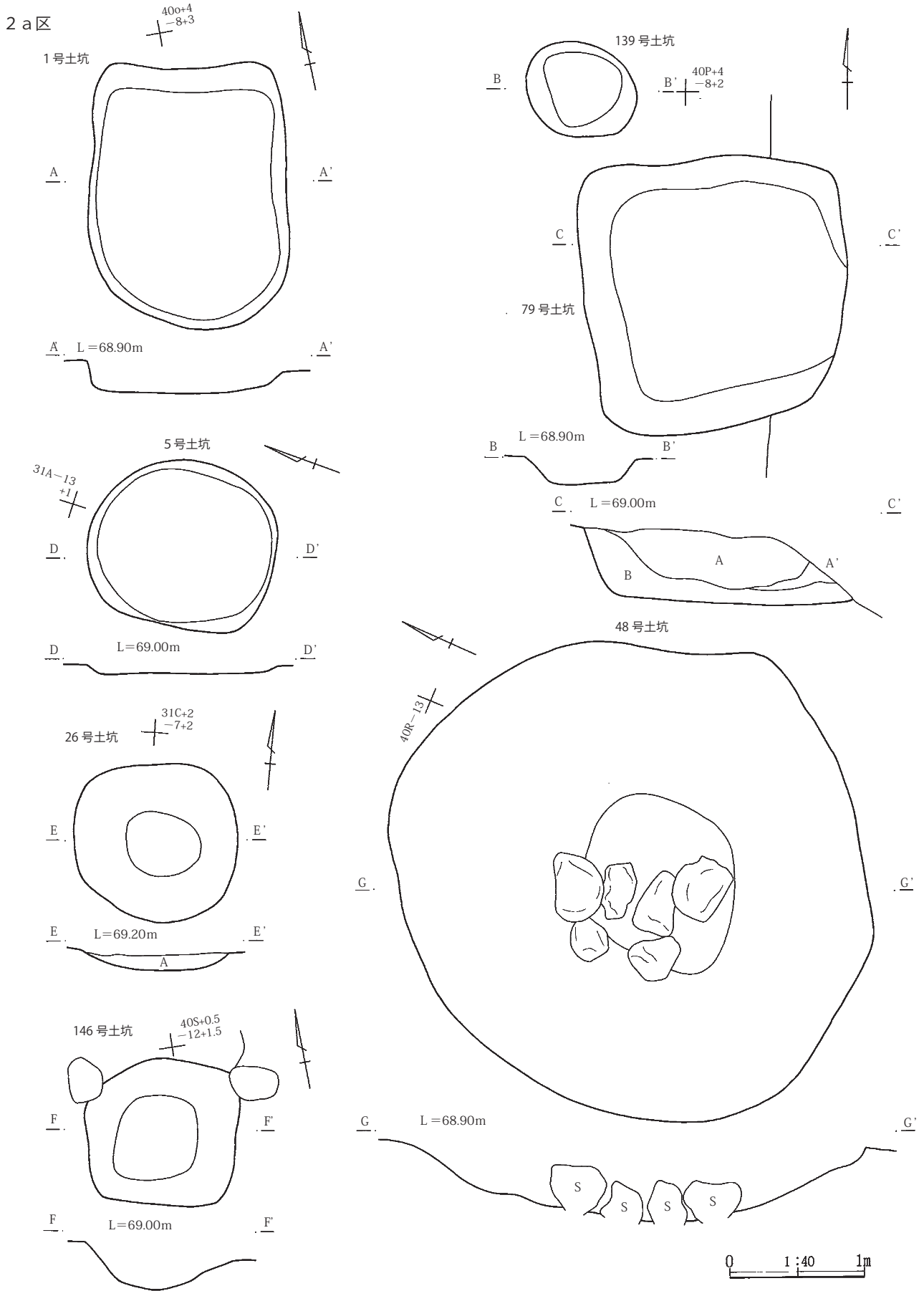


第138图 2a区土坑 (2)

II 発掘調査の記録



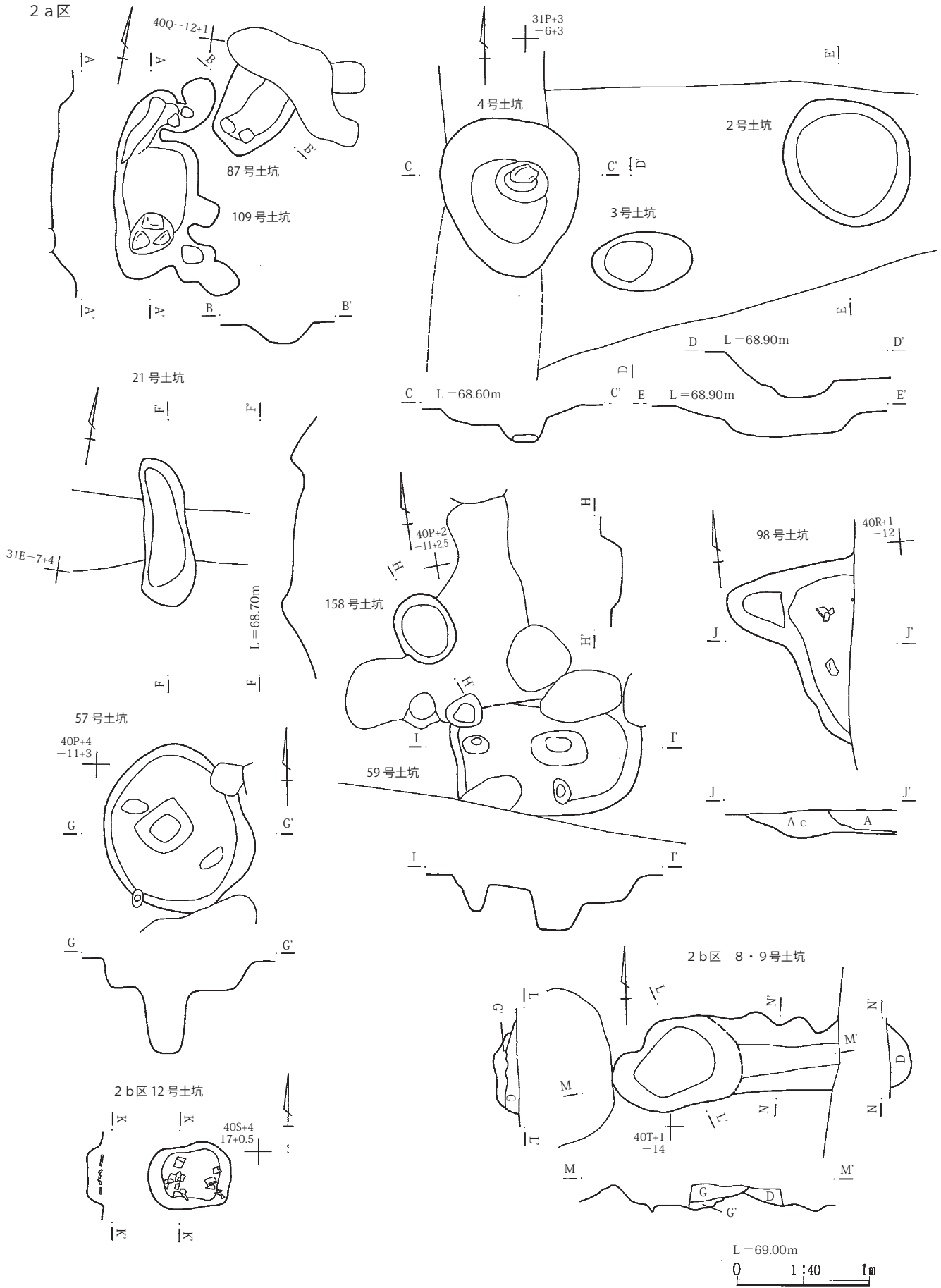
第139図 2a区土坑 (3)



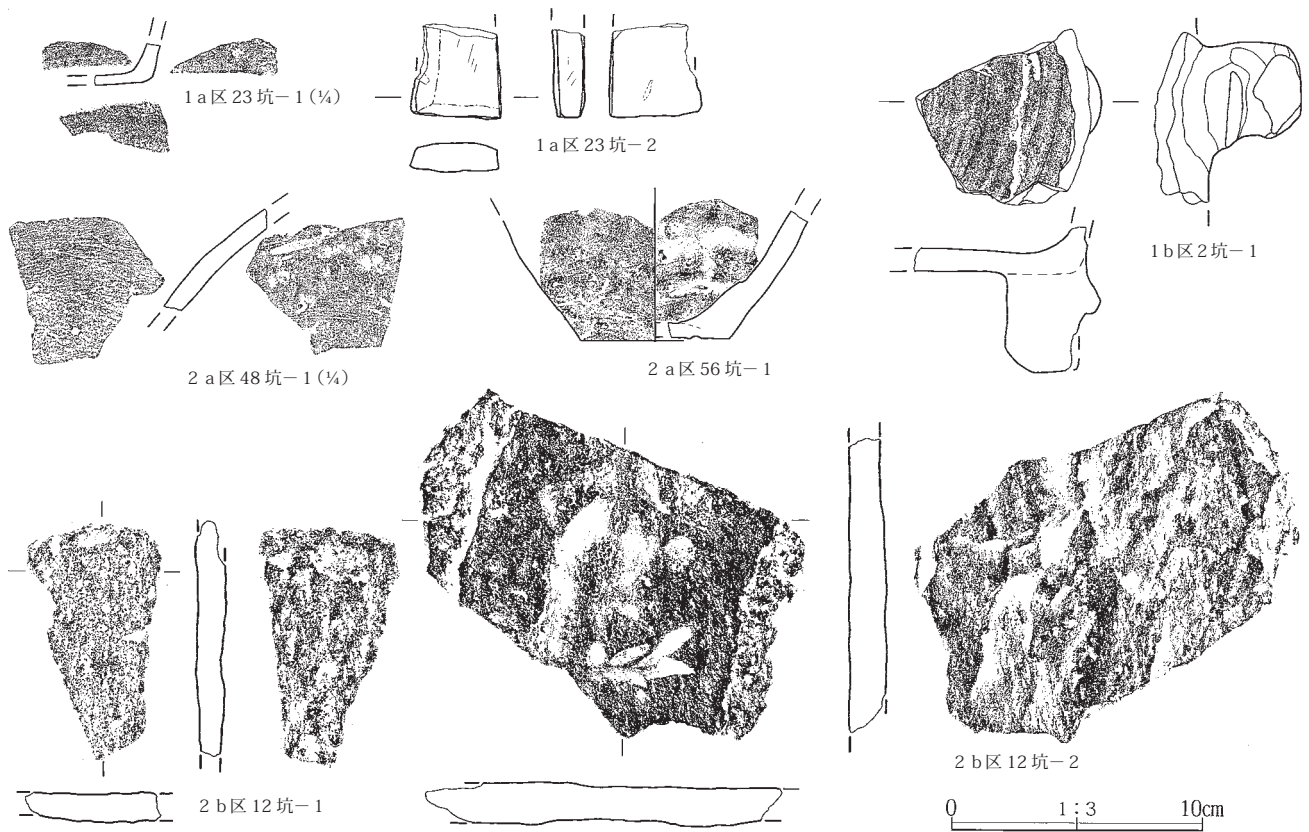
第140図 2a区土坑 (4)

II 発掘調査の記録

2 a区



第141図 2a・2b区土坑



第142図 土坑出土遺物

第10表 土坑一覧 (1 a区)

No.	位置	長軸×短軸×深さ (cm)	分類および遺物と埋没土	備考	挿図 写真
	形状				
1	30J-4 長方形	247 × 108 × 27.0 N-88°E	25	P 82 に後出。P 137・309 と重複。南側は未調査。竪穴状遺構の可能性。	134 図 PL-23 ①
2	30K-4 円形	70 × 67 × 23.0 N-0°	B 2 類。	39 号建物の区画内にある。	135 図 PL-23 ⑨
3	30K-5・6 長方形	250 × 113 × 10.5 N-86°E	A 1 類。	36 ~ 38 号建物区画内にある。P 82 に後出。	134 図 PL-23 ②
5	30K-7 円形	67 × 64 × 37.0 N-25°W		35 号建物の東側柱筋外側に接している。	135 図 PL-23 ⑩
6	30J-6・7 隅丸長方形	(215) × 262 × 64.0 N-8°W	内側の遺構が新しいか。	2 基の土坑の可能性。炭化物等の混入なく、竪穴状遺構にならないと判断。南側は未調査。	136 図 PL-24 ⑪
7	30K-6 長方形	192 × 117 × 34.5 N-82°E	A 1 類。	36 号建物の北側柱筋の北 1 m にある。	134 図 PL-23 ③
8	30K-9 楕円形	65 × 52 × 41.0 N-49°E		P 201 に先出。	135 図 PL-23 ⑪
10	30L-9・10 円形	75 × 59 × 20.0 N-14°E	B 2 類。	30・31 号建物区画内にある。	135 図 PL-23 ⑫
11	30L-8 長方形	160 × 96 × 28.5 N-4°E	A 1 類。	32 号建物の北側柱筋上にある。	134 図 PL-23 ④
16	30L-12 円形	69 × 62 × 42.5 N-40°W	B 2 類。		135 図 PL-23 ⑬
17	30K・L-13 円形	61 × 58 × 36.0 N-4°E	B 2 類。	南館の北西隅に、他の遺構から離れている。	135 図 PL-23 ⑭
18	30K・L-13 長方形	421 × 110 × 41.5 N-10°W		南館の北西隅にある。所謂イモ穴状。	136 図 PL-24 ⑩
19	30K-13 円形	75 × 69 × 49.5 N-41°E		南館の北西隅、35 号溝に接する位置にある。	136 図 PL-24 ⑫
20	30J・K-13・14 長方形	207 × 112 × 32.0 N-81°W	A 1 類。中層付近に灰や炭化物粒を多く含む。	28 号溝の西隅部分と重複。後出か。	134 図 PL-23 ⑤

II 発掘調査の記録

No.	位置	長軸×短軸×深さ (cm) 軸方向	分類および遺物と埋没土	備考	挿図
	形状				写真
21	30K-11 円形	70×60×25 N-0°	B 2 類。	28・29号建物の区画内にある。	135 図 PL-23 ⑮
22	30K-10 不整形	68×65×14.5 N-81°WE		28・29号建物の区画内にある。底面不整。	135 図 PL-24 ①
23	30R・S-9 長方形	204×136×12.0 N-87°W	A 1 類。中層以上で焼土や炭化物粒含む。砥石。他に内耳鍋 1 片。	長軸側壁際に 2 基のピットがあるが、本坑に伴うかは不明。	134 図 PL-23 ⑥
24	30R-6 台形	159×115×7.0 N-78°E		8号建物の東側柱筋上にあり、2号建物の西側柱穴と直接重複する。	134 図 PL-23 ⑦
27	30T-11 長方形	75×65×19.0 N-8°W	A 4 類。	22号建物の西側柱筋の 20cm 西にある。	135 図 PL-24 ②
28	21A-12 隅丸長方形	71×54×15.0 N-80°E	A 4 類。		135 図 PL-24 ③
29	30S-7 不整形	98×85×16.0 N-72°E		北館内の建物が最も密集する一画にあり、7棟の建物区画と重複。うち 5・6号建物の柱穴と直接重複する。	135 図 PL-24 ④
30	30R・S-6・7 長方形	204×100×10.5 N-87°W	A 1 類。土師器甕 1 片。	北館内建物密集地点の東隅にあり、7・8号建物の柱穴と直接重複する。	134 図 PL-23 ⑧
31	30R・S-12 長方形	111×60×27.0 N-0°	A 3 類。須恵器椀 No 1。	27号建物-7・5号墓坑に先出。	135 図 PL-24 ⑤
32	30S・T-12 不整形長方形	135×70×11.5 N-5°W	須恵器椀 No 1。他に土師器甕等 19 片。	4号竪穴状遺構に先出。	136 図 PL-24 ⑥
33	30T-12 不整形長方形	103×(41)×14.5 N 12°WE		4号竪穴状遺構と重複。	136 図
34	30T-8 長方形	165×85×15.5 N-24°W	A 2 類。須恵器杯 1 片。	北館内西建物群の東隅あり 18号建物の区画内にあり、19号建物の柱穴に後出か。	136 図 PL-24 ⑬
35	30R-3・4 台形	92×53×18.5 N-90°	A 3 類。	底面平坦。52号溝に後出か。40号土坑と並ぶように東側が接している。	135 図 PL-24 ⑦
37	21A-11・12 不整形長方形	285×74×13.5 N 85°WE		北館区画内の 24・25号掘立柱建物に先出する。	134 図
38	30T-9 不整形	92×72×10.0 N-23°W	A 3 類。	北館区画内西建物群のほぼ中央にある。20号建物の柱穴とは直接重複する。	135 図 PL-24 ⑭
39	30R-4 不整形	96×75×10.0 N-90°WE	暗褐色シルト質土。斑鉄あり。	52号溝とわずかに重複する。	135 図
40	30R-3・4 長方形	95×52×24.0 N-81°E	A 3 類。	35号土坑と西側が接する。	135 図 PL-24 ⑧
41	21B-20 円形	72×70×76.5 N-90°WE		調査区北西隅の 1号溝内にある。	135 図 PL-24 ⑨
42	21B-20 不整形	95×72×70.0 N-85°W		上層に径 30cm 大の礫混入する。	135 図

第 11 表 土坑一覧 (1 b 区)

No.	位置	長軸×短軸×深さ (cm) 軸方向	分類および遺物と埋没土	備考	挿図
	形状				写真
1	30H-3 不整形円形か	(206)×(124)×15.5 N-°WE	内耳鍋 2 片、土師質皿 1 片。	調査区北東隅にあり、北側・東側は未調査。	136 図 PL-25 ①
2	30G-3 長方形	140×95×9.5 N-90°	火鉢 No 1。他に内耳鍋 1 片。	2号建物の東柱筋の東 25cm の位置。P 13 とわずかに重複。	136 図 PL-25 ②
3	30F・G-3 長方形	(90)×102×13.5 N-°WE	内耳鍋 1 片、土師質皿 1 片。	調査区南東隅にあり、南側・東側は未調査。	136 図 PL-25 ③
4	30G-4 長方形	95×85×7.0 N-°WE		3号建物の区画内にあり。	136 図 PL-25 ④

第 12 表 土坑一覧 (2 a 区)

No.	位置	長軸×短軸×深さ (cm) 軸方向	分類および遺物と埋没土	備考	挿図
	形状				写真
1	400-8 不整形長方形	197×146×15.0 N-12°E			140 図
2	31D-6 円形	109×93×22.5 N-32°W			141 図
3	31D-6 楕円形	75×46×34.5 N-85°E			141 図
4	31D-6 卵形	116×104×57.0 N-0°			141 図
5	31A-13 円形	138×124×5.0 N-10°W	B 1 類。		140 図
6	400-1011 円形	138×(53)×30.5 N-52°W?		南側は調査区域外。103号建物の柱筋上にあり、5号建物の柱穴と直接重複する。	139 図

No	位置	長軸×短軸×深さ (cm)	分類および遺物と埋没土	備考	挿図
	形状	軸方向			写真
7	40R-12 隅丸長方形	108×74×13.0 N-70°W	A3類か。	120号建物の柱穴と直接重複する。	138図
8	40Q-10・11 長方形	84×49×20.0 N-86°E		118号建物の区画内にあり、119号建物北側柱筋上にある。	138図
9	40R・S-10・11 隅丸長方形	245×102×15.0 N-12°E	A1類。	10・145号土坑と重複。	137図
10	40S-11 隅丸長方形	(124)×(86)×31.0 N-4°E	A2類か。	9・143号土坑と重複。	137図
11	40R-12 円形	74×66×36.5 N-17°W	B2類。	120号建物柱筋上にあり、42溝号と重複する。	138図
12	40R-12 隅丸長方形	168×80×22.5 N-76°E	A2類。	120号建物区画内にあり、13・14・147号土坑と重複。	138図
13	40R-12 方形か	(52)×(54)×12.0 N-?°WE		120号建物区画内にあり、14・15号土坑と重複。	138図
14	40R-11・12 隅丸長方形	248×(76)×23.5 N-82°W	A1類。	120号建物区画内にあり、12・13・147号土坑と重複。	138図
15	40R-11 隅丸長方形	198×(68)×10.5 N-16°E	A1類。	120号建物柱筋上にあり、16号土坑と重複。	138図
16	40R-11 隅丸長方形	202×102×17.5 N-16°E	A1類。	15号土坑と重複。	138図
21	31D・E-7 不整長円形	115×40×21.0 N-19°W			141図
26	31C-7 円形	128×110×10.0 N-63°W	B1類。		140図
39	31C-7 長円形	43×32×15.0 N-0°	内耳鍋・播鉢各1片。他に土師器刷毛目糞等10片。		139図
48	40Q-12・13 円形	370×350×55.0 -	内耳鍋2片、他に土師須恵84片。底面直上に径30cm大の碟が集中。	井戸として調査を行ったが、深さがなく土坑に変えた。	140図 PL-26⑨
51	40P-12 長方形	(110)×100×21.0 N-0°	土師器刷毛目糞等15片。		137図
55	40P・Q-13 隅丸長方形	196×89×26.5 N-0°		114建物区画内。111建物-1と重複。	137図 PL-25⑤
56	40P-11 隅丸長方形	208×89×26.0 N-38°E			139図 PL-26⑤
57	40P-11 長円形	130×114×71.5 N-17°W	中層～低層に拳大の碟あり。	111・112号建物の区画内にあり、108・113号建物柱穴と直接重複する。	141図
59	40P-11 隅丸長方形	140×(83)×40.5 N-90°	土師器甕3片。		141図
61	40P-10・11 台形	130×98×37.5 N-90°	1→軽石やローム粒混じりの黒色土。土師器刷毛目糞等4片。		139図 PL-26⑧
62	40Q-11 隅丸長方形	95×83×37.5 N-26°E		110・116号建物の区画内にある。	139図 PL-26⑥
63	40Q-10・11 隅丸長方形	117×88×32.5 N-15°W	土師器刷毛目糞等22片。	103・104号建物の柱筋上、105号建物の区画内にある。	138図 PL-25④
64	40Q-10・11 隅丸長方形	70×40×12.0 N-78°W		118・119号建物の区画内にあり、110号建物柱穴と直接重複する。	138図 PL-25⑬
65	31C-6 不整円形	63×54×17.0 N-0°	B2類か。土師器甕1片。		139図 PL-26③
67	40R-10・11 隅丸長方形	97×78×41.5 N-0°		68号土坑と重複。	137図 PL-25⑥
68	40R-11 長方形	136×73×22.0 N-80°W	A2類。1層：ローム状土主体の褐色土で地山か。	67号土坑と重複。	137図 PL-25⑥
69	40R-9 方形	100×88×68.5 N-63°W	古式土師の出土多い。No1・2。他に甕類中心に63片。	70号土坑に後出。	137図 PL-25⑦
70	40R-9 隅丸長方形	155×(90)×26.5 N-77°W	A2類。土師器刷毛目糞等14片、須恵器甕1片。	69号土坑に先出。	137図 PL-25⑦
72	40R-8 長円形	62×45×15.0 N-75°E		43号溝西縁に重なる。	138図 PL-25⑫
73	40Q・R-8 円形	72×70×20.0 N-90°	B2類。土師器甕2片。	141号土坑と重複。	138図 PL-25⑮
74	40Q・R-8 長方形	98×52×17.0 N-83°	土師器刷毛目糞等6片。		138図 PL-26①
75	40Q-8 不整長方形	105×76×20.0 N-90°	土師器刷毛目糞等4片。		138図 PL-26②
76	40Q-8 円形	69×65×9.0 N-0°	B2類。土師器甕2片。		137図 PL-25⑧
77	40Q-8 隅丸長方形	302×98×23.0 N-82°W	土師器刷毛目糞等63片。		137図 PL-25⑪
78	40P-9 長方形	122×80×37.0 N-13°E	A2類。土師器甕3片。	101号建物柱筋上にある。	137図

II 発掘調査の記録

No	位置	長軸×短軸×深さ (cm)	分類および遺物と埋没土	備考	挿図
	形状	軸方向			写真
79	40P-8 方形	200×195×55.0 N-21°W	A1類。土師器刷毛目甕等12片。	43号溝西縁に重なる。	140図 PL-26 ①
81	40O-9 方形	99×65×22.5 N-90°	A3類。土師器刷毛目甕等6片、須恵器杯1片。	102号建物の柱筋上にあり、101号建物-5とわずかに重複する。	137図
85	40T・31A-11・12 円形	90×89×24.0	B2類。	123号建物の北側柱筋上にある。	139図 PL-26 ⑦
87	40P-12 長方形か	(60)×58×16.5 N-32°E			141図 PL-26 ③
88	40Q-12 円形	92×73×23.0 N-56°W	B2類。土層2→黒褐色土で下層ほど混入物増える。	89坑に先出。120号建物の区画内にあり、115号建物とわずかに重複する。	139図 PL-26 ⑩
89	40Q-12 方形か	(70)×80×18.0 N-90°		88坑に後出。110号建物柱筋上にある。	139図
92	40T-12 円形	55×55×19.0 N-12°W	B2類か。土師器甕3片。		付図参照
93	40T-12 円形	54×50×33.5 N-0°	B2類か。土師器刷毛目甕6片。		付図参照
98	40Q・R-12 不整形	-×-×23.0	土師器刷毛目甕等16片、須恵器杯1片。	7号竪穴状遺構と重複、後出か。	141図
109	40P-12 不整形長方形	142×62×18.0 N-0°	土師器甕3片、須恵器杯1片。		141図
111	40P-12 卵形	72×67×27.5 N-35°W			137図
127	40P-9 円形	69×63×77.5 N-55°W	土師器杯等5片。	101号建物の区画内にあり、97号溝とわずかに重複する。	139図
129	40O-9 長円形	62×46×47.0 N-67°W	土師器刷毛目甕等19片、須恵器杯1片。	97号溝と重複。	139図
134	40O・P-8 円形	62×55×22.0 N-50°W	土師器刷毛目甕等6片。	北西隅に柱穴、本遺構に伴うか不明。	139図
139	40P-8 長円形	85×70×19.0 N-50°W	土師器刷毛目甕等34片。		140図
141	40R-8 隅丸長方形	190×55×15.0 N-9°E	土師器1片、須恵器2片。	73号土坑と重複。	138図
143	40S-11 隅丸長方形	163×(100)×24.0 N-14°W	弥生-7。内耳鍋1片。土師器刷毛目甕等36片、須恵器杯1片。	121号建物の区画内にあり。86号井戸・8号竪穴状遺構・10号土坑等と重複。	137図
145	40R-11・12 隅丸長方形	(132)×100×21.5 N-78°W	弥生-1。		137図
146	40R・S-12 隅丸方形	112×110×37.5 N-75°W		120号建物北西隅部分にあり、コーナー柱穴と重複する。	140図
147	40R-11・12 隅丸長方形	142×90×41.0 N-80°W	磁器碗皿各1片。	12・14号土坑と重複。120号建物の区画内にある。	138図
148	40R・S-12 円形	50×42×- N-90°	土師器刷毛目甕等10片。	柱穴状。	付図参照
151	40Q-11 不整形円形	60×52×47.5 N-0°	軟質陶器鍋1片。土師器甕等4片、須恵器杯1片。	重複する柱穴の可能性あり。	138図
158	40P-11 長円形	50×43×15.5 N-28°W	土師器杯1片。		141図
172	40R・S-9 不整形長円形	120×85×20.0 N-11°E			139図 PL-26 ④

第13表 土坑一覧(2b区)

No	位置	長軸×短軸×深さ (cm)	分類および遺物と埋没土	備考	挿図
	形状	軸方向			写真
8	40T-13・14 不整形	(97)×66×17.5 N-69°E	1層：G層土中にブロック状のシルトを多量に含む褐色土層。	9号土坑に後出か。底面不整。	141図 PL-26 ④
9	40T-13・14 不整形	[95]×54×19.5 N-85°E		8号土坑に先出か。東隅は調査区境。底面不整で不明瞭。溝状の遺構となる可能性。	141図
12	31C-7 不整形	127×96×14 N-90°	表層から土師器片の出土多い。	板碑2点を図示したが、2b区3号井戸出土の可能性もあり、不明瞭。	141図 PL-26 ⑤

「イモ穴」と俗称される近世以降と推定される種芋等の貯蔵穴と考えられる施設で3・4面に近い性格の施設である。本遺跡では唯一の例である。遺跡付近の土地利用が畠より水田に向けられていたことが窺えよう。

・1 b区土坑 ピットの密集する地点であるが土坑の数が少なく、4基のみの調査である。

・2 a区土坑 最も土坑の密集していた地点で、土坑間の重複も多い。掘立柱建物の多い西屋敷内中央部分に土坑も多くなっている。大型長方形土坑には9・14・15・16・79の5基がある。大型円形土坑もこの地点のみに見られる遺構で、5・26の2基がある。中型・小型方形土坑の多さが顕著で、12と147、10と143など規模の近似した遺構の重複が目立つ。

この地点は中世の埋没土と古代の埋没土の差が不明瞭なうえ、土師器破片の出土する遺構が多く、時期の選別に苦慮した。古墳時代の集落のあった地点に中世館が築かれ、中世遺構にも多数の土師器が混入したものと考え、不明瞭なものは5面の遺構として扱った。

遺物 中世遺物の出土は全体にきわめて少ない。図示できたのは5点で、1 a区23号土坑、1 b区2号土坑、2 a区48・56号土坑、2 b区12号土坑からの出土である。いずれも小片で、これらも遺構の時期を確実にするものではない。

(10) 井戸

井戸は全調査区から確認されている。1 a区で16基、1 b区で1基、2 a区で3基、2 b区で3基の井戸を調査した。5面の井戸はすべて中世方形館区画内で確認されている。いずれも浅い遺構で井戸と断定するには不安があるが、調査中に観察した範囲では、少量であるが絶えず水の得られる施設であった。基本土層の観察の中でも明確な湧水層は確認できていない。

埋没土の表記には5面の共通記号(本文60頁)をもちいたが、それ以外の土層については各井戸の土層に記した。なお、埋没土に節を抜いた竹を埋めるような儀礼の痕跡はなく、有機物遺物の出土も少なかった。

出土遺物は第147～149図に一括して示した。

1 a区1号井戸(第143・147・148図 PL-27①・38)

南館の建物群の東隅を南北に走向する14号溝に後出すると思われる。39号建物の南東1.3mの位置にある。

石組みの井戸で、南側を調査時の排水溝で失っている。

位置 30 J-3グリッド

形状規模 円形になると思われ底面も広い。復元径は170cm前後で深さ105cmを測る。

埋没土 土層断面の記録を欠くが、砂質土でやや腐植土質の埋没土であった。

遺物 埋没土出土のカワラケ底部と軟質陶器および石製品を図示した。他に板碑片や礎石の可能性のある軽石製品、素焼きの鍋胴部片を埋没土中から出土している。

備考 石組みの井戸は他に14・15号井戸があるが、底面まで組まれるのは本井戸のみである。

1 a区2号井戸(第143図 PL-27②③)

南館を南北に横切る3本の平行溝のうち、中央にある18号溝に後出する井戸である。南側は調査時の排水溝により上面を失ったが、底面は完掘できた。

位置 30 J-7・8グリッド

形状規模 東西に長い長円形気味のプランが想定される。断面は漏斗状に開き気味で、直線的に平坦な底面から立ち上がっている。推定径は160cm前後で深さ167cmを測る。

埋没土 上面は掘り直しまたは別遺構の可能性はある。上面で締まり強く、下層で締まり欠く。

遺物 出土遺物はない。

備考 西側の窪みは水汲み上げ時に壁が削れた痕跡の可能性はある。

1 a区3号井戸(第143・147図 PL-27④・38)

2号井戸の北西10cmの地点に近接する。旧地表面レベルでは重複する遺構であろう。35号建物の南西隅柱穴がある位置だが、断面観察では柱穴は認められない。南隅が不明瞭な33号建物の柱筋と重複すると思われる。18号溝と重複する。

位置 30 J-8グリッド

形状規模 ほぼ円形で、筒状にまっすぐに掘り下げられている。底面は平坦である。規模は確認面の径95cm、深さ138cmを計る。

埋没土 人為的な埋戻しの可能性がある。中層以下に径20cm前後で大きさの近似した礫が約20点出土しているが、石組みの痕跡は認められない。

備考 埋没土内の在り系土器片1点を図示した。他の遺物の出土はない。

1 a区4号井戸 (第143図 PL-27⑤)

南館の北西側の建物群から離れた地点にあり、29号建物の北西3mの距離である。また、北西角が鍵の手状に窪む28号建物からは北辺・西辺の両柱筋から外側に向かって延長線を引くと交点部分にあたる。

位置 30L-12グリッド

形状規模 ほぼ円形で、確認面での規模は113×107cm、深さ124cmを計る。底面は平坦で、断面は漏斗状に小さく開き気味になる。

埋没土 人為的な埋戻しが想定できる。

備考 出土遺物はない。

1 a区5号井戸 (第144図 PL-27⑥)

33号溝内にあり、断面の記録を欠いている。33号溝掘削時に本井戸の存在は把握できておらず溝に先出する可能性もあるが、確認面での口径が広く、溝廃棄後の窪みを利用した井戸と考えたい。

位置 30M-5・6グリッド

形状規模 ほぼ円形を呈す。確認面での規模は212×183cm、深さ141cm、33号溝上面からの深さ207cmを測る。底面は比較的平坦で、壁は弱く上方へ広がっている。

備考 埋没土の記録を欠く。出土遺物はない。南側上面に2基のピットが重複する。確認面からの深さは西側45cm、東側40cmで規模は近似している。井戸枠状の施設に伴う柱穴の可能性はある。

1 a区6号井戸 (第143図 PL-27⑦⑧)

北館の南隅、他の遺構から離れた地点にある井戸で、20号建物の南4.6m、17号建物の西4.8mの位置にある。

位置 30R-9グリッド

形状規模 円形で、規模は確認面の径137cm、深さ162cmを計る。底面は平坦で、断面は漏斗状に広がっている。

埋没土 西側から人為的に埋められている。

遺物 土師器杯小片が混入する以外、出土遺物はない。

備考 上面から中層にかけて径10～30cmの大きさの礫約50個が投げ捨てられた状態で出土したが、石組みの

痕跡は観察できず、別地点から廃棄された礫と思われる。

1 a区7号井戸 (第143図 PL-27⑨)

北館の南側にある。8号建物の区画内にあり、9号建物の柱筋と重複している。

位置 30R-6・7グリッド

形状規模 開口部は不整で楕円形に近いが、底面はほぼ円形を呈し平坦である。確認面での規模は120×100cm、深さ119cmを計る。

埋没土 人為的な埋戻しが想定される。

備考 中層埋没土中に径20cm前後の礫約10個が北側から投げ捨てられた状態で出土した。出土遺物はない。

1 a区8号井戸 (第144・147図 PL-27⑩・38)

33号溝内にあり、5号井戸の東側1.2mの位置にある。

位置 30L・M-5グリッド

形状規模 方形に近い歪んだ円形を呈している。確認面での規模は145×132cm、深さ73cm、33号溝上面からの深さ162cmを計る。

埋没土 上面は33号溝埋没土に見られる砂の混入がなく、同溝に先出する遺構と考えたい。

遺物 底面付近から多量の細かな木片が出土しているが、その中にあった椀破片を図示した。

備考 上層から径30cmを超える礫が2個出土した。

1 a区9号井戸 (第143図 PL-27⑪)

21号西溝の中にある。浅い遺構だが湧水ではなく溝内の水を溜める施設と考え井戸とした。

位置 30S-13・14グリッド

形状規模 上面は長方形で、中段から正方形の2段掘りの状態になっている。井桁状の井戸枠が想定されるが痕跡は確認できない。底面は比較的平坦である。確認面での規模は92×71cm、深さ52cm、21号溝上面からの深さ131cmを計る。中段の南西隅に底面からの深さ19cmの不明瞭なピット状の窪みがある。

方位 N-86°W

埋没土 上面に21号溝埋没土が見られ、同溝と同時存在していたと考えた。

備考 出土遺物はない。木製井戸枠を想定する炭化物の出土もない。上層土に礫が混じるが、重複する溝埋没土内の混入品であろう。

1 a区 10号井戸 (第143・147図 PL-27 ㉔・38)

1号溝内で確認した井戸で同溝に先出する。

位置 21 A-20 グリッド

形状規模 ほぼ円形を呈し、確認面での規模は98×90cm、深さ55cm、1号溝上面からの深さ120cmを計る。

埋没土 1→担当者が「C混じり黒」と呼ぶ古墳時代以降の黒色土主体で下層へ向かうほど軽石やローム粒の量が増す。

遺物 埋没土出土の陶器底部片と軟質陶器片を図示した。他に古式土師器を主体とする土師器小破片8片が混入している。

備考 埋没土は古代の遺構と同様である。埋戻し土に古代遺物の包含層土が混入したものと考えられる。

1 a区 11号井戸 (第144図 PL-27 ㉓)

21号西溝の底面付近で確認できた溝である。9号井戸の北8mの地点にある。溝底面レベルでは土坑規模の施設であるが、9号井戸同様に湧水ではなく溝内の水を溜める施設と考え井戸とした。

位置 21 A-13 グリッド

形状規模 円形で、規模は確認面で径91cm、溝底面からの47cm、溝上面からの深さ107cmを計る。

埋没土 上面にのみ小礫混じりの溝埋没土が見られ、溝に先出または同時存在の施設と考える。

遺物 陶器胴部小片を1片出土している。他に刷毛目のある土師器甕片等8片の混入がある。

1 a区 12号井戸 (第144・147・148図 PL-27 ㉕・38)

北館内の建物が最も密集する一画の北隅にあり、3号建物の柱筋上にある。また、32号溝から53号溝が直角に分かれる地点とも重複している。当初、溝内の水を溜める浅い井戸を想定したが、掘り上がりは本遺跡で2番目に深い井戸となった。

位置 30 T-8 グリッド

形状規模 やや歪んだ円形を呈している。確認面での規模は135×120cm、深さ206cmを測る。底面は平坦で、壁の一部にタナ落ち状に広がる地点がある。

埋没土 上面は32号溝埋没土が覆う。

遺物 埋没土内の軟質陶器2点と石臼片1点を図示した。その他の出土遺物はない。

備考 10号建物に先出すると思われる。

1 a区 13号井戸 (第145図 PL-27 ㉖)

21号南溝の立ち上がり部分に穿たれている。同溝との新旧を把握できなかったが、溝埋没土の混入のほとんどないことより、同溝に先出する施設と考える。

位置 21 B-13 グリッド

形状規模 ほぼ円形。規模は確認面で78×70cm、深さは溝底面から63cm、溝上面から167cmを計る。

埋没土 シルト質土や黒色土、褐色粘質土がブロック状に混じる黄褐色土で、人為的埋戻し土のようだ。

備考 遺物の出土はない。形状・規模などに11号井戸との類似点が多いが、壁面にかかっている点が異なり、同時存在は考えにくい。

1 a区 14号井戸 (第144・147図 PL-28 ㉑④・38)

北館西の館外にある、本遺跡で最も大規模な石組み井戸である。石組み井戸としては開口部の開きが大きい。

位置 30 T・21 A-18・19 グリッド

形状規模 掘り方は円形を呈す。確認面での規模は184×173cm、深さ129cmを計り、1区で最大の規模である。

埋没土 黒褐色土層で、わずかに焼土・炭化物粒が混じる。裏込め部分には不揃いの粘性土ブロックが混じる。

備考 須恵器の出土が多く、1点を図示した。他に須恵器甕等4片の出土があった。埋没土は古代の遺構に近似するが、石組みの様子から出土遺物の年代を遺構の時期とは決定し難い。住居埋没土の混じる土で埋め戻されたものと推定する。なお、本井戸の礫の分析を本文237頁に記した。

1 a区 15号井戸 (第145・170図 PL-28 ㉗⑤)

平安時代の須恵器を出土するが、埋没土の詳細な観察を欠き帰属は不確定である。石組みの井戸は他の例は中世以降であり、本項で扱った。二つの井戸の重複または掘り直しを行っている。石組は新しい井戸の施設で長さ25cm前後の細長い礫を小口積みしている。

位置 30 T-15 グリッド

形状規模 掘りあがりは双円形だが、1基ごとの平面は東側が円形、西側は隅丸方形を呈している。確認面での規模は径が双方とも130cm前後、全体の長さ179cm、深さ126.5cmを測る。

埋没土 14号井戸と同じ黒褐色土層だが、混入物は少

ない。裏込めに白色味をおびた粘性土の混入が多い。

遺物 播鉢小片が1点出土している。平安時代の須恵器の出土が多く遺構外の遺物として第170図に掲載した。他に土師器51片、須恵器42片の出土がある。

備考 出土遺物は古代の土器が中心だが、石組み井戸であり中世以降の施設と考えたい。

1 a区 16号井戸 (第145・147～149図 PL-28③⑥・38・39)

北館建物群の東側にあり、3号建物の東60cmに隣接している。北隅は調査区境に接しているが、ほぼ全容を確認できた。

位置 30 S-5グリッド

形状 東西に長い楕円形に近いプランを呈しているが、底面は円形に近い。

埋没土 西側から投げ込まれるようにして多量の礫が上層から中層にかけて出土した。その中に石製品の混入も多かった。

遺物 軟質陶器鍋(1・2)の他、石鉢(5)・不明軽石製品(6)等を図示した。他に同種の鍋胴部片1点の出土がある。

備考 埋没土中の礫は井戸石組みに適した大きさだが、石組みの痕跡は確認できない。

2 a区 37号井戸 (第145図 PL-28⑦)

西館の北側区画外、34号溝と35号溝が交差する位置に穿たれている。

位置 31 C-7グリッド

形状規模 上面・底面ともほぼ円形を呈す。規模は90×86cm、34号溝上面からの深さ99cmを測る。

埋没土 土層断面の記録を欠くが、重複する溝上面から本遺構は確認できていない。

備考 出土遺物はない。時期不明の施設で、第3・4面の遺構となる可能性がある。

2 a区 84号井戸 (第145図 PL-28⑧)

西館の北寄り・121号建物の西側柱筋上にあり、8号竪穴状遺構9・10号土坑と重複している。埋没土の記録を欠いている。

位置 40 S-11グリッド

形状規模 やや歪んだ円形を呈している。規模は112×110cm、深さ81cmを測る。

備考 出土遺物はない。南西側壁面の中央から開口部にかけて、水を汲み出す際、桶などが削った痕跡と思われる

る壁の窪みが見られる。

2 a区 86号井戸 (第145図 PL-28⑨)

西館の北寄り121号建物の身屋内にあり、8号竪穴状遺構の東壁部分や143号土坑と重複している。84号井戸の南東1.4mの地点にある。埋没土の記録を欠いている。

位置 40 R・S-10・11グリッド

形状規模 南東側に大きく開き、平面は楕円形に近い。規模は202×183cm、深さ94cmを測る。

備考 出土遺物はない。

2 b区 1号井戸 (第146図 PL-28⑬)

2 b区西隅に3基の井戸が接近して設けられている。1・2号井戸は類似点が多い。22号溝に後出する。

位置 40 Q-13・14グリッド

形状規模 確認面は楕円形だが、中層以下はほぼ円形を呈している。規模は136×110cm、深さ154cmを測る。

埋没土 1→基本土層4層にあたる黒褐色土が主体で1'はロームブロックの混入やや多い。

備考 出土遺物はない。北東側壁面の中央から開口部にかけて、水を汲み出しの痕跡らしい壁の窪みが観察できる。

2 b区 2号井戸 (第146図 PL-28⑭⑱)

1号井戸の1.2m北に隣接する。

位置 40 Q-13・14グリッド

形状規模 確認面では楕円形だが、中層以下は円形である。規模は147×108cm、深さ152cmを測る。

埋没土 1→1号井戸に類似する黒褐色土層で1'はロームブロックの混入やや多い。

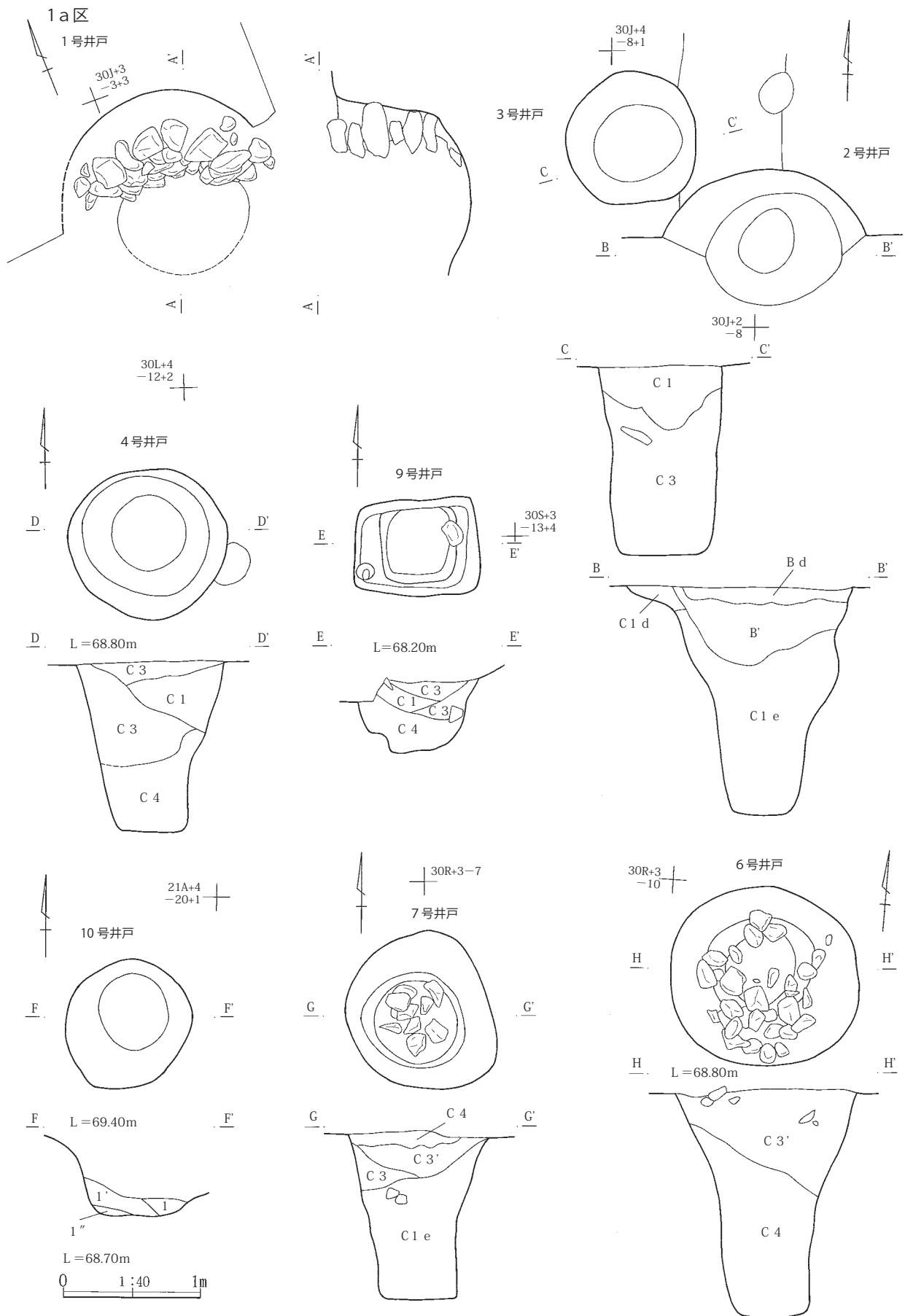
備考 出土遺物はない。1号井戸同様に東側壁面に窪みが見られる。

2 b区 3号井戸 (第146・147図 PL-28⑳㉑)

隅は2 a区2 b区の調査区境に接し、排水用に設定した溝のため不明瞭な部分がある。南西側にある2号井戸とは確認面で10cmしか離れていない。

位置 40 Q・R-13・14-グリッド

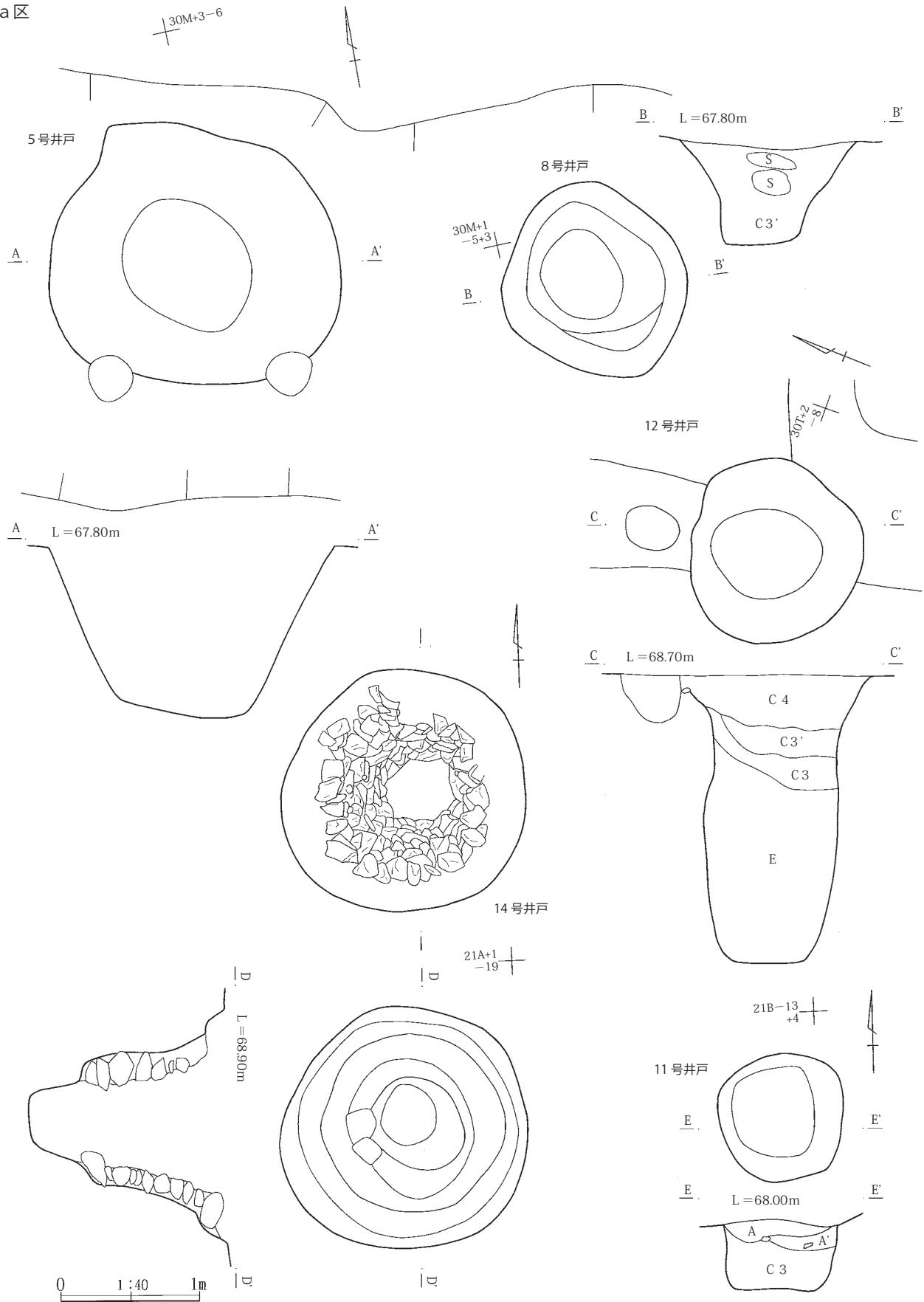
形状規模 平面は南側にやや広がる楕円形を呈す。中層から開口部へ向かって断面漏斗状に大きく開く。規模は383×328cm、深さ232cmを測る。開口部はきわめ



第143図 1a区井戸 (1)

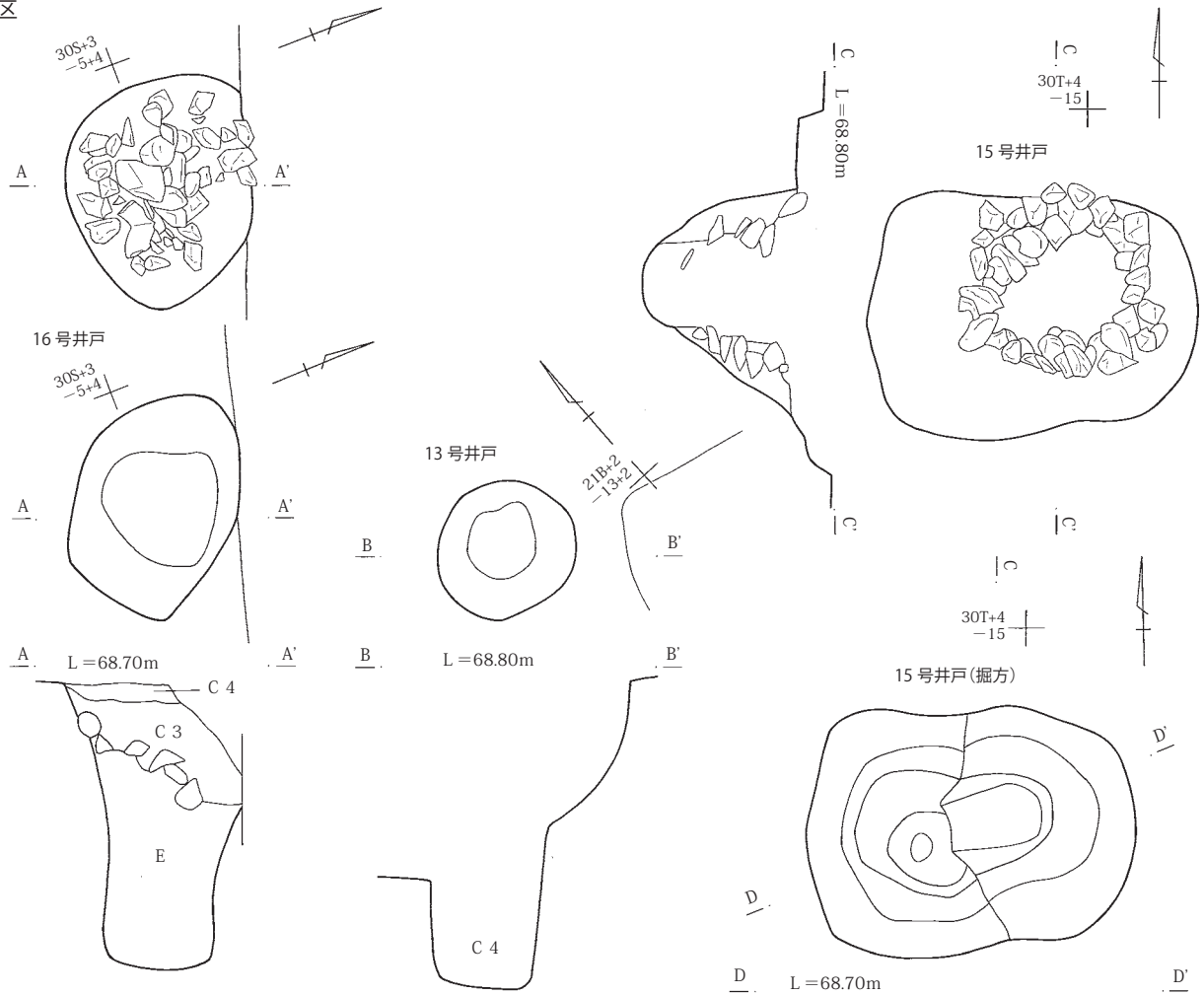
II 発掘調査の記録

1a区

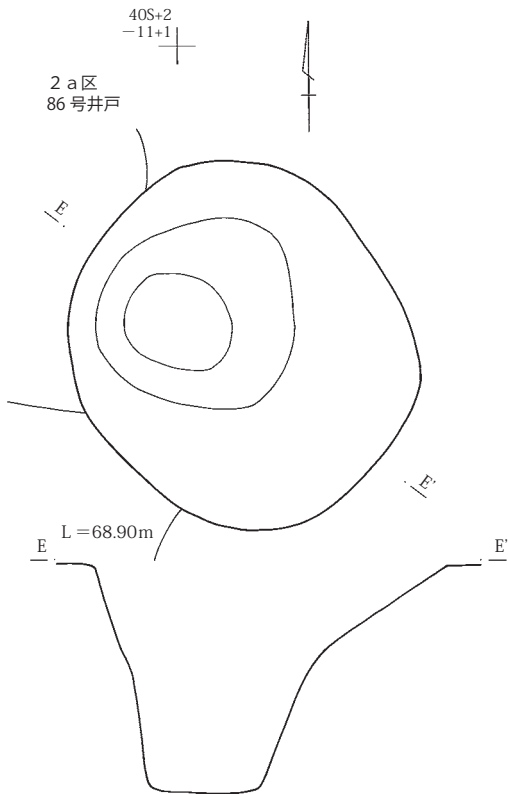


第144図 1a区井戸 (2)

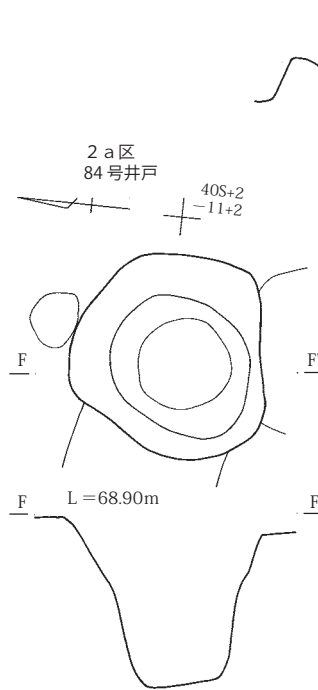
1a区



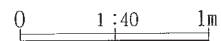
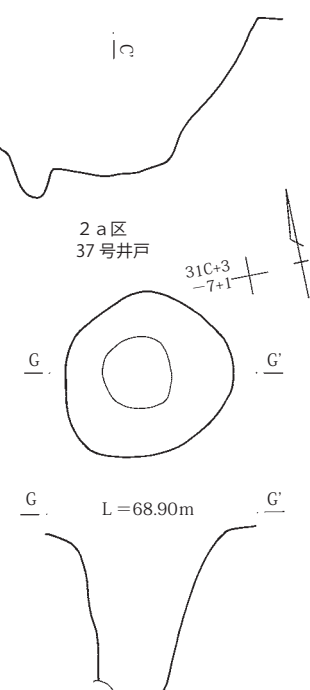
2 a区
86号井戸



2 a区
84号井戸

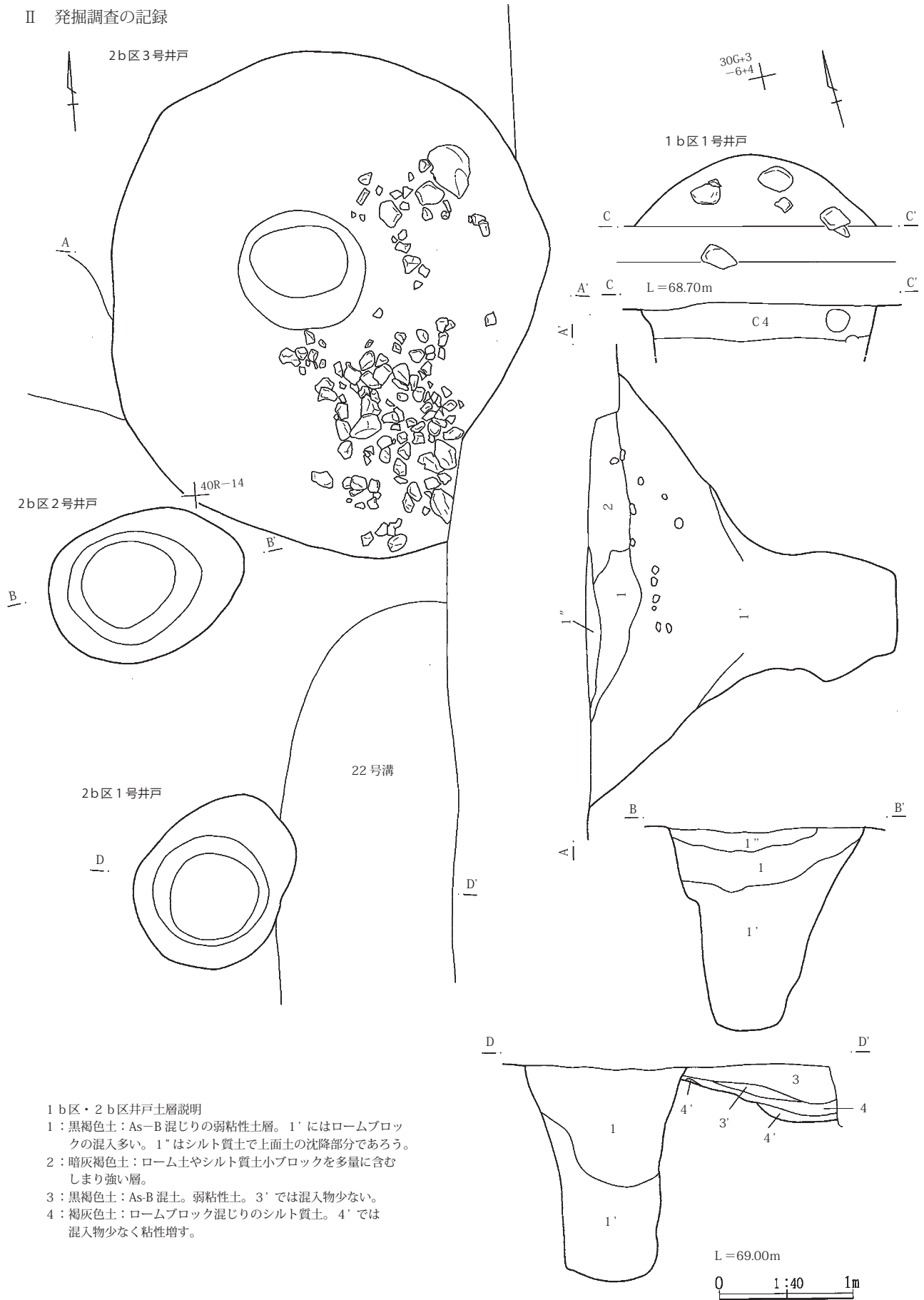


2 a区
37号井戸



第145図 1a・2a区井戸

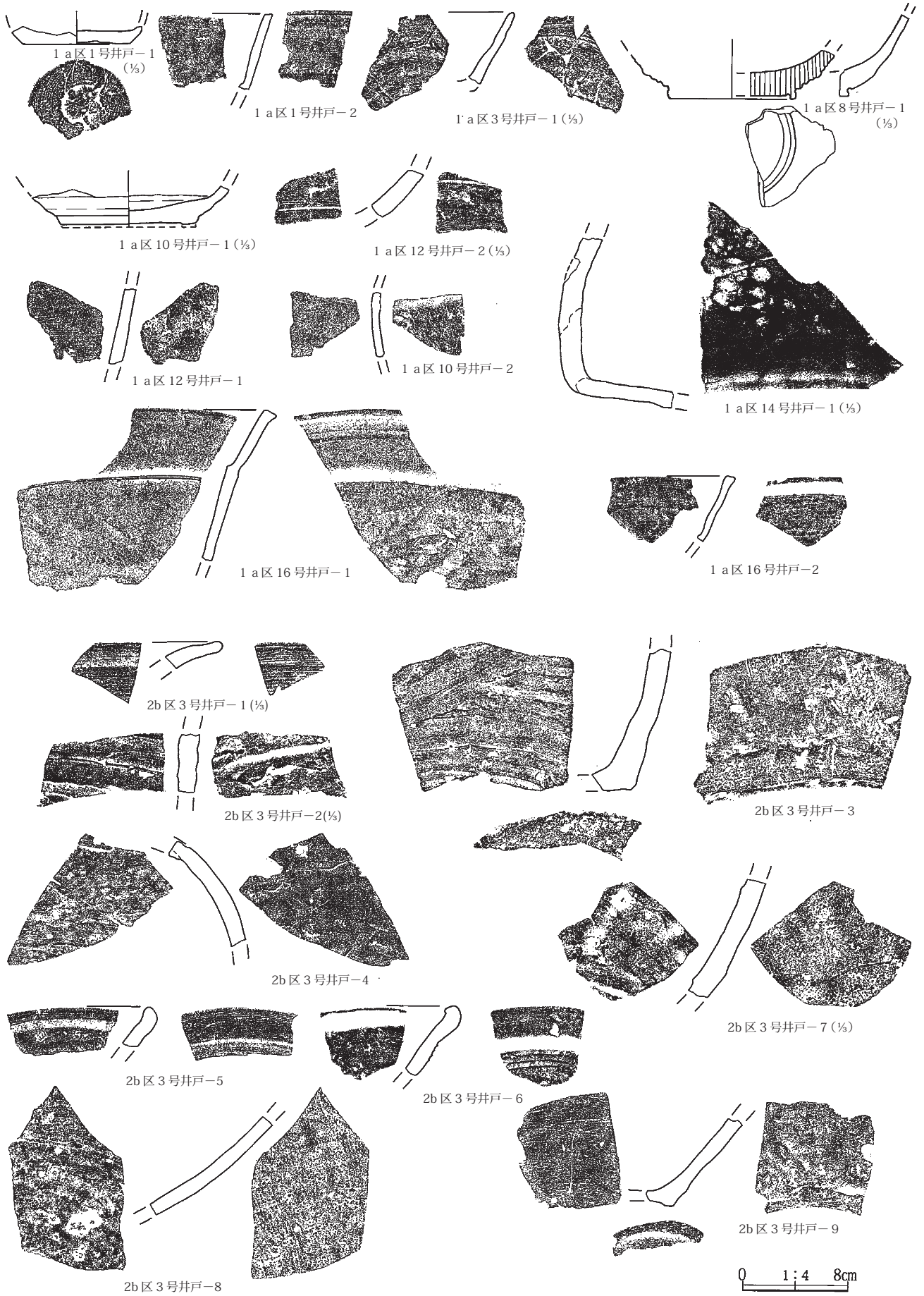
II 発掘調査の記録



1b区・2b区井戸土層説明

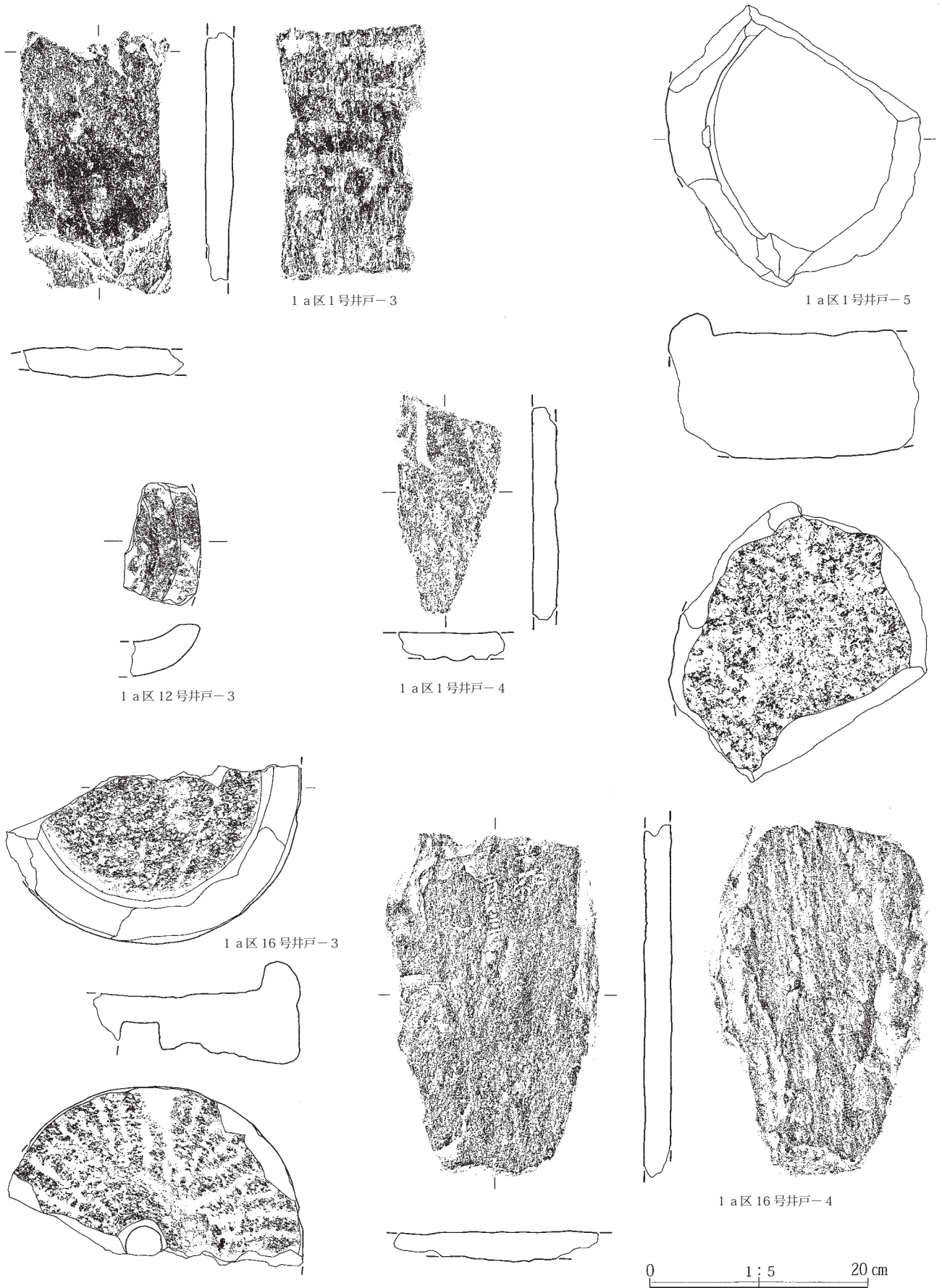
- 1：黒褐色土：As-B 混じりの弱粘性土層。1'にはロームブロックの混入多い。1''はシルト質土で上面土の沈降部分であろう。
- 2：暗灰褐色土：ローム土やシルト質土小ブロックを多量に含むしまり強い層。
- 3：黒褐色土：As-B 混土。弱粘性土。3'では混入物少ない。
- 4：褐灰色土：ロームブロック混じりのシルト質土。4'では混入物少なく粘性増す。

第146図 1b・2b区井戸

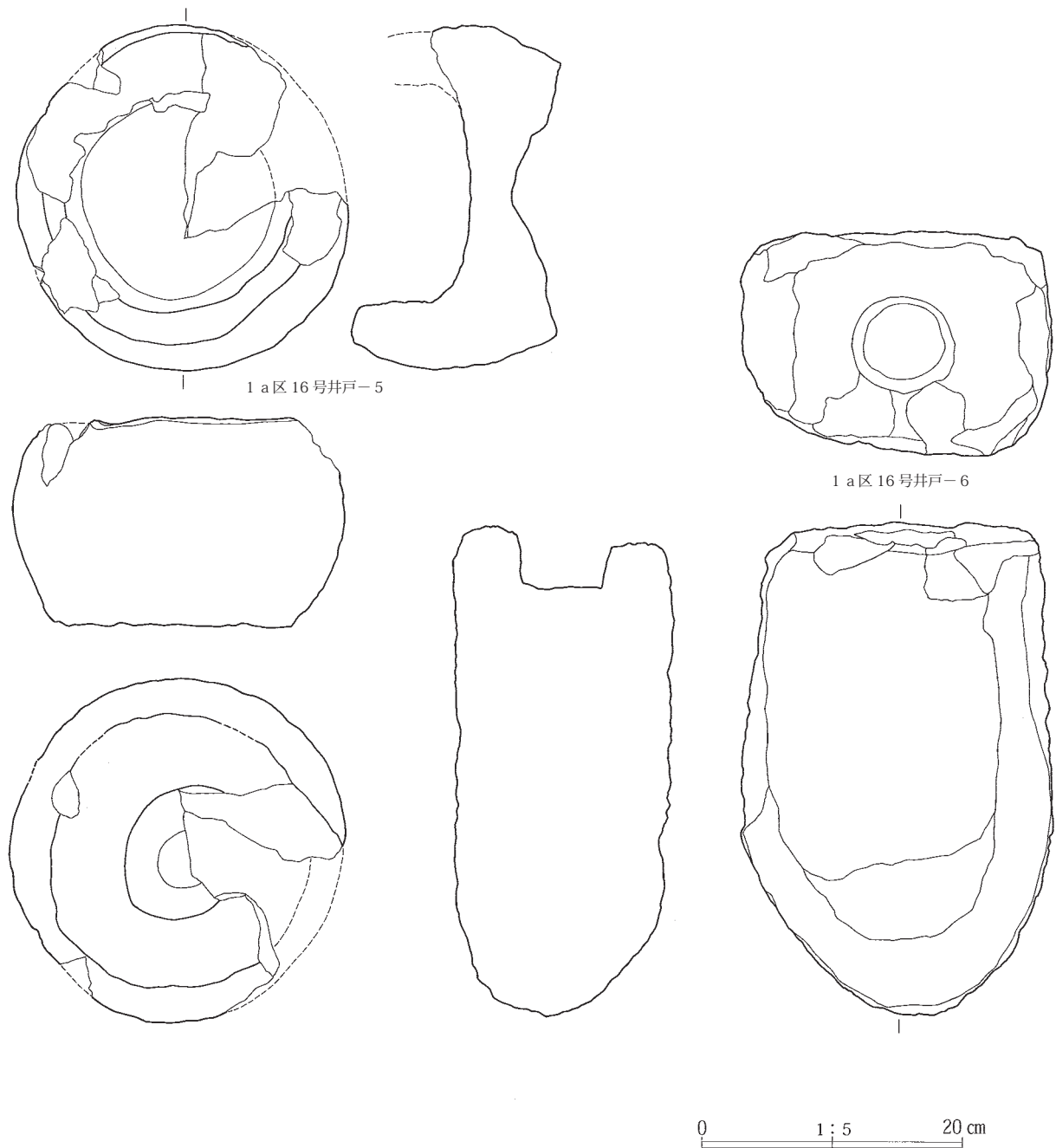


第147図 井戸出土遺物(1)

II 発掘調査の記録



第148図 井戸出土遺物(2)



第149図 井戸出土遺物(3)

て広いが、底面の規模は1・2号井戸に近い。

埋没土 上層に拳大から人頭大の礫が多い。南側から投げ込まれるような出土状態であった。

遺物 須恵系の甕底部のほか、須恵器・古式土師器片が出土している。2b区12号土坑出土とした明確でない板碑2点(第142図)は、調査段階の不手際で所属土坑が確実にない遺物である。本井戸は調査当初土坑扱いで掘り下げており、本遺構に伴う可能性がある。

備考 南側に1・2号井戸同様の壁面の窪みが見られる。

1b区1号井戸(第146図)

1b区南隅の調査区境にかかり、掘り下げできなかった施設である。 **位置** 30G-6・7グリッド

形状規模 円形を呈す直径2m弱の遺構と思われる。

埋没土 排水のために設けた溝部分のみの土層観察であるが、混入物の多い砂質土・地山黒色土の混土である。人頭大の礫の混入が多かった。

備考 内耳鍋と思われる軟質陶器片1片を表層から出土している。

5 第6面の調査

(1) 概要

天仁元年(1108)の浅間山噴火に伴うB軽石直下の面を第6面と呼んだ。確認できた遺構は水田のみである。本遺跡東側に隣接する福島飯玉遺跡と西側に隣接する斉田中耕地遺跡でも該期の水田が調査され、周辺は平安末期の水田地帯であったことが確認されている。

本遺跡でも、1a区の広い範囲、1b区の一部、2b区西隅で畦畔を含む水田面が確認されているが、残存状態はあまり良くない。

周辺の地山は北西側が若干高くなるごく緩やかな傾斜がある。1a区西側では東西方向の畦畔はこの傾斜に沿っている。これに対し南北方向の畦畔は北に向かって直線的で、東西方向の畦畔と直交していない部分が多い。南北方向の畦畔に条里区画の痕跡を辿ることができる。

確認した個々の水田区画には丸数字を、南北畦畔には、はアルファベット小文字を、東西畦畔には数字を付して説明の補助とした。

(2) 1a区の水田(第150・152図 PL-30①~⑤)

1a区は中央に中世大溝が鍵の手状に開削され、古代の面は残存状態の悪い地点であるが、微高地となっている北西隅付近を除いて水田が確認されている。

微高地部分は平安時代前期の竪穴住居を調査した一画である。この地点が平安時代末期に居住域か、生産域であったかは検証できなかった。B軽石の堆積がなく、水田や畠の痕跡は残らないが、平安時代後期以降の遺物の出土もなかった。中央北側の8畦が微高地を巻くように変則的になっていることから、B軽石降下段階でも水田ではなかった可能性が高いと考えている。

南東隅30K-4・5グリッド周辺は、B軽石は比較的厚く堆積し遺構の把握は容易であったが、畦畔が複雑に入り組んだ水田らしくない一画であった。南北方向の畦が3本見られ、水路状の施設が想定されるのだが、畦状の高まりに囲まれた窪み部分の深さはわずかである。

⑧水田から⑬水田へ水口状の隙間がある。想定される北西から南東方向への用水の流れからは違和感があるが、水田面のレベルを追うと矛盾はない。

f畦・h畦は溝を伴った畦である。h畦は幅60cm

前後の小規模な畦だが、西側に幅50~70cm、深さ1.5~4cmの溝を伴っている。なお、f畦については211頁に別に説明を加える。

(3) 1b区の水田(第151図)

この地点で確認できた畦畔は、第5面の調査段階で僅かに見えていたものである。中世館に伴うピット群が多数後出する地点で残存状態は良くない。ピット群調査を先行すると畦畔が見えなくなることが想定されたため、畦畔部分の調査を先行して記録化を行った。

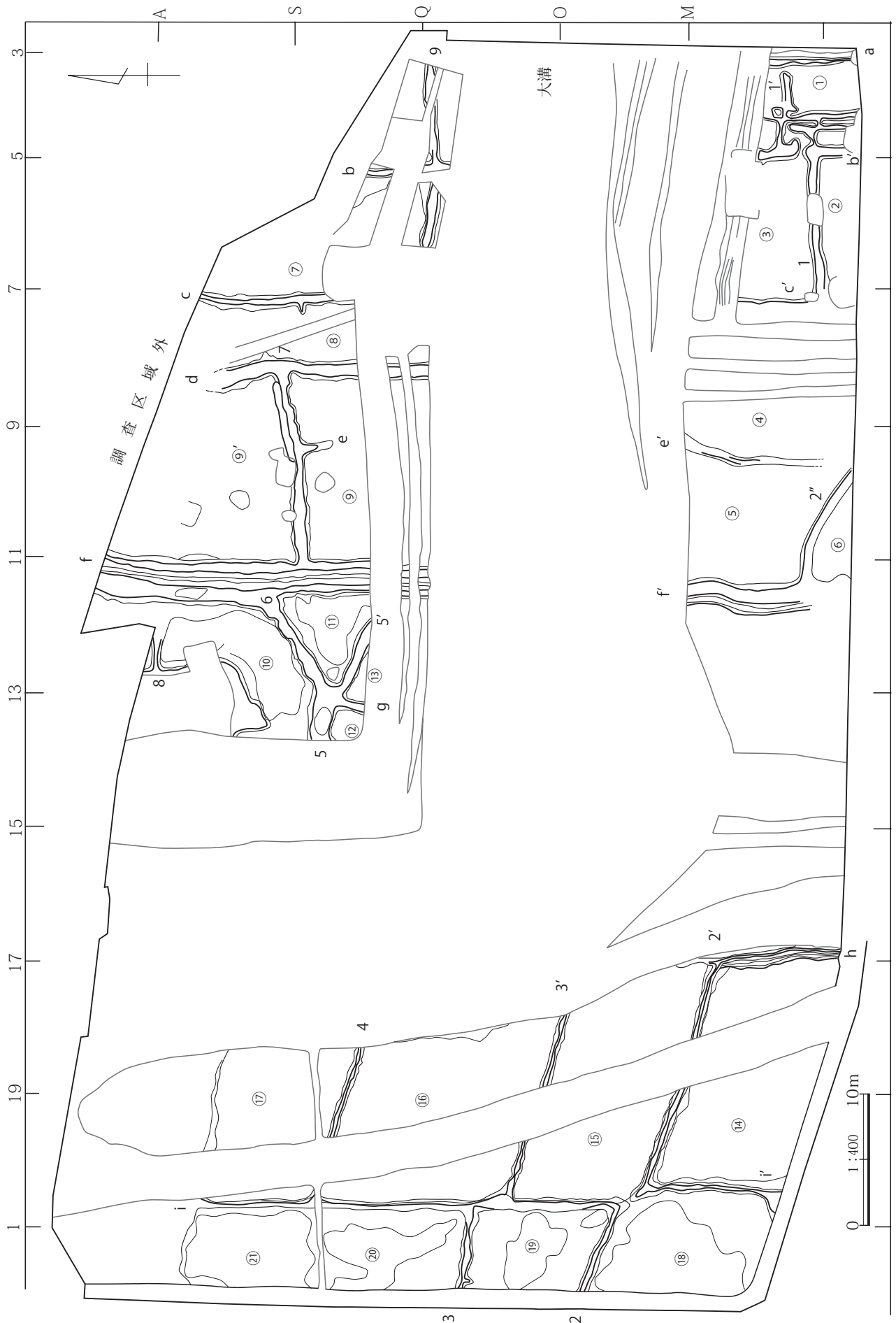
B軽石が畦畔脇や水田想定面でわずかに観察できた部分があり、第6面の水田畦畔と確認した。畦畔は変色部分として確認できたもので、畦の高まりはほとんど観察できていない。東西畦の13畦と、ここから北へ分岐するb"畦のみである。

(4) 2b区の水田(第151図 PL-30⑥・⑦)

2b区西側では調査区西隅から東側へ20m前後の区間でB軽石の堆積が不明瞭ながら面として観察できる。このうち西側半分の区域で軽石直下の畦畔が確認できた。

南北畦はj畦の一本のみだが、幅1.3m前後の幅太の明瞭な施設であった。畦西側の水田面との境に僅かな窪みが観察できる部分があるが、溝のように連続する施設ではない。j畦中央付近に空白部分があるが、水口としては幅50cmと広すぎる感がある。この部分に水路状の窪みや、この地点へ繋がる畦畔脇の窪み等もなく、水口とするには問題点もある。

東西畦は10~12の3本が確認されている。j畦を挟んで互い違いの配置となり、直線的に繋がらないことが特徴である。また幅60cm前後とj畦に比べ貧弱である。11畦は西側が調査区境となり全容は把握できず、10・12号畦は東側が不明瞭で途中で分からなくなる。

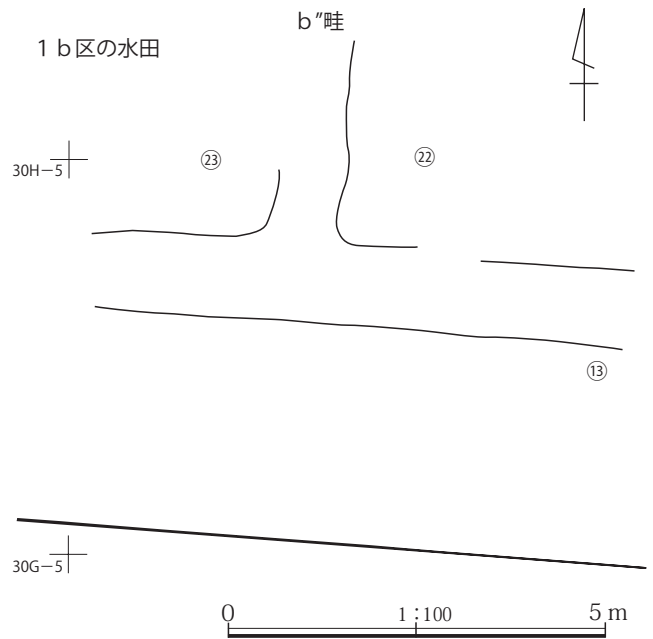


第150図 1 a 区のB 軽石下水田

II 発掘調査の記録

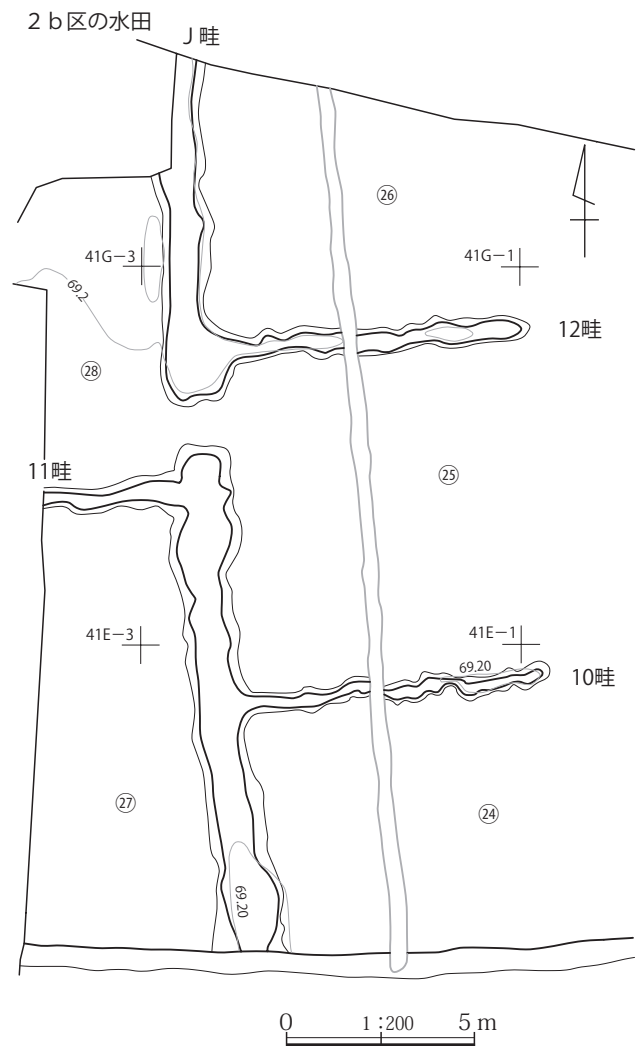
第14-1表 第6面畦畔計測表 (南北畦畔)

No	軸方向	長さ (m)	幅 (cm)	高さ (cm)
a	N-2°W	6.03	33~78	3.5
b	N-5°W	6.15	63~68	2.0
b'	N-1°E	6.58	49~78	3.0
b''	N-0°	2.50	90~95	2.0
c	N-8°W	10.35	87~96	5.0
c'	N-2°E	5.04	-	1.5
d	N-13°W	16.75	110~124	3.0
e	N-10°W	2.31	45~52	1.0
e'	N-19°E	10.50	40~70	0.5
f	N-6°E	22.75	237~335	5.0
f'	N-8°W	8.60	109~181	2.0
g	N-16°E	2.31	75	2.0
h	N-10°W	10.90	39~48	2.5
i	N-0°	31.75	52~95	6.5
i'	N-2°W	10.90	37~58	4.0
j	N-6°W	23.84	110~154	3.0



第14-2表 第6面畦畔計測表 (東西畦畔)

No	軸方向	長さ (m)	幅 (cm)	高さ (cm)
1	N-86°E	10.75	87~103	3.5
1'	N-85°E	5.25	63~78	1.5
2	N-66°E	6.75	45~83	3.0
2'	N-72°E	19.00	43~87	3.5
2''	N-56~79°E	9.10	80~85	4.0
3	N-81°E	6.40	66~89	3.5
3'	N-73°E	14.50	46~54	4.5
4	N-70°E	12.40	53~68	3.0
5	N-76°E	3.25	179~203	5.5
5'	N-63°E	5.40	83~101	5.0
6	N-57°E	8.50	81~140	2.5
7	N-0~7°E	14.35	83~137	2.0
8	E-0°	2.26	58~78	1.5
9	E-4~11°N	14.25	82~138	3.0
10	N-8°E	8.24	42~53	2.0
11	N-4°E	3.42	49~88	1.0
12	N-2°E	8.53	68~80	2.0
13	N-3°W	6.90	100~110	0



第14-3表 第6面水田面計測表

No	標高 (m)	面積 (㎡)	備考
①	68.60	18.75	
②	68.62	30.32	
③	68.61	51.25	東隅は西隅より3cm低い。
④	68.64		
⑤	68.64	91.04	
⑥	68.69	14.33	
⑦	68.58		
⑧	68.64		南北に分かれる。
⑨	68.65	64.79	東西に分かれる。
⑨'	68.65		
⑩	68.67		
⑪	68.72	28.13	
⑫	68.73		
⑬	68.75		
⑭	68.79	162.50	
⑮	68.74	158.75	
⑯	68.75	178.87	
⑰	68.75	105.60	北隅は南隅より3cm低い。
⑱	68.80	86.87	
⑲	68.81	53.75	
⑳	68.80	63.33	
㉑	69.17	61.25	
㉒	68.58		
㉓	68.60		
㉔	69.17		
㉕	69.15		
㉖	69.16		
㉗	69.19		
㉘	69.18		

第151図 1b区・2b区の水田

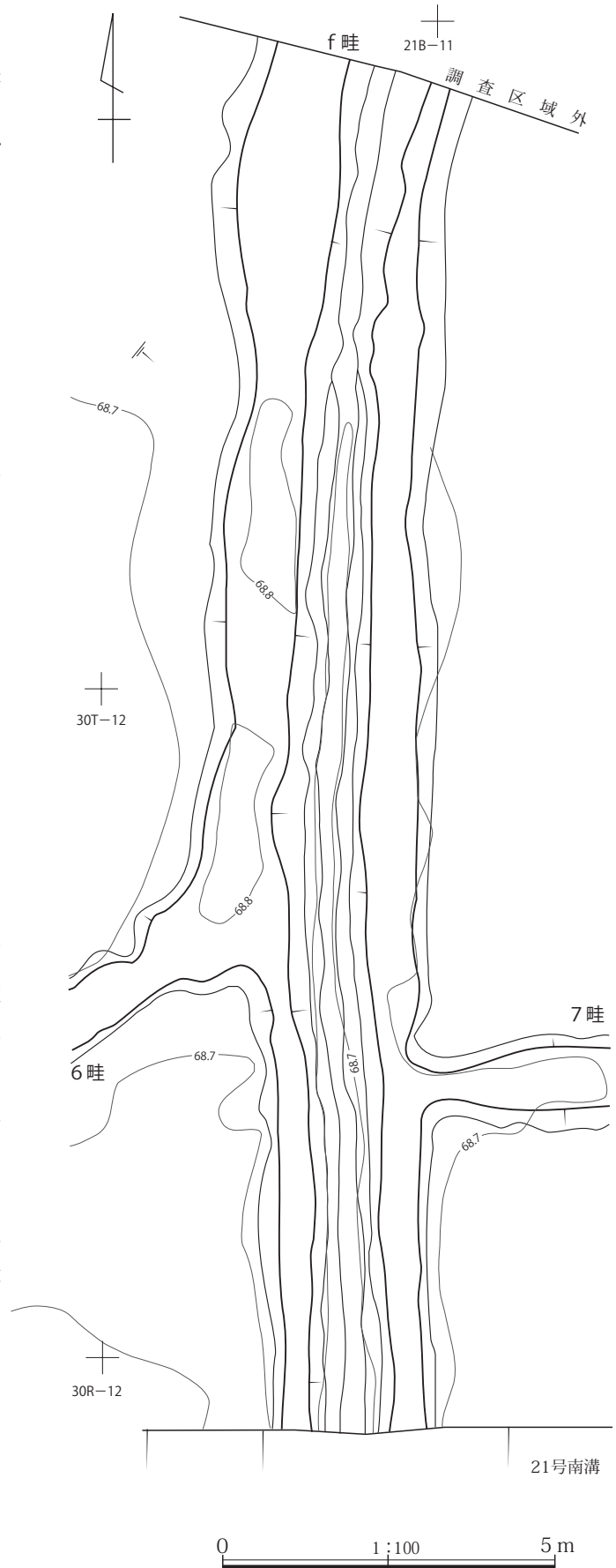
1区中央にあるf-f'畦 (PL-30⑤) は大溝を挟んで幅太の規模が続く畦である。

f 畦は大溝北側部分 (第152図) が該当する。ほぼ直線的な畦で、本遺跡で最も幅太の目立つ遺構である。南西側に分岐する6畦を挟んだ北側で3.1 m、南側で2.6 m前後の幅があり、中央に幅80cm前後の細い溝がある。溝は畦頂部からの深さが5~9 cmあり、B軽石下水田内では際だって深い。調査範囲内では水口は確認できていない。

f' 畦は大溝の南側に続くやや蛇行する畦で、幅は1.5 m前後ある。2" 畦が南東側へ分岐する地点以南では不明瞭になる。西側に幅75cm前後、水田面からの深さ1~4 cmの不明瞭な溝を伴っている。

f-f' 畦は条里地割りの1町を区画する大畦に相当する施設と考えたい (註)。

(註) 中島直樹・吉澤 学氏によって玉村町域のB軽石下水田を基にした条里地割の復元が試みられている (文献51・52)。それによれば一町 (約110 m) ごとに表れる大区画を示す大畦位置が、f 畦より30 m前後西方になり、大溝および大溝を超えて南へ延びる11号溝に隠れてしまう位置になる。11号溝西側に部分的に確認できるh畦 (溝を伴う) が大畦に該当する可能性もあるが、畦自体は小規模である。なお、f 畦と2 b区の比較規模の大きなj 畦との間隔は160 m前後で、1町半に近い数値となっている。



第152図 1 a区 f 畦

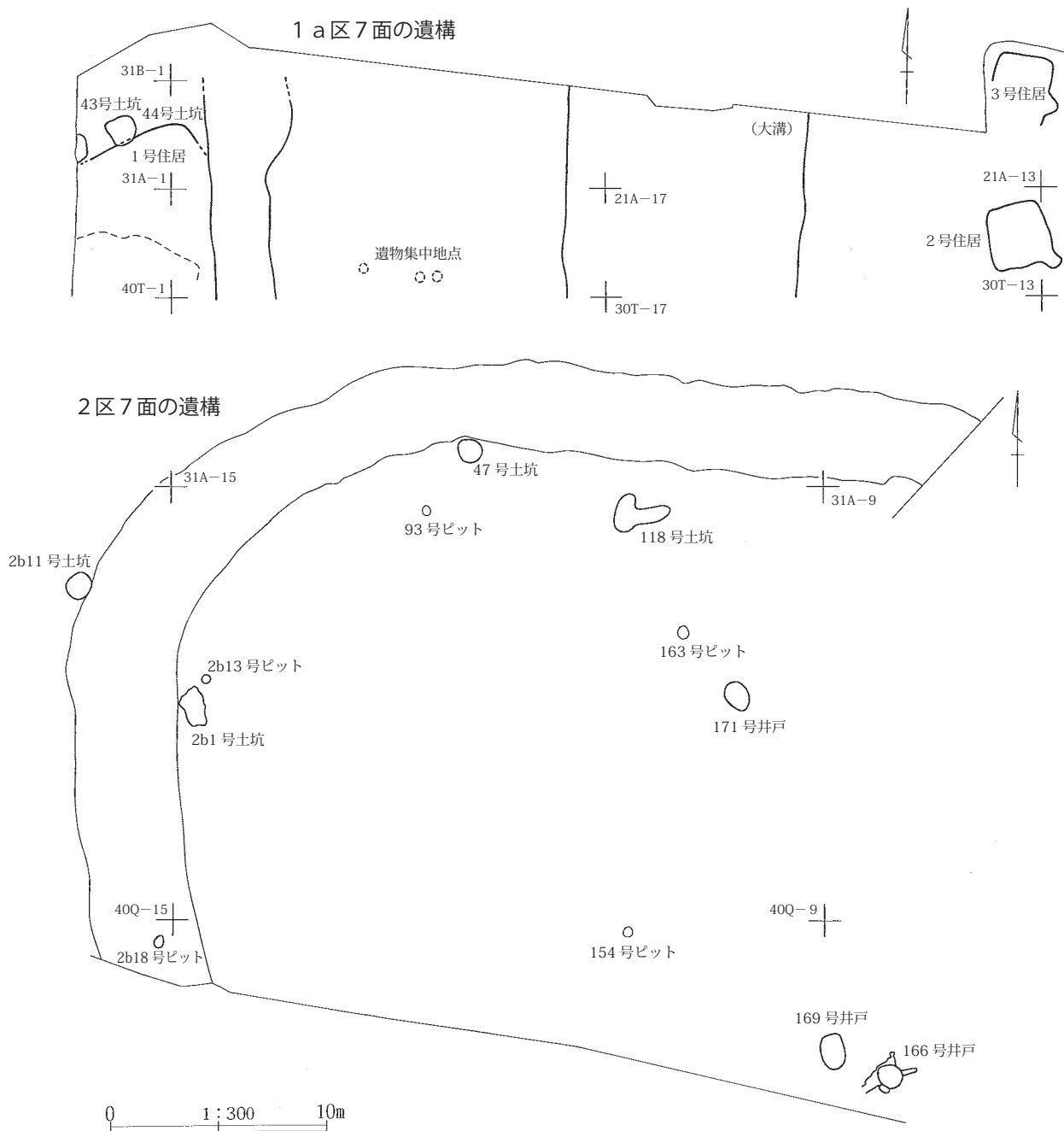
6 第7面の調査

(1) 概要

本遺跡の東側に隣接する福島飯玉遺跡で調査された様
 名山二ツ岳の噴火に由来する洪水層下の水田跡は確認で
 きなかった。そこで、本報告では平安時代の浅間山噴火
 に伴う噴出物 (As - B) 下の水田に先行する遺構を第
 7面の遺構として一括して扱った。古墳時代と平安時代

が該当する。第7面の遺構は大半が微高地状の高まり部
 分にあり、As - B が面として確認できなかった地点の
 遺構である。5面の調査時に掘り下げたものが大半で、
 埋没土や出土遺物から7面へ分けた遺構である。

竪穴住居3軒と井戸3本・土坑6基・ピット5基を調
 査した。1a区北西側と2a区南側および2b区東側か
 ら確認されている。特に2区では中世館跡が構築される
 など、後世の攪乱が顕著で不明瞭になっている。



第153図 7面遺構の配置

(2) 竪穴住居

第7面で住居と確認できた遺構は3軒で、すべて1a区北西側の微高地部分にあたる。付近は古代遺物の出土が多いことが中世面の調査中にも把握できていた地点である。後世の削平を受け、いずれも残存状態はきわめて悪い。また、この地点を横切る中世の大溝で壊された住居があった可能性がある。

2a区では住居跡は確認できなかったが古墳時代の遺物が多く、集落が存在していたと思われる。

1号住居 (第154～156図 PL-31・39・40)

南北に走向する2条の溝の間に遺物の集中地点として確認できた遺構である。確実な炉は確認できなかったが、遺物集中範囲や煮沸土器を伴っていることと焼土が見られたことで、住居として扱った。

位置 31A-1グリッドを中心とする。

規模形状 北西隅付近で隅の丸いプランを想定できた以外は、住居の規模を想定する明確な根拠を持たない。遺物の出土する範囲から東西に長い長方形を想定した。東西軸長6.5m以上、南北軸長5.8m以上の規模があると思われる。

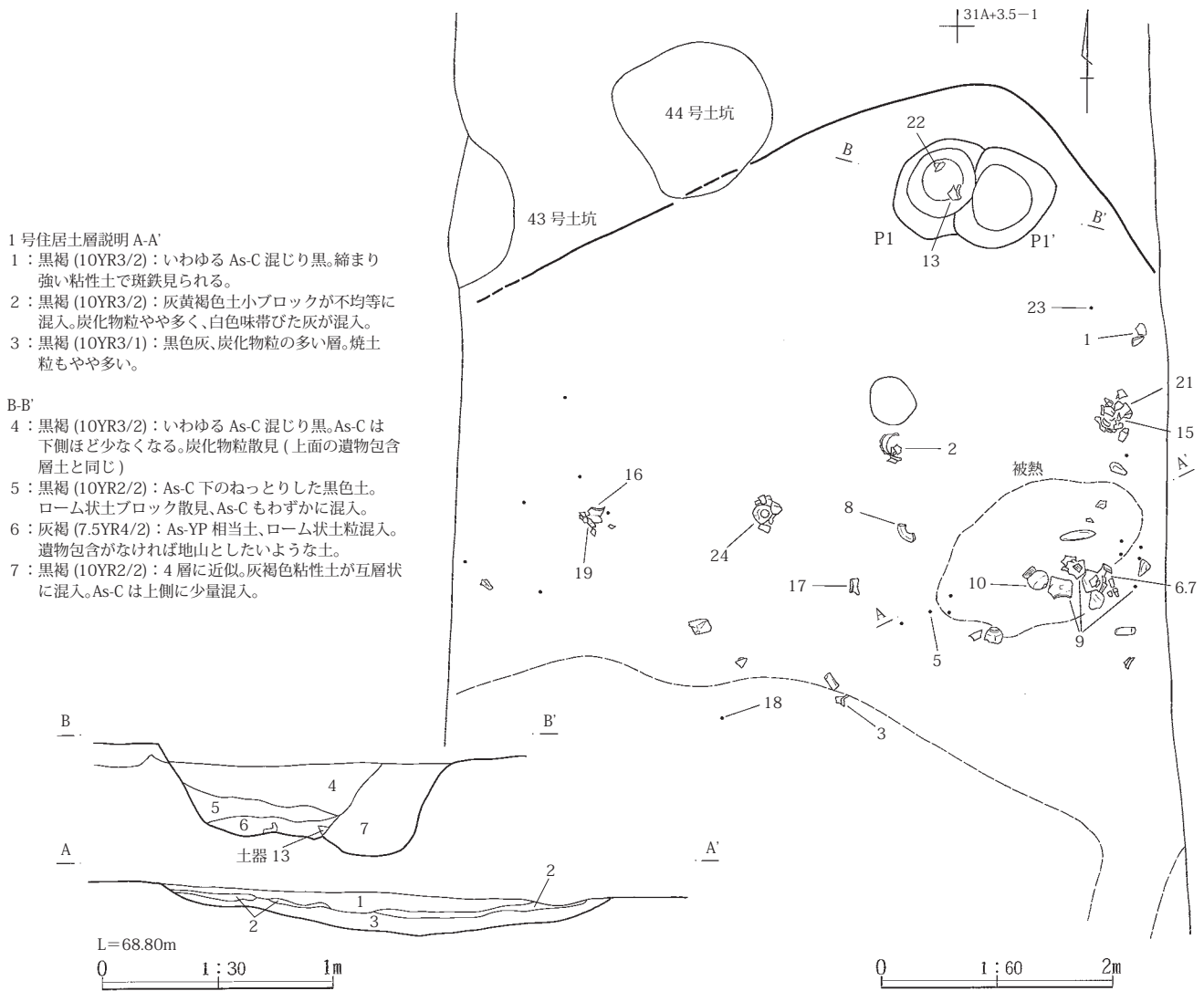
埋没土・壁 床面レベルの確認で、壁は残存せず、埋没土の把握もできていない。壁溝も確認できなかった。

方位 N-68°E前後が想定される。

面積 38㎡以上になると推測できる。

床面 踏み固められた明確な床面は炉を推定した部分周辺以外では確認できなかった。図の住居範囲は焼土や炭化物が若干散った部分を追って、壁立ち上がり部分を想定したものである。壁溝も確認できていない。

ピット P1は中世面の調査の際に掘りあげた施設であ



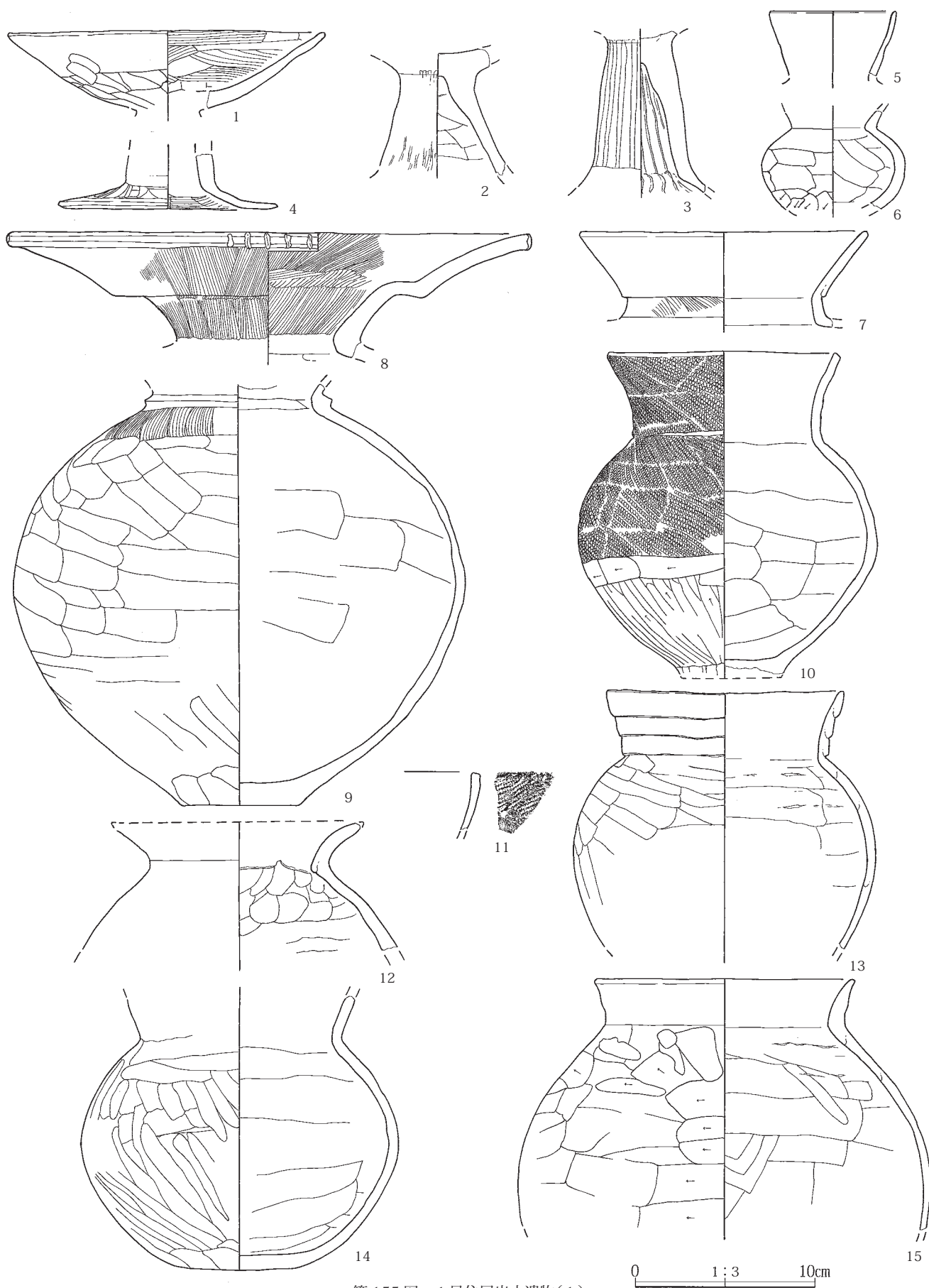
1号住居土層説明 A-A'

- 1: 黒褐(10YR3/2): いわゆる As-C 混じり黒。締まり強い粘性土で斑鉄見られる。
- 2: 黒褐(10YR3/2): 灰黄褐色土小ブロックが不均等に混入。炭化物粒やや多く、白色味帯びた灰が混入。
- 3: 黒褐(10YR3/1): 黒色灰、炭化物粒の多い層。焼土粒もやや多い。

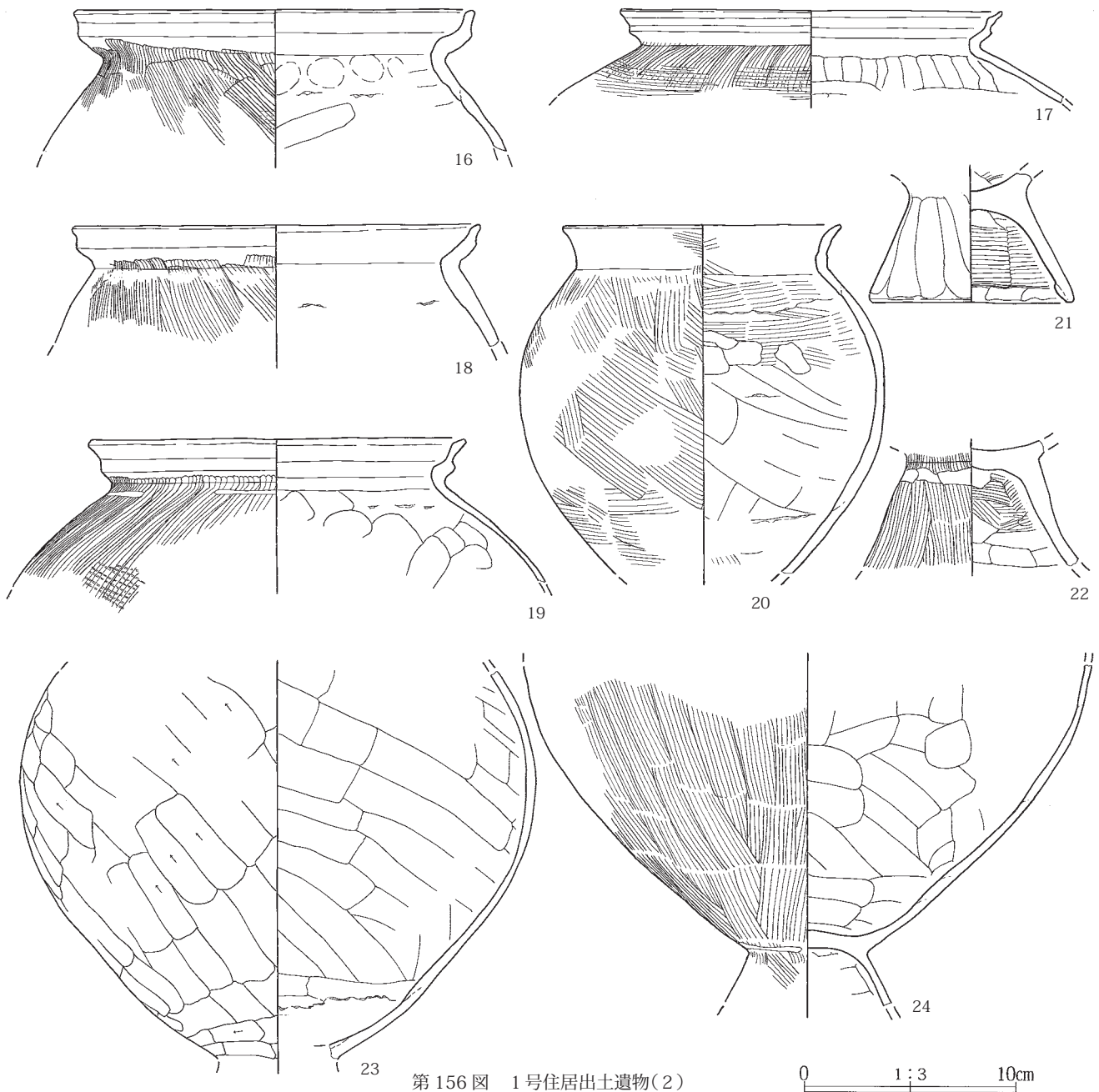
B-B'

- 4: 黒褐(10YR3/2): いわゆる As-C 混じり黒。As-C は下側ほど少なくなる。炭化物粒散見(上面の遺物包含層土と同じ)
- 5: 黒褐(10YR2/2): As-C 下のねっとりした黒色土。ローム状土ブロック散見、As-C もわずかに混入。
- 6: 灰褐(7.5YR4/2): As-YP 相当土、ローム状土粒混入。遺物包含がなければ地山としたいような土。
- 7: 黒褐(10YR2/2): 4層に近似。灰褐色粘性土が互層状に混入。As-C は上側に少量混入。

第154図 1号住居



第155図 1号住居出土遺物(1)



第156図 1号住居出土遺物(2)

るが、埋没土と出土遺物より古墳時代の遺構と判断し、本遺構のピットとして扱った。貯蔵穴の可能性もある。P 1'側からP 1側へ掘り直しを行ない、人為的な埋戻しを行っているようだ。出土遺物に問題はないが、確実に本住居に伴う遺構と判断できる施設ではない。

炉 中央やや北東側に被熱により赤変硬化部分があったが、本遺構の炉とする確証は得られなかった。煮沸具が推定住居範囲の中央から西側にかけて出土しており、この付近に炉があったと想定できる。

その他 本住居南側は緩やかな傾斜面で、住居床想定部分を削っている。北側に隣接する43・44号土坑からも、本住居と同じ時期の遺物を出土している。

遺物 住居推定範囲の中心から南側にかけて、出土遺物が多い。このうち24点の土器を図示したが、一括遺物とするには疑問な点もある。複数の個体がまとまって出土する傾向があり、6・7・9が南側、15・21が東隅、16・19が西寄りにあった。13・22はP 1内の出土である。3・18は南寄りの傾斜面上にあり、本遺構に確実に伴うか不明である。完形に近い9・10やピット内の13・22を本遺構の基本的な遺物とし、4世紀前半の時期を想定したい。7・15など削りが全面に施された土器は後出する遺物の可能性がある。

図示できなかった土師器には高杯27片・器台2片・埴輪類13片・甕類858片がある。

2号住居 (第157・158図 PL-31・40)

遺物集中地点で、住居プランの確認には最深の注意を払った地点にある。炭化物粒や焼土の混じる埋没土の範囲からプランを確定した。

位置 30 T-12・13 グリッド

規模形状 北辺のやや短い、台形を呈すと想定した。東西軸長2.85 m、南北軸長2.89 mを測る。

埋没土 基本土層6層に近い埋没土である。炭化物粒や焼土粒が多いが、周辺の遺物散布地点と明確な区別はできなかった。

方位 N-79° E 面積 7.25㎡

壁 北西隅や東側で高さ1~2 cmほどの立ち上がり部分がわずかに確認できたのみである。壁溝は認められない。

床面 地山を直接踏み固めた、ほぼ水平だがカマド付近が若干低くなる床である。カマド前から住居中央付近以外では不明瞭である。カマド前面と南西隅付近に炭化物粒・黒色灰の散布が見られ、この範囲を元に住居プランを確定した。

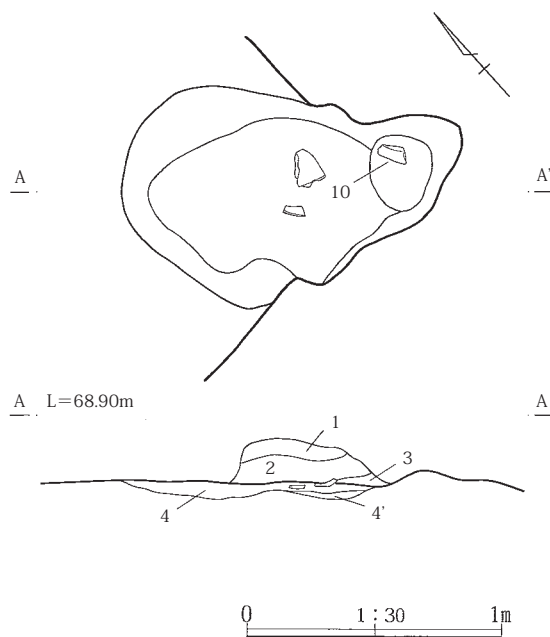
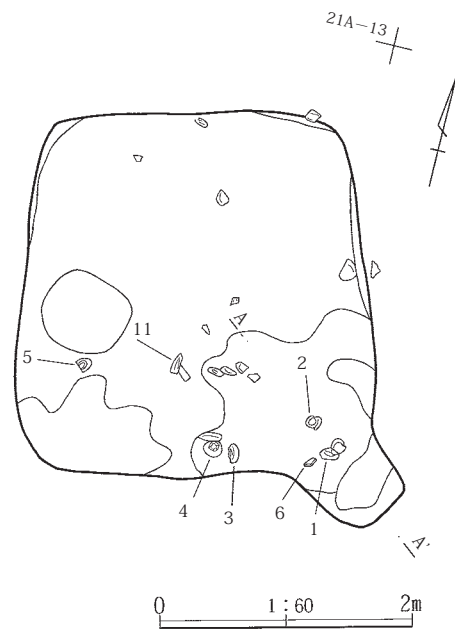
柱穴 確認できない。掘り方調査でも痕跡は認められなかった。

カマド 南東隅にあるコーナーカマドである。燃烧部は住居外にあり、焼土や炭化物粒の散布が見られる。煙道の壁外への張り出し部分は確認できない。火床は住居床面レベルにある。燃烧部からカマド前面にかけてカマド掘り方が認められたが深さ5 cmほどの小規模なものである。袖部を確認することはできなかったが、北側床面の炭化物が切れる範囲が袖部分であった可能性がある。

その他 西壁際にある柱穴は本住居に後出する26号掘立柱建物の柱穴である。

遺物 須恵器杯類を中心に出土遺物が多い。11点の土器を図示した。須恵器碗の出土が目立ち、1が完形で2・6と共にカマド前に散らばるようにして出土した。3・4は南壁際、5は西寄りの床直上遺物である。カマド内の遺物は少なく10の土師器甕のみである。8の須恵器甕は胴部外面に意匠のあるような線刻が見られる。舟を描いているようにも見えるが不明瞭である。その他に細長い川原石13点が、住居全域に広がるようにして出土している。こも編み石の可能性もある。

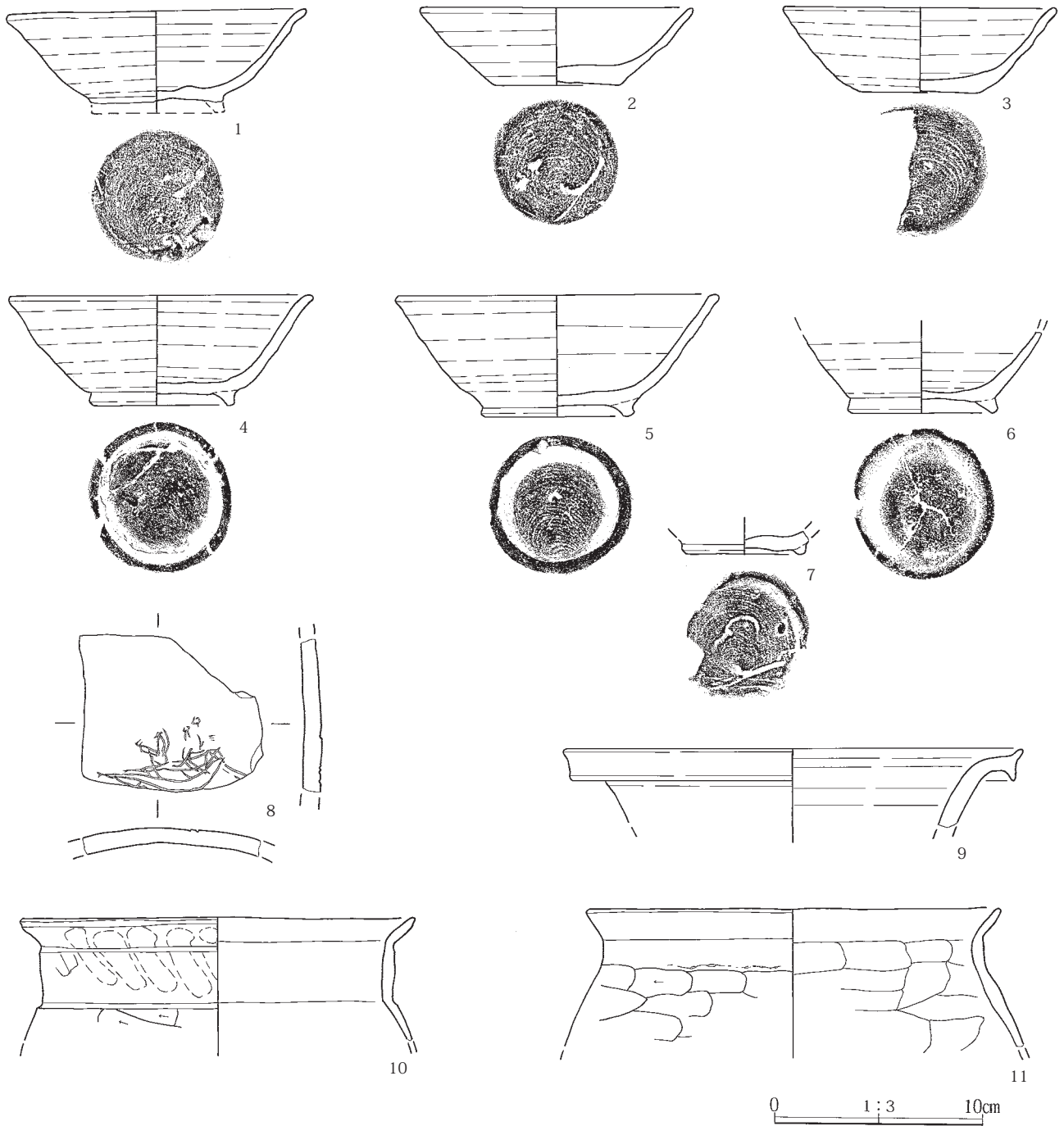
図示以外の遺物には土師器杯1片・甕類312片、須



第157図 2号住居

2号住居カマド土層説明

- 1: 黒褐 (7.5YR3/2): 粒子の細かな粘性土できわめて締まり強い。黄色土粒や、焼土、カーボン散見する。1' 混入物の量が多くなり特に焼土がやや目立ち、灰・黄色土粒 (やや大粒) の混入あり。
- 2: 灰黄褐 (10YR4/2): 灰の混入がやや多く、1層に比べザラっとしている。カマド内の埋没土としては相変わらず締まり強い。
- 3: 暗赤褐 (5YR3/3): 不揃いの焼土ブロックを不均等にやや多量に含む。黄褐色粘性土と黒色灰の混土層。締まり強く崩落天井部分と思われる。
- 4: 黒褐 (10YR3/1): 黒色灰。褐色土小ブロック散見。燃烧部分と掘り方内埋め土の両方で、4'は灰の混入やや多い。



第158図 2号住居出土遺物

恵器杯類 50片・甕類 1片がある。須恵器碗 1～5 とカマド内出土の甕 10 は本住居に伴う遺物となり、9世紀後半の住居と想定できる。

3号住居 (第159図 PL-31・40)

2号住居の北側 5m 付近の遺物集中地点に位置する。黒色灰や炭化物粒の多い地点とカマドらしい焼土地点を結んでプランを想定した不確定な遺構である。

位置 21 A・B-12・13 グリッド

規模形状 カマドのある側を長辺とする横長長方形を呈すと想定した。東西軸長 2.58 m、南北軸長は 2.8 m 以上となる。

埋没土 遺構内の埋没土を地山から区別することはできなかった。

方位 N-75°W 面積 7㎡前後と推定する。

壁 立ち上がりを確認することはできなかった。壁溝も認められない。

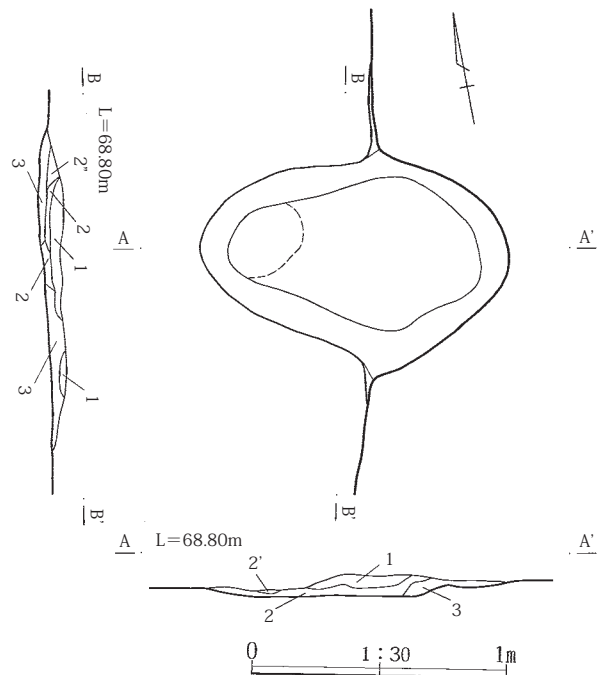
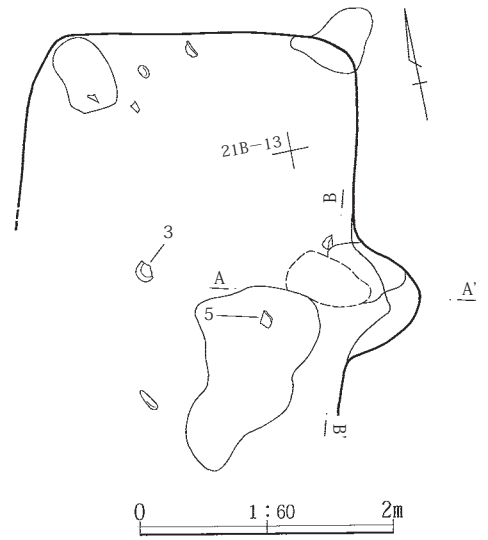
床 面 踏み固めの弱い不明瞭な床である。焼土や炭化物粒の散布を元に床面範囲を追ったが、南側は確認できなかった。特に北東隅の炭化物粒は住居推定範囲を超えており、本住居に伴わない可能性がある。

柱 穴 確認できない。掘り方調査でも痕跡は認められなかった。

カマド 東辺の南寄りにある、燃烧部は住居壁ラインから壁外側にあり、煙道の張出しは確認できなかった。焼土や炭化物粒の散布が見られる。火床は住居床面レベルにある。燃烧部からカマド前面にかけてカマド掘り方が認められたが深さ5cmほどの小規模なものである。袖部を確認することはできなかった。

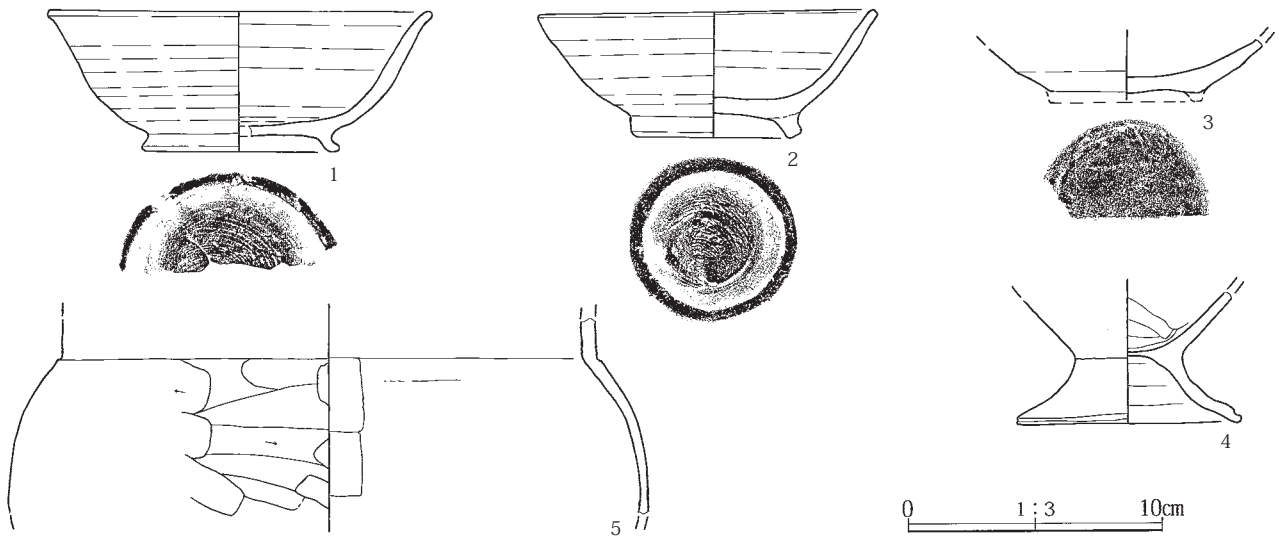
遺 物 5点の土器を图示した。1・2・4は住居把握以前のグリッド調査時に、地点を記録して取り上げた遺物を住居に戻した遺物である。1は南西寄り、2・4は北東寄りの出土である。3・5は住居中央付近の床面レベル出土の遺物である。カマド内出土の遺物はなかった。

图示以外の遺物には、土師器杯3片・甕15片がある。確実に本住居に伴う遺物を抽出できないが、2号住居同様の9世紀代後半を想定したい。



3号住居カマド土層説明

- 1：暗赤褐(5YR3/3)：比較的彩度の高い焼土ブロックを多量に含む層。カマドの崩落天井に相当か、黒色灰や褐色粘質土も多量に混じり。
- 2：黒褐(10YR3/1)：黒色灰を主体に褐色土粒の混入層。カマド床直上に相当する灰層と思われる。焼土の混入少ない。
- 2'：焼土ブロック多い。
- 2''：黒色灰の純層。
- 3：灰黄褐(10YR4/2)：被熱したローム土と2土との混土。



第159図 3号住居および出土遺物

(3) 井戸

古墳時代前期の遺物を下層から出土する遺構として、2区で3基の井戸を調査した。深さは1m前後とあまりないが湧水が認められ、井戸として扱った。竪穴住居貯蔵穴の可能性もあろう。いずれも土層断面の観察を欠いている。

2 a区 166号井戸 (第160・161図 PL-32⑤・41)

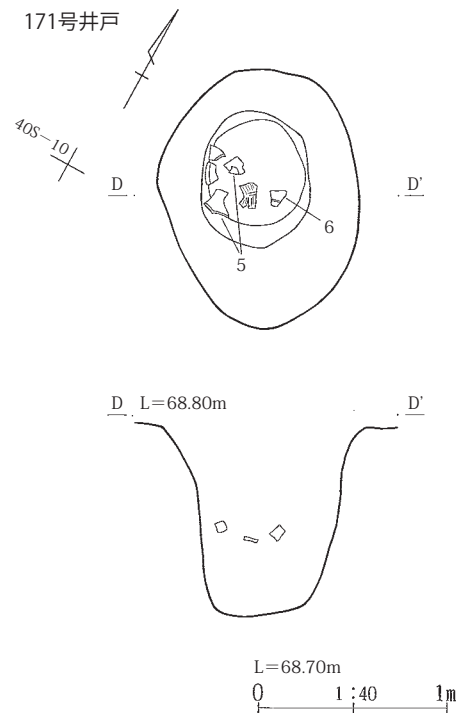
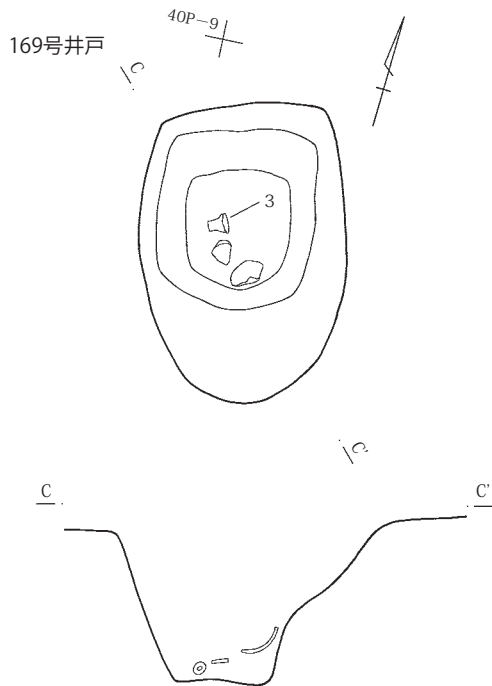
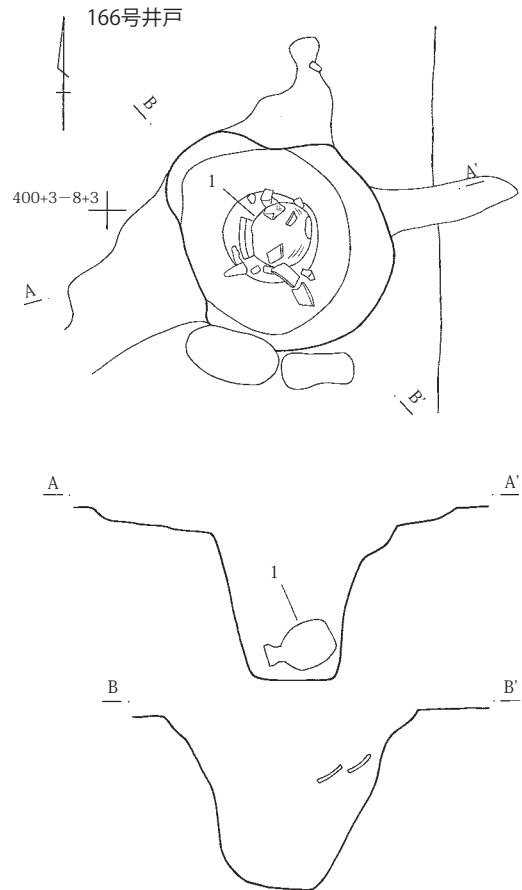
2 a区南東隅付近で確認した。上面に時期不明の窪みがあるが、ここには土師器の集中出土はない。

位置 40 O-8 グリッド

形状規模 ほぼ円形を呈している。底面は比較的平坦で、壁はローム状土中にあり、上方へ開き気味に立ち上がる。規模は129×107cm、深さ97cmを測る。

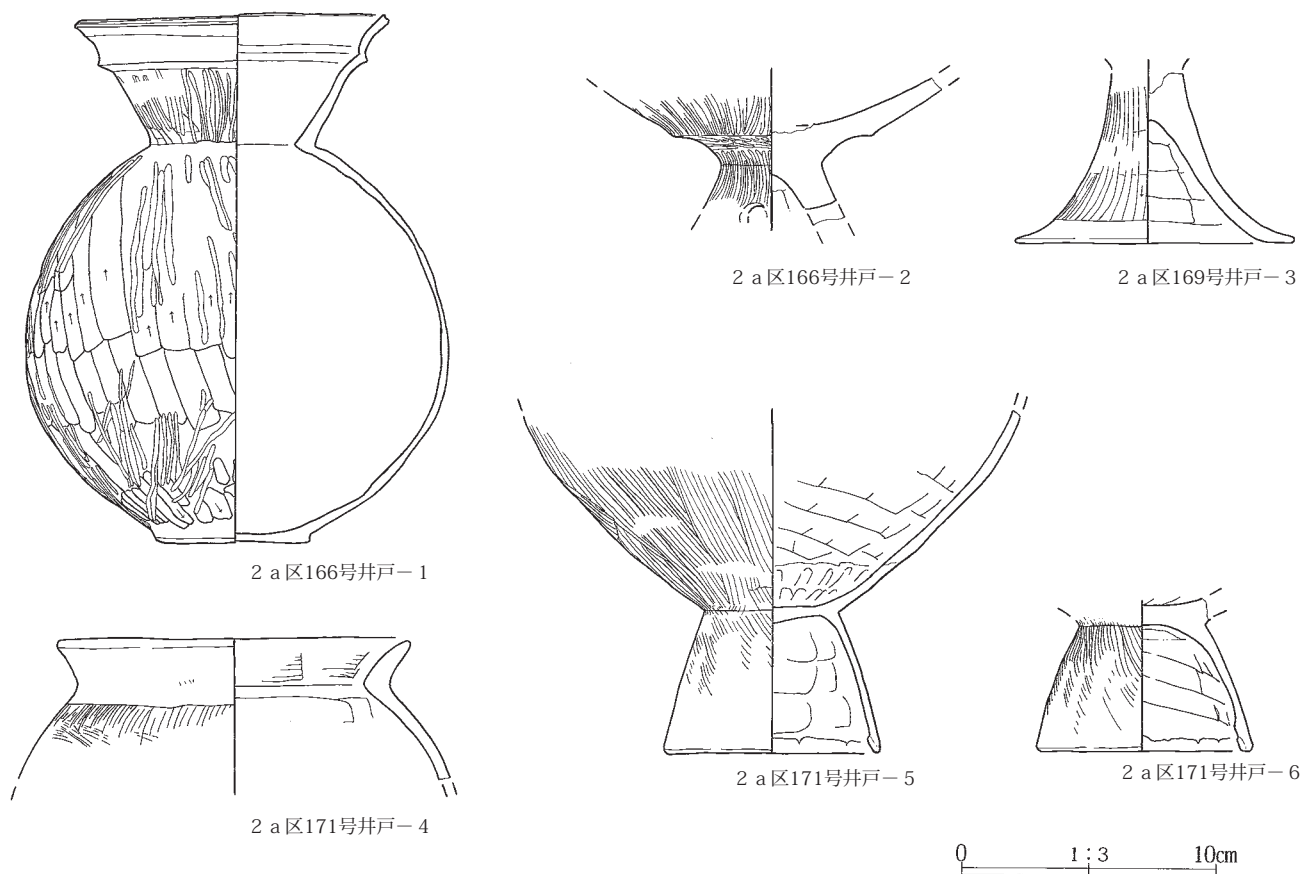
埋没土 黒色土(10YR2/1)で斑鉄がわずかに見られ、白色軽石粒(As-Cか)を含む粘性土。柔らかく、ふかふかしている。

遺物 中層から底面にかけて出土遺物はきわめて多く、このうち土師器を2点図示した。1は完形の壺で、底面中央に横倒しの状態で出土した。2の高杯は中層埋没土



第160図 第7面の井戸

II 発掘調査の記録



第161図 第7面井戸出土遺物

内の出土である。図示した以外に土師器刷毛目甕172点・その他甕類225点・壺類78点・杯類43点が出土している。

備考 1の壺内の土は丁寧に洗ったが、有機遺物等の検出はできなかった。

2 a区 169号井戸 (第160・161図 PL-32⑥・41)

166号井戸の西側約1.4mの位置にある。

位置 40 O-8・9グリッド

形状規模 本来方形に近い形が想定されるが、南壁が中層付近まで崩れていて、上面は楕円形に近い形状となっている。底面はほぼ方形を呈している。規模は158×110cm、深さ91cmを測る。

埋没土 黒色土(10YR2/1)で斑鉄が見られる柔らかな粘性土。

方位 N-10°W

遺物 底面付近で出土した古式土師の高杯脚部3点を図示した。他に土師器刷毛目甕22点・その他甕類14点・杯類4点が出土している。

備考 南壁の崩れは水を汲み出した痕跡の可能性もある

う。遺物は南側から流れ込むようにして、底面付近まで出土している。遺物は4世紀代の土器のみで、遺構の年代もこの時期が想定できる。

2 a区 171号井戸 (第160・161図 PL-41)

位置 40 R・S-9グリッド

形状規模 上面は楕円形を呈しているが、底面は円形に近い。規模は136×105cm、深さ103cmを測る。

埋没土 黒色土(10YR2/1)で他の井戸に比べ砂質だが粘性はある。斑鉄見られる。

方位 N-31°W

遺物 中層から出土した土師器壺4と台付甕5・6を図示した。他に土師器刷毛目甕17点・その他甕類10点・壺類1点・高杯2点が出土している。

備考 南東側の壁が上半で開き気味になっている。169号井戸同様に水を汲み出した痕跡の可能性があると考える。出土遺物は4世紀代に限られ、遺構の年代も同時期が想定できる。

(4) 土坑

埋没土や出土遺物から古代の遺構として扱った土坑は、1区西側から2基、2a区と2b区でもそれぞれ2基である。1区は1号住居周辺に集中し、同住居と関連する施設の可能性がある。2区は西館縁辺に偏在している。西館中央付近にも多数存在していたものが、中世以降の攪乱で壊されたと思われる。不明瞭なものは第5面の土坑の項で扱ったので、この中に古代の遺構も混じる可能性がある。

1a区43号土坑(第162図)

調査区境に接し、西側半分を排水のためのトレンチで失っている。1号住居の北壁に近接している。

位置 31A-1グリッド。

形状規模 ほぼ円形を呈すと思われる。底面は平坦である。規模は南北軸125cm以上、深さ58cmを測る。

埋没土 2層以下で水平に近い堆積で、1層では自然堆積と思われる。全体の土質には大きな差はない。中世以降に見られる洪水砂の混入はない。

遺物 小破片であるが甕を主体とした土師器13片が出土している。いずれも古式土師と思われる、遺構の年代もこの時期と思われるが、4世紀の1号住居が近接しており、ここからの流れ込みの可能性もある。

1a区44号土坑(第162・163図 PL-32①・41)

43号土坑の東側約1mの地点にあり、1号住居の北壁とわずかに重複している。1号住居は輪郭が不明瞭な施設であり、本土坑が住居に伴う施設の可能性がある。

位置 31A-1グリッド。

形状規模 上面は台形に近い不整形だが、底面は円形に近い。規模は137×133cm、深さ76cmを測る。

埋没土 南側から自然堆積しているようだ。43号土坑同様に中世以降の洪水砂の混入はみられない。

遺物 中層から下層にかけて出土した古墳時代前期の土師器4点を図示した。他に刷毛目のある甕を中心とした土師器62片を出土している。

備考 土器とほぼ同じ層から小礫も多数出土している。遺物はいずれも4世紀代のもので、遺構もこの時期のものと想定できる。

2a区47号土坑(第162図・163図 PL-41)

位置 31A-12グリッド。西館北隅にある。

形状規模 ほぼ円形を呈している。底面は北側へ低く傾斜している。規模は117×106cm、深さ65cmを測る。

埋没土 自然堆積と思われる。

遺物 古墳時代前期の土師器3点を図示した。1は底面直上の出土、他は埋没土内の出土である。刷毛目のある甕破片は他に24片の他、時期不明の土師器小片も26片出土している。

備考 礫を不均等に混入するが、下層の川原石は特に大きい。遺物はすべて4世紀代で、遺構の年代もこの時期と想定できる。

2a区118号土坑(第162図)

溝状の窪みの末端にある不整形の掘り込みである。土層の記録を欠き、時期は不明瞭だが、古墳時代の土師器を出土しており、7面の遺構とした。浅く不明瞭な遺構で、他の土坑とは形状が異なる。

位置 40T-10グリッド

形状規模 南北に長軸を置く長円形を想定した。埋没土の観察を欠き、東側にあるさらに長い落ち込みとの重複が不明瞭で、元の形も明確にできていない。南北に長い長円形とした場合の規模は170×94、深さ35cmを測る。東西に長い窪みは後世のものと思われる。深さ15cmの小ピットが2基あるが、本遺構に伴うか確認できない。

方位 南北方向N-18°E 東西方向N-°E

備考 図示した遺物はないが、古式土師器甕片を底面付近から14片出土している。

2b区1号土坑(第162・163図 PL-41)

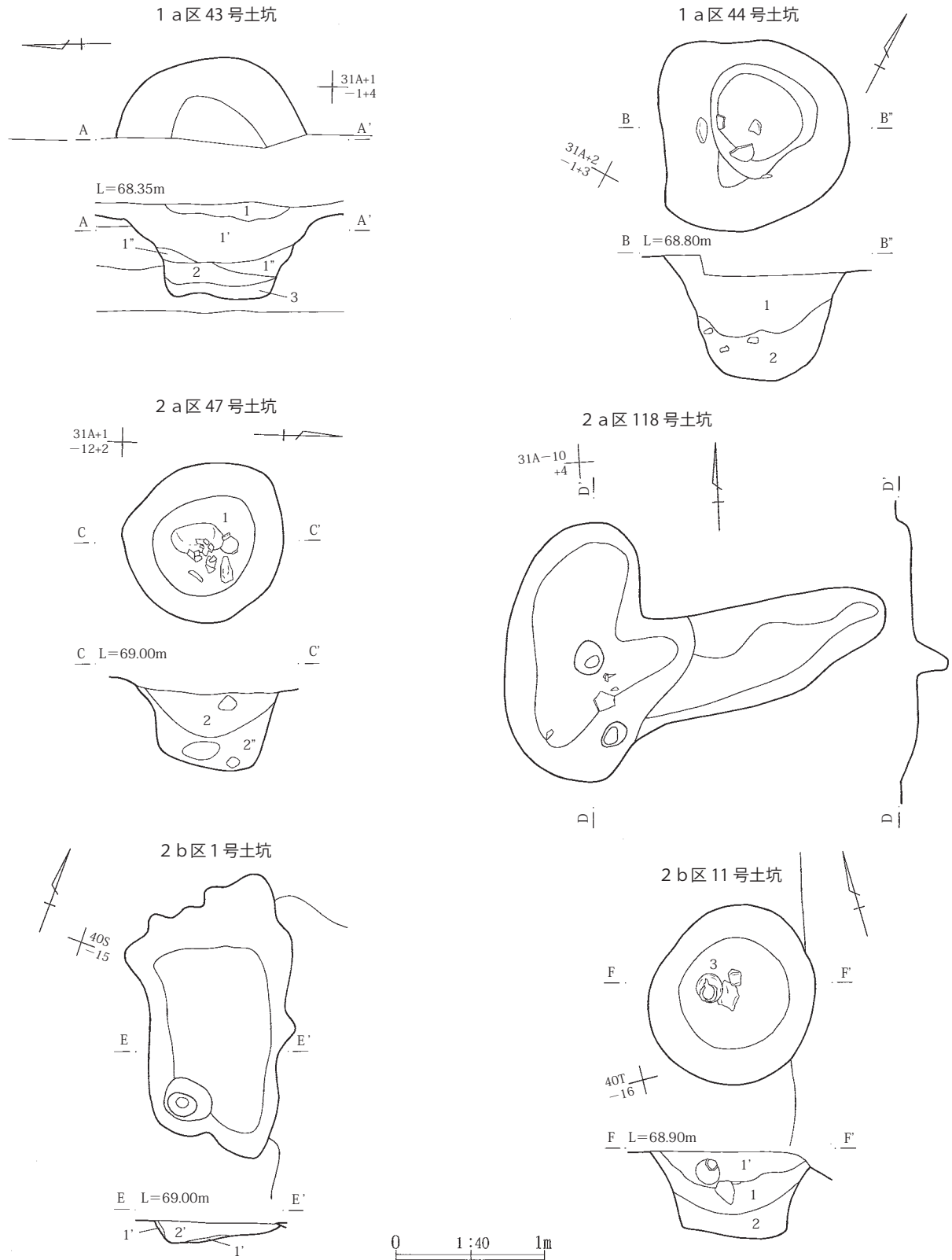
3号井戸の西から北西方向へ延びる不明瞭な落ち込みの北西側先端部分を土坑とした遺構である。遺物を多数出土しているが表層に浮いた状態であり、調査段階で中世の遺構として扱ったが、整理段階で7面に戻した。

位置 40R・S-15グリッド。

形状規模 不整長方形を呈す。上面での規模は180×95cm、深さ16cmを測る。底面は凹凸が多い。南西隅にある小ピットは土坑底面からの深さ24cmある。埋没土の観察を欠くが、後出する重複遺構と考えたい。

埋没土 ほぼ単一層である。中世以前の土と考えたい。

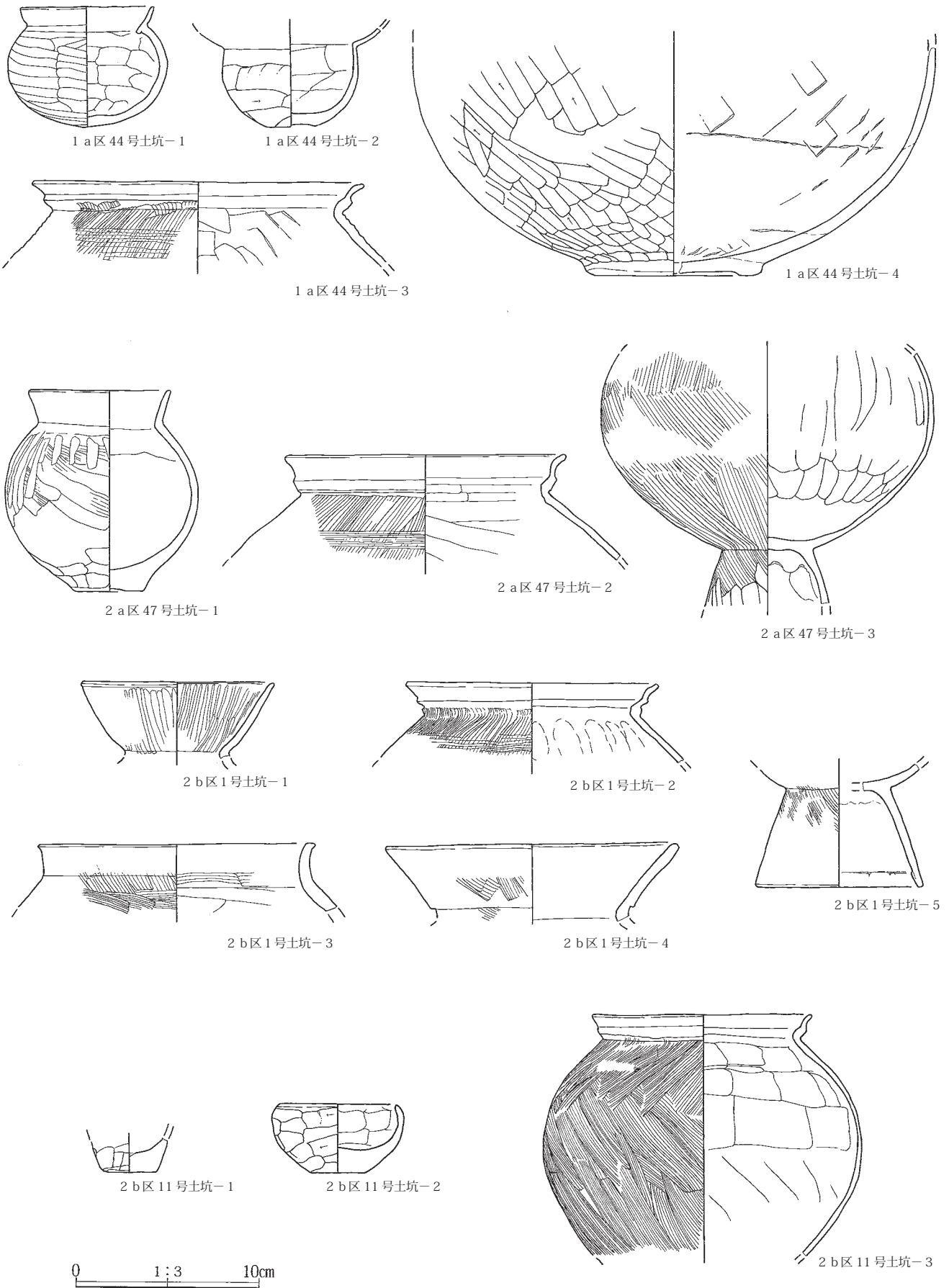
II 発掘調査の記録



土坑土層説明

- 1 : 黒 (10YR2/1) : As-Cを含む、締まりある弱粘性土。1'で ローム土や黒色土をブロックに含み、1''でローム粒や炭化物粒を含む。
- 2 : 黒褐 (10YR2/2) : As-C 下のねっとりした弱粘性土。2'でロームブロックを含み、2''でローム粒を少量含む。
- 3 : 黒褐 (10YR2/2) : やや締まりある粘性土で、As-YP を少量含む。

第 162 図 第 7 面の土坑



0 1:3 10cm

第163図 第7面土坑出土遺物

遺物 上層から出土した5点を図示した。他に刷毛目のある甕類を主体とした土師器37片が出土している。

備考 遺物はすべて古式土師であるが、確実に本遺構に伴うか不明瞭である。

2 b区 11号土坑 (第162・163図 PL-32③④・41)

40号西溝の西隅とわずかに重複している。館区画の外側にあたり、古墳時代の遺構としては西隅に位置しているが、周辺の中世以降の溝からは古式土師器破片の出土が多い。

位置 40 T-15・16グリッド

形状規模 上面・底面ともほぼ円形を呈す。規模は121×115cm、深さ62cmを測る。

埋没土 自然堆積と思われる。中世以降の洪水砂を含まない。

遺物 3点の古式土師器を図示した。2・3は底面から30cm前後浮いた状態でまとまって出土した。他に土師器16片を出土している。

備考 土器出土と同じレベルから礫(割石)の出土もあった。土器はいずれも古式土師で、土坑が半ば埋もれた段階でまとめて廃棄した様相であった。遺構の時期も土器と同時期と想定できる。

(5) ピット

2区のピットの中には、埋没土が黒色土でC軽石の混じる古代の遺構に見られる土であるものがあつた。中でも2 b区の3基のピット底面付近から古墳時代の遺物が出土している。竪穴住居の柱穴に類似した形状のものが多く、古代の遺構として第7面で扱い一括して記した。規模は長径×短径×深さである。

2 a区 93号ピット (第164図)

位置 40 T-12グリッド。西館建物群から北西に離れた地点にあり、47号土坑の南西3.8mに位置している。

形状規模 やや方形気味に歪んだ円形で、底面は平坦で壁は直線的に開き気味に立ち上がっている。計測値は54×51×34cmを測る。

遺物 刷毛目のある土師器甕を6片出土した。

備考 埋没土の記録を欠くが、古式土師のみを出土しており、古墳時代前期の遺構と想定したい。

2 a区 154号ピット (第164図)

整理段階で西館の109号建物-2の柱穴を想定した遺構である。調査時の所見で古墳時代遺構の可能性が記されており、重複になるがこの項でも扱った。古墳時代と中世遺構の重複の可能性もあるが、断面の記録を欠き不明瞭である。

位置 40 P-10グリッド。

形状規模 ほぼ円形を呈す細く深い柱穴状の遺構で、2基のピットが重複している。規模は52×46×60(東側)・51(西側)cmを測る。

遺物 土師器甕1片を出土した。

2 a区 163号ピット (第164図)

西館の121号建物-4の柱穴にあたる。154号ピット同様古墳時代遺構の可能性が記されているが、断面の記録を欠いている。

位置 40 S-9グリッド。中世の97号溝が屈曲する内側部分にあり、171号井戸の北西2.4mに位置する。

形状規模 平面は不整な円形で底面は比較的広く平坦である。規模は62×60cm×53cmを測る。

遺物 土師器甕2片を出土した。

2 b区 1号ピット (第164図 PL-32・41)

位置 40 R-14グリッド。2 b区 1号土坑の北西40cmの地点に隣接している。

形状規模 ほぼ円形で丸底気味の遺構である。規模は38×37×32cmを測る。

遺物 中層出土の土師器を図示した。

備考 土層の観察を欠くが、古墳後期の遺物を出土しており、遺構の年代も遺物と同時期であろう。古墳時代後期の遺構と確認できるピットは次に扱う13・18号ピットと本遺構の3基ある。

2 b区 13号ピット (第164図 PL-32⑦・41)

位置 40 P-14グリッド。40号西溝と19号溝の間、ほぼ中央にある。

形状規模 円形で丸底気味の遺構である。規模は40×40cm×32cmを測る。

遺物 中層から下層にかけて出土した土師器2点を図示した。1は中層出土、2は底面直上で出土している。

備考 古墳時代後期の土器を底面から完形で出土してお

り、遺構の年代もこの時期と考えたい。

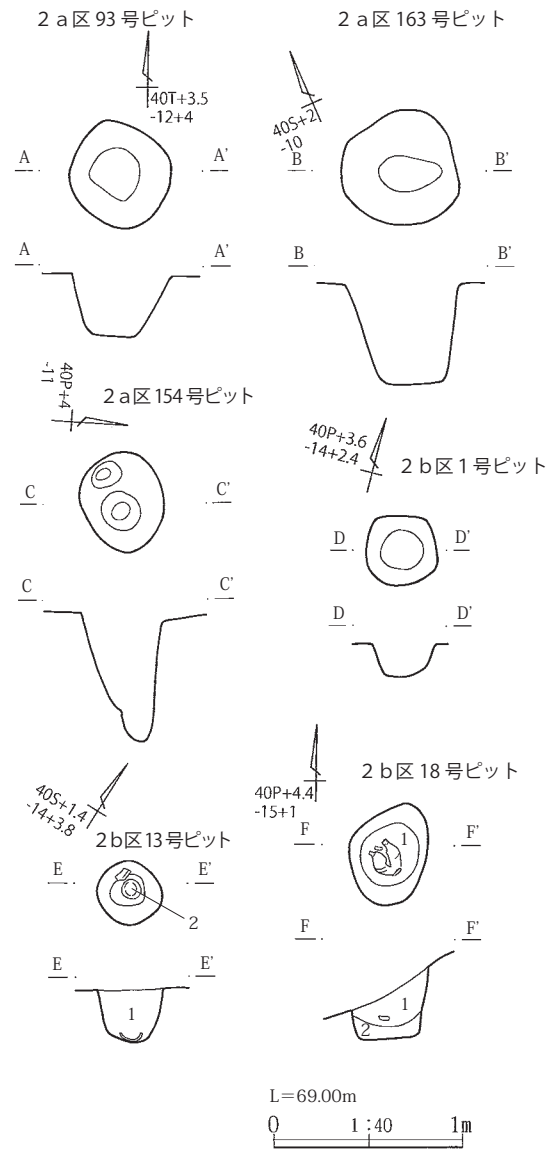
2 b区 18号ピット (第164図 PL-32⑧・41)

位置 40 P-15 グリッド。西館西側の溝群のうち、40号西溝の東側壁面から確認されている。

形状規模 長円形で底面は平坦である。壁は直線的に立ち上がっている。規模は55×41cm、深さ28cmを測るが、40号溝上端からは70cmの深さになる。

遺物 底面直上で横倒し状態で出土した土師器を図示した。他の破片の出土はない。

備考 底面から完形土器が出土しており、古墳時代の遺構と想定できる。上面からの深さが70cm以上となり、住居貯蔵穴であった可能性もある。



2b区 13号ピット土層説明

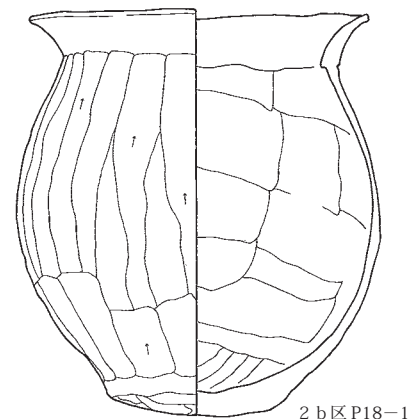
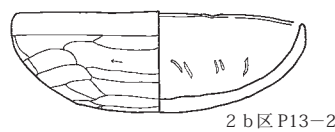
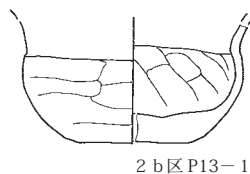
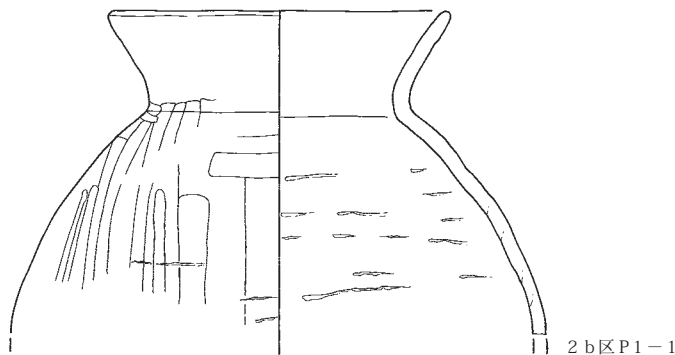
1: 黒褐色土: As-Cらしい白色パミス、炭化物粒、焼土を少し含む。

2b区 18号ピット土層説明

1: 黒色粘質土 (10YR2/1): As-C 軽石、径2~3mmのローム粒少し混入。粒子細かく締まりやや弱い。

2: にぶい黄褐色シルト質土 (10YR4/3): 地山シルトと黒色粘質土が混在。粒子細かく締まりやや弱い。

* 中世ピットを想定して掘り下げところ古墳時代前期の小型甕が出土した。性格不明だが柱穴ではない



第164図 第7面ピットと出土遺物

7 遺構外の遺物

中世以降の遺構に混入したものや、遺構に伴わない遺物はきわめて多い。それらをこの項で一括して記した。

(1) 縄文時代の石器 (第165図 PL-42)

縄文時代の遺構は確認されなかった。出土した土器はわずかで磨滅がすすみ、図示に耐えるものはなかったが、石器が少量出土し、10点を図示した。土器に比べ磨滅は少なく、洪水などで運ばれたものではないようだ。剥片類に比べ鏃2・3や打斧4・5のように定形石器の比

率が高い。また、石皿や多孔石のような大型の石器もない。付近は集落に近接する地点ではなく、狩猟採集の場であったと考えたい。2 b区の1・2面集石から3点が混入した以外は単独の出土であった。1の尖頭器は縄文草創期の石器で、玉村地区では数少ない出土品である。

(2) 弥生土器と古式土師器 (第166図 PL-42)

弥生時代の遺構も確認されていないが、土器がわずかに出土している。中でも1は小破片であるが弥生中期の遺物で、4も不明瞭であるが弥生中期前半まで遡る可能性のある遺物である。弥生後期の破片も散在する程度だ



第165図 縄文時代の石器

が、古式土師器の段階になって出土量は激増する。

(3) 古墳時代の土器 (第167～169図 PL-42～44)

掲載できなかった土師器破片数は33,687片で、そのうち8,716片(25.9%)が刷毛目のある台付甕である。古墳時代前期に突然遺跡周辺に集落が営まれることがわかる。

1 a区30 T-18・19グリッド周辺で出土した土器は住居を想定したが遺構を確認できなかった地点(第153図参照)の遺物であり、1・2・6・12・13・15・16・19が該当する。その他の1 a区破片も大溝を挟んで微高地と呼んだ調査区北西側から出土している。この地点付近に古墳時代前期の竪穴住居が存在していたと考えられるが、確認することができなかった。

2 a区では中世館の西堀にあたる40号西溝からの出土が際立つ。11・13・28・31・33～36が該当し、他に37～40の模倣杯も含まれる。もう1地点が40 P・Q-8・9グリッドから出土した破片で、1・3・6・

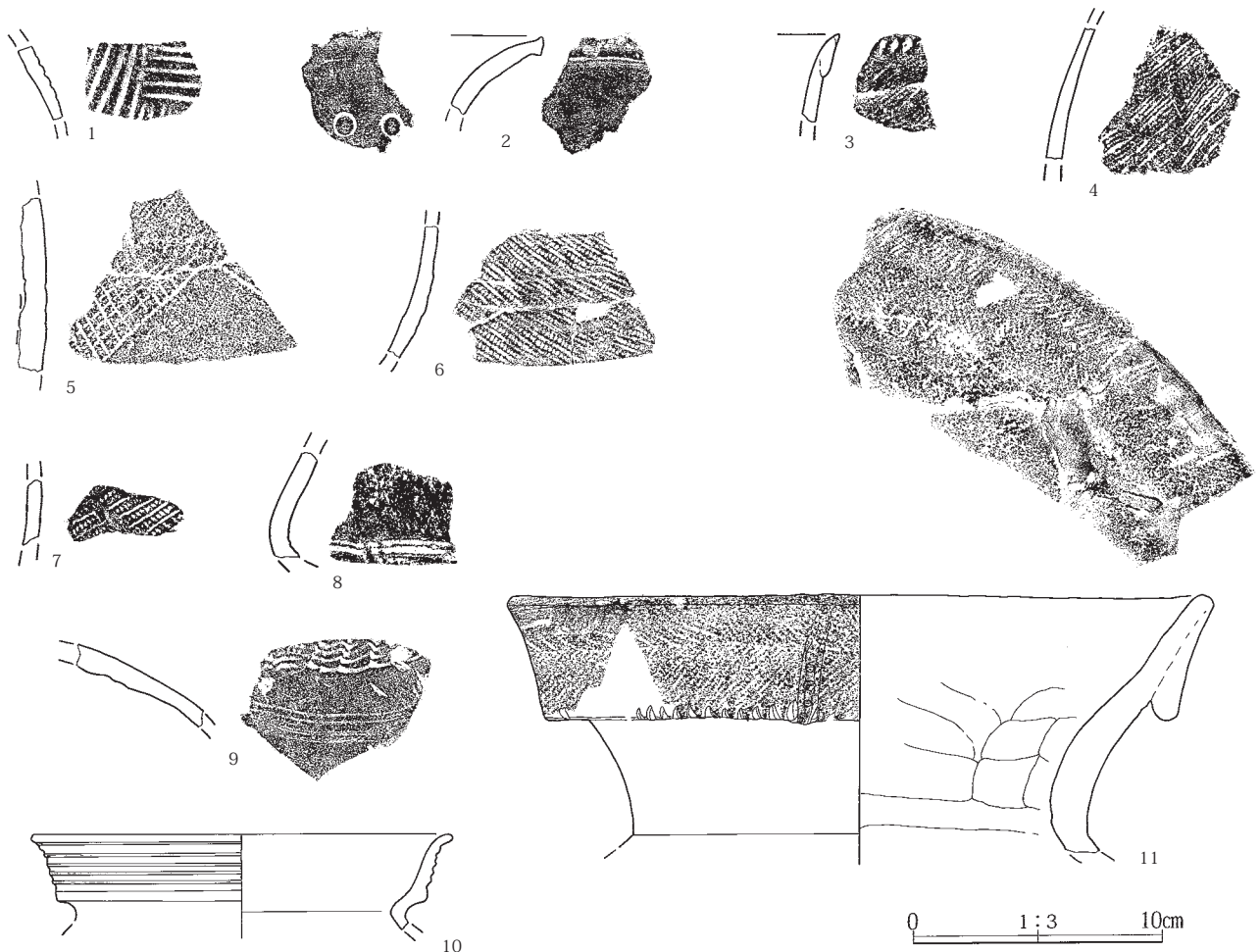
12・14・19・21が該当する。ここには166・169号井戸があるが、この施設は竪穴住居貯蔵穴として稀に見られる深さである。中世館に伴う施設があって確認できなかったが、古墳時代竪穴住居の存在していた可能性のある地点である。

(4) 奈良・平安時代の遺物 (第170・171図 PL-44)

1 a区20・21は古墳時代末から奈良時代にかけての須恵器で、2 a区45と共に該期の遺物出土はごく少ない。

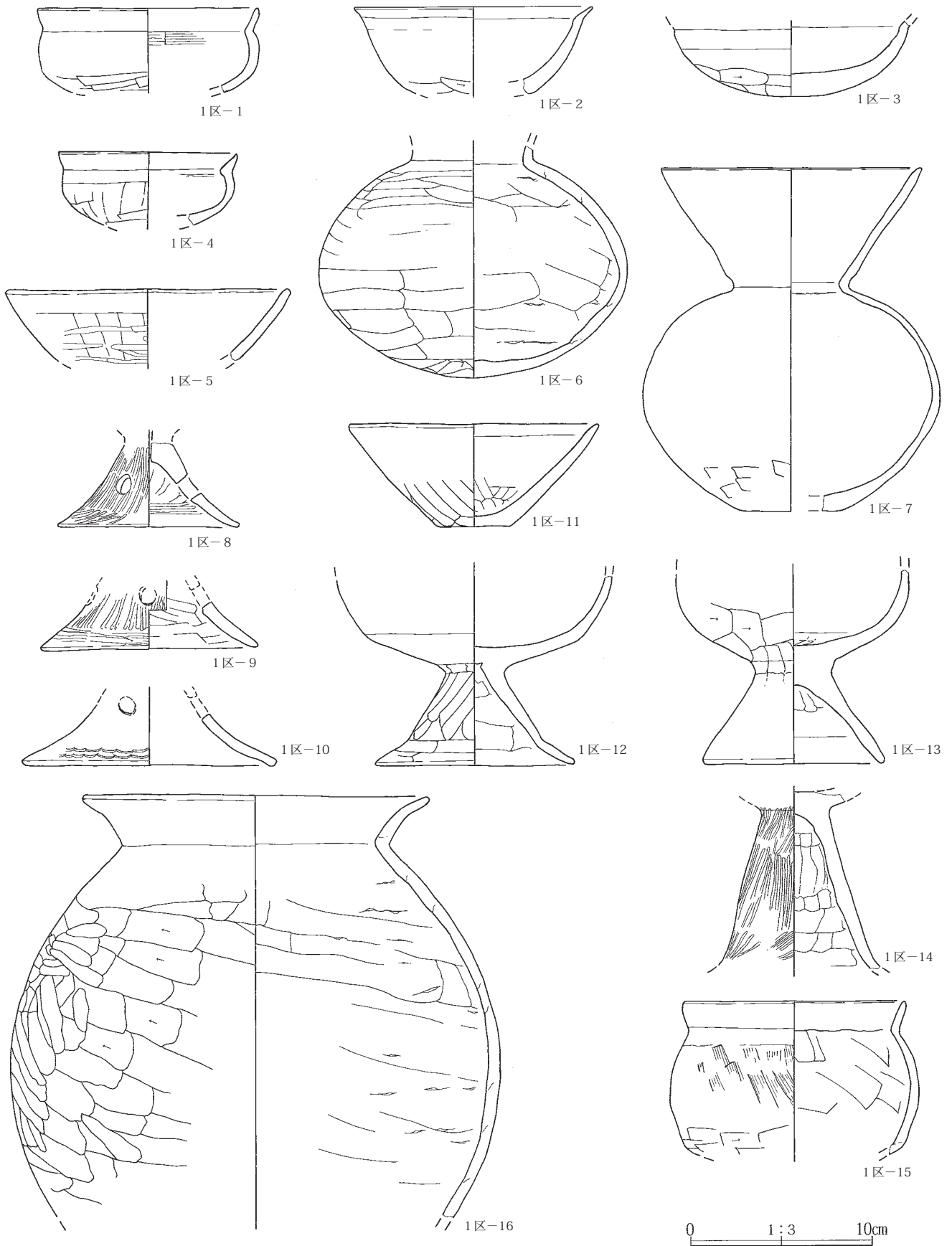
他はほとんどが9世紀遺構の遺物である。1区で目立つのが中世館に伴うと想定した15号井戸出土の大型須恵器類である。23・24の椀の出土もあるが、25～27の特殊な須恵器類が集められた後に廃棄されたような出土状態であった。他の遺物は調査区の広い範囲に散在し、遺構の位置を推定できるような集中分布はなかった。

掲載できなかった須恵器総数は951片、灰釉陶器9片である。

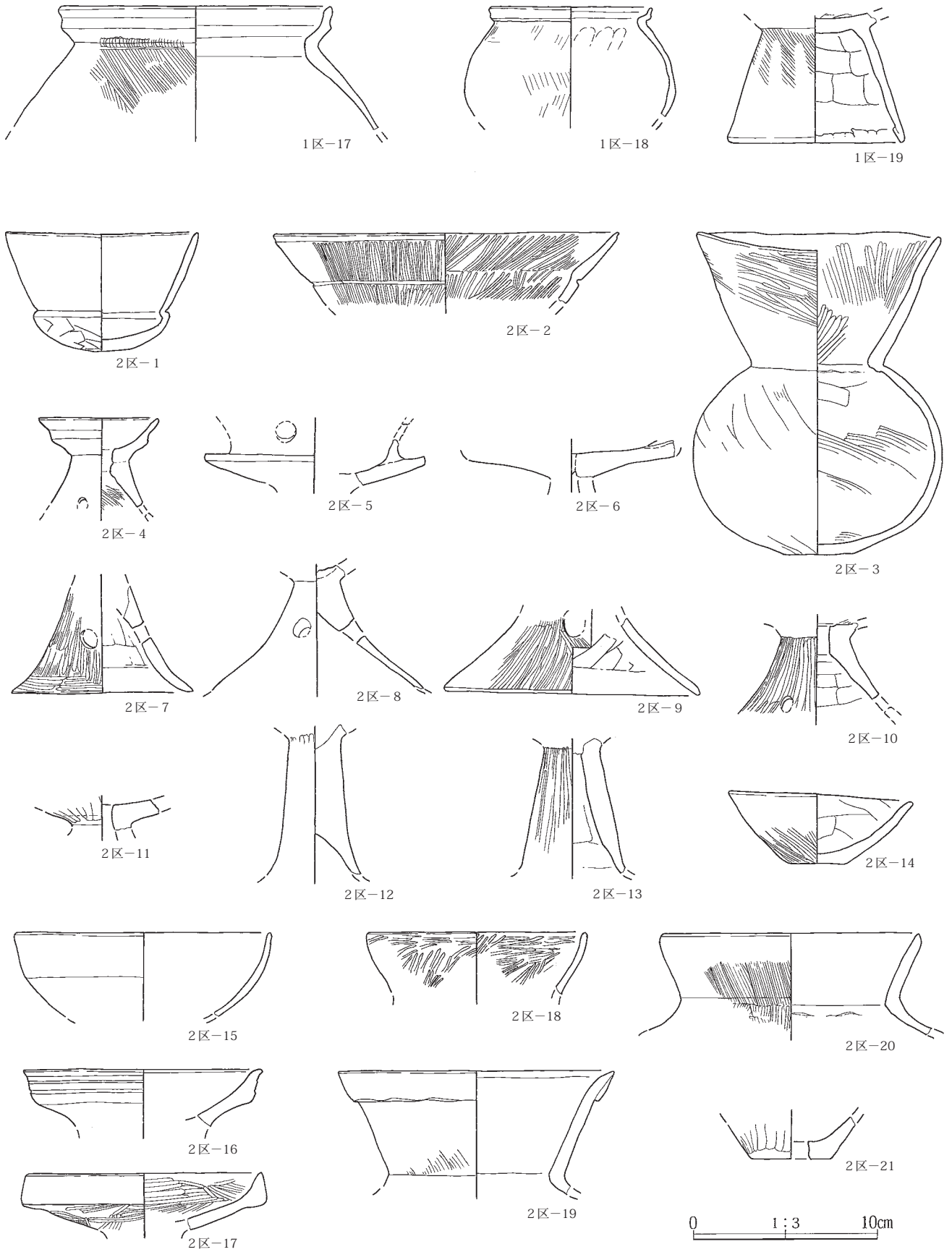


第166図 弥生土器と古式土師器

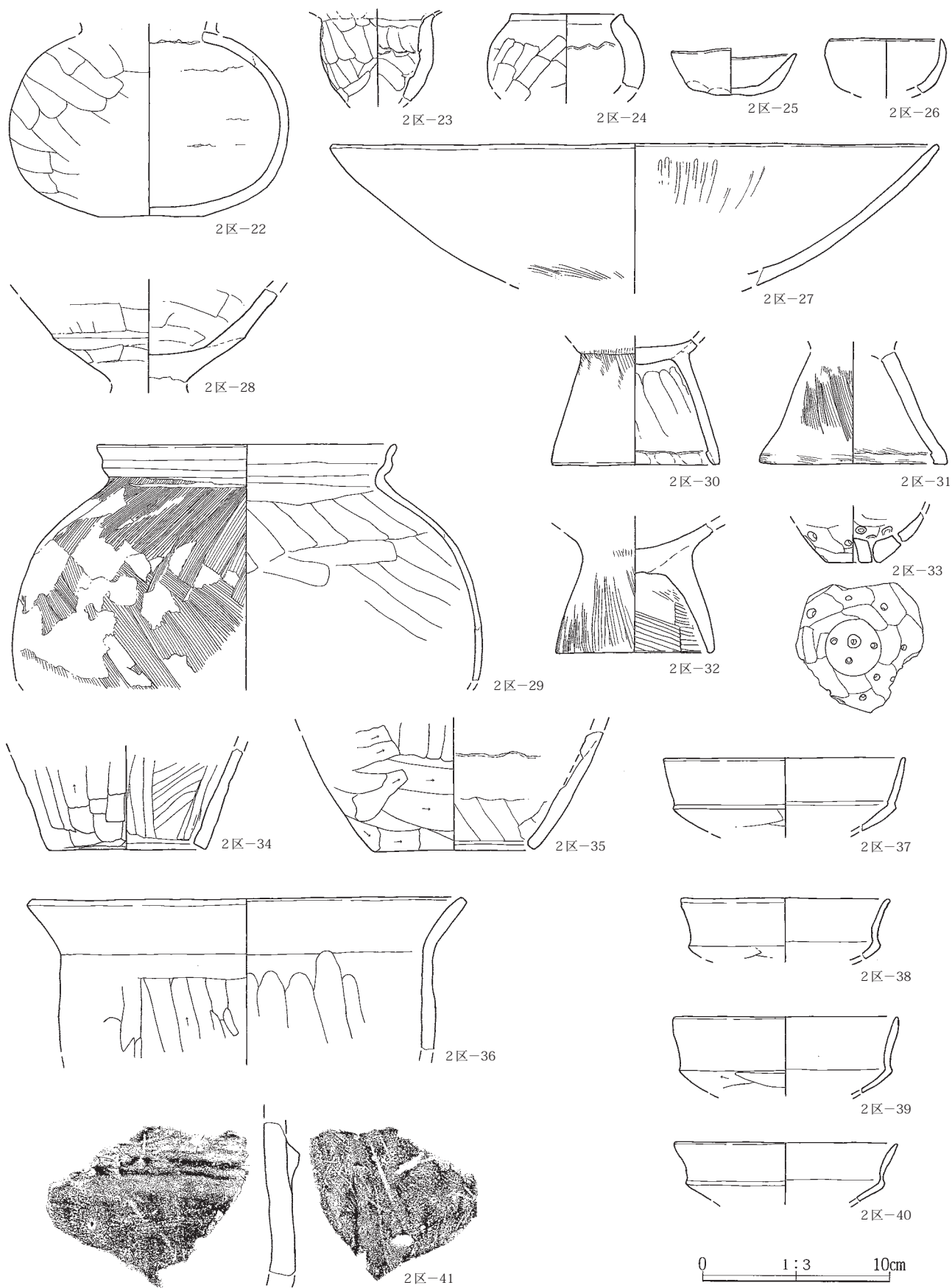
II 発掘調査の記録



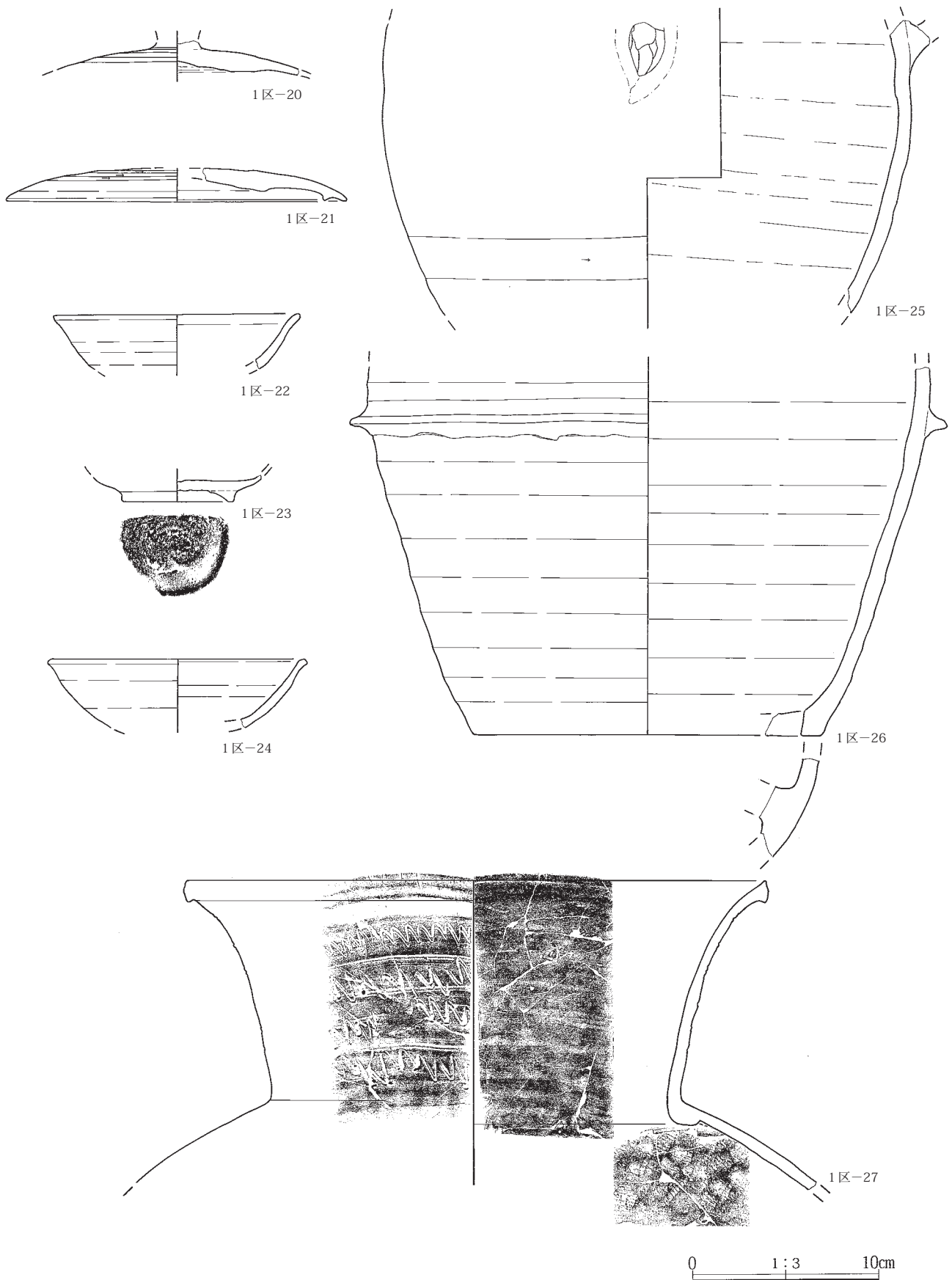
第167図 1区古墳時代の土器



第 168 図 1・2区古墳時代の土器

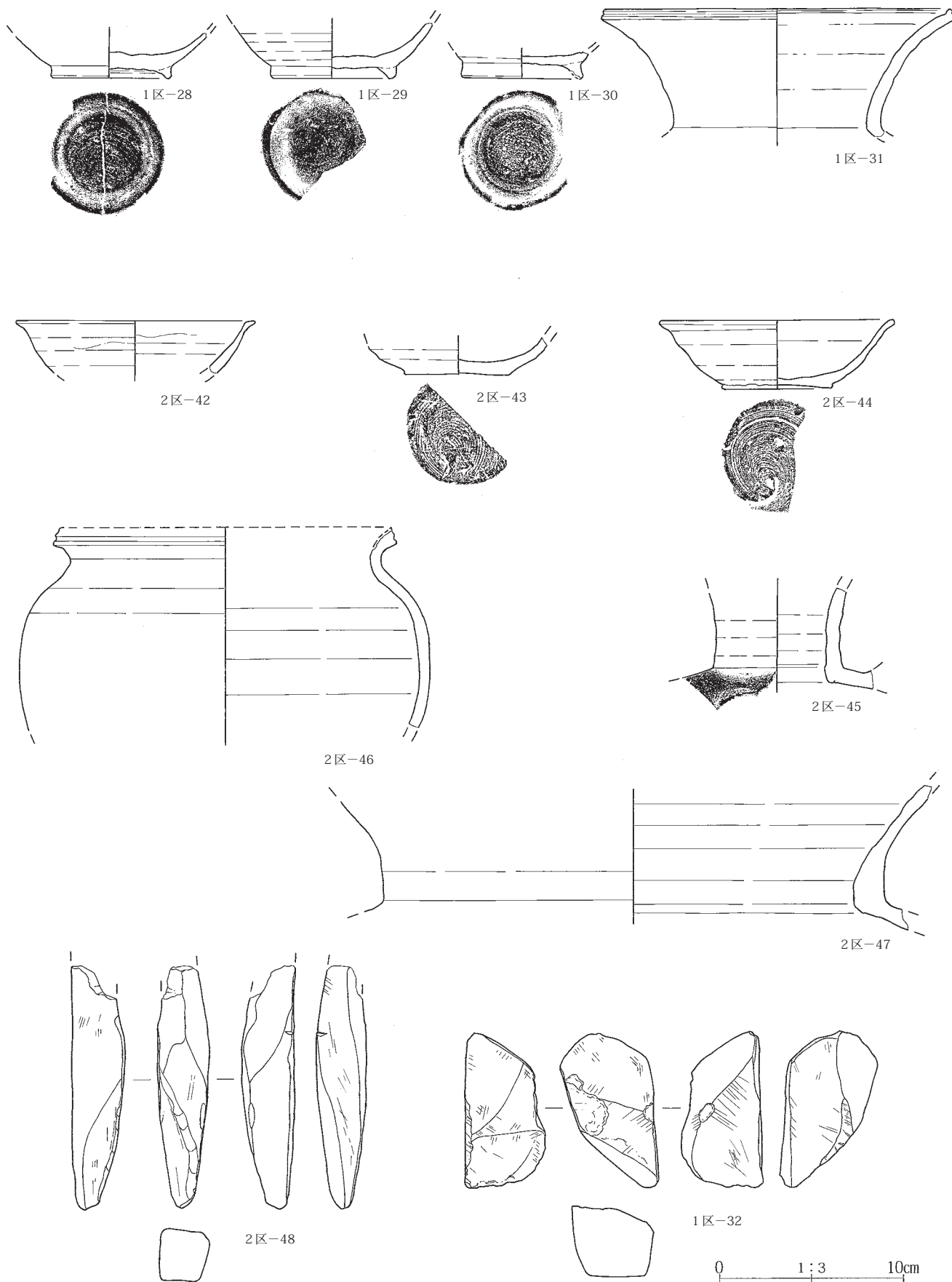


第 169 図 2 区古墳時代の土器

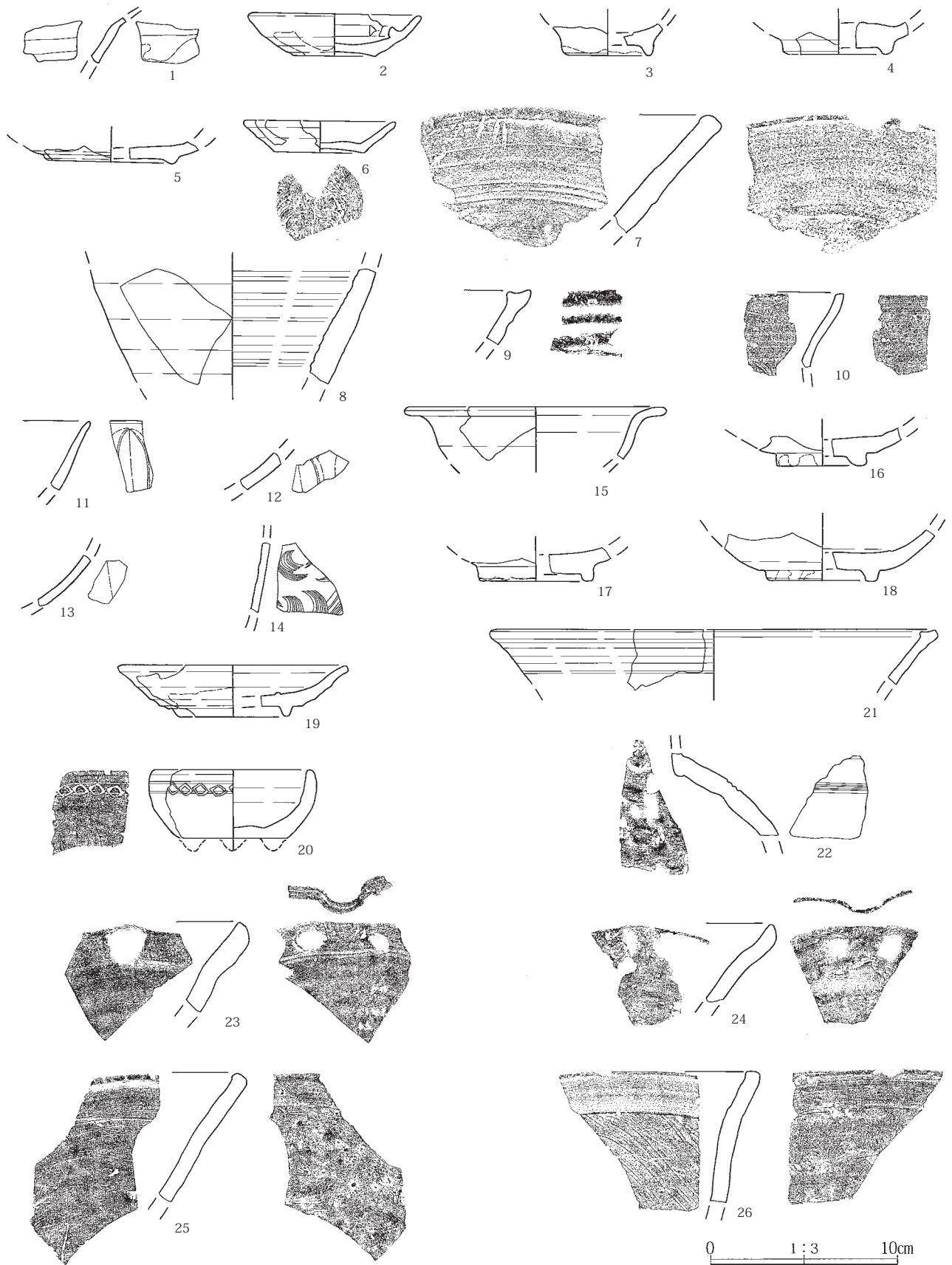


第170図 1区奈良・平安時代の土器

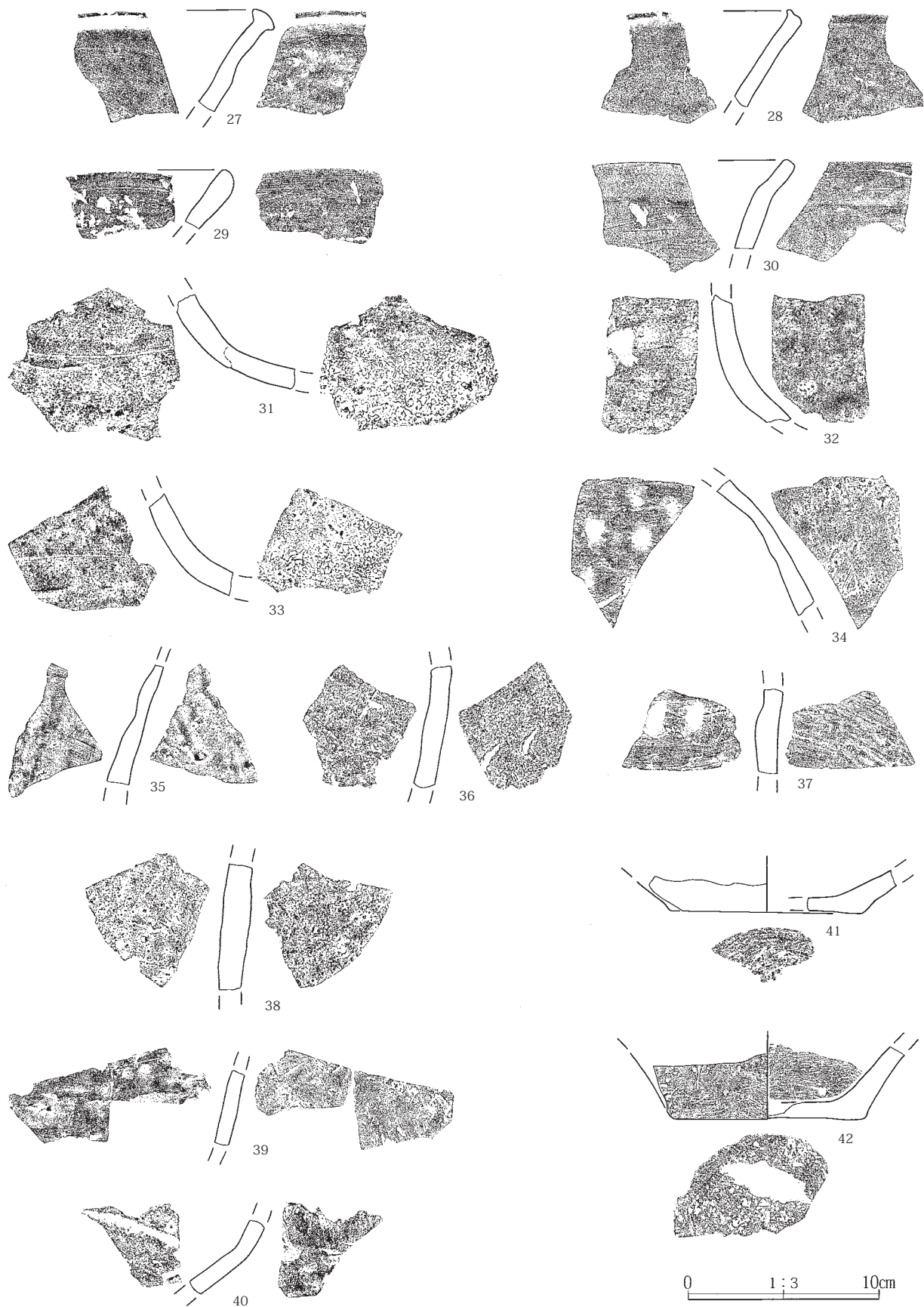
II 発掘調査の記録



第 171 図 1・2区奈良・平安時代の土器



第172図 中・近世遺物(1)



第 173 図 中・近世遺物 (2)

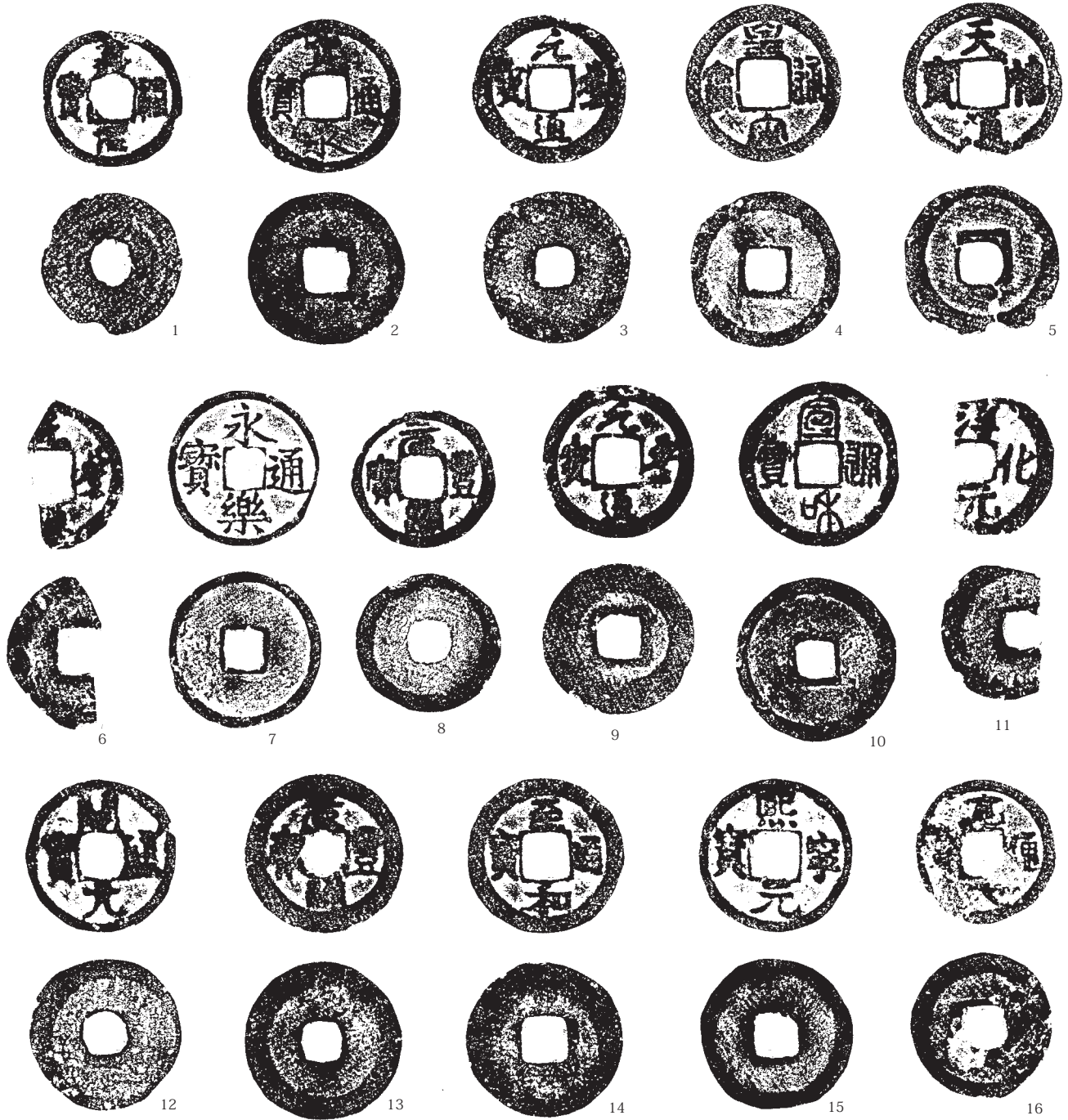
(5) 中・近世の遺物 (第172～174図 PL-45)

西館(2a区)内のピットから2点の舶載磁器が出土しているが、遺構外遺物にも舶載磁器が9点ある。そのうち1区出土は4・8のみで、他の11～14・16～18の7点はすべて2区西館内の出土である。その他の24・29など在地系陶器でも13世紀まで遡れるような古手の遺物は西館内に偏っている。3個所の方形館のうち、西館が最初に出現したことが遺物から想定できる。

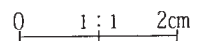
掲載できなかった中近世遺物には陶磁器類 1079 片、軟質陶器類 553 片、土師質皿類 49 片がある。

(6) 中・近世の銭貨 (第174図 PL-45)

遺構に伴わなかった銭貨は 16 点あり、各調査区から出土している。寛永通宝は 2・16 の 2 点が遺跡出土のすべてである。他の銭貨は墓坑出土と同じ時期の中国銭である。墓坑の確認されていない 2 a 区西館内からも 8



第174図 遺構外銭貨



～12の5点が出土している。2b区では13・14を集石(第27図)付近の15号溝上面攪乱部分で採取した。集石内で2点出土している他、集石に近接する13号溝

ー4(第36図)と併せ全点が集石付近に集中している。これらの銭貨は集石に伴うか、集石部分の構築時に運び込まれたものと考えたい。

第三章 鑑定・分析

1 鑑定・分析の目的

本項では調査中に行った遺跡内での石材同定、および整理作業中に行った出土骨類分析の目的を記し、併せてその成果を要約した。

石材同定は2カ所の遺構に伴う礫について、群馬地質研究会 飯島静男氏に遺跡内で直接鑑定をお願いした。

1カ所は1区大溝の北隅で底面付近に堆積する礫群のうち、拳大以上の礫を対象とした。これは発掘調査中、伊勢屋ふじこ氏より大溝底面付近に見られる大き目の礫は最初の通水時に勢よく流れ込んだ水流とともに運ばれた礫であろうとの指摘を受け、大溝に通水した河川が変流後の利根川と特定することができるか、判断材料を得ることを目的とした。

もう1カ所は1区14号井戸の石組み材についてである。この遺構内の礫は調査担当者の中でも大溝内の礫と異なるように見えたため、大溝もしくは利根川まで行って採取した礫か、異なる礫で利根川変流以前に構築された可能性のある井戸材かの判断材料を得ることを目的とした。同定の対象とした礫は大溝同様に拳大以上の大きさである。

同定の結果は1区大溝の礫は利根川で普通に見られる礫種を主体としたもので、大溝最下面で観察できる通水痕跡が利根川からのものとの推定が支持された。

1区14号井戸の礫種は西毛地域、鎭川等の特色が強く、大溝底面とは明らかに異なる構成である。

遺跡から北側にある利根川河川敷までの距離は約0.6キロメートル、南側にある烏川河川敷までの距離は約2.1キロメートルである。

なお、ここで同定した石材は遺物として取り上げたものではなく、収蔵していない。

骨類の分析は人骨・獣骨併せて生物考古学研究所の榑崎修一郎氏にお願いした。氏には財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団在職中に、頻繁に調査現場にも足を運んでいただいていたが、同時期に調査していた他遺跡での出土骨類の分析のため本遺跡の分析を調査中に行うことができず、整理期間をお願いすることとなった。

遺跡内の墓坑は数が少なく重複もなく、副葬銭に寛永通宝を伴わないなど、比較的短期間に築かれた遺構と想定していた。分析の目的は、出土人骨から遺跡の特徴を抽出することにあった。

人骨は他の群馬県出土中世人骨と同様に遺存状態が悪く、主に遊離歯しか検出されておらず、刀傷や鉄砲傷などの確認は望めないことは調査中より指摘されていたが、埋葬が行われた時期の館が、戦時に限定された施設であれば埋葬骨は成人男性に偏ることを想定した。反面、生活域に近接した地点の平時の墓域であれば女性や子供の骨が均等に混じるなど、特徴を見出すことにあった。

今回の分析により、被葬者は、10基から11体の男女及び子供がある程度均等に検出されているため、戦時に限定された施設ではなく、生活域であることが推定された。特に、未成人人骨が多数検出されたことは、特記すべきである。

2 齊田竹之内遺跡の岩石

1 大溝北端の下底の礫について

総数 81 個のうち、59%が粗粒輝石安山岩である。このうち、円礫の形状のものは河川礫と思われるが、角礫ないし凹凸に富む多角形の形状のものは多孔質でスコリア的な岩質のものもあり、前橋泥流からの洗い出しと推定される。それを除いても粗粒輝石安山岩は半数近くあり、圧倒的に多い。次いで多いのは変質安山岩で 19%。岩質からは吾妻川および同川合流点より下流の利根川にみられる種類である。5%以下で少ないが溶結凝灰岩は片品川上流域に原産地があるものなどで、利根川の河床礫に普通にみられる。その他石英閃緑岩、ひん岩、文象斑岩、珪質頁岩など数は少ないが利根川に普通にみられる種類である。

砂岩、礫岩、変質玄武岩、変玄武岩は利根川にもあり、また鑄川にもあり、これだけではどちらとも言えない。雲母石英片岩は、神流川、鮎川、鑄川および同川合流点以下の烏川の礫で、利根川には伊勢崎付近より下流にならないとみられない。

珪質変質岩は安山岩などを原岩とする可能性があるが、とくに産地や河川の指標とはなり得ない。以上を概観すると、おおむね利根川方面の礫を混じえていると思われるが、雲母石英片岩のこぶしよりは大きく、人頭大近い礫が 2 個含まれているので、全部利根川とは言い難い。場合によっては人為的に持ち込まれている可能性も否定できない。安山岩が圧倒的に多いのは県央部を流れる河川の礫のひとつの特徴ではあるが、現在の河床礫と比較して、それにしても安山岩がやや多めの感がある。

2 14 号井戸の石組み

総数 321 個のうち、粗粒輝石安山岩が 60%であるが、このうち 1/3 から 1/2 くらいは泥流からの洗い出しと思われる形状および岩質である。円礫に近い形のもの、大きく分けて 2 種あり、利根川および県央部他河川にみられる、比較的新鮮な安山岩と、変質安山岩とは言いえないものの、やや褐色味をおびたりする（古い感じのする）岩質のものがある。後者はやや少ない。後者は鑄川など西毛の河川によくみられる。

変質安山岩はとくに吾妻川～利根川系か、それとも鑄川系かは明確に区別できない。

砂岩は利根川にもみられる岩石であるが、この井戸の石の場合、細粒ワッケ質のもののほか、淘汰のよいアレナイト、アルコース質のもの、やや粗粒かつ淘汰不良で礫岩に近いものなど、種類が多く、これらの特徴から、鑄川および神流川方面の河床礫と推定される。

チャートは、塊状のもの、薄層理の発達するもの、およびやや準片岩状のものなどであり、多野方面（鑄川、神流川系）の河床礫と推定される。

雲母石英片岩、緑色片岩、黒色片岩、珪質準片岩、砂質準片岩など、量は多くないが、チャート、砂岩同様多野方面である。変玄武岩も上記に準ずる。デイサイトも鑄川の礫に多くはないが、普通にみられる。

以上を簡単にまとめると、これらの石は利根川より持ってきたとは考えられない。当遺跡より南の方面の河川の礫である。

2002 年 3 月 15 日

第 15-1 表
大溝底面北端の礫

粗粒輝石安山岩	48	59.3%
変質輝石安山岩	15	18.5%
溶結凝灰岩	4	4.9%
珪質変質岩	3	3.7%
雲母石英片岩	2	2.5%
ひん岩	2	2.5%
砂岩	1	
礫岩	1	
珪質頁岩	1	
文象斑岩	1	
石英閃緑岩	1	
変質玄武岩	1	
変玄武岩	1	
総数	81	

第 15-2 表
14 号井戸の礫

粗粒輝石安山岩	192	59.8%
砂岩	40	12.5%
チャート	35	10.9%
変質安山岩	18	5.6%
雲母石英片岩	15	4.7%
黒色片岩	3	
デイサイト	3	
変玄武岩	3	
礫岩	2	
珪質頁岩	2	
角閃石安山岩	1	
二ツ岳軽石	1	
緑色片岩	1	
珪質準片岩	1	
流紋岩	1	
ひん岩	1	
石英閃緑岩	1	
砂質準片岩	1	
総数	321	

3 齊田竹之内遺跡出土人骨・出土獣骨

はじめに

齊田竹之内遺跡は、群馬県佐波郡玉村町齊田に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、2002(平成12)年8月～2004(平成14)年8月まで断続的に実施された。

本遺跡では、主に中世の館跡・墓坑・溝等が検出されている。本遺跡の1a区の墓坑から、中世の人骨が出土した。また、1a区及び2a区の墓坑・遺構から獣骨が出土したので、以下に人骨と獣骨に分けて報告する。

【出土人骨】

人骨はクリーニング後、観察・写真撮影・計測を行った。なお、出土歯の計測方法は藤田(藤田,1949)の方法に従い、歯の歯冠計測値の比較は、中近世人は松村(Matsumura,1995)を、現代人は権田(権田,1959)を使用した。

1a区では、1号墓坑・2号墓坑・3号墓坑・4号墓坑・5号墓坑・6号墓坑・7号墓坑・9号墓坑・12号墓坑・13号墓坑の10基から人骨が出土している。いずれも保存状態が悪く遊離歯しか出土していない場合が多い。

1. 1号墓坑出土人骨

人骨は、長軸約42cm・短軸約34cm・深さ約5cmの方形土坑から出土している。長軸は、ほぼ南北である。副葬品は検出されていない。

人骨は遊離歯の乳歯の歯冠部のみ出土している。歯根が破損しているため正確な死亡年齢推定は困難であるが、永久歯が1点も出土していないことから被葬者の死亡年齢は幅を持たせて、約9ヶ月から1歳半であると推定される。性別は不明である。

1975年の日本人の身長統計では、1歳男子は79.7cm・女子は79cmである。土坑の規模から、屈葬あるいは座葬で埋葬されたと推定される。

2. 2号墓坑出土人骨

人骨は、長軸約104cm・短軸約52cm・深さ約31cmの楕円形土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。なお、本墓坑は24号溝と重複している。副葬品は、砥石が検出されている。歯が北側から出土しているので、頭位は北であると推定される。

人骨は遊離歯の歯冠片のみ出土しており、性別及び死亡年齢推定は不可能である。しかしながら人歯である。

3. 3号墓坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況：1辺約51cm～53cm・深さ約3cmの方形土坑から出土している。

(2) 人骨の埋葬状態：頭位は不明である。被葬者は約5歳～6歳の男性(男児)であると推定されている。1975年の日本人の身長統計では、5歳男子は108.3cm・6歳男子は114.3cmである。土坑の規模から、伸展葬ではなく屈葬あるいは座葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品：錢貨の北宋銭6点が検出されている。

(4) 人骨の出土部位：遊離歯の歯冠部が出土している。

(5) 被葬者の個体数：遊離歯には重複部位が認められないので、1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：遊離歯の歯冠計測値が比較的大きいので、男性(男児)であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：歯根部が破損しているため、正確な死亡年齢推定は困難であるが、約5歳～6歳であると推定される。

(8) 被葬者の古病理：遊離歯には、歯石の付着及び俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は認められなかった。

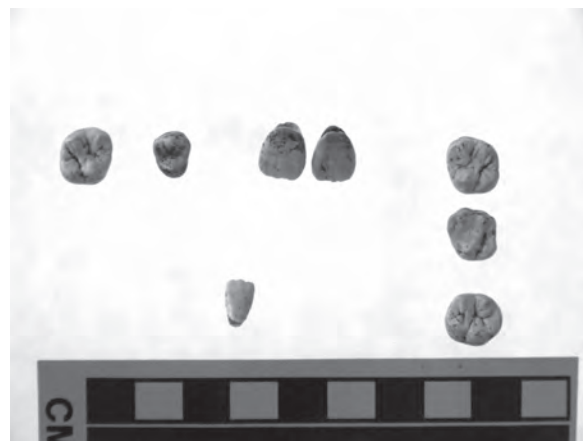


写真1. 3号墓坑出土人歯咬合面観

4. 4号墓坑出土人骨

本土坑からは、少なくとも2個体が同定された。出土状況から2体合葬ではなく、4号墓坑1は本来の土坑の被葬者で、4号墓坑2は4号墓坑1の上に掘り込んで埋葬したものであると推定される。

・4号墓坑-1

(1) 人骨の出土状況：長軸約93cm・短軸約59cm・深さ約10cmの楕円形土坑から出土している。長軸は、ほぼ南北である。

(2) 人骨の埋葬状態：遊離歯が土坑の北側から出土しているため、被葬者の頭位は北である。被葬者は成人と推定されているため、土坑の規模から、埋葬方法は屈葬であると推定される。

(3) 副葬品：銭貨の渡来銭5点が検出されている。

(4) 人骨の出土部位：遊離歯の歯冠部が出土している。

(5) 被葬者の個体数：遊離歯には、重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：出土遊離歯の歯冠計測値が比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：出土遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出するマルティンの2度の状態であるが、咬耗がすすんでいるため、被葬者の死亡年齢は約40歳代であると推定される。

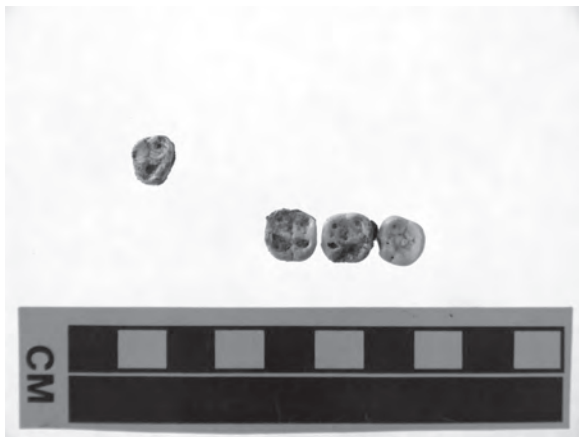


写真2. 4号墓坑1出土人歯咬合面観

・4号墓坑-2

4号墓坑-2は、4号墓坑覆土と記されている以外、出土状況は不明である。

人骨は、遊離歯の歯冠部のみ出土している。遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。出土遊離歯の歯冠計測値は、比較的小さいため、被葬者の性別は女性(女兒)であると推定される。歯根部が破損しているため、正確な死亡年齢の推定は困難であるが、永久歯と乳歯との混合歯である。犬歯の歯冠は完成しているため、恐らく、約5歳から6歳であると推定される。

出土状況から、母親が先に死亡し、何らかの理由で子供も日をおかずに死亡したため、母親の墓坑の上に埋葬したとも推定できる。

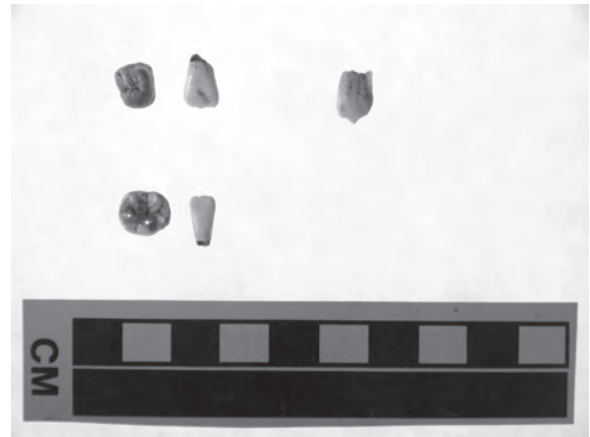


写真3. 4号墓坑2出土人歯咬合面観

5. 5号墓坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況：長軸約(72)cm・短軸約(52)cm・深さ約8cmの隅丸長方形土坑から出土している。長軸方向はほぼ南北で、土坑の南西部は、別土坑と重複している。

(2) 人骨の埋葬状態：遊離歯が土坑の北側から出土しているため、被葬者の頭位は北である。被葬者は成人と推定されているため、土坑の規模から埋葬方法は屈葬であると推定される。

(3) 副葬品：検出されていない。

(4) 人骨の出土部位：主に遊離歯が出土している。

(5) 被葬者の個体数：遊離歯には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：遊離歯の歯冠計測値が比較的小さいため、女性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出するマルティンの2度の状態であるため、約30歳代であると推定される。

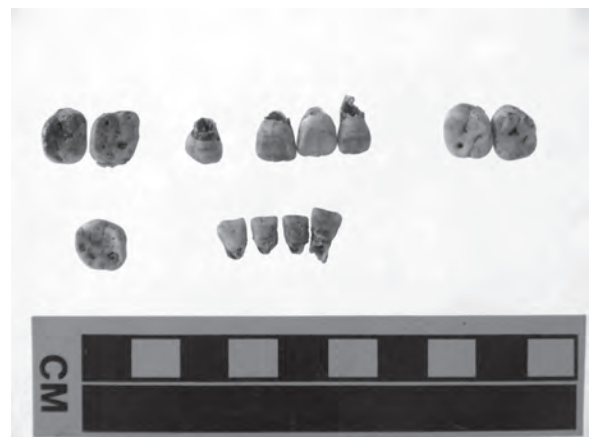


写真4. 5号墓坑出土人歯咬合面観

6. 6号墓坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況：長軸約 130cm・短軸約 101cm・深さ約 10cm の隅丸長方形土坑から出土している。長軸方向は、北東から南東である。

(2) 人骨の埋葬状態：遊離歯は、土坑の北部から出土しているため、被葬者の頭位は北である。被葬者は、成人と推定されているので、土坑の規模から、埋葬方法は屈葬であると推定される。

(3) 副葬品：錢貨の渡来錢 4 点が検出されている。

(4) 人骨の出土部位：主に遊離歯が出土している。

(4) 被葬者の個体数：遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は 1 個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別：遊離歯の歯冠計測値が比較的小さいので、被葬者の性別は女性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢：遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状に露出するマルティンの 2 度の状態であるので、約 30 歳代であると推定される。

7. 7号墓坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況：長軸約 84cm・短軸約 67cm・深さ約 6cm の隅丸長方形土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。

(2) 人骨の埋葬状態：遊離歯は、土坑の北部から出土しているため、被葬者の頭位は北である。被葬者は成人と推定されているので、土坑の規模から、埋葬方法は屈葬であると推定される。

(3) 副葬品：錢貨の渡来錢 6 点が検出されている。

(4) 人骨の出土部位：主に遊離歯が出土している。

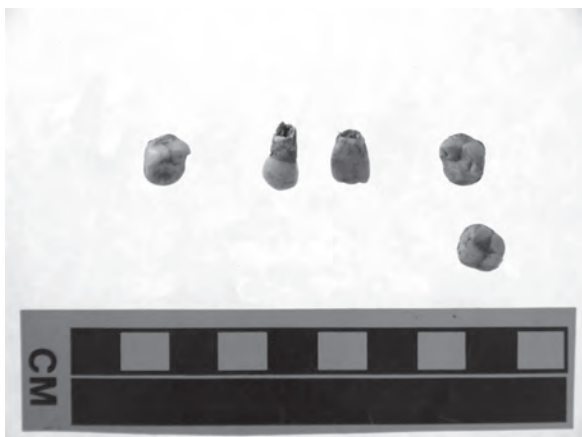


写真 5. 7号墓坑出土人歯咬合面観

(5) 被葬者の個体数：遊離歯には重複部位が認められ

ないため、被葬者の個体数は 1 個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：遊離歯の歯冠計測値が比較的小さいので、被葬者の性別は女性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：遊離歯の咬耗度を観察すると、エナメル質のみのマルティンの 1 度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約 20 歳代であると推定される。

8. 9号墓坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況：人骨は、長軸約 109cm・短軸約 76cm・深さ約 19cm の隅丸長方形土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。

(2) 人骨の埋葬状態：遊離歯は、土坑の北部から出土しているため、被葬者の頭位は北である。被葬者は、成人と推定されているので、土坑の規模から埋葬方法は屈葬であると推定される。

(3) 副葬品：錢貨の渡来錢 3 点が検出されている。

(4) 人骨の出土部位：主に遊離歯が出土している。

(5) 被葬者の個体数：遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は 1 個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：出土遊離歯の歯冠計測値が比較的大きいので、被葬者の性別は男性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：出土遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状あるいは線状に露出するマルティンの 2 度の状態であるが、咬耗がすすんでいるので、被葬者の死亡年齢は約 40 歳代であると推定される。

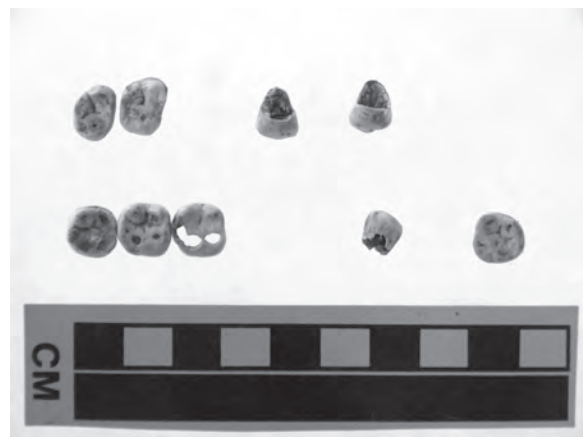


写真 6. 9号墓坑出土人歯咬合面観

9. 12号墓坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況：人骨は、長軸約 75cm・短軸約 61cm・深さ約 35cm の隅丸長方形土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。

(2) 人骨の埋葬状態：遊離歯は、土坑の北部から出土しているので、被葬者の頭位は北である。被葬者は、約7歳から8歳の男性(男児)であると推定されている。1975年の日本人の身長統計では、7歳及び8歳男子は120.7cm・129.3cmである。土坑の規模から、伸展葬ではなく屈葬あるいは座葬で埋葬されたと推定される。

(3) 副葬品：銭貨の渡来銭3点が検出されている。

(4) 人骨の出土部位：遊離歯が出土している。



写真7. 12号墓坑出土人歯咬合面観

(5) 被葬者の個体数：遊離歯には重複部位が認められないため、1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：出土遊離歯の歯冠計測値が比較的大きいので、男性(男児)であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：出土遊離歯の咬耗度を観察すると、咬耗がほとんど無いマルティンの0度の状態かエナメル質のみのマルティンの1度の状態である。また、右上下M1(第1大臼歯)は白色を呈し同M2(第2大臼歯)は茶色を呈している。

これは経験則であるが、このような場合は、茶色を呈しているM2は顎骨にあり萌出していない状態である。歯根が残存していないので正確な死亡年齢推定は困難であるが、被葬者の死亡年齢は、約7歳から8歳であると推定される。

遊離歯のみが出土したことは、被葬者の死亡年齢が若いために残存しなかったと推定すると矛盾しない。

10. 13号墓坑出土人骨

(1) 人骨の出土状況：人骨は、長軸94cm・短軸約60cm・深さ約49cmの隅丸長方形土坑から出土している。

(2) 人骨の埋葬状態：遊離歯が土坑の北側から出土しているので、被葬者の頭位は北である。被葬者は成人と推定されているので、土坑の規模から、埋葬方法は屈葬であると推定される。

(3) 副葬品：検出されていない。

(4) 人骨の出土部位：主に遊離歯が出土している。

(5) 被葬者の個体数：遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別：出土遊離歯の歯冠計測値が比較的大きいので、被葬者の性別は男性であると推定される。

(7) 被葬者の死亡年齢：出土遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が線状及び点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるので、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

出土人骨まとめ

齊田竹之内遺跡の1a区から出土した人骨について、第16-1表に出土人骨のまとめを、第16-2表に出土人骨の歯冠計測値及び比較表を示した。

第16-1表 齊田竹之内遺跡出土人骨のまとめ

遺構	個体数	頭位	副葬品	性別	死亡年齢
1号墓坑	1個体	不明	無し	不明	約9ヶ月～1歳半
2号墓坑	1個体	北	砥石	不明	不明
3号墓坑	1個体	不明	北宋銭	男性(男児)	約5歳～6歳
4号墓坑1	1個体	北	渡来銭	女性	約40歳代
4号墓坑2	1個体	不明	無し	女性(女児)	約5歳～6歳
5号墓坑	1個体	北	無し	女性	約30歳代
6号墓坑	1個体	北	渡来銭	女性	約30歳代
7号墓坑	1個体	北	渡来銭	女性	約20歳代
9号墓坑	1個体	北	渡来銭	男性	約40歳代
12号墓坑	1個体	北	渡来銭	男性(男児)	約7歳～8歳
13号墓坑	1個体	北	無し	男性	約30歳代

第16-2表 齊田竹之内遺跡出土遊離歯歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	齊田竹之内遺跡																		中世時代人*		江戸時代人*		現代人**			
		3号墓坑		4号墓坑1		4号墓坑2		5号土坑墓		6号墓坑		2号墓坑		9号墓坑		12号墓坑		13号墓坑		♂	♀	♂	♀	♂	♀		
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀		
上顎	I1	MD	9.5	9.2	—	—	—	—	8.3	8.1	—	—	7.9	—	—	—	8.2	8.3	—	—	8.48	8.29	8.78	8.38	8.67	8.55	
		BL	7.3	7.3	—	—	—	—	6.7	6.7	—	—	6.7	—	—	—	7.4	7.2	—	—	7.29	7.00	7.52	7.06	7.35	7.28	
	I2	MD	—	—	—	—	7.1	—	—	6.9	—	—	—	—	—	—	7.3	6.9	7.2	—	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05	
		BL	—	—	—	—	6.0	—	—	5.6	—	—	—	—	—	—	6.7	6.7	7.0	—	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51	
	C	MD	—	—	—	7.4	—	7.2	7.5	—	7.2	7.1	7.3	—	8.6	8.5	7.3	—	7.6	—	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94	7.71	
		BL	—	—	—	8.3	—	8.4	7.7	—	8.0	7.9	7.7	—	9.0	9.1	破損	—	8.2	—	8.50	7.94	8.66	8.03	8.52	8.13	
顎	P1	MD	7.7	—	—	—	7.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37		
		BL	9.6	—	—	—	9.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43		
	P2	MD	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94		
		BL	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23	
	M1	MD	10.6	11.3	—	—	—	—	9.7	9.8	—	8.3	8.5	—	—	—	10.4	—	—	—	10.45	10.09	10.61	10.18	10.68	10.47	
		BL	11.9	11.8	—	—	—	—	10.8	10.9	—	10.3	10.3	—	—	—	11.6	—	—	—	11.81	11.30	11.87	11.39	11.75	11.40	
下顎	M2	MD	—	—	—	—	—	—	9.3	9.1	—	—	—	—	8.8	—	—	—	—	—	9.65	9.42	9.88	9.48	9.91	9.74	
		BL	—	—	—	—	—	—	11.2	11.0	—	—	—	—	11.7	—	11.6	—	—	—	11.72	11.19	12.00	11.52	11.85	11.31	
	M3	MD	—	—	8.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8.5	—	—	—	—	—	8.6	—	—	—	—	8.94	8.86
		BL	—	—	10.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.79	10.50
	I1	MD	—	—	—	—	—	—	5.5	5.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.42	5.22	5.45	5.32	5.48	5.47	
		BL	—	—	—	—	—	—	5.5	歯石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.78	5.61	5.78	5.65	5.88	5.77	
顎	I2	MD	5.9	—	—	—	—	5.2	6.1	6.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.04	5.78	6.09	5.97	6.20	6.11	
		BL	5.8	—	—	—	—	5.9	5.9	6.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.22	5.98	6.29	6.11	6.43	6.30	
	C	MD	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.6	—	—	—	—	6.8	7.0	6.88	6.55	7.06	6.69	
		BL	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.9	—	—	—	—	—	7.7	7.5	7.82	7.33	8.04	7.39
	P1	MD	—	—	—	—	—	—	—	—	7.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.07	6.96	7.32	7.05	7.31	7.19
		BL	—	—	—	—	—	—	—	—	8.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8.10	7.72	8.34	7.89	8.06	7.77
顎	P2	MD	—	—	—	—	—	—	—	—	7.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42	7.29
		BL	—	—	—	—	—	—	—	—	8.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8.49	8.06	8.68	8.30	8.53	8.26
	M1	MD	—	11.6	—	10.6	—	—	10.8	—	—	—	—	—	11.0	—	12.1	11.9	—	—	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72	11.32	
		BL	—	10.7	—	10.4	—	—	10.7	—	—	—	—	—	11.1	—	11.0	11.0	—	—	—	11.00	10.49	11.15	10.62	10.89	10.55
	M2	MD	—	—	—	10.4	—	—	—	—	—	—	9.8	—	11.1	10.7	11.4	—	—	—	—	11.06	10.65	11.39	10.78	11.30	10.89
		BL	—	—	—	10.2	—	—	—	—	—	—	8.6	—	10.6	10.1	10.2	—	—	—	—	10.55	9.97	10.75	10.21	10.53	10.20
顎	M3	MD	—	—	—	9.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.96	10.65	
		BL	—	—	—	9.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.28	10.02

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。
 註2. 歯種は、I1(第1切歯)・I2(第2切歯)・C(犬歯)・P1(第1小臼歯)・P2(第2小臼歯)・M1(第1大臼歯)・M2(第2大臼歯)・M3(第3大臼歯)を意味する。
 註3. 計測項目は、MD(歯冠近遠心径)・BL(歯冠唇側舌径)を意味する。
 註4. 「破損」とは、歯冠が破損しており計測不能であることを示す。
 註5. 「歯石」とは、歯冠に歯石が付着しており正確な計測が不能であることを示す。

【出土獣骨】

出土獣骨は、クリーニング後、観察・写真撮影・計測を行った。なお、出土馬歯の計測方法は、フォン・デーン・ドリシュ (von den DRIESCH, 1976) の方法に従った。

1.1 a区出土獣骨

1a区では、8号墓坑・10号墓坑・11号墓坑の3基から、獣骨が出土している。

(1) 8号A墓坑出土獣骨

- ① 獣骨の出土状況：長軸約 119cm・短軸約 99cm・深さ約 8cm の楕円形土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。
- ② 獣骨の埋葬方法：出土位置から、頭位を南にし、左側を下にした側臥(横臥)屈葬で埋葬されたと推定される。
- ③ 副葬品：検出されていない。
- ④ 獣骨の出土部位：四肢骨片が出土している。残念ながら、頭部及び歯は出土していない。
- ⑤ 種名：馬(ウマ)[*Equus caballus*]である。
- ⑥ 性別：馬[ウマ]の場合、性別は犬歯の有無あるいは寛骨の形態で推定が可能であるが、今回、どちらも出土していないので性別は不明である。
- ⑦ 死亡年齢：歯が出土していないため、死亡年齢は不明。

(2) 10号A墓坑出土獣骨

- ① 獣骨の出土状況：長軸約 163cm・短軸約 102cm・深さ約 24cm の長方形土坑から出土している。長軸方向は、ほぼ南北である。
- ② 獣骨の埋葬方法：出土歯が土坑の南部から検出されているため、獣骨は、頭位を南にして埋葬(土葬)されたと推定される。なお、経験則であるが、人骨の場合は頭位を北にする事例が圧倒的に多いが、獣骨の場合は頭位を南にする事例が多いことを付記する。
- ③ 副葬品：検出されていない。
- ④ 獣骨の出土部位：遊離歯の歯冠片及び四肢骨片が出土している。
- ⑤ 種名：恐らく馬(ウマ)[*Equus caballus*]であると推定される。
- ⑥ 性別：馬[ウマ]の場合、性別は犬歯の有無あるいは寛骨の形態で推定が可能であるが、今回どちらも出土していないので性別は不明である。
- ⑦ 死亡年齢：出土歯は永久歯ではなく乳歯であるので、死亡年齢は、約 1歳～4歳であると推定される。

(3) 11号A墓坑出土獣骨

- ① 獣骨の出土状況：獣骨は、長軸約 165cm・短軸約 100cm・深さ約 21cm の楕円形土坑から出土している。

長軸方向は、ほぼ東西である。

②獣骨の埋葬方法：下顎骨及び上下歯が土坑の東側から出土しているので、頭位は東である。

③副葬品：検出されていない。

④獣骨の出土部位：獣骨は、頭蓋骨・下顎骨・上下歯・四肢骨片が出土している。しかしながら、現場で下顎骨及び上下歯は保存処理をされており、分離に時間がかかるため、今回は、遊離左上顎歯のみ報告する。

⑤種名：馬(ウマ)[*Equus caballus*]である。

⑥性別：馬[ウマ]の場合、性別は犬歯の有無あるいは寛骨の形態で推定が可能であるが、今回、どちらも出土していないので性別は不明である。

⑦死亡年齢：出土遊離歯の内、上顎右臼歯の歯冠高から、死亡年齢は、約12歳の壮齢馬であると推定される。



写真8. 1a区11号A墓坑出土馬歯

第16-3表 11号A墓坑出土馬歯(上顎右)計測値

歯種	MD(歯冠近遠心径)	BL(歯冠頬舌径)
P2(第2小白歯)	36 mm	22 mm
P3(第3小白歯)	25 mm	26 mm
P4(第4小白歯)	27 mm	25 mm
M1(第1大白歯)	22.5 mm	25 mm
M2(第2大白歯)	23 mm	23 mm
M3(第3大白歯)	27 mm	22 mm

2.2 a区出土獣骨

2a区では、15号溝・36号溝・43号溝の3つの遺構から、獣骨が出土している。

(1) 15号溝出土獣骨

15号溝は、中世館の北側にある用水路である。馬(ウマ)[*Equus caballus*]の歯が出土している。しかしながら、完形のものはないため、計測はできなかった。

馬の場合、性別推定は犬歯の有無あるいは寛骨の形態で推定が可能であるが、今回、どちらも出土していないため、性別は不明である。また、死亡年齢は、上顎M3(第3大白歯)の歯冠高から、約5歳から6歳の壮齢馬であると推定された。

(2) 36号溝出土獣骨

36号溝は、15号溝の南側に派生する不明瞭な溝である。馬(ウマ)[*Equus caballus*]の歯の破片が出土している。破片であるため、歯種の同定は不可能である。したがって、性別及び死亡年齢も不明である。

(3) 43号溝出土獣骨

43号溝は、中世館の区画堀である。馬(ウマ)[*Equus caballus*]の歯が出土している。破片であるため、歯種の同定は不可能である。したがって、性別及び死亡年齢も不明である。

出土獣骨まとめ

齊田竹之内遺跡の1a区及び2a区から出土した獣骨について、第16-4表にまとめを示した。

第16-4表 齊田竹之内遺跡出土獣骨のまとめ

区名	遺構名	個体数	性別	死亡年齢
1a区	8号A墓坑	1個体	不明	不明
	10号A墓坑	1個体	不明	約1歳~4歳
	11号A墓坑	1個体	不明	約12歳
2a区	15号溝	1個体	不明	約5歳~6歳
	36号溝	不明	不明	不明
	43号溝	不明	不明	不明

引用文献(出土人骨・出土獣骨)

- 藤田恒太郎 1949 歯の計測基準について、「人類学雑誌」, 61: 1-6
- 権田和良 1959 歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」, 67: 151-163
- MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, *National Science Museum Monographs No.9, National Science Museum, Tokyo.*
- von den DRIESCH, Angela 1976 "A Guide to the *Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites.*", Peabody Museum Bulletin 1, Peabody Museum, Harvard University

第IV章 調査成果と整理のまとめ

1 中世屋敷と掘立柱建物群

はじめに

本遺跡が所在する玉村町周辺では、これまで国道 354 号建設に先立つ発掘調査が行われている（3頁 周辺遺跡参照）。このうち、中世屋敷が発見されたものとして、西から齊田中耕地遺跡、本遺跡、福島飯玉遺跡、福島飯塚遺跡、福島大島遺跡がある。更に県道藤岡大胡線関連でも福島久保田遺跡があり、すべて報告書が刊行されている。こうした状況から、本遺跡周辺は中世屋敷が集中する地域と見なすことができ、個別の分析とは別に、総合的に比較検討する作業も期待されているところである。

これまでの報告では、福島大島遺跡において石井榮一による建築史学からの研究（註1）がある。この屋敷は、重複の少ない 10 棟の建物で構成されている。石井氏も出土遺物などを考慮しながら、15 世紀頃の柱間の特徴を持つとしている。建物配置については、主屋・附属屋・馬屋および隷属する人々の住まいを想定され、示唆に富む内容となった。ただし、1号掘立柱建物（建物と略す）では割栗石の存在から、独立基礎による石場建て構造を想定し、建築史的な視点から建築年代が古すぎる危険性を示唆して、当該建物研究が抱える今日的な問題を提起している。

筆者も齊田中耕地遺跡の調査担当者として、中世屋敷を考察した（註2）。この屋敷は一辺約 40 m規模の典型的な小規模屋敷であり、建物は重複が激しく 22 棟を認定したが、面積で 50㎡を超えるものはなかった。検討目的はまず建物を変遷づけることに置き、1期2・3棟の建物で構成される 12 期の変遷案を示した。また、存続年代は出土遺物から 14 世紀末～15 世紀初めと極めて短期間であったが、零細な様相ながら 12 期の変遷を可能とした居住者像が問題となった。一方、筆者が特に注目して検討課題としている桁行平均柱間（註3）では、主屋と附属屋において当初約 7.0～8.1 尺と約 6.2～6.4 尺に分かれ、変遷半ばから 7 尺を前後しながらも、同一時期では同数値となる様相が確認された。また、総柱建物および梁間 3 間の建物の場合、約 6.2 尺以下となっていることが判

明した。しかしながら、変遷案では 10 期とした 2 棟が建物形態として唐突な観があり、このテーマの不安定さを露呈している。また、桁行平均柱間の考察も、明解さに欠ける結論となったという反省も残している。

さて、本稿においても、筆者の検討方法は基本的に変わらず、主軸方位による分類と建物の新旧関係を付き合わせ、出土遺物による年代比定を加味した変遷案の提示を行う。加えて、屋敷の検討では建物規模や配置、遺物の状況などを検討要素とし、建物では構造や桁行平均柱間による建築基準の解明を検討課題とする。なお、本遺跡では調査段階で数例の建物が認定されていたが、整理担当者の了解のもと、今時筆者が再検討し、選別および新規の認定を行った。方法としては、1/40 の平面図を基本図にして、1 尺単位のマス目を示した方眼を使用し、柱間寸法と柱筋を基準に、各ピットの形態や規模・深さを加味して図上認定を行った。したがって、通例調査現場段階で行うことが望ましい認定に比して、検証性が低いことも考慮されるが、統一的な観点で認定を行った点では、より確実性が高まったものとした。

1 掘立柱建物の状況

(1) 検討項目別の全体状況

本遺跡は 4 つの調査区に分かれており、それぞれに中世屋敷に伴う遺構が調査されている。1 a 区では昭和期に埋められた旧鯉沢（大溝跡の旧水路）が北から東西方向に L 字形に発見され、中世屋敷も水路を挟んで南北に分かれるため、北館と南館と二分して扱うこととする。また、1 b 区は町道により調査区は分かれたが、元来は南館と同一の屋敷である。このため南館のうち 1 a 区を南館北側、1 b 区を南館南側と呼んだ。2 b 区は溝が主体であり、2 a 区南館の区画溝の延長が調査されている。

本遺跡の掘立柱建物の総数は 81 棟であり、その内ほぼ全体を調査し、およその形態が分かるのが 74 棟となる。これを項目別に集計したのが第 17 表で、その基礎資料が第 18 表掘立柱建物総括表である。調査区別では北館が 27 棟、南館北側が 13 棟で南館南側 16 棟と合わせると 29 棟、西館が 25 棟と、ほぼ同数に近い。こ

第 17 表 齊田竹之内遺跡 掘立柱建物集計表

分類 1 : W-22~27°-N / 2 : W-16°~21°-N / 3 : W-4~12°-N /
4 : W3°~N-E3° / 5 : N-6~9°-E / 6 : N-10~16°-E

棟別	1 a 北						1 a 南				1 b			2 a				合計	比率		
	1類	2類	3類	4類	5類	6類	計	3類	4類	5類	計	3類	4類	5類	計	3類	4類			6類	計
東西棟	6	3	3	4	1		17	2	4		6	1	8	2	11	5	4	5	14	48	59.3%
南北棟	2	2		3		1	8	1	2	1	4	1	3		4	1	6	1	8	24	29.6%
正方形	1					1	2		3		3		1		1		2	1	3	9	11.1%
計	9	5	3	7	1	2	27	3	9	1	13	2	12	2	16	6	12	7	25	81	
規模	1類	2類	3類	4類	5類	6類	計	3類	4類	5類	計	3類	4類	5類	計	3類	4類	6類	計	合計	比率
2×1間	1					1	2									1			1	3	4.1%
1×2間			1	1		1	3	2	1		3		1		1	1	2	1	4	11	14.9%
2×2間	1		1	1			3		2		2					1		1	6	8.1%	
1×3間	6	5	1	3			15		2		2	1	3	1	5	3		3	6	28	37.8%
2×3間				1			1			1	1		3		3	1	4		5	10	13.5%
3×3間									1		1								1	1	1.4%
1×4間	1						1						2		3			1	1	5	6.8%
2×4間														1				1	1	1	1.4%
1×5間																	1	1	2	2	2.7%
2×5間								1	1		1						2		2	3	4.1%
3×5間																1		1	1	1	1.4%
2×6間					1		1					1			1				2	2	2.7%
計	9	5	3	6	1	2	26(27)	3	7(9)	1	11(13)	2	9(12)	2	13(16)	6	12	6(7)	24(25)	74(81)	
面積㎡	1類	2類	3類	4類	5類	6類	計	3類	4類	5類	計	3類	4類	5類	計	3類	4類	6類	計	合計	比率
~10																1			1	1	1.4%
~20	3		1	5		2	11	1	2	1	4		4		4	3	2	3	8	27	36.5%
~30	2	3	2	1			8	1	1		2	1	5	1	7	2	6	1	9	26	35.1%
~40	3	2					5		2		2			1	1		2	2	4	12	16.2%
~50	1						1		1		1						2		2	4	5.4%
~60					1		1		1		1	1			1					3	4.1%
~70																				0	0.0%
~80																				0	0.0%
80~								1			1									1	1.4%
計	9	5	3	6(7)	1	2	26(27)	3	7(9)	1	11(13)	2	9(12)	2	13(16)	6	12	6(7)	24(25)	74(81)	

のため、建物を比較検討することで各屋敷の傾向を比較することも可能と考える。ただし、個別にみると、北館は建物の中核部分が北寄りに分布し、なお半数以上が北側調査区外に広がるものと言える。南館北側は屋敷の中核部分の北側にあたり、南館南側がその中核部分となるが、若干南側調査区外に主要建物が広がると思われる。西館は中核部分から北側が広く調査されたが、やはり若干主要建物が検出できておらず、南側調査区外の町道下に伸びていたと思われる。

建物は主軸方位の違いを基に6つの分類に分け、これを時期区分の拠り所とした。1類は主軸方位が真北に対して22~27度西へ傾くもの(東西棟は直交方位)で、以下2類は16~21度西へ、3類は4~12度西へ、4類は3度西~3度東まで、5類は6~9度東へ、6類は10~16度東へ傾くものである。館別では、1・2類は北館のみに分布している。しかも、あわせて14棟あり調査区内では半数を占めている。4類はすべての調査区で多く、南館で29棟中21棟、西館も25棟中13棟と半数を占める。第6類は西館で7棟とやや多く、特徴となっている。

棟方向は全体として、東西棟が6割を占め、残る3割

が南北棟、1割が宝形造となる正方形である。ただし、1 a 区南は若干正方形の比率が高いが、屋敷の北寄りであり1 b 区とあわせると相殺される。

規模をみると、1×3間が全体の4割近い28棟で、2×3間10棟をあわせると5割を占める。また、1×2間・2×2間あわせて17棟で2割を占め、その半数は正方形である。桁行の長い建物は、各調査区1棟以上あり、桁行6間が北館・南館南側で1棟ずつ、桁行5間が南館北側で2棟、西館で6棟を数える。

面積では、1 a 区南館の28号建物が80㎡を超えて調査区外に続くのを特例とするが、屋敷単位で見ても50㎡を超える建物が2棟ずつあることも注目される。

建物形態は大部分が側柱構造で、総柱のものは5棟で典型例はない。南館48号建物や西館114号建物は主屋級の規模を持つが、調査区外の部分もあり、不確定要素を残す。北館では主屋級建物3棟が南下屋を持っており、特徴的である。

桁行平均柱間では概ね統一的な傾向がある。北館では約6.8~7.1尺が17棟中11棟あり、次いで約5.9~6.1尺が3棟ある。南館では北側で約7.3尺が7棟中3棟、約5.9~6.3尺も3棟である。南側では約6.9~7.2尺

Ⅳ 調査成果と整理のまとめ

第18表 齊田竹之内遺跡 建物総括表 分類1:W-22~27-N/2:W-16~21-N/3:W-4~12-N/4:W3~N~E3/5:N-6~9-E/6:N-10~16-E

区	分類	NO	主軸方位	面積㎡	桁行1	桁行2	桁行平均	桁行平均間	寸尺	梁間1	梁間2	梁間平均	梁間平均柱間	寸尺	規格・備考	
1 a	北	12	N-63~67-E	22.47	6.42	6.25	6.335	2.1117	6.97	3.8	3.5	3.65	1.825	6.02	1×3間・東西棟	
1 a	北	13	N-24~25-W	30.14	6.3	6.15	6.225	2.075	6.85	4.9	4.8	4.85			1×3間・南北棟	
1 a	北	14	hyou	18.90	5.40	5.25	5.325	1.775	5.86	3.70	3.6	3.65			1×3間・南北棟	
1 a	北	15	N-66-E	16.39	4.15	4.1	4.125			3.95	3.9	3.925	1.9625	6.48	2×1間・東西棟	
1 a	北	17	N-65~67-E	17.46	4.4	4.05	4.225	2.1125	6.97	4.25		4	4.125	2.0625	6.81	2×2間・正方形
1 a	北	19	N-63-E	29.31	6.93			2.31	7.62	4.23						1×3間・東西棟
1 a	北	20	N-66~68-E	36.33	5.96	5.88	5.92	1.9733	6.51	3.24	3.15	3.195				1×3間・東西棟・西庇・南下屋/22 Hより新
1 a	北	22	N-67-E	(47.31)	8.3			2.075	6.85	4.4						1×4間・東西棟・南下屋/20 Hより古
1 a	北	23	N-66~67-E	33.17	6.7	6.6	6.65	2.3217	7.32	4.95	4.8	4.875				1×3間・東西棟/3間相当
1 a	北	8	N-74-E	(30.52)	6.15			2.05	6.77	3.85						1×3間・東西棟・北下屋
1 a	北	9	N-72~75-E	22.99	5.85	5.82	5.835	1.945	6.42	4.15	3.95	4.05				1×3間・東西棟/3間相当
1 a	北	16	N-17~19-W	23.99	6.25	6.15	6.2	2.0667	6.82	3.9	3.8	3.85				1×3間・南北棟
1 a	北	18	N-70-E	(25.83)	6.3			2.1	6.93	4.1						1×3間・東西棟
1 a	北	21	N-18-W	32.89	6.2			2.0667	6.82	3.85						1×3間・南北棟・西庇
1 a	北	1	N-80~83-E	16.48	4.43	4.25	4.34	2.1700	7.16	3.72	3.5	3.61	1.805	5.96		2×2間・東西棟
1 a	北	26	N-78-E	25.81	5.9	5.8	5.85	2.925	9.65	4.45	4.4	4.425	2.2125	7.30		1×2間・東西棟
1 a	北	5	N-88-W	14.07	5.5	5.25	5.375	1.7917	5.91	2.8	2.68	2.74				1×3間・東西棟
1 a	北	6	N-3-E	14.88	4.5	4.35	4.425	2.2125	7.30	4	3.42	3.71				1×2間・南北棟
1 a	北	7	N-84~87-E	23.18	6.3	6.23	6.265	2.0883	6.89	4.1	3.72	3.91				1×3間・東西棟
1 a	北	10	N-3-W	24.83	6.45			2.15	7.10	3.85						1×3間・南北棟
1 a	北	11	N-83~87-E	10.48	6.45	6.4	6.425	2.1417	7.07	4.4	4.08	4.24				1×3間・東西棟/3間相当
1 a	北	24	N-90	18.56~	7.41			1.8525	6.11	-						1~×4間・東西棟・南下屋
1 a	北	25	N-89~90-E	16.61	4.1	4.05	4.075	2.0375	6.72	4.2	4.05	4.125				1×2間・東西棟
1 a	北	27	N-1-W	16.97	4.65	4.6	4.625	1.5467	5.09	3.65	3.65	3.65	1.8250	6.02		2×3間・南北棟
1 a	北	3	N-83-W	(55.18)	12.6			2.1	6.93	4.38		2.19	7.23			2×6間・東西棟
1 a	北	2	N-16-E	13.76	3.65	3.51	3.56	1.78	5.87	3.92	3.5	3.71	1.855	6.12		2×2間・正方形
1 a	北	4	N-10-E	10.13	4.53	4.5	4.515	2.2575	7.45	2.25	2.33	2.415				2×1間・南北棟
1 a	南	28	N-85~87-E	(84.70)	10.9			2.18	7.19	4.3						2×5間・東西棟・北2間張出/29 Hより新
1 a	南	36	N-83~86-E	21.12	4.8	4.4	4.6	2.3	7.59	4.3	4.15	4.225				1×2間・東西棟
1 a	南	37	N-7~9-W	19.93	3.7	3.6	3.65	1.825	6.02	3.8	3.6	3.7				1×2間・南北棟・東西北下屋
1 a	南	29	N-3-W	(50.56)	6.55			2.1833	7.21	4.53						1×3間・南北棟・東2間張出/28 Hより古
1 a	南	30	N-87~88-E	18.55	5.3	5.15	5.225	2.6125	8.62	3.6	3.5	3.55				1×2間・東西棟
1 a	南	31	N-88-E	31.90	5.80	5.70	5.75	1.9167	6.33	5.50	5.5	5.5	1.8333	6.05		3×3間・正方形/3間相当
1 a	南	32	N-1-W	43.09	7.43			2.4767	8.17	3.53						1×3間・南北棟・東西下屋
1 a	南	33	N-88-E	21.24~	7.53			1.8825	6.21	-						1~×4間・東西棟・北庇/4間相当
1 a	南	34	N-88-E	18.92~			4.325	2.1625	7.14	4.4						2×2~間・東西棟
1 a	南	35	N-0	18.92	4.4			2.2	7.26	4.3						2×2間・正方形
1 a	南	38	N-89~90-E	32.56	9.12	8.64	8.88	1.776	5.86	3.6	3.5	3.55				2×5間・東西棟・総柱系
1 a	南	40	N-1-W	20.34	4.52			2.26	7.46	4.5		2.25	7.43			2×2間・正方形
1 a	南	39	N-7~9-E	29.48	6.65	6.42	6.535	2.1783	7.19	4.7	4.5	4.6	2.3	7.59		2×3間・南北棟/3間相当
1 b		42	N-5-W	20.46	5.53	5.35	5.44	1.8133	5.98	3.7	3.7	3.7				1×3間・南北棟/2 Hより古
1 b		45	N-86-E	(53.75)	12.5			2.0833	6.88	4.3						2×6間・東西棟
1 b		41	N-88-W	19.29	6.43	6.2	6.315	2.105	6.95	3	2.7	2.85				1×3間・東西棟/3 Hより新
1 b		43	N-89~90-E	15.70	7.85	7.60	7.725	1.9313	6.37	2.00	1.75	1.875				1×4間・東西棟
1 b		44	N-88~89-W	20.69	4.45	4.3	4.375	2.1875	7.22	4.65	4.6	4.625				1×2間・正方形
1 b		46	N-2-E	11.73~			3.55	1.775	5.86	3.35						1×2~間・南北棟
1 b		47	N-85~89-W	29.53	6.6	6.35	6.475	2.1583	7.12	4.65	4.3	4.475				1×3間・東西棟
1 b		48	N-0	(26.45)	6.53			2.1767	7.18	4.05		2.025	6.68			2×3間・南北棟/総柱
1 b		49	N-88~90-E	28.54	6.5	6.3	6.4	2.1333	7.04	4.65	4.53	4.59	2.295	7.57		2×3間・東西棟
1 b		50	N-89-W	(26.78)	6.3			2.1	6.93	4.25		2.125	7.01			2×3間・東西棟
1 b		53	N-88~90-W	13.87	7.5	7.3	7.4	1.85	6.11	1.9	1.75	1.825				1×4間・東西棟
1 b		54	N-90	16.39~	7.2			1.8	5.94	-						1~×4間・東西棟/17 Hより古
1 b		55	N-87~89-E	11.48	5.65	5.6	5.625	1.875	6.19	2.05	1.75	1.9				1×3間・東西棟/12 Hより古
1 b		56	N-2-E	9.99~	-					5.55		1.85	6.11			3×1~間・南北棟/15 Hより新
1 b		51	N-83~84-W	38.28	8.75	8.7	8.725	2.1813	7.20	4.4	4.15	4.275	2.1375	7.05		2×4間・東西棟/16 Hより新
1 b		52	N-83~84-W	26.24	6.4	6.35	6.375	2.125	7.01	4.1	4	4.05				1×3間・東西棟
2 a		105	N-86-E	25.62	6.1	5.8	5.95	1.9833	6.55	4.5	4.2	4.35				1×3間・東西棟
2 a		117	N-78~80-E	9.66	4.2	4.2	4.2	2.1	6.93	2.3	2.2	2.25				2×1間・南北棟
2 a		118	N-85~86-E	18.15	5.5	5.5	5.5	1.8333	6.05	3.3	3.1	3.2				1×3間・東西棟/3間相当
2 a		119	N-83~85-E	13.79	5.6	5.45	5.525	1.8234	6.02	2.53	2.4	2.465				1×3間・東西棟/3間相当
2 a		124		22.54	6.55	6.31	6.43	2.1433	7.07	3.56	3.45	3.505	1.7525	5.78		2×3間・東西棟/総柱系
2 a		125	N-83-E	14.02	4.33	3.98	4.155	2.0775	6.86	3.45	3.30	3.375				1×2間・東西棟
2 a		103	N-87-W	47.15	10.5	10.5	10.5	2.1	6.93	6			2	6.6		3×5間・東西棟
2 a		104	N-88~89-W	33.18	8.4	8.2	8.3	2.075	6.85	3.9	3.75	3.825				2×4間・東西棟
2 a		106	N-0~2-W	(21.73)	6.4			2.1333	7.04	4.1		2.05	6.77			2×3間・南北棟
2 a		108	N-1~3-E	(28.80)	6.44			2.1467	7.08	4.5		2.25	7.43			2×3間・南北棟
2 a		109	N-86-W	25.03	9.08	8.6	8.84	1.768	5.83	3.5	3.5	3.5				2×5間・東西棟
2 a		111	N-86-W	(41.04)	10.8			2.16	7.13	3.8						1×5間・東西棟
2 a		113	N-86~88-W	12.06	3.6	3.6	3.6			3.9	3.8	3.85	1.925	6.35		1×2間・正方形
2 a		114	N-87-W	(34.68)	9.5			1.9	6.27	3.65		1.825	6.02			2×5間・東西棟/総柱
2 a		115	N-3-W	20.16	5.6	5.6	5.6	1.8666	6.16	3.6	3.5	3.55	1.775	5.86		2×3間・南北棟
2 a		116	N-2-E	11.65	3.3	3.3	3.3			3.53	3.4	3.465	1.7325	5.72		1×2間・正方形
2 a		122	W1°~N~E1°	23.24	5.99	5.85	5.92	1.9733	6.51	3.94	3.91	3.925	1.9625	6.48		2×3間・南北棟
2 a		123	W1°~N~E3°	28.56	6.19	5.95	6.07	2.0233	6.68	5.02	4.39	4.705	2.3525	7.76		2×2間・南北棟/3間相当
2 a		101	N-74~76-W	14.75	5.3	5	5.15	1.7167	5.67	2.95	2.75	2.85				1×3間・東西棟
2 a		102	N-10-E	8.10~				2.45	8.09	4.05			2.025	6.68		2×1~間・南北棟/総柱
2 a		107	N-78~79-W	24.75	9.1	9	9.05	1.81	5.97	2.8	2.75	2.775				1×5間・東西棟
2 a		110	N-78~81-W	36.12	8.9	8.6	8.75	2.1875	7.22	4.2	4.2					1×4間・東西棟
2 a		112	N-77~80-W	12.96	5.4	5.3	5.35	1.7833	5.89	2.4	2.1	2.25				1×3間・東西棟
2 a		120	N-81~87-W	13.30	3.50	3.30	3.40	1.70	5.61	3.80	3.4	3.6				1×2間・正方形
2 a		121	N-77~80-W	38.12	7.62	7.60	7.61	2.5367	8.37	4.60	4.17	4.385				1×3間・東西棟・北張出

が14棟中8棟、約5.9～6.2尺が5棟である。西館では約6.9～7.2尺が20棟中7棟、約5.8～6.3尺が7棟である。まとめると、約6.8～7.2尺が58棟中29棟(50%)、約5.8～6.3尺が18棟(31%)となる。なお、数値検討において桁行2間以下は除外してある。

(2) 調査区別の状況

①北館(1a区北)

1類・2類の建物は、ともに2カ所にまとまって営まれており、継続する建物群であろう。1類では20号建物と22号建物が重複し、柱穴同士の新旧関係から20号建物が後出と判明している。ともに南面に下屋を持つ主屋級建物である。22号建物の南辺は、身屋・下屋ともに東1間分を二分する間柱を設置する。規模は20号建物が小さい。19・23号建物も主屋に近い規模を持つ。南側の5棟は規模が小さく、30.14㎡とやや大きい13号建物を除き、概ね北側の4棟に対する附属屋(註5)に位置づけられよう。2類の建物4棟も、位置的に1類と通じる印象を持つが、南側8号建物が北に下屋を持ち、面積は30㎡を超える。これら4棟は、規模・構造ともに等質で、従属関係はとらえられない。

3類の2棟は屋敷地の両端に分かれるが、棟持柱を柱筋より外側に設ける2×2間の東西棟で近似する。26号建物内部には25号土坑が収まっていて関連が想定できる。

4類の建物は東西2カ所にまとまりがあり、東側の重複が激しく5棟が重なる。規模から概ね附属屋に相当する。西側ではほとんどが調査区域外となった24号建物が、唯一主屋級建物と見なすことができる。全体的な分布傾向から、中央部北側調査区域外に主要建物が想定できる。

5・6類は、ともに屋敷地の東南部分に位置する。5類3号建物は55㎡を超える建物で、調査区内最大である。半分が調査区域外となるため、下屋・庇の有無など不測要素も多い。一方、6類2棟はともに小規模な建物で、5類と比較できないものの、位置的な一致を手がかりに、前後に変遷する一群ととらえられよう。

②南館(1a区南・1b区)

南館北側(1a区南)は、中央部を南北に走向する17・18・19号溝によって、屋敷内の区画が東西に二分されており、南側(1b区)はその東区画に一致する。北側3類の3棟では、36・37号建物が重複する。構造

では37号建物が3面に下屋を設けるが、面積は36号建物より若干狭い。37号建物内部には3号土坑が収まっており関連が想定できる。28号建物は未調査部分もあるが、概ねL字形をした曲屋風の建物で、主軸方位は4類とも差がない(後述)。南側3類では45号建物が主屋級の建物で、規模は違うが最低2時期の変遷が想定される。

北側4類は9棟と多いが、調査区全体に分布しており、重複は最低限とも言える。中央部の17～19号溝で屋敷を二分して考えれば、33・34・35号建物はこれらの溝と重複して並存しないものである。当然ながら南側の建物群とも別扱いとなる。33号建物は未調査部分が多いが、主屋級の建物である。

19溝以西の西区画は建物規模も大きく、密集する区画と言える。3類の28号建物はむしろこの一群に含まれる。柱穴同士の新旧関係では、29号建物が28号建物に前出することが判明している。29号建物は規模は小さいが、28号建物同様に凹凸のある平面形となっている。柱筋を考慮すると、28号建物と31号建物、29号建物と30号建物が一致して近接しており、並存していた可能性が高い。特に28号建物と31号建物が連結していた場合、100㎡を超えることとなる。28号建物の身屋の北1間は廊下となり、張出部分と31号建物をあわせた三室を結ぶ状況となる。32号建物も南北棟ながら、主屋級の規模を持っている。

17号溝以东の東区画は建物が散漫で、竪穴状遺構や土坑も多い。40号建物は中央部の34・35号建物に平面形・規模とも近似し、同じ建物群に含まれよう。38号建物は総柱系統の建物だが、東西辺は梁間1間で寄棟屋根に還元される。

南側4類は全16棟中12棟を占める。このうち、47・49・50号建物は平面形・規模とも近似しており、主屋規模に近い一群である。また、43・53・55号建物は梁間1間の細長い建物で、同種の用途を思わせる。桁行平均柱間でも、この3棟が約6.1～6.4尺と特徴的である。1b区4類は全体として建物棟数は多いが、比較的小規模なものが多く、中核的な部分が南側調査区域外に広がっているか、北側の西区画と対比される従属的な空間であったのかとも思える。

5類の建物は南館北側では39号建物1棟であり、南側も51・52号建物2棟と少ない。51号建物は柱穴同

士の新旧関係から4類55号建物より後出と判明している。また、4類も3類より後出と判明しているため、5類の建物群が南館ではもっとも最終段階に比定されることとなる。桁行平均柱間は3棟ともほぼ等しく、約7.0～7.2尺である。

③西館（2a・2b区）

3類の建物は6棟で、118・119号建物は重複し、平面形・規模ともに近似する。124・125号建物は重複して、他の建物群と離れている。4類の106・115号建物は主軸方位が西に振れており、4類内でも分別される2棟である。むしろ、3類と同一な建物群と見なされる。特に106号建物と3類118号建物は柱筋が一致しており、並存が想定される。また、115号建物も119号建物の柱筋がほぼ一致しており、この2棟ずつの組み合わせに加え、重複関係から最少で2時期4棟ずつの変遷が想定されることとなる。

4類の建物は全25棟中13棟を占める。このうち、104・109号建物は平面形・規模・位置ともに近似する。また、113・116号建物も平面形・規模・位置ともに近似し、同種の建物と考えられる。104・116号建物は位置的に並存関係が想定できるが、109・113号建物は重複している。したがって、前者104号建物などの関係も不安定である。なお、底面に炭層が広がる66号遺構（竪穴状遺構）も4類に含まれる。更に北側に外れて、122号建物があるが、土坑はこの周辺にはない。主屋級の建物では103号建物があり、重複関係から並存する建物は想定しにくい。主屋級の建物では、ほかに111・114号建物があり、ともに桁行5間で平面形・位置ともに重なる。しかし、114号建物は総柱であり、同種の建物とみるには難がある。また、114号建物に近接する108号建物は、規模の大きな南北棟で、位置的に並存を思わせる。

6類は南側中央部の重複がやや多く、平面形・規模ともに違いがあるが、最低3時期の変遷が想定できる。主屋級建物は110・121号建物で、後者は北辺に張出があり、北側の溝とつながり、排水施設となっている観がある。107号建物は桁行5間規模を持つが、細長く面積も広くないので、主屋としては難がある。正方形のものでは北側に離れて120号建物があり、やや歪んだ建物である。周辺に方形の土坑が多いことも注目される。桁行平均柱間は約7.2尺の110号建物と、約5.7～6.0

尺の101・107・112号建物3棟に分かれる。これはほぼ規模・面積に呼応するとみられる。121号建物は規模も大きく、この時期を代表する建物ではあるが、桁行平均柱間は極めて広く、本遺跡全体でもわずかな例である。こうした場合、個別の突破的な事情に左右されたものと判断される。

2 建物以外の状況

(1) 区画溝と屋敷遺構の関係

1a区には、旧鯉沢が昭和期に埋められるまで用水路として流れており、おそらく中世段階まで遡り、中世屋敷と共存していた時期が想定される。走向方位は西端で真北に延び、屈曲部は丸みを持ってやや鋭角に曲がるため、東西走向はN-86°-Eと、北に4度振れている。

各屋敷ごとの区画溝をみると、北館では並行する2条の区画溝21・22(24)号溝があり、後者が外側で前者よりも幅が狭い。南西角付近で連結しており、並存して二重の区画であったことも想定される。ただし、22号溝は東西軸で24号溝と名称を変え、東端で37号溝と重複して不明確となる。走向方位では22号溝が西端は真北に延び、南西角はやや鈍角に曲がり、24号溝となつてからはN-85°-Wと南方へ5度振れるが、中程で北に折れてN-82°-Eとなる。内側の21号溝は西端南北軸がN-2°-Eと東に振れるが、南西角はほぼ直角に曲がり、東西軸はN-86°-Wとなる。しかし、24号溝と同じく中程で北に屈曲しN-82°-Eとなり、再度南へくの字に折れてN-76°-Wとする。また、南東角で北にやや鋭角に曲がり、N-5°-Wの軸をとり、全体に北に開くコの字形を呈する。51号溝は21号溝東辺とほぼ並行してN-6°-Wであり、2重の区画溝とみられる。また、中央部の32号溝も区画溝であり、N-21°-Wと西に振れている。これら区画溝の走向方位を、建物の主軸方位分類と対応させると、21・22・24号溝はほぼ3・4類で、21号溝の南辺東端部のみ6類となる。また、51号溝は3類で、32号溝は1・2類の中間位置に属する。なお、屋敷規模は21・22号溝の外側輪郭間で、東西長約49.5mである。

南館北側は、北辺を旧鯉沢に区画されるが、流水による浸食が激しく、区画溝は北西端部で壊されているため、北辺と西辺を結びつけることが難しい。北辺は34・35号溝と2条あり、中程で合流するが、34号溝は南に曲

がって19号溝と同一と考えた方が自然であろう。走向方位では34号溝が $N-87^{\circ}-W$ で、35号溝は東半部が $N-88^{\circ}-W$ で、34号溝と合流して南に折れ、西半部は $N-85^{\circ}-E$ となる。この屈曲は北館の区画溝とも一致しており、旧鯉沢あるいは前身遺構との対応関係が推測される。西辺は9・15号溝で、走向方位は $N-2^{\circ}-W$ 、 $N-0^{\circ}$ であり、後者の方が規模が大きい。15号溝を35号溝と同一溝の延長と考えると、屈曲はやや鈍角で95度となる。なお、9号溝には一部土橋状に底面が高まった部分がある。

南館北側では中央部分に3条の比較的浅い溝があり、屋敷を細分する溝と思われ、1b区に符号する溝もある。1a区19号溝は同34号溝と同一と思われ、走向方位は $N-2^{\circ}-W$ で、同34号溝と交差すれば、ほぼ直角となる。また、1b区2号溝が延長上にあり、走向方位も $N-2^{\circ}-W$ と一致する。一方、状況から1a区南34号溝とつながる溝として、ほかに同17号溝も推定され、走向方位は $N-2^{\circ}-E$ でやや鋭角に交わることとなる。また、東方から延びる15号溝とも合流する。1b区では3号溝が対応し、走向方位も $N-1^{\circ}-E$ とほぼ一致する。

3条のうち、真ん中の1a区南18号溝は走向方位 $N-0^{\circ}$ である。1b区では4号溝がその延長と見なされ、南端で西に屈曲し2号溝と重複し、後出と判明している。走向方位は南北軸で $N-0^{\circ}$ と1a区南18号溝と同じで、東西軸はやや鋭角ぎみに屈曲して、 $N-87^{\circ}-W$ となっている。したがって、1a区南18号溝も西に屈曲して、35号溝とつながっていたとするのが自然であろう。南辺の溝としては、1b区1号溝があり、外郭としては浅すぎるため、細分する溝と見られ、走向方位は $N-87^{\circ}-W$ と同4号溝と一致する。東辺は1b区で見つかっていないが、東に隣接する福島飯玉遺跡4区西端で同1号屋敷とは別の区画溝15号溝(註6)が調査されていることから、南館南側の東辺とみることができよう。南館内の南北両側の区画溝走向方位を、建物の主軸方位分類と対応させると、すべて4類にあてることができる。なお、屋敷規模は1a区南15号溝と福島飯玉遺跡4区15号溝の外側輪郭間で、東西長約60mを測る。また、仮に1a区南18号溝で東西に二分して考えれば、西側が約34m、東側が26m規模となる。

2a区の区画溝は、北辺は40号溝となるが、東辺は

3条に分かれ、西辺も2条となる。40号溝は2b区で27号溝と付番されているが、同一の溝である。走向方位は北辺で $N-84^{\circ}-E$ で、西辺2b区27号溝は $N-6^{\circ}-W$ と直角をなすが、屈曲部は弧を描いている。また、西辺で重複する2b区19号溝は、同27号溝よりも西に振れ、 $N-10^{\circ}-W$ とやや鋭角に交わる。東辺では40号溝が $N-5^{\circ}-E$ と、北辺に対してほぼ直角に曲がるが、東端部は $N-89^{\circ}-W$ と北へ5度振れており、北辺と分岐部で食い違うことから、同一の溝の当初の形態とは見なしがたい。むしろ、41・43号溝の方が40号溝北辺からスムーズに曲がっている。41号溝の走向方位は、 $N-5^{\circ}-E$ で40号溝とほぼ直角となるが、屈曲部は弧を描いている。内側の43号溝の走向方位は、 $N-2^{\circ}-E$ で、40号溝へやや鈍角に94度で曲がっている。また、ひとまわり小さい区画溝として42号溝があり、43号溝より前出することが判明している。したがって、走向方位なども考慮すれば、40号溝ほかの区画溝以前に、小規模な区画溝の42号溝があったものと整理される。走向方位は東辺で $N-1^{\circ}-E$ 、北辺で $N-84^{\circ}-W$ 、西辺はほぼ直角に曲がって $N-5^{\circ}-E$ となるが、中程で西にくの字に折れ、 $N-14^{\circ}-E$ となる。また、北辺は97溝と重複し、中程で南に折れ、 $N-5^{\circ}-E$ とほぼ直角に曲がるが、中程で東に大きくくの字に折れ、 $N-17^{\circ}-W$ をなしている。区画溝の走向方位を、建物の主軸方位分類と対応させると、40・41号溝は5類にあたり、43号溝は4類にあたる。古い区画溝42号溝も概ね4類に属するが、西辺南半部は6類となる。また、97号溝は南半部で東に曲がり、2類に属している。なお、屋敷規模は40号溝などでコの字型に区画する範囲が、東西長約48m、南北長36m以上となっている。古い区画と推定される42号溝の区画規模は、東西長25m、南北長22.5m以上である。

(2) 出土遺物から見た変遷傾向

第19表に遺跡全体の出土遺物年代を示した。数量には未掲載遺物も含んでいる(註7)。1a区北の出土量が多いのは、21号溝の出土量が多いことによる。逆に言えば、1a区南と1b区では溝からの遺物出土が少なかったことを反映した結果である。中世遺構の上限時期を示す遺物は、伝世する搬入品を除けば、14世紀

中葉から在り土器鉢が全調査区で見られる。また、内耳土器では2a区で古段階のものがあるが、1a・1b区では一段階新しいものとなる。下限も一様に16世紀までに及ぶが、2a区は16世紀代の遺物が少なく、14世紀後半から15世紀前半にピークを認めることができる。一方、1a区北南は、2a区より上限が下がり、ともに15世紀後半から16世紀代がピークと見られ、加えて搬入遺物も少なくなっている。

建物の柱穴からの遺物出土は少ない。1a区北1類の14号建物p3出土の内耳土器（未掲載）は、秋本編年（註8）のCかD群1類にあたり、15世紀後半から16世紀代に比定される。同2類8号建物p2出土の陶器（未掲載）は産地不明ながら、近世と考えられる。ただし、32号溝と重複することから、やや問題を残している。同5類3号建物p4出土の在り土器鉢（未掲載）は、高崎市史編年（註9）のⅢ類にあたり、14世紀後半に比定される。1a区南4類29号建物p4出土の内耳土器（未掲載）は、秋本編年のC1～C2群にあたり、15世紀後半から16世紀初めに比定される。建物の柱穴からの出土遺物は基本的に破片の混入であり、そのまま時期判定とはならないという問題もある。

3 考察

(1) 屋敷変遷と年代観

建物の柱穴同士の新旧関係では、1b区で3類42号建物→4類41号建物、4類55号建物→5類51号建物が判明している。また、4類の建物群は調査区全体で39棟を占め、屋敷群のピーク時と考えられる。この様相は2a区でも変わらないことから、そのピークである14世紀後半から15世紀前半が4類の時期に比定されるが、南館北側（1a区南）4類29号建物の出土遺物から、下限は16世紀初め頃までと思われる。ところで、遺物量や建物数を加味すると、1a区北の1・2類は16世紀代に比定され、1類14号建物の出土遺物（15世紀後半から16世紀代に比定）の年代観とも符合する。したがって、出土遺物から5類3号建物を14世紀後半に比定するのは古すぎてしまい、その出土遺物は混入と考えられよう。5類建物については、1a区北・南、1b区で建物数も共通し、状況も近似するため、変遷順位も一致すると考える。したがって、1a区・1b区の建物群の変遷は、3類→4

類→5・6類→1・2類の順位が与えられる。不安定さは残るが、想定されるおよその年代は、3類が14世紀後半から15世紀前半、4類が15世紀前半から16世紀初め、5・6類が16世紀前半、1・2類が16世紀半ばから後半となる。

区画溝では、北館の32号溝の走向が1・2類の建物と一致しており、共存していたことが想定される。ただし、この溝と重複する建物もあることから、附属屋と見える建物が別時期となるものもあろう。更に32号溝の位置は、旧鯉沢が南へ少し折れる部分であるため、走向方位が一概に旧鯉沢と違うとは見なせなくなる。したがって、1・2類の建物群を屋敷の最終段階としても、問題はないと考える。また、21号溝などでコの字形に区画する溝の方位は、建物の4類と最も一致するが、東端では部分的に6類と一致し、総じて建物群すべてが区画方位にほぼ一致すると言える。南館の区画溝の場合、3・4類はほぼ方位が一致するが、5類は一致しておらず、別の区画要素に属していることも考えられる。

西館の建物については、直接新旧関係が判明する例がないが、区画溝の新旧関係により、42号溝が最古と見なされることから、方位が一致する6類建物群との共存が想定される。建物配置を見ても、120・121号建物が42号溝を意識していることは明らかである。したがって、建物変遷は6類→3・4類となり、南館・北館とは異なる状況となる。想定されるおよその年代は、6類が14世紀半ば、3・4類が14世紀後半から16世紀初め頃となるだろう。

(2) 屋敷内の変遷と建物

北館の建物では、1類で特徴的な主屋建物がある。南に下屋を持つ20・22号建物で、建て替えも想定される。建物変遷では、2類とあわせて最新段階に位置づけられる。

南館の屋敷地は、全体として一辺60m規模の段階と、東西に分かれ一辺34m・26m規模となった段階が存在する。建物の変遷を考慮すると、後者が新しい段階と思われる。3類の1b区45号建物は2×6間の東西棟・面積推定53.75㎡であり、一辺60m規模の屋敷に相応しい主屋建物と言える。東西に分割されるのは、おそらく4類段階であろう。西区画の1a区南28号建

第 19 表 齊田竹之内遺跡 遺物年代表

			11C	12C	13C			14C			15C			16C				中世	計			
					前	中	後	前	中	後	初	前	中	後	初	前	中	後				
1a北	在 地 土 器	カワラケ																	5	5	279	
1a北		鉢						1	1					2	3			4	12			
1a北		内 耳 土 器 (近 世 含)										1							221	261		
1a北														3								
1a北			火鉢?																			1
1a北	古 瀬 戸	碗 皿 ほ か							1		1									2	5	
1a北												1										1
1a北										2												
計																					284	
1a南	在 地 土 器	カワラケ																	1	1	22	
1a南		鉢						1	1						1			1	5			
1a南		内 耳 土 器													1				15			
1a南															2			8				
1a南															3							
1a南	常滑	鉢																	1	1		
計																					22	
1b	在 地 土 器	カワラケ																	15	15	32	
1b		鉢													1				1			
1b		内耳土器										3			3		1		8	15		
1b		火鉢																	1	1		
1b		古瀬戸	皿ほか			1														2		2
1b	中国白磁	瓶																	1	1		
計																					35	
2a	在 地 土 器	カワラケ																	2	2	92	
2a		鉢						2	10		2								25	42		
2a						1							1									
2a															1							
2a			内耳土器						2	2					1				40	47		
2a								1						1								
2a		香炉																	1	1		
2a		大皿											1							1		
2a	古 瀬 戸	瓶子か					1		1											2		
2a		花瓶					1													1		
2a		天目茶碗							1											1		
2a	瀬戸美濃	端反皿													1				1			
2a		すり鉢													1				1			
2a	渥美?	甕																	2	2		
2a	常 滑	鉢																	1	1		
2a		甕					1												6	7		
2a	焼締																		3	3		
2a	中 国 青 磁	碗					3				1								1	5		
2a							1													1		
2a			皿							1											1	
2a	中国白磁	碗	1																	1		
2a	中国青白磁	梅瓶					1													1		
計																					121	

物（数値上3類）・31号建物の一群や29・30号建物の一群は、15世紀前半から16世紀初めにおける玉村地域の代表的な主屋建物に位置づけられよう。一方、東区画の状況は1b区に現れており、47・49・50・56号建物といった主屋建物が繰り返し建てられる段階と、43・53・54・55号建物といった細長い東西棟が建てられる段階、および46・48号建物といったやや大きな南北棟が建てられる段階に分かれる状況にある。後2者の場合、雑舎的な様相として西区画に付属する状況も想定される。

2a区の103号建物は、南西部が調査できておらず不

安定な要素も残るが、3×5間の東西棟で、この調査区を代表する建物である。南辺から梁間1間部分に横架材を受ける柱が通るが、東から2間目は柱が省略されている。特殊な建物としては、6類121号建物がある。この建物は区画溝である42号溝に北辺が接するが、この溝を乗り越えて北側に張り出しを設けている。しかも、そこからL字形に東へ向かう溝状の落ち込みが延びていることから、排水設備と見なすことができ、この建物は水場に関係する可能性がある。しかも、内部には86号井戸も存在している。こうした大掛かりな設備を伴う建物が、炊事施設や風呂場など通例の生活施設と見なされ

るものかは課題となるが、関連する遺物なども認識されていない。2 a 区の空間利用として、北東部に遺構が希薄な空間が着目される。これは中庭や菜園などが想定される部分となる。

(3) 桁行平均柱間

全 81 棟の個別状況は、第 18 表のとおりであるが、桁行 2 間規模のもの 21 棟と調査面積が少ない 2 棟を除く、58 棟を対象とする。このうち、桁行平均柱間が約 6.77～7.32 尺（以下、7 尺前後と略す）のものが 30 棟（51.7%）で、約 5.83～6.37 尺（以下、6 尺前後と略す）のものが 19 棟（32.8%）、残る 9 棟がその他となる。また、その他のうち 4 棟は約 6.42～6.55 尺で、5.67 尺 1 棟を加えた 5 棟（8.6%）も数値は近く、極端に異なるのは残る 4 棟となる。したがって、桁行平均柱間は 7 尺前後と 6 尺前後があるとして、内容を検討する。

北館では 7 尺前後が 12 棟で、6 尺前後は 1 類と 4 類で 3 棟である。7 尺前後が圧倒的に多いが、4 類 24 号建物が主屋級で 6 尺前後であるのは注目される。南館北側は小規模な建物が多く、全 13 棟中 6 棟は桁行 2 間である。残る 7 棟では 3 棟ずつが 7・6 尺前後であり、1 棟は約 8.2 尺と極端な例である。ここでは代表的な主屋となる 28・29 号建物がともに 7 尺前後であることが特筆される。南館南側では全 16 棟中、資料化が可能な 14 棟のうち、8 棟が 7 尺前後、6 棟が 6 尺前後となる。特に細長く特異な平面形を持つ 43・53・54・55（大きい可能性あり）号建物がすべて 6 尺前後であるのは特筆され、基本となる桁行平均柱間は 7 尺前後と言える。西館では全 25 棟中、資料化が可能な 18 棟のうち、7 棟ずつが 7・6 尺前後であり、残る 2 棟は中間的な数値で、1 棟は約 8.4 尺と極端な例である。ここでも 6 尺前後の建物は、附属屋級が多いが、4 類 114 号建物は総柱構造で面積約 34.68㎡と大きく、6 尺前後であることが注目される。遺跡全体で最も古段階に位置づけられる 6 類においても、7・6 尺前後が混在していることが確かめられる。なお、6 類 121 号建物は規模も大きく、水場とも関係して西館を代表する建物であり、桁行平均柱間約 8.37 尺を特殊事例として片付けるには、やや抵抗が残る。

以上の検討によって、本遺跡の柱間基準は 7 尺前後が

主体であり、やや規模の小さい附属屋級の建物には 6 尺前後が使用される例があるものとされる。およその年代ではあるが、14 世紀半ばから 16 世紀代の建物変遷すべてに、この傾向は認められる。また、特に最新段階となる北館 1・2 類段階で、6.9 尺に近い数値が多いのは、建物の建築精度が向上していると思なすこともできよう。

(4) 建物建て替えの想定

建物の平面形・規模ともに近似し、同じ主軸方位でほぼ重複している場合、材料再利用による建て替えが想定される。北館 20・22 号建物は、ともに南下屋を持つ主屋級建物である。柱穴同士の新旧関係から 20 号建物が後出と判明している。22 号建物の南辺は、身屋・下屋ともに東 1 間分を二分する間柱を設置し、20 号建物で西辺に庇があるのと近似する。規模は 20 号建物が小さく、材料を再利用して建て直したことが想定される。20 号建物の桁行平均柱間が約 6.5 尺と異なるのも、22 号建物を建て替えたことで、桁行平均柱間も小さくなったためとすることも可能である。

南館北側の 36・37 号建物も建て替えが想定される。構造では 37 号建物が 3 面に下屋を設けるが、面積は 36 号建物より若干狭い。37 号建物を後出と考えれば、下屋によって面積を補ったことも想定される。

南館南側 47・49・50 号建物は平面形・規模ともに近似しており、主屋規模に近い一群である。材料再利用による建て替えを想定すれば、47→49→50 号建物の順で変遷することとなる。また、43・53・54 号建物も平面形・規模ともに近似しており、材料再利用による建て替えを想定できる。形態から 43→53→54 号建物の順で変遷が想定できるが、4 号建物の桁行平均柱間が約 6.37 尺であるため、基準尺 6 尺前後という見方から若干ずれている。更に前身建物があることも想定しておく。また、17 号建物もこれらの建て替えの可能性が残る。

西館では 118・119 号建物は重複し、平面形・規模ともに近似しており、材料再利用による建て替えも想定される。この場合僅差であり、前後関係は決め難い。

以上、現実性の高いものを抽出して、建物の建て替えを検討したが、それ以外でも材料の再利用は想定できる要素である。いずれにしても、1 b 区の様相から材料再利用による建て替えは 3 回程度は可能であったと言えよう。

(5) 出土遺物と屋敷の様相

北館では在地系内耳土器の出土量が多く、特に 15 世紀後半以降増える傾向にある。これは 1・2 類段階で特定の範囲に繰り返し建物が建てられる傾向と重なり、建物群の最盛期と言える。ただし、4 類以前については、屋敷の中核部分が北側調査区域外に存在するため、出土遺物に影響したことも考えられよう。

南館は、一辺 60 m 規模と本遺跡で最大規模を持つが、全体として遺物の出土は少ない。ただし、屋敷の中核に当たる 1 b 区で、カワラケ破片の出土量がやや多い点は注目される。また、1 a 区南の 19 号溝以西において建物規模が突出しているにもかかわらず、相応する出土遺物がないのがやや気がかりである。

西館は建物の最盛期が、他の調査区より古く 14 世紀後半から 15 世紀前半にピークを認めることができる。中国陶磁器もやや多く出土しており、本遺跡内ではやや突出した屋敷地とみることもできよう。規模は 25 m 規模から 50 m 規模へ拡大したことが判明したが、零細な屋敷であることも否めない。

本遺跡における搬入遺物の出土量は、県内でもやや多い方であろうが、16 世紀には激減してしまう。しかし、北館では盛んに建物が建てられており、屋敷の状況は衰退していない。つまり、搬入遺物が少ない状況は、屋敷居住者の経済的な低迷ではなく、地域的な傾向とみることができよう。

おわりに

遺構数が多く、各屋敷の比較要素も多岐にわたるため、予定の紙数を大幅に超過してしまった。そうした都合もあり、あわせて検討する必要のある福島飯玉遺跡は稿を改めることとしたい。

- 註 1. 石井榮一 2009 「B 区 4 面より検出された建築遺構の建築史的検討」『福島大島遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 註 2. 飯森康広 2010 「斉田中耕地遺跡Ⅲ区の中世屋敷について」『斉田中耕地遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 註 3. 飯森康広 2005 「小規模な中世屋敷内部の建物変遷と傾向」『研究紀要 23』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 註 4. 筆者は「館」という用語を限定的に使用している。つまり、公的な機能を持つ武士の居所と考え、遺構では概ね一辺 100 m 規模以上としている。その意味で、本事例は「中世屋敷」の範疇に入るが、本報告書の体裁にあわせ、便宜的に「北館」「南館」を使用する。なお、この問題に関しては、別稿を参照願いたい(飯森康広 2001「中世上野国における館と宿所」

発掘調査される中世屋敷跡を考えるために」『群馬文化』266 号)。

- 註 5. 附属屋は、基本的に主屋に対する従属関係を意味し、居宅の中心となる主屋に附属する機能として、収納や各種作業、馬屋などを分担する。あるいは親族や下人の居宅なども含まれ、必ずしも居住機能を否定するものではない。
- 註 6. 徳江秀夫ほか 2008『福島飯玉遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 註 7. 未掲載遺物のカウント作業は、玉村中世史研究会の共同研究の一つとして、平成 22 年 3 月 22 日に会員である黒澤照弘・中島直樹・飯森が行った成果を反映した。
- 註 8. 秋本太郎 2005 「上野と周辺地器との関係 — 在地土器の分布論から探る —」『第 1 回内陸遺跡研究会シンポジウム資料集 海なき国々のモノとヒトの動き — 16 ~ 17 世紀における内陸部の流通 —』
- 註 9. 星野守弘 1996 「鉢」『新編高崎市史』資料編 3 中世 I 424 頁 高崎市

2 調査成果のまとめと問題点

齊田竹之内遺跡の発掘調査および整理作業を通じて明らかになった点、および問題を残した点について、以下に要約する。

1) 明治絵地図と遺跡

玉村町教育委員会中島直樹氏のご厚意により遺跡周辺の明治九年絵地図を目にする機会を得た。この地点は「福島(飯玉)」「齊田(竹之内)」「下斎田(布留坡)」の3つの「大字(小字)」が重なり、本遺跡で調査した大溝氾濫後の水路(0号溝)が字境となっていたことがわかった。また、調査区域外にかかり不明だった点が多数解消できた。

第175図は前述絵地図写真を元に作図したものである。原図が字別絵地図のため各地図の境にある道・水路などの幅や規模が、隣り合う2枚の地図間で一致しないことも多く、不明瞭であった。加えて原図の汚れや折り目などのため不確実な部分があるが、発掘調査で明らかになった天明三年以降の土地利用の様相が絵地図と合致

している部分が多数見られた。

水路については、1区0号溝・1号溝および2区1号溝(15号溝表層)の繋がりが調査区を南北に横切る現道のため確認できなかったが、2区1号溝は1区0号溝へ繋がらず、1区1号溝へ繋がることが推測できる。

道については1区a畦とc'畦(第15図上)が絵地図中の道に確認できる。

復旧溝について、1区で水路から離れた場所にあった復旧溝部分(第8図)は絵地図では田となっており、床土部分に多量の軽石を埋め込んでも田として問題なかったことが窺える。反面水路に隣接した2区の復旧溝部分(第9図)は絵地図で荒地または堤となる部分が広く含まれている。復旧溝の規模・形状は1区と2区でほとんど差がないが、2区での復旧は耕地の全面的な回復には至らなかったようである。

2) 復旧痕と耕作痕

天明三年のテフラ降下以降の耕作に関わる遺構について、平面図上では畝のサクに見える痕跡を、テフラや埋没土の状況から復旧痕と耕作痕(畝)に分けた。この作



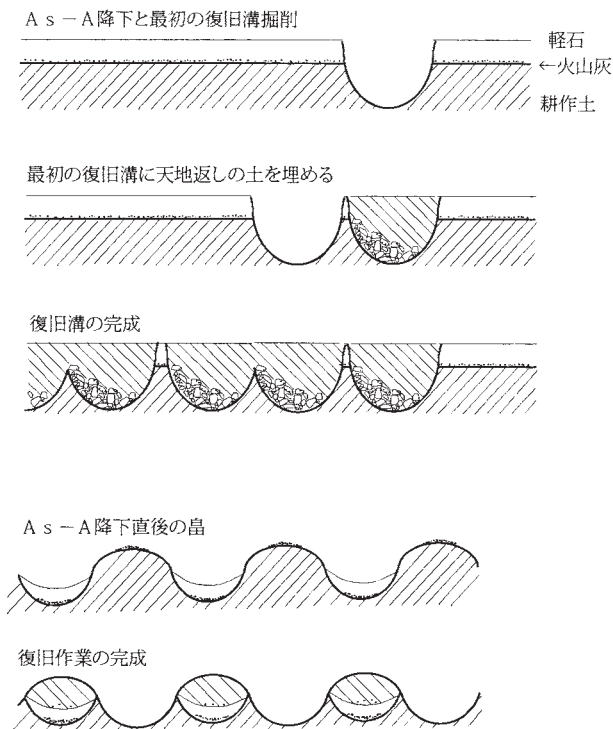
第175図 遺跡周辺の明治時代絵地図

業は次のような根拠によるものである。

(復旧痕) 降下テフラを取り除く復旧には、大別して次のようなAからCの3形態が考えられる。

Aはテフラを移動除去する作業である。テフラを集め、①川に流したり、②斜面に捨てたり、畠の隅の一面に寄せ集めたり、③不要になった井戸や土坑に埋めたりする手段である。いずれもバリエーションは多い。A①については二次的災害と禁令の記録も残るといふ。A②の痕跡を群馬県西部地域では「灰掻き山」と呼ぶこともある。この作業直下では田や畠の痕跡が最も良好に保存される。

Bはテフラをその場に埋める手段である。遺跡周辺で最もよく見られるのが、①畠のサク状の溝を連続して掘り窪め、天地返しのようにテフラを順次埋める方法である。本書ではこの痕跡を復旧溝と呼んだ。第176図上は田面もしくは平坦な畠面に復旧溝を設けた場合のB①作業模式図である。火山灰はサク内の掘り込み面では確認できず、サク状の窪みより高い位置で確認される場合がある。サク内の埋没土は近似する。第176図下はB②の畝サクのある畠で同様の作業を行う場合で、畝部分を窪めてサク部分にある軽石を埋める。火山灰はサク状の窪みの底に見られるはずだが、後世の耕作のためこの



第176図 復旧溝模式図

作業痕跡が明瞭に残存する事例は遺跡周辺では報告されていないようだ(※1)。Cは畦や道下に土坑状の穴を掘り、近接する田や畠内の軽石を埋めるものである。本遺跡の畦畔下復旧坑(第13図)は土坑状の穴を連続して設ける例である。

いずれの場合でも純層に近い多量の軽石が見られることが耕作痕との相違点である。

(耕作痕) B②作業後の畠の様子である。本遺跡ではサク状の窪み底面付近に火山灰が見られないことは復旧痕と同様だが、軽石の量は少なくなり、特にブロック状の軽石の混入はほとんど確認できなくなっている。残存状態の良い畠であればサクとサクの間(畝部分)が広がるはずだが、畝とサクの切り替え作業があるため、調査によって確認できる畠には畝幅が確保できない場合が多い。本報告で1面の畠と呼んだ2・3・5号畠は、畠の1時期を表わした遺構ではなく、重複する耕作痕をすべて掘り上げた状態である。2号畠断面(第14図上)に見られる埋没土中の軽石密度の相違は、B②作業後における軽石密度相違の名残と考えている。

3) 中世方形館

北関東自動車道の発掘調査が前橋台地を横断するのに伴って、四周を堀で囲まれた中世方形館跡が次々と調査された。これらの遺跡の多くは江戸時代を経て現代に至るまで屋敷の区画は引き継がれたものが多かった。

国道354号線玉村バイパスに伴う発掘調査でも多数の方形館が調査されてきたが、特に隣接する福島飯玉遺跡と斉田竹之内遺跡では館群が密集して確認された。これらの館は共通して江戸時代には田や畠になり、屋敷として後世まで引き継がれることがない。明治期の絵図(第175図)にも居住域の痕跡は認められない。

福島飯玉遺跡・斉田竹之内遺跡の発掘調査中に峰岸純夫氏より、本遺跡南側500mの位置に東西方向に作られた日光例幣使街道整備にあたり、玉村宿周辺へ移住が行われたため、中世館の跡地が居住域から外れる可能性を指摘された。本遺跡のみでなく、玉村バイパスの調査で確認された多くの中世館跡が天明三年浅間山噴火による軽石下に表れてこない調査成果と合致した内容である。

館を囲う堀の埋没土には人為的に埋め戻された痕跡はなく、洪水による砂の埋没後、復旧を行わず放置されたことが分かってきた。日光例幣使街道(※2)を設置す

るにあたり、戦闘機能を持つ館堀は埋め立ての対象となりそうで、発掘調査に際しても特に人為的埋戻しの有無は留意した点であったが、埋戻し作業の痕跡が確認できた個所はなかった（※3）。

ただし、遺跡内では16世紀後半以降の遺物はあまり出土していない。日光例幣使街道が整備された17世紀前半、遺跡周辺は居住域としての機能がほとんど喪失していた可能性もある。

次に調査された3カ所の方形館について触れる。

北館 大溝屈曲部分を有効に利用した立地にある。館規模は南側部分のみ計測できる。22号溝南西隅と、21号溝南東隅の外側で50.5m、51号溝まで加えると55mを超える規模となる。館南堀にあたる21号南溝が37号溝（第53図）を意識するように屈曲する点が特徴である。調査段階で37号溝の性格について想定したことは

- ①大溝掘削のための工所用斜路
- ②水運を前提とした大溝からの舟の引き揚げ施設
- ③大溝側からの館入口施設

の3点であったが、いずれも館堀を屈曲させる理由にはならない。具体的な根拠を確認できなかったが、①は大溝と館建設の工事が同時に進行すれば可能性もあると考える。③は最も有力と考えたが、門・橋・柵など入口に関連する施設が確認できていない。

南館 北西隅を氾濫で失っているが、北辺の推定規模は東側に隣接する福島飯玉遺跡西隅で確認されている15号溝を東堀と想定すると堀外側で63mになる。氾濫後の堀改修を行っているようで、変遷が想定し易い館であった。北外堀は34号溝が古く、氾濫後に33号溝の位置へ東側部分を内側へ作り替えたことが分かった。大溝氾濫による浸食を最も受けやすい西側部分で改修の痕跡が認められないことが不明な点である。調査で確認できない改修があり、杭の跡（第42図）にはその際の施設が含まれる可能性がある。

堀で囲われた区画内の東側には15～19号の細い溝群で2重・3重に囲まれた小区画が存在する。

西館 出土遺物から3個所の館のうち最古の施設と考えられる。南館同様に堀で囲まれた区画の北東側内側に42・97・99号の細い溝で区切られた小区画が見られるが、南館ほど規則的な溝群の配置ではない。また、館区画の北側に本館区画を意識したように屈曲する15号溝

があり、本館の外堀を意図した施設の可能性もある。

4) 大溝について

大溝調査時に現地を見て頂いた伊勢屋ふじこ氏より、壁の立ち上がり角度が高く一律なことから人工的な施設で間違いないこと、底面近くに多量に見られる径30cm大の川原石は水路完成直後の通水時に、通水元河川の川原石が流れ込んだ痕跡であるとの指摘を受けた。この指摘を受け「通水元河川」が変流後の利根川（現利根川）であることを確認（第3章-1）した。利根川変流の時期が中世であることは多くの指摘があるが、より具体的な年代は確認できていない。本遺跡を含む玉村地区の館と周辺施設の分析により、利根川変流時期を解明する根拠を提示することが求められよう。

本遺跡周辺については、大溝を館外堀として利用していない西館（14～15世紀の遺物が多く見られる）が大溝開削前の施設と考えたい。大溝と北・南2カ所の館（15後～16世紀の遺物が主体）との先後関係は把握できないが、密接な施設であることは間違いない。

大溝の開削目的については、①用水路、②館防御のための堀、③水運 の3点が考えられた。大溝が直角に曲がることや館配置から②の目的があったことは確認できよう。反面、大溝の規模から②が唯一目的でないことも推測できる。多目的の水路と考えたいが用水路・水運のどちらにも溝を直角に曲げることは適していない。日光例幣使街道の南側400m（大溝の南約1000m）に江戸時代（1610～1615年）に開削された滝川用水路が流れている。本溝が改修されずに鯉沢と呼ばれる小規模な水路として残りながら、大規模な水路が滝川用水路として別地点に開削された理由の一つに、本溝の水路としての欠陥が修復できないものと判じられたことも想定される。

※1 サク内のパミスを埋める復旧作業直後、大規模な泥流によって埋没した八ツ場ダム関連の遺跡調査で、このような例が多数確認できる。

※2 1646（正保3）年に例幣使がこの街道を使用したことが記録されているが、日光例幣使自体は1617年の家康1回忌以降、随時行われている。

※3 北館21号南溝上面に礫や軟質陶器類が多量に廃棄される例があるが（第48図）、溝が中層以上まで砂質土で埋没した後の廃棄であった。

遺物観察表

1 a 区 復旧溝・畠・水田 (第 18 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
3	復旧-1 瀬戸・美濃 陶器 碗	底 5.3 高 [1.8]	埋没土。底部。	高台に沿って部部を打ち欠き、円盤状に成形した転用品か。	③灰白色。④内面鉛釉。碗は江戸時代。
3	復旧-2 鉄製品 鎌	全長 (7.5) 刃長 (4.1) 峰厚 0.35	埋没土。切っ先を僅かに欠く。ほぼ完形。	挿柄形の小形鎌。大きさから桑切り鎌の可能性。着柄部分は目釘で留めるための屈曲か。	①農具としては比較的良質の和鉄か。④切っ先側の刃こぼれせずむ。
5	畠-1 美濃陶器 丸皿	口 (13.0) 高 [2.1]	埋没土。図示部の 1/8。	内面から高台脇灰釉。器壁やや厚く、口縁部外反。	①夾雑物少ない。④登窯 4 小期
5	畠-2 火打ち石か	長 4.1 幅 2.4 厚 1.6 重 15.1	埋没土。ほぼ完形か。	くの字状に屈曲する 1 側面に細かな剥離が集中しており、材質・大きさから火打ち石を想定した。	①玉髓。
5	畠-3 製作地不詳焼 締陶器 甕	高 [10.5]	埋没土。体部 2 片。	外面縦方向のカキ目後、横方向のカキ目。内面指押さえ痕。	①微細な岩屑やや多い。③にぶい橙色。外面器表灰赤色。④中世か。
6	畠-1 鉄製品 釘か	長 [2.9] 幅 0.4 厚 0.3	埋没土。両端欠く。	断面四角形。釘の先部近くと思われる。	①錆化進み材質不明瞭だが、あまり良い鉄ではないが洋鉄ではないと思われる。
6	畠-2 鉄製品 釘か	長 [4.4] 幅 0.5 厚 0.4	埋没土。先端部欠く。	断面長方形に近い。折頭釘の頂部側破片と思われる。1 とは別個体。	①あまり良い鉄ではないが洋鉄ではない。
1a	区 水田-1 常滑甕か	高 [9.9]	埋没土。体部上位片。	やや薄手。外面に縦位の弱いナデ。	① 3mm 大の黄銅色岩屑やや目立つ。③灰色。外面器表橙色。④中世か。

2 a 区 5 号溝-1 の銭貨は 276 頁に記す。

1 a 区 大溝・1 号溝 (第 20 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
大溝-1	瀬戸陶器 志野丸皿	口 (11.2) 底 (7.0) 高 [1.65]	南東側中層。口縁から底部片。	内面から高台内の一部長石釉。貫入あり。見込みと高台内目痕一カ所残存。高台部を擦って平底に加工。	③灰白色。④登窯 4 小期。
大溝-2	美濃陶器 灯火具	口 (13.0) 底 (5.8) 高 [13.7]	埋没土。 1/3 個体。底部内面立ち上がり部から欠損。	底部外面は基筒底状。全面鉄釉施釉後体部外面の釉を以下を拭う。体部中位外面に重焼痕。	③灰黄色。④登窯 5・6 小期。
大溝-3	肥前磁器 碗	口 9.2 底 4.0 高 5.3	埋没土。ほぼ完形。	外面雪輪梅樹文。高台内不明銘。	③灰白色。④波佐見系。18 世紀中～後。
大溝-4	肥前磁器 碗か皿	底 5.0 高 [1.6]	南東側中層。底部 2/3。	内面から高台脇灰釉。貫入。高台に沿って細かく割れ、人為的な調整であろう。全体に摩滅し、上流からの流下物。	③灰褐色。④ 17 世紀前～中。
大溝-5	肥前磁器 鉢	底 6.8 高 [2.3]	埋没土。底部完存。	体部ほぼ高台に沿って割れるが、割れ口に釉が入り込む箇所が多く、焼成時のひびに沿って割れた可能性大。高台内 1 重圏線内に篆書体「乾」銘。	③白色。④ 19 世紀前～中か。
大溝-6	美濃陶器 小碗	口 (5.9) 底 (3.0) 高 [3.9]	埋没土。1/3 個体。	高台径小さく、器高高い。内面から体部外面下位灰釉。貫入。	③灰白色。④登窯 8 小期。
大溝-7	肥前磁器? 仏飯器	底 (3.2) 高 [3.8]	埋没土。口縁無欠損。底部完存。	脚部中位低い突帯状をなす。脚底部高台状に削り込む。内面から脚裾部施釉。貫入。	②焼成不良。③灰白色。④ 18 世紀後～ 19 世紀中か。
大溝-8	肥前陶器 皿	口 (11.8) 底 4.2 高 3.9	埋没土。口縁部 1/4、底部完存。	内面から口縁部青緑釉、体部外面透明釉。外面体部下位以下無釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。	③灰白色。④内野山。17 世紀末～ 18 世紀前。
大溝-9	美濃陶器 折縁輪壳鉢	底 7.8 高 [3.8]	埋没土。体部一部、底部完存。	内面から体部外面透明に近い灰釉。貫入あり。見込み幅広に釉を剥ぐ。釉剥ぎ部重ね焼き痕。貼付高台。	③灰白色。④登窯 7 小期。
大溝-10	在地系土器 不詳	高 [5.8]	埋没土。柱状部。	柱上部右方向捻り痕。杯部内面周縁黒色物付着。柱状部外面全面黒色物付着。柱上部下面接合部で剥がれる。	①夾雑物少ない。③暗灰色。④時期不詳。黒色タール状の付着物あり。黒色物は油の可能性高く、灯火具であろう。
1	溝-1 龍泉窯系 青磁碗	高 [3.1]	埋没土。体部小片。	外面片彫りによる籬連弁文。胎土薄く、釉厚い。釉にざらつきがあるが、被熱ではなく流水による摩滅の可能性高い。	③灰白色。④ 13 世紀末～ 14 世紀前か。
1	溝-2 美濃陶器 灯火皿	口 (10.0) 底 (4.0) 高 [1.7]	埋没土。1/3 個体。	全面錆釉施釉後、体部外面以下釉を拭う。口縁部外反。	③灰白色。④登窯 10・11 小期。

遺物観察表

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 溝-3 美濃陶器 灯火受皿	口(10.2) 底(4.2) 高[1.6]	埋没土。1/3 個体。	全面錆釉施釉後、体部外面以下の釉拭う。受部抉り一箇所残る。体部外面と受け端部に重ね焼き痕。	③灰白色。④登窯 10 小期。
1 溝-4 瀬戸陶器 輪壳皿	口(13.9) 高[1.8]	埋没土。1/4 個体。	口縁部外反。口縁部長石釉か。	③灰黄色。④登窯 5 小期。
1 溝-5 肥前磁器 碗	口(9.8) 高[5.1]	埋没土。底部。	外面雪輪梅樹文。底部器壁厚い。	③灰白色。④波佐見系。18 世紀後～19 世紀前。
1 溝-6 肥前磁器 碗	口(10.0) 底(3.8) 高[5.0]	埋没土。口縁部一部から底部 1/4。	外面雪輪梅樹文。底部器壁やや薄い。	③灰白色。④波佐見系。18 世紀中～後半。
1 溝-7 製作地不詳 磁器 瓶	高[6.7]	埋没土。頸部から肩部片。	外面いわゆる蛸唐草文。	③白色。④ 19 世紀中～後半。
1 溝-8 堺・明石陶器 すり鉢	高[3.9]	埋没土。口縁部小片。	片口部片。口縁部縁帯をなす。片口部のため内面段差不明瞭。	③にぶい赤褐色。④ 18 世紀中～後半か。
1 溝-9 在地系土器 焙烙	高[4.9]	埋没土。口縁部から体部片。	体部中位外面肥厚。外面口縁部下紐作り痕。口縁部横撫で。	③断面中央から黒色、灰白色、黒色。④江戸時代。
1 溝-10 在地系土器 すり鉢	高[2.8]	埋没土。体部下位片。	内面向かい合うすり目。内面体部下端使用による摩滅で窪む。2 cm 幅に 7 本の卸し目。	①粒径やや粗く、片岩等が混じる。③にぶい赤褐色から暗灰色。④ 15 世紀。
1 溝-11 在地系土器 火消壺蓋	口(28.0) 高[3.5]	埋没土。1/4 個体。	外面型による細かな施文だが器面平滑。器表燻し。つまみ部は欠損。	①大型品としては緻密で、夾雑物少ない。③灰色。器表黒色。④江戸時代以降。天井部内面こびりつくような黒色物の付着顕著。

2 区 15・18 号溝（第 21 図） 調査段階で 1 号溝と名付けた 15 号溝表層部分出土遺物

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 クローム 青磁 皿	口 10.8 底 5.2 高 2.0	15 号溝(1 号溝)2 b 区。 2/3 個体。	意匠の花部分に白土。	③白色。④近現代。
2 磁器 皿	口 13.6 底 5.8 高 2.9	15 号溝(1 号溝)2 b 区。 口縁一部欠く。	型紙。	③灰白色。④近現代。
3 美濃陶器 灯火皿	口(8.3) 底(5.0) 高 1.3	15 号溝(1 号溝)2 b 区。 1/4 個体。	内面から体部外面施釉。鉛釉か。外面口縁部以下回転削り。底部は基筭底状。	②焼成不良。③灰白色。④登窯 5・6 小期。
4 製作地不詳 陶器 灯火受皿	口(8.2) 底(4.5) 高[2.0]	15 号溝(1 号溝)2 b 区。 1/2 個体。	内面灰釉。外面回転削り。受け部抉り欠損。	③灰黄色。④ 19 世紀か。
5 肥前磁器 皿	口(13.8) 底(8.0) 高 4.1	15 号溝(1 号溝)2 b 区。 口縁部から底部片。	口縁部・底部とも厚い。波佐見系。	③灰白色。④ 18 世紀中頃から 19 世紀初頭。
6 美濃陶器 折縁鉄絵皿	口(14.0 前後) 高[2.0]	15 号溝(1 号溝)2 b 区。 口縁部片。	内面から口縁部外面施釉。口縁部銅緑釉、体部鉄化粧。釉白濁する。口縁部外反した後内湾するように端部上方に曲げる。体部外面回転削り。	②やや焼成不良。③灰白色。④登窯 1 小期。33 号溝に同一個体の可能性のある破片あり。割れ口僅かに摩滅。
7 瀬戸・美濃陶器 碗	口(12.1) 高[3.3]	2 b 区 18 号溝表層。 図示部 1/5。	内外面鉛釉。	③灰白色。④ 18 世紀。
8 美濃陶器 筒形香炉	底(10.9) 高[5.6]	15 号溝(1 号溝)2 b 区。 図示部 1/4。	体部外面鉛釉、上位部分的にうのふ釉。内面鉄化粧。内外面轆轤目顕著。貼付脚一箇所残存。	③灰白色。④登窯 5・6 小期。
9 肥前陶器 御器手碗	底(5.2) 高[2.7]	15 号溝(1 号溝)2 b 区。 図示部 1/3。	高台端部を除き透明釉。貫入入る。高台内抉り深い。	③灰白色。④ 17 世紀後半。
10 瀬戸陶器 掃鉢	高[3.2]	15 号溝(1 号溝)2 b 区。 口縁部小片。	錆釉。口縁端部幅広にする。	③灰白色。④登窯 10・11 小期。
11 常滑?陶器 片口鉢	高[4.2]	15 号溝(1 号溝)2 b 区。 口縁部小片。	口縁端部付近のみ丁寧な横撫で。外面指押さえ痕残る。体部内外面粗い撫で。口縁端部上面窪む。	②焼成不良で焼き締まり弱い。③橙色。④常滑片口鉢Ⅱ類であろう。14 世紀前半か。

2 区 15・18 号溝（第 26 図） 中層以下からの出土遺物

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
15 溝-1 肥前陶器 三鳥手鉢	口(30.0) 高[5.0]	2 a 区埋没土。口縁部片。	内面スタンプ文内に白土。内面から外面体部中位透明釉。無釉部分鉄化粧。	①やや砂質。③にぶい褐色。④江戸時代。
15 溝-2 瀬戸陶器 すり鉢	高[3.3]	2 a 区西寄り埋没土。口縁部片。	錆釉。口縁部は外反し、端部下方に折り返す。口縁部内面は低く、なだらかな段差あり。	③灰黄色(2.5Y7/2)。④登窯 4 小期。

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
15 溝-3 製作地不詳 陶器 甕	高 [2.3]	2a区中央埋没土。肩部小片。	焼締陶器。外面自然釉。外面下部5条の横線。	③灰色 (5Y4/1)。外面黒色味。④中世。
15 溝-4 在地系土器 片口鉢	高 [12.1]	2a区中央埋没土。口縁部から体部下位片。	体部外反。口縁端部上面丸みを帯びる。端部内外面は小さく突き出る。	①夾雑物やや細粒で輝石混じる。③にぶい橙色。④内面体部下端使用により摩滅。15世紀。
15 溝-5 在地系土器 焙烙	高 [5.6]	2a区中央埋没土。口縁部から底部片。	体部外面下位型痕と指押さえ痕、中位紐作り痕。	①夾雑物細粒で輝石混じる。③灰白色。器表褐色。④江戸時代。
15 溝-6 在地系？ 土器火鉢？	高 [4.8]	2a区中央埋没土。口縁部から底部の2片。	全体に丁寧な撫でで外面は特に丁寧。口縁部平面形は直線的で方形か長方形であろう。体部浅く火舎の可能性あり。	①片口鉢や内耳鍋に比して夾雑物少ない。輝石散見。③にぶい褐色。断面は淡い。④中世か。
18 溝-1 在地系土器 片口鉢	高 [6.0]	2a区中央埋没土。口縁部片。	口縁部内面緩い段差をなして窪む。口縁端部内面に丸く突き出る。内面下位使用により平滑。	①②胎土・焼成共に均質。③灰色 (5Y5/1)。④14世紀か。
18 溝-2 在地系土器 火鉢？	高 [6.3]	2a区埋没土。体部下位から底部片。	砂底。底部縁辺のみ薄くなる。体部内外面撫で調整。	③灰白色。器表灰色。④中世か。
18 溝-3 常滑陶器 甕	高 [6.5]	2b区埋没土。肩部片。	内面指押さえ痕顕著。	③灰白色。内面褐色味をおびる。④同一個体の破片あり。中世。
18 溝-4 渥美陶器 甕か	高 [2.9]	2b区埋没土。体部小片。	外面左端の縦凹線状窪みは叩き目か。	③灰色。内面淡い。④12世紀。
18 溝-5 常滑陶器 甕か	高 [4.8]	埋没土。体部小片。	外面自然釉。小破片からの復元で傾き不安。肩部片か。	③灰白色 (7.5Y7/1)。④中世。

2区集石 (第28・29図)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 在地系土器 火鉢	高 [6.6]	口縁部片。	口縁部内湾。口縁端部上面やや窪み、内面は突出する。口縁部横撫で。	③黄灰色から灰色。④中世。
2 石臼 (上臼)	径 [29.1] 厚 [10.9] 重 4110 g	東側の下層。1/3 個体。	供給口から破損。摩面は6分画か。	①粗粒輝石安山岩。④大きな割れ面の上に細かな割れ口が重なる。破損後に移動か。
3 宝珠か	長 [12.7] 幅 12.1 重 1086 g	中央の下面。1/3 個体。	宝塔類の上端と思われ、摩滅により不明瞭だが、請花部の彫込みが僅かに確認できる。	①粗粒輝石安山岩。
4 空風輪	長 25.1 幅 15.6 厚 12.8 重 3789 g	南側の下層。ほぼ完形	風輪部分が扁平で、空輪部は膨らみがほとんどない。両輪の境に溝を刻んだ雑な造り。	①二ツ岳石。④図示部下側の剥落部は旧時のもの。使用時の状態の可能性あり。
5 火輪	長 24.6 幅 25.6 厚 12.5 重 3316 g	中央南側の上面。上側一部欠く。	上面の欠損進み形状不明瞭。受孔は広いがやや浅い。	①二ツ岳石。④4の空風輪を受けることは難しく、大きさも合わないか。
6 火輪	長 22.4 幅 (16.7) 厚 10.2	東側の上面。1/2 個体。	歪み強いが、摩滅風化がすすみ、原形の歪みか、破損による変形か判断できなかった。	①牛伏砂岩。④重 4090 g。
7 火輪	長 24.8 幅 24.6 厚 10.7 重 7.3kg	南側の下面。ほぼ完形。	扁平。剥落・摩滅著しく、稜が把握できない。	①粗粒輝石安山岩。
8 水輪	長 (19.1) 幅 (17.6) 重 4738 g	集石内埋没土。2/3 個体。	上下両面にほぼ均等な窪み。摩滅・風化が進み分りにくくなっている。	①牛伏砂岩。6の火輪に近似。

9・10の銭貨は277頁に記す。

2区3・4面の溝 30・35・36号溝、2b区13号溝 (第36図)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
30 溝-1 龍泉窯系 青磁 碗	口 (14.8) 高 [3.0]	埋没土。口縁部片。	片切り彫りによる蓮弁文。蓮弁の盛り上がりとは鑄はない。釉は薄い。貫入入る。	③灰白色。④14世紀後半から15世紀前。
35 溝-1 在地系土器 片口鉢	高 [3.9]	埋没土。口縁部片。	口縁部横撫で。口縁端部上面丸みを帯びる。端部内外面小さく突き出る。	③灰白色。器表灰色 (7.5Y6/1)。④15世紀。
35 溝-2 常滑陶器 甕	高 [4.9]	埋没土。体部小片。	小破片からの復元で傾き不明。内面粗い撫で。外面撫で。	③灰白色。器表褐色 (10YR4/1)。④中世。
35 溝-3 渥美陶器 甕	高 [6.1]	埋没土。肩部2片。	外面自然釉斑状にかかる。内面粗い撫で。漆継ぎ。	③灰白色。④4・5は同一個体の可能性。他にも同一個体の可能性のある破片出土多い。12世紀。

遺物観察表

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
35 溝-4 渥美陶器甕	高 [5.0]	埋没土。肩部2片。	外面自然釉斑状にかかる。内面接合痕顕著、粗い撫で。漆継ぎ。	③灰白色。④3と同一個体か。12世紀。
35 溝-5 渥美陶器甕	高 [9.0]	埋没土。肩部2片。	外面自然釉斑状にかかる。内面粗い撫で、指頭痕顕著。漆継ぎ。	③灰白色。④3と同一個体か。12世紀。
36 溝-1 渥美陶器甕	高 [4.3]	西側南上端付近(36号溝寄り)。肩部片。	外面自然釉斑状にかかる。内面粗い撫で。	③灰白色(7.5Y8/1)。④12世紀。漆継ぎの痕跡ないが35号溝3~5と同一個体の可能性。
36 溝-2 在地系土器内耳鍋	高 [7.4]	埋没土。体部下位片。	体部下端付近内湾。外面体部下端以外煤付着。	①夾雑物細粒で雲母混じる。③灰白色から褐灰色(10YR4/1)。器表黒色。④中世。
13 溝-1 肥前磁器碗	台 5.2 高 [2.1]	埋没土。底部片。	底部器壁厚い。底部外面側からの叩打で円盤状に打ち欠く。	③灰白色。④江戸時代。
13 溝-2 瀬戸陶器すり鉢	底 (14.5) 高 [5.4]	西寄り底面直上。底部 1/4。	内外面錆釉、外面の釉拭う。底部回転系切無調整。内面すり目使用により摩滅。	③灰白色。④登窯5~7小期。
13 溝-3 常滑陶器甕	高 [4.8]	埋没土。体部下位2片。	内面横位寛撫で。	③にぶい橙。内面器表灰色味おびる。④中世。

13号溝-4の銭貨は277頁に記す。

2号墓坑(第38図)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 砥石	長 7.9 幅 3.3 厚 1.3	南側上層。半欠品か。	表裏2面使用。人為的に半裁したようで、割れ口付近縁部を面取りするように調整する。長さ調節をした製品か。	①珪質粘板岩。④重 56.0 g。長軸方向に沿った使用痕。

1区21号溝(第49~51図)

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 在地系土器? 皿	底 5.4 高 [0.7]	南溝東隅埋没土。底部から体部下端完存。	左回転系切無調整。底部内面指撫でなし。	①やや細粒の安山岩質の岩屑を散見する。③にぶい橙色(7.5YR7/4)。④古代から中世。
2 在地系土器皿	口 (10.1) 底 (6.4) 高 2.5	南溝東隅埋没土4片。1/4個体。	左回転系切無調整。歪み著しい。底部外面圧痕や内面指撫で共に認められない。	①微細な雲母粒・輝石混じりの細砂やや多い。③にぶい橙色。④15世紀。
3 在地系土器皿	口 (12.3) 底 (7.6) 高 2.2	南溝東隅埋没土3片。1/4個体。	左回転系切無調整。底部外面圧痕や内面指撫で共に認められない。底面薄い。	①赤褐色鉱物混じりの細砂やや多い。③にぶい橙色(7.5YR7/4)。④16世紀。
4 常滑陶器甕	高 [6.5]	南溝東隅埋没土2片。体部小片。	内面指頭圧痕。	③にぶい橙色。器表赤灰色。④中世。
5 常滑陶器甕	高 [4.4]	埋没土。肩部片。	外面自然釉斑状にかかる。器壁やや厚い。	③灰色。内面黒褐色、外面器表灰黄褐色。④中世。
6 在地系土器搦鉢	底 11.0 高 [7.7]	南溝東隅埋没土+30P-19Gの2片。図示部の1/2。	底部糸切無調整。内面弧状の粗いすり目。体部内面下位から底部周縁ドーナツ状に摩滅。	①片岩を少量含む。③にぶい赤褐色(5YR5/4)。④15から16世紀。
7 在地系土器搦鉢	底 (12.0前後) 高 [3.1]	南溝東隅埋没土。腰~底部片。	底部内面周縁から体部下半使用により摩滅。体部内面粗いすり目。器壁薄い。	①夾雑物やや細粒で片岩混じる。③にぶい黄橙色(10YR6/3)。④15世紀後半から16世紀。
8 在地系土器内耳鍋	高 [14.4]	南溝底面+58cm。口縁部から体部下端片。	内面口縁部と体部境の段差明瞭。体部外面上位磨削り後撫で。丸底。	①夾雑物やや細粒で片岩混じる。③灰色。④16世紀。外面下位煤付着。
9 在地系土器内耳鍋	口 30.2 高 [14.1]	南溝底面+32cm および埋没土の41片。底部欠損。	口縁部僅かに内湾し、端部上面僅かに窪む。内耳一カ所残存。内面口縁部下の段明瞭で稜なす。体部外面磨削り痕残る。	①夾雑物やや細粒で片岩混じる。③灰色。④15世紀中頃から後半か。体部外面煤付着。
10 在地系土器内耳鍋	口 28.8 底 25.9 高 [14.0]	南溝底面+22cm および埋没土の17片。3/4個体。	器壁やや厚く、口縁部直線的に延びる。口縁部上面幅広く平坦。内面口縁部下の段差大きく、稜をなす。	①夾雑物やや細粒で片岩混じる。③灰色。④15世紀末から16世紀中頃。体部外面煤付着。
11 在地系土器内耳鍋	口 34.4 底 25.9 高 16.5	南溝の広範囲に散る底面+40cm前後。3/4個体。	器壁やや厚く、口縁部上位小さく内湾。端部上面幅広く、僅かに窪む。内面口縁部下段差非常に小さく不明瞭。平底。	③褐灰色。④16世紀後半か。体部外面中位以下煤付着。体部外面下端から底部外面煤付着せず、にぶい赤褐色。内面にぶい橙色。
12 在地系土器内耳鍋	口 29.2 高 [13.2]	南溝底面+25cm 前後3片。1/4個体。	内面体部と口縁部境の段差大きい。口縁部直線的に延び、端部正面平坦。	①夾雑物やや細粒で片岩混じる。②やや高温で焼成されたようで、焼き締まり気味。③にぶい赤褐色。器表部分的に赤灰色。④16世紀
13 在地系土器内耳鍋	口 (29.6) 高 [10.2]	埋没土5片。1/5個体。	内耳一カ所残存。耳貼付部の口縁上面大きく窪む。口縁部と体部境内面小さく明瞭な段差。体部外面下位磨削り。	①夾雑物やや細粒で片岩混じる。③橙色。④15世紀。外面煤付着。
14 在地系土器内耳鍋	口 (32.4) 高 [4.3]	南溝底面+35cm 2片。1/5個体。	内耳一カ所残存。内面口縁部と体部境段差。口縁部緩い「S」字状を呈し、端部外方に突き出る。	①夾雑物やや細粒で片岩混じる。③灰色。④15世紀末から16世紀。

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
15	砥石	長 8.2 幅 8.4 厚 4.0 重 214.0 g	南溝東隅埋没土。完形。	扁平な三角錐型に研ぎ込み、摩面は緩やかな凸面になる。陵の部分も使用。未使用面に敲打痕か。	①二ツ岳石。
16	石臼 (下臼)	径 (36.0) 幅 [9.2] 厚 [5.6]	南溝中央付近埋没土。受部 1/4。	茶白型。	①粗粒輝石安山岩。④受部のみ剥脱。重 916 g。
17	石臼 (下臼)	長 [21.0] 幅 [11.7] 厚 9.3 重 2737 g	南溝東隅埋没土。1/3 個体。	茶白型。8 分画。ふくみはほとんど見られず摩面平坦。	①粗粒輝石安山岩。④芯棒穴から破損。大きな割れ面の上に細かな割れ口が重なる。16 とは別個体。
18	石臼 (下臼)	長 [12.8] 幅 [7.7] 厚 [4.3]	埋没土。受部小片。	茶白型。	①デイスイト凝灰岩。④受部のみ剥脱。重 359 g。
19	石臼 (上臼)	径 (17.6) 厚 [11.5] 重 2534 g	埋没土。1/2 個体。	茶白型。8 分画。横打込み穴は 2ヶ。一方に 2重、他方に 1重の菱形装飾が付く。ふくみは 3mm。	①粗粒輝石安山岩。④芯棒受け穴から破損。上縁部分は打ち掻くように欠損。
20	石臼 (上臼)	径 31.6 高 12.1 ~ 13.3 重 1012 g	南溝底面 + 54cm。1/2 個体。	上縁が緩やかで武蔵型と呼ばれる白に似るが、横内込み穴 (深さ 48mm) あり。摩面溝は僅かに残るのみ。ふくみ 5mm。	①牛伏砂岩。風化面が見えない。大岩から切り出した材を使用か (※)。④供給口から破損。偏減り。
21	石臼 (上臼)	径 [12.3] 厚 2.0 重 79.1 g	南溝東隅埋没土。摩面部分小片。	茶白型。摩面溝は乱雑で分画数も確認できない。横打込み穴の菱形装飾あり。	①粗粒輝石安山岩。④上面割れ口に厚い黒色付着物。漆継ぎか。側面割れ口には付着物なく、補修痕ではなく再利用の痕跡か。
22	石臼 (上臼)	径 (30.4) 高 [11.9] 重 10.6kg	南溝 (33 溝重複部分) 底面 + 57cm。1/5 個体。	6 分画。副線は 4 ~ 5 本。ふくみ 8mm。芯棒受け穴は径 2.7cm、深さ 3.7cm。横打込み穴は方形で深さ 3.7cm。	①粗粒輝石安山岩。④上縁は打ち掻いたように欠損。
23	石臼 (下臼)	径 (29.0 前後) 高 [12.6] 重 4670 g	22 と同地点。2 片接合の 1/4 個体。	摩面溝は残存せず、ふくみはほとんどない。軸棒穴径上側で 46mm、最狭部で 30mm 前後。	①粗粒輝石安山岩。④芯棒穴から破損。偏減りする。
24	石臼 (下臼)	径 (33.0 前後) 高 [6.5]	南溝 (33 溝重複部分) 底面 + 42cm。上面 1/6。	摩面溝は残存しない。ふくみはやや高く 14mm。下面は割れ面。	①粗粒輝石安山岩。④重 1734 g。
25	石臼 (下臼)	径 28.4 高 12.3 重 6.3kg	22 と同地点。2 片接合の 2/3 個体。	6 分画か。磨面溝はほとんど残存しない。ふくみは高く 30mm。軸棒穴径 30mm 前後。	①粗粒輝石安山岩。④偏減り著しく縁部の高さは 22mm の差あり。縁部剥脱と軸棒穴からの破損が同時か。叩き割るような破損。
26	板碑	長 (16.8) 幅 (11.3) 厚 2.0	南溝 (33 溝重複部分) 底面 + 37cm。小破片。	表面は全体に剥落。裏面の研り痕は比較的明瞭で板碑と分かる。	①緑色片岩。④重 480 g。

※ 飯島静男氏の所見による

北館内の溝 22・51 号溝 (第 51 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
22 溝-1	須恵器か 甕	高 [6.5]	埋没土。底部から体部片。	轆轤不使用か。器面細かな歪みあり。体部下端に沈線巡る。	①片岩・赤褐色鉱物等の夾雑物やや多い。②還元不十分だが比較的好調。③黄灰 2.5Y5/1。外面ムラ多い。断面縁部は橙色味をおびる。
51 溝-1	在地系土器 内耳鍋	高 [4.7]	埋没土。口縁片。	口縁部外反した後、小さく内湾。口縁端部上面平坦で内面に小さく引き出す。	①夾雑物細粒で片岩混じる。③灰色 (5Y5/1) から灰白色。④ 15 世紀後半。
51 溝-2	在地系土器 不詳	高 [8.4]	埋没土。体部片。	内外面横撫で。大型品のようなものである。	①夾雑物やや粗粒で片岩混じる。③灰白色。外面器表と器表付近にぶい黄色 (2.5Y6/3)。④時期不詳。
51 溝-3	在地系土器 内耳鍋	高 [6.5]	埋没土。口縁下端から体部上片。	欠損した内耳部基部。	①夾雑物やや粗粒で安山岩質の岩屑混じる。③にぶい黄橙。器表黒褐色 (10YR3/1)。④中世。

北館内の溝 37 号溝 (第 53 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	古瀬戸盤類	高 [4.5]	埋没土。体部小片。	体部内外面下位無釉。体部外面上位沈線状の轆轤目顕著、下位は回転錠削り。	③灰白色。④古瀬戸後Ⅳ期古。
2	在地系土器 内耳鍋か	高 [5.0]	埋没土。口縁片。	器壁やや厚く、口縁部横撫で範囲は端部から 3cm 程と狭い。端部は丸みを帯び、上面から押し調整したようで、内外面に折り返し状をなす。	①やや粗粒で片岩混じりの夾雑物あり。③にぶい橙色。④ 16 世紀か。

北館内の溝 32・42 号溝 (第 55 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
32 溝-1	在地系土器 片口鉢	高 [5.0]	埋没土。口縁部片。	口縁部横撫で。口縁端部上面尖り、内面に突き出す。端部内面摩滅。	①夾雑物やや粗粒で輝石混じる。②③にぶい黄橙色。器表灰黄褐色 (10YR5/2)。④ 14 世紀後半から 15 世紀。
32 溝-2	在地系土器 片口鉢	高 [3.2]	埋没土。口縁部片。	口縁部横撫で。片口一部残存。口縁端部内外に張り出す。張り出しは内面が大きい。	①夾雑物やや粗粒で輝石混じる。③灰黄色。器表黄灰色。④ 15 世紀。

遺物観察表

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
32	溝-3 焼締陶器 瓶類	高 [8.3]	埋没土。体部片。	外面、全面カキ目の後、三段に横線を巡らす。	①素地比較的緻密で細砂混じる。③灰黄褐色。外面器表灰赤色、内面器表にぶい黄橙。④中世か。
42	溝-1 瀬戸陶器 志野丸皿	口 (11.0) 底 (7.0) 高 [1.9]	埋没土。1/3 個体。	内面から高台内の一部長石釉。貫入あり。内外面各一箇所門雑ピン痕残る。	③灰白色。④登窯 3 小期。

南館外堀 33・34・17・28 号溝 (第 63 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
33	溝-1 美濃陶器 折縁鉄絵皿	口 (14.0) 高 [2.0]	埋没土。1/8 個体。	内面から口縁部外面施釉。口縁部銅緑釉。口縁部外反した後内湾。体部外面回転篋削り。割れ口僅かに摩滅。	②不良。③灰白色。④鉄絵部欠損。登窯 1 小期
33	溝-2 常滑陶器 甕	高 [4.7]	埋没土 + 30 L - 10 G。頸から肩部 3 片。	肩部内面指頭圧痕。頸部回転横撫で。肩部外面自然釉斑状にかかる。	③灰白色。器表にぶい赤褐色。④中世。
33	溝-3 在地系土器 内耳鍋	高 [6.0]	埋没土。体部片。	器壁やや厚い。	①夾雑物やや粗粒で片岩混じる。③にぶい黄褐色。内面器表褐灰色、外面器表黒褐色。④中世。外面煤付着。
34	溝-1 常滑陶器 甕	高 [7.8]	埋没土。体部片。	内面、接合部の指頭厚痕残る。	③褐灰色。外面器表にぶい赤褐色 (5Y5/4)、内面器表灰黄褐色。④中世。
17	溝-1 在地系土器 皿	口 8.4 底 5.2 高 2.0	1 b 区埋没土。ほぼ完形。	歪み著しい。左回転系切無調整。底部内面指撫でなし。口縁部器壁厚い。	①夾雑物やや粗粒で輝石混じる。③にぶい黄褐色 (10YR7/2)。④ 15 世紀後半。
17	溝-2 古瀬戸 直縁大皿	口 (28.5) 底 (12.0) 高 6.2	1 a 区南隅、底面 + 20cm。1/4 から 1/3 個体。	体部から口縁部直線的に広がる。口縁端部僅かに肥厚し、丸味を帯びる。底部 1/3 以上残存するが、高台部認められない。体部外面中位から底部外面回転篋削り。	③灰白色。外面器表にぶい黄橙。④古瀬戸後 III 期。 →底部内外面に目痕 4 ~ 5 箇所残る。
28	溝-1 常滑陶器 壺?	高 [3.6]	埋没土。体部片。	内面指頭圧痕。外面一部自然釉かかる。径が小さい可能性高く、壺と推定される。	③黄灰色。内面器表にぶい黄橙 (10YR6/4)、外面器表黒褐色。④中世。

2 b 区 22 号溝 (第 68 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	在地系土器 片口鉢	高 [4.6]	埋没土。 口縁部片。	器壁薄く、緩く外反した後、端部内面を突出させる。	①雲母らしい微細な夾雑物やや多い。③にぶい褐色。内面暗灰黄色。④ 14 世紀。
2	在地系土器 片口鉢	高 [2.8]	埋没土。 体部下位から底部片。	底部薄い。内面使用による摩滅顕著で大きく窪む。	①軽量の素地。チャート混じる。③灰白色。外面器表灰黄色。④中世。

西館外堀 40・42・43 号溝 (第 69・70 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
40	溝-1 古瀬戸 縮腰形瓶子	高 [12.6]	東溝埋没土。体部中位から下位片。	外面灰釉刷毛塗り。上半の釉流れる。内面紐作り痕残る。	③灰白色。④古瀬戸前 IV 期。同一個体らしい破片多い。
40	溝-2 軟質陶器	高 [4.1]	埋没土。体部片。	外面下端に削りか。	①夾雑物細粒で輝石混じる。③灰色。断面やや橙色味を帯びる。
40	溝-3 常滑陶器甕	口 (17.8) 高 [9.4]	埋没土 2 片。体部下位から底部 1/4。	内面自然釉かかる。	③黄灰色。器表褐灰色。④中世。2b 区 3 号井戸-6 と同一個体の可能性。
42	溝-1 在地系土器 内耳鍋	高 [3.6]	埋没土。体部下位から底部片。	外面体部下位篋削り。丸底。	①夾雑物細粒で輝石混じる。③灰白色。器表灰色 (5Y5/1)。④中世。
42	溝-2 摩石	長 13.8 幅 8.4 厚 5.3 重 965.8 g	埋没土。完形。	4 面使用で表裏は凸面状で、両側面は平坦に減っている。金属器の擦痕らしい鋭い傷残る。	①デイスaito。④強く被熱する。
43	溝-1 瀬美陶器甕	高 [9.6]	埋没土 2 片。体部片。	外面格子目状叩き一部残る。内面横位撫で。	③灰白色。④ 12 世紀。

2 b 区 40 号西溝 (第 70 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	在地系土器 皿	底 (6.6) 高 [1.1]	埋没土。図示部の 1/3。	底部回転系切無調整。	③にぶい橙。④中世。
2	常滑? 陶器 壺	高 [2.2]	埋没土。頸部から肩部片	肩部外面の一部自然釉かかる。肩部内面指押さえ痕。	③黄灰色。外面器表灰褐色。内面器表褐灰色。④中世か。10 とは別個体であろう。
3	古瀬戸 縮腰形瓶子	高 [9.9]	埋没土。頸部から肩部片。	外面灰釉、灰釉流れる。上部に 2 条の沈線。内面紐作り痕残る。	③黄灰色。外面器表灰褐色。内面器表褐灰色。④古瀬戸前 IV 期。2 a 区に同一個体らしい破片の出土多い。

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
4	常滑陶器 甕か	高 [3.9]	埋没土。体部小片。	内面指押さえ痕。	③灰白色。外面器表灰赤色 (10R4/2)。内面器表褐色 (7.5YR4/3)。④中世。
5	渥美陶器 甕	高 [5.5]	埋没土。体部小片。	内外面撫で調整。	③灰白色。④ 12 世紀。14 と同一個体か。
6	常滑陶器 甕	高 [9.0]	埋没土。体部片	外面自然釉厚くかかる。内面紐作り痕残る。	③灰白色。内面器表褐色。④中世。
7	焼締陶器 甕	高 [7.1]	埋没土。体部小片。	内面紐作り痕残る。外面自然釉僅かにかかる。	③灰色 (7.5Y6/3)。④時期不詳。
8	常滑陶器 甕	高 [10.0]	埋没土。体部片。	内面紐作り痕と指押さえ痕明瞭。	③灰白色 (2.5Y5/1)。内面器表灰赤色。外面器表赤黒色。④中世。
9	常滑陶器 甕	高 [6.3]	埋没土。体部片。	内面横位撫で。紐作り痕僅かに残る。	③灰褐色 (5YR5/2)。外面器表暗赤褐色。④中世。
10	常滑?陶器 壺	頸 [7.6] 高 [4.3]	埋没土。頸部から肩部片。	頸部回転横撫で。頸部やや薄い。頸部接合痕が指頭痕の下に残る。肩部外面カキ目。	③灰色。器表灰赤色 (2.5YR5/2)。④中世か。
11	常滑陶器 片口鉢	口 [30.6] 高 [6.9]	埋没土。図示部の 1/5。	口縁端部上面僅かに窪む。口縁端部内外面小さく突き出る。外面工具の縦位撫で後横撫で。内面斑状に自然釉かかる。	③灰白色。器表にぶい赤褐色。④ 14 世紀後半。
12	在地系土器 片口鉢	高 [5.6]	埋没土。口縁部片。	口縁部横撫で。口縁部内面僅かな段をなして窪む。口縁端部上面尖る。外面口縁部下浅い横線状のくぼみ 2 条巡る。	①微細な雲母混じりの細砂含む。③にぶい橙。器表灰色から黄灰色。④ 13 世紀後半。
13	常滑陶器 甕	高 [5.1]	埋没土。体部下位から底部片。	内面工具による横位撫で。	③灰黄色。外面器表にぶい黄橙。内面器表にぶい褐色。④中世。
14	渥美陶器 甕	高 [16.1]	埋没土 2 片。体部下位片。	内湾して立ち上がるが、叩き目部分のみ僅かに外反。	③灰白色。④ 12 世紀。5 と同一個体か。

1 区 54 号溝 (第 72 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	在地系土器 片口鉢	高 [5.2]	埋没土。口縁部片。	口縁部横撫で。外面口縁部下凹線状に浅く窪む。口縁部玉縁状で先端尖り気味。口縁部小さく内湾。	①夾雑物やや細粒で片岩混じる。③灰白色。器表灰色 (5YR6/1)。④ 13 世紀後半。

掘立柱建物 (第 108 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	古瀬戸 入子	口 [3.2] 底 [1.8] 高 0.7	38 号建物 P 1 内。 1/3 個体。	内面灰釉。底部回転糸切無調整。蓋のつまみ状を呈する。	③灰白色。④古瀬戸前Ⅲ～中Ⅱ期。
2	灰釉陶器 椀	台 [7.0] 高 [1.8]	27 号建物 P 1 内。 体部 1/8。底台部 1/3。	右轆轤。切り離し痕残らない。高台の取り付けは丁寧だが、外側に隙間顕著。内面平滑。	①素地普通。淡黒色の混入物やや多い。②還元焰、硬調。③灰白 5Y7/2 で断面まで一様。残存範囲に釉は見られない。
3	硯	長 [8.9] 幅 [9.5] 厚 [0.7]	29 号建物 P 1 内。	石製円硯の上面池部周辺の剥落破片。縁辺線刻は浅い。秋草意匠か。	③黒褐色。④重 90.7 g。池部使用による摩滅あり。墨痕は観察できない。

4 号柱列 P 4 内の銭貨は 276 頁に記す。

5 面ピット (第 131 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	古瀬戸 盤類	高 [2.8]	1a 区 492 号ピット埋没土。 体部小片。	外面顕著な轆轤目。内外面灰釉。	③灰黄色 (2.5Y7/2)。④古瀬戸後期様式。
2	古瀬戸 折縁深皿	口 [32.0] 高 [6.7]	1a 区 218 号ピット埋没土。 口縁部片。	口縁部外反した後、内面に折り返し段を形成する。端部上面窪む。内面から体部外面上位灰釉、内面下位以下刷毛塗り。	③灰黄色から灰白色。④古瀬戸後Ⅱ期。
3	在地系土器 内耳鍋	高 [12.9]	1a 区 828 号ピット埋没土。 口縁部から体部 3 片。	外面口縁部境指押さえ痕残る。内面口縁部境段差あるが稜は弱い。耳接合部残るが耳は欠損。	①夾雑物やや粗粒で片岩混じる。③黄灰色 (2.5Y5/1)。④ 15 世紀。
4	かわらけ	口 [10.8] 高 [1.8]	1b 区 11 号ピット埋没土。 口縁～体部片。	轆轤成形。口縁部小さく外反。器壁やや厚い。	①夾雑物細粒で雲母・片岩等含む。②やや軟調。③褐灰色～浅黄橙色 (10YR8/3)。④中世。
5	在地系土器 皿	口 [11.0] 底 [6.0] 高 2.6	1b 区 73 号ピット埋没土。 口縁 1/4～底部 1/3。	体部僅かに外反。内底平坦。左回転糸切無調整。	①やや細粒の安山岩質岩屑含む。③にぶい黄橙色 (10YR6/3)。④ 15 世紀中頃。
6	在地系土器 皿	口 [7.3] 高 [1.6]	1b 区 392 号ピット埋没土。 口縁～体部片。	小破片からの復元で径・傾き不安。轆轤成形。	①夾雑物やや細粒で片岩混じる。③にぶい褐色。④口縁上端に僅かな灯芯痕の付着あり。中世。
7	中国磁器 白磁碗	口 [14.0] 高 [2.9]	2a 区 156 号ピット埋没土。 口縁部小片。	口縁部肉厚の玉縁。外面口縁部以下回転篋削り。	③白色。④内面使用によると思われる釉葉の擦れ多い。11 世紀後半から 12 世紀。
8	龍泉窯系 青磁 皿	台 [11.2] 高 [1.9]	2a 区 162 号ピット埋没土。 図示部の 1/5。	底部内面貼付文。文様は双魚文か。体部外面蓮弁文か。高台端部を除き厚めに施釉。高台やや幅の狭い逆台形。底部器壁薄い。	③灰白色。④ 14 世紀から 15 世紀前半。

遺物観察表

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
9	砥石	長(10.3) 幅2.9 厚2.1	1a区119号ピット埋没土。ほぼ完成。	端部偏った位置に穿孔で提げ砥。4面使用。1面と両側面をほぼ平坦に使い、1面を凸面になる。凸面に鋭い擦痕。	①砥沢石。④重71.5g。敲打痕のような僅かな窪みあり。
10	砥石	長(5.8) 幅3.2 厚2.5	1a区68号ピット埋没土。1/2個体。	断面台形に近い4面使用。各使用面はほぼ平坦に使用。半欠品。	①砥沢石。④重71.3g

11・12の銭貨は276頁に記す。

5面土坑 (第142図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1a23坑-1	在地系土器 内耳鍋	高[2.1]	東寄り底面直上。体部下位から底部片。	平底。体部外面下端以上煤付着。	①夾雑物細粒で片岩混じる。③暗灰黄色(2.5Y5/2)。④中世。
1a23坑-2	砥石	長(3.7) 幅(3.6) 厚1.1	埋没土。端部片。	表裏と1側面を使用。表裏は面取りしたように縁部窪む。	①砥沢石。④重25.7g。
1b2坑-1	在地系土器 火鉢	高[7.8]	東壁際床直上。底部から脚部片。脚部分は完存。	底部は内耳鍋や焙烙と同様な作り。獸脚状の部貼付。	①夾雑物細粒で輝石混じる。③灰色(N5/0)から灰白色。器表黒色。④時期不詳。
2a48坑-1	在地系土器 片口鉢	高[5.3]	埋没土。体部下位片。	体部外面下位横位撫で。撫でより上位指押さえ痕残る。	①夾雑物やや細粒で輝石混じる。③灰黄色。④内面下半使用による摩滅顕著。中世。
2a56坑-1	常滑陶器? 壺	底高(8.0) [6.9]	埋没土2片。図示部の1/4。	器壁厚い。底部円盤上に紐作りで体部を作る。内面調整粗い。外面体部下端塗撫で。	③灰白色。器表灰褐(7.5YR5/2)から灰赤色。④中世か。
2b12坑-1	板碑	長(15.8) 幅(8.9) 厚1.9	埋没土。種子付近片。	天地不明。表面に断面V字状の彫りあり。種子に伴うものか。裏面は剥落すすみ削り痕残らない。	①緑色片岩。④重447g。
2b12坑-2	板碑	長(19.7) 幅(23.7) 厚2.8	埋没土。種子付近片。	表面の剥落すすみ、蓮座と脇付種子らしい彫りの深い部分のみ確認できる。裏面は剥落すすみ削り痕残らない。	①緑色片岩。④重2445g。

5面井戸 (第147～149図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1a1井-1	在地系土器 皿	底高6.1 [1.0]	埋没土。図示部の2/3。	左回転糸切無調整。糸切りのやり直し痕あり。底面平坦。	①夾雑物細粒で片岩混じる。③橙色(5YR6/6)。④中世。
1a1井-2	在地系土器 内耳鍋	高[5.7]	埋没土。口縁片。	内面下端明瞭な段差。内外面横撫で。口縁端部肥厚しない。端部上面凹線状に弱く窪む。	①夾雑物細粒で片岩混じる。③灰色(N4/0)からにぶい赤褐色。器表黒色。④15世紀後半。
1a3井-1	在地系土器 皿	口高(10.2) [3.7]	埋没土。口縁部から体部片	体部うねるように開く。残存少なく、口径や傾き不明瞭。	③明褐色(7.5YR7/2)からにぶい橙色。④14世紀後半か。
1a8井-1	木製品 椀	底高(6.2) [2.5][4.2]	同一個体と思われるが接合しない埋没土の2片。底部から体部片。	轆轤による削り物。高台部欠損あり。土圧で変形し、形状不明瞭。	①白木で塗りはない。④図示した2断面は接合しない2片の各断面を表わす。
1a10井-1	瀬戸陶器 輪壳皿	底高(7.7) [2.1]	埋没土。1/4個体。	内面から体部外面下位灰釉。見込み蛇の目釉剥。体部下位内湾。高台と底部外面中央丁寧に擦って平底に再加工。	③灰白色(2.5Y8/2)。④登窯5小期。
1a10井-2	在地系土器 内耳鍋	高[3.5]	埋没土。体部片。	器壁厚い。	①やや細粒で輝石混じりの夾雑物あり。③灰白色。器表灰(5Y6/1)から黒色。④中世。外面煤付着。
1a12井-1	在地系土器 内耳鍋	高[5.6]	埋没土。体部片。	内面撫で調整。外面指押さえ後粗い撫で調整。	①夾雑物細粒で輝石混じる。③灰白色。器表灰(N5/0)から黒色。④中世。外面煤付着。
1a12井-2	在地系土器 内耳鍋	高[4.8]	埋没土。体部上位片。	内外面撫で。外面上端口縁部境の凹線状横撫で。	①夾雑物少ない。③灰色(N6/0)。④中世。
1a14井-1	須恵器か 広口壺	高[9.5]	埋没土の2片。図示部の1/8。	外面丁寧な横位ナデで平滑。頸一肩部の接合なめらか。大型品としては薄手で特に肩部薄い。	①大型品としては緻密。1mm大の白色岩屑少量含む。②還元焰、やや硬調。③灰白7.5Y7/1で内外面一様。
1a16井-1	在地系土器 内耳鍋	高[11.4]	埋没土。口縁部～体部片	器壁厚い。口縁部横撫。体部外面指押さえ後、軽い撫で調整。体部内面撫で調整。口縁部内面下位明瞭な段差。口縁部外面外方に延び、端部上面窪む。	①夾雑物やや細粒で石英混じる。③黄灰色(2.5Y5/1)。外面器表灰色。④15世紀末から16世紀中頃か。
1a16井-2	在地系土器 内耳鍋	高[5.0]	埋没土。口縁片。	口縁部「S」字状に小さくうねり、端部外面は外方に突き出る。上面端部平坦。口縁部内面下位段差あり。	①細粒の夾雑物あり。③灰白色。器表灰色(N5/0)。④15世紀末から16世紀中頃か。
2b3井-1	渥美陶器 甕	高[1.6]	埋没土。口縁部小片。	口縁部上面薄い自然釉斑状にかかる。端部上面付近やや窪む。	③灰色。下面器表黒色。④12世紀後半。
2b3井-2	渥美陶器 甕	高[3.3]	埋没土。体部小片。	外面縦位撫でと凹線状の窪み。内面横位撫で。	③灰白色。外面器表灰色(N6/0)。④12世紀。

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
2b 3 井-3	須恵器か甕	高 [10.3]	埋没土。体部下位から底部片。	厚手。	④時期不詳。須恵器の可能性あり。
2b 3 井-4	渥美陶器甕	高 [7.5]	埋没土。体部片。	外面上部自然釉薄くかかる。内面横位撫で。	③灰色。④ 12 世紀。2 区 35 溝 3 等と同一個体の可能性。
2b 3 井-5	在地系土器片口鉢	高 [3.1]	埋没土。口縁部片。	口縁部内面窪み、内湾した玉縁状となる。口縁端部尖り気味。	①大粒チャートを散見する。③灰白色から灰色 (5Y4/1)。器表黒色。瓦質。④ 14 世紀。
2b 3 井-6	在地系土器片口鉢	高 [5.3]	埋没土。口縁部片。	口縁部内面緩い段差をなして窪む。口縁端部尖り気味で、口縁端部内面に突き出る。	①素地やや砂質で赤褐色鉱物を散見する。③灰白色。器表灰白色から灰色 (7.5Y6/1)。断面やや赤色味をおびる。④ 14 世紀。
2b 3 井-7	常滑陶器壺	高 [6.7]	埋没土。体部下位片。	内面指押さえ痕著に残る。外面下位窪削り。	③灰色。器表灰赤色。④中世以降。
2b 3 井-8	常滑陶器甕	高 [7.5]	埋没土。体部下位片。	内面下位自然釉かかる。内面指押さえ痕残る。	③灰色から褐灰色 (5YR5/2)。④中世。
2b 3 井-9	在地系土器片口鉢	高 [6.6]	埋没土。体部下位から底部片。	底部外面周縁高台状をなす。体部外面下端強い横位撫で、上位は指押さえ痕残る。内面使用による摩滅あり。 底部→	①細砂の多い素地。淡黒色鉱物の夾雑目立つ。③灰白色 (5Y6/1)。④中世。外面砂底。
1a 1 井-3	板碑	長 [24.8] 幅 [14.8] 厚 2.7 重 1905 g	埋没土。種子付近片。	表面は上端に梵字。蓮座を伴わないこと右側面が割れ口であることから左脇侍種子か。裏面は斫り痕が残存。	①緑色片岩。
1a 1 井-4	板碑	長 [21.8] 幅 [10.2] 厚 2.5 重 700 g	埋没土。種子付近片。	表面は上端に梵字。蓮座を伴わずアケ点見えない。4 と対になる右脇侍種子の可能性。	①緑色片岩。
1a 1 井-5	不明石製品	長 (25.3) 幅 (23.6) 厚 13.3	埋没土。1/3 個体前後か。	軸穴が無く、完成した上白ではない。石白未成品でなければ礎石のような用途も考えられるか。	①二ツ岳石。④礎石を想定した場合、上面にアタリの痕跡は認められない。重 6.15kg。
1a12 井-3	(下白)	長 [11.3] 幅 [6.9] 厚 [3.1]	埋没土。はんぎり部小片。	茶白形下白のはんぎり部分。	①粗粒輝石安山岩。④割れ口部分を含め全体に摩滅する。重 288 g。
1a16 井-3	石臼 (上白)	径 (28.2) 高 9.6 重 4006 g	上面 (底面 + 120cm) の 2 片。1/2 個体。	摩面溝は不規則な補修を行い、主溝が分からない。ふくみ 6 mm、芯棒受孔径 48mm 前後、深さ 25mm を測る。	①粗粒輝石安山岩。④芯棒受から半分は割れたもの。摩滅著しいが、偏減りは少ない。
1a16 井-4	板碑	長 (33.0) 幅 (19.9) 厚 2.7 重 3043 g	上面 (底面 + 110cm)。紀年銘付近破片か。	表面に文字か。釈文不明。裏面は剥落すすみ斫り痕は見えない。	①緑色片岩。
1a16 井-5	石鉢	径 26.6 高 25.6 重 6.36kg	底面 + 90cm の 3 片接合。3/4 個体。	側面は水輪に近い。内外面とも比較的平滑に仕上げる。外面底部も斫りにより上げ底状。	①粗粒輝石安山岩
1a16 井-6	不明石製品	長 37.8 幅 23.9 厚 17.1	中層埋没土。完形。	最大 6 cm 近い幅広の斫り痕残る。小口面に直径 7.2cm・深さ 4 cm 前後の孔を穿つ。孔内は側面・底面とも平滑。	①二ツ岳石。④古墳石室構築材を転用したものと思われる。重 13.2kg。

1号住居 (第 155・156 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	土師器高杯	口 (17.6) 高 [4.3]	東隅床直上の 12 片。図示部の 2/5。	外面縦位のナデ下に刷毛目が観察できる部分あり。内面ナデは刷毛目状の擦痕残る。	①素地やや粗い。輝石・濁白色岩屑等細かな夾雑物やや多い。②酸化焰。普通。③にぶい黄橙。外面に黒斑状の淡いムラあり。
2	土師器高杯	脚柱 4.2 高 [6.8]	中央やや東寄りの 2 片。図示部完損。	杯部は差込み接合。外面摩滅し整形痕不明瞭。縦位の磨き痕が僅かに残る。	①素地普通。チャート混じりの最大 3mm 大の岩屑やや多い。②酸化焰。やや硬調。③橙 7.5YR7/6。断面一部灰色味強い。④割れ口も摩滅する。
3	土師器高杯	脚上 3.6 高 [7.1]	中央西寄り、南に下がる傾斜部分。図示部完存。	内面に絞り痕著者でその上は無調整。	①素地普通。チャート散見する粗砂多い。②酸化焰。やや硬調。③黄褐 2.5Y5/3。内面黒色味強い。断面灰色味をおびる。
4	土師器高杯	脚裾 12.3 高 [3.1]	埋没土 5 片。裾部 2/3。柱部わずか。	裾裏側の刷毛目は 1 に近似。同一個体の可能性あり。	①②③ 20 に類似する。
5	土師器小型壺	口 (16.0) 頸 (10.8) 高 [5.3]	中央やや東寄りの 2 片。図示部の 1/2。	器面の摩滅著しく、成整形痕不明。	①素地普通。赤褐色鉱物・片岩混じりの粗砂やや多い。②酸化焰。普通。③にぶい橙 7.5YR6/4。断面灰色味をおびる。④
6	土師器小型壺	頸 (4.8) 胴 (8.0) 高 [5.4]	埋没土。図示部の 1/3。	外面弱い筒削り。内面は指頭による押圧に近い強いナデ。	①小型品としては素地粗く、細かな岩屑等の夾雑物も多い。②酸化焰。普通。③にぶい黄橙 10YR6/4。外面に黒斑広い。断面一部灰黒色。④
7	土師器甕	口 (16.0) 頸 (10.8) 高 [5.3]	埋没土。図示部の 1/8。	歪みある小破片からの復元で径・傾きとも不安。	①素地普通。2mm 大の赤褐色鉱物や長石等の混じる砂粒やや多い。②酸化焰。普通。③橙 7.5YR7/6。内面彩度低く、断面は灰黒色。
8	土師器壺	口 (29.4) 頸 (10.2) 高 [6.8]	中央床直上の 3 片。口縁 1/5、頸部 2/5。	厚手の二重口縁。内外面とも細かな縦位磨き。口縁外端は沈線状の窪みの上に細い棒状付が 5 ケ以上。	①素地普通。チャート・長石など雑多な鉱物混じる最大 2mm 大の岩屑多い。②酸化焰。普通。③にぶい褐 5YR5/3。内面彩度やや低く、広い黒斑あり。
9	土師器壺	頸 (10.4) 胴 25.1 底 6.5 高 [23.4]	南東寄り床直上の 47 片。頸~胴部 1/2。底部完存。	外面頸部に凸帯巡る。肩部に縦位刷毛目残る。斜位削り後に筒状工具によるナデ。内面は筒状工具による横位ナデ。外面若干器面摩滅し整形痕不明瞭。	①素地やや緻密。赤褐色鉱物・チャート混じりの微細な岩屑やや多い。②酸化焰。大型品としては良好。③橙 5YR6/6。外底付近に黒斑。

遺物観察表

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
10	土師器壺	口 12.7 頸 10.5 胴 16.5 底 5.4 高 18.1	南東寄り床直上。 外底に剥落あるが、ほぼ完形。	外面原体 RL・幅 3cm 前後の 6 段の縄文帯を時計回りに施文。内面ナデと横位の粗い磨き。	①素地やや緻密。濁白色の 1mm 大の岩屑混じる。②酸化焰。ごく硬調。③橙 7.5YR7/6。彩度・明度の低いムラ多く一様でない。断面灰黒色。④吉ヶ谷・赤井戸系。
11	土師器鉢	高 [3.1]	土坑埋没土。 口縁細片。	外面原体 LR の縄文施文。10 とは別個体。	①素地普通。微細な砂粒を少量含む。②酸化焰、普通。③橙 7.5YR7/6 でほぼ一様。
12	土師器壺	口 (13.2) 頸 (10.0) 高 [7.1]	P 1 底面 + 3cm。 図示部の 1/3。	器面荒れて整形痕不明瞭。口縁内面の接合痕を無調整で残し、丁寧な造りではない。内面に指頭状の圧痕残る。	①素地普通。赤褐色鉱物や 2mm 大の片岩含む岩屑やや多い。②酸化焰、普通。③灰黄褐 10YR6/2。内面橙色味をおびる。④二次被熱と風化で器面荒れ顕著。
13	土師器甗	口 12.7 ~ 13.3 胴 (16.8) 高 [4.3]	南東寄り床直上の 13 片。 口縁～肩部ほぼ完存。胴部若干。	口縁外面一条づつ 3 段の輪積み整形で、内面は篋先による横位ナデ。体部は状半で横位・下半で縦位の篋割り。体部内面のナデは接合痕を消しきれない。	①微細砂多い素地。夾雑物は少ない。②酸化焰。③灰黄褐 10YR5/2。内外面とも赤・黒色味をおびるムラ強く一様でない。④破損後に被熱。
14	土師器壺	胴 (17.6) 頸 11.2 底 5.0 高 [15.2]	南東寄り床直上の 18 片。 頸～胴部 1/2。底部完存。	わずかに上げ底状。外面削りの上に粗い磨き。内面の篋状工具によるナデ痕には刷毛目状の擦痕顕著。	①素地普通。パミス散見する細砂以外の夾雑物少ない。②酸化焰、普通。③灰黄褐 10YR6/2。外面下半黒色味をおびる。④一部に破損後の被熱痕。
15	土師器甗	口 14.4 頸 13.2 胴 (23.0) 高 [13.9]	東寄り床直上 24 片。 口縁～頸部完存。胴上半 1/2。	頸部～肩部肥厚。内外面とも整形粗く、接合痕を消しきれない。	①素地やや粗い。赤褐色鉱物・粗砂等 1mm ほどの夾雑物多い。②酸化焰、普通。③灰黄褐 10YR5/2。黒・黄色味おびるムラあり一様でない。断面黒色味強い。
16	土師器台付甗	口 (19.0) 頸 (16.4) 高 [6.7]	西寄り床直上の 2 片。 口縁 1/2。肩部 1/3。	厚手。外面は一般的な S 字口縁素地とは逆の右斜行の細かな刷毛目。模倣品か。	①素地普通。赤褐色鉱物・輝石等微細な雑多な夾雑物混じる。②酸化焰、やや硬調。③にぶい橙 7.5YR7/4。断面黒色味をおびる。
17	土師器台付甗	口 (18.0) 頸 (16.2) 高 [4.2]	中央、想定床面下 7cm の 6 片。 図示部の 1/3。	薄手。シャープな S 字状口縁。外面斜位の上に横位の細かな刷毛目。内面縦位の強いナデ。	①素地普通。1mm 大の黄白色岩屑目立つ粗砂やや多い。②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙 10YR6/3 で内外面ほぼ一様。断面灰黒色。
18	土師器台付甗	口 (17.8) 頸 (16.2) 高 [5.5]	中央西寄り、南に下がる傾斜部分の 3 片。 図示部の 1/3。	やや厚手。16 に同巧。外面頸部直下に刷毛目をナデ消すような横位ナデ痕が巡るが、意匠か無意図か不明。	①素地やや緻密。濁白色岩屑や赤褐色鉱物混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、硬調。③灰白 10YR8/2。内外面ほぼ一様。断面灰黒色。
19	土師器台付甗	口 17.6 頸 (15.8) 高 [7.1]	西寄り床直上の 24 片。 口縁 3/4 肩部 1/2。	口縁部のみやや厚手。刷毛目やや粗い。内面に指頭痕状のナデ痕。	①素地普通。赤褐色鉱物粒や円磨された 1mm 未満の岩屑やや多い。②酸化焰、普通。③黄褐 2.5Y5/3。内面淡く、断面黒色味をおびる。
20	土師器甗	口 (13.2) 胴 (17.4) 高 [16.4]	散在する 23 片。 口縁わずか。体部 2/5。	単口縁の台杯甗か。体部外面粗い刷毛目。内面篋状工具のナデで上半のみ刷毛目状の擦痕残る。	①ボソボソした軽量の素地。赤褐色鉱物・粗砂等最大 2mm ほどの夾雑物やや多い。②酸化焰、普通。③灰黄褐 10YR6/2。黒・赤色味を帯びたムラ多く一様でない。
21	土師器台付甗	台上 5.5 下 9.7 高 (6.1)	東寄りの床直上。 図示部ほぼ完存。	厚手でやや重量。台部折り返し。外面縦位削りは刷毛目認められず。内面篋状工具による幅広ナデに刷毛目状の擦痕。	①素地普通。灰黄色粗砂・赤褐色鉱物等少量含む。②酸化焰で比較的硬調。③灰黄褐色でほぼ一様。
22	土師器台付甗	台上 6.3 高 [5.9]	P 1 底面 + 5cm。 図示部完存。	やや厚手。上下とも端部は平行に割れており、人為的に調整した可能性。研磨なし。	①素地普通。白色鉱物目立ち、赤褐色鉱物散見する粗砂やや多い。②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙 10YR7/4。内面彩度低い。外面に淡い黒斑あり。
23	土師器台付甗	胴 (24.6) 台上 5.6 高 18.3	東隅床直上の 48 片。 図示部の 1/2。	図示部以外にも刷毛目は見えない。21 とは別個体であろう。	①微細普通。チャート・片岩混じりの雑多な夾雑物やや多い。②酸化焰、普通。③灰褐 7.5YR5/2。外面下半赤色味強い。④内底付近に付着物あり。
24	土師器台付甗	台上 5.6 高 [15.8]	中央床直上の 21 片。 図示部の 1/2、底部完存。	19 に同巧か。	①②③ 1 に類似する。

2号住居 (第 158 図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	須恵器有台椀	口 14.1 底 6.2 高 [4.5]	カマド内火床直上の 4 片。 高台を除き完存	右轆轤→回転糸切→高台取付。外面に接合痕残る。薄手。やや歪みあり。高台部分剥離後研磨し無台土器として使用。	①ボソボソした素地。片岩混じりの岩屑やや多い。②還元やや不十分。③灰黄褐。黄色味・黒色味おびるムラあり。④器面やや摩滅。
2	須恵器杯	口 (13.2) 底 6.0 高 3.7	カマド前面床直上の 4 片。 口縁 2/5、底部完存。	右轆轤→回転糸切無調整。外面のみ轆轤痕強い。薄手だが底面のみやや厚い。やや歪みあり。	① 1 に類似。岩屑やや多く、片岩目立つ。②良好だが還元不十分。③灰黄 2.5Y7/2。外面黄色味おびる。内底重ね焼き痕が黒斑状に残る。
3	須恵器杯	口 13.1 底 4.1 高 5.8	南壁際床直上。 1/2 個体。	右轆轤→回転糸切無調整。底部やや厚い。外面轆轤痕強く内面平滑。薄手。やや歪みあり。	① 1 に類似。片岩混じりの岩屑やや多い。②還元焰、普通。③黄灰 2.5YR6/1。内面は黄色味おびる。
4	須恵器有台椀	口 14.6 台 6.9 高 5.3	南壁際床直上の 9 片。3 に並ぶようにして出土。 口縁 3/5、底部完存。	右轆轤→回転糸切→雑な高台取付。高台は小さく低い。内面平滑。	①ボソボソした素地。細砂の混入やや多い。②還元不十分で軟調。③にぶい橙 7.5YR。内面中心に吸炭目立ち、断面でも黒色味強い。④内面に付着物あり。
5	須恵器有台椀	口 (15.6) 台 6.8 高 5.9	カマド内。 口縁若干、体部下半以下完存。	右轆轤→回転糸切→回転利用のやや丁寧な高台取付。轆轤痕は細かく、内面は平滑。	①ボソボソした素地。片岩混じりの岩屑やや多い。②還元やや不十分だが普通。③灰黄褐。赤色味・黒色味おびるムラあり。④破損後に二次被熱。
6	須恵器有台椀	台 6.8 高 [4.3]	西壁寄り床直上の 2 片。 口縁欠く。下半完存。	右轆轤→回転糸切→回転利用のやや雑な高台取付。轆轤痕は細かく、内面は平滑。薄手。高台は幅太。	①ボソボソした素地。岩屑やや多く片岩目立つ。②還元やや不十分だが普通。③灰黄褐。重焼き痕が黒斑となる。④表面の粘土剥がれ、ザラザラした器面となる。
7	須恵器有台椀	台 (5.8) 高 [1.2]	埋没土。 底部完存。台 2/3 欠く。	右轆轤→回転糸切→雑な高台取付。高台は小さく低い。	①ボソボソした素地。尖った岩屑含む。②還元焰普通。③灰黄褐。内外面に黒斑状の重焼き痕。
8	須恵器甗		埋没土 3 片。 肩部破片。	轆轤使用不明瞭。内面もナデの跡は明確でない。大型品としては薄手。表面に釘か刀子など金属製品で描いたと思われる意匠不明の細い線刻。	①細砂の多いややザラザラした素地。チャート混じりの岩屑含む。②還元焰普通。③灰白 5Y7/1 で断面まで一様。④器面全体に摩滅。

No.	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
9	須恵器 広口壺	口(22.0) 高[3.6]	埋没土2片+カマド1片。 図示部の1/3。	右轆轤か。比較的端正な造り。	①素地やや緻密。2mm大の岩屑含む粗砂やや多い。②還元不十分だが良好。③にぶい黄橙。赤色味おびるムラあり。④
10	土師器 甗	口(20.0) 高[6.7]	住居中央南寄り床直上2片+埋没土1片。 図示部の1/3。	やや薄手。外面頸部下端に接合痕顕著。内面は丁寧なナデで平滑。	①甗類としては緻密。細砂の混入やや多い。微細な赤褐色鉱物や輝石類混じる。②酸化焰、普通。③にぶい褐7.5YR5/3。内外面ほぼ一様。
11	土師器 甗	口(18.8) 高[5.8]	カマド掘り方。 図示部の1/5。	口縁シャープなコの字状。やや薄手。外面頸部に指頭痕状の窪みが並ぶ。丁寧なナデで内面平滑。	①素地やや緻密。1mm未満の白色夾雑物等少量含む。②酸化焰、やや硬調。③明褐7.5Y5/6。内外面ほぼ一様。

3号住居(第159図)

No.	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	須恵器 有台椀	口13.3 台6.4 高5.1	住居南寄り床直上3片。 口縁3/5。底部完存。	右轆轤→回転糸切→回転利用やや丁寧な高台取付。轆轤痕弱い。やや厚手で重量。ポツテリしている。	①素地普通。片岩混じりの粗砂やや多い。②還元焰気味、普通。③灰黄褐。外面黒色味強く、口縁で赤色味おびる。
2	須恵器 有台椀	口(14.8) 台7.6 高5.5	北東隅壁外の2片。 口縁1/6、底部1/2。	右轆轤→回転糸切→回転利用やや丁寧な高台取付。内面平滑。やや薄手で底部特に薄い。	①素地普通。片岩混じりの岩屑・淡黒色鉱物粒・粗砂等雑多な夾雑物やや多い。②還元焰、普通。③黄灰。断面までほぼ一様。
3	須恵器 有台椀	底(6.0) 高[1.8]	カマド前面床直上。 図示部の1/2。	右轆轤。切り離し痕確認できない。内面平滑。高台部分剥離後研磨し無台土器として使用。(2住-1に類似)	①素地普通。細砂やや多くザラザラしている。②還元焰気味、普通。③浅黄。黒色味・黄色味おびるムラあり一様でない。
4	土師器 台付甗	台8.8 高[4.9]	21A-13C。 図示部ほぼ完存。	内底部不整。台部の取付は丁寧。台上端に沈線を巡らす。台部の座りも良く、丁寧な造り。	①素地普通。細砂やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄褐10YR5/3。断面赤色味おびる。
5	土師器 甗	口(20.4) 高[7.6]	カマド前北脇床直上。 図示部の1/6。	コの字口縁と思われる。小破片からの復元で径・傾きとも不安。内面平滑。外面の削りも細かく丁寧。	①素地普通。赤褐色鉱物粒混じりの細砂含む。②酸化焰、硬調。③にぶい褐7.5YR5/4。内面やや黒色味おびる。

井戸出土土器(第161図)

No.	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	土師器 壺	口19.9 頸10.8 胴27.7 底9.7~10.2 高[5.1]	2a区166号井戸底面。 完形(割れなし)。	外面削りは丁寧だが、深い擦痕が残る。内面も平滑で頸部の接合痕も観察できない。底部に離れ残るの痕跡あり。緑部に焼成前に付着した粘土砂の。	①大型品としては素地緻密。チャート・赤褐色鉱物を散見する砂粒含む。②酸化焰、普通。③浅黄2.5YR7/3。外面に黒斑あるが、他はほぼ一様。
2	土師器 高杯	脚柱4.1 高[5.7]	2a区166号井戸埋没土。 口縁下端1/3、底部完存。	厚手。外面細かく強い縦位篋磨き。孔は脚上位に水平に近く穿つ。3ヶか。	①素地普通。3mm大の片岩を散見する砂粒含む。②酸化焰、普通。③にぶい橙7.5YR6/4。内面灰色味おびる。④内底部剥落顕著。
3	土師器 高杯	脚柱(2.8) 脚裾10.7 高[6.7]	2a区169号井戸底面直上。 図示部完存。	外面磨きに近い幅狭で丁寧な削りの上に裾部で強いナデ。内面も工具使用のナデで平滑に仕上げる。	①素地普通。赤褐色鉱物の目立つ砂粒含む。②酸化焰、やや硬調。③にぶい橙7.5YR6/4。赤色味・黒色味おびる弱いムラあり。断面灰色味をおびる。
4	土師器 甗	口(13.8) 頸(12.4) 高[5.6]	2a区171号井戸埋没土2片。 図示部の2/5。	口縁は強いナデで内面に刷毛目僅かに残る篋状工具痕。やや厚手。外面肩部斜位の上に縦位刷毛目。	①素地普通。やや大粒の岩屑散見。赤褐色鉱物・パミス混じりの砂粒少量含む。②酸化焰、普通。③にぶい橙7.5YR6/4。口縁部以外は内外面とも彩度低い。
5	土師器 台付甗	台上5.1 台下8.4 高[13.4]	2a区171号井戸底面+35cmの3片。 胴下1/3、台部2/3。	脚内端折り返し。脚外面刷毛目上に縦位指頭ナデ消し。薄手で軽量。	①素地普通。砂粒やや多い。②酸化焰、普通。③灰褐7.5YR5/2。黄色味・黒色味おびるムラ多く一様でない。断面黒色味強い。④外面煤付着。
6	土師器 台付甗	台上5.4 台下8.5 高[6.1]	2a区171号井戸底面+40cm。 図示部完存。	底部厚い。脚内端折り返し。脚外面刷毛目上に幅狭の縦位指頭ナデ消し。薄手で軽量。	①素地普通。径3mm大の岩屑散見する砂粒やや多い。②酸化焰、普通。③灰黄褐10Y67/2。赤色味・黒色味おびるムラ多く一様でない。断面黒色味強い。

土坑出土土器(第163図)

No.	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1a44坑-1	土師器 小型壺	口(7.2) 頸(6.7) 高6.5	1a区44号土坑底面+15cm。口縁~肩部の1/2欠き、他は完存。	丸底。外面磨きに近い細かな削り。内面頸部は接合痕明瞭。体部は強いナデで比較的平滑に仕上げる。薄手で軽量。	①素地普通。赤褐色鉱物・輝石・パミス混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙10YR7/4。外面に淡い黒斑あり。内面灰色味強い。
1a44坑-2	土師器 小型壺	頸(7.2) 底2.5~3.1 高6.5	1a区44号土坑上層。 口縁若干、体部1/3、底部完存。	外底わずかに平底。外面削り粗く、頸部付近で無調整。内面は篋状工具使用の鋭いナデで平滑に仕上げる。	①素地普通。赤褐色鉱物・輝石・パミス混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい橙7.5YR6/4。外面ほぼ一様で内面に黒斑あり。断面灰黒色。
1a44坑-3	土師器 台付甗	口(18.0) 頸(16.0) 高[4.6]	1a区44号土坑埋没土。 口縁~肩部1/6。	外面縦位刷毛目は強く深い。その上の横位刷毛目は弱い。内面板状工具小口のあたり痕散見。	①素地普通。赤褐色鉱物やチャートなど1mm未満の岩屑少量含む。②酸化焰、やや硬調。③灰黄褐10Y5/2。内面淡く、断面黒色味強い。
1a44坑-4	土師器 壺	胴(29.6) 底(10.2) 高[12.4]	1a区44号土坑底面+12cm。図示部の1/3。	輪高台状の底部で断面に接合痕明瞭。	①素地普通。赤褐色鉱物・チャート混じりの粗砂多い。②酸化焰、普通。③橙7.5YR7/6。外面淡い黒斑状のムラあり。内面彩度低い。
2a47坑-1	土師器 壺	口7.7 頸6.9 胴10.6 底3.8 高11.0	2a区47号土坑底面直上。 完形。	歪みあり。底部は僅かに輪高台状。外面横位の弱い削りは刷毛目状の擦痕残る。その上に縦位のナデ。	①素地ややシルト質。赤褐色鉱物・輝石・パミス等雑多な夾雑物を少量含む。②酸化焰、普通。③にぶい橙7.5YR7/4。外面黒斑あり。④欠損は調査時のもの。

遺物観察表

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
2a47	坑-2 土師器 台付甕	口(15.4) 頸(13.6) 高[5.8]	2a区47号土坑埋没土。 口縁~肩部1/6。	肩部上半に斜位の上から横位の刷毛目。	①素地普通。赤褐色鉱物やチャートなど1mm未満の岩屑少量含む。②酸化焰、硬調で焼き締まる。③明褐色7.5YR7/2。内面灰色味をおび、断面一部で灰黒色。
2a47	坑-3 土師器 台付甕	胴(13.7) 台上4.9 高[13.7]	上層の4片。 胴部下半2/3。底~台部上半 完存。	外面刷毛目やや強く深い。台部刷毛目は縦位の 帯状。内面指頭痕状の凹凸。	①素地普通。輝石混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄褐10YR5/3。外面は胴部で黒色味、台部で赤色味をおびるムラ多い。内面明度低い。
2b1	坑-1 土師器 小型壺	口(10.4) 高[4.2]	2b区1号土坑埋没土。 図示部の1/6。	薄手。内面筒先による従位の細かな磨き。外面 にもわずかに磨きの痕跡が残るが、内面より 幅広くである。	①素地やや砂質で1に近い。②酸化焰、普通。③浅黄橙7.5YR8/3。内外面に灰色味をおびるムラ。断面彩度低い。
2b1	坑-2 土師器 台付甕	口(13.8) 頸(12.0) 高[4.3]	2b区1号土坑埋没土3片。 口縁1/3、肩部若干。	薄手。斜位の上に横位の刷毛目。内面は指頭 痕状の弱い凹凸。	①素地普通。赤褐色鉱物・輝石を散見する粒径不揃いの砂粒を含む。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙10YR7/3。外面に灰色味の強い斑状のムラあり。断面一部灰黒色。
2b1	坑-3 土師器 台付甕か	口(13.8) 頸(12.0) 高[4.3]	2b区1号土坑。 図示部の1/6。	口縁上端は面取りしたように平坦で、中央が 僅かに窪む。内面板状小口による横位の粗い ナデ。	①素地やや砂質。粒径不揃いの濁白色鉱物を含む。②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙10YR7/3。口縁内面やや赤色味をおびる。
2b1	坑-4 土師器 壺	口(15.8) 頸(10.4) 高[4.2]	2b区1号土坑埋没土。 図示部の1/8。	薄手。摩滅すすみ整形痕不明瞭。外面横位ナ デの下に細かな刷毛目が部分的に見られる。	①ややシルト質の素地。赤褐色・濁白色鉱物混じりの砂粒をやや多く含む。②酸化焰、普通。③にぶい橙5YR6/4。断面一部灰色味をおびる。
2b1	坑-5 土師器 台付甕	台上5.8 台下9.2 高[6.7]	2b区1号土坑埋没土9片。 図示部の4/5。	外面刷毛目の上に縦位のナデ消し。底部下端 は比較的平坦。外底には粗砂の多い粘土目立 つ。	①素地普通。輝石・濁白色鉱物を散見する砂粒やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい褐7.5YR6/3。外面赤色味をおびるムラあり。④内底に小規模だが煤状付着物あり。
2b11	坑-1 手捏ね	底(2.8) 高[1.7]	2b区11号土坑埋没土。 図示部の1/2。	外面指頭痕状の凹凸。ナデの痕跡見えないが 器面は比較的平滑。内面は不整で爪先の押圧 痕が残る。	①素地やや粗い。夾雑物少ない。②酸化焰、やや軟調。③灰黄褐10YR4/2。外面黒色味おびる。
2b11	坑-2 土師器 鉢	口(6.4) 底3.1 高3.7	2b区11号土坑底面+29cm の2片。 体部1/4、底部完存。	底部厚い。口縁部は内傾し、内側に指頭痕残 る。外面体部はやや鋭い削り。	①素地普通。輝石・1mm大の岩屑混じりの砂粒やや多い。②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙10YR7/3。内外面赤彩で黒斑も目立つ。断面黒色味強い。
2b11	坑-3 土師器 台付甕	口12.0 頸10.9 胴17.5 高[13.2]	2b区11号土坑底面+31cm の19片。 図示部ほぼ完存。	薄手で軽量。刷毛目は明瞭。内面下半には指 頭による斜位のナデ、上半は板状工具による 雑なナデ。	①素地普通。濁白色鉱物混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙10YR6/3。下半で黒色味強い。④内面に付着物あり。

2b区ピット出土土器 (第164図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
P1-1	土師器 壺	口(13.6) 頸10.4 高[12.9]	2b区1ピット埋没土17片。 口縁1/2。体部上半2/3。	外面縦位の粗く強いナデ。内面横位のナデも 強いが、接合痕を残す。	①素地普通。チャート、輝石、赤褐色鉱物等不揃いの夾雑物やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙10YR7/3。外面に淡い黒斑あり。
P13-1	土師器 小型壺	頸(8.7) 底(4.9) 高[6.5]	2b区13ピット底面+3cm の2片。 図示部の1/2。	平底。外面削り粗く、成形時の凹凸消しきれ ない。内面指頭の粗いナデで器面平滑さ欠く。	①柔らかな素地。輝石散見。夾雑物少ない。②酸化焰、普通。③灰白10YR8/2。外面に黒斑あり。断面灰黒色味強い。内面残存状態良く、赤彩はにぶい赤色。
P13-2	土師器 杯	口11.3 高4.1	2b区13ピット底面+3 cm。 完形。	外面細かく強い削りの後、口縁部強いナデ。 無調整部分を僅かに残す。口縁波状に歪む。	①素地普通。輝石・粗砂を少量含む。②酸化焰、硬調。③橙5Y7/6。外底灰色味おびる。④内面斜位に焼成後のキズあり。
P18-1	土師器 甕	口13.3 底6.4 胴14.3 高16.1	2b区18ピット底面直上。 ほぼ完形。	外面細息長い強い削り。底部削りは方向不定 で雑。内面ナデは丁寧。頸部に接合痕明瞭に 残す。	①素地普通。片岩混じりの岩屑をやや多く含む。②酸化焰、普通。二次被熱か。③橙5YR6/6。黒色味おびるムラ多く一様でない。④内面横倒し状態での付着物あり。

遺構外遺物 (縄文時代石器) (第165図)

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	尖頭器	長[3.4] 幅1.6 厚0.45	1a区30S-13G(5号畠 内)。両端欠く。	基部側でも厚み増さない。	①チャート。④重2.8g。
2	石鏃	長2.0 幅1.1 厚0.4	1a区21A-13G。 ほぼ完形。	凹基無茎。自然面を残さない。	①チャート。④重0.8g。
3	石鏃	長2.2 幅2.1 厚0.35	2a区31D-9G(18号溝 上層埋没土)。完形。	凹基無茎。自然面を残さない。	①黒色安山岩。④重1.2g。
4	打製石斧	長9.4 幅4.6 厚1.5	2b区集石内。 1端部を欠く。	川原石から製作したと思われる、両面に自然面 を残す。短冊形。	①硬質泥岩。④重74.4g。
5	打製石斧	長12.1 幅7.7 厚1.2	1a区30T-19G(P833 内)。完形。	川原石から製作した扁平な材で、自然全面広 い。撥形。	①頁岩。④重114.3g。
6	打製石斧	長13.5 幅6.8 厚2.8	2b区集石内。 完形。	川原石から製作。1面に自然面を残し、3面 に加工痕。	①硬質泥岩。④重286.0g。新しい剥離のため不明瞭。
7	スルガク	長8.4 幅6.3 厚1.2	2b区集石内。 完形。	扁平な材。明瞭な加工痕は1面のみ。4面全 面に使用痕。	①珪質準片岩。④重85.6g。
8	石核か	長5.8 幅7.1 厚2.7	2a区11号溝埋没土。 完形。	自然面を残さない。	①硬質泥岩。④重123.8g。新しい剥離のため不明瞭。
9	不明	長13.5 幅4.5 厚1.9	1a区微高地。 一部剥がれる。	川原石の両側面に抉りを作る。敲打痕なし。 錘の可能性。	①緑色片岩。④重183.5g。
10	敲石	長14.2 幅5.8 厚5.0	2a区36号溝埋没土内。 完形。	上下両側に細かな敲打痕。	①砂岩。④重610.7g。

遺構外遺物 (弥生土器から古式土師器) (第 166 図)

No.	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	壺	高 [3.0]	2a 区 145 号土坑埋没土。肩部片。	篋状工具による平行沈線方形文(コの字重ね文)。内面は指頭痕状の凹凸。	①粗砂の夾雑目立つ。②酸化焰、やや硬調。③褐灰 7.5YR4/1。内面・断面黒色味強い。④弥生中期。器面やや摩滅する。
2	土師器 甗	高 [3.1]	2a 区 40 S-9 G。口縁片。	内面ナデの後に円形スタンプ文の深い窪みあり。	①素地やや砂質。赤褐色鉱物・輝石等の混じる粗砂多い。②酸化焰、硬調。③にぶい黄橙 10YR7/2。内面・断面彩度低い。
3	甗	高 [3.0]	2a 区 6 面 31 A-10 G。口縁小片。	薄い折り返し口縁。上端に篋による窪み。縄文は細かな L R。	①素地普通。微細で雑多な岩屑を少量夾雑する。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 10YR6/3。黒斑広い。④器面摩やや減進む。
4	鉢か甗	高 [5.2]	2a 区 166 号井戸埋没土。胴部片。	縄文 L を横位施文。内面粗いナデ。	①褐色・乳白色の岩屑の夾雑やや多い。②酸化焰、普通。③灰黄褐 10YR4/2。内面にぶい黄橙 10YR7/2 で一様。④弥生中期前半か。
5	(樽式か) 壺	高 [6.9]	2a 区 40 Q-8 G 2 片。肩部片。(同一個体らしい破片多い)	外面縄文らしい痕跡残るが不明瞭。斜格子充填の鋸歯文。	①素地砂質でやや粗い。1 mm 大の濁白色岩屑多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 10YR7/3。外面灰色味をおびるムラあり。内面灰色部分広い。④内面の剥落すずむ。
6	甗	高 [5.4]	2a 区 40 S-9 G 3 片。胴部片か。肩部片の可能性。	外面 R L 横位縄文帯を廻す。内面摩滅進み不明瞭。	①素地ややシルト質。最大 3 mm の岩屑の混入多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 7.5YR6/4。④吉ヶ谷・赤井戸式。外面僅かに煤付着。
7	甗か	高 [2.6]	2a 区 143 号土坑埋没土。体部小片。	器種不明。煤の付着より甗を想定。縄文は附加状 2 種 (R+r)。内面摩滅し不明。	①素地緻密。赤褐色鉱物散見する以外夾雑物少ない。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 5YR6/3 で内外面ほぼ一様。断面明度高い。④関東地方北東部系。外面僅かに煤付着。
8	甗	高 [3.2]	2a 区 7 面 40 Q-9 G。頸部片。	頸部に 3 連止め簾状文(時計まわり)。内面横磨き。	①素地緻密だが、1~2 mm 大の岩屑の夾雑目立つ。②酸化焰、やや硬調。③黄灰 2.5Y4/1。外面淡黄色味強い。④樽式。風化進む。
9	壺	高 [3.1]	2a 区 40 Q-8 G。肩部上位片。	櫛描き波状文と 4 本以上の直線文。内面は細かな刷毛目。	①素地普通。輝石・濁白色鉱物等微細で雑多な夾雑物多い。②酸化焰、やや硬調。③橙 7.5YR6/6。断面彩度低い。④東海系。
10	甗	口 (17.0) 頸 (15.2) 高 [3.9]	2a 区 31 A-5・6 G の 2 片。図示部の 1/3。	5 の字口縁。外面 5 条の擬凹線。内面板状小口による横位ナデ。	①素地やや緻密。赤褐色鉱物・チャート等 1 mm 第の夾雑物やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 5YR7/4。④同一個体らしい破片あり。北陸系。
11	壺	口 (28.5) 頸 (18.4) 高 [3.9]	2a 区 40 Q-8 G 8 片。肩部片。(同一個体らしい破片多い)	厚手の折り返し口縁。内外面とも LR+RL の羽状縄文。外面頸部は縦位磨きか。肩部に縄文末端結節部の押捺痕見られる。	①素地やや粗い。黄白色鉱物等 2 mm 以下の岩屑多い。②酸化焰、ややしまり欠く。③にぶい黄橙 10YR7/2。内面灰黒色。④内面頸部付近摩滅すずむ。東海東部から南関東系。

遺構外遺物 (1 区古墳時代) (第 167・168 図)

No.	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	土師器 鉢	口 (12.2) 高 [4.7]	1a 区 30 T-18 G 4 片。図示部の 1/6。	外面削り弱いが平滑。内面も一部に刷毛目の残るナデで平滑に仕上げる。	①シルト状の微細な素地。赤褐色鉱物含む砂粒少量含む。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 7.5YR6/4。断面灰黒色。
2	土師器 鉢	口 (13.0) 高 [4.8]	1a 区 30 T-19 G。図示部の 1/6。	外面底部付近で幅細の削り。内面ナデで平滑に仕上げる。	①シルト状の微細な素地。赤褐色鉱物・輝石混じりの砂粒少量含む。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 5YR6/4。内面彩度低く、断面一部灰黒色。
3	土師器 杯	高 [4.1]	1a 区微高地 15 片。口縁端部欠き、他はほぼ完存。	底部は無調整部分が広い。厚手で重量。	①素地普通。赤褐色鉱物粒や最大 3 mm 大の片岩含む不揃いの岩屑やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 7.5YR6/3。内外面ほぼ一様。
4	土師器 埴	口 (9.8) 高 [3.9]	1a 区 45 号溝埋没土 5 片。図示部の 1/5。	外面篋状工具による削りは鋭さ欠きナデに近い。	①素地普通。輝石・赤褐色鉱物等の混じる砂粒を含む。②酸化焰、普通。③にぶい赤褐 5YR5/4。内外面ほぼ一様。
5	土師器 高杯	口 (15.4) 高 [3.8]	微高地。図示部の 1/8。	外面縦位の削り後、横位の篋状工具の弱いナデのような痕跡が部分的に認められる。	①素地普通。輝石・濁白色鉱物混じりの細砂やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 10YR7/3 で内外面一様。
6	土師器 壺	頸 6.6 胴 16.9 高 [12.7]	1a 区 30 T-18 G の 5 片。頸~胴部 2/3、底部完存。	内面肩部の幅広のナデは丁寧で磨きに近いが、胴下半では雑。内面ナデも雑で接合痕を所々に残す。	①素地普通。チャート・赤褐色鉱物混じりの砂粒やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 5YR6/3。外面黒斑あり。断面灰色味をおびる。
7	土師器 壺	口 (14.0) 頸 (6.4) 胴 26.3 高 18.8	1a 区 30 T-14 G 20 片。図示部の 2/5。	底部は平底気味。器面摩滅し整形痕不明瞭。頸部内面に接合痕を残す。	①素地普通。赤褐色鉱物混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、普通。③橙 7.5YR6/6 で内外面ほぼ一様。断面彩度低い。
8	土師器 器台	脚裾 (9.6) 高 [4.6] 孔 1.2 底部孔 0.6	微高地。図示部の 1/3。	孔は 3 ケか。底部孔は中央から若干外れる。	①素地やや緻密。2 mm 大の岩屑散見するが他の夾雑物まれ。②酸化焰、普通。③浅黄 2.5R7/3 ではほぼ一様。外面赤彩部は赤褐色。
9	土師器 高杯	脚裾 (11.8) 高 [2.7] 孔 1.1	微高地。図示部の 1/3。	外面丁寧な縦位磨きで裾部を横位。なる。内面工具ナデは刷毛目状の擦痕残る。孔配置は不規則だが 4 孔となろう。	①素地普通。輝石・濁白色鉱物混じりの細砂やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 10YR7/3。外面灰色味をおびるムラや黒斑あり。内面は黒色味をおびる。一様でない。
10	土師器 器台	脚裾 (13.8) 高 [3.3]	1a 区 10 号井戸埋没土。図示部の 1/8。	薄手。裾部に爪先のような鋭い工具にとる 2 条の連続する弧状施文。	①素地普通。輝石混じりの 1 mm 大の岩屑多い。②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙 10YR7/3。外面に黒色味の強いムラあり一様でない。

遺物観察表

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
11 土師器 鉢	口(13.6) 底 3.9 高 5.6	1a区 23号溝埋没土4片。 口縁1/8、底部完存。	丁寧な整形で内面平滑。外面乾燥の進んだ状態で細かな削り。口縁に強いナデ。	①素地普通。パミス混じりの砂粒を少量含む。②酸化焰、普通。③浅黄 2.5Y7/3。外面黒斑あり。他はほぼ一様。
12 土師器 高杯	脚裾(11.0) 脚柱 3.2 高 [10.5]	1a区 30 T - 18 G 4片。 口縁下半 2/3、脚柱部 1/2、 脚裾部 1/5。	外面ナデ不明瞭。内底刷毛目状のナデ痕が不規則に残る。脚部は幅広のナデ。内面削りのようなナデ。	①素地普通。チャート混じりの1mm大の岩屑多い。②酸化焰、普通。③にぶい橙 7.5YR6/4 でほぼ一様。断面厚く灰黒色を呈す。
13 土師器 台付甕	脚裾(9.8) 脚柱 4.3 高 [10.5]	1a区 30 T - 19 G 12片。 底部完存、台裾部 1/2。	外面ナデ不明瞭。内底刷毛目状のナデ痕が不規則に残る。脚部は幅広のナデ。内面削りのようなナデ。	①素地普通。チャート混じりの1mm大の岩屑多い。②酸化焰、普通。③にぶい橙 7.5YR6/4 でほぼ一様。断面厚く灰黒色を呈す。④
14 土師器 高杯	脚柱 3.7 高 9.7	1a区西トレンチ。 図示部ほぼ完存。	裾部は平行に近い割れで割口一部摩滅。人為的な打掻きの可能性。厚手でやや重量。	①素地普通。長石混じりの不揃いの岩屑やや多い。②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙 10YR6/4。内外面とも彩度の低いムラあり一様でない。
15 土師器 甕	口(12.1) 高 [8.4]	1a区 30 T - 18 G。 口縁 1/8、胴部 1/3。	外面わずかに刷毛目の残る弱く細かな削り。下半に強い削り。	①素地普通。赤褐色鉱物・チャート・輝石混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい橙 7.5YR6/4。断面黒色味強い。
16 土師器 甕	口(18.8) 胴(26.8) 高 [23.2]	1a区 30 T - 18 G 21片。 口縁 1/2、胴部 1/3。	器面摩滅し整形痕不明瞭。刷毛目はないようだ。	①素地普通。赤褐色鉱物・2mm大の岩屑混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、普通。③橙 5YR6/6。外面黒斑や赤色味をおびるムラあり一様でない。④二次被熱。
17 土師器 台付甕	口(14.8) 高 [5.7]	微高地。 図示部の 1/8。	小破片からの復元で径・傾きとも不安。	①素地やや砂質。輝石・赤褐色鉱物・濁白色鉱物含む粗砂やや多い。②酸化焰、硬調。③にぶい橙 7.5YR7/4。内面彩度低い。断面一部黒色味強い。
18 土師器 小型台付甕	口(8.8) 高 [6.0]	微高地 7片。 口縁～肩部 1/2、胴部 1/8。	外面僅かに刷毛目が残る。内面肩部には指頭状の圧痕が並ぶ。	①素地普通。輝石・赤褐色鉱物・濁白色鉱物を散見する砂粒やや多い。②酸化焰、やや硬調。③灰白 5Y8/2。黄色味をおびるムラあり一様でない。④器面摩滅すむ。
19 土師器 台付甕	台上 5.8 台下 9.7 高 [7.1]	1a区 30 T - 18 G 5片。 底部完存、台部 2/3。	外面は縦位の帯状の施文になるような刷毛目。	①素地やや砂質。チャート混じりの1mm以下の粗砂多い。②酸化焰、普通。③にぶい褐 7.5YR6/3。外面は下端と底部付近で黒色味をおびる。

遺構外遺物（2区古墳時代）（第168・169図）

No. 器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1 土師器 埴	口(10.2) 高 [6.6]	2a区 40Q・P - 8 G 4片。 口縁 1/3、底部完存。	丸底。整形痕不明瞭で外底の削りのみ僅かに確認できる。	①素地普通。赤褐色鉱物混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、普通。③灰黄橙 2.5Y7/3。内面彩度低い。④内面摩滅すむ。
2 土師器 埴	口(18.8) 高 [3.9]	2a区 40 T - 9 G。 図示部の 1/6。	歪みある小片からの復元で径不安。内外面とも丁寧な磨き。	①素地普通。赤褐色鉱物・チャート等1mm以下の夾雑物含む。②酸化焰、硬調。③橙 2.5YR6/6 で外面ほぼ一様。内面彩度低く、淡い黒斑あり。
3 土師器 小型壺	口 13.3 頸(7.3) 胴(13.6)底 3.8 高 17.6	2a区 40 P - 8 G 21片。 口縁と底部ほぼ完形。頸部 1/6、胴部 1/3。	底面は僅かに平底。体部内外面の篋状工具によるナデは刷毛目状の擦痕が僅かに見える。	①素地普通。輝石・チャート混じりの粗砂含む。②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙 10YR7/3。淡い黒斑広く、赤色味おびるムラあり。内面灰色味おびる。④器面摩滅。
4 土師器 器台	口(6.4) 高 [4.8]	2a区 40 R - 8 G 4片。 口縁 1/4、底～脚部上半ほぼ 完存。	底部と脚部は穿孔した後に接合。窓孔は3ヶ。脚内面は刷毛目の残る工具使用のナデ。	①素地普通。赤褐色鉱物・片岩混じりの粗砂多い。②酸化焰、普通。③橙 5YR7/6。外面黒斑広い。脚内面彩度低い。④器面摩滅すむ。
5 土師器 特殊器台	口(12.0) 高 [2.8]	2a区 S - 9 G。 図示部の 1/3。	杯部に円孔。器面摩滅し整形痕不明。	①素地ややシルト質。チャート・輝石等雑多な夾雑物あり。②酸化焰、普通。③にぶい橙 5YR6/4。内外面に彩度の低いムラあり。④割れ口まで摩滅。
6 土師器 特殊器台	高 [1.9]	2a区 40 Q - 8 + 40 R - 9 G 3片。図示部の 2/3。	外底部上面の杯部接合部分は剥落後、研磨を加えた可能性。	①素地普通。②酸化焰、やや軟調。③にぶい橙 7.5YR7/3。④全体にやや摩滅。
7 土師器 器台	口(20.4) 高 [3.8]	2b区 19号溝埋没土。 図示部の 1/3。	窓は2ヶ確認だが高さ異なり、2段になるか。外面従位の磨きの下に刷毛目状の削り痕残る。内面幅広工具の擦痕。	①素地普通。赤褐色鉱物混じりの粗砂を含む。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 10YR7/3。断面黒色味強い。
8 土師器 器台	孔 1.1 高 [6.5]	2a区 40 T - 8 G 3片。脚 柱部ほぼ完存。裾部 1/6。	器面摩滅し整形痕不明。円孔は3ヶ所で脚上位に穿つ。裾部は薄手。	①素地普通。濁白色・赤褐色鉱物・輝石等1mm大の夾雑物多い。②酸化焰、硬調。③にぶい赤褐 2.5YR5/4 で外面一様。内面彩度低い。④器面の摩滅すむ。
9 土師器 器台	脚裾(13.8) 高 [4.0]	2b区 3井戸埋没土。 図示部の 1/6。	孔は1ヶのみ確認。外面の縦位磨きやや粗い。内面は工具使用の削りに近い斜位のナデの上に指頭による横位ナデ。	①素地普通。輝石・黒色鉱物混じりの粗砂を含む。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 10YR7/3。断面黒色味強い。外面赤彩は残存悪いが、にぶい赤色を呈す。
10 土師器 器台	脚柱(3.8) 高 [4.5] 底部孔 1.1	2a区 4面。 図示部ほぼ完存。	外面やや幅広の篋磨き。外面篋状工具による削りのようなナデ。孔は3ヶか。	①素地普通。白色岩屑・赤褐色鉱物・輝石等雑多な夾雑物あり。②酸化焰、やや硬調。③灰黄褐 10YR6/2。赤色味・黒色味おびるムラあり一様でない。
11 土師器 器台	脚柱(3.2) 高 [1.7]	2b区 40号西溝埋没土。 図示部の 1/2。	外面縦位磨き幅広で削りに近い。	②酸化焰、普通。③にぶい橙 5YR6/4。
12 土師器 高杯	脚柱(2.4) 高 [8.2]	2a区 40 P - 8 G 8片。 図示部の 1/2。	脚上面は杯差込み部の離脱痕。外面は細かな篋磨き痕が僅かに残る。裾部は薄手か。	①素地普通。輝石混じりの細砂含む。②酸化焰、やや軟調。③にぶい橙 5YR6/4。
13 土師器 高杯	高 [7.4]	2b区 40号西溝埋没土。 図示部の 1/2。	外面縦位削りの上に篋磨きで平滑に仕上げられる。内面篋状工具による粗いナデで比較的平滑。	①素地やや緻密。赤褐色鉱物目立ち、最大8mmの岩屑散見する。②酸化焰、やや硬調。③にぶい橙 5YR6/4 でほぼ一様。断面黒色味強い。

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
14	土師器 鉢	口 9.9 底 3.0 高 3.9	2a 区 40 Q-9 G 8片。 口縁 2/3、底部完存。	外面斜放射状に刷毛目残る規則的な削りの上に口縁部強いナデ。内面は削りに近い工具使用の粗いナデ	①素地シルト質。赤褐色鉱物等の夾雑物少量含む。②酸化焰、胎土が原因か締まり欠く。③にぶい黄橙 10YR6/2。赤色味・黒色味おびるムラあり一様でない。
15	土師器 杯	口 (13.8) 高 (4.5)	2a 区 40 T-9 G 2片。 図示部の 1/4。	模倣杯で薄手。摩滅し整形痕不明瞭。歪みある破片で径・傾き不安。	①素地ややシルト質。微細な赤褐色鉱物・輝石混じりの砂粒少量含む。②酸化焰、普通。③にぶい橙 5YR6/4 で一様。
16	土師器 器台	口 (13.0) 高 (3.1)	2a 区 40 R-9 G。 図示部の 1/3。	器面磨滅し整形痕不明。口縁端部外方に細く尖る。口縁外面は 2 条の擬凹線巡る。北陸系。	①素地やや緻密。2mm 大の片岩やや多く、輝石・赤褐色鉱物等の混じる砂粒やや多い。②酸化焰、きわめて硬調。③橙 5YR6/6。内外面に彩度の違うムラあり。断面一部灰色味強い。④割れ口まで磨滅。
17	土師器 器台	口 (12.8) 高 [3.0]	2a 区 156 ビット 2片。 図示部の 1/3。	口縁外端を肥厚させる。篋状工具によるナデは内面で丁寧。	①素地普通。輝石混じりの 1mm 大の岩屑を少量含む。②酸化焰、やや軟調。③にぶい黄橙 10YR7/4。内面やや彩度低い。④東海または北陸系。
18	土師器 壺	口 (12.0) 高 [3.3]	2b 区 19 号溝埋没土。 図示部の 1/8。	薄手。内外面赤彩。器面摩滅し整形痕不明瞭。細かな磨きまたは内面板状小口によるナデ痕か。	①素地普通。輝石混じりの粗砂を含む。②酸化焰、普通。③にぶい橙 5YR7/3。断面黒色味強い。赤彩はにぶい橙。
19	土師器 壺	口 15.2 頸 9.7 高 [6.7]	2a 区 40 Q-8 G 10片。 図示部の 2/3。	折り返し口縁。器面摩滅し不明瞭だが外面僅かに刷毛目状の凹凸残る。	①素地普通。赤褐色鉱物混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい橙 7.5YR7/4。灰色味の強いムラあり。④内底の剥落すずむ。
20	土師器 甗	口 (14.0) 頸 (12.0) 高 [5.5]	2a 区 40 P-8 G 2片。 図示部の 1/8。	器面やや磨滅し整形痕不明瞭。口縁上端尖る。外面弱い刷毛目の上に端部のみ横位ナデ。	①素地やや砂質。濁白色岩屑混じりの砂粒多い。②酸化焰、やや硬調。③にぶい黄橙 10YR7/2。内面明度高く、断面は灰黒色。
21	土師器 甗	底 (4.4) 高 [2.3]	2a 区 40 Q-8 G。 図示部の 1/3。	器面磨滅し整形痕観察できないが、器面比較的平滑。	①素地普通。輝石・赤褐色鉱物混じりの粗砂やや多い。②酸化焰、普通。③橙 5YR6/6。外面灰色味をおびたムラあり。断面一部灰色味をおびる。
22	土師器 壺	頸 (7.2) 底 4.7 ~ 5.3 高 [9.7]	2b 区 40 R-16 G 14片。 肩部 1/2、胴部 1/4、底部完存。	薄手、底部はかろうじて平底。器面摩滅し整形痕不明瞭だが、肩部に縦位、胴部に横位のナデ痕僅かに残る。	①素地やや砂質。輝石・赤褐色鉱物等細かな夾雑物やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 10YR7/3。外面赤・黒色味の強いムラあり一様でない。断面は灰黒色。
23	手捏ね?	胴 (6.2) 高 [4.6]	2b 区 40 号西溝埋没土。 図示部の 1/2。	内面不規則な指頭痕が残り、器面不整。外面規則的な指頭の抑えて器面比較平滑に仕上げる。	①素地普通。夾雑物少ない。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 10YR7/2。外面下半黒斑あり。
24	鉢?	口 (6.0) 胴 (8.4) 高 [4.7]	2b 区 3 号溝埋没土。 図示部の 1/5。	均等に厚い。内面に鉄分沈着顕著で整形痕不明。外面ナデか? 器面比較的平滑。	①素地緻密。微細な雲母片目立つ細砂やや多い。②酸化焰か、きわめて硬調。③にぶい赤褐 5YR5/4。一部に金属光沢。断面はセピア色味をおびる。
25	手捏ね	口 6.7 高 2.5	2a 区 31 C-9 G 2片。 3/4 個体。	手捏ねとしては底部薄手。口縁波状に歪む。底部は指頭痕の凹凸目立つが、口縁には弱いナデ。	①素地普通。輝石・赤褐色鉱物等の夾雑物少量含む。②酸化焰、やや軟調。③にぶい黄橙 10YR7/3。底部周辺内外黒色味強い。
26	手捏ね	口 (6.0) 高 [3.8]	2b 区 19 溝埋没土。 図示部の 1/3。	薄手。摩滅激しく整形痕不明。	①素地ややシルト質。赤褐色鉱物散見する以外夾雑物少ない。②酸化焰、普通。③にぶい赤褐 5YR5/4 で断面まで一様。④割れ口まで磨滅。
27	土師器 高杯	口 (32.6) 高 [7.4]	2a 区 40 Q-9 G 7片。 口縁 1/6。	器面磨滅し不明瞭だが内面縦位の磨き、口縁端部に横位ナデ痕あり。外面下隅に篋削り痕か。	①素地やや砂質でザラザラする。輝石・赤褐色鉱物等少量含む。②酸化焰、普通。③橙 5YR7/6 で内外面ほぼ一様。断面一部灰色味おびる。
28	土師器 高杯	高 [4.8]	2b 区 40 号西溝埋没土。 図示部の 3/4。	外面縦位削りは幅広く弱い。所々に無調整部分を残す。	①素地普通。濁白色鉱物の目立つ砂粒を含む。②酸化焰、普通。③にぶい橙 7.5YR6/4。内面は黄色味強い。
29	土師器 台付甗	口 (16.0) 頸 (14.8) 高 [12.6]	2a 区 69 号土坑埋没土 7片。 口縁~胴部 2/5。	刷毛目は細かく鋭い。内面板状工具小口痕が僅かに残るが、全体に平滑。	①素地普通。輝石を散見する砂粒を少量含む。②酸化焰、普通。③にぶい黄 2.5Y6/3。内面下半は明度低い。断面黒色。④外面に多量のスス付着 (図白ヌキ部分)。
30	土師器 台付甗	台下 (9.0) 高 [6.7]	2b 区 29 号溝埋没土 2片。 図示部の 1/2。	外面上半に縦位の帯状の施文になるような刷毛目。	①素地普通。細砂の混入多い。②酸化焰、普通。③にぶい黄褐 10YR7/4。外面黒斑強い。内面灰黒色で断面も灰色味をおびる。
31	土師器 台付甗	台下 (9.6) 高 [5.9]	2b 区 40 号西溝埋没土。 図示部の 1/6。	やや厚手。台部下端は平坦。外面にごく弱い刷毛目。	①素地普通。輝石・不揃いの濁白色鉱物混じりの砂粒少量含む。②酸化焰、普通。③にぶい黄橙 10YR7/2。外面黒色味強いムラ。断面黒色味強い。
32	土師器 台付甗	口 15.2 頸 9.7 高 [6.7]	2a 区 40 S-7 G 3片。 底部ほぼ完存。台裾部 3/4。	やや厚手で底部付近細砂多い。外面弱い刷毛目。脚内面は幅広い篋状工具によるナデで刷毛目状の擦痕顕著。	①素地普通。赤褐色鉱物の目立つ砂粒含む。②酸化焰、普通。③にぶい黄褐 10YR5/4 でほぼ一様。赤色味・黒色味おびるムラあり。断面灰黒色。
33	土師器 甗	底 2.8 ~ 3.3 高 [3.7]	2b 区 40 号西溝埋没土。 図示部ほぼ完存。	底面と周辺の穿孔は中央のみやや大きめ。	①素地普通。1mm 大の岩屑やや多い。②酸化焰、普通。③灰黄褐 10YR6/2。外面淡い黒斑状のムラ広い。断面一部黒色味強い。
34	土師器 甗	底 (8.8) 高 [5.6]	2b 区 40 号西溝 埋没土。 図示部の 1/4。	外面削り幅細く強い。内面は篋状工具を使った削りに近い斜位のナデの後、縦位の指頭ナデ。	①素地普通。1mm 大のチャート混じりの岩屑やや多い。②酸化焰、やや硬調。③にぶい橙 7.5YR6/4。外面に黒斑あり。
35	土師器 甗	底 (8.8) 高 [6.3]	2b 区 40 号西溝 埋没土の 2片。 図示部の 1/5。	外面削りは方向不定で短く鋭い。内面ナデは丁寧で幅 10mm の細い工具痕が残る。	①素地普通。赤褐色鉱物粒・チャート等微細な混入物含む。②酸化焰、普通。③にぶい橙 7.5YR6/4。外面に淡い黒斑あり。④内面に深い剥落部分が巡る。
36	土師器 甗	口 (23.2) 高 [3.7]	2b 区 40 号西溝 埋没土 3片。 図示部の 1/8。	外面削り弱い。内面ナデは横位の後に縦位で弱い。器面比較的平滑。	①素地普通。1mm 大の岩屑やや多い。②酸化焰、普通。③にぶい橙 7.5YR6/4。外面やや黒色味おびる。
37	土師器 杯	口 (12.8) 高 [4.0]	2b 区 21 号溝埋没土の 2片。 図示部の 1/6。	口縁上端は面取りで中央僅かに窪む。外面丁寧な削り。内底平滑。薄手。	①素地普通。輝石・赤褐色鉱物混じりの細砂やや多い。②酸化焰、硬調。③明褐 7.5YR5/6。断面白色味強い。

遺物観察表

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
38	土師器 杯	口(10.4) 高[3.2]	2b区21号溝埋没土の4片。 図示部の1/4。	歪みあり、径不安。器面摩滅すすみ整形痕不明瞭。	①素地ややシルト質。細かな赤褐色鉱物散見。夾雑物少ない。 ②酸化焰、やや軟調。③にぶい橙7.5YR7/4で同様。
39	土師器 杯	口(23.2) 高[3.7]	2b区40号西溝。 図示部の1/6。	器面摩滅顕著で、整形痕不明。内面に磨きのよくな下処理見えない。	①シルト状の細かな素地。赤褐色鉱物粒・粗砂少量含む。②酸化焰、普通。③橙7.5YR7/6。内面黒色処理。
40	土師器 杯	口(11.8) 高[3.1]	2b区40号西溝 埋没土。 図示部の1/4。	器面摩滅顕著で、整形痕不明。	①シルト状の細かな素地。赤褐色鉱物粒の混入やや多い。②酸化焰、普通。③橙7.5YR7/6。外面に淡い黒斑。
41	円筒埴輪	高[7.9]	2b区26号溝埋没土。 胴部片。	タガは断面台形に近い。器面磨滅し刷毛目は観察できない。	①素地やや砂質。細かな赤褐色鉱物やや多い。②還元焰、硬調。③浅黄橙7.5YR8/3。断面中央は灰白色。

遺構外遺物（1a区奈良・平安時代）（第170・171図）

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
20	須恵器 蓋	高[1.8]	1a区57号溝。 図示部の1/2。	右轆轤。外面広範囲に回転窪削り。内面渦巻き状のやや強い轆轤痕。扁平で中央付近厚手。	①素地やや緻密。1～2mm乳白色岩屑目立つ。細砂多い。 ②還元焰、硬調。③灰7.5Y6/1。内外面同様。断面灰赤色味おびる。
21	須恵器 蓋	口(18.4) 高[1.7]	1a区西トレンチ。 図示部の1/3。	右轆轤。外面天井部広範囲に回転窪削り。内面同心円状の轆轤痕。扁平で中央付近厚手。	①素地普通。長石混じりの不揃いの岩屑目立つ。細砂多い。 ②還元焰、硬調で焼締まる。③灰N6/0。内外面同様。断面一部灰赤色味おびる。外面白色味をおびたの薄い降灰釉。
22	須恵器 椀	口(13.6) 高[2.9]	1a区14号井戸 埋没土。 図示部の1/8。	右轆轤。轆轤痕外面でやや強く細かい。薄手。器面やや摩滅。	①素地普通。微細な雑多な夾雑物多い。②還元焰、やや硬調。 ③灰7.5Y7/1。断面一部黒色味おびる。
23	須恵器 有台椀	台(6.0) 高[1.4]	1a区15号井戸 埋没土。 底部2/3、高台部1/3。	右轆轤→回転糸切→雑な高台取付。内底比較的平坦で渦巻き状の轆轤痕が擦痕状に残る。高台歪む。	①素地普通。砂粒多くザラザラしている。②還元焰気味、普通。 ③灰白7.5Y7/1。内外面に重ね焼き痕が黒斑となって明瞭に残る。
24	須恵器 椀	口(13.6) 高[3.7]	1a区15号井戸 埋没土2片。 図示部の1/3。	右轆轤。轆轤痕やや弱く器面比較的平滑。やや薄手。	①素地普通。1～2mm白色岩屑混じる。②還元焰不十分でやや軟調。③褐灰10YR5/1でほぼ同様。
25	須恵器 耳付壺	胴(28.2) 高[15.7]	1a区15号井戸。埋没土2片。 図示部の1/5。	器面に方向不定のなでがあり、轆轤使用は不明。外面平滑で下半に弱い削り。確認できる耳は1ケで丁寧な取付、指頭縦位の弱い圧痕が残る。	①素地1に類似。混入物は1よりやや少ない。②還元焰、普通。 ③灰白5Y5/1。断面までほぼ同様。④破損後に被熱か。破損後にタール状の付着物。
26	須恵器 罎付甌	罎(32.0) 高[19.8]	1a区15号井戸。埋没土10片。 体部1/4。底部若干。	轆轤方向は不明。外面に弱い刷毛目のような方向不定の擦痕。罎の取付雑。底面は鋭い工具で切り抜く。	①素地普通。1mm大の白色岩屑や黒色鉱物等やや多い。②還元焰、やや軟調。③灰白5Y5/1。断面橙黄色味をおびる。 ④破損後に被熱。
27	須恵器 大甗	口62.4 高[33.6] 頸43.4	1a区15号井戸。埋没土の約50片。 口縁2/3。頸部完存。	体部内面に青海波状のアテ具痕弱く残るが、外面叩き痕不明瞭。一部にナデの跡あり全体に叩き痕はナデ消すか。頸部は4条の鋭いがごく雑な波状文。	①素地砂質。1mm大の岩屑含むが、大型品としては夾雑物少ない。②還元焰、普通。③灰7.5Y6/1でほぼ同様。
28	須恵器 有台椀	台6.3 高[3.0]	1a区31号土坑の2片。 口縁下1/8、底部完存。	内底同心円状の轆轤痕。摩滅すすみ成形痕不明瞭。	①素地普通。1～2mm大の白色岩屑混じる。②還元焰、普通。 ③灰。内外面同様。
29	須恵器 有台椀	台(7.4) 高[2.8]	1a区32号土坑。 図示部の2/3。	右轆轤。内底同心円状の轆轤痕。摩滅すすみ成形痕不明瞭。	①素地普通。1～2mm大の白色岩屑・片岩混じる。②還元焰、やや軟調。③白灰2.5Y8/1。内面・外底黒色味強い。
30	須恵器 有台椀	台6.5 高[3.0]	1a区47号溝。 図示部ほぼ完存。	右轆轤。流水によると思われる摩滅顕著で成形痕不明瞭。	①素地やや緻密。2mm大の柔らかな岩屑混じる。②還元焰、硬調。③灰色で内外面同様。
31	土師器 壺	口(18.6) 頸(11.2) 高[6.9]	1a区30 T-18 G 2片。 図示部の1/3。	轆轤方向不明。口縁外端くぼみ、上側へ向かって肥厚する。	①素地普通。チャート・赤褐色鉱物混じりの粗砂・岩屑目立つ。②酸化焰、やや硬調。③橙7.5YR6/6で内外面ほぼ同様。断面彩度低い。

遺構外遺物（2区奈良・平安時代）（第171図）

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
42	灰釉陶器 椀	口(13.8) 高[4.8]	2a区40 P-8 G 2片。 図示部の1/8。	轆轤痕外面でやや強く、内面は平滑。釉は浸け掛けで薄い。	①灰釉陶器としては素地やや粗い。混入物少ない。②還元焰、普通。③灰白5Y7/1。断面やや黄色味をおびる。釉は灰黄色。
43	須恵器 杯	底5.7 高[2.0]	2b区3号井戸埋没土。 図示部の1/2。	右轆轤→回転糸切無調整。轆轤痕弱い。内面平滑。	①素地やや砂質でザラザラしている。5mmのチャート散見。 ②還元焰、やや硬調。③黄灰2.5Y4/1でほぼ同様。内面セピア色。
44	須恵器 杯	口(12.8) 底6.0 高3.7	2b区22号溝底面+33cm。 図示部の1/2。口縁端部は僅か。	右轆轤→回転糸切無調整。轆轤痕やや弱い。内面平滑で底部平端。薄手で軽量。	①素地普通。片岩や淡黒色鉱物粒等、径3mmを超える混入物やや多い。②還元焰、硬調。③灰5Y7/0で断面までほぼ同様。
45	須恵器 平瓶	高[5.5]	2a区40 S-7 G 2片。 口縁片。	降灰釉が広くかかる。	①素地緻密。濁白色・黒色の岩屑散見するが夾雑物少ない。 ②還元焰充分で焼き締まる。③灰5Y5/1。断面はセピア色味が強く、釉は灰黄色を呈す。
46	須恵器 甗	高[1.9]	2a区40 Q-9 G 3片。 図示部の1/8。	右轆轤。外面轆轤痕弱く、肩部で僅かにカキ目状。内面口縁痕は不整。	①素地普通。夾雑物少ないが、最大5mmの岩屑を散見。②還元焰、普通。③褐灰10YR5/1。口縁内面はやや青色味をおびる。
47	須恵器 大甗	頸(36.4) 高[10.6]	2a区2号井戸+40号西溝+2a区31 A-10 G他4片。 図示部の1/3。	外面は頸部含めごく細かな平行叩き痕。頸部叩き痕は斜位に並ぶ。	①素地ザックリしたやや粗く重量感のある土。乳白色・黒色岩屑の夾雑やや多い。②還元焰。硬調で焼き締まる。③灰7.5Y4/1でほぼ同様。④降灰釉やや厚かかる。

遺構外石製品（奈良・平安時代）（第 171 図）

No.	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
32	砥石	長 8.4 幅 4.8 厚 3.8	1a 区 30 S - 9 G。完形。	手持ち砥。捻じれの強い 5 面使用で断面菱形。	①砥沢石。④重 175.4 g。時期不明。沈線状の傷多い。
48	砥石	長 13.1 幅 2.7 厚 2.8	2a 区 40 R - 6 G。2 片接合。 1 端部を欠く。	捻じれた 4 面使用。	①砥沢石。④重 110.1 g。時期不明。

遺構外遺物（中・近世）（第 172・173 図）

No.	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
1	古瀬戸 不詳	高 [2.4]	1a 区 30 P - 13 G。 口縁部片。	灰釉。外面下位無釉。	③灰白色。④割れ口摩滅して丸みを帯びる。中世。
2	美濃陶器 灯火受皿	口 (9.2) 底 4.2 高 2.2	1a 区 1 面。 口縁部一部、底部 1/2。	錆釉、外面口縁部以下釉を拭う。受部切り込み一部残存。	③にぶい赤褐色 (5YR5/4)。④登窯 10 小期。
3	瀬戸陶器 丸碗	底 (4.5) 高 [1.7]	1a 区 1 面 21 A - 13 G。 1/4。	高台を除き灰釉。貫入入る。割れ口摩滅に丸みを帯びる。	③灰白色 (5Y7/1)。④登窯 5・6 小期
4	龍泉窯系 青磁 碗	底 (4.8) 高 [2.0]	1a 区 1 面。 底部から体部下片。	内面から高台外面青磁釉。残存部無文。体部下半外方に開き、浅形碗の可能性あり。	③灰白色 (N7/0)。④ 12 世紀中から後半か。
5	瀬戸・美濃陶器 志野 丸皿	底 (6.6) 高 [1.2]	1a 区 1 面 30 Q - 11 G。 底部片。	内外面長石釉。内外面円錐ピン痕各一箇所。	③灰白色 (2.5Y7/1)。④登窯 1・2 小期。
6	在地系土器 皿	口 (7.9) 底 4.6 高 1.7	1b 区 5 面。 1/5 から 1/2	成形時轆轤左回転。左回転？糸切無調整。体部、口縁部直線的に開く。	①夾雑物細粒で片岩混じる。③にぶい橙色 (7.5YR7/4)。④ 15 世紀中頃。
7	在地系土器 片口鉢	高 [6.2]	1a 区。 口縁部片。	口縁部横撫調整。口縁端部は小さく内外に突き出る。口縁端部内面使用による摩滅少量あり。	③浅黄色。器表灰白色。④ 15 世紀後半。
8	中国白磁 瓶	高 [6.1]	1b 区。 体部下位片。	外面回転篋削り。内面顕著な轆轤目。内外面透明釉。	②やや不良。③素地は灰白色。④中世。
9	古瀬戸 卸目付大皿	口 (27.0) 高 [2.9]	1b 区 3・4 面。 口縁部小片。	内外面灰釉。貫入あり。口縁部外反し、端部内面突帯あり。口縁部外面沈線状の轆轤目。	③灰白色。④古瀬戸後 IV 期新。
10	在地系土器 内耳鍋	高 [5.3]	1b 区 3・4 面。 口縁部片。	外面口縁部下位煤付着。口縁部外反。内面段差なし。口縁部小さく内湾し、僅かに内面に突き出る。	③黄灰色 (2.5Y5/1)。④ 15 世紀中頃から後半。
11	龍泉窯系 青磁 碗	高 [3.6]	2a 区 5 面 40 T - 9 G。 口縁部小片。	釉調良く、比較的厚みもある。外面鑄蓮弁文。	③灰白色 (5Y8/1)。④ 13 世紀中頃から 14 世紀前半。
12	龍泉窯系 青磁 碗	高 [2.1]	2a 区 5 面 40 T - 9 G。 体部小片。	外面鑄蓮弁文。	③灰白色 (5Y7/1)。④ 13 世紀中頃から 14 世紀前半。
13	龍泉窯系 青磁 碗	高 [2.6]	2a 区 4 面 40 T - 8 G。 体部小片。	外面鑄蓮弁文。	③灰白色。④ 13 世紀中頃から 14 世紀前半。
14	中国磁器 青白磁梅瓶	高 [3.8]	2a 区 5 面 40 P - 12 G。 体部小片。	内面無釉。外面渦巻き状の唐草文。	③灰白色 (2.5Y7/1)。④ 13 世紀から 14 世紀前半。
15	古瀬戸 花瓶	口 (14.0) 高 [2.8]	2a 区。 1/5。	内外面灰釉。口縁部水平近くまで外反。漆継ぎ痕。	③灰白色 (10Y7/2)。④古瀬戸中 III・IV 期。
16	龍泉窯系 青磁 碗	底 (5.3) 高 [1.7]	2a 区 4 面 40 P - 8 G。 1/5。	内面から高台端部外側青磁釉。底部器壁厚い。	③灰色 (10Y6/1)。④ 13 世紀から 14 世紀。
17	龍泉窯系？ 青磁 碗	底 (6.0) 高 [1.8]	2a 区 5 面 40 R - 10 G。 1/4。	内面から高台端部青磁釉。底部器壁厚い。高台方形で外方斜めに削る。	③灰白色。④ 13 世紀後半から 14 世紀。
18	龍泉窯系？ 青磁 碗	底 (6.0) 高 [2.8]	2a 区 5 面 40 Q - 12 G。 1/4。	内面から高台外面青磁釉。高台内外同じ厚さ。底部内面周縁、体部側からの削りによる圈線。高台端部外側を斜めに削る。底部内面目跡 2 方所残存。	③灰白色から灰色。(7.5Y6/5) 他。④ 12 世紀から 14 世紀。
19	美濃陶器 丸皿	口 (12.3) 底 (5.8) 高 [2.7]	2a 区 40 Q - 7 G。 1/6 個体。	内面から口縁部外面灰釉。見込み高台重ね焼き痕。外面口縁部以下回転篋削り。	③灰白色 (5Y7/2)。④登窯 4 小期。
20	搬入系？ 土器 香炉	口 (8.4) 底 (5.8) 高 [3.7]	2a 区 3・4 面。 1/4 個体。	器表の薄い範囲のみ黒色を呈する。燻し焼成。口縁部外面 2 条の横線施文後に丸みを帯びた菱形スタンプ文。底部外面の脚貼付痕から 4 脚と推測される。	①夾雑物をほとんど含まず均質な胎土。②③白色。器表黒色から灰色 (N4/0)。④中世。

遺物観察表

No	器種	計測値	出土・復元状態	器形・製作技法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他
21	古瀬戸 卸目付大皿	口 (31.6) 高 [3.9]	2a 区 3・4 面 40 S - 7 G。 口縁部小片。	灰釉。口縁端部外反し、内面に突帯。口縁部 外面沈線状の轆轤目。残存部に卸し目ない。	③灰白色。④古瀬戸後IV期古。
22	古瀬戸 縮腰形瓶子	高 [4.3]	2a 区。 肩部小片。	外面灰釉。肩部 3 条の横線。頸部内面釉流れ る。	③灰白色。④古瀬戸前IV期。
23	在地系土器 片口鉢	高 [6.4]	2a 区。 片口部片。	器壁厚い。片口部片のため口縁部形状不明瞭。 口縁部内面内湾気味か。口縁部玉縁状をなす。 玉縁部外面浅い沈線状の→	①素地やや緻密。③灰白色。器表灰色 (N6/0)。④内面使用 により摩滅。13 世紀後半。 窪み 2 条巡る。外面口縁部下窪む。
24	在地系土器 片口鉢	高 [5.5]	2a 区 40 R - 6 G。 片口部片。	片口部両側の口縁部内面器表剥離しており、 内面形状不明。口縁部玉縁状を呈するが厚み はない。端正面尖り気味。	①素地やや砂質。③断面灰色。器表付近灰黄褐色 (10YR6/2)。 ④ 13 世紀。
25	在地系土器 内耳鍋	高 [9.4]	2a 区。 口縁部片。	内面斜位撫で調整後、口縁部強い横撫で。内 面口縁部境ゆるい段差。口縁端部内面僅に突 出る。器壁厚く口縁部短い。	①素地やや砂質で細かな岩屑散見する。③灰色。④煤付着あ り。14 世紀後半から 15 世紀前半。
26	在地系土器 片口鉢	高 [9.3]	2a 区 5 面 40 Q - 12 G。 口縁部から体部下位片。	内面撫で。外面指押さえ痕残る。口縁部横撫 で。端部内面突き出る。端部内面突出部摩滅。	①素地緻密で夾雑物も少ない。③灰白色・灰色 (5Y5/1)。④ 内面体部下位使用により摩滅。14 世紀後半。
27	在地系土器 片口鉢	高 [7.1]	2a 区。 口縁部片。	体部外面指押さえ痕顕著。口縁部外反。端部 内面に折り返し、外面も突き出る。	③灰色・暗灰色。④ 14 世紀後半から 15 世紀前半か。
28	在地系土器 片口鉢	高 [6.8]	2a 区 4 面 40 T - 7 G。 口縁部片。	口縁部内面僅かに窪み、端部は内面に引き出 す。口縁端部上面僅かに窪む。口縁部小さく 外反。	① 2 mm 大の岩屑散見する。②焼締り気味。③灰色 (10Y4/1)。 色調が均一。④ 14 世紀後半から 15 世紀前半か。
29	在地系土器 片口鉢	高 [4.1]	2a 区。 口縁部片。	口縁部玉縁状。端部上面尖り、口縁部内面平 坦。	①微細な雲母粒混じりの細砂含む。③灰白色 (N7/0)。④ 13 世紀。
30	在地系土器 内耳鍋	高 [6.3]	2a 区 4 面 40 Q - 9 G。 口縁部片。	口縁部短く、僅かに内湾気味に外反する。内 面口縁部境非常になだらかな段差。体部器壁 厚い。	①素地やや砂質で夾雑物は少ない。③灰白色。器表灰白色か ら灰色 (5Y6/1)。④ 14 世紀後半から 15 世紀前半。
31	常滑?陶 器 甗	高 [4.8]	2a 区。頸部から肩部片。	外面自然釉。内面頸部と肩部境接合痕。	③褐灰色。④中世。
32	常滑陶 器 甗	高 [6.4]	2a 区 5 面 40 T - 8 G。 頸部から肩部片。	外面自然釉均一にかかる。	③褐灰色・灰色 (5Y4/1)。内面器表黒褐色。④中世。
33	常滑?陶 器 甗	高 [5.4]	2a 区 40 Q - 9 G。 頸部から肩部片。	外面自然釉。	③褐灰色。④中世。31 と同一個体の可能性。
34	古瀬戸 縮腰形瓶子	高 [7.1]	2a 区。 体部片。	外面灰釉刷毛塗り。内面指押さえ痕顕著。	③灰白色 (2.5Y7/1)。④古瀬戸前IV期。
35	古瀬戸 縮腰形瓶子	高 [6.1]	2a 区 4 面 40 Q - 13 G。 体部外面下位片。	外面灰釉刷毛塗り。	③灰白色 (2.5Y7/1)。④古瀬戸前IV期。34 と同一個体の可能 性。
36	常滑陶器甗	高 [6.2]	2a 区 3・4 面 31 C - 11 G。 体部小片。	外面窪状の当たり痕。	③にぶい赤褐色 (5YR5/3)。④中世か。
37	古瀬戸 縮腰形瓶子	高 [4.5]	2a 区 5 面 40 Q - 13 G。 体部下位片。	外面灰釉刷毛塗り。内面指押さえ痕顕著。	③灰白色。④古瀬戸前IV期。34 と同一個体の可能性。
38	常滑陶器甗	高 [6.6]	2a 区。 体部小片。	体部下位か。夾雑物多く、やや軽い。	③黄灰色。内外面器表黒色。④中世。
39	常滑陶器甗	高 [5.2]	2a 区 5 面 40 S - 7 G + 40 T - 9 G。体部小片。	内面指押さえ後、横位撫で。外面撫で。	③暗灰黄色 (2.5Y5/2)。④中世。
40	渥美?陶 器 甗か	高 [3.9]	2a 区 4 面 40 Q - 10 G。 体部下位小片	内面自然釉かかる。	③灰白色・灰色 (5Y6/1)。④ 12 世紀か。
41	在地系土器 皿	底 (10.0) 高 [1.3]	2a 区 5 面。 底部 1/4。	大型の皿であろう。底部回転糸切無調整。	①素地やや砂質。②底部灰白色気味で焼成時に高温となっ ている可能性高い。③断面淡赤橙色 (2.5Y7/4)。④中世。
42	在地系土器 片口鉢	底 (13.0) 高 [5.2]	2a 区。 底部から体部下位 1/3。	底部外面器表剥離多い。底部内面周縁を中心 に使用による摩滅顕著でやや窪む。	③黄灰色 (2.5Y4/1)。④中世。

出土銭貨観察表

1 a 区 3号墓坑 (第39図 P L 34)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 天聖元寶	①西寄り ②ほぼ床直上	A 24.90 B 20.75	C 24.70 D 20.70	① 0.95 ③ 1.20 ② 1.00 ④ 1.15	2.81	1023年 北宋	回読・篆書。完形。
2	銅銭 元豊通寶	1と一括出土	A 24.00 B 18.60	C 23.80 D 19.55	① 2.05 ③ 1.00 ② 1.15 ④ 1.00	3.00	1078年 北宋	回読・篆書。完形。
3	銅銭 紹聖元寶	1と一括出土	A 24.30 B 19.55	C 24.30 D 19.65	① 1.10 ③ 1.05 ② 1.20 ④ 1.05	2.81	1094年 北宋	回読・行書。完形。
4	銅銭 宣徳通寶	1と一括出土	A 25.30 B 20.00	C 25.20 D 20.05	① 0.85 ③ 1.10 ② 1.10 ④ 0.90	2.89	1433年 明	対読・真書。完形。
5	銅銭 皇宋通寶	1と一括出土	A 23.40 B 18.30	C 23.10 D 17.50	① 1.10 ③ 1.20 ② 1.15 ④ 1.20	2.69	1038年 北宋	対読・真書。完形。
6	銅銭 熙寧元寶	1と一括出土	A 24.00 B 20.40	C 23.85 D 20.40	① 1.40 ③ 1.20 ② 1.10 ④ 1.20	2.51	1068年 北宋	回読・篆書。完形。

1 a 区 4号墓坑 (第39図 P L 34)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 嘉祐元寶?	①懐内か ②底面+3cm	A 25.20 B 19.30	C 24.70 D 20.15	① 1.45 ③ 1.05 ② 1.20 ④ 1.50	2.64	1056年 北宋	回読・篆書。完形。
2	銅銭 至和元寶	①頭位付近 ②底面+5cm	A 23.85 B 18.60	C 23.85 D 18.35	① 1.55 ③ 1.50 ② 1.40 ④ 1.50	2.26	1054年 北宋	回読・篆書。完形。
3	銅銭 開元通寶	1と一括出土	A 24.90 B 21.25	C 25.25 D 21.45	① 1.35 ③ 1.35 ② 1.25 ④ 1.35	2.13	621年 966年 南唐	対読・真書。完形。 孔に擦れの痕跡。
4	銅銭 嘉祐元寶?	2と一括出土	A 25.10 B 19.90	C 24.55 D 20.00	① 1.00 ③ 0.90 ② 1.00 ④ 0.80	1.83	1054年 北宋	回読・篆書。ほぼ完形。
5	銅銭 治平元寶	埋没土	A 24.30 B 18.90	C 24.30 D 19.50	① 1.15 ③ 1.10 ② 1.05 ④ 1.05	1.65	1064年 北宋	回読・篆書。完形。
6	銅銭 天聖元寶	埋没土	A - B -	C 24.50 D 20.60	① - ③ 1.20 ② 1.35 ④ 1.35	2.04	1023年 北宋	回読・真書。4/5。

1 a 区 5号墓坑 (第39図 P L 34・35)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 元祐通寶	①腰骨付近。 ②底面+3cm	A 25.55 B 19.75	C - D -	① - ③ 0.90 ② 1.05 ④ 1.05	1.32	1086年 北宋	回読・行書か。3/4。 脆弱で採拓できず。
2	銅銭 皇宋通寶	①腰骨付近 ②底面+3cm	A 24.30 B 20.60	C 24.40 D 20.25	① 1.30 ③ 1.20 ② 1.40 ④ 1.30	2.17	1038年 北宋	対読・真書。完形。
3	銅銭 元符通寶	埋没土	A 22.20 B 18.30	C 22.35 D 17.90	① 1.00 ③ 1.10 ② 1.15 ④ 1.10	1.56	1098年 北宋	回読・行書。完形。
4	銅銭 永樂通寶	埋没土	A 25.15 B 20.85	C 25.20 D 20.85	① 1.20 ③ 1.20 ② 1.30 ④ 1.20	2.59	1587年 1617年 明	対読・真書。完形。
5	銅銭 元豊通寶	埋没土	A 24.45 B 18.50	C 24.30 D 18.50	① 0.90 ③ 0.75 ② 0.80 ④ 0.80	2.42	1078年 北宋	回読・行書。完形。
6	銅銭 熙寧元寶	埋没土	A 23.55 B 20.50	C 23.60 D 20.15	① 1.45 ③ 1.45 ② 1.40 ④ 1.40	3.81	1068年 北宋	回読・真書。完形。
7	銅銭 元祐通寶	①懐付近か ②底面+4cm	A 23.60 B 18.85	C 23.60 D 19.00	① 1.20 ③ 1.20 ② 1.40 ④ 1.30	2.46	1086年 北宋	回読・篆書。完形。
8	銅銭 皇宋通寶	①懐付近か ②底面+5cm	A 24.90 B 19.75	C 24.65 D 19.50	① 1.10 ③ 1.25 ② 1.05 ④ 1.30	2.71	1038年 北宋	対読・真書。完形。
9	銅銭 大觀通寶	①懐付近か ②底面+5cm	A 24.05 B 20.85	C 23.95 D 20.80	① 1.20 ③ 1.05 ② 1.00 ④ 1.20	1.74	1107年 北宋	対読・真書。完形。
10	銅銭 治平通寶	①頭位付近 ②底面+5cm	A 24.40 B 19.40	C 24.55 D 19.70	① 1.20 ③ 0.90 ② 1.00 ④ 1.00	2.46	1064年 北宋	対読・篆書。完形。
11	銅銭 永樂通寶	埋没土	A 24.80 B 20.55	C 24.85 D 20.45	① 1.50 ③ 1.55 ② 1.40 ④ 1.40	2.46	1587年 1617年 明	対読・真書。完形。
12	銅銭 永樂通寶	①骨のクリーニング時 に検出	A 23.60 B 21.10	C 23.60 D 20.60	① 1.30 ③ 1.30 ② 1.35 ④ 1.30	2.29	1587年 1617年 明	対読・真書。完形。

1 a 区 6号墓坑 (第40図 P L 35)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 洪武通寶	①背中側 ②底面+8cm	A 24.30 B 18.40	C 24.05 D 18.85	① 1.20 ③ 1.20 ② 1.35 ④ 1.00	2.07	1580年 明	対読・真書。完形。
2	銅銭 政和通寶	①懐付近か ②底面直上	A 24.45 B 20.70	C 24.55 D 20.90	① 1.20 ③ 1.35 ② 1.30 ④ 1.30	2.74	1111年 北宋	対読・真書。完形。
3	銅銭 咸平元寶	①懐付近か ②底面直上	A 24.10 B 18.80	C 24.10 D 18.70	① 1.05 ③ 1.10 ② 1.05 ④ -	1.83	998年 北宋	対読・真書。完形。

遺物観察表

1 a 区 7号墓坑 (第40図 P L 35)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 景定元寶	①頭位付近 ②底面直上	A 23.65 B 20.50	C 23.40 D 20.10	① 1.20 ③ 1.20 ② 1.30 ④ 1.25	2.30	1260年～ 南宋	対読・真書。完形。 背上に「四」?
2	銅銭 開元通寶	①頭位付近 ②底面直上	A 23.10 B 20.40	C 23.00 D 20.25	① 1.40 ③ 1.05 ② 1.40 ④ 1.10	1.97	621年 966年	対読・真書。完形。
3	銅銭 皇宋通寶	2と一括出土	A 24.10 B 20.00	C 23.85 D 19.95	① 1.35 ③ 1.00 ② 1.10 ④ 1.05	1.48	1038年 北宋	対読・真書。完形。
4	銅銭 元豐通寶	2と一括出土	A 23.65 B 19.00	C 22.65 D 18.95	① 1.30 ③ 1.35 ② 1.30 ④ 1.45	1.88	1078年 北宋	回読・真書。完形。
5	銅銭 朝鮮通寶	①懐付近か ②底面直上	A 23.55 B 20.30	C 23.40 D 20.30	① 1.35 ③ 1.10 ② 1.40 ④ 1.20	2.67	1423年 朝鮮	対読・真書。完形。
6	銅銭 治平元寶	埋没土	A (22.80) B 19.00	C 23.65 D 19.40	① 1.15 ③ 1.25 ② 1.40 ④ 1.00	1.78	1064年 北宋	回読・篆書。完形。

1 a 区 9号墓坑 (第40図 P L 35)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 永樂通寶	①頭位背中側か ②底面直上	A 24.90 B 20.00	C 24.95 D 20.10	① 1.50 ③ 1.20 ② 1.55 ④ 1.20	2.11	1587年 1617年 明	対読・真書。完形。
2	銅銭 洪武通寶	①頭位背中側か ②底面直上	A 22.55 B 18.00	C 22.70 D 18.20	① 1.30 ③ 1.35 ② 1.25 ④ 1.15	2.03	1580年 明	対読・真書。完形。
3	銅銭 元祐通寶	①頭位背中側か ②底面直上	A 24.10 B 19.20	C 24.20 D 19.15	① 1.30 ③ 1.25 ② 1.30 ④ 1.30	2.01	1086年 北宋	回読・篆書。完形。
4	銅銭 祥符通寶	①骨のクリーニング時 に検出	A 25.10 B 19.75	C 24.90 D 19.15	① 1.15 ③ 1.15 ② 1.20 ④ 1.10	2.75	1009年 北宋	回読・真書。完形。
5	銅銭 永樂通寶	①骨のクリーニング時 に検出	A 25.85 B 21.40	C 25.80 D 21.10	① 1.50 ③ 1.35 ② 1.70 ④ 1.70	2.16	1587年 1617年 明	対読・真書。錆化すすむ、ほぼ 完形。
6	銅銭 宣徳通寶	①骨のクリーニング時 に検出	A 25.95 B 21.10	C 25.95 D 20.70	① 1.30 ③ 1.30 ② 1.15 ④ 1.35	2.73	1433年 明	対読・真書。完形。

1 a 区 12号墓坑 (第40図 P L 35)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 祥符通寶	①懐付近か ②底面+3cm	A 24.80 B 18.90	C 24.60 D 19.00	① 1.40 ③ 1.15 ② 1.00 ④ 1.50	2.63	1009年 北宋	回読・真書。完形。
2	銅銭 祥符元寶	①懐付近か ②底面直上	A - B 18.35	C 24.35 D 19.30	① 1.10 ③ 1.20 ② 1.30 ④ 1.05	2.39	1008年 北宋	回読・真書。 ほぼ完形。
3	銅銭 元豐通寶	①懐付近か ②底面直上	A 24.50 B 20.20	C 24.65 D 20.80	① 1.20 ③ 1.30 ② 1.35 ④ 1.55	2.47	1078年 北宋	回読・行書。完形。

1 a 区 13号墓坑 (第40図 P L 35)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 至道元寶か	①骨のクリーニング時 に検出	A 24.75 B 19.30	C 24.90 D 17.25	① 1.20 ③ 1.00 ② 1.20 ④ 1.15	2.86	955年 北宋	真書・完形。
2	銅銭 開元通寶	①骨のクリーニング時 に検出	A 23.60 B 21.10	C 23.60 D 20.60	① 1.00 ③ 1.00 ② 1.00 ④ 1.00	1.65	621年 966年	対読・真書。完形。
3	銅銭 開元通寶	①骨のクリーニング時 に検出	A 25.75 B 21.70	C 25.50 D 21.30	① 1.30 ③ 1.40 ② 1.60 ④ 1.50	2.39	621年 966年	対読・真書。完形。

1 b 区 4号柱列-4 (第108図)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	古銭 治平元寶	埋没土	A 23.30 B 19.20	C 23.25 D 18.80	① 1.55 ③ 1.65 ② 1.55 ④ 1.80	3.56	1064年 北宋	回読・篆書。完形。

2 a 区 5号溝 (第18図)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 皇宋通寶	埋没土	A 24.20 B 20.15	C 23.90 D 19.45	① 1.45 ③ 1.35 ② 1.40 ④ 1.40	2.37	1039年 北宋	対読・篆書。完形。

2 a 区 115号ピット (第131図 P L 38)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 皇宋通寶	埋没土	A 25.00 B 19.25	C 25.00 D 18.25	① 1.25 ③ 1.20 ② 1.25 ④ 1.35	2.24	1039年 北宋	対読・真書。完形。

2 a 区 168号ピット (第131図 P L 38)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	銅銭 皇宋通寶?	埋没土	A 24.55 B 20.40	C 24.00 D 19.95	① 1.30 ③ 1.35 ② 1.40 ④ 1.25	2.98	1039年 北宋	対読・篆書。完形。

2 b 区 13号溝 (第36図)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
4	銅銭 皇宋通寶	②底面直上	A 24.00 B 19.75	C 24.00 D 19.05	① 1.25 ③ 0.90 ② 1.00 ④ 1.15	1.86	1054年 北宋	対読・篆書。完形。

2 b 区 1号集石 (第29図 P L 34)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
9	古銭 嘉祐通寶	②下層	A 24.35 B 19.45	C 24.40 D 19.60	① 1.30 ③ 1.30 ② 1.30 ④ 1.25	3.09	1056年 北宋	対読・真書。完形。
10	古銭 洪武通寶	埋没土	A 22.00 B 16.00	C 22.10 D 16.75	① 1.20 ③ 1.20 ② 1.20 ④ 1.20	2.24	1580年 明	対読・真書。完形。 背右に「一銭」

遺構外 (第174図 P L 45)

番号	種別 器種	出土位置 ①平面 ②垂直	銭外径 (mm)	銭内径 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	初鑄年代 時代	備考
1	古銭 嘉祐元寶	① 1a 区 30 J - 11 G ② 第 1 面	A 22.90 B 18.05	C 22.35 D 18.15	① 1.15 ③ 1.20 ② 1.20 ④ 1.15	2.32	1056年 北宋	回読・篆書。ほぼ完形。 孔に擦れの痕跡。
2	古銭 寛永通寶	① 1a 区 30 Q - 11 G	A 24.70 B 20.60	C 24.45 D 20.25	① 1.10 ③ 1.10 ② 1.10 ④ 1.10	2.14	江戸	完形。
3	古銭 元豊通寶	① 1a 区 30 R - 7 G ② 第 5 面	A 23.90 B 17.55	C 24.00 D 17.60	① 1.20 ③ 1.10 ② 1.10 ④ 1.20	2.47	1078年 北宋	回読・行書。完形。
4	古銭 皇宋通寶	① 1a 区 30 S - 7 G ② 第 5 面	A 24.75 B 20.00	C 24.85 D 19.50	① 1.20 ③ 1.10 ② 1.20 ④ 1.15	2.81	1039年 北宋	回読・篆書。完形。
5	古銭 天禧通寶	① 1b 区南東隅。 ② 第 1・2 面	A 25.05 B 20.55	C - D 20.55	① 0.95 ③ - ② 0.95 ④ 1.00	1.75	1017年 北宋	回読・真書。ほぼ完形。
6	古銭 元豊通寶	① 1 b 区 ② 5 面	A - B -	C - D -	① 1.20 ③ 1.20 ② 1.10 ④ -	0.97	1078年 北宋	回読・行書。残存 1/2
7	銅銭 永樂通寶	① 1b 区 30 G - 6 G	A 24.85 B 21.80	C 24.80 D 21.80	① 1.25 ③ 1.20 ② 1.15 ④ 1.20	1.99	1587年 1617年	対読・真書。完形。
8	銅銭 元豊通寶	① 2a 区表採	A 21.60 B 17.90	C 22.00 D 18.35	① 1.00 ③ 1.10 ② 1.00 ④ 1.00	1.58	1078年 1580年	回読・篆書。完形。
9	銅銭 元豊通寶	① 2a 区 31 C - 7 G ② 第 3・4 面	A 24.05 B 19.10	C 24.10 D 19.10	① 1.20 ③ 1.10 ② 1.20 ④ 1.25	2.58	1078年 1580年	回読・行書。完形。
10	銅銭 宣和通寶	① 2a 区 31 C - 11 G	A 25.50 B 20.85	C 25.25 D 20.30	① 1.30 ③ 1.45 ② 1.40 ④ 1.50	2.98	1119年 北宋	対読・篆書。完形。
11	銅銭 淳化元寶	① 2a 区 40 P - 9 G	A - B -	C - D -	① - ③ - ② 1.20 ④ -	1.17	990年 北宋	回読・真書。1/2。
12	銅銭 開元通寶	① 2a 区 40 P - 12 G ② 第 5 面	A 24.10 B 20.80	C 24.05 D 19.90	① 1.25 ③ 1.20 ② 1.20 ④ 1.20	3.35	621年 966年	対読・真書。完形。
13	銅銭 元豊通寶	① 2b 区 1号溝 ② 埋没土	A 24.95 B 18.25	C 24.95 D 18.75	① 1.10 ③ 1.15 ② 1.10 ④ 1.15	2.92	1078年 1580年	回読・篆書。完形。
14	銅銭 至和通寶	① 2b 区 1号溝 ② 埋没土	A 24.60 B 19.75	C 24.45 D 19.20	① 1.00 ③ 1.00 ② 1.00 ④ 1.00	2.52	1054年 北宋	対読・真書。完形。
15	銅銭 熙寧元寶	① 2b 区表採	A 24.15 B 20.25	C 24.30 D 20.35	① 1.20 ③ 1.30 ② 1.40 ④ 1.30	3.77	1068年 北宋	回読・真書。完形。
16	銅銭 寛永通寶	① 2b 区 31 B - 16 G	A 22.85 B 18.55	C - D -	① 0.80 ③ 0.85 ② 0.80 ④ -	1.18	江戸	一部欠損。

参考文献一覧

- 1 山崎 一 『群馬県古城墓址の研究』上巻 1978
- 2 玉村町教育委員会 『上之手八王子遺跡』1991
- 3 玉村町教育委員会 『玉村町の遺跡』1992
- 4 玉村町教育委員会 『神人村Ⅱ遺跡』1992
- 5 玉村町教育委員会 『尾柄町Ⅱ遺跡』1992
- 6 玉村町教育委員会 『蟹沢Ⅱ遺跡』1993
- 7 玉村町教育委員会 『蟹沢Ⅳ遺跡』1993
- 8 玉村町教育委員会 『上之手石塚Ⅲ遺跡』1993
- 9 玉村町教育委員会 『上之手石塚Ⅳ遺跡』1993
- 10 玉村町教育委員会 『赤城Ⅱ遺跡』1993
- 11 玉村町教育委員会 『原浦Ⅱ遺跡』1996
- 12 玉村町教育委員会 『中道西遺跡(第1次・第2次調査)』1996
- 13 玉村町教育委員会 『三境遺跡・三境Ⅱ遺跡』1997
- 14 玉村町教育委員会 『原浦遺跡』1998
- 15 玉村町教育委員会 『曲田遺跡』1999
- 16 玉村町教育委員会 『曲田Ⅱ遺跡』1999
- 17 玉村町教育委員会 『上之手地区遺跡群(1)・(2) 稲荷森遺跡 天神塚遺跡 宇貫地区遺跡群 稲荷山遺跡群 下茂木地区遺跡群 下茂木神明Ⅱ遺跡 上新田地区遺跡群』1999
- 18 玉村町教育委員会 『宇貫遺跡』1999
- 19 玉村町教育委員会 『滝川南遺跡』1999
- 20 玉村町教育委員会 『宮ノ下遺跡 若王子Ⅱ遺跡 天神巡りⅢ遺跡』2000
- 21 玉村町教育委員会 『行人塚Ⅲ遺跡』2000
- 22 玉村町教育委員会 『十王堂・十王堂Ⅱ遺跡』2000
- 23 玉村町教育委員会 『上之手石塚遺跡』2000
- 24 玉村町教育委員会 『中袋遺跡』2000
- 25 玉村町教育委員会 『八幡原赤塚Ⅱ遺跡』2000
- 26 玉村町教育委員会 『田口下屋敷遺跡』2000
- 27 玉村町教育委員会 『蟹沢遺跡』2001
- 28 玉村町教育委員会 『角淵城遺跡』2001
- 29 玉村町教育委員会 『角淵伊勢山遺跡・角淵伊勢山Ⅳ遺跡 下郷Ⅱ遺跡・天神塚Ⅱ遺跡・八幡原赤塚遺跡・薬師遺跡』2002
- 30 玉村町教育委員会 『上飯島芝根遺跡・上飯島芝根Ⅱ遺跡』2002
- 31 玉村町教育委員会 『松原Ⅲ遺跡』2003
- 32 玉村町教育委員会 『一万田遺跡』2003
- 33 玉村町教育委員会 『オト力塚遺跡』2003
- 34 玉村町教育委員会 『一本木遺跡』2004
- 35 玉村町教育委員会 『横堀遺跡・街道南遺跡』2004
- 36 玉村町教育委員会 『内田屋敷遺跡・原屋敷遺跡・上之手立野遺跡』2004

- 37 玉村町教育委員会『宇貫Ⅱ遺跡（第1次・第2次調査）』2005
- 38 玉村町教育委員会『神明遺跡・行人塚遺跡・十王堂Ⅲ遺跡・中郷遺跡・松原Ⅱ遺跡・杉山遺跡』2006
- 39 玉村町教育委員会『砂町遺跡（第1～3次調査）・尾柄町Ⅲ遺跡・中之坊遺跡』2007
- 40 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『上福島尾柄町遺跡』2002
- 41 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島曲戸遺跡・上福島遺跡』2002
- 42 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『中内村前遺跡（1）』2002
- 43 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島久保田遺跡・福島大光坊遺跡』2003
- 44 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『上福島中町遺跡』2003
- 45 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島飯塚遺跡（1）』2007
- 46 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島飯塚遺跡（2）』2008
- 47 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島飯玉遺跡』2008
- 48 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『上新田新田西遺跡・上新田赤塚遺跡』2009
- 49 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『福島大島遺跡』2009
- 50 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『齊田中耕地遺跡』2010
- 51 中島直樹・吉澤学「群馬県玉村町における条里地割の復元」『東国史論 19』2004
- 52 玉村町教育委員会『中道東遺跡・中道西Ⅱ遺跡・蛭堀東遺跡（第2次調査）・中道東Ⅱ遺跡・中道東Ⅱ遺跡（第2次調査）』2008

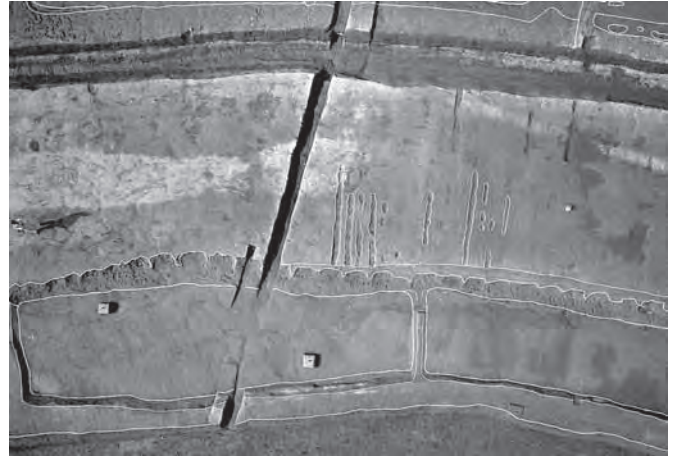
抄 録

書名ふりがな	さいだたけのうちいせき
書名	齊田竹之内遺跡
副書名	埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	516
編著者名	飯田陽一・石守 晃
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20110318
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田 784 - 2
遺跡名ふりがな	さいだたけのうちいせき
遺跡名	齊田竹之内遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんさわぐんたまむらまちさいだあざたけのうち
遺跡所在地	群馬県佐波郡玉村町齊田字竹之内
市町村コード	10464
遺跡番号	622
北緯（日本測地系）	36° 18' 05.1"
東経（日本測地系）	139° 07' 11.1"
北緯（世界測地系）	36° 18' 59.6"
東経（世界測地系）	139° 06' 59.6"
調査期間	2000822 - 20021231
調査面積	30.660㎡
調査原因	道路建設工事
種別	集落／田・畠／墓
主な時代	古墳／平安／中世／江戸
遺跡概要	集落－古墳－竪穴住居 1 + 平安－竪穴住居 2 - 須恵器 + 土師器 + 鉄製品／集落－中世－方形館 3 + 掘立柱建物 81- 井戸 23- 土坑 + 陶磁器 + 石製品／生産 - 平安－水田 + 江戸 - 水田 - 耕地復旧痕／墓－中世－墓坑 10+ 銭貨
特記事項	中世の用水路と方形館。江戸時代の火山災害復旧痕。
要約	古墳時代と平安時代の住居が微高地上に散在する。 平安時代の火山堆積物下から条里区画水田跡が低地部分で確認される。 幅 20 m を超える中世用水路が調査地内で直角に曲がり、屈曲点を囲むように 3 か所の中世方形館が隣接していた。館区画内の 81 棟の建物や井戸など多数の施設を調査する。 江戸時代の調査地点は水田や畠となり、1783（天明 3）年の浅間山噴火で降下した軽石を除去する耕地復旧作業の痕跡が顕著であった。

写真図版



① 1 a区 1面全景 (西から)



② 1号復旧溝と畦下復旧坑 (上方が西)



③ 2号復旧溝 (北から)



④ 3号復旧溝全景 (上方が南)



⑤ 3号復旧溝 (西から)

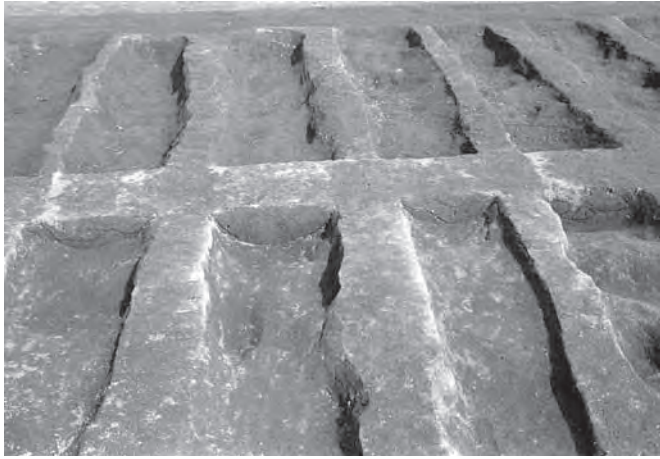


⑥ 2号畠全景 (上方が西)



⑦ 2号畠 (北から)

PL.2



① 2号畠断面（西から）



② 2号復旧溝全景（上方が東）



③ 5号畠全景（東から）



④ 5号畠断面（西から）



⑤ 6号畠（東から）



⑥ 4号畠（東から）



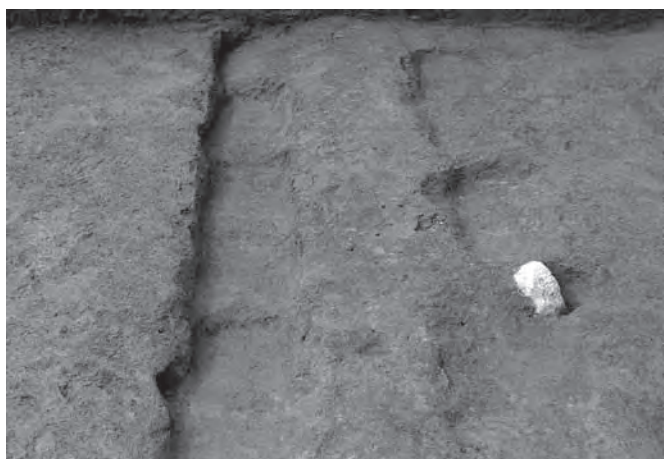
⑦ 4号畠全景（南から）



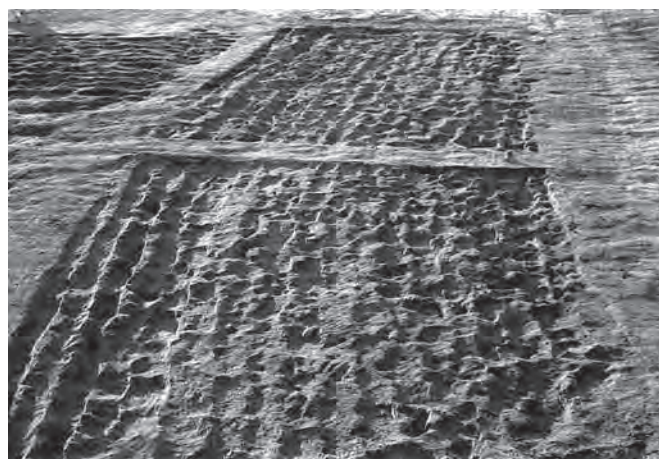
① 2 a 区第1面の調査風景（南西から）



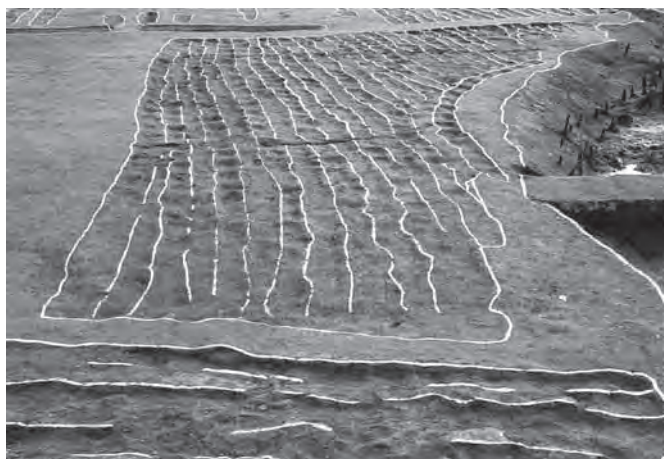
② 4号復旧溝全景（東から）



③ 4号復旧溝 耕具痕（東から）



④ 4号復旧溝（東から）



⑤ 5号復旧溝（北から）



⑥ 7号畠（北から）



⑦ 8号畠（東から）



⑧ 9号畠（東から）

PL.4



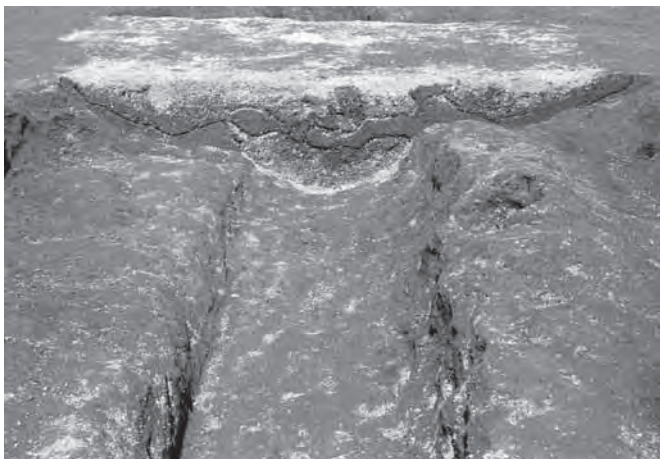
① 畦下復旧坑 確認状態 (南から)



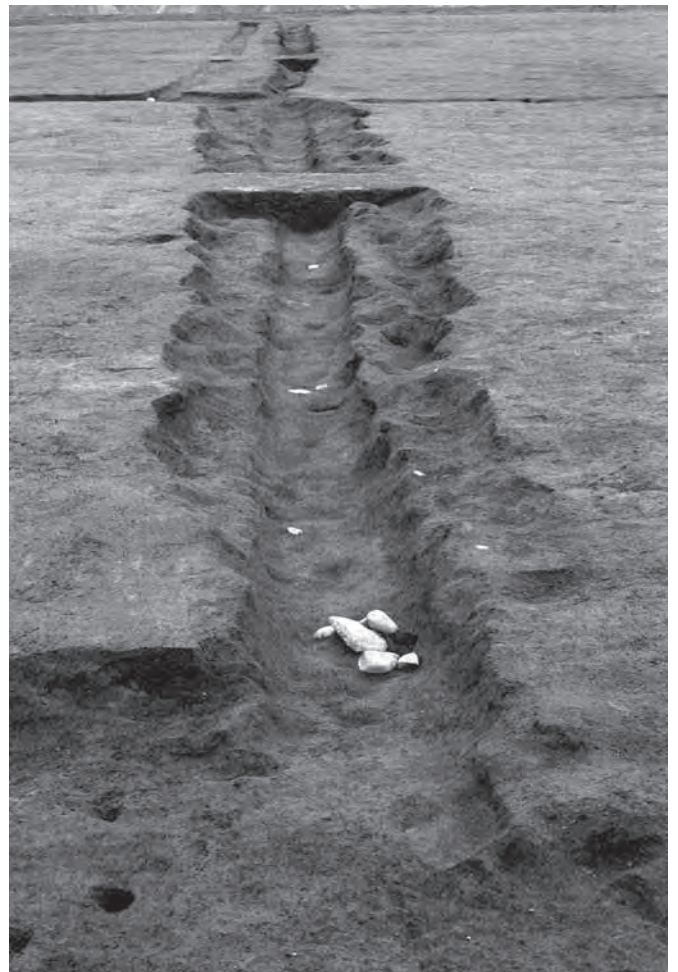
② 畦下復旧坑全景 (北から)



③ 畦下復旧坑 (北から)



④ 2 a区3号溝E断面 (南から)



⑤ 2 a区3号溝全景 (南から)



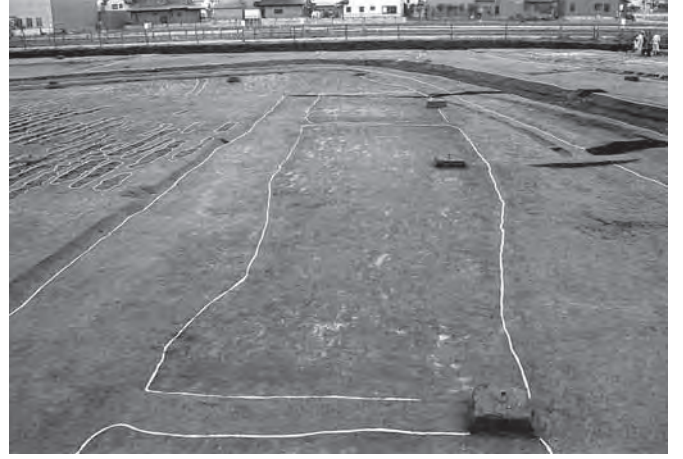
⑥ 2 a区7号溝全景 (南から)



⑦ 2 a区10・11・12号溝全景 (南から)



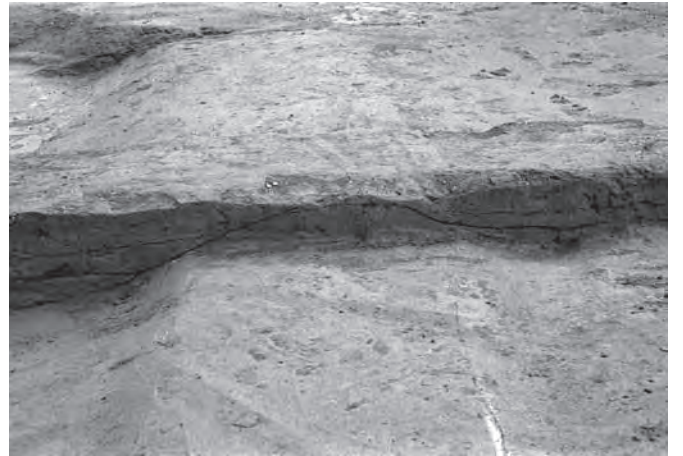
① 0号溝と縁辺の畦畔（北から）



② 1区北側1面水田（北から）



③ 1区南側1面水田（西から）

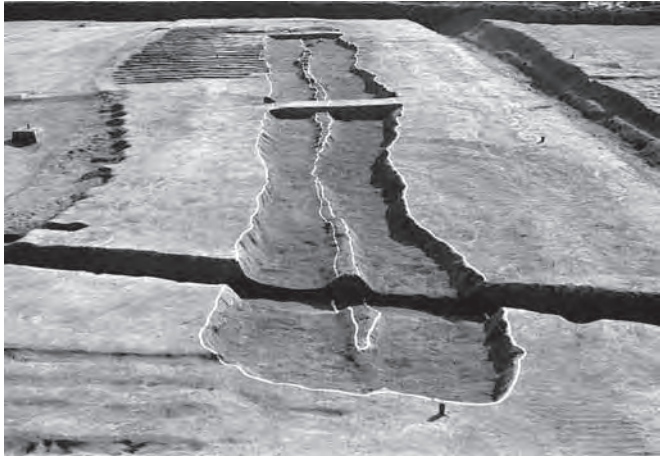


④ 1区1面水田1畦断面（西から）

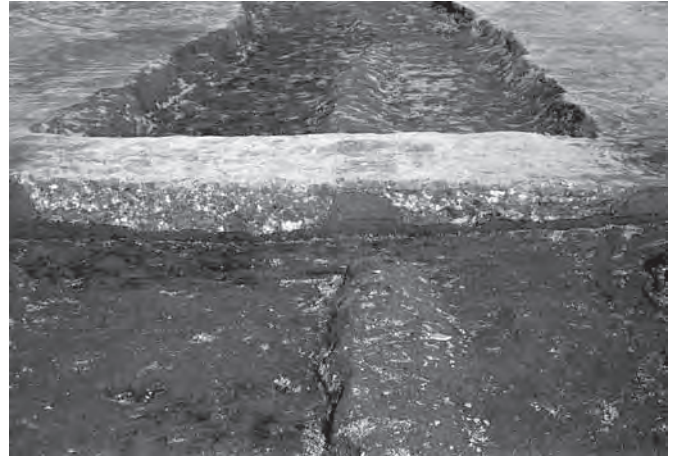


⑤ 2 b区第1面全景（東から）

PL.6



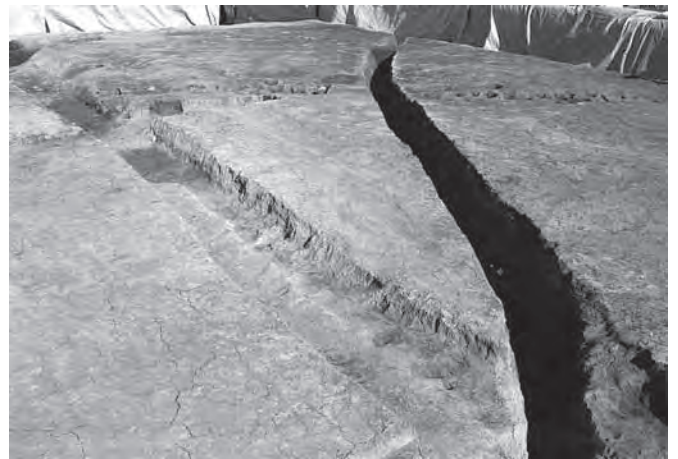
① 1区粘土坑（北から）



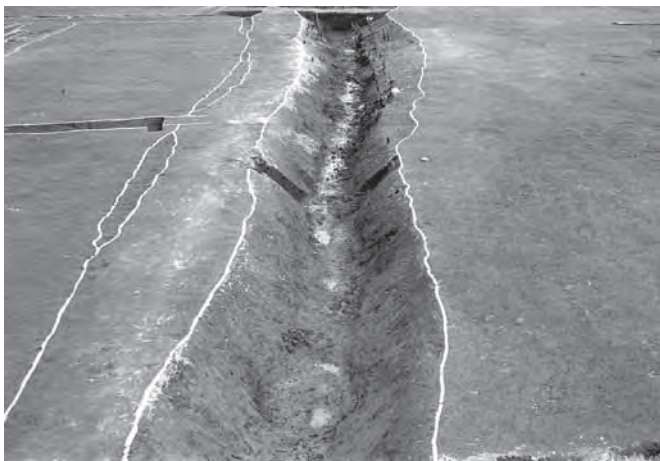
② 1区粘土坑断面（南から）



③ 2 a区15・18号溝（西から）



④ 2 a区38号溝北側（南西から）



⑤ 2 b区1号溝（15号溝上面）（西から）



⑥ 2 b区1号集石（東から）



⑦ 2 b区1号集石内遺物④（北から）



⑧ 2 b区18号（手前）・15号（奥）溝（北西から）



① 2 a 区34号溝脇畦状遺構水口（東から）



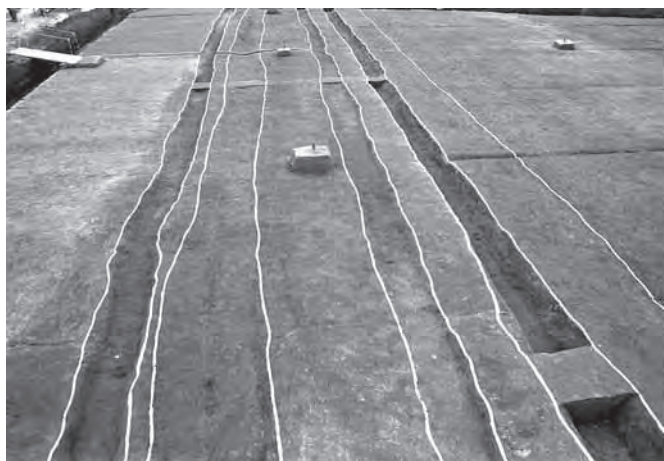
② 2 a 区34号溝脇畦状遺構断面（南から）



③ 2 b 区12号溝（南東から）



④ 2 b 区12号溝水口（南から）



⑤ 2 a 区30・32～34号溝（北から）



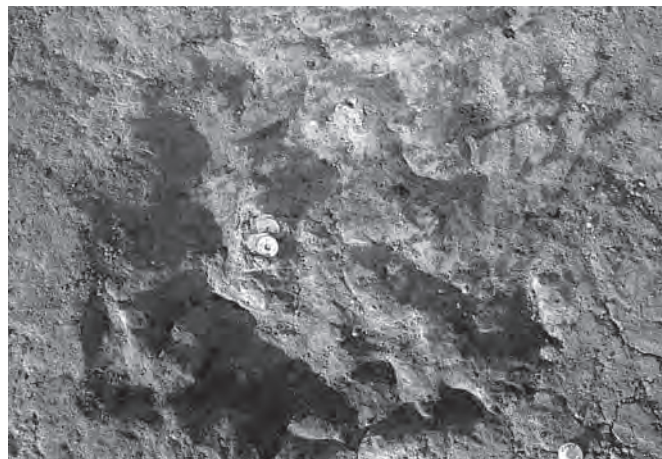
⑦ 2 b 区28・29号溝（南から）



⑥ 2 b 区31～35号溝（南東から）



① 1号墓坑（北から）



② 3号墓坑（南から）



③ 4号墓坑（西から）



④ 5号墓坑（東から）



⑤ 6号墓坑（西から）



⑥ 7号墓坑（北から）



⑦ 9号墓坑（東から）



⑧ 12号墓坑（西から）



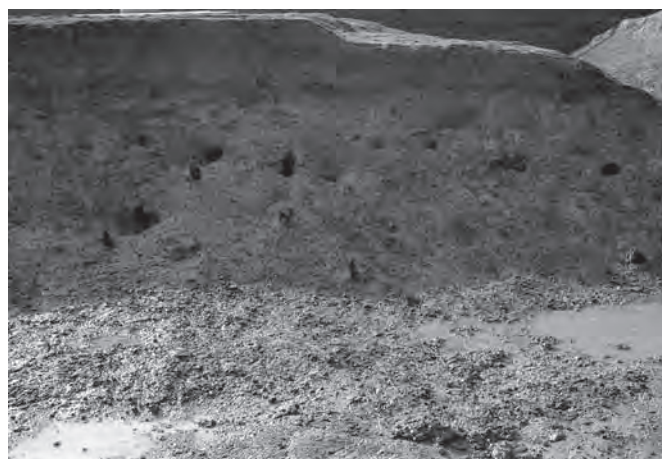
① 8号A墓坑（北から）



② 10号A墓坑（西から）



③ 11号A墓坑（北から）



④ 大溝氾濫部分の杭（北から）



⑤ 大溝氾濫部分の杭（西から）



⑥ 大溝北側の杭1・2（南西から）



⑦ 大溝氾濫部分の杭4・5・6（北から）



⑧ 大溝氾濫部分の杭9（北から）



① 1区1号溝 (北から)



② 1区11号溝 (北から)



③ 1区10号溝 (北から)



④ 1区17・18・19号溝 (南から)



⑤ 1区15・16号溝 (東から)



① 1a区全景（上方が南）



② 1a区全景（東から）



③ 南館内の遺構（上方が北）



④ 1a区西側全景（上方が東）



⑤ 1a区西側全景（南から）



① 2a区全景（上方が東）



② 2b区全景（上方が西）



① 北館西側の21号西・22号溝（北から）



③ 北館南側の21号南溝（東から）



② 北館南西隅付近（西から）



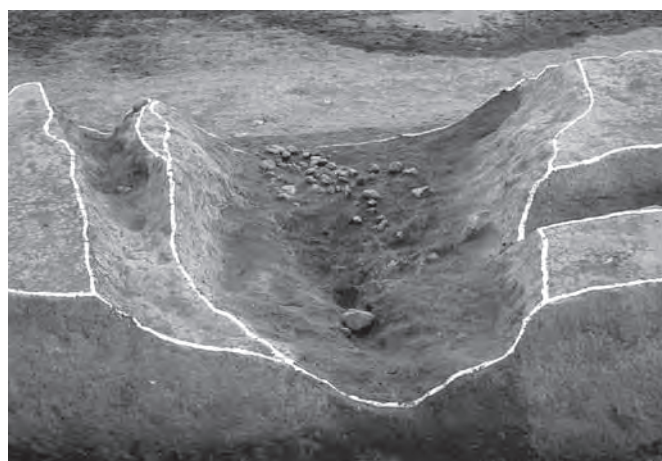
④ 北館東側の51号溝（北から）



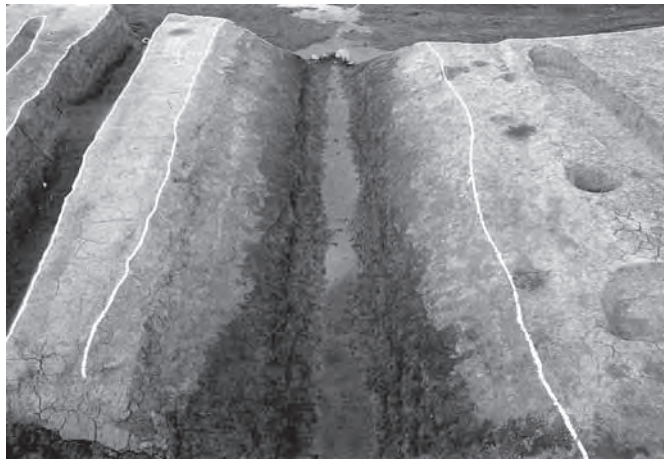
⑤ 21号南溝遺物出土状態（西から）



⑥ 37号溝上面礫（西から）



⑦ 37号溝底面（北から）



① 南館西側の35号溝 (南から)



② 南館北側の33・34・36号溝 (東から)



③ 南館9号溝 土橋状高まり (南から)



④ 西館東側の溝群 (南から)



⑤ 西館北側40号北溝 (西から)



⑥ 西館42号溝断面 (北西から)



⑦ 西館40号東溝断面 (北東から)



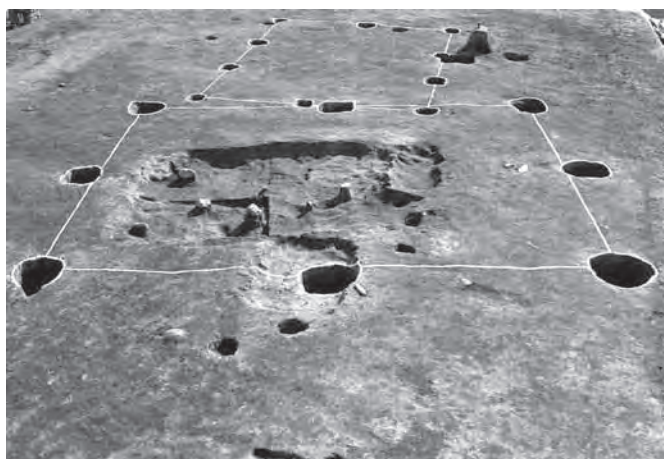
⑧ 西館西側の19・40号西溝 (南から)



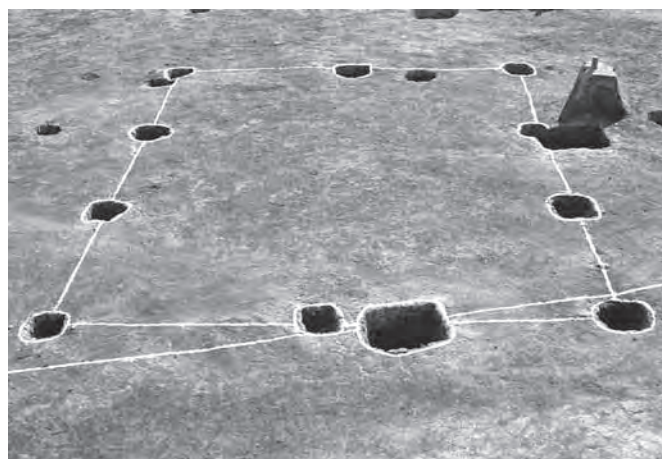
① 1号掘立柱建物（南から）



② 22号掘立柱建物（南から）



③ 26号掘立柱建物（北から）



④ 27号掘立柱建物（北から）



⑤ 30号掘立柱建物（東から）



⑥ 34号掘立柱建物（西から）



⑦ 南館内の柱穴群（東から）



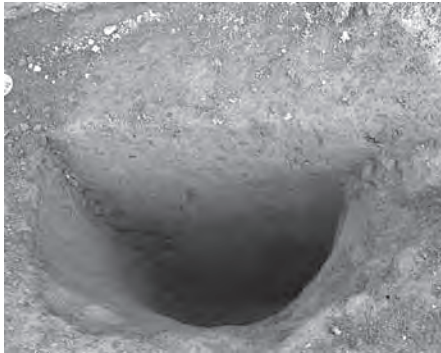
① 1号掘立柱建物-8断面(南から)



② 2号掘立柱建物-7断面(南から)



③ 3号掘立柱建物-8断面(南から)



④ 4号掘立柱建物-6断面(南から)



⑤ 5号掘立柱建物-2断面(南から)



⑥ 6号掘立柱建物-3断面(南から)



⑦ 7号掘立柱建物-7断面(南から)



⑧ 8号掘立柱建物-1断面(南から)



⑨ 8号掘立柱建物-2断面(南から)



⑩ 9号掘立柱建物-3断面(南から)



⑪ 11号掘立柱建物-7断面(南から)



⑫ 12号掘立柱建物-9断面(南から)



⑬ 13号掘立柱建物-7断面(南から)



⑭ 14号掘立柱建物-6断面(南から)



⑮ 16号掘立柱建物-8断面(南から)



① 17号掘立柱建物-4断面(南から)



② 17号掘立柱建物-7断面(南から)



③ 18号掘立柱建物-4断面(南から)



④ 19号掘立柱建物-2断面(南から)



⑤ 20号掘立柱建物-13断面(南から)



⑥ 21号掘立柱建物-3断面(南から)



⑦ 22号掘立柱建物-6断面(南から)



⑧ 23号掘立柱建物-5断面(南から)



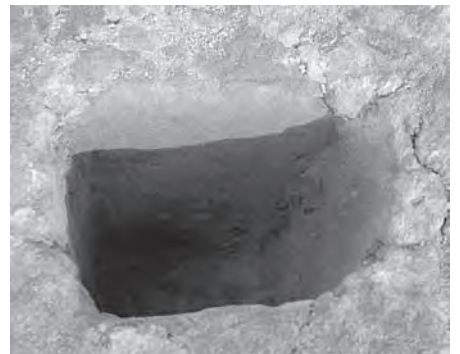
⑨ 24号掘立柱建物-7断面(南から)



⑩ 25号掘立柱建物-6断面(南から)



⑪ 26号掘立柱建物-1断面(南から)



⑫ 27号掘立柱建物-1断面(南から)



⑬ 27号掘立柱建物-4断面(南から)



⑭ 28号掘立柱建物-2断面(南から)



⑮ 28号掘立柱建物-5断面(南から)



① 28号掘立柱建物-8断面(南から)



② 28号掘立柱建物-11(東から)



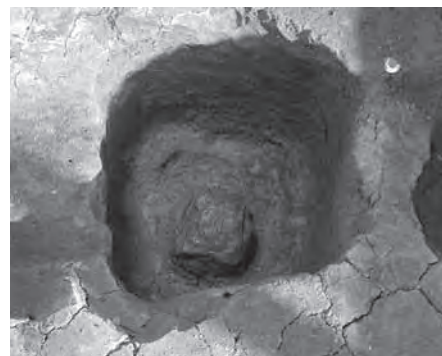
③ 28号掘立柱建物-15断面(南から)



④ 29号掘立柱建物-6(東から)



⑤ 29号掘立柱建物-9断面(南から)



⑥ 29号掘立柱建物-11(南から)



⑦ 30号掘立柱建物-4断面(南から)



⑧ 31号掘立柱建物-1断面(南から)



⑨ 32号掘立柱建物-5断面(南から)



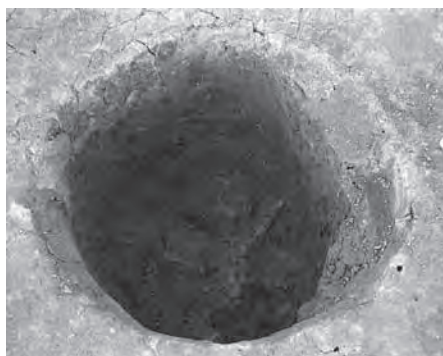
⑩ 32号掘立柱建物-7(南から)



⑪ 32号掘立柱建物-8断面(南から)



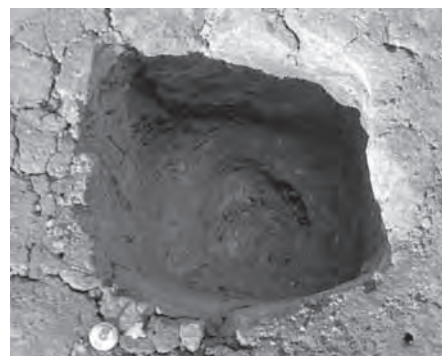
⑫ 32号掘立柱建物-13断面(南から)



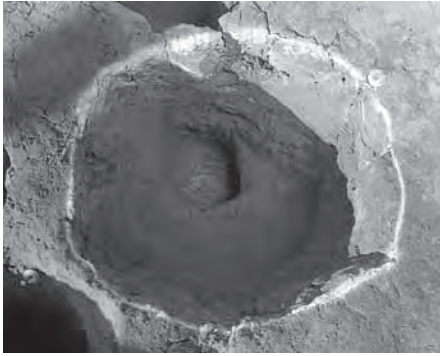
⑬ 33号掘立柱建物-8(南から)



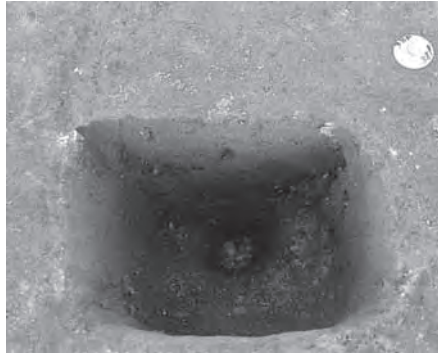
⑭ 35号掘立柱建物-4断面(南から)



⑮ 36号掘立柱建物-2(東から)



① 37号掘立柱建物-2 (南東から)



② 37号掘立柱建物-3 断面 (南から)



③ 37号掘立柱建物-13 (東から)



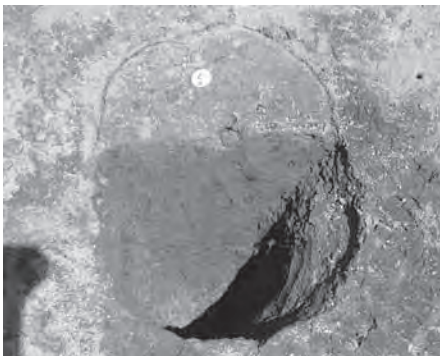
④ 38号掘立柱建物-4 断面 (南から)



⑤ 39号掘立柱建物-8 断面 (東から)



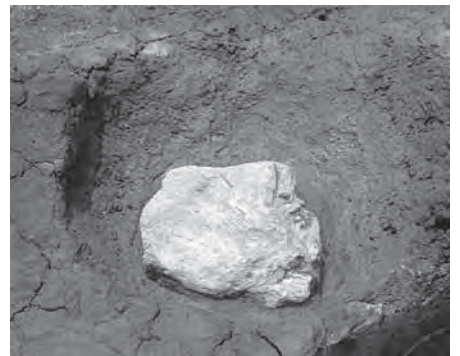
⑥ 40号掘立柱建物-6 (東から)



⑦ 41号掘立柱建物-2 断面 (南西から)



⑧ 42号掘立柱建物-4 断面 (南から)



⑨ 42号掘立柱建物-5 (西から)



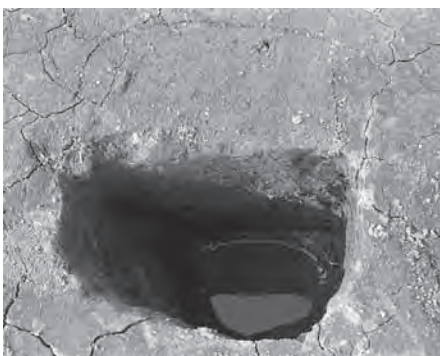
⑩ 43号掘立柱建物-6 断面 (南から)



⑪ 44号掘立柱建物-2 断面 (南から)



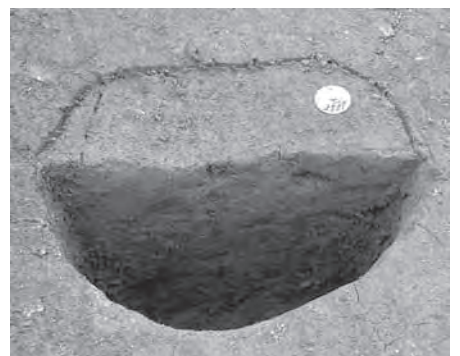
⑫ 45号掘立柱建物-6 断面 (南から)



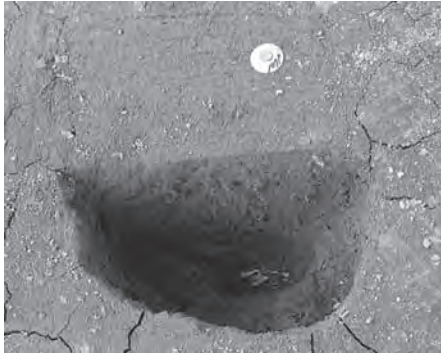
⑬ 46号掘立柱建物-6 断面 (南東から)



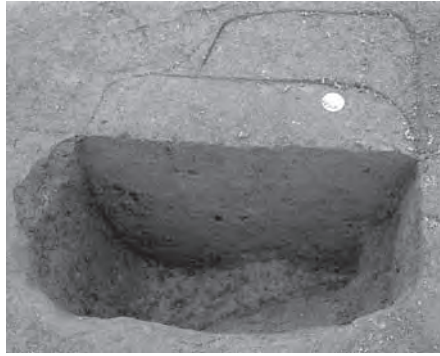
⑭ 47号掘立柱建物-8 断面 (南東から)



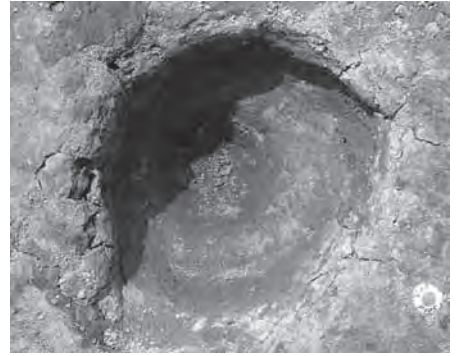
⑮ 48号掘立柱建物-3 断面 (南から)



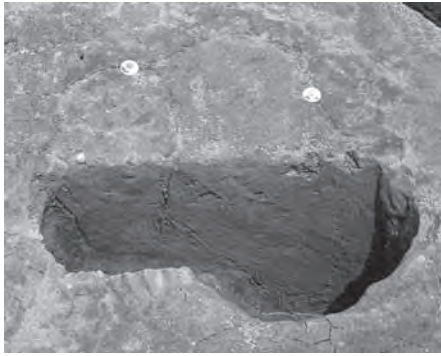
① 49号掘立柱建物-9断面(南から)



② 50号掘立柱建物-6断面(西から)



③ 51号掘立柱建物-3(北から)



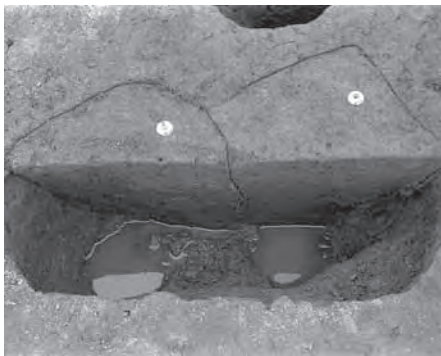
④ 51号掘立柱建物-6断面(西から)



⑤ 52号掘立柱建物-1断面(南から)



⑥ 52号掘立柱建物-2(左奥)(北から)



⑦ 52号掘立柱建物-3(左)断面(南から)



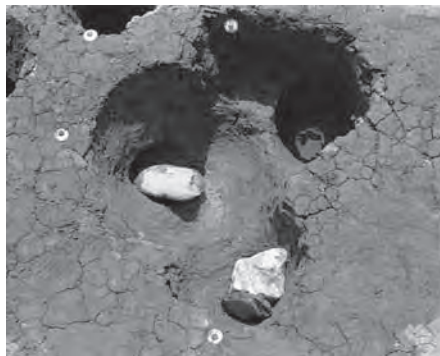
⑧ 53号掘立柱建物-1断面(南から)



⑨ 53号掘立柱建物-9断面(南から)



⑩ 53号掘立柱建物-10断面(南から)



⑪ 54号掘立柱建物-3(手前)(北から)



⑫ 55号掘立柱建物-6断面(西から)



⑬ 56号掘立柱建物-6断面(西から)



⑭ 1号柱列-2断面(南から)



⑮ 4号柱列-2断面(南から)



① 1 a区59号ピット (北から)



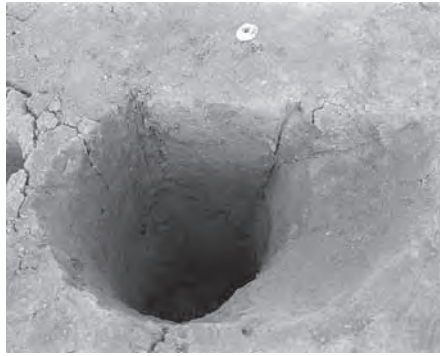
② 1 a区62号ピット断面 (北から)



③ 1 a区89号ピット (北から)



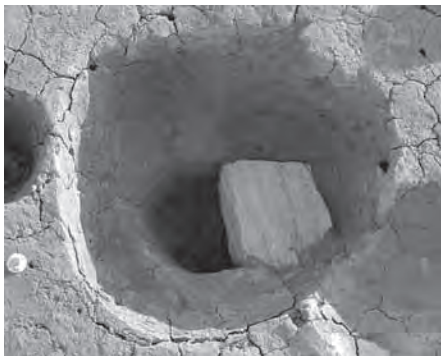
④ 1 a区119号ピット (北から)



⑤ 1 a区146号ピット断面 (南から)



⑥ 1 a区153号ピット (南から)



⑦ 1 a区178号ピット (西から)



⑧ 1 a区197号ピット断面 (南から)



⑨ 1 a区247号ピット断面 (南から)



⑩ 1 a区282号ピット断面 (南から)



⑪ 1 a区319号ピット断面 (南から)



⑫ 1 a区327号ピット断面 (南から)



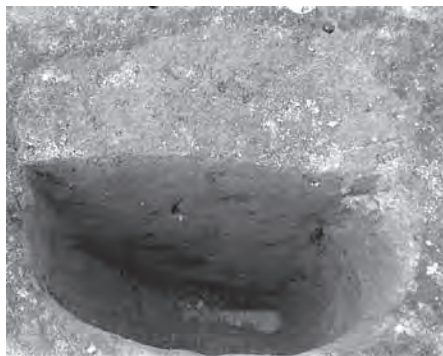
⑬ 1 a区483号ピット断面 (南から)



⑭ 1 a区563号ピット断面 (南から)



⑮ 1 a区625号ピット断面 (南から)



① 1 a区649号ピット断面 (南から)



② 1 a区700号ピット断面 (南から)



③ 1 a区760号ピット断面 (南から)



④ 1 a区815号ピット断面 (南から)



⑤ 1 b区36・37号ピット (南から)



⑥ 1 b区70号ピット (南から)



⑦ 1 b区77号ピット断面 (西から)



⑧ 1 b区79号ピット (北から)



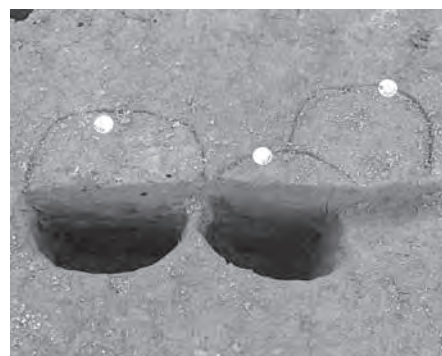
⑨ 1 b区94号ピット断面 (南から)



⑩ 1 b区148・149号ピット断面 (南から)



⑪ 1 b区194・195号ピット断面 (南から)



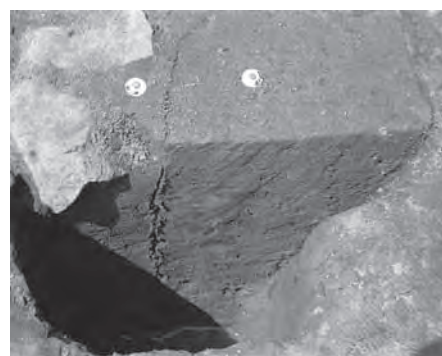
⑫ 1 b区228・230号ピット断面 (南から)



⑬ 1 b区361・362号ピット断面 (南から)



⑭ 1 b区369・370号ピット断面 (南から)



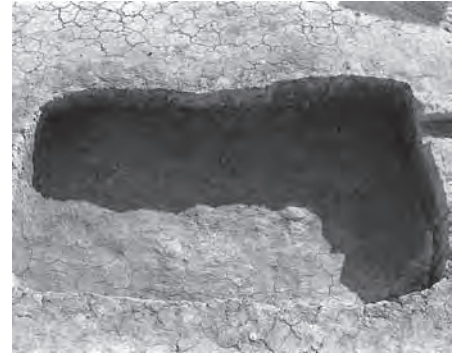
⑮ 1 b区413・414号ピット断面 (南から)



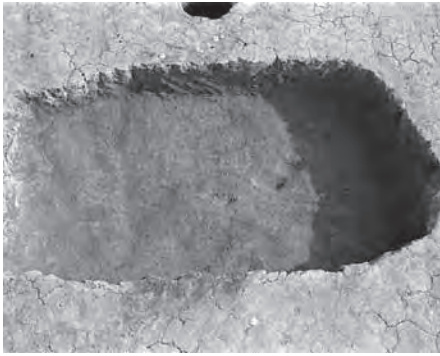
① 1号土坑 (北から)



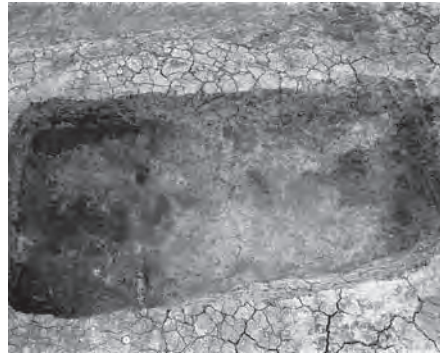
② 3号土坑断面 (西から)



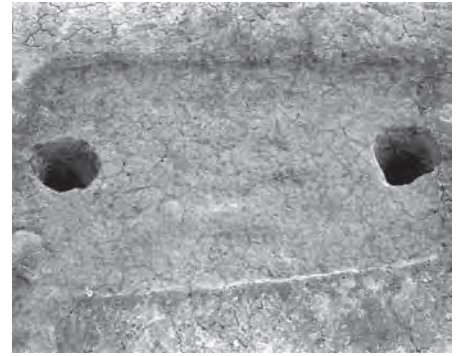
③ 7号土坑 (北から)



④ 11号土坑 (西から)



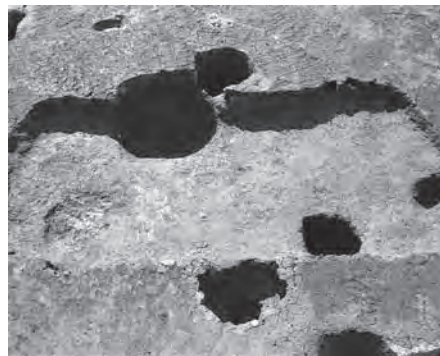
⑤ 20号土坑 (南から)



⑥ 23号土坑 (北から)



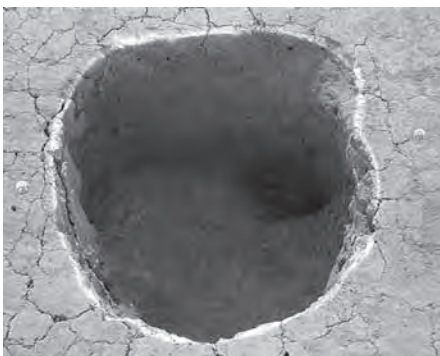
⑦ 24号土坑 (北から)



⑧ 30号土坑 (北から)



⑨ 2号土坑 (北から)



⑩ 5号土坑 (北から)



⑪ 8号土坑 (北から)



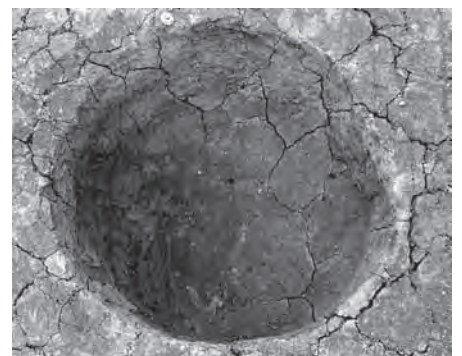
⑫ 10号土坑断面 (南から)



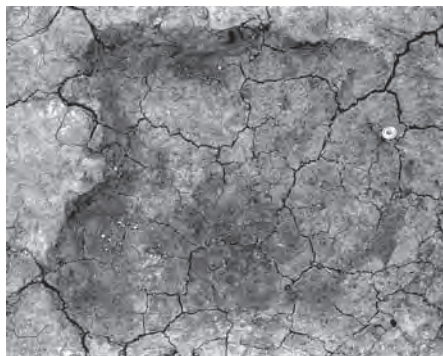
⑬ 16号土坑 (北から)



⑭ 17号土坑 (北から)



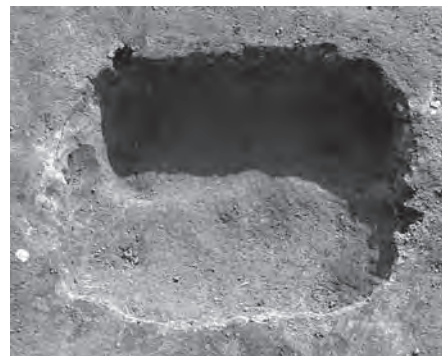
⑮ 21号土坑 (南から)



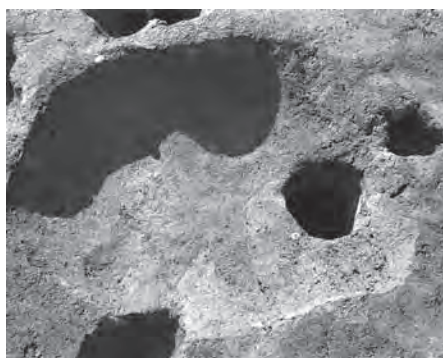
① 22号土坑 (南から)



② 27号土坑断面 (南から)



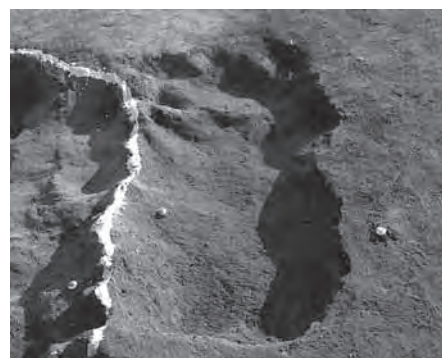
③ 28号土坑 (北から)



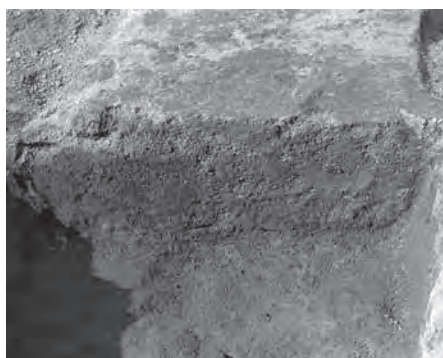
④ 29号土坑 (北から)



⑤ 31号土坑 (東から)



⑥ 32号土坑 (北から)



⑦ 35号土坑断面 (東から)



⑧ 40号土坑 (北から)



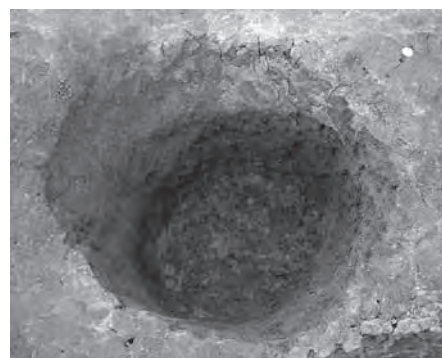
⑨ 41号土坑 (西から)



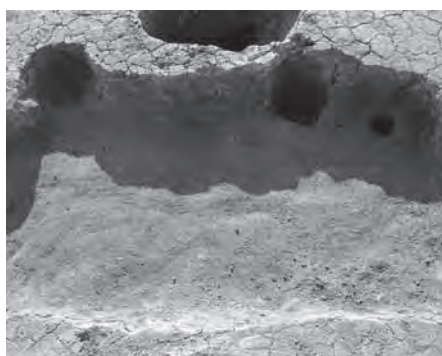
⑩ 18号土坑 (南から)



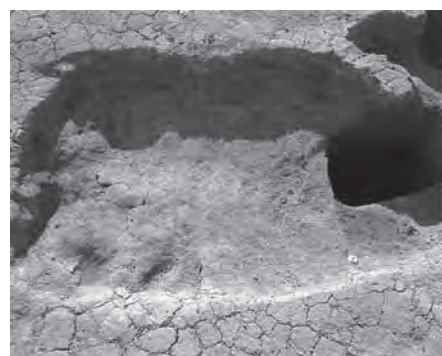
⑪ 6号土坑 (北から)



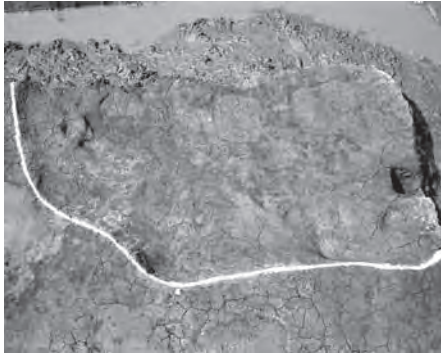
⑫ 19号土坑 (南から)



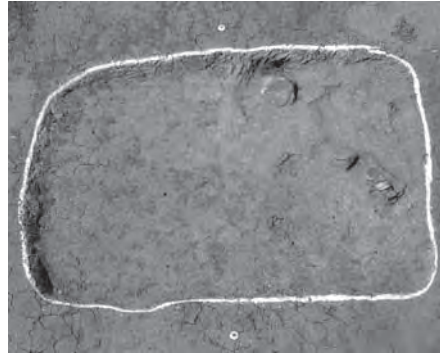
⑬ 34号土坑 (北から)



⑭ 38号土坑 (北西から)



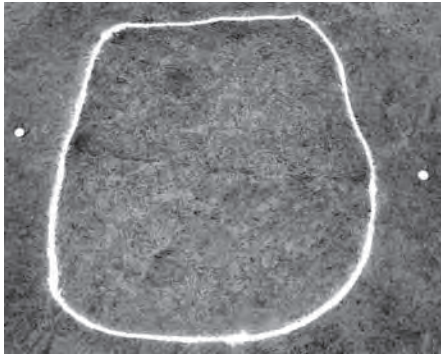
① 1 b区1号土坑 (南から)



② 1 b区2号土坑 (南から)



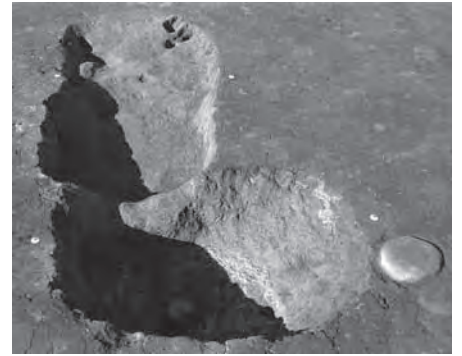
③ 1 b区3号土坑断面 (西から)



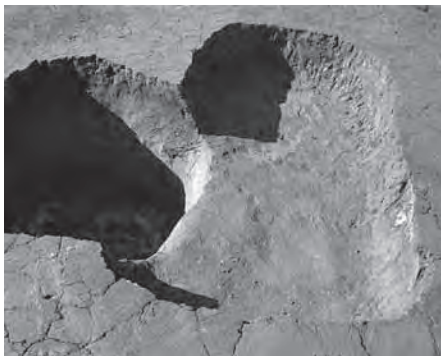
④ 1 b区4号土坑 (南から)



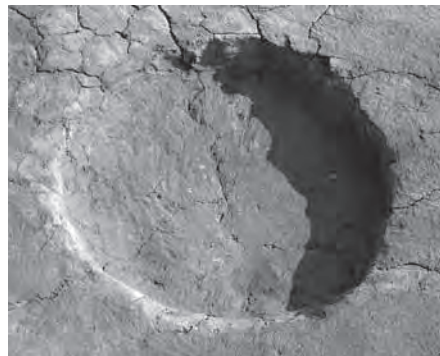
⑤ 2 a区55号土坑断面 (南から)



⑥ 2 a区67 (手前)・68号土坑 (東から)



⑦ 2 a区69 (左)・70号土坑 (東から)



⑧ 2 a区76号土坑 (西から)



⑨ 2 a区67号土坑断面 (南から)



⑩ 2 a区69号土坑断面 (東から)



⑪ 2 a区77号土坑断面 (東から)



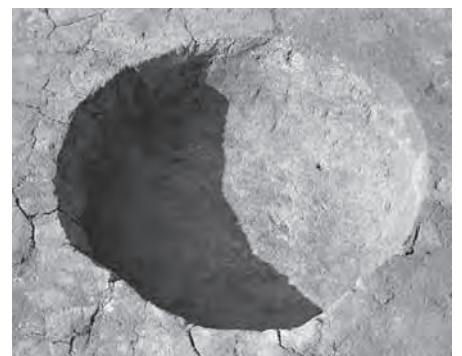
⑫ 2 a区72号土坑 (西から)



⑬ 2 a区64号土坑 (東から)



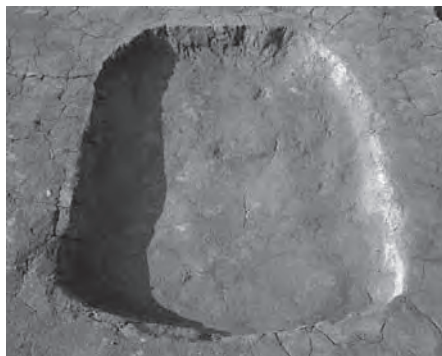
⑭ 2 a区63号土坑断面 (東から)



⑮ 2 a区73号土坑 (東から)



① 2 a区74号土坑 (東から)



② 2 a区75号土坑 (東から)



③ 2 a区65号土坑断面 (南から)



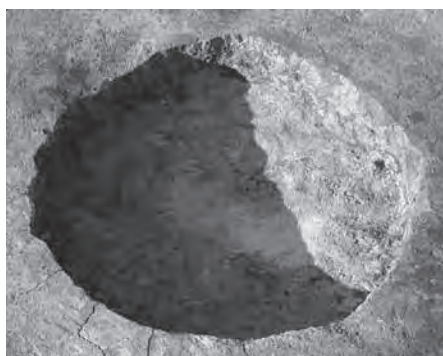
④ 2 a区172号土坑 (東から)



⑤ 2 a区56号土坑断面 (南から)



⑥ 2 a区62号土坑断面 (西から)



⑦ 2 a区85号土坑 (南東から)



⑧ 2 a区61号土坑断面 (東から)



⑨ 2 a区48号土坑 (南から)



⑩ 2 a区88号土坑断面 (南から)



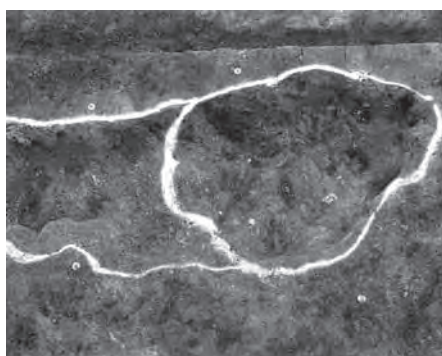
⑪ 2 a区79号土坑断面 (南から)



⑫ 2 a区48号土坑断面 (東から)



⑬ 2 a区87号土坑断面 (南から)



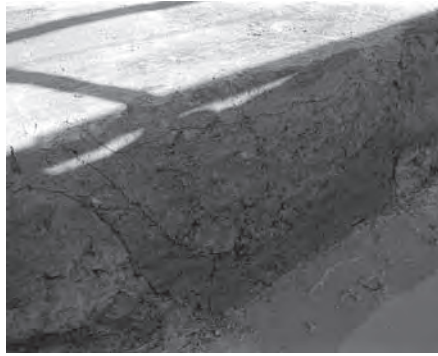
⑭ 2 b区8号土坑 (北から)



⑮ 2 b区12号土坑 (北から)



① 1号井戸 (南西から)



② 2号井戸断面 (南西から)



③ 2号井戸 (北から)



④ 3号井戸断面 (北から)



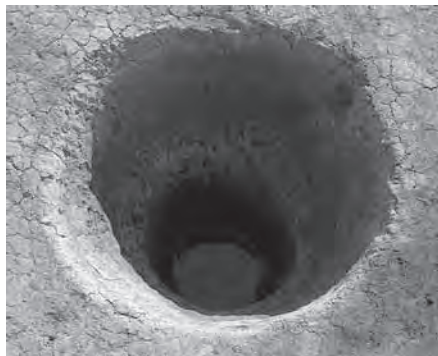
⑤ 4号井戸 (北から)



⑥ 5号井戸 (北から)



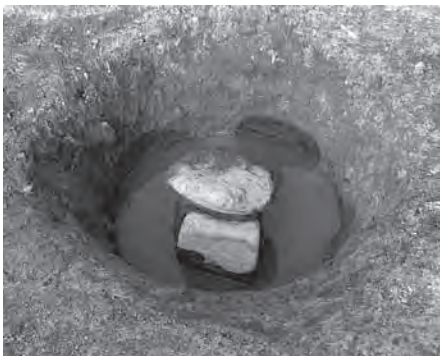
⑦ 6号井戸出土礫 (西から)



⑧ 6号井戸 (北から)



⑨ 7号井戸出土礫 (南から)



⑩ 8号井戸出土礫 (南から)



⑪ 9号井戸 (東から)



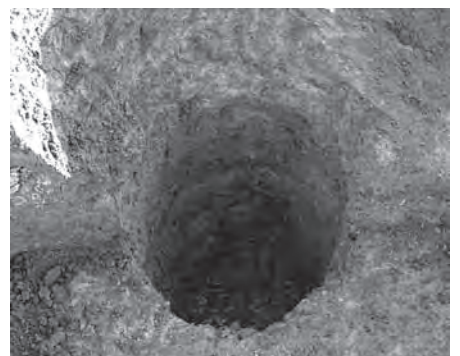
⑫ 10号井戸 (北から)



⑬ 11号井戸 (東から)



⑭ 12号井戸 (北から)



⑮ 13号井戸 (南から)



① 14号井戸石組（北から）



② 15号井戸上面（南から）



③ 16号井戸出土礫（東から）



④ 14号井戸掘り方（北から）



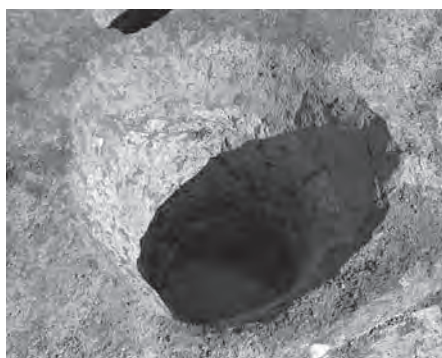
⑤ 15号井戸（東から）



⑥ 16号井戸（北から）



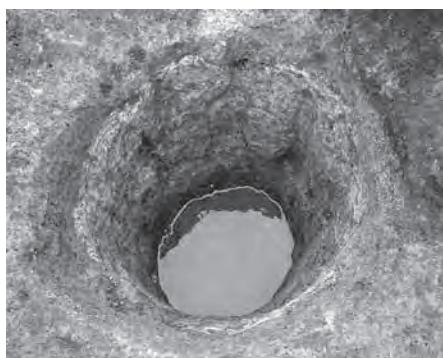
⑦ 2 a区37号井戸断面（南から）



⑧ 2 a区84号井戸（南から）



⑨ 2 a区86号井戸（南西から）



⑩ 2 a区37号井戸（西から）



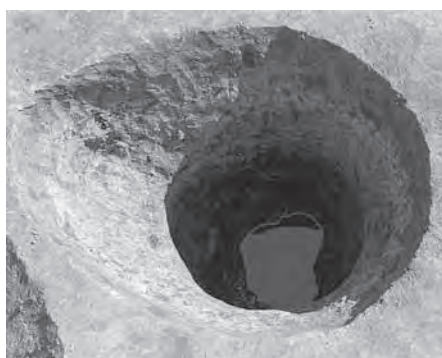
⑪ 2 b区2号井戸断面（南から）



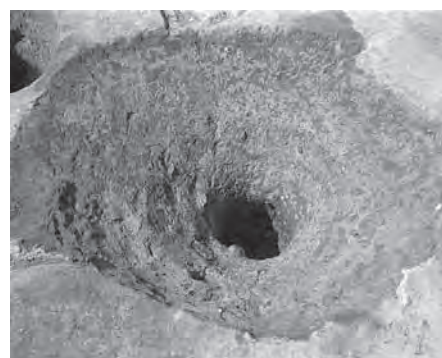
⑫ 2 b区3号井戸出土礫（東から）



⑬ 2 b区1号井戸（北から）



⑭ 2 b区2号井戸（南西から）



⑮ 2 b区3号井戸（東から）



① 1号(左)・2号(右) 竪穴状遺構 (東から)



② 1号・2号 竪穴状遺構断面 (南西から)



③ 3号 竪穴状遺構 (北から)



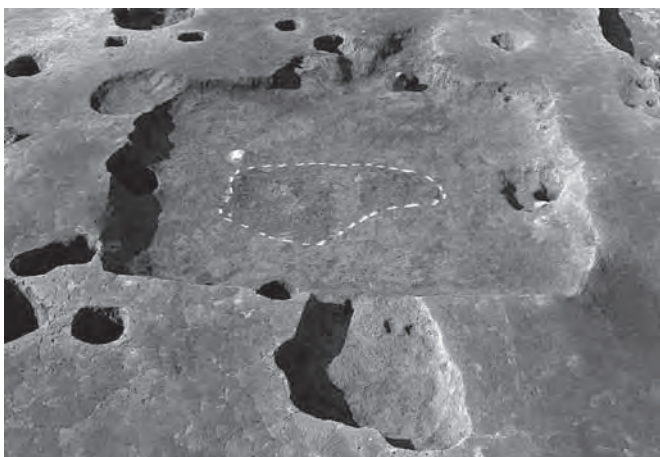
④ 4号 竪穴状遺構断面 (西から)



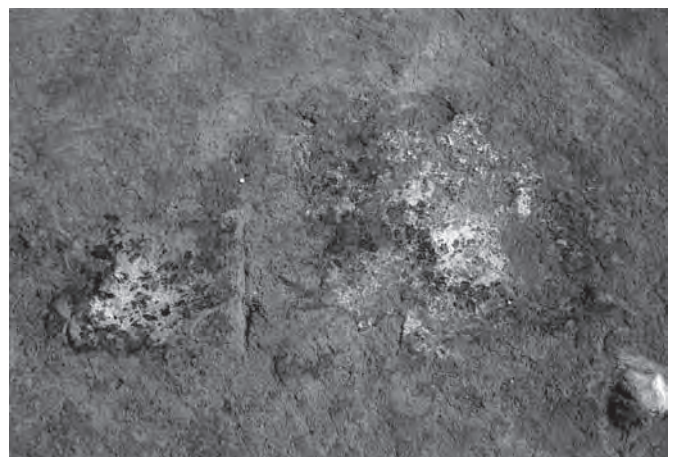
⑤ 5号 竪穴状遺構 (東から)



⑥ 6号 竪穴状遺構 (東から)



⑦ 7号 竪穴状遺構 (東から)



⑧ 7号 竪穴状遺構焼土 (西から)



① 1区6面水田全景（西から）



② 1区6面水田全景（東から）



③ 1区6面水田北側（南東から）



④ 1区6面水田南側（東から）



⑤ 1区6面水田f畦（北から）



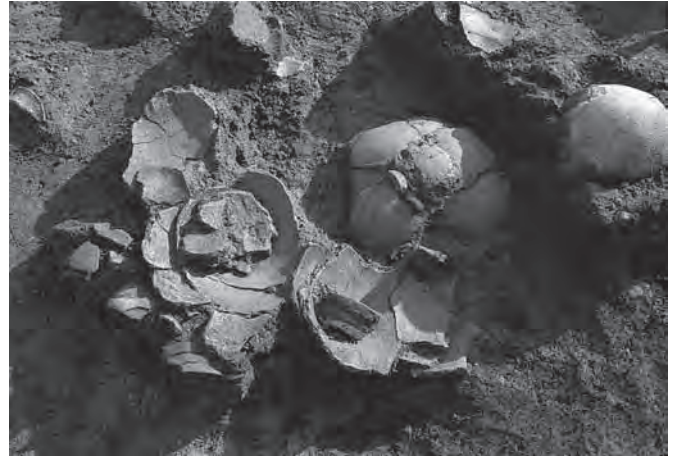
⑥ 2b区6面水田（北から）



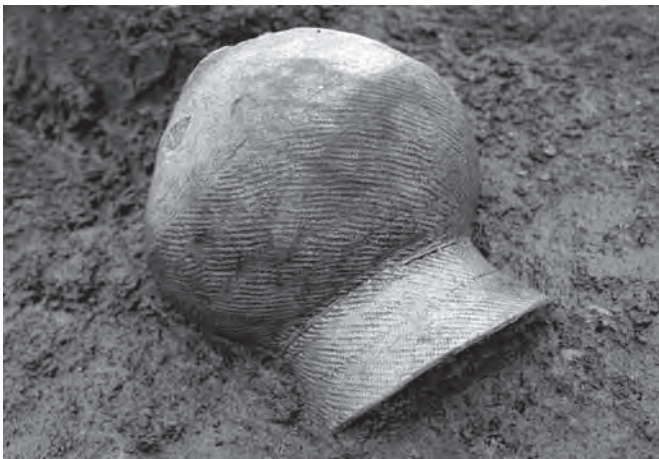
⑦ 2b区6面水田全景（西から）



① 1号住居(西から)



② 1号住居東側遺物出土状態(南西から)



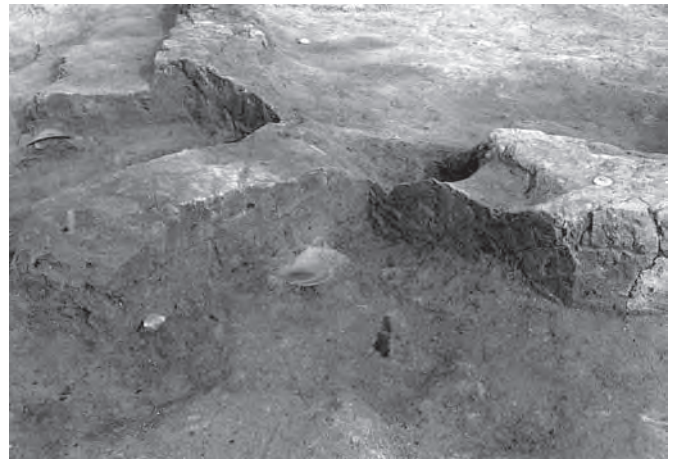
③ 1号住居No.10出土状態(北から)



④ 2号住居(西から)



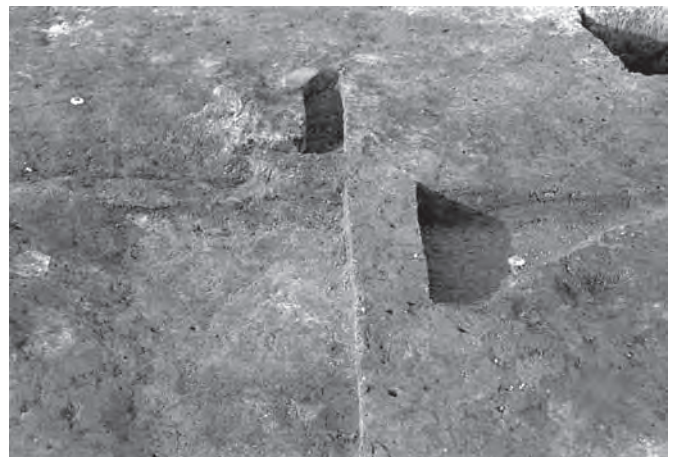
⑤ 2号住居遺物出土状態(北から)



⑥ 2号住居竈断面(南西から)



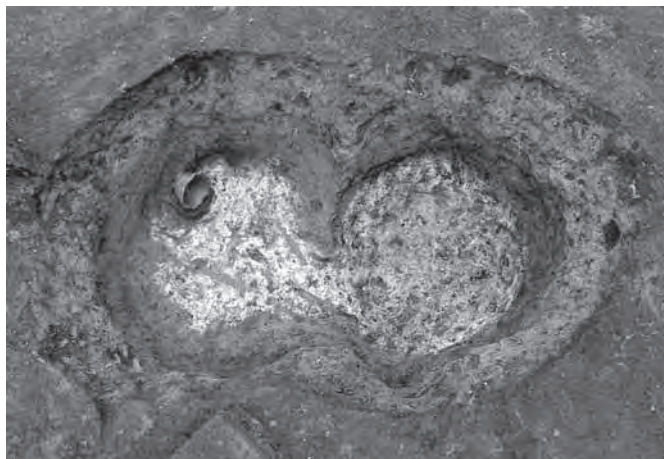
⑦ 3号住居(北から)



⑧ 3号住居竈断面(南から)



① 1 a区44号土坑 (南から)



② 1 a区1号住居P1・P1' (45号土坑) (南から)



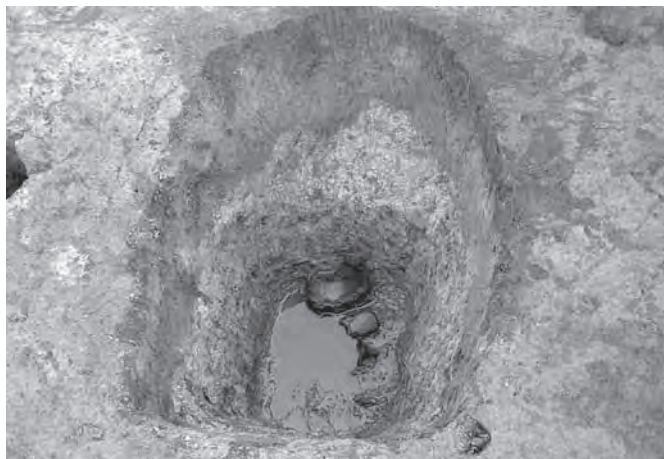
③ 2 b区11号土坑 (南から)



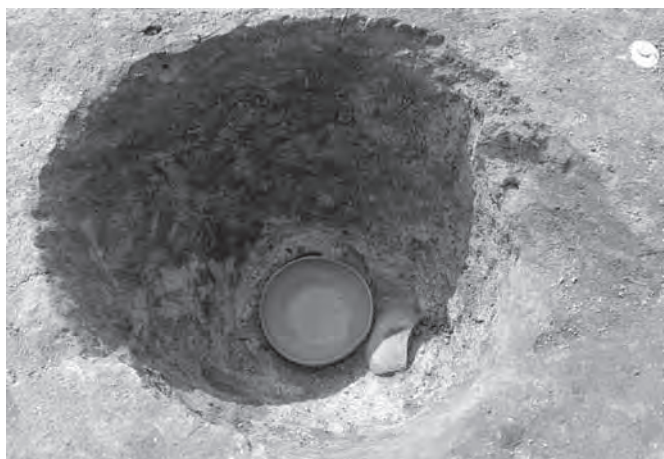
④ 2 b区11号土坑断面 (南から)



⑤ 2 a区166号井戸 (東から)



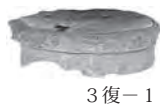
⑥ 2 a区169号井戸 (北から)



⑦ 2 b区13号ピット (北から)



⑧ 2 b区18号ピット (東から)



3復-1



3復-2



5畠-1



6畠-1



6畠-2



5畠-3



水田-1



大溝-1



大溝-2



大溝-3



大溝-4



大溝-5



大溝-6



大溝-8



大溝-7



大溝-9



大溝-10



1区1溝-1



1区1溝-2



1区1溝-3



1区1溝-4



1区1溝-5



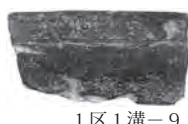
1区1溝-6



1区1溝-7



1区1溝-8



1区1溝-9



1区1溝-10



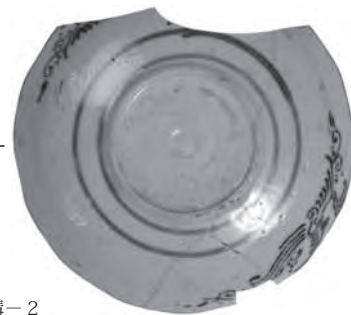
1区1溝-11



2区1溝-1

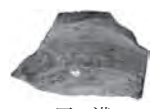


2区1溝-2



2区1溝-3

2区1溝-5



2区1溝-6



2区1溝-7



2区1溝-4



2区1溝-8



2区1溝-9



2区1溝-10



2区1溝-11



2区15溝-1



2区15溝-2



2区15溝-3



2区15溝-4



2区15溝-5



2区18溝-1



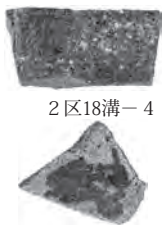
2区15溝-6



2区18溝-2



2区18溝-3



2区18溝-4

2区18溝-5



集石-2



集石-3



集石-4



集石-5



集石-7



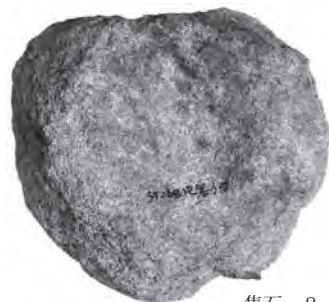
集石-6



集石-9



集石-10



集石-8



2区30溝-1



2区35溝-2



2区35溝-1



2区35溝-5



2区36溝-2



2b区13溝-1



2墓-1



2 b区13溝-3



2区35溝-4



2b区13溝-2



3墓-1



3墓-2



3墓-3



3墓-4



3墓-5



3墓-6



4墓-1



4墓-2



4墓-3



4墓-4



4墓-5



4墓-6



5墓-1



5墓-2



5墓-3



5墓-4



5墓-5



5墓-6



5墓-7



5墓-8



5墓-9



5墓-10



5墓-11



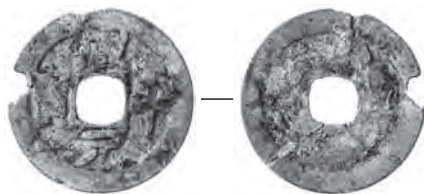
5墓-12



6墓-1



6墓-2



6墓-3



7墓-1



7墓-2



7墓-3



7墓-4



7墓-5



7墓-6



9墓-1



9墓-2



9墓-3



9墓-4



9墓-5



9墓-6



12墓-1



12墓-2



12墓-3



13墓-1



13墓-2



13墓-3



杭-1



杭-2



杭-3



杭-4



杭-5



杭-6



杭-7

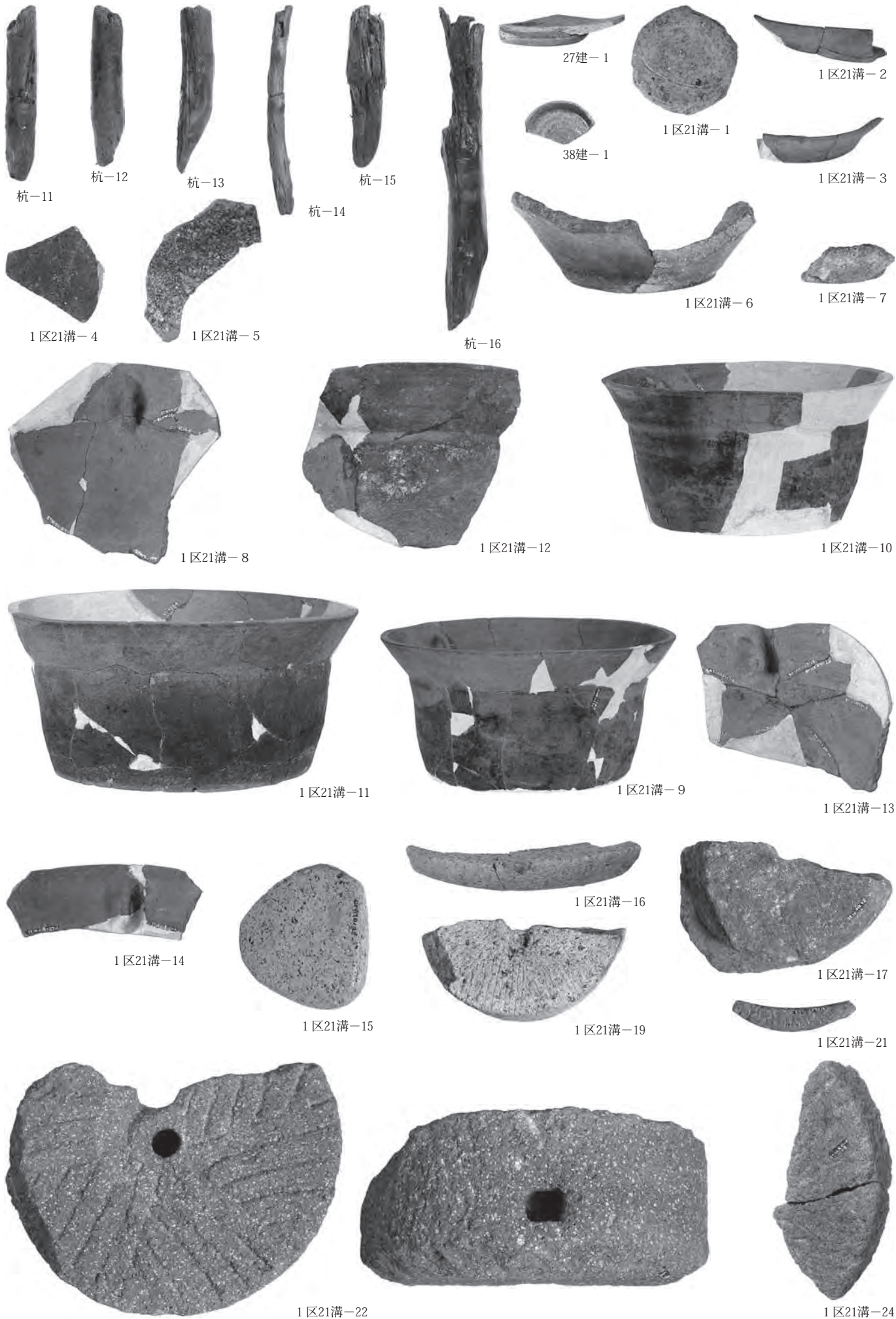


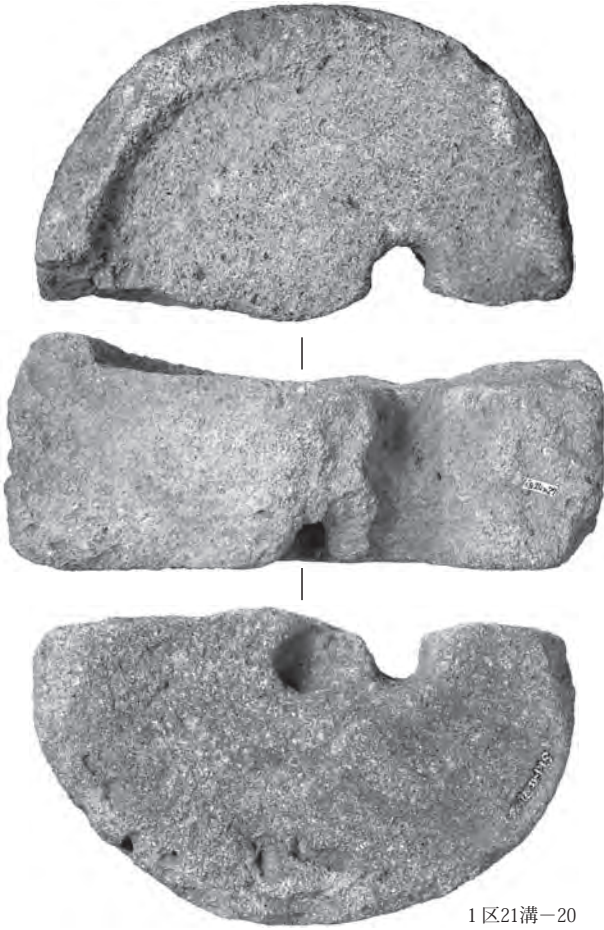
杭-8



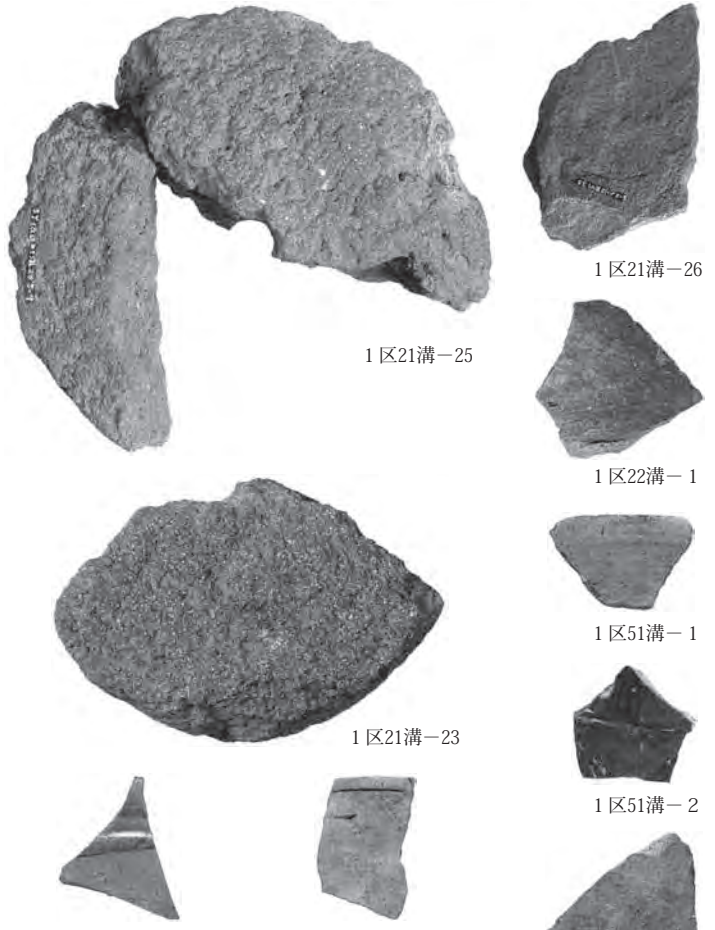
杭-9

PL.36





1区21溝-20



1区21溝-26

1区21溝-25

1区22溝-1

1区51溝-1

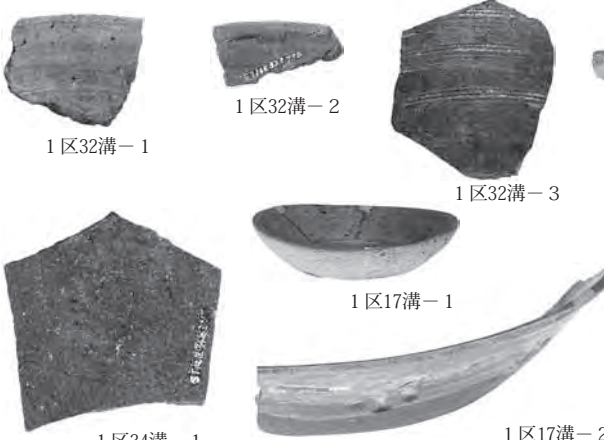
1区21溝-23

1区51溝-2

1区37溝-1

1区37溝-2

1区51溝-3



1区32溝-1

1区32溝-2

1区32溝-3

1区42溝-1

1区33溝-1

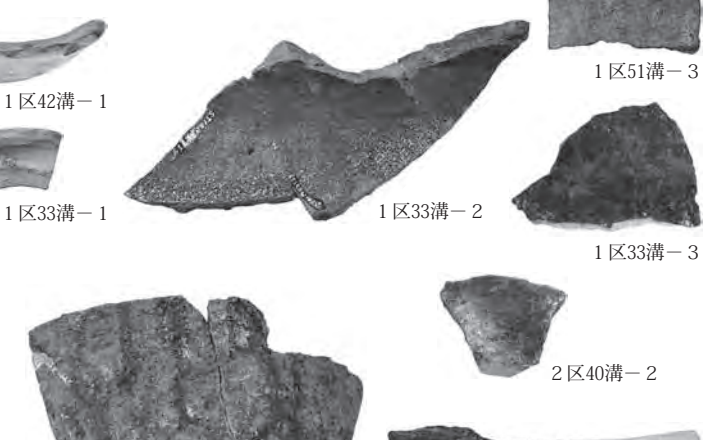
1区33溝-2

1区33溝-3

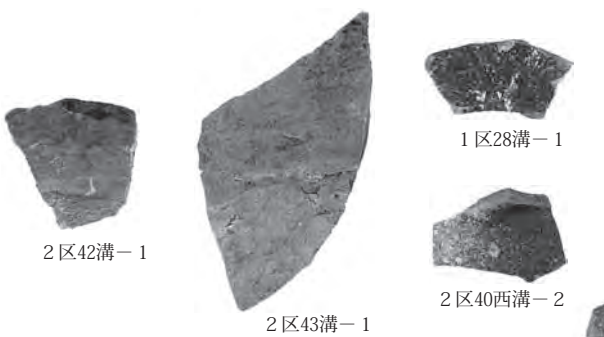
1区17溝-1

1区17溝-2

1区34溝-1



2区40溝-2



2区42溝-1

1区28溝-1

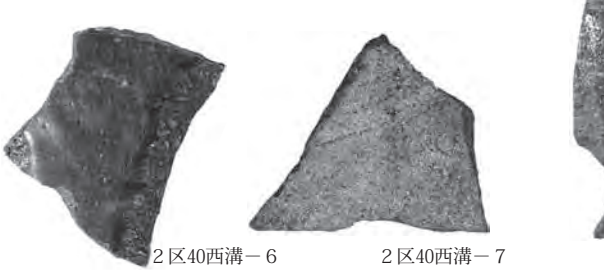
2区43溝-1

2区40西溝-2



2区40溝-1

2区40溝-3

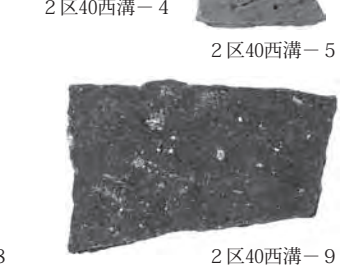


2区40西溝-6

2区40西溝-7

2区40西溝-3

2区40西溝-8



2区40西溝-4

2区40西溝-5

2区40西溝-9

PL.38





1区16井-3



1区16井-4



1区16井-5



1区16井-6



1住-1



1住-2



1住-3



1住-4



1住-5



1住-6



1住-7



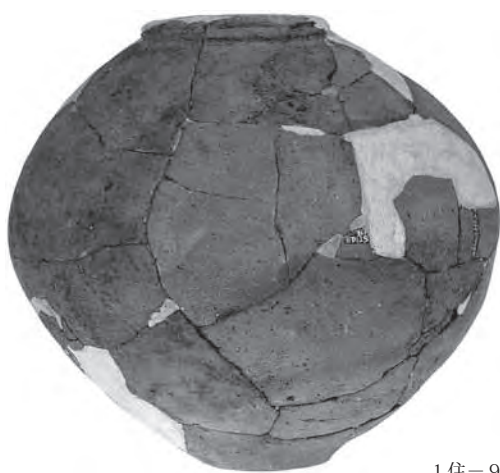
1住-8



1住-11



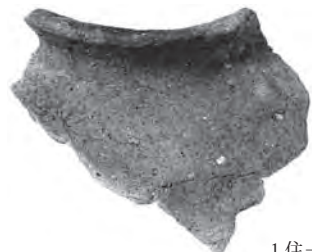
1住-10



1住-9



1住-13



1住-12



1住-14



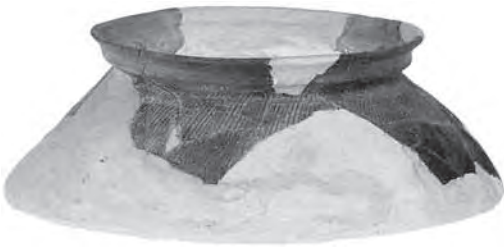
1住-15



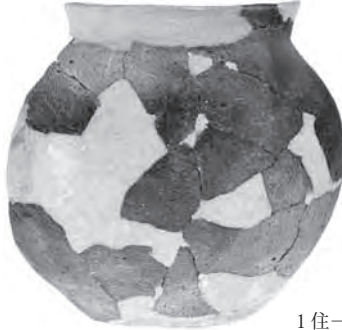
1住-16



1住-17



1住-19



1住-20



1住-18



1住-21



1住-23



1住-24



1住-22



2住-2



2住-3



2住-1



2住-4



2住-5



2住-6



2住-7



2住-9



2住-10



2住-11



2住-8



3住-1



3住-2



3住-4



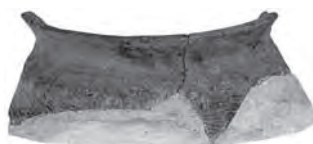
2区166井-1



2区166井-2



2区169井-3



2区171井-4



2区171井-5



2区171井-6



1区44坑-1



1区44坑-2



1区44坑-3



1区44坑-4



2 a区47坑-1



2 a区47坑-2



2 a区47坑-3



2 b区1坑-1



2 b区1坑-2



2 b区1坑-5



2 b区11坑-1



2 b区11坑-2



2 b区1坑-3



2 b区1坑-4



2 b区11坑-3



2 b区P 1-1



2 b区P18-1



2 b区P13-1



2 b区P13-2



縄文-1

縄文-2

縄文-3

縄文-4

縄文-5

縄文-6

縄文-7



縄文-9

縄文-10



弥生-1



弥生-3



弥生-4



弥生-5



弥生-6



弥生-9



弥生-11



1区外-1



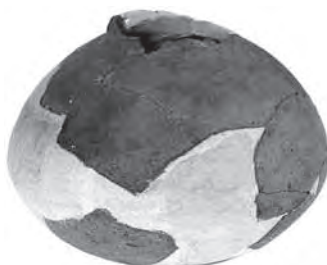
1区外-3



1区外-4



1区外-5



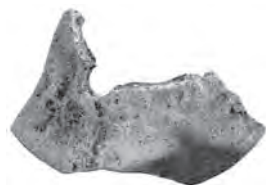
1区外-6



1区外-7



1区外-8



1区外-9



1区外-11



1区外-15



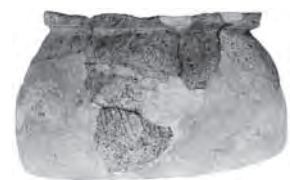
1区外-12



1区外-13



1区外-14



1区外-18



1区外-19



1区外-17



1区外-16



2区外-1



2区外-2



2区外-4



2区外-3



2区外-6



2区外-7



2区外-8



2区外-9



2区外-10



2区外-11



2区外-14



2区外-12



2区外-13



2区外-15



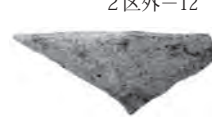
2区外-16



2区外-17



2区外-21



2区外-18



2区外-24



2区外-19



2区外-20



2区外-22



2区外-25



2区外-23



2区外-30



2区外-31



2区外-32



2区外-29



2区外-28



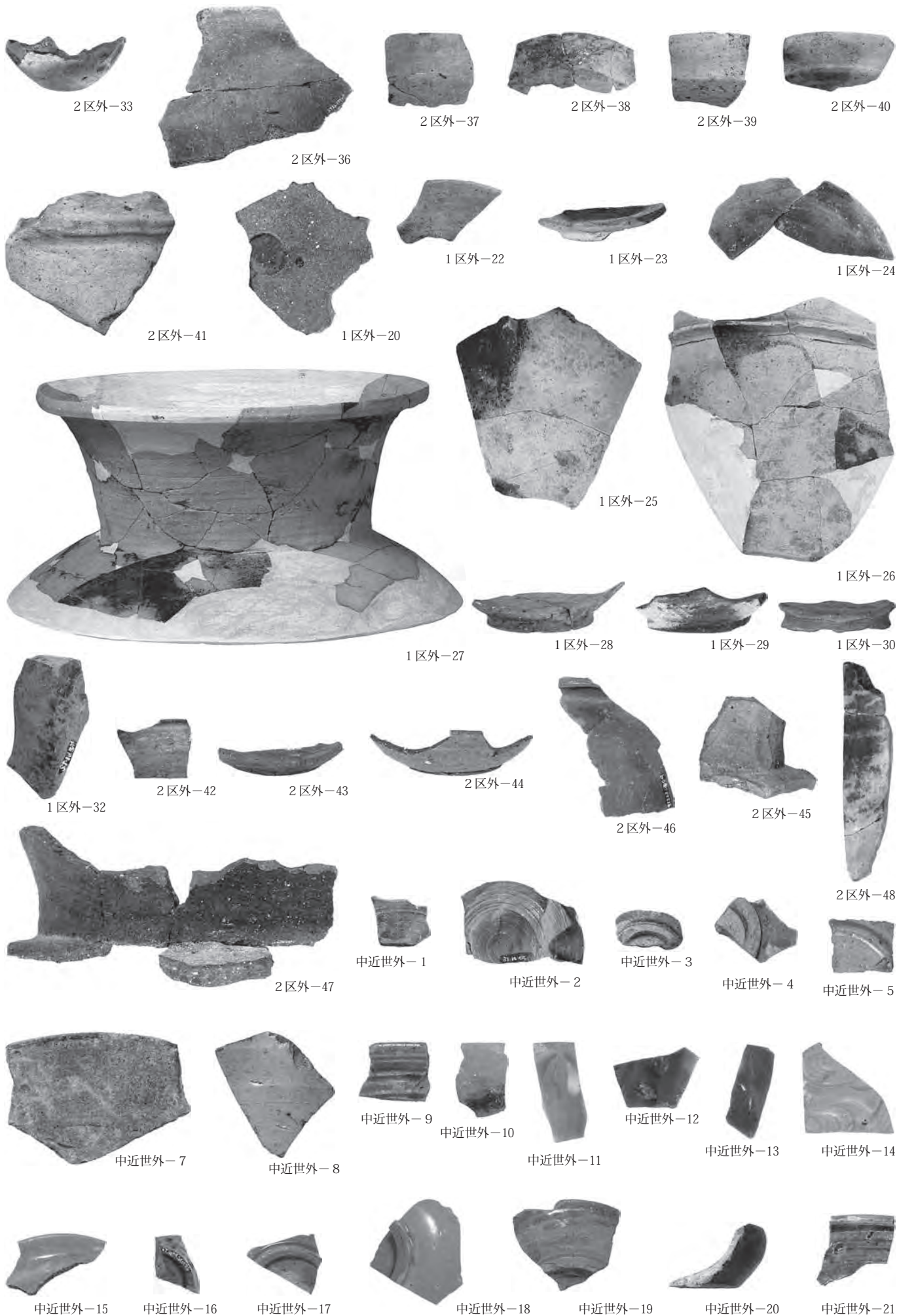
2区外-35



2区外-34



2区外-27





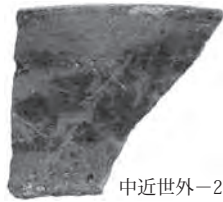
中近世外-22



中近世外-23



中近世外-24



中近世外-25



中近世外-26



中近世外-27



中近世外-28



中近世外-29



中近世外-30



中近世外-31



中近世外-32



中近世外-33



中近世外-34



中近世外-35



中近世外-36



中近世外-37



中近世外-38



中近世外-39



中近世外-40



中近世外-41



中近世外-42



錢貨-1



錢貨-2



錢貨-3



錢貨-4



錢貨-5



錢貨-6



錢貨-7



錢貨-8



錢貨-9



錢貨-10



錢貨-11



錢貨-12



錢貨-13



錢貨-14



錢貨-15



錢貨-16

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第516集

斉田竹之内遺跡

国道354号道路改築工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集

2011年（平成23年）3月11日印刷

2011年（平成23年）3月18日発行

編集・発行／財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 群馬県渋川市北橋町下箱田784-2

電話 0279-52-2511（代表）

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上毎印刷工業株式会社

付図2 2区館(西館)内遺構配置図

